岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 158

上 東 遺 跡

主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査 3

2 0 0 1

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 158

上　東　遺　跡

主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査 3

2001

岡 山 県 教 育 委 員 会

1　東鬼川市Ⅱ調査区全景（東から）

2　分銅形土製品

3　鹿骨製の管玉

4　2種類の胎土を使った高杯

5　漆の入った土器

巻頭図版 2

上219・下220

上211・下212

上234・下235

上221・下222

序

倉敷市域の東端部に位置する上東地区は、昭和20年代の田畑の地下げ等に伴って、出土する多量の土器から、遺跡の存在が周知されるようになりました。出土土器は、長頸壺や器台などの特徴的な形態を基に、研究者によって「上東式土器」と命名され、遺跡は中部瀬戸内地域の弥生時代後期の標識遺跡として学史に刻まれています。上東遺跡は、足守川の下流域に形成された自然堤防上に営まれた弥生時代後期を中心とする母村的な集落遺跡の一つであることが、昭和40年代後半から50年代初めの、山陽新幹線やその北側に隣接する都市計画道路の建設に伴う発掘調査で、より具体的に明らかになっています。

このたび、山陽新幹線の南側に隣接する部分に主要地方道（箕島高松線）の建設が策定され、岡山県教育委員会は、過去の調査成果から、当然密度の高い遺構・遺物の存在が予想されるとし、工事主体の倉敷地方振興局と保存協議を重ね、道路建設により遺跡が破壊される部分について、やむなく記録保存の処置をとることになりました。

発掘調査の結果、予想通りの密度で弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が見つかっています。なかでも、上東遺跡では、新発見の弥生時代の土器棺墓群や古墳時代水田などの遺構、弥生時代の顔が表現された分銅形土製品や鹿角製の管玉、さらに漆入りの土器などの遺物が特筆されます。また、土器棺の中からの歯の検出は希有であり、分析結果とともに注目されます。

本報告書が、吉備地方の歴史研究の一助となり、また、埋蔵文化財の保護・保存のため有効に活用されるよう願ってやみません。最後になりましたが、発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたりまして、岡山県文化財保護審議会委員の先生方には数々の御教授と御指導を賜りました。また、倉敷地方振興局をはじめ関係各位から多大な御理解と御協力をいただきました。衷心より厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　正　岡　睦　夫

例　　言

1　本書は、主要地方道箕島高松線（旧一般県道大内田高松線）改築工事に伴い、岡山県教育委員会が岡山県土木部道路建設課改良係・倉敷地方振興局建設部から依頼を受けて、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、上東遺跡（倉敷市上東）の報告書である。

2　調査期間は第一次調査が平成８年12月、第二次調査が平成10年４月～平成11年２月である。

3　発掘調査は、第一次調査を江見正己、第二次調査を伊藤晃・山磨康平・光永真一・田井荘之助・土師忠満・金田善敬・蛯原啓介・小林利晴・米田克彦が担当した。

4　発掘調査および、報告書作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎・水内昌康両先生から現地指導および御助言を賜った。記して深謝の意を表す次第である。さらに、多数の県内外の研究者の方々から、様々な御助言、御教授を得た。記して感謝の意を表す次第である。

5　特殊な遺物および自然科学分野における鑑定、同定等については、下記の諸氏に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については、報告文をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

・歯牙鑑定	小田嶋梧郎（岡山大学医学部名誉教授）
・漆鑑定	四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）
・プラント・オパール分析	株式会社　古環境研究所
・木材の樹種同定	株式会社　吉田生物研究所
・貝殻分析	小林園子（国立歴史民俗博物館）

6　報告書の作成は、平成11年度に小林が担当し、岡山県古代吉備文化財センターにて行った。

7　本書の執筆は、伊藤・江見・光永・金田・小林・米田が行い、文末に文責を記した。全体編集は小林が行った。なお一部の図面については、同センター職員岡田博の助力を得た。

8　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。

9　本報告書に関する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管してある。

凡　　例

1　本報告書で記載された高度値は海抜高であり、方位は国土座標系の座標北を示す。遺跡付近の磁北線偏差は西編133°49′を測る。

2　本報告書掲載の各遺構・遺物実測図の縮尺は、可能な限り下記の通りに統一し、例外については、縮尺率を明記した。

遺構　竪穴住居・建物・柵列：1／80　　井戸・土壙・袋状土壙・溝：1／30

土器棺墓：1／20　　水田：1／100

遺物　土器：1／4　　土製品・石器・石製品・玉類：1／2

3　遺構番号・遺物番号は、連番である。

4　遺物番号は、材質を示すため、土器以外のものについては下記の省略を番号の前に付した。

土製品：C　　石器・石製品：S　　木器・木製品：W　　玉類：B

5　土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性があるものをしめす。

6　本報告書における土層名称については、基本的に各発掘調査の担当者の表記方法に従っている。

7　本報告書にもちいた遺構・遺物の時期については、弥生時代から古墳時代前期までは、山陽自動車道建設に伴う発掘調査を実施した津寺遺跡の発掘調査報告書に準拠した。詳しくは報告書を参照されたい。

「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会　1995年

なお、古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃までとおおまかに促えている。

8　第2図は、建設省国土地理院発行の1／25,000の地形図の倉敷を加筆したものである。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　発掘調査および報告書作成の経緯 …… 4
　第１節　発掘調査にいたる経緯 …… 4
　第２節　発掘調査の経過 …… 4
　第３節　発掘調査の体制 …… 6
　第４節　発掘調査の概要と報告書作成 …… 7
第３章　亀川・東鬼川市・西鬼川市微高地の調査 …… 11
　第１節　亀川調査区の概要 …… 11
　第２節　東鬼川市Ⅰ調査区　調査の概要 …… 15
　第３節　東鬼川市Ⅰ調査区 弥生・古墳時代の遺構・遺物 …… 16
　　土壙 …… 16
　　溝 …… 20
　第４節　東鬼川市Ⅰ調査区　中・近世の遺構・遺物 …… 24
　　溝 …… 24
　　遺構に伴わない遺物 …… 24
　第５節　東鬼川市Ⅱ調査区 調査の概要 …… 25
　第６節　東鬼川市Ⅱ調査区 弥生・古墳時代の遺構・遺物 …… 26
　　弥生前期包含層 …… 26
　　弥生中・後期、古墳時代 …… 30
　　竪穴住居 …… 30
　　建物 …… 39
　　土器棺墓 …… 40
　　井戸 …… 51
　　袋状土壙 …… 53
　　土壙 …… 55
　　溝 …… 105
　第７節　西鬼川市調査区　調査の概要 …… 146
　第８節　西鬼川市調査区　弥生・古墳時代の遺構・遺物 …… 148
　　土器棺墓 …… 148
　　土壙 …… 148

溝 …… 150
遺構に伴わない遺物 …… 157
第4章　田所・下田所微高地の調査 …… 158
第1節　田所調査区　調査の概要 …… 158
第2節　田所調査区　弥生・古墳時代の遺構・遺物 …… 158
水田 …… 158
溝 …… 162
微高地の落ち込み部 …… 162
第3節　下田所調査区　調査の概要 …… 163
第4節　下田所調査区　弥生・古墳時代の遺構・遺物 …… 166
土壙 …… 166
溝 …… 168
たまり …… 169
河道 …… 170
第5節　下田所調査区　中・近世の遺構・遺物 …… 172
柵列 …… 172
土壙 …… 172
溝 …… 173
遺構に伴わない遺物 …… 174
第5章　才の元微高地の調査 …… 175
第1節　調査の概要 …… 175
第2節　弥生・古墳時代の遺構・遺物 …… 180
土壙 …… 180
井戸 …… 180
溝 …… 188
河道 …… 193
第3節　中・近世の遺構・遺物 …… 195
土壙 …… 195
溝 …… 196
遺構に伴わない遺物 …… 199
第6章 五反田・九つ田調査区の調査 …… 200
第1節　五反田調査区　調査の概要 …… 200
第2節　五反田調査区の遺構・遺物 …… 203
土壙 …… 203
溝 …… 203
遺構に伴わない遺物 …… 205
第3節　九つ田調査区　調査の概要 …… 206
第4節　九つ田調査区の遺構 …… 206
土壙 …… 206
溝 …… 206

第７章　まとめ ……208
第１節　弥生時代の遺構　小林利晴 ……208
第２節　古墳時代のまとめ　米田克彦 ……212
第３節　上東遺跡における井戸の様相　米田克彦 ……214
付載　自然科学分野における分析・鑑定 ……218
付載１　岡山県、上東遺跡のプラント・オパール分析　株式会社　古環境研究所 ……218
付載２　上東遺跡から出土した歯牙の鑑別報告　小田嶋梧郎 ……222
付載３　上東遺跡土壙81出土の貝類について　小林園子 ……233

図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡分布図（1/25,000）
第３図　調査区位置図（1/3,000）
第４図　調査区全体図（1/600）
第５図　亀川調査区遺構配置（1/200）
第６図　亀川調査区土層断面　北壁（上）・中央（下）（1/100）
第７図　亀川調査区上層出土遺物①（1/4）
第８図　亀川調査区上層出土遺物②（1/4）
第９図　亀川調査区上層出土遺物③（1/4）
第10図　東鬼川市Ⅰ調査区遺構配置（1/200）
第11図　溝２・６～８断面（1/30）
第12図　東亀川市Ⅰ調査区北壁土層断面（1/100）
第13図　土壙１～24　（1/30）
第14図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）
第15図　溝３出土遺物（1/4・1/2）
第16図　溝４出土遺物（1/4）
第17図　溝５土層断面（1/60）
第18図　溝５出土遺物①（1/4）
第19図　溝５出土遺物②（1/4）
第20図　溝５出土遺物③（1/4）
第21図　溝６出土遺物（1/4）
第22図　東鬼川市Ⅰ調査区　遺構に伴わない遺物（1/2）
第23図　東鬼川市Ⅱ前期包含層（1/4）
第24図　東鬼川市Ⅱ調査区遺構配置（1/200）
第25図　東鬼川市Ⅱ北壁断面（1/100）
第26図　東鬼川市Ⅱ中央断面（1/100）
第27図　東鬼川市Ⅱ南壁断面（1/100）
第28図　東鬼川市Ⅱ遺構番号
第29図　竪穴住居１（1/80）・出土遺物（1/4）
第30図　竪穴住居２（1/80）・出土遺物（1/4）
第31図　竪穴住居３（1/80）・出土遺物（1/4）
第32図　竪穴住居４（1/80）
第33図　竪穴住居５（1/80）・出土遺物（1/2）
第34図　竪穴住居５出土遺物（1/4）
第35図　竪穴住居６（1/80）・出土遺物（1/2）
第36図　竪穴住居６出土遺物（1/4）
第37図　竪穴住居７（1/80）
第38図　竪穴住居７出土遺物（1/4・1/2）
第39図　竪穴住居８・９（1/80）
第40図　竪穴住居８・９出土遺物（1/4・1/2）
第41図　竪穴住居10（1/80）・出土遺物（1/4）
第42図　竪穴住居10出土遺物（1/4）
第43図　竪穴住居11（1/80）
第44図　竪穴住居11出土遺物（1/4）
第45図　建物１（1/80）
第46図　建物２（1/80）
第47図　土器棺墓１（1/20）・出土遺物（1/4）
第48図　土器棺墓１出土遺物（1/4）
第49図　土器棺墓２（1/20）・出土遺物（1/4）
第50図　土器棺墓２出土遺物（1/4）
第51図　土器棺墓３（1/20）・出土遺物（1/4）
第52図　土器棺墓４（1/20）・出土遺物（1/4）
第53図　土器棺墓５（1/20）・出土遺物（1/4）

第54図　土器棺墓６（1/20）・出土遺物（1/4）
第55図　土器棺墓７（1/20）・出土遺物（1/4）
第56図　土器棺墓８（1/20）・出土遺物（1/4）
第57図　土器棺墓９（1/20）・出土遺物（1/4）
第58図　土器棺墓10（1/20）・出土遺物（1/4）
第59図　土壙26（1/20）・出土遺物（1/4）
第60図　井戸１（1/30）・出土遺物（1/4）
第61図　井戸２（1/30）・出土遺物（1/4）
第62図　井戸３（1/30）・出土遺物（1/4）
第63図　井戸４（1/30）・出土遺物（1/4）
第64図　袋状土壙１（1/30）・出土遺物（1/2）
第65図　袋状土壙１出土遺物（1/4・1/2）
第66図　土壙27（1/30）・出土遺物（1/4）
第67図　土壙28（1/40）
第68図　土壙28出土遺物（1/4）
第69図　土壙29～46（1/30）
第70図　土壙37出土遺物（1/4）
第71図　土壙40出土遺物（1/4）
第72図　土壙47～49（1/30）
第73図　土壙48出土遺物（1/4）
第74図　土壙49出土遺物（1/4）
第75図　土壙50出土遺物（1/4）
第76図　土壙50～59（1/30）
第77図　土壙51出土遺物（1/4）
第78図　土壙52出土遺物（1/4）
第79図　土壙54・55出土遺物（1/4・1/2）
第80図　土壙60出土遺物（1/4・1/2）
第81図　土壙60～70（1/30）
第82図　土壙61出土遺物（1/4）
第83図　土壙70出土遺物（1/4）
第84図　土壙75出土遺物（1/4）
第85図　土壙71～87（1/30）
第86図　土壙76・77出土遺物（1/4）
第87図　土壙78出土遺物（1/4）
第88図　土壙79出土遺物（1/4）
第89図　土壙82出土遺物（1/4）
第90図　土壙90出土遺物（1/4）
第91図　土壙88～100（1/30）
第92図　土壙96・97出土遺物（1/4）
第93図　土壙103出土遺物（1/4）
第94図　土壙101～112（1/30）
第95図　土壙105出土遺物（1/4）
第96図　土壙106・107・108・109出土遺物（1/4）
第97図　土壙115出土遺物（1/4）
第98図　土壙117出土遺物（1/4）
第99図　土壙113～122（1/30）
第100図　土壙118出土遺物（1/4）
第101図　土壙122出土遺物（1/4）
第102図　土壙123出土遺物（1/4）
第103図　土壙125・126・128出土遺物（1/4）
第104図　土壙123～132（1/30）
第105図　土壙129出土遺物（1/4）
第106図　土壙137出土遺物（1/4）
第107図　土壙138出土遺物（1/4）
第108図　土壙133～150（1/30）
第109図　土壙144出土遺物（1/4）
第110図　土壙146出土遺物（1/4）
第111図　土壙149出土遺物（1/4）
第112図　土壙153出土遺物（1/4）
第113図　土壙155出土遺物（1/4）
第114図　土壙156出土遺物（1/4）
第115図　土壙151～161（1/30）
第116図　土壙159（上）・160（下）出土遺物（1/4）
第117図　土壙161出土遺物（1/4）
第118図　土壙162～179（1/30）
第119図　土壙165出土遺物（1/4）
第120図　土壙166出土遺物（1/4）
第121図　土壙168・169出土遺物（1/4）
第122図　土壙170・171出土遺物（1/4・1/2）
第123図　土壙180～192（1/30）
第124図　土壙183出土遺物（1/4・1/2）
第125図　土壙187出土遺物（1/4）
第126図　土壙188出土遺物（1/4）
第127図　土壙193出土遺物（1/4）
第128図　土壙193～207（1/30）
第129図　土壙196・197・198出土遺物（1/4）
第130図　土壙200出土遺物（1/4）
第131図　土壙201出土遺物（1/4）
第132図　土壙205出土遺物（1/4）
第133図　土壙206出土遺物（1/4）
第134図　土壙208出土遺物（1/4）
第135図　土壙211出土遺物（1/4）
第136図　土壙208～221（1/30）
第137図　土壙221出土遺物（1/4）

第138図　土壙222～234（1/30）
第139図　土壙226・227出土遺物（1/4）
第140図　土壙229出土遺物（1/4）
第141図　土壙234出土遺物（1/4）
第142図　溝９断面（1/30）
第143図　溝10断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第144図　溝11断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第145図　溝12断面（1/30）
第146図　溝12土器出土状態（1/40）
第147図　溝12西側出土遺物①（1/4）
第148図　溝12西側出土遺物②（1/4）
第149図　溝12西側出土遺物③（1/4）
第150図　溝12西側出土遺物④（1/4）
第151図　溝12西側出土遺物⑤（1/4）
第152図　溝12西側出土遺物⑥（1/4）
第153図　溝12西側出土遺物⑦（1/4）
第154図　溝12中央出土遺物①（1/4）
第155図　溝12中央出土遺物②（1/4）
第156図　溝12中央出土遺物③（1/4）
第157図　溝12中央出土遺物④（1/4）
第158図　溝12中央出土遺物⑤（1/4）
第159図　溝12中央出土遺物⑥（1/4）
第160図　溝12中央出土遺物⑦（1/4）
第161図　溝12中央出土遺物⑧（1/4）
第162図　溝12中央出土遺物⑨（1/4）
第163図　溝12中央出土遺物⑩（1/4）
第164図　溝12東側出土遺物①（1/4）
第165図　溝12東側出土遺物②（1/4・1/2）
第166図　溝12東側出土遺物③（1/4）
第167図　溝12東側出土遺物④（1/4）
第168図　溝12東側出土遺物⑤（1/4）
第169図　溝12東側出土遺物⑥（1/4）
第170図　溝12北側出土遺物①（1/4）
第171図　溝12北側出土遺物②（1/4）
第172図　溝12北側出土遺物③（1/4）
第173図　溝12南側出土遺物①（1/4）
第174図　溝12南側出土遺物②（1/4）
第175図　溝12出土遺物（1/6）
第176図　溝12下層出土遺物①（1/4）
第177図　溝12下層出土遺物②（1/4）
第178図　溝12下層出土遺物③（1/4）
第179図　溝12下層出土遺物④（1/4）
第180図　溝12出土土製品（1/2）
第181図　溝12出土石器（1/2）
第182図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）
第183図　西鬼川市調査区遺構配置（1/200）
第184図　西鬼川市Ⅰ北壁断面（1/60）
第185図　西鬼川市Ⅱ北壁断面（1/100）
第186図　西鬼川市Ⅲ北壁（上）・中央（下）断面（1/100）
第187図　土器棺墓11（1/20）・出土遺物（1/4）
第188図　土壙235～242（1/30）
第189図　溝13・21土層断面（1/30）
第190図　溝14・15土層断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第191図　溝13出土遺物①（1/4）
第192図　溝13②（上）・21（下）・出土遺物（1/2・1/4）
第193図　溝22・17土層断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第194図　溝18・19土層断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第195図　溝20土層断面（1/30）
第196図　溝23土層断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第197図　溝16（1/40）
第198図　溝16出土遺物①（1/4）
第199図　溝16出土遺物②（1/4・1/2）
第200図　西鬼川市調査区遺構に伴わない遺物（1/2・1/4）
第201図　田所調査区遺構配置（1/200）
第202図　田所調査区下層遺構配置（1/200）
第203図　溝24～26断面（1/30）
第204図　田所調査区北壁（上）・中央（中）・南壁（下）断面（1/100）
第205図　水田（1/100）・出土遺物（1/4）
第206図　下層水田出土遺物（1/4）
第207図　微高地落ち込み部出土遺物（1/4・1/2）
第208図　下田所調査区遺構配置（1/200）
第209図　下田所Ⅰ北壁断面（1/100）
第210図　下田所Ⅱ北壁断面（1/100）
第211図　土壙243（1/30）
第212図　土壙243出土遺物（1/4）
第213図　土壙244（1/30）
第214図　溝27土層断面（1/30）
第215図　溝28土層断面（1/30）
第216図　溝29土層断面（1/30）
第217図　溝30土層断面（1/30）
第218図　溝31土層断面（1/30）・溝30・31出土遺物（1/4）

第219図　たまり3出土遺物（1/4）
第220図　河道１出土遺物①（1/4）
第221図　河道１出土遺物②（1/2）
第222図　柵列1（1/80）
第223図　土壙245（1/60）・246・247（1/30）
第224図　土壙248～251（1/30）
第225図　溝32出土遺物（1/4・1/2）
第226図　下田所Ⅰ　遺構に伴わない遺物（1/4）
第227図　下田所Ⅱ　遺構に伴わない遺物（1/4）
第228図　才の元Ⅰ・Ⅱ調査区遺構配置（1/200）
第229図　才の元Ⅰ調査区北壁断面（1/100）
第230図　才の元Ⅱ調査区北壁断面（1/100）
第231図　才の元Ⅲ・Ⅳ調査区遺構配置（1/200）
第232図　才の元Ⅲ調査区北壁断面（1/100）
第233図　才の元Ⅳ調査区北壁断面（1/100）
第234図　土壙252（1/30）・出土遺物（1/4）
第235図　井戸5（1/30）
第236図　井戸5出土遺物（1/4）
第237図　井戸6（1/30）
第238図　井戸6出土遺物①（1/4）
第239図　井戸6出土遺物②（1/4）
第240図　井戸7（左）・井戸8（右）（1/30）
第241図　井戸7（左上）・井戸8出土遺物①（1/4）
第242図　井戸8出土遺物②（1/4）
第243図　溝33・34・35・36（1/60）
第244図　溝33土層断面（上）（1/30）・出土遺物（1/4）
第245図　溝33出土木製品①（1/4）
第246図　溝33出土木製品②（1/8）
第247図　溝35出土遺物（1/4）
第248図　溝36出土遺物（1/4）
第249図　溝37・38・39土層断面（1/30）
第250図　河道２出土遺物（1/4）
第251図　河道３土層断面（1/100）
第252図　河道３出土遺物（1/4・1/2）
第253図　土壙253（1/30）
第254図　土壙254（1/30）・出土遺物（1/4）
第255図　土壙255（1/15）
第256図　溝41土層断面（1/30）
第257図　溝41（左上1/200・左下1/20・右1/40）
第258図　溝41出土遺物（1/4）
第259図　才の元調査区　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）
第260図　五反田Ⅰ・Ⅱ調査区遺構配置（1/200）
第261図　五反田Ⅰ調査区北壁断面（1/100）
第262図　五反田Ⅱ調査区北壁断面（1/100）
第263図　五反田Ⅲ調査区遺構配置（1/200）（上）
・南壁断面（1/100）（下）
第264図　溝43土層断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第265図　溝44土層断面（1/30）
第266図　溝45・46土層断面（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）
第267図　溝47・48・49土層断面（1/30）・出土遺物（1/4）
第268図　遺構に伴わない遺物（1/4）
第269図　九つ田調査区遺構配置（1/200）
第270図　九つ田調査区（上）・北壁断面（下）
第271図　鬼川市微高地　弥生時代主要遺構変遷図（1/1,000）
第272図　鬼川市微高地　古墳時代前期主要遺構変遷図（1/1,000）
第273図　岡山県南部の集落遺跡における井戸の比率
（1/350,000）

巻頭図版目次

巻頭図版１
1　東鬼川市Ⅱ調査区全景（東から）
2　分銅形土製品
3　鹿骨製の管玉
4　２種類の胎土を使った高杯
5　漆の入った土器

巻頭図版２
土器棺墓

図版目次

図版1
1　亀川調査区　全景（南から）
2　東鬼川市Ⅰ調査区 全景（西から）
3　東鬼川市Ⅰ調査区　溝3・4・5（南から）
図版2
1　東鬼川市Ⅰ調査区　溝5遺物出土状況　(南から)
2　東鬼川市Ⅰ調査区　溝12(土器溜まり)
遺物出土状況　(南から)
3　東鬼川市（用水路内）溝12（土器溜まり）
遺物出土状況（南から）
図版3
1　東鬼川市Ⅱ調査区　溝12（土器溜まり）
遺物出土状況（北東から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　溝12（土器溜まり）
下層（南西から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　東側全景（西から）
図版4
1　東鬼川市Ⅱ調査区　全景（東から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居1（南から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居2（南から）
図版5
1　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居3（南から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居4（北から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居5（南東から）
図版6
1　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居6（北から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居7（北から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居10（南から）
図版7
1　東鬼川市Ⅱ調査区　竪穴住居11（北から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　建物1（北から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　土器棺墓1（南から）
図版8
1　東鬼川市Ⅱ調査区　土器棺墓2（東から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　土器棺墓3（南から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　土器棺墓4（南から）
図版9
1　東鬼川市Ⅱ調査区　土器棺墓5（南から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　土器棺墓6（南から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　土器棺墓8（北から）
図版10
1　東鬼川市Ⅱ調査区　土壙26（西から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　井戸1(南から)
3　東鬼川市Ⅱ調査区　井戸2（北西から）
図版11
1　東鬼川市Ⅱ調査区　袋状土壙1（南から）
2　東鬼川市Ⅱ調査区　土壙103（東から）
3　東鬼川市Ⅱ調査区　土壙137（南から）
図版12
1　東鬼川市Ⅱ調査区　建物2（南から）
2　西鬼川市Ⅰ調査区　溝13・21(南西から)
3　西鬼川市Ⅲ調査区　全景（西から）
図版13
1　西鬼川市Ⅰ調査区　土器棺墓11(北から)
2　西鬼川市Ⅱ調査区　溝16（南から）
3　田所調査区　水田（西から）
図版14
1　田所調査区　稲かぶ断面　(北西から)
2　田所調査区　溝24（水路）(東から)
3　下田所Ⅰ調査区　全景（南西から）
図版15
1　下田所Ⅱ調査区　全景（西から）
2　下田所Ⅱ調査区　土壙243（南から）
3　下田所Ⅱ調査区　河道1（南東から）
図版16
1　才の元Ⅰ調査区　全景（東から）
2　才の元Ⅰ調査区　杭列（南東から）
3　才の元Ⅰ調査区　杭列断面（東から）
図版17
1　才の元Ⅱ調査区　全景（東から）
2　才の元Ⅲ調査区　全景（西から）
3　才の元Ⅲ調査区　土壙252（西から）
図版18
1　才の元Ⅲ調査区　井戸5上層（南から）
2　才の元Ⅲ調査区　井戸5下層（南から）
3　才の元Ⅲ調査区　井戸6（南から）
図版19
1　才の元Ⅳ調査区　井戸7（東から）
2　才の元Ⅳ調査区　井戸8（西から）
3　才の元Ⅲ調査区　溝41（西から）

図版20
1　才の元Ⅲ調査区　土壙255（南から）
2　五反田Ⅱ調査区　全景（西から）
3　五反田Ⅲ調査区　全景（東から）
図版21
亀川調査区上層出土遺物
図版22
1　溝５出土遺物
2　東鬼川市Ⅱ弥生前期土器
3　竪穴住居８・９出土遺物
図版23
1　竪穴住居５
2　竪穴住居６出土遺物
3　竪穴住居10出土遺物
4　竪穴住居11出土遺物
5　井戸２(252)・土壙28(276)
6　土器棺墓10
図版24
1　袋状土壙１出土遺物
2　土壙48出土遺物
図版25
土壙54・55(326)・61(331・334)・70(337)・76・77
(350・351・353)・79(357)・96・97(369)・115(390・391)
・123(410)・153(439)・156(445)・165(464)
図版26
土壙166(480)・168・169(484)・183(497)・188(507・
510・511・512・517・518)・196(521)・226・227(550)
図版27
溝12西側出土遺物①
図版28
1　溝12西側出土遺物②
2　溝12中央出土遺物①
図版29
溝12中央出土遺物②
図版30
溝12中央出土遺物③
図版31
溝12中央出土遺物④
図版32
溝12東側出土遺物①
図版33
1　溝12東側出土遺物②
2　溝12北側出土遺物①
図版34
1　溝12北側出土遺物②
2　溝12南側出土遺物①
図版35
1　溝12南側出土遺物②
2　溝12下層出土遺物①
図版36
1　溝12下層出土遺物②
2　溝12出土製塩土器
3　東鬼川市Ⅱ出土ミニチュア土器
図版37
1　溝13出土ミニチュア土器
2　溝16出土遺物
3　河道２出土遺物
4　下田所Ⅱ
5　井戸５出土遺物
図版38
1　土壙243出土遺物
2　井戸６出土遺物①
図版39
1　井戸６出土遺物②
2　井戸７出土遺物
3　溝33出土遺物
図版40
井戸８出土遺物
図版41
1　土製品
2　玉類
3　その他(紡錘車＜左＞，古銭＜右＞)
4　木製品
図版42
石器

第１章　地理的・歴史的環境

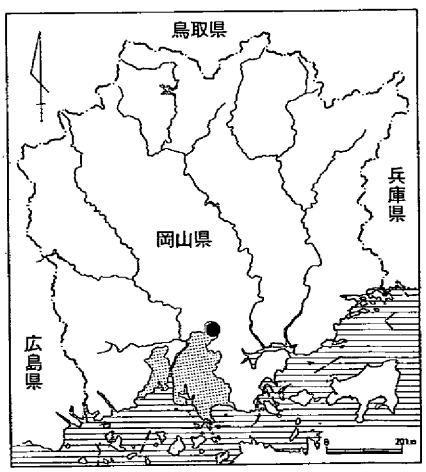
上東遺跡は岡山県南部の倉敷市上東に所在する。本遺跡は足守川下流域右岸に広がる沖積平野の一角に立地し、隣接する幾つかの微高地によって形成されている。岡山県南部の中央を南流する足守川は吉備高原の高陣山に源を発し、岡山市を流入しながら砂川・笹ヶ瀬川などと合流して児島湾に注ぐ。足守川下流域には広範囲にわたって沖積平野が展開しており、東側は吉備中山、西側は日差山によって挟まれている。上東遺跡の北側には楯築弥生墳丘墓、女男岩弥生墳丘墓、王墓山古墳など多くの遺跡が所在する独立低丘陵がある。また南方には早島町北部の備南台地が位置するが、この丘陵はかつて内海に浮かぶ孤島であったと考えられている。上東遺跡１の微高地は山陽新幹線地点で海抜1.5m前後、上東遺跡２の波止場遺構地点で海抜０m前後であり、遺跡の南端は旧海岸線に隣接し、倉敷市上東から岡山市川入の南縁付近は旧足守川の河口部にあたることが想定される。このことは倉敷市下庄以南の平野部が遺跡の空白地域になっていることからも察せよう。

足守川下流域には多くの遺跡が分布しており、吉備の中枢地域の一つである。遺跡周辺において人類の足跡が認められるのは旧石器時代まで遡ることができるが、遺構は未だに検出されておらず、甫崎天神山遺跡・雲山遺跡でナイフ形石器、矢部堀越遺跡で尖頭器などが確認されているに過ぎない。

縄文時代になると、早期から海進がすすみ、前期初頭には現平野部の奥深くまで海水面が上昇していたと考えられている。矢部伊能軒遺跡や矢部奥田遺跡では早期の押型文土器が出土しているものの、当該期の遺構は認められない。中期の大内田貝塚、中～後期の矢部貝塚、後期の西尾貝塚などは丘陵裾部に立地しており、当該期の海進状況を物語っている。後期後半には津寺遺跡が立地する平野部でも土器が出土していることから低地への進出が伺え、吉野口遺跡では晩期の竪穴住居が検出されるとともに、緑色軟質石材の管玉なども出土している。

弥生時代前期は、総社平野では南溝手・窪木遺跡、真壁遺跡のように集落構造を把握できる遺跡が認められるが、足守川下流域では上東遺跡、岩倉遺跡、川入遺跡、高田遺跡、津寺遺跡、加茂政所遺跡、高松原古才遺跡などで遺物が散見される程度である。

中期中葉の遺跡としては新邸遺跡、加茂政所遺跡が認められるほどであるが、中期後半になると遺跡の増加が著しくなる。足守川河口～下流域の微高地には、上東遺跡、足守川遺跡群、津寺遺跡、加茂政所遺跡、高塚遺跡などにおいて集落が営まれるようになり、これらの遺跡は後期に拡大し、拠点集落として古墳時代まで存続する。また丘陵上や裾部には、矢部大坑遺跡、矢部奥田遺跡、矢部堀越遺跡、前池内遺跡、後池内遺跡、雲山遺跡、女男岩遺跡などの小規模な集落が短期間だけ営まれている。早島の丘陵においても、奥坂遺跡で中期後半から後期にかけて集落が形成される。



第１図　遺跡位置図

後期になると、足守川下流域には前述した拠点集落が随所に形成され、低位部に水田が展開している。高塚遺跡では銅鐸・

1	上東遺跡1	16	東栗坂土墨址	31	若宮神社東遺跡	46	矢部廃寺址
2	下庄遺跡	17	東栗坂2号墳	32	山地遺跡	47	矢部寺田遺跡
3	上東遺跡2	18	新屋敷古墳	33	琵琶池北遺跡	48	矢部遺跡
4	荒神古墳	19	矢尾神社遺跡	34	伊能軒遺跡	49	鯉喰神社弥生墳丘墓
5	岩倉遺跡	20	西栗坂1・2号墳	35	矢部古墳群A	50	矢部南向遺跡
6	才楽遺跡	21	松島城址	36	矢部古墳群B	51	加茂B遺跡
7	柿梨堂遺跡	22	舟渡貝塚	37	矢部大圦古墳	52	惣爪廃寺址
8	川入遺跡	23	才古山古墳1・2号墳	38	矢部貝塚	53	足守川矢部南向遺跡
9	撫川城址	24	二子高鳥居山古墳群	39	矢部奥田遺跡	54	東惣爪遺跡（高田遺跡）
10	庭瀬城址	25	砂原南遺跡	40	矢部大山谷古墳群	55	吉野口遺跡
11	大内田貝塚	26	砂原北遺跡	41	江田古墳群	56	賀陽氏屋館址
12	坪井北遺跡	27	御堂奥、岩部奥地東遺跡	42	矢部堀越遺跡	57	東山遺跡
13	奥坂遺跡	28	二子御堂奥窯址群	43	郷境墳墓群	58	新邸遺跡
14	天神坂遺跡	29	二子14号墳	44	前池内遺跡	59	藤の木遺跡
15	東栗坂1号墳	30	二子古墳群	45	高坪古墳		

60	日幡城址
61	法伝山古墳
62	楯築弥生墳丘墓
63	西の平古墳
64	半俵3号墳
65	女男岩遺跡
66	辻山田遺跡
67	大池上古墳群
68	真宮古墳群
69	西尾貝塚
70	赤井南古墳群
71	日畑廃寺址
72	王墓山古墳

第２図　遺跡分布図（1/25,000）

貨泉・青銅器素材、加茂政所遺跡では銅釧、足守川矢部南向遺跡では小銅鐸・銅鏡などが出土しており、当地域では青銅器の出土が顕著である。上東遺跡では居住域の南東方向において、敷き粗朶や粘土などを交互に突き固めた盛土と杭列を駆使して構築された波止場状遺構が検出され、備中地域における対外交渉の玄関口として重要な役割を担っていたことが示唆される。また後期後半には、足守川下流域右岸の丘陵を中心として、楯築弥生墳丘墓を筆頭に、鯉喰神社弥生墳丘墓、女男岩弥生墳丘墓、雲山鳥打弥生墳丘墓群が築かれ、左岸の吉備中山では矢藤治山弥生墳丘墓が認められる。これら大形の墳丘墓では特殊器台・特殊壺を用いた共通の儀礼・祭祀が挙行されたことが想定される。近年、鯉喰神社弥生墳丘墓で弧帯石片が採集されたことから、楯築弥生墳丘墓に次ぐ首長系列として注目されるとともに、改めて当域が吉備の中枢地域であったことが認識させられた。

古墳時代前期になると、吉備中山では中山茶臼山古墳が築造されるが、尾上車塚古墳以後、その系譜は途絶えてしまう。足守川右岸の日差山丘陵では大形の矢部大坑古墳が築かれ、また日差山の丘陵北東部では矢部古墳群において墳墓群が築造され続け、特殊器台形埴輪なども出土している。津寺遺跡では前期初頭に集落が拡大し、非在地系土器が数多く確認されていることから、他地域との交流の拠点として営まれていた可能性がある。当域の弥生時代から続く拠点集落は古墳時代前期前半までは拡大・発展するが、前期後葉には多くの集落が縮小・廃絶する傾向にあり、集落再編の画期が伺える。古墳時代中期の集落は足守川下流域では少ないが、高塚遺跡・津寺遺跡で朝鮮半島系遺物やカマド付き竪穴住居などが認められ、生活様式に大きな変化が生じている。当該期の古墳も足守川流域で突出するような古墳は築かれず、総社平野南部において造山古墳、作山古墳、宿寺山古墳などの首長墳系列が認められることから、吉備の中枢地域が移ったことが考えられる。後期には矢部古墳群、前池内古墳群、王墓山古墳群などで群集墳が築かれ、終末期には日差山南端において、外護列石を巡らす二段築成の方墳である二子14号墳が築造されている。

古代の足守川下流域は備中国都宇郡に属す。津寺遺跡では６世紀末から７世紀初頭にかけて大規模護岸施設が構築され、注目される。また、津寺遺跡、加茂政所遺跡、川入遺跡では飛鳥様式の瓦が出土しており、周辺に当該期の寺院の存在が想起される。

中世には、津寺遺跡、三手遺跡、高塚遺跡、吉野口遺跡などで多くの遺構が確認され、具体的な集落構造が見てとれる。また早島では中世貝塚が多く見られ、「早島式土器」と称される吉備系土師器椀が濃密に分布する。さらに中～近世にかけて、大規模な開墾事業が為され、海水の流入を防ぐ「宇喜多堤」が築かれるなど、かつての内海も次第に陸地化していく。（米田）

主要参考文献

岡山県『岡山県史』第１巻（自然風土）1983、第18巻（考古資料）1986

岡山県教育委員会「足守川加茂Ａ遺跡・足守川加茂Ｂ遺跡・足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　1995

岡山県教育委員会「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 1997

岡山市教育委員会『吉野口遺跡』1997

岡山県教育委員会「津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』142 1999

岡山県教育委員会「立田遺跡2・高松原古才遺跡2・加茂政所遺跡2・津寺遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』143 1999

岡山県教育委員会「高塚遺跡・三手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 2000

平野泰司・岸本道昭「鯉喰神社弥生墳丘墓の弧帯石と特殊器台・壺」『古代吉備』第22集　2000

第２章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　　発掘調査にいたる経緯

主要地方道箕島高松線改良工事は、当初一般県道大内田高松線と呼称され、岡山市高松地区の国道180号線から岡山県総合流通センターを経て、岡山市箕島地区の国道２号線までを結ぶ岡山市西部の外環状線的な要素を持って計画されていた。

この工事に伴う発掘調査は、平成元年度に高松地区の津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡の第１次調査が実施されたのに始まり、平成７年度上東遺跡西方の倉敷市二子地区までの確認調査が実施された。平成８年度上東遺跡の西端にあたる九つ田地区の調査が実施された。さらに平成９年度には上東遺跡の南東約400mの所に位置する上東・下庄遺跡の全面調査が行われた。

上東遺跡以西が調査対象地になったには、箕島高松線から倉敷市街地に向かう都市計画道路の拡幅的要素を持ち、その路線は山陽新幹線の南側に計画されていた。

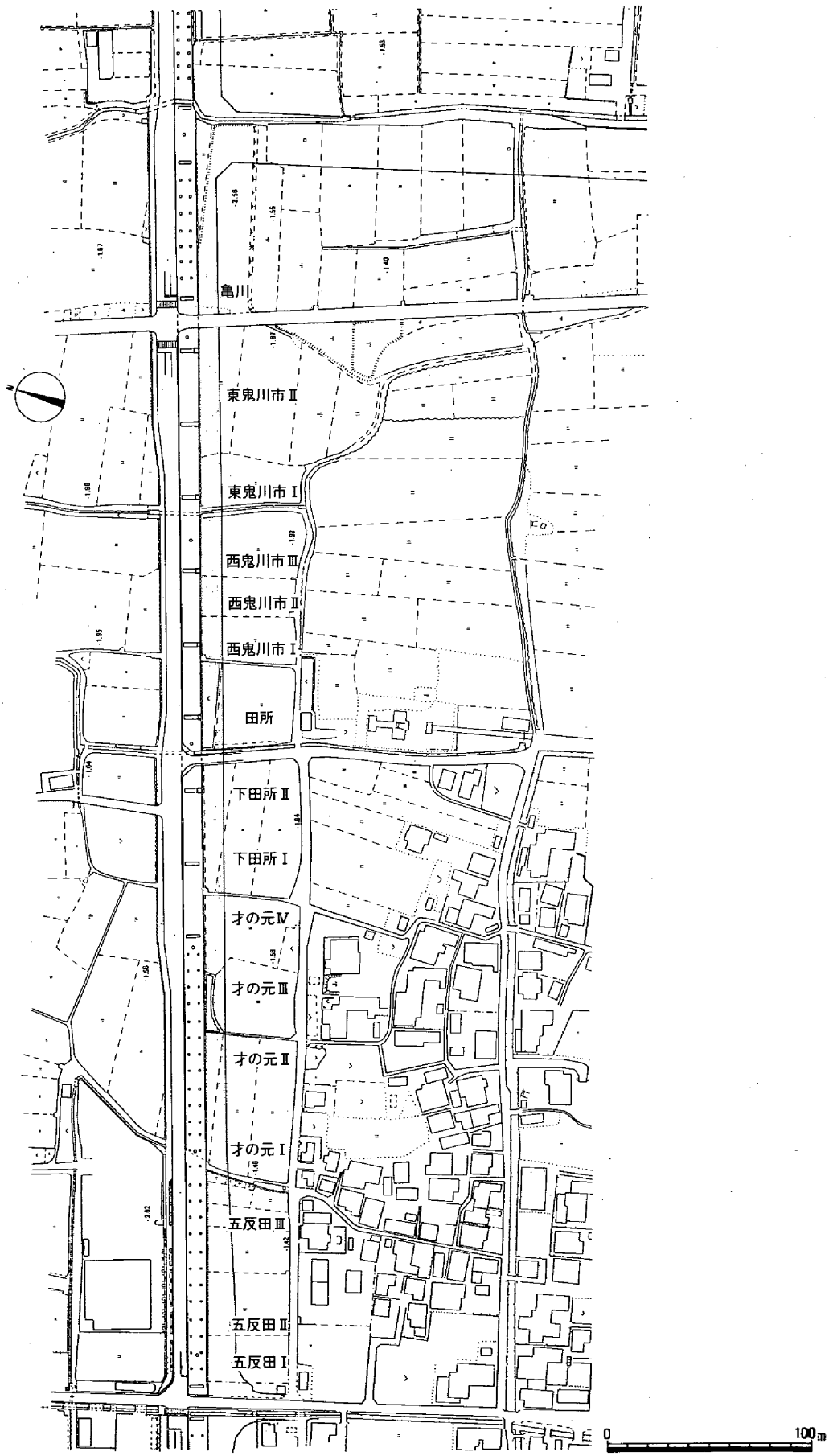
上東遺跡は、昭和46年山陽新幹線建設に伴う発掘調査、昭和50年山陽新幹線のすぐ北側にあたる都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、東西の範囲はある程度想定されていたため確認調査は行っていない。

平成９年度この地区の工事を担当する倉敷地方振興局建設部との協議が行われ、調査地区南側10mを排土置き場として確保してもらうこと、このためには平成10年度の作付けを行わないよう地権者との協議が必要であること、などを中心として条件を整えてもらうべく要望を提出した。

またＪＲ西日本からは、山陽新幹線の両側30mの場所で工事を行う場合は私有地においても安全対策のため協議が必要であること、重機を使用する場合にはＪＲ西日本の指定業者によって行われなければならないこと、などの付加条件を申し入れられた。これにより表土掘削などを行うため指定業者による入札を行い、これらの条件の整った平成10年４月から全面調査を開始した。

第２節　　発掘調査の経過

今回の発掘調査地区は、山陽新幹線の南側10～11m、延長800mにおよぶため山陽新幹線、都市計画道路の調査時と同じように小字によって調査区を分け、２班体制で調査を行った。１班（伊藤・土師・蛯原〈８月まで〉・小林―途中７月から光永が２か月間加わる）は、上東遺跡の東端にあたる亀川地区から調査に入り、順次西鬼川市地区→東鬼川市地区→五反田地区→田所地区の調査を行った。２班（山磨・田井・金田〈８月まで〉・米田）は、平成９年度終了予定の上東遺跡波止場状遺構の調査が残っていたため５月中旬の終了時まで調査を引き継ぎ、その調査の終了後、才の元Ⅳ区から調査に入った。以降順次五反田Ⅱ区→才の元Ⅱ区→下田所Ⅰ・Ⅱ区→才の元Ⅰ・Ⅲ区の調査を行い、２月末日を持ってすべての調査を完了した。また７月から11月までの間真備町教育委員会・矢掛町教育委員会の新採用専門職員、藤原憲芳・直原伸二両氏の研修を三か月間行い、調査の援助を受けた。(伊藤)



第３図　調査区位置図（1/3,000）

第３節　発掘調査の体制

平成８年度　　調査体制

岡山県教育委員会
　教　育　長　　森崎岩之助
岡山県教育庁
　教育次長　　黒瀬　定生
文化課
　課　　長　　大場　　淳
　課長代理　　松井　英治
　課長代理　　臼井　洋輔
　参　　事　　葛原　克人
　課長補佐　　平井　　勝
　（埋蔵文化財係長）
　主　　任　　若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　河本　　清
　次　　長　　高塚　惠明
　次　　長　　葛原　克人
　（文化課本務）
　文化財保護参事　　正岡　睦夫
　〈総務課〉
　総務課長　　丸尾　洋幸
　課長補佐　　井戸　丈二
　（総務係長）
　総務主幹　　守安　邦彦
　主　　査　　木山　伸一
　〈調査第一課〉
　調査第一課長　　高畑　知功
　課長補佐　　江見　正己（調査担当）
　（第一係長）

平成10年度　　調査体制

岡山県教育委員会
　教　育　長　　黒瀬　定生
岡山県教育庁
　教育次長　　平岩　　武
文化課
　課　　長　　髙田　朋香
　課長代理　　西山　　猛
　参　　事　　正岡　睦夫
　課長補佐　　松本　和男
　（埋蔵文化財係長）
　主　　事　　三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　葛原　克人
　次　　長　　大村　俊臣
　〈総務課〉
　総務課長　　小倉　　昇
　課長補佐　　安西　正則
　（総務係長）
　主　　査　　山本　恭輔
　〈調査第二課〉
　調査第二課長　　伊藤　　晃（調査担当）
　課長補佐　　下澤　公明
　（第二係長）
　文化財保護主幹　　山磨　康平（調査担当）
　文化財保護主査　　光永　真一（調査担当）
　文化財保護主査　　土師　忠満（調査担当）
　文化財保護主任　　田井荘之助（調査担当）
　文化財保護主事　　金田　善敬（調査担当）
　文化財保護主事　　蛯原　啓介（調査担当）
　主　　事　　小林　利晴（調査担当）
　主　　事　　米田　克彦（調査担当）

平成11年度　　報告書作成の体制

岡山県教育委員会
　教　育　長　　黒瀬　定生
岡山県教育庁
　教育次長　　宮野　正司
文化課
　課　　長　　松井　英治
　課長代理　　佐々部和生
　参　　事　　正岡　睦夫
　課長補佐　　松本　和男
　（埋蔵文化財係長）
　主　　任　　奥山　修司
岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　葛原　克人
　次　　長　　大村　俊臣
　〈総務課〉
　総務課長　　小倉　　昇
　課長補佐　　安西　正則
　（総務係長）
　主　　査　　山本　恭輔
　〈調査第一課〉
　調査第一課長　　高畑　知功
　課長補佐　　下澤　公明
　（第二係長）
　文化財保護主事　　小林　利晴（報告書担当）

第４節　発掘調査の概要と報告書作成

亀川調査区は、前回の調査と同じく、弥生時代後期から古墳時代の河道部分の西岸部にあたり、古墳時代初めの土器、弥生後期の土器が多く認められた。

東鬼川市地区は、西鬼川市Ⅱ区境にある溝までの間約80mにあたる。弥生時代後期前半を中心とする遺構が集中していた。調査期間の半数をここで費やしている。

西鬼川市Ⅱ区は、溝以西、西鬼川市Ⅰ区の溝群までで遺構は少ない。

西鬼川市Ⅰ区は、西辺に集中して南北に流路を取る弥生時代中～後期の溝が８条検出されている。

田所調査区は、今回初めて古墳時代と考えられる水田遺構の検出を行っている。

下田所調査区、才の元調査区では、弥生時代後期から古墳時代初頭の微高地を確認し、井戸等の遺構を検出している。

五反田調査区では、微高地末端部にあたるのか、たわみ状の凹凸、溝状遺構などが見られた。遺物も二次的に堆積したものと思われ、量も極めて少ない。

今回の発掘調査で出土した主な遺構は、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居11軒、掘立柱建物２棟、井戸８基、土器棺墓11基、土壙墓１基、土壙多数、溝51条、河道３条、水田２面、たまり状遺構５か所、柱穴多数が見つかっているが、土壙については半数近くの260基しか掲載できていない。また出土遺物は、溝内の土器溜まりを始め前回・前々回の調査と同様多数の遺物が出土している。内訳は、コンテナ箱に換算して土器559箱、石製品１箱、木製品17箱、骨・骨角製品６箱などの他に鉄製品、銅銭などがある。出土土器に関しても主な遺構出土のものを中心に掲載している。　（伊藤）

年　度	調査区	調　査　担　当　者	調査期間
平成８年度	九つ田	江見	12．3～12．25
平成10年度	亀川	伊藤・土師・蛯原・小林	4．7～9．1
平成10年度	東鬼川市Ⅰ	伊藤・光永・土師・蛯原・小林	6．1～9．1
平成10年度	東鬼川市Ⅱ	伊藤・光永・土師・蛯原・小林	7．2～2．25
平成10年度	西鬼川市Ⅰ	伊藤・土師・蛯原・小林	4．22～5．28
平成10年度	西鬼川市Ⅱ	伊藤・土師・蛯原・小林	5．7～5．28
平成10年度	西鬼川市Ⅲ	伊藤・土師・蛯原・小林	5．28～6．16
平成10年度	田所	伊藤・土師・小林	12．21～2．23
平成10年度	下田所Ⅰ	山磨・田井・米田	11．5～12．14
平成10年度	下田所Ⅱ	山磨・田井・米田	10．8～11．5
平成10年度	才の元Ⅰ	山磨・田井・米田	12．15～2．25
平成10年度	才の元Ⅱ	山磨・田井・金田・米田	8．7～10．1
平成10年度	才の元Ⅲ	山磨・田井・米田	1．7～2．25
平成10年度	才の元Ⅳ	山磨・田井・金田・米田	5．18～6．25
平成10年度	五反田Ⅰ・Ⅱ	伊藤・土師・小林	9．16～12．11
平成10年度	五反田Ⅲ	山磨・田井・金田・米田	6．26～8．6

調査日誌抄

平成10年	４月１日（水）	発掘調査準備開始
	４月７日（火）	亀川調査区・上東Ｉｃ区調査開始
	４月22日（水）	西鬼川市地区調査開始
	５月15日（金）	Ｉｃ区調査完了
	５月18日（月）	才の元Ⅳ区調査開始
	６月１日（月）	東鬼川市地区調査開始
	６月16日（火）	西鬼川市地区調査終了
	６月25日（木）	才の元Ⅳ区調査終了
	６月26日（金）	五反田Ⅲ区調査開始
	８月４日（火）	「岡山再発見」事業（中級コース）
	８月６日（木）	五反田Ⅲ区調査終了
	８月７日（金）	才の元Ⅱ区調査開始
	８月21日（金）	「岡山再発見」事業（上級コース）
	９月１日（水）	亀川調査区調査終了
	９月16日（水）	五反田Ⅰ･Ⅱ区調査開始
	10月１日（木）	才の元Ⅱ区調査終了
	10月２日（金）	下田所調査開始
	11月24日（火）	埋蔵文化財専門委員会開催、近藤・水内両委員出席
	12月11日（金）	五反田Ⅰ･Ⅱ区調査終了
	12月14日（月）	下田所調査区調査終了
	12月15日（火）	才の元Ⅰ区調査開始
	12月21日（月）	田所調査区調査開始
平成11年	１月７日（木）	才の元Ⅲ区調査開始
	２月23日（火）	田所調査区調査終了
	２月25日（木）	東鬼川市地区・才の元Ⅲ・Ⅰ区調査終了
	２月26日（金）	整理作業開始
	３月31日（木）	本年度整理作業終了

報告書の作成

報告書作成のための整理作業は、平成10年度に６人で１ヶ月間行い、引き続き平成11年度に一年間、小林利晴１名が従事した。

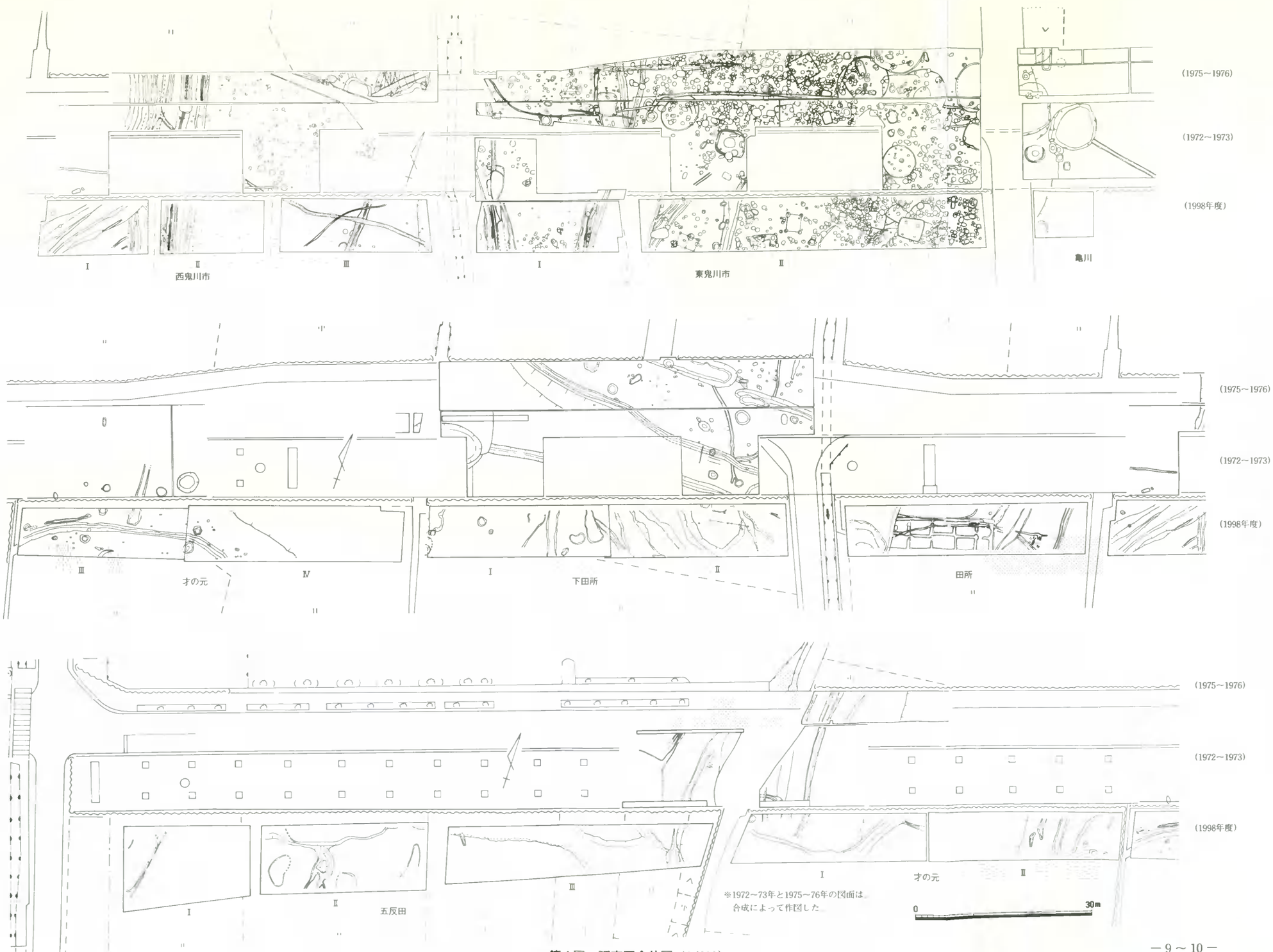
遺跡の発掘調査総面積は5970㎡、遺構総数 697、遺物箱数559であった。出土遺物は、水洗が発掘調査時に終了しており、注記に関しては９割以上が調査時に終了し、残りの一部はセンターにおいて行った。土器の復元は、センターでの整理作業時から開始した。各遺構の時期、土器の特徴等を記録しながら、実測土器の選定・抽出を行った。土器の復元作業と併行して、石器、木器、土製品なども抽出し、台帳の作成、実測用の選定を行った。

遺物については、土器が1267点、石器が51点、木器が11点、土製品が29点、玉類が２点を掲載した。実測作業は主に補助員、整理作業員が行ったが、一部については調査員が行った。トレースは、石器を整理作業員が、それ以外のものは全てを調査員と整理作業員の両者がそれぞれ行った。

遺構については、竪穴住居11、建物２、土器棺墓11、井戸８、袋状土壙１、土壙260、溝51を掲載した。遺構の図面整理と下図の作成は調査員が行い、トレースは調査員の指示のもとに整理作業員が行った。遺構・遺物の説明は、主に調査を担当した調査員でそれぞれ分担した。

今回の報告書では、弥生・古墳時代については発掘調査段階で遺構と確認したものをほぼ全て掲載した。中世以降については、下田所以西の調査区において、調査担当者が重要と認識したものを全て載せている。田所以東の調査区では、基本的に全体図のみに掲載し、東鬼川市Ⅱ調査区は、遺構密度が高いため、全体図においても掲載しなかった。

（小林）



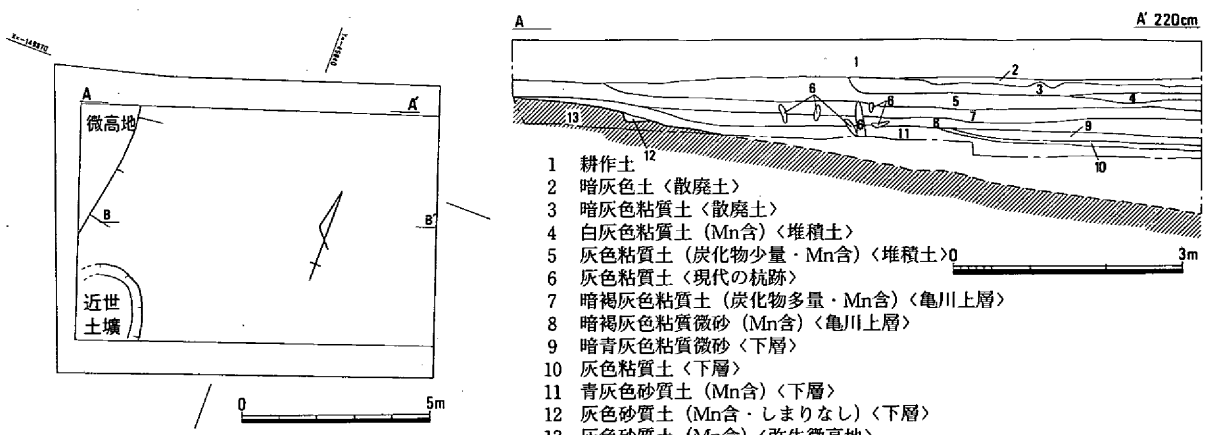
第4図　調査区全体図（1/600）

第３章　亀川・東鬼川市・西鬼川市微高地の調査

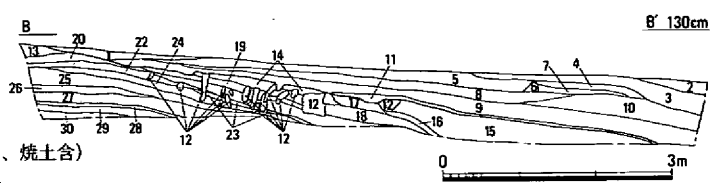
第１節　亀川調査区の概要

亀川調査区は、今回調査した中で最も東側に位置する調査区である。この調査区は、過去２回の調査において、東鬼川市から続く微高地の東端が確認されており、今回の調査でも調査区の西端でその続きが確認された。微高地端から東側は旧河道になり、この河道の上層（Ａ－Ａ’の７・８層）は多量の土器が含まれている。この土器類は、かつて亀川上層式と呼ばれ古墳時代前期の指標となったものである。また河道の下層は砂質土が中心となる。今回の調査では、過去の調査時に見られた製塩土器溜まりなどはなかった。この下層部分には、杭の痕跡のような縦に入る土層（Ｂ－Ｂ’の12層）が２ｍぐらいの幅で存在し、微高地の際を守るための護岸施設の跡かもしれない。

出土遺物には河道の上層を中心に、以下のものが存在する。１～７は壺である。口縁部の形態にはいくつかの種類があり、外側へ向かう１・６、外反する４、段になり外へ向く２・３、段になり直に立ち上がる５・７などがある。８～23は甕になる。口縁の形態には、段を持ち端面に櫛描沈線文がある８・10・12～14、く字で端部を内側につまみ上げる11・15・17・18、などがある。また胴部にタタキのある９・20・23はく字口縁になる。９以外は全て丸底である。24～29は高杯である。30～41は椀で、口径16cm、器高５cm前後のものが多い。44～47は鉢であり、いずれも丸底になる。48～50は河道下層出土であり、48はミニチュア土器、49・50は弥・後・Ⅱの製塩土器である。　　（小林）

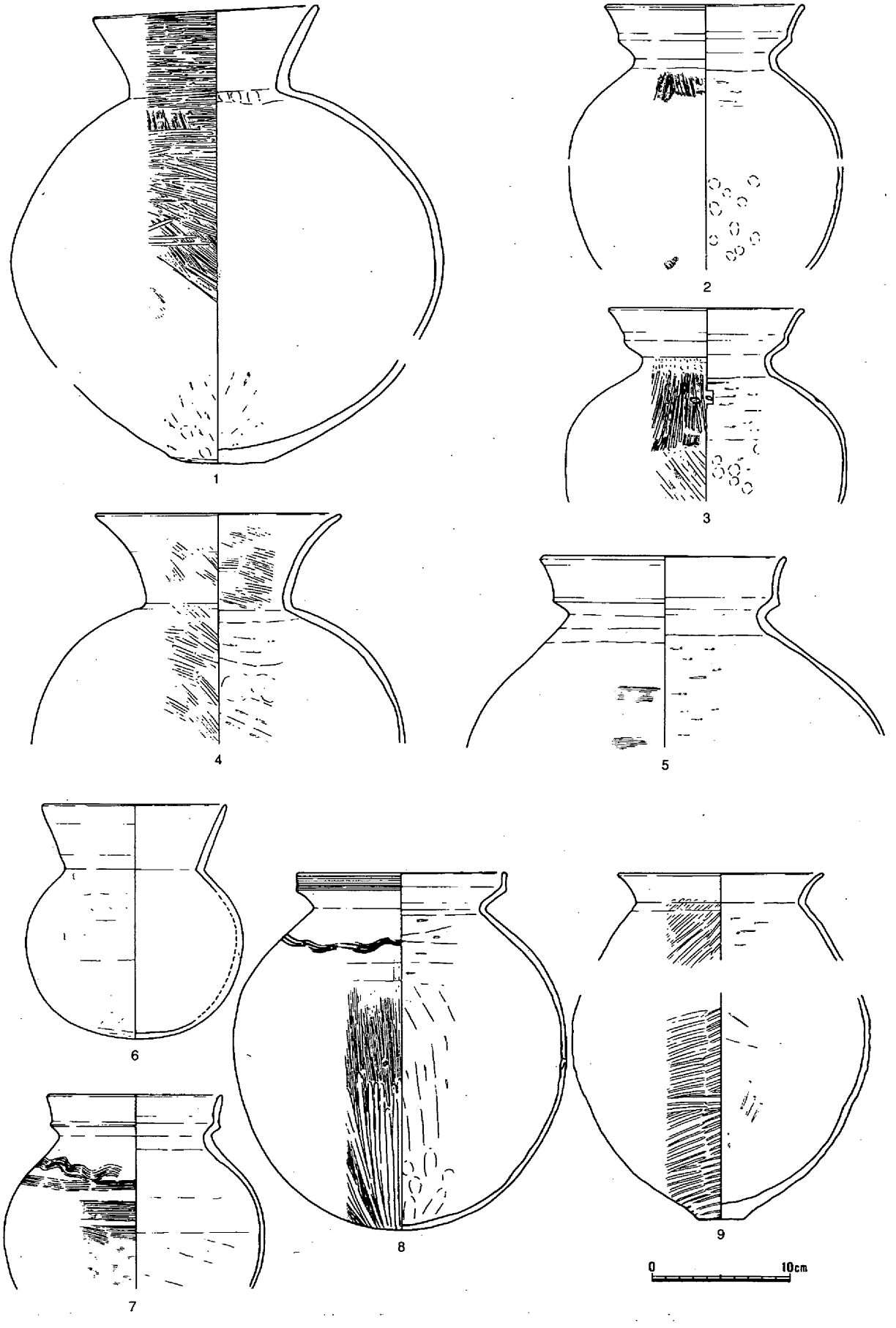


第５図　亀川調査区遺構配置（1/200）

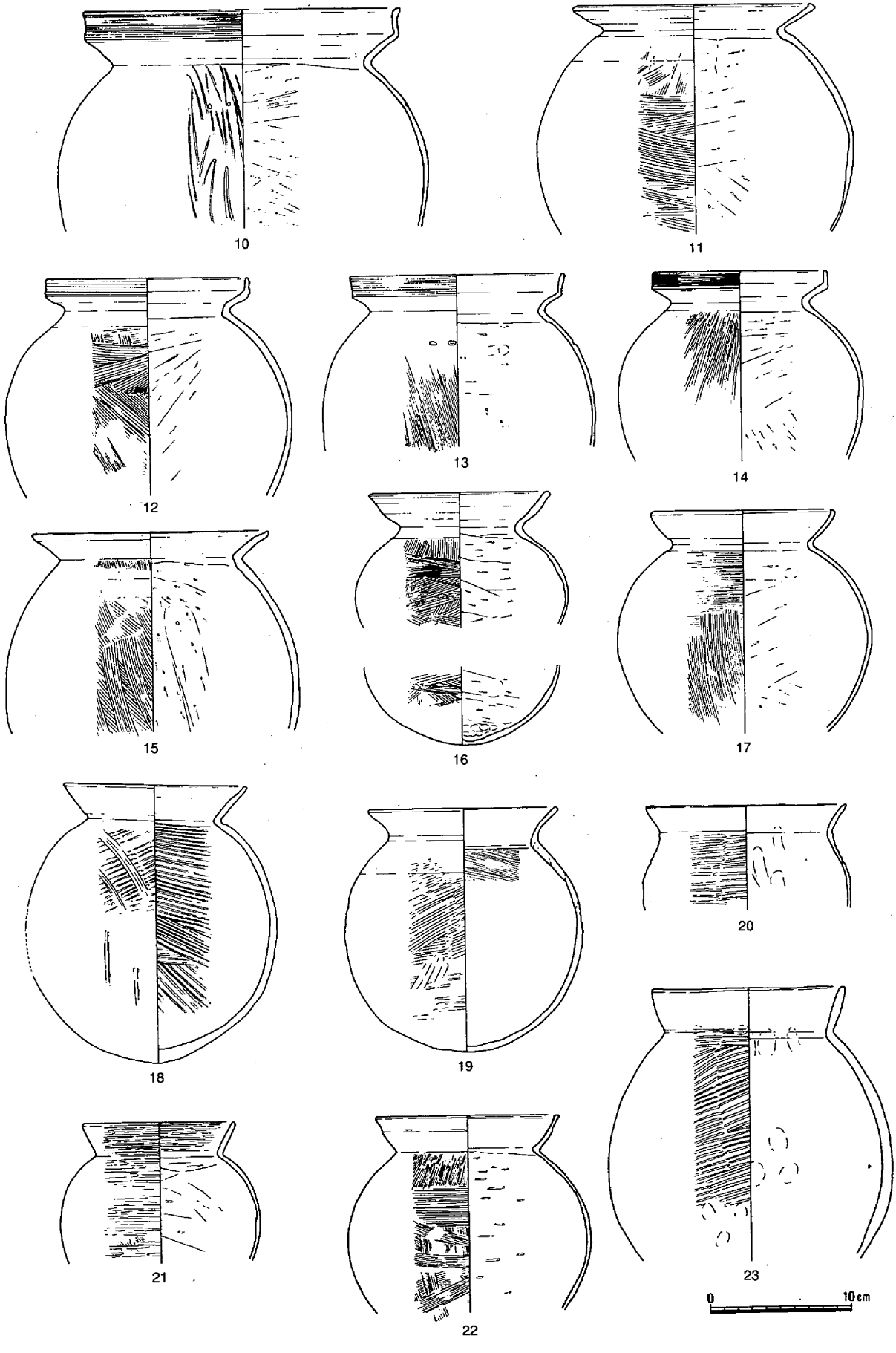


1　暗灰褐色粘質微砂（炭化物、焼土、Mn・Fe含）
2　青灰色粘質微砂
3　暗青灰色砂質土
4　暗灰色粘土
5　淡灰色粘質微砂
6　暗灰色粘質土
7　暗灰色砂質土
8　青灰色砂質土
9　暗灰色砂質土（木片、炭化物含）
10　暗灰色粘質微砂（木片、炭化物含）
11　灰色砂（木片、焼土含）
12　青灰色砂質土
13　褐灰色粘質微砂（Mn・Fe含）
14　暗灰色粘質微砂
15　青灰色粘土
16　灰色砂質土
17　暗灰色砂質土
18　暗青灰色砂質土
19　暗青灰色粘質微砂
20　茶灰色微砂（Fe含）
21　灰色砂質土
22　青灰色砂質土
23　暗青灰色粘質微砂
24　暗青灰色砂質土
25　暗褐灰色砂質土
26　暗青灰色粘質微砂
27　暗青灰色粘質土
28　暗灰色砂質土
29　黒灰色粘質微砂
30　暗青灰色粘質微砂

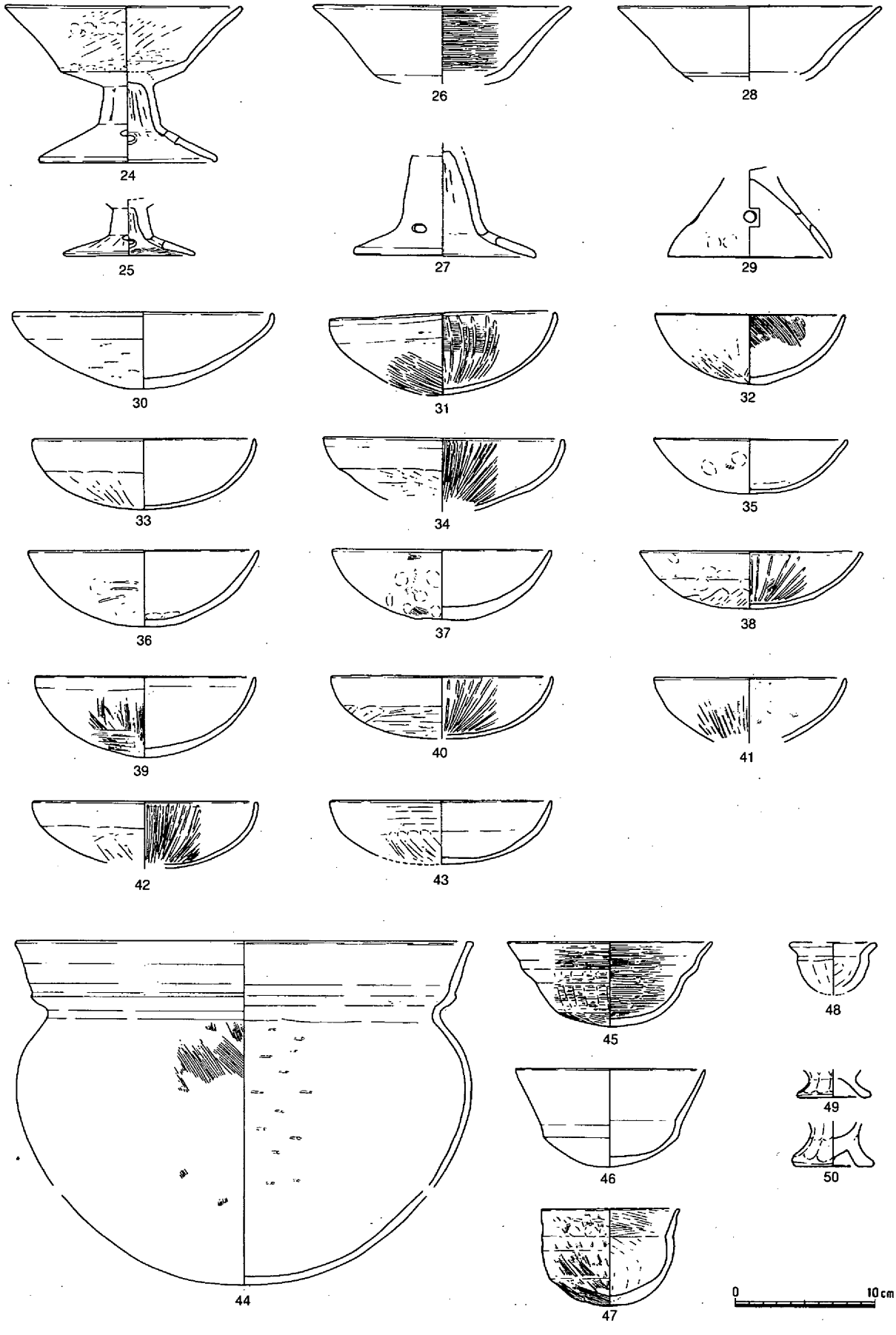
第６図　亀川調査区土層断面　北壁（上）・中央（下）（1/100）



第7図　亀川調査区上層出土遺物①（1/4）



第８図　亀川調査区上層出土遺物②（1/4）

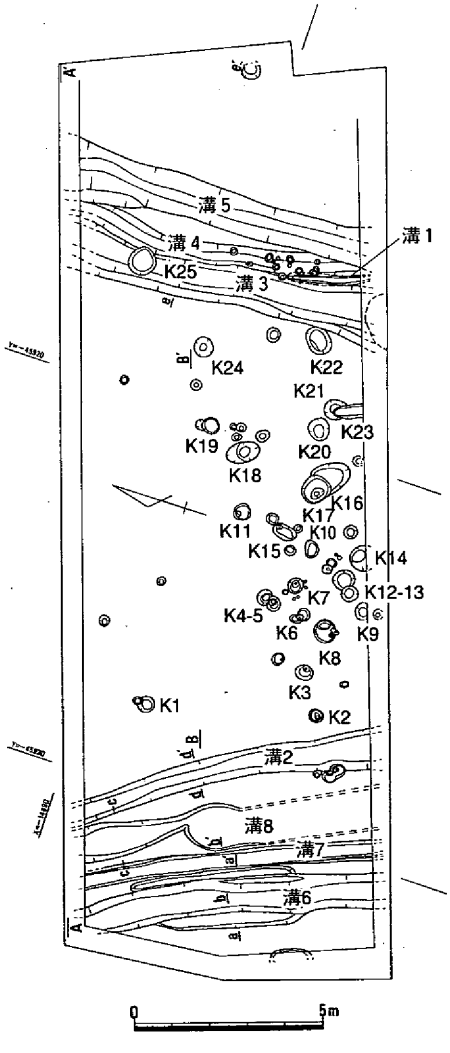


第9図　亀川調査区上層出土遺物③（1/4）

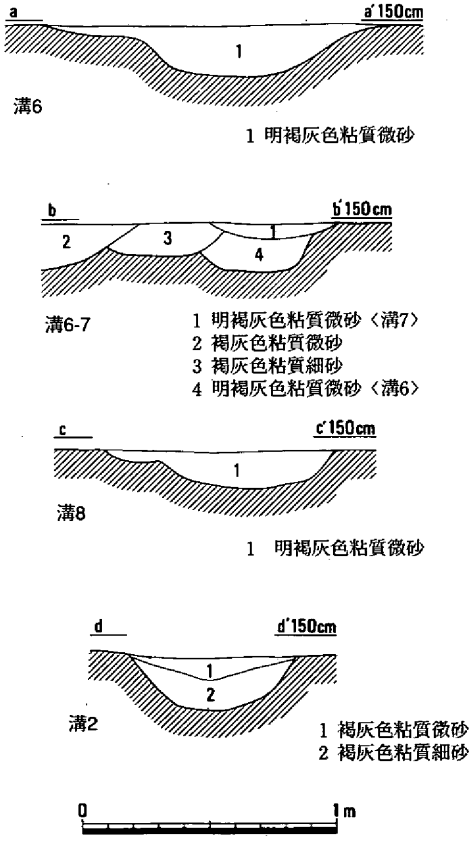
第２節　東鬼川市Ⅰ調査区　調査の概要

東鬼川市Ⅰ調査区は、東鬼川市Ⅱ調査区の西側・西鬼川市調査区の東側に位置する。東鬼川市Ⅱ調査区との境には溝12があり、西鬼川市調査区との境には現代の用水路が存在する。

今回この調査区から発見された遺構は、溝と土壙のみである。溝の数は、溝12を含めると、全部で９条になり、その全てが東西の調査区境に集中している。西側境には４条あり、弥生時代後期が１条と中世が３条である。東側境は、溝12を含めて５条で、全てが弥生後期である。これらの溝は、東西両方とも基本的には北から南に流れている。土壙は25基を載せているが、その他にも柱穴状のものがその倍近くある。土壙の規模は50～80cm前後のものが多く、遺物はほとんど出土しない。ただしこれらの土壙は、層位や周辺の状況から、弥生後期に位置付けられると思われる。また中世段階の土壙が、東西両調査区境に１基ずつ存在する。これら弥生後期の土壙は調査区の南側に集中する傾向があり、北側では数が減少する。過去２回の調査では、主要な遺構はやはり溝と土壙であり、その他に中世の建物と竪穴住居が１軒ずつある。



第10図　東鬼川市Ⅰ調査区遺構配置（1/200）



第11図　溝２・６～８断面（1/30）

この調査区を層位的に見ると、20～30cmの耕作土（第12図上１層）の下に近世層（２層）、さらに下に30cm前後の中世水田層（６・７・８層）がある。遺構面は水田層の下になり、標高155～ 160cm付近になる。この高さは、東鬼川市Ⅱ調査区より30～40cm低い位置になる。この面で弥生から中世までの遺構が確認できる。また基盤層は14層で、粘質が主である。ほぼ水平堆積であるが、西側がやや低い。この層のさらに下層になると、砂質が主になる（第12図下）。全体的に東側に向かって傾斜する傾向があるが、特に12層付近で急激に落ち込む。

この調査区の遺構配置を観察すると、東側の溝はすべてが弥生時代になり、これらは弥生時代の区画溝になると思われ、これより西側は遺構が希薄になる。中世になると西側端に溝が築かれはじめ、この溝群の内側（東側）に建物や住居が建てられ始めることが読みとれる。この調査区は東鬼川市Ⅱ調査区ほどの遺構数は無いが溝の数は増え、西鬼川市調査区ほどの溝数はないが土壙は増える。（小林）

第３節　東鬼川市Ⅰ調査区

弥生・古墳時代の遺構・遺物

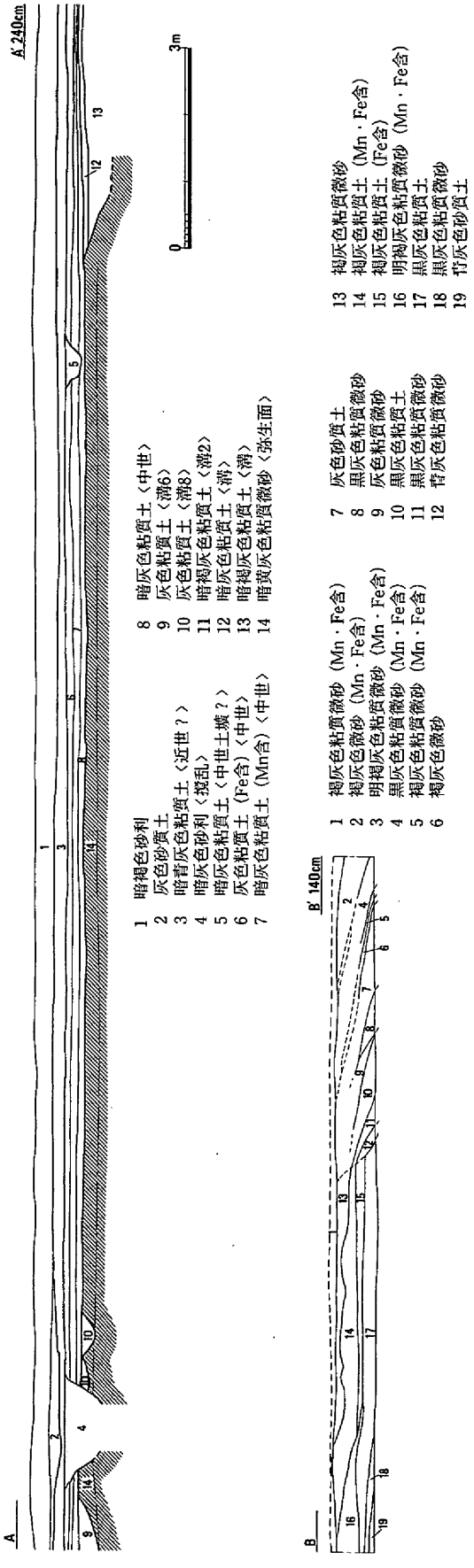
土壙群

調査区の中央部、というよりも東西両端部の溝群に挟まれた範囲の特に南寄りの部分において、25基を数える土壙群が検出された。

検出面は第12図Ａ－Ａ'断面の第14層上面に相当し、海抜1.40m前後である。

平面形状は不整円形から楕円形を呈し、底面の一部が２段に窪むものもみられ、柱穴およびその堀り方と理解すべきものも混在するが、ここでは土壙として報告する。

遺物を出土したのは、土壙４・11・17・



第12図　東亀川市Ⅰ調査区北壁土層断面（1/100）

19・25の5基のみで、これを図示し得たのは土壙25から出土した第14図の3点のみである。埋土を比較しても、褐灰色粘質微砂を基本として、若干の相違をみせるものの大差はなく、特異な堆積物を示すものはない。

切合い関係を示すものがあり、すべてが同時期に存在したとは考えられないが、上記の諸要因から弥生時代後期、とりわけ後Ⅱ期に属するものと考えられる。

土壙1（第10・13図）

調査区北西部、溝2の東1.6mに他とはやや離れて所在する。44×41cmの不整円形を呈し、深さ23cmの擂り鉢状で、埋土は褐灰色微砂である。遺物は出土していない。

土壙2（第10・13図）

調査区南西部、溝2の東45cm、土壙3の西80cmに位置する。37×35cmの不整円形を呈し、深さ11cm程の底面に24×13×13cm程の窪みがみられ、柱穴とも考えられる。埋土は暗褐灰色粘質微砂である。

土壙3（第10・13図）

土壙2の東80cm、土壙8の西50cmに位置する。48×42cmの楕円形を呈し、深さ8cmの底面東端に、20×15×8cmの柱痕跡状の窪みがある。埋土は暗褐灰色粘質微砂で、遺物は出土していない。

土壙4・5（第10・13図）

調査区中央部南寄りに位置し、土壙4が土壙5を切っている。土壙4は、41×38cmの不整円形で、最大深さ31cmを測り、暗褐灰色微砂の埋土から弥生後Ⅱ期の壺・甕片各1点が出土している。土壙5は径41cmの不整円形で、最大深さ22cm、埋土は褐灰色粘質微砂で、遺物は出土していない。

土壙6（第10・13図）

土壙5の南西50cmに位置する。径33cmの円形で、北西角に17×15×23cmの柱痕跡状の窪みを伴う。

土壙7（第10・13図）

土壙6の東45cmに位置する。43×41cmの不整円形を呈し、深さ10cmの底面東部がやや窪んでいる。

土壙8（第10・13図）

土壙6の南25cmに近接して位置する。62×58cmの楕円形を呈し、深さ7cmの底面東端がさらに3cm程窪んでいる。埋土は暗褐灰色微砂で、遺物は出土していない。

土壙9（第10・13図）

調査区中央部南端で、土壙12と近接している。南半を側溝で失っているが、径50cm弱、深さ27cm程度の柱穴状を呈する。

土壙10（第10・13図）

土壙7の東50cmに位置し、50×33×14cmの不整楕円形で、埋土は2層、底面に凹凸がある。

土壙11（第10・13図）

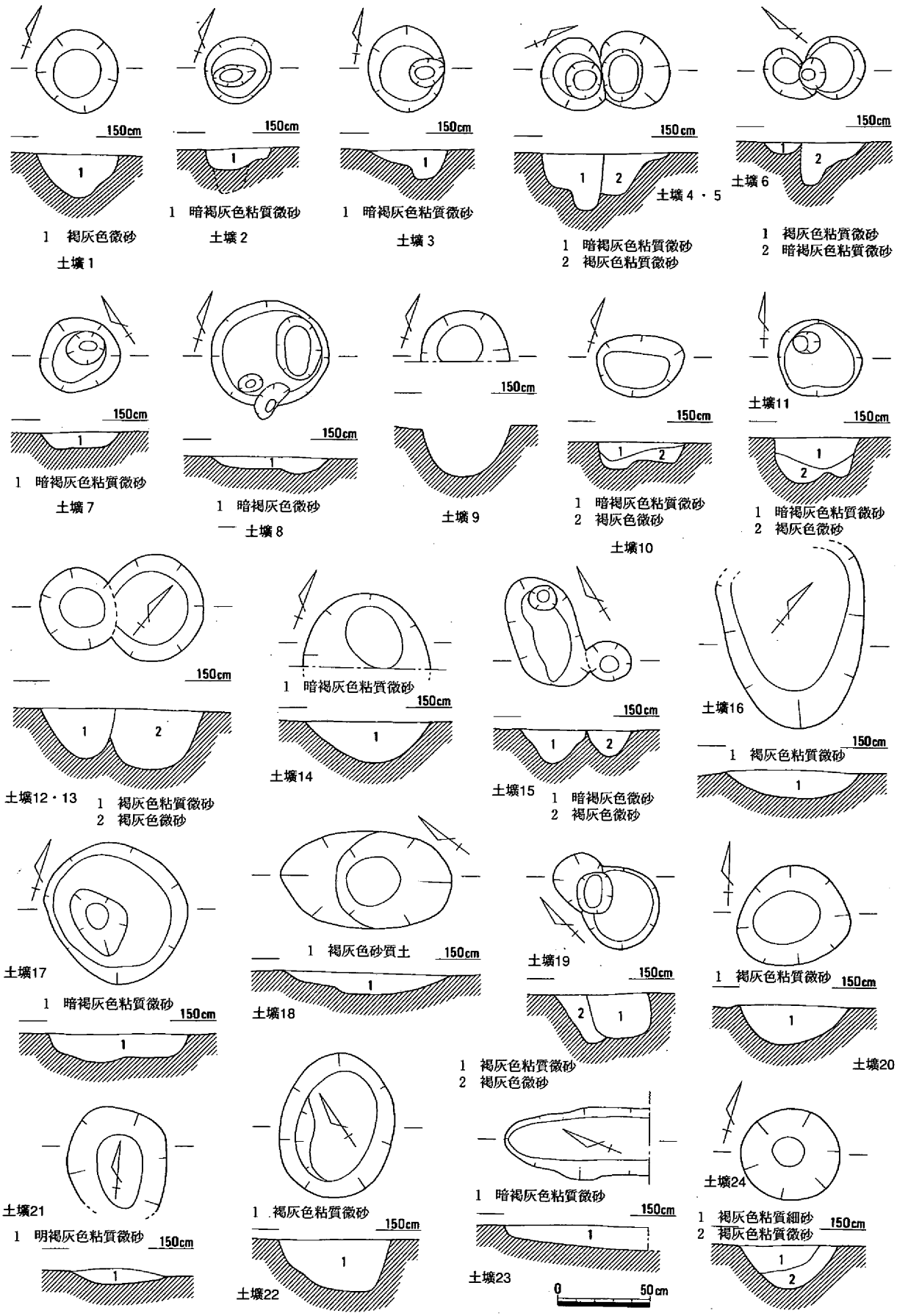
調査区中央部で、土壙4の東1.1mに位置する。47×43cmの不整円形を呈し、深さ24cmの底面には凹凸がある。埋土は、2層に分けられ、後期の弥生土器小片が出土している。

土壙12・13（第10・13図）

調査区中央部南端、土壙10の南70cmに位置し、土壙12が土壙13を切っている。いずれも不整円形の柱穴状で、土壙12が45×40×27cm、土壙13が58×52×33cm程度を測り、遺物は出土していない。

土壙14（第10・13図）

土壙13の東に近接し、南半を側溝で失っている。径63cm強の円形と想定され、断面擂り鉢状で、深



第13図　土壙１～24　(1/30)

さ22cmを測る。埋土は暗褐灰色粘質微砂で、遺物は出土していない。

土壙15（第10・13図）

調査区の中央部南寄り、土壙10の北30cmに位置して、南東端を柱穴に削られている。

平面は65×37cmの不整楕円形を呈し、深さ19cmの底面は平坦とならず、北端に柱痕跡状の窪みを伴う。埋土は暗褐灰色微砂で、遺物は出土していない。

土壙16（第10・13図）

調査区中央部南寄りで、土壙10の東1.3mに位置し、北西部を土壙17に削られている。

最大長径96cm、短径71cmの不整楕円形で、断面凸レンズ状に褐灰色粘質微砂が堆積し、深さ15cmが残る。遺物は出土していない。

土壙17（第10・13図）

土壙15の東90cmに位置し、土壙16を削っている。77×71cmの不整楕円形を呈し、深さ12cmの底面は比較的平坦であるが、西半は５cm程窪んでいる。暗褐灰色粘質微砂の埋土からは、弥生後期の壺・甕・鉢・器台の小片が出土している。

土壙18（第10・13図）

調査区中央部で、土壙11の東1.1mに所在する。92×54cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測る底面は２段になっている。埋土は褐灰色砂質土で、遺物は出土していない。

土壙19（第10・13図）

調査区中央やや東寄りに位置し、土壙18の北東１mで、柱穴を切っている。

45×42cm程度の楕円形を呈し、深さ24cmの底面は平坦である。埋土は褐灰色粘質微砂で、弥生後期の甕の破片が１点出土している。

土壙20（第10・13図）

調査区中央部南寄りで、土壙16の北東1.2mに所在する。

62×53cmを測り楕円形を呈し、深さ22cmの断面は凸レンズ状で、褐灰色粘質微砂の埋土からは遺物は出土していない。

土壙21（第10・13図）

調査区中央部南寄りに位置し、土壙20の東10cmに隣接して、南端を土壙23に削られている。

現存長径60cm、短径52cmの不整楕円形を呈し、深さ８cmが残る埋土は明褐灰色粘質微砂で、遺物は出土していない。

土壙22（第10・13図）

調査区南辺やや東寄りに位置し、土壙21との距離1.2mを測る。長径79cm、短径61cmの楕円形で、深さ28cmの底面はほぼ平坦である。埋土は褐灰色粘質微砂で遺物は出土していない。

土壙23（第10・13図）

調査区南辺やや東寄りに位置して、土壙20を削っている。

平面形は溝状を呈し、現存最大長78cm、幅39cmを測って、深さ10cmの底面は平坦である。埋土は暗褐灰色粘質微砂で、遺物は出土していない。

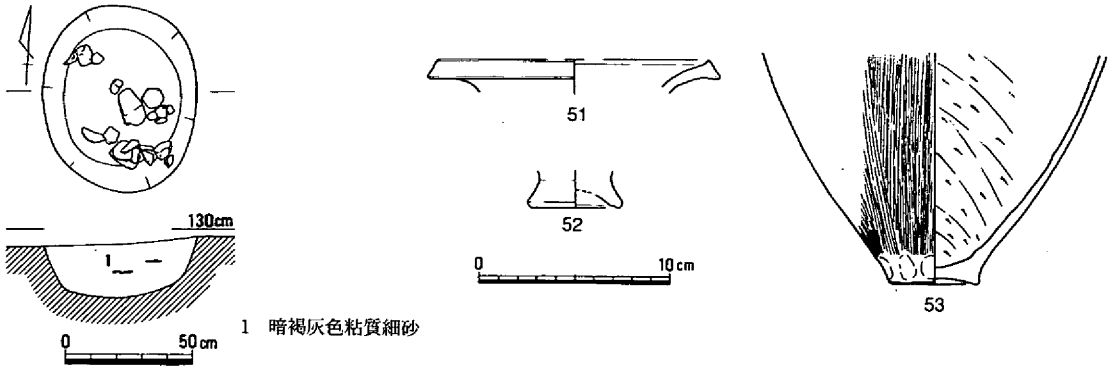
土壙24（第10・13図）

調査区中央部東寄りに位置し、土壙19との距離1.6mである。54×50cmの楕円形で、深さ24cmの断面は擂り鉢状を呈し、２層に分けられる埋土に遺物は含まれない。

土壙25（第10・14図）

調査区北東部に位置し、土壙24との距離2.3mで、溝3・4を切っている。

長径75cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さ22cmの底面は平坦である。埋土の暗褐灰色粘質細砂中に底面から浮いた状態で、弥生土器が出土している。壺**51**・甕**53**・製塩土器**52**等があり、これらから時期は弥生後Ⅱ期に求められる。



第14図　土壙25（1/30）**・出土遺物**（1/4）

溝1（第10図）

調査区南東部で、溝3・4の下層から検出された。残存する規模は、幅30cm、深さ5cm程度で、底面の海抜高は1.15m前後である。

弥生土器の甕・高杯の小片が出土しており、弥・後・Ⅰに比定される。

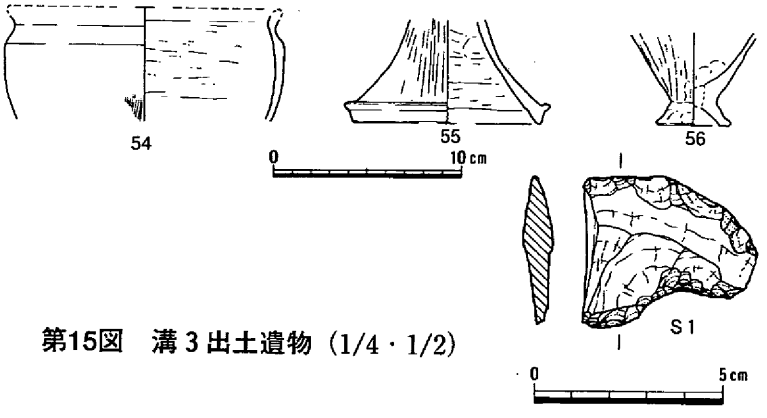
溝2（第10・11図）

調査区西部を北西から南東方向に流下する。溝3との距離は約10mである。規模は、幅60～110cm、深さ20cmで、断面は凸レンズ状を呈する。遺物は出土していないが、埋土がこの東側に分布する土壙群と共通することから、弥生時代後期に比定される。

溝3（第10・15・17図）

調査区東部を北から南へ流下し、溝1を削り、土壙25・溝4に削られる。幅約1m、深さ25cm程度の規模で、底面の海抜高は1.20m前後である。

鉢**54**・高杯**55**・製塩土器**56**、スクレイパーS1等が出土しており、時期は弥生後Ⅰ～Ⅱ期に比定される。



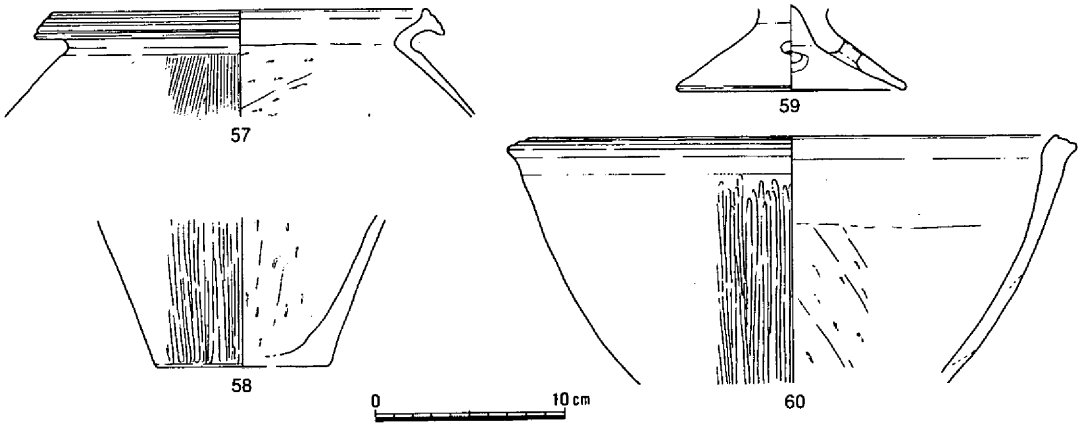
第15図　溝3出土遺物（1/4・1/2）

溝4（第10・16・17図、図版1－3）

調査区東部を北から南へ流下し、溝1・3を削り、土壙25・溝5に削られる。

検出時に東肩が不明瞭であったが、平均的な規模は、幅60cm、深さ25cm程度である。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器の甕**57**・**58**、高杯**59**、鉢**60**等が出土しており、時期は弥生後Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

（光永）

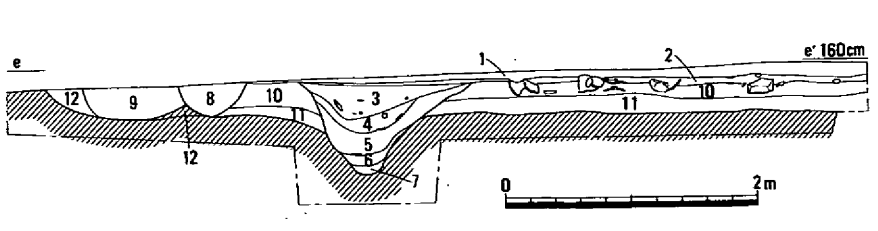


第16図　溝４出土遺物（1/4）

溝５（第10・17～20図、図版２－１、22－１）

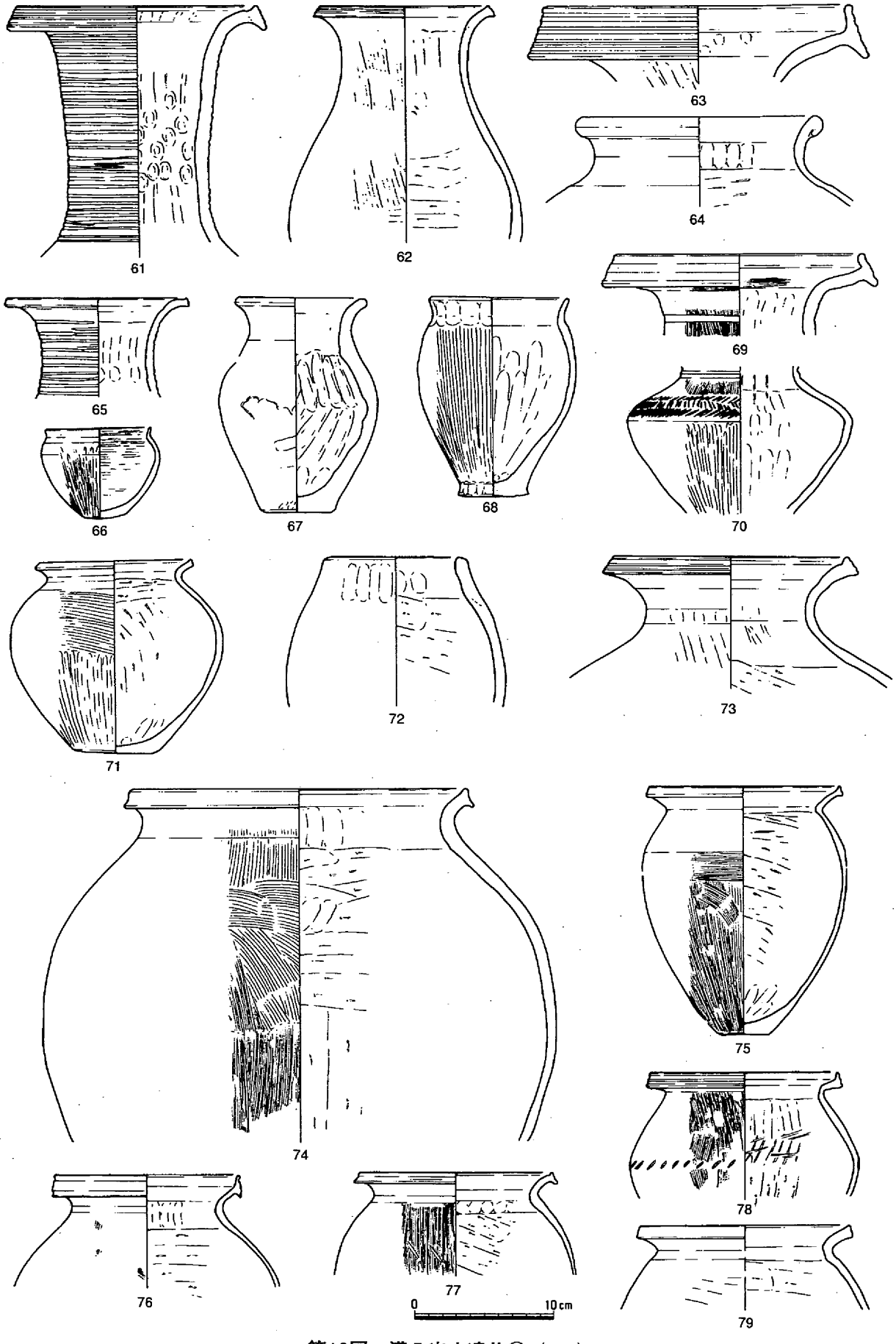
溝５は、調査区東側に位置し、過去の調査では東鬼川市Ｄ３にあたる。切り合い関係では、溝１・４を切る形になる。この溝５は位置的には溝12内にあり、溝12を掘り下げ中に確認した溝である。断面での確認でも、溝12と同質・同色なため、２つの溝の新旧関係を決めるのは困難であった。溝５は、調査区内で北から南へ直線的に南流する。溝の幅は、北側で120cm、南側で100cmを測り、深さは確認面から40cmで断面形状はＶ字形になる。第17図上で３～５層から、多量の完形に近い土器が、その場で割れたような形で出土する。６・７層にはほとんど遺物はなく、土器は溝の底に付かず、浮いた形になる。またこの土器は平面的に見ると（第146図）、溝の最下部にあたる場所の上部に並ぶ。

溝５から出土した遺物には、以下のものがある。**61**～**73**は壺である。**61**は長頸壺で、頸部は多状の沈線がある。**62**は細身の壺である。**64**は口縁部が外側に折り曲げられ、さらに巻き込む形になる。**66**・**68**は細頸の壺で、**72**は無頸の壺である。**67**はほぼ完形になる。**70**は胎土が白灰色になり、弥・中・Ⅲになる。他の**63**～**69**などは、弥生後期Ⅲの資料が多い。**74**～**82**は甕になる。口縁部の形態は**74**・**75**・**79**・**80**～**82**のように、端部を上部へつまみ上げる形が多い。これは弥・後・Ⅲになる。**83**～**90**・**92**は高杯になる。ただし**88**は器台になるかもしれない。この**88**は口縁部が上下に拡張し、口縁下部には鋸歯文がある。**83**は弥・後・Ｉになるが、他は後期Ⅲが多い。**89**の口縁部は、直に立ち上がって端部が外反する。**92**は口縁径が狭いが、身は深い。**91**・**94**～**96**は鉢になり、全て後期Ⅲである。**97**～**101**は製塩土器で、**97**が後期Ⅱになる他は後期Ⅲになる。**102**～**105**は器台になる。**105**の脚部には、上下２つずつの円文を直線文で結んだ文様を、２列に１周回している。この溝５の出土遺物は、溝12に比べると後期Ⅲの資料の割合が多く、そのため溝12より後出すると判断した。　（小林）

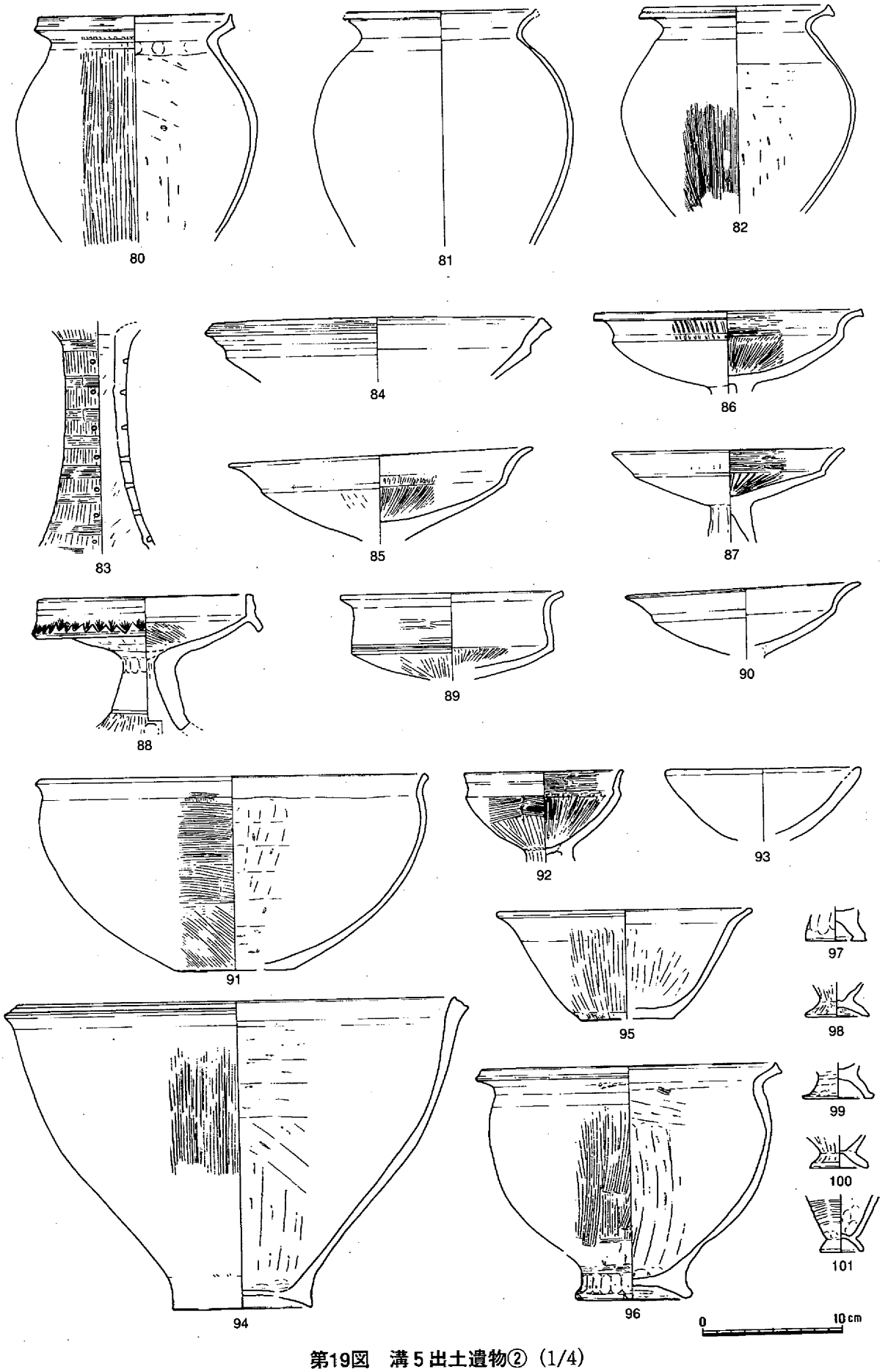


1　褐灰色粘質土
2　黄褐灰色粘質土
3　暗褐灰色粘質土
4　暗褐灰色粘質土
5　灰褐色粘質土
6　灰黄色粘質土
7　灰色粘質土
8　黒褐色粘質土（溝4）
9　暗灰褐色粘質土（溝3）
10　暗褐灰色粘質土
11　褐灰色粘質土
12　褐灰色粘質微砂

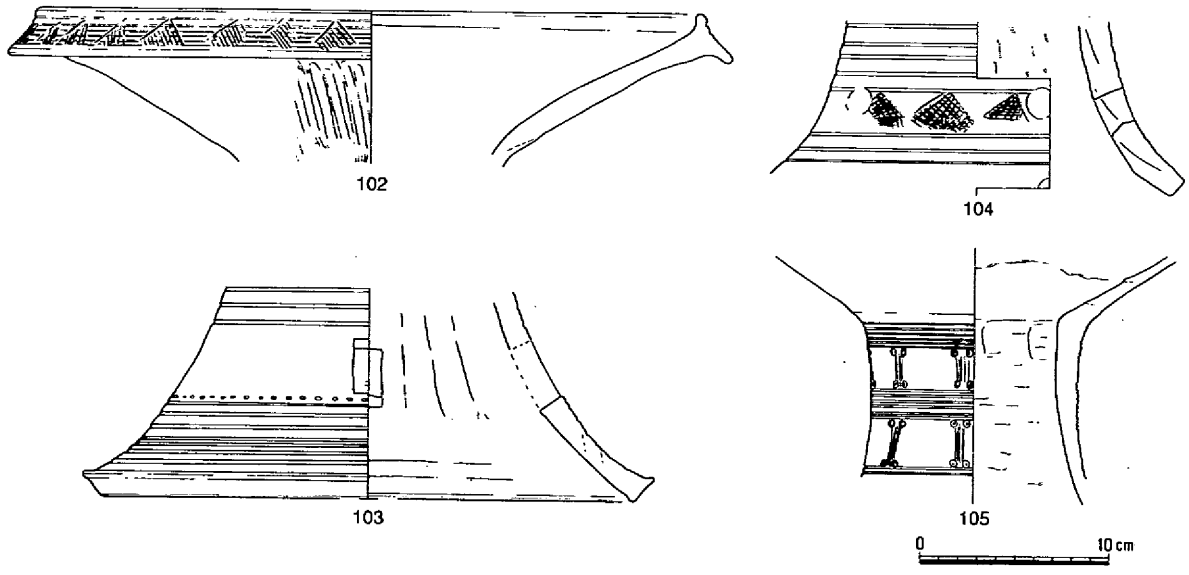
第17図　溝５土層断面（1/60）



第18図　溝5出土遺物①（1/4）



第19図　溝５出土遺物②（1/4）



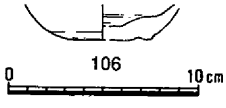
第20図　溝5出土遺物③（1/4）

第4節　東鬼川市Ⅰ調査区　中・近世の遺構・遺物

溝6（第10・11・21図）

調査区西端を北西から南東へ流下する溝で、溝7の下層で検出された。

平均的な規模は、幅1m、深さ20cm程度を測り、底面の海抜高は1.30m前後である。明褐灰色粘質微砂の埋土から須恵器**106**が出土しており、時期はこの古墳時代後半を上限とし、下限は中世に下る。



第21図　溝6出土遺物（1/4）

溝7（第10・11図）

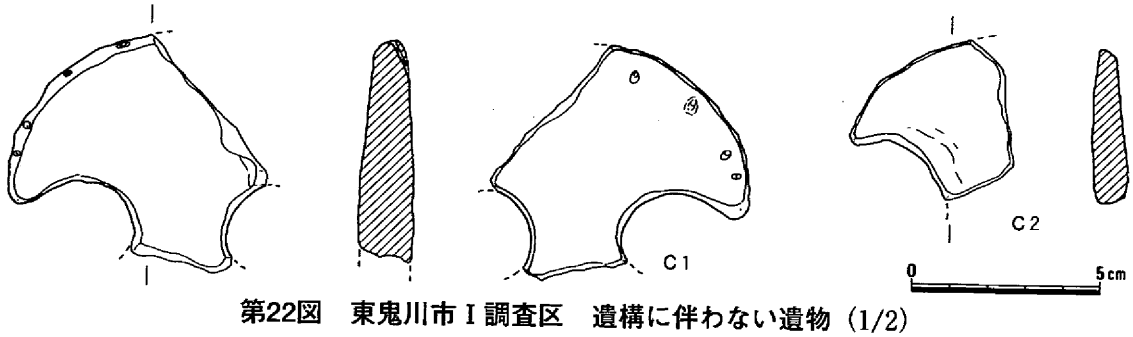
溝6の東岸を削る形で流路を重複させている。幅50cm、深さ5cm程度の規模で、明褐灰色粘質微砂の埋土からは、弥生土器・須恵器片とともに中世の土器小片が出土している。

溝8（第10・11図）

溝7の東側で平行する溝を検出した。北端では深さ20cmを測るが、形状は不安定で、南半ではほとんど消滅していた。埋土及び流路の共通性から溝6・7に近い時期と考えられる。

遺構に伴わない遺物（第22図）

分銅形土製品が2点出土している。C1は、幅10cm前後に復元される破片で、上端面から裏面へ斜めに孔が穿たれている。C2は、やや小ぶりで、貫通孔はみられない。（光永）



第22図　東鬼川市Ⅰ調査区　遺構に伴わない遺物（1/2）

第５節　東鬼川市Ⅱ調査区　調査の概要

東鬼川市Ⅱ調査区は、亀川調査区のすぐ西側に位置し、東鬼川市Ⅰ調査区から見ると東側にあたり、共に溝12を共有する。南北10m幅の調査区が、東西方向では約57m伸びる。この調査区には、今回発見された竪穴住居や建物がすべて含まれており、土器棺墓は１基以外のすべてがこの調査区から発見されている。また土壙も約200基が発見され、出土土器は、溝12出土の物を抜かすと、今回調査された全調査区出土の土器数の半数以上がこの調査区の物である。以上のことなどから見て、この東鬼川市Ⅱ調査区は上東遺跡そのものの中でも、中心的な位置付けにあると言えよう。

この東鬼川市Ⅱ調査区の遺構面での標高は、190cmを測り、これは同じ微高地内でも西鬼川市調査区の170cm、また下田所微高地の130cm、才の元微高地の120cmなどよりも高くなる。この数値は後世の削平などにより確実性には乏しいけれども、遺跡の存在した時期からこの東鬼川市Ⅱ調査区がもっとも高く安定した場所であったことが想像できる。

今回調査で検出された主な遺構の数は、竪穴住居11軒、建物２棟、土器棺10基、井戸が４基、土壙が約200基である。大半の遺構は弥生中期後半～古墳時代前期に収まり、その中でも弥生後期が最も多い。各遺構別に時期を分けると、竪穴住居は、弥生中期Ⅲ～後期Ⅰが４軒、後期Ⅱが１軒、後期Ⅲが４軒、後期Ⅳが１軒、古墳時代前期が１軒になる。建物は中期Ⅲが１棟、古墳時代後期が１棟である。土器棺墓は後期Ⅰが１基、後期Ⅱが１基、後期Ⅲが５基、古墳時代が１基である。土壙は時期の重なる物などもあり確実ではないが、中期Ⅲが12基、後期Ⅰが約40基、後期Ⅱが約80基、後期Ⅲが約30基、後期Ⅳは10基以下、古墳時代は６基である。また溝は４条発見されており、中期Ⅲ～後期Ⅰが２条、後期Ⅰ以降が２条になる。

過去２回の調査（第４図上参照）では、竪穴住居が14軒、井戸が11基、やはり土壙が多数発見されいる。今回の調査では遺構の密集地は東側によっているが、過去２回の調査では調査区の全域から検出されている。このことから遺構自体は北西方向に広がると推定され、今回の調査区は、遺構密集地の最南端付近にあたるのであろう。また今回の調査では発見されていない製塩炉などもある。

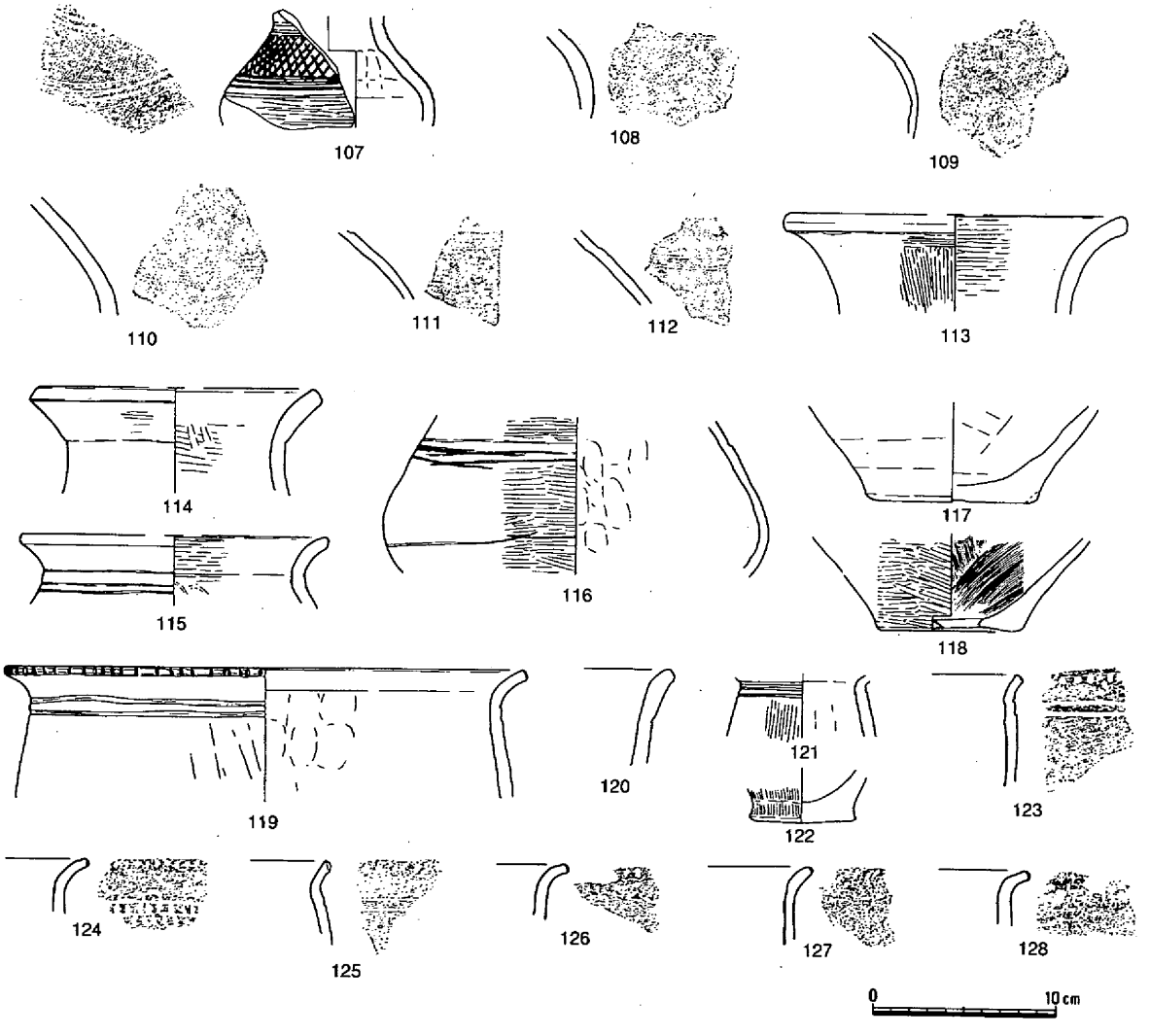
この調査区を層位的に見ると、30cm～40cmの耕作土（第24図１層）を剥ぐとすぐに遺構確認面になる。第24図の11・12・14・16層などがそうだが、この面で弥生から中世までの遺構がすべて確認できるため、すでに基本土層の上層は削平されていると推定できる。15・17・18層は弥生前期の包含層になる。調査区のほぼ中央付近に、たわみ状に確認できた。地山になるのは21・22・23層であるが、調査区東境から西へ20m付近で土壌の性質が変わる。すなわち西側が粘質で、東側が砂質である。それらの層のさらに下層は、ほとんどすべてが砂質になる。第25図で見ると、25層付近で斜め西側に落ち込んでいる。この落ち込みは５層付近で再び上がってきて、以後西側はほぼ水平堆積である。

この東鬼川市Ⅱ調査区では、調査区東境から測って27m付近から東側にほとんどの竪穴住居が集中する。この地域に一種の住居域を形成している。またここには、住居のみでなく土壙も調査区西側より多い。特に住居９北側・住居１西側には、長楕円形の土壙が多くあり、中には獣骨を出す物もある。土器棺墓は、溝12の東縁部付近に７基が集中する。また溝11の東縁部にも、土器棺墓１基と頭蓋骨を埋葬した土壙がある。この２つの溝を当時の区画溝であるとすると、その縁辺部、しかも住居がある側に土器棺墓群を形成している。またこの墓群は住居域とは区別された位置になる。　（小林）

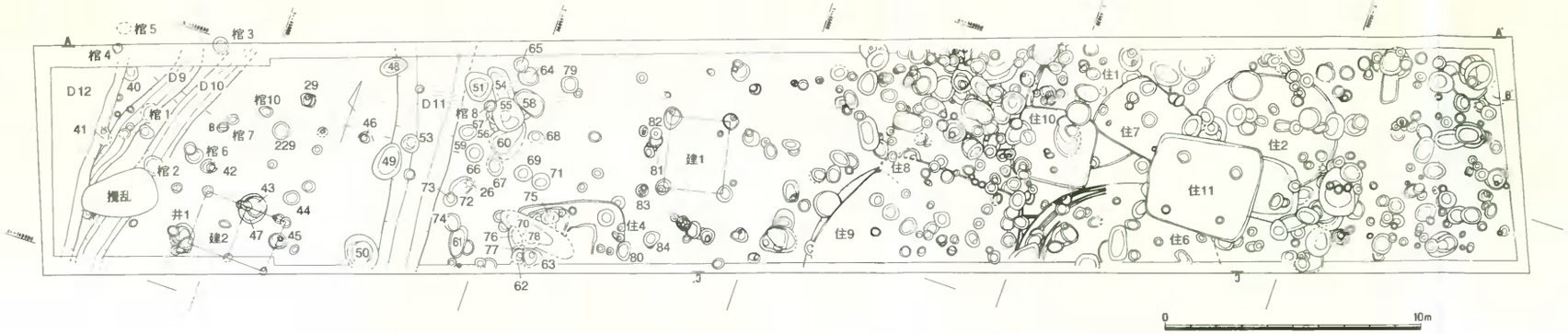
第6節　東鬼川市Ⅱ調査区　弥生・古墳時代の遺構・遺物

弥生前期包含層　（第23図、図版22－2）

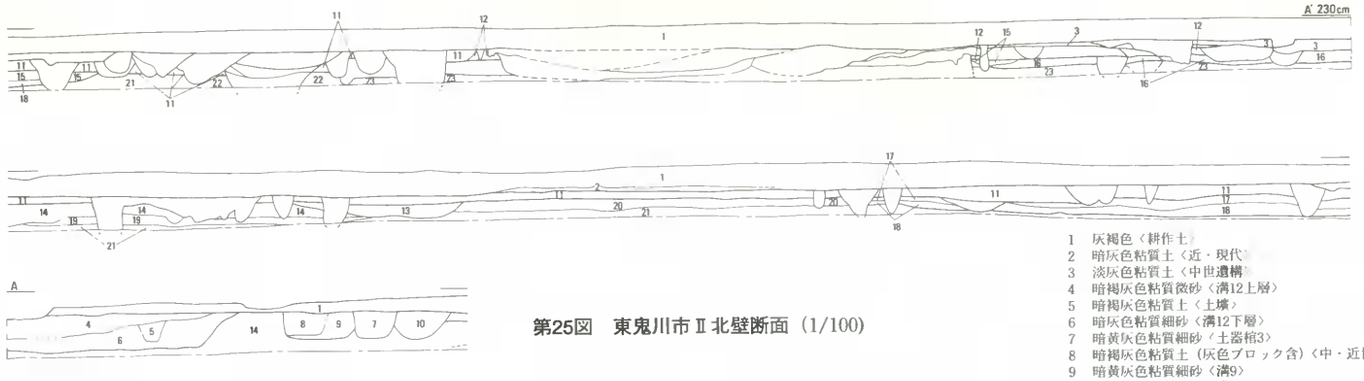
弥生前期の包含層は、東鬼川市Ⅱ調査区のほぼ中央部にたわみ状に存在する。上面の標高は約90～100cm前後で、深さは確認面から25cm前後になる。包含層を下部まで掘り下げたが、特に遺構は検出されなかった。出土遺物は、土器片が天箱で1箱ほどある。**107～118**は壺であり、**119～128**は甕である。**107**は胴部最大径が11.5cm前後の小型であるが、頸部と胴部に沈線文があり、その間をヘラ描きによる斜格子文が巡る。**108**・**109**には胴部に重弧文が巡る。**109**・**110**・**111**は削り出し突帯が存在する。**114**と**115**は口縁部であるが、**114**は頸部に段を持ち、口縁部がわずかに外方に開く。**115**は頸部に削り出し突帯が存在する。**116**は胴部であるが、頸部付近に削り出し突帯があり、また胴部最大径付近に1条の沈線文がある。甕には頸部付近に2条のヘラ描き沈線が有るもの（**119**・**121**・**123**・**125**）と無いもの（**126**・**127**・**128**）がある。**124**は頸部に2列の刻目文が巡る。これらは、**114**と**120**がやや古い様相を示す他は、弥・前・Ⅱの時期になる。　（小林）



第23図　東鬼川市Ⅱ前期包含層（1/4）

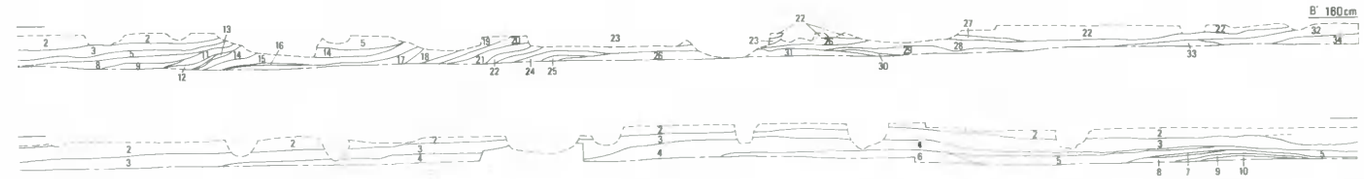


第24図　東鬼川市Ⅱ調査区遺構配置（1/200）



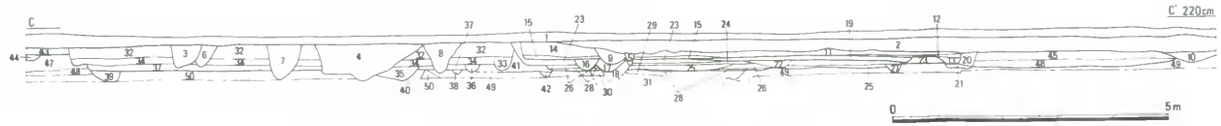
第25図　東鬼川市Ⅱ北壁断面（1/100）

1　灰褐色〈耕作土〉
2　暗灰色粘質土〈近・現代〉
3　淡灰色粘質土〈中世遺構〉
4　暗褐灰色粘質微砂〈溝12上層〉
5　暗褐灰色粘質土〈土壙〉
6　暗灰色粘質細砂〈溝12下層〉
7　暗黄灰色粘質細砂〈土器棺3〉
8　暗褐灰色粘質土（灰色ブロック含）〈中・近世の土壙〉
9　暗黄灰色粘質細砂〈溝9〉
10　暗黄灰色粘質細砂〈溝10〉
11　暗褐灰色粘質土〈弥生後の堆積土〉
12　灰褐色粘質微砂〈弥生後の堆積土〉
13　暗黄灰色粘質細砂〈溝11〉
14　暗黄灰色粘質細砂〈弥生中～後期の堆積土〉
15　黄褐色粘質細砂〈弥生前期包含層〉
16　暗灰黄色粘質細砂〈弥生中～後期の堆積土〉
17　黄褐色粘質微砂〈弥生前期包含層〉
18　明黄褐色粘質粗砂〈弥生前期包含層〉
19　明黄灰色粘質粗砂〈弥生以前の堆積土〉
20　明黄褐色粘質粗砂〈弥生以前の堆積土〉
21　暗黄灰色砂質土〈地山〉
22　暗灰色砂質土〈地山〉
23　灰色砂質土〈地山〉



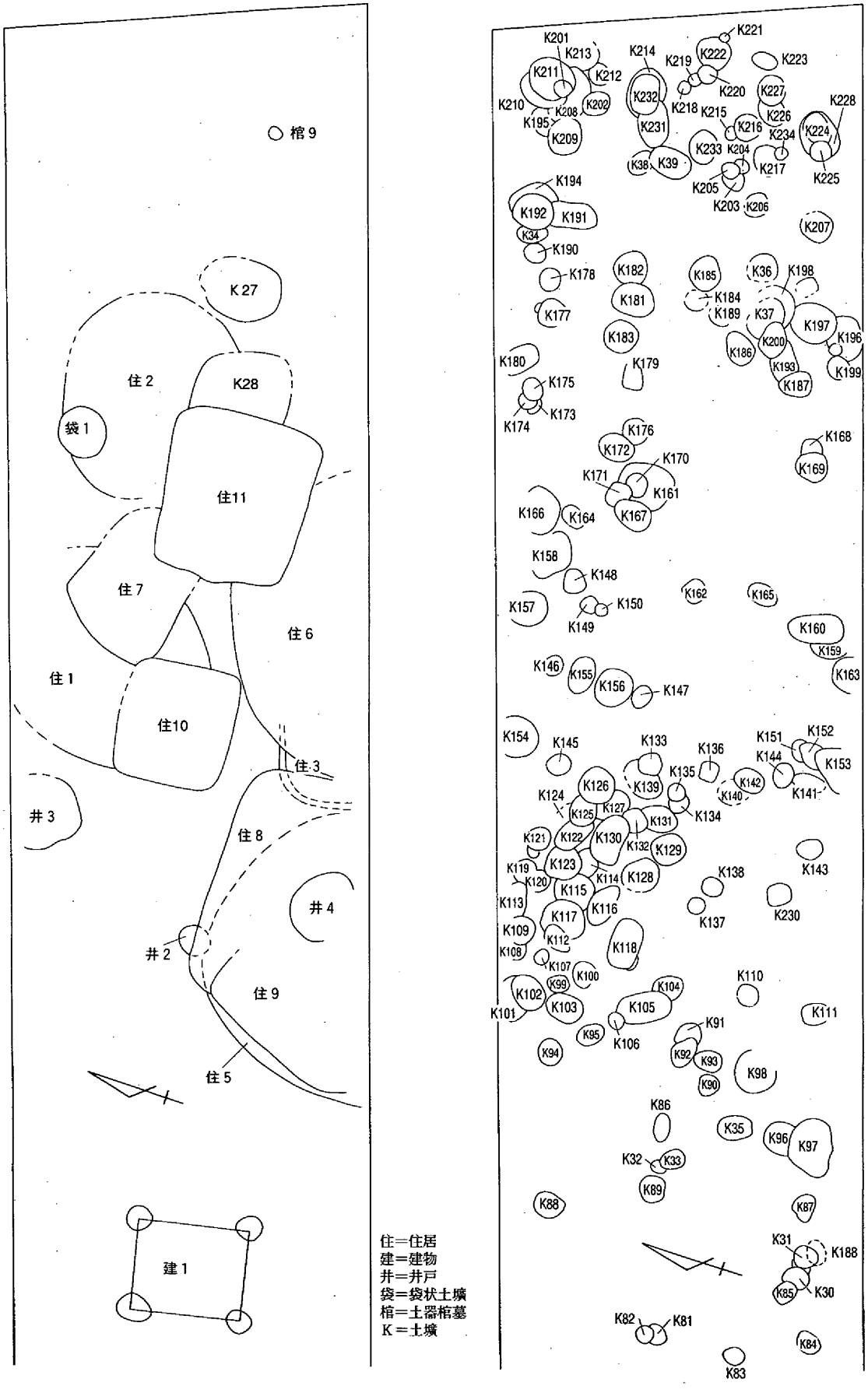
第26図　東鬼川市Ⅱ中央断面（1/100）

1　黒褐色粘質細砂
2　暗灰色粘質細砂
3　灰褐色粘質粗砂
4　灰黄色粘質粗砂
5　黄灰色粘質微砂
6　灰黄色砂質土
7　暗灰色粘質微砂
8　黄灰色粘質微砂
9　暗灰褐色粘質微砂
10　黄灰色粘質微砂
11　褐灰色粘質細砂
12　暗褐灰色粘質微砂
13　灰黄色粘質細砂
14　暗灰褐色粘質細砂
15　灰黄褐色粘質微砂
16　暗褐灰色粘質微砂
17　褐灰色粘質微砂
18　暗褐灰色粘質微砂
19　暗灰褐色粘質細砂
20　暗褐灰色砂質土
21　褐灰色粘質細砂
22　暗灰褐色粘質細砂
23　暗灰黄色粘質微砂
24　灰褐色粘質微砂
25　暗灰褐色粘質微砂
26　暗褐灰色砂質土
27　灰褐色砂質土
28　灰黄色粘質微砂
29　暗褐灰色粘質微砂
30　黄灰色粘質細砂
31　暗灰褐色砂質土
32　褐灰色粘質細砂
33　褐灰色粘質微砂
34　灰黄色砂質土



第27図　東鬼川市Ⅱ南壁断面（1/100）

1　灰色粘質土〈耕作土〉
2　白灰色粘質微砂〈中世遺構〉
3　暗灰褐色粘質微砂〈土壙〉
4　暗灰褐色粘質微砂〈土壙〉
5　暗黄灰色粘質土〈土壙〉
6　暗灰褐色粘質微砂〈土壙〉
7　暗灰褐色粘質微砂〈土壙〉
8　暗黄灰色粘質微砂〈土壙〉
9　黄灰色粘質土〈土壙〉
10　暗褐灰色粘質土〈土壙〉
11　暗褐灰色粘質土〈住居8覆土〉
12　黄褐色粘質微砂〈住居8床面〉
13　暗褐色粘質土〈住居内土壙〉
14　暗褐灰色粘質微砂〈住居8覆土〉
15　暗黄灰色粘質微砂〈住居8床面〉
16　褐灰色粘質土〈住居内土壙〉
17　暗褐色粘質土〈住居内土壙〉
18　暗赤褐色粘質土〈土壙〉
19　暗黄褐色粘質微砂〈住居8床面〉
20　暗赤褐色粘質土〈住居5〉
21　暗黄灰色粘質微砂〈住居5〉
22　暗灰色粘質土〈住居5覆土〉
23　暗褐灰色粘質土〈住居5覆土〉
24　暗黄灰色粘質微砂〈住居5床面〉
25　暗黄灰色粘質細砂〈住居5床面〉
26　暗褐色粘質土〈住居5覆土〉
27　暗灰褐色粘質土〈住居5壁体溝〉
28　暗黄灰色粘質微砂〈住居5床面〉
29　褐灰色粘質土
30　暗赤灰色粘質土〈土壙〉
31　暗褐色粘質土〈井戸4〉
32　暗灰褐色粘質微砂〈住居6覆土〉
33　暗赤灰色粘質微砂〈住居6壁体溝〉
34　暗灰色粘質細砂〈住居6床面〉
35　褐灰色粘質微砂〈住居内土壙〉
36　暗赤灰色粘質微砂〈住居6壁体溝〉
37　暗褐色粘質微砂〈住居6覆土〉
38　暗赤灰色粘質微砂〈住居6壁体溝〉
39　暗灰色粘質粗砂〈土壙〉
40　黄灰色粘質粗砂〈土壙〉
41　暗褐色粘質微砂〈住居6覆土〉
42　暗黄灰色粘質土〈住居6壁体溝〉
43　暗灰褐色粘質細砂
44　暗褐色粘質微砂〈土壙〉
45　黄灰色粘質細砂〈弥生前期包含層〉
46　淡灰褐色粘質土
47　淡灰色砂質土
48　暗灰色粘質粗砂
49　淡青灰色粘質細砂〈地山〉
50　灰色砂質土〈地山〉



第28図　東鬼川市Ⅱ遺構番号

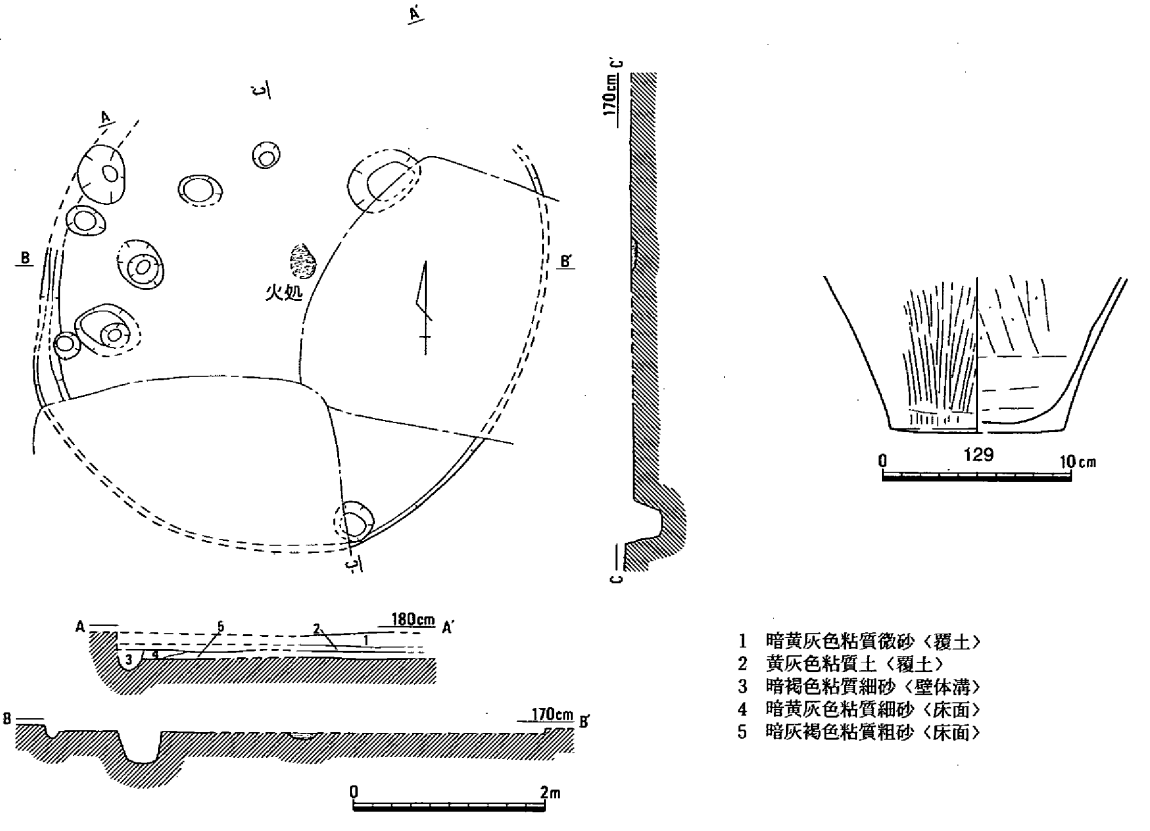
弥生中・後期、古墳時代

今回の調査で確認された竪穴住居や建物などの遺構は、すべてがこの東鬼川市Ⅱ調査区から検出され、すべてが弥生時代中・後期と古墳時代の時期になる。井戸や土壙なども、他の調査区の他の時代をはるかに凌ぐ。また出土遺物にしても、今回の調査では天箱で 550箱の土器が出土したが、その内８割近くがこの調査区から出土し、そのほとんどが弥生中・後期と古墳時代の遺物である。これらのことからこの調査区が、上東遺跡の中心をなした地区と言え、また上東遺跡の最も栄えた時代は弥生時代中期・後期から古墳時代にかけてである、と言えよう。

竪穴住居１（第29図、図版４－２）

竪穴住居１は、調査区中央部の北側に位置し、住居の北側 1/8は調査区外になる。住居の東側は弥生後期Ⅲの竪穴住居７に、南側は後期Ⅳの竪穴住居10に切られる。また北西側で後期Ⅰの土壙154に、北東側で後期Ⅱの土壙157などに切られるなど、近隣するすべての遺構より最も古い時期の住居になる。住居の規模は、長軸長約560cm、短軸長が約500cmで、形状は楕円形を呈する。床面の上面は標高154cm付近で平行している。床面自体の厚さは６～７cmで、暗黄灰色を呈する。確認できた床面は、１面だけであったが、住居の平面形状が歪な形をしているため、あるいは数回の建て替えがあったのかもしれない。

住居の壁体溝は、西側のみで確認された。溝の幅は、20～25cmを測る。深さは床面から20cm前後である。柱穴は、住居の北側と西側のみから確認されている。住居の壁から内側に70～80cm付近にあり、深さは床面からおおむね35cm前後になる。出土遺物として、**129**があり、甕か壺の底部である。白灰色の胎土で、外面はヘラミガキされる。弥・中・Ⅲのものであり、住居の時期も同じである。　（小林）



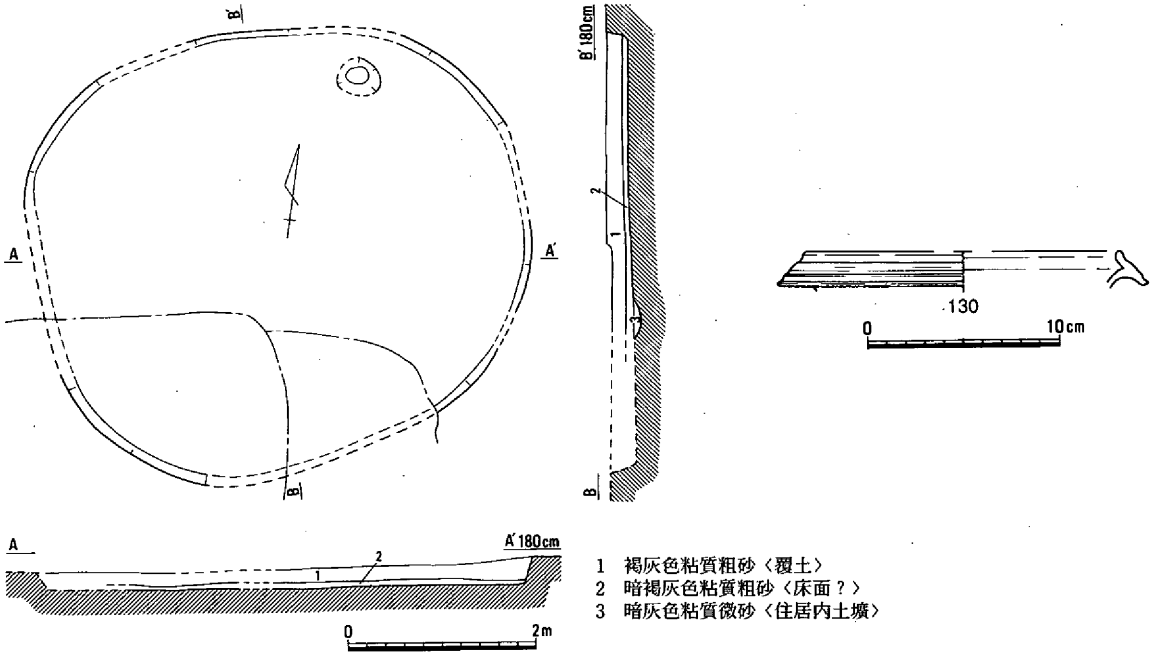
第29図　竪穴住居１（1/80）・出土遺物（1/4）

竪穴住居２（第30図、図版４－３）

竪穴住居２は、調査区西側部のやや北側に位置する。住居の南側では古墳時代の竪穴住居11や弥・後・Ⅲの土壙28に切られ、北西側では弥・後・Ⅰの袋状土壙１に切られる。また土壙161・172・176・179・181・182・183など、弥生後期になる遺構に悉く切られるなど、近隣する遺構より古い住居であることがわかる。今回発見された住居の中では、最も東側に位置する。

住居の規模は、長軸長約525cm、短軸長480cmで、楕円形を呈する。床面と思われるのは２層であるが、砂質であるため本来床面にならない可能性がある。この２層の上面は、標高158cm付近で平行する。床面は１面しか確認できなかったが、住居１同様平面形状が歪なため、数回の立て替えがあったのかもしれない。住居の基盤自体が砂質なため、壁体溝は確認できず、また柱穴も北東側に１つのみが検出された。

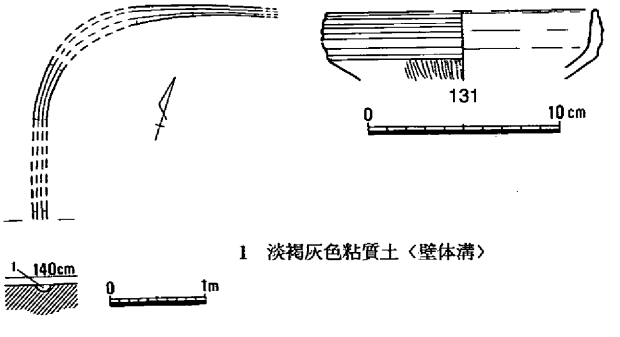
出土遺物は、土器片が数片しかなく、**130**は壺か甕の口縁部になる。口縁端面には擬凹線が２条有り、胎土は白灰色を呈する。弥・中・Ⅲの時期になる。住居自体の時期も、他の遺構の切り合い関係なども加味すれば、弥・中・Ⅲもしくは弥・後・Ⅰの古い時期になる。　（小林）



第30図　竪穴住居２（1/80）**・出土遺物**（1/4）

竪穴住居３（第31図、図版５－１）

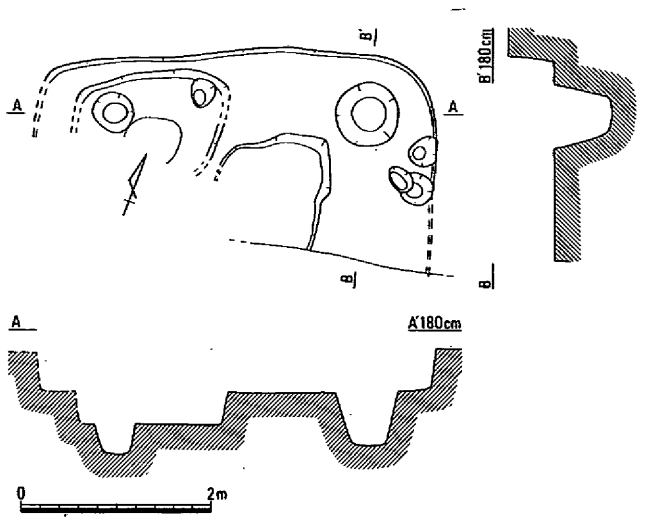
調査区中央部の東南側に位置する。住居の西側は住居８に切られ、東側は住居６に切られているため、壁体溝のみの確認にとどまった。その壁体溝も南側半分は調査区外になり、東側では確認でず、本来の 1/4の残存率である。壁体溝の確認面は、標高132cmであり、深さは８cmを測る。出土遺物には**131**があり、高杯の口縁部で、弥・中・Ⅲになる。　（小林）



第31図　竪穴住居３（1/80）**・出土遺物**（1/4）

竪穴住居４（第32図、図版５－２）

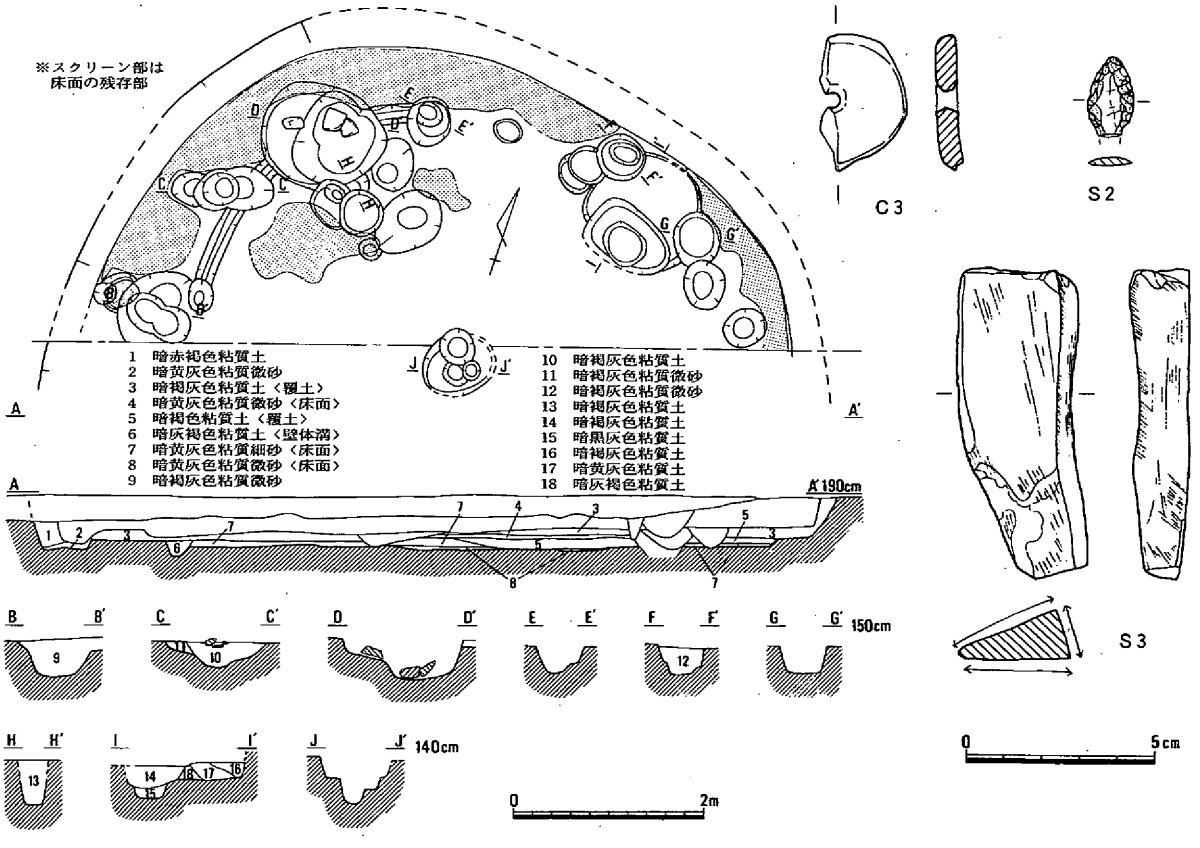
調査区中央部の南西側に位置する。住居から西へ３ｍに溝11があり、今回発見された住居の中で最も西よりになる。住居の南半分は調査区外となる。住居の西側は土壙62・63・70などに切られる。住居の平面形状は隅丸方形で、１辺は420cmになる。床面は標高125cm付近で平行するが、住居の北東側には160cm前後の掘込みがある。柱穴は４本あったと思われるが、検出できたのは北側の２本のみである。住居の時期は切り合い関係から、弥生後期になると思われる。　（小林）



第32図　竪穴住居４（1/80）

竪穴住居５（第33・34図、図版５－３、23－１）

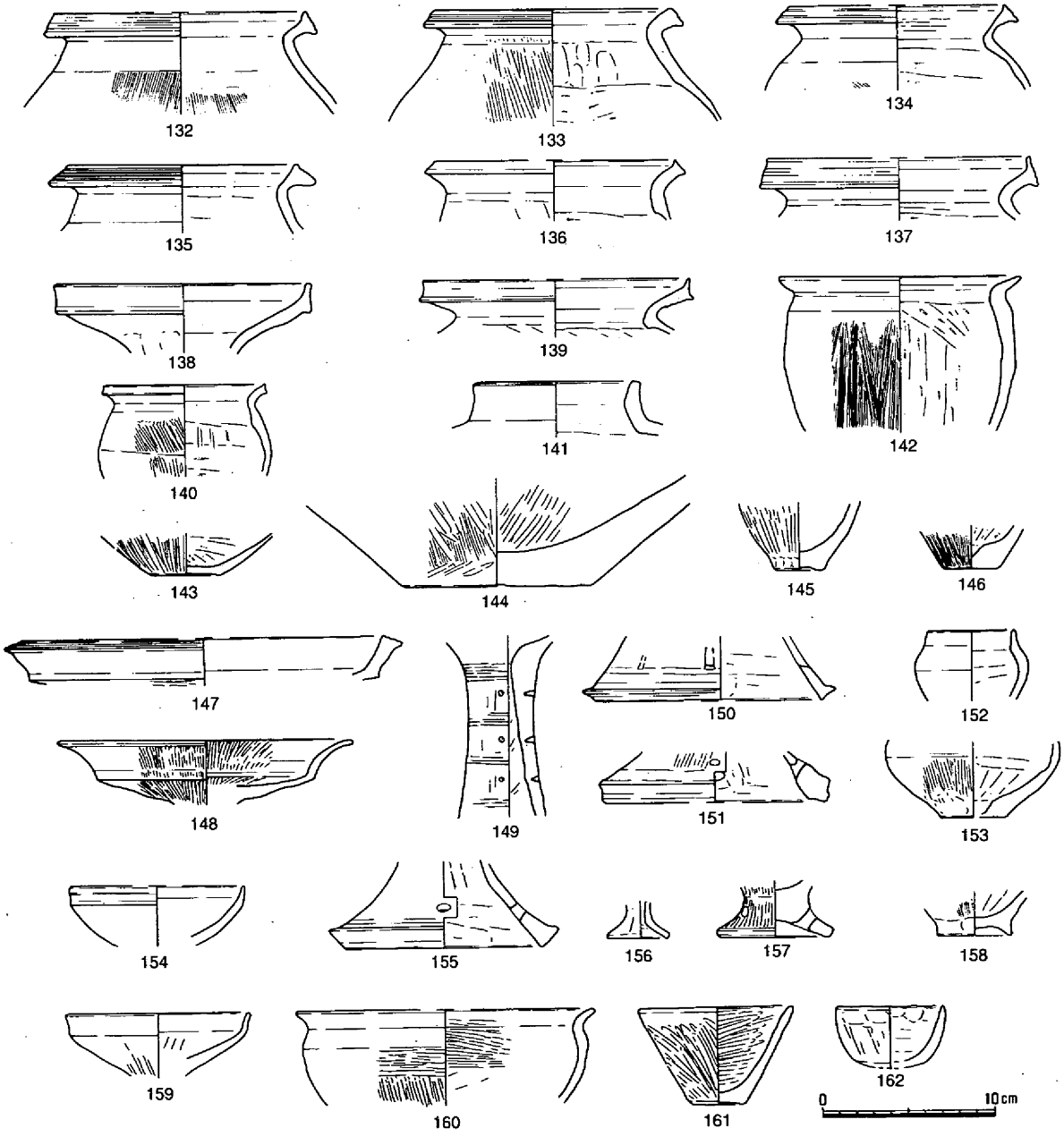
竪穴住居５は、調査区中央部の南側に位置する。住居の南半分は、調査区外になり調査は行われていない。他の遺構との切り合い関係は、井戸４を切り、弥生後期Ⅲ・Ⅳになる竪穴住居７・８に切られる。住居の規模は、直径約800cmで、平面形状は円形である。住居の床面は４層と７・８層の２面が確認されている。壁体溝は住居の壁から内側へ120cm付近とかなり離れた地点にあり、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅなどの柱穴に切られている。この住居は、床面が２面あることや、内側にある壁体溝の存在から、最低でも２回の建て替えがあったものと思われる。床面の高さは、４層上面が標高144cmで平行



第33図　竪穴住居５（1/80）・**出土遺物**（1/2）

し、７層が138cmで平行する。断面の観察から、内側の壁体溝に伴う層が古く、外側に行くにつれて新しくなることがわかる。柱穴は、Ｈ・Ｉが内側の壁体溝に伴うもので、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇなどが外側に伴うものと思われる。柱穴の深さは、内側に伴うものが床面から48cmで、外側が床面から30～40cmを測る。外側になるＥには、礎石がある。またＪは中央穴になる。

出土遺物には以下のものがある。**Ｃ３**は土製の紡錘車である。**Ｓ２**は石鏃で、**Ｓ３**は流紋岩製の砥石であり、３面を使用している。**132～142**は壺・甕の口縁部である。**132～135**は弥・後・Ｉになり、**136**は後期Ⅱ、**137**は後期Ⅲ、**138**は後期Ⅳになる。**147～151・154・155**は高杯で、**147・149・150**は後期Ｉ、**148・151・155**は後期Ⅱ、**154・159**は更に新しい要素がある。**160～162**は鉢で、**161**はほぼ完形である。**152・153**はミニチュア土器である。これらの土器は後期Ｉ～後期Ⅳまでの土器があるが、Ｉ・Ⅱが多く、中でもＩが主流になる。　（小林）

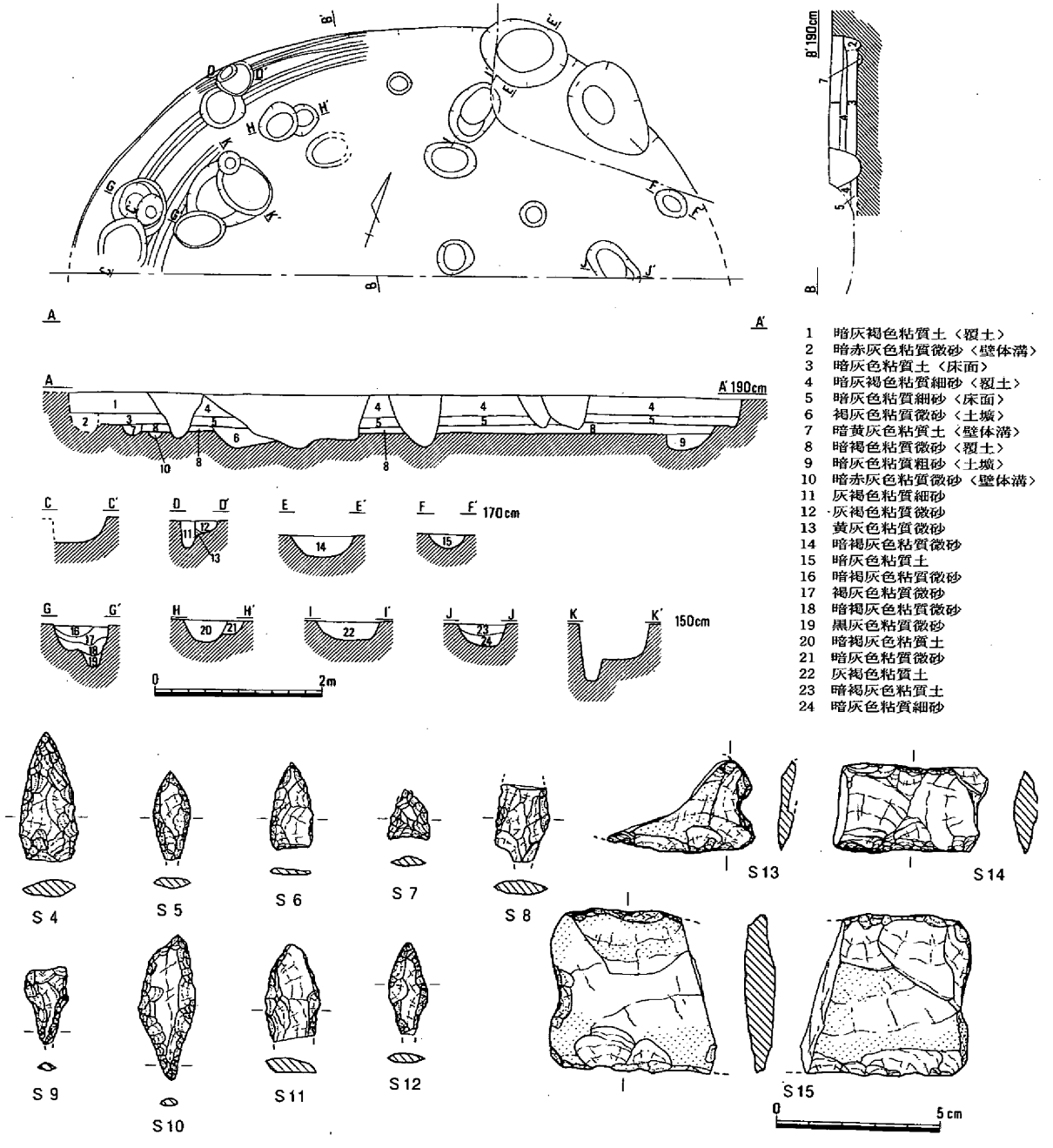


第34図　竪穴住居５出土遺物（1/4）

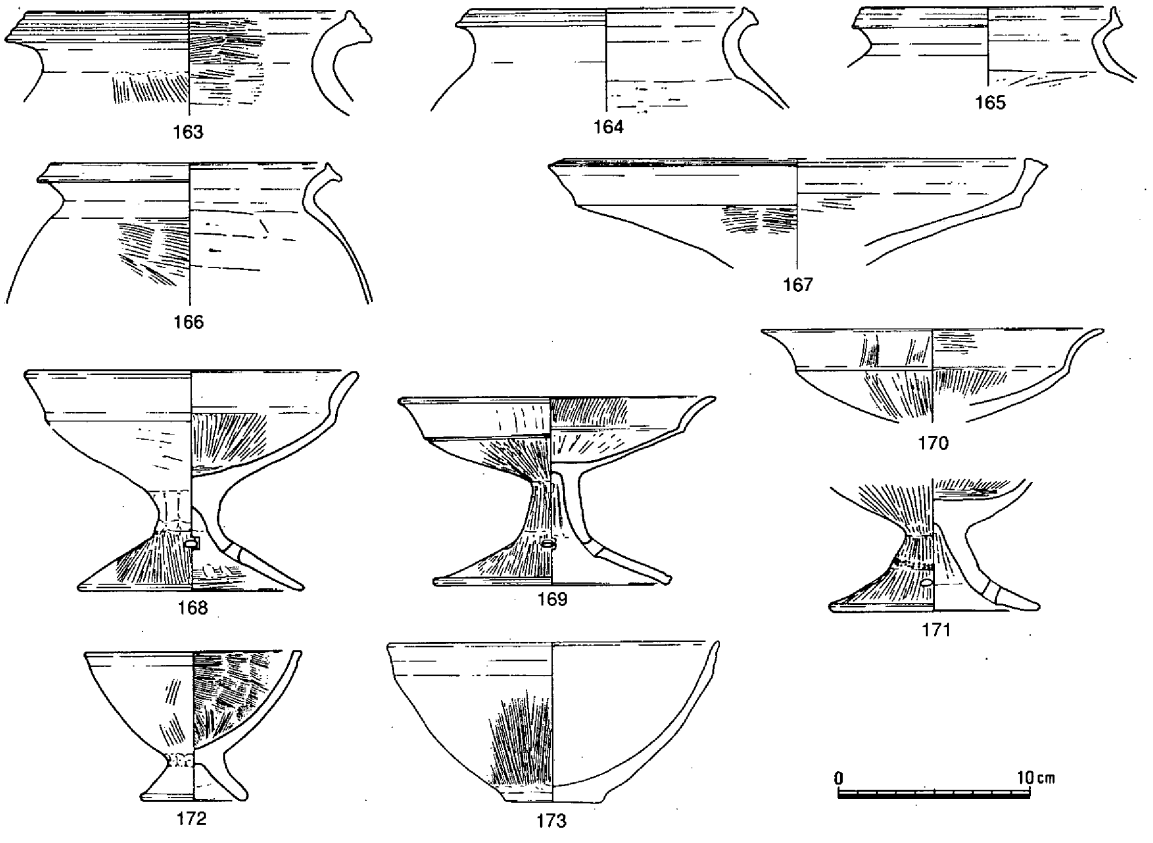
竪穴住居６（第35・36図、図版６－１、23－２）

竪穴住居６は、調査区東側部の中央よりの南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は、住居の西側で弥・後・Ⅳの住居８に切られ、中期Ⅲの住居３を切る。北東側では古墳時代の住居11に切られる。住居の南半分は調査区外のため、調査はしていない。住居の規模は、直径790～ 800cm前後で、平面形状は円形を呈する。住居が作られた基盤層は西半分は粘質であるが、東半分は砂質であり、壁体溝や柱穴が確認しにくい。床面は３・５層と８層の２面が確認でき、それぞれ標高160cmと146cmで平行する。壁体溝は３本が検出されており、断面の観察から、外側にいくほど新しくなる。柱穴は、Ｃ・Ｄ・Ｅ・ＦとＧ・Ｈ・Ｉ・ＪとＫなどがそれぞれ壁体溝に伴うと思われる。

住居６は、今回検出された住居の中で最も多く石器が発見された。**Ｓ４～８・11・12**は石鏃であり、**Ｓ８・12**には舌がある。**Ｓ９・10**は石錐、**Ｓ13～15**は石包丁で**Ｓ15**は他よりも大型である。土



第35図　竪穴住居６（1/80）・出土遺物（1/2）



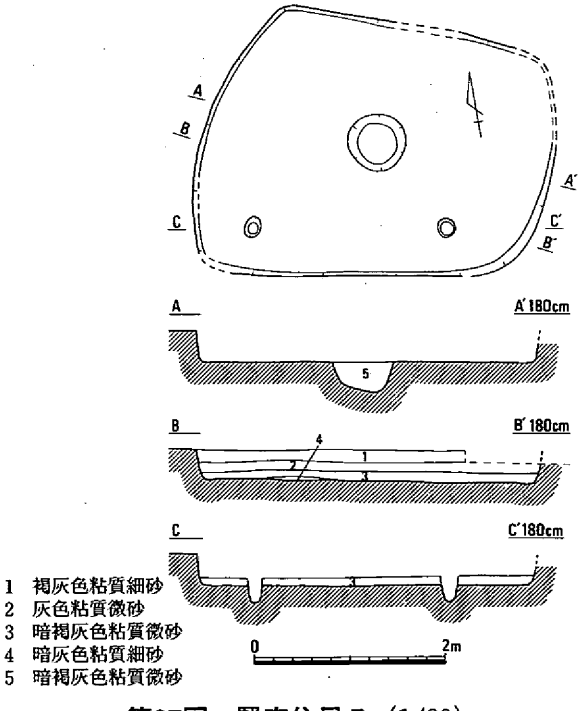
第36図　竪穴住居６出土遺物（1/4）

器では、**163**～**166**は甕で、**163**・**164**は弥・後・Ⅰ、**166**は後期Ⅱ、**165**は後期Ⅲである。**167**～**171**は高杯で、**167**は後期Ⅰ、**168**～**171**は後期Ⅱである。**172**・**173**は鉢で、**172**には台が付く。土器の時期は、後期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの幅があるが、Ⅰ・Ⅱが多く、中でも主流は後期Ⅱである。　（小林）

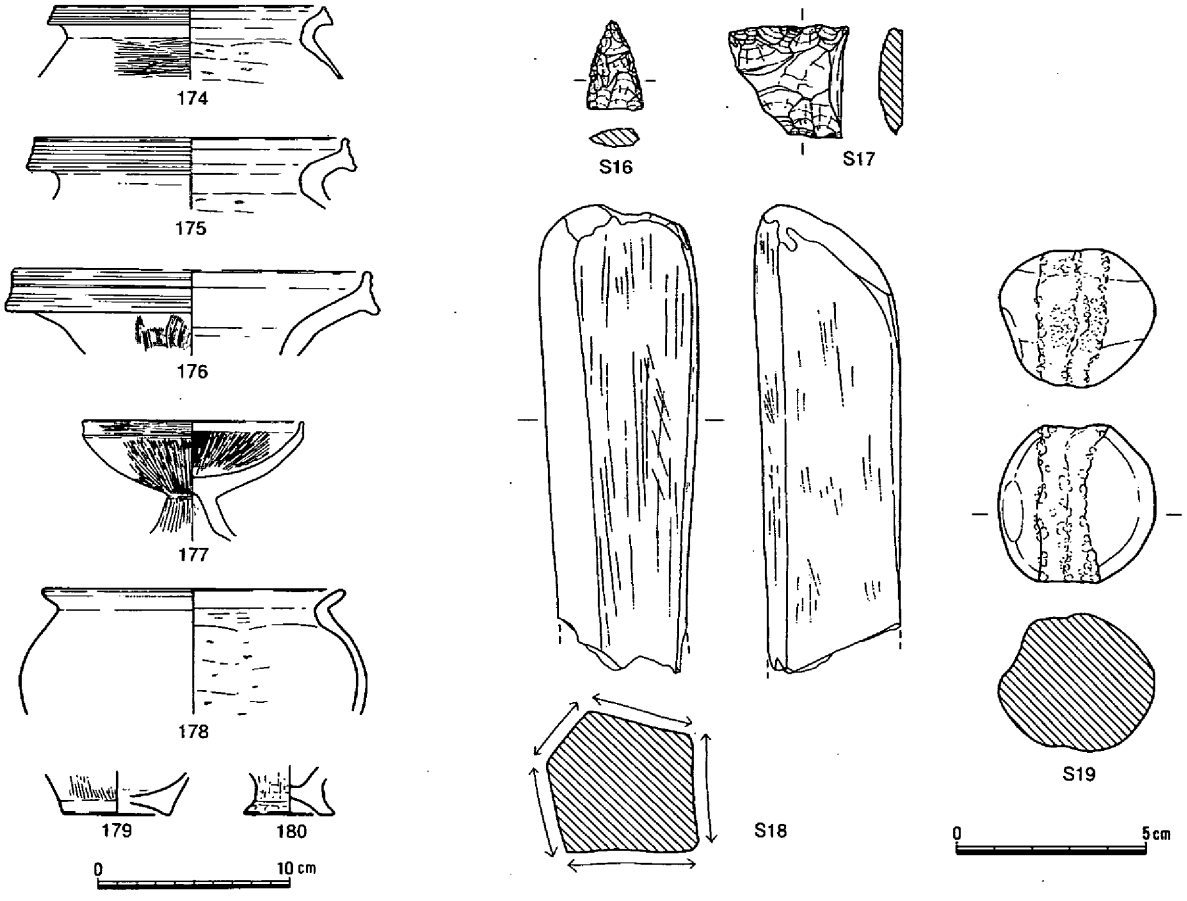
竪穴住居７（第37・38図、図版６－２）

竪穴住居７は、調査区東側部のやや中央よりに位置する。他の遺構との切り合い関係は、住居の西側で弥・後・Ⅲの住居９に、南東側で古墳時代の住居11に切られ、西側で中期Ⅲの住居１を切る。住居の規模は、長辺が350cm、短辺が250～290cmで、平面形状は台形である。住居の構造は、幅60cmの中央穴があり、南側に２本の柱穴があるが、北側では発見できなかった。床面に相当する３層は、砂質ではあるが、標高140cmで平行する。

出土遺物は石器が多く、**Ｓ16**は石鏃、**Ｓ17**はスクレイパー、**Ｓ18**は流紋岩製の砥石で５面使用している。**Ｓ19**は花崗斑岩製の石錘である。土器では、甕**175**・壺**176**・高杯**177**など後期Ⅲのものが多く、住居の時期も後期Ⅲになる。　（小林）



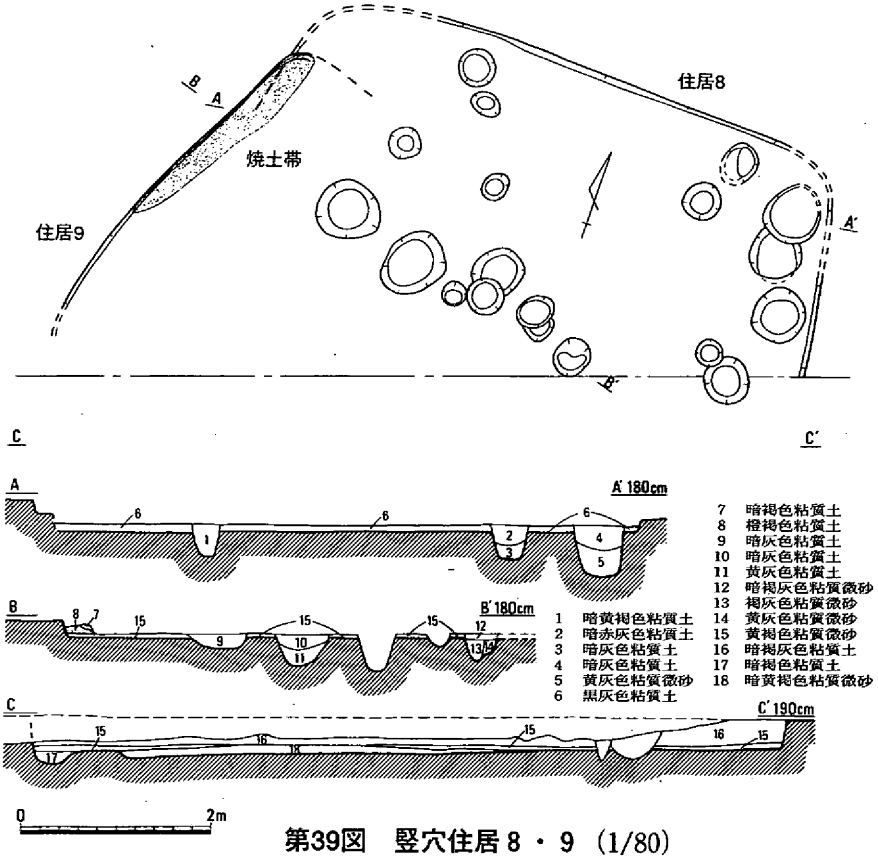
第37図　竪穴住居７（1/80）



第38図　竪穴住居７出土遺物（1/4・1/2）

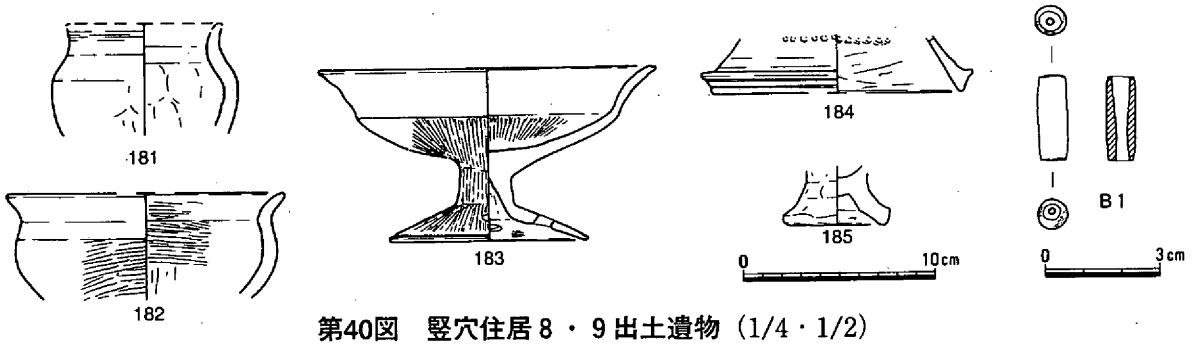
竪穴住居8・9（第39・40図）

調査区中央部の南側に２つが連なっている。２つの住居の関係では、住居９が新出する。住居の規模は、両方とも１辺が620～630cm前後になり、平面形状は方形になるものと思われる。床面は２つの住居共にほぼ同じレベルで、標高160cm前後で平行する。どの穴が柱穴になるのかもはっきりしないが、４・５層は住居８の柱穴になりそうである。住居９の西壁ぞいには、25～30cm前後の焼



第39図　竪穴住居８・９（1/80）

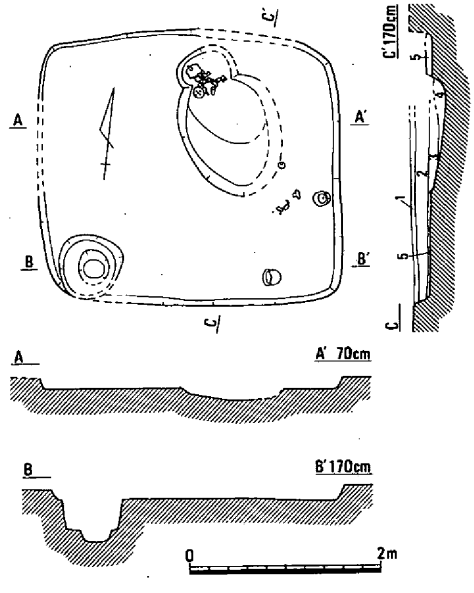
土帯がある。下部構造などは存在しない。出土遺物には、**Ｂ１**が碧玉製の管玉で、住居９から出土する。**181**は無頸壺で、**182**は鉢、**183**・**184**は高杯である。**184**は円孔が列をなしている。土器の時期幅は後期Ⅲ・Ⅳとあるが、後期Ⅲが住居８で、Ⅳが住居９になるのかもしれない。　（小林）



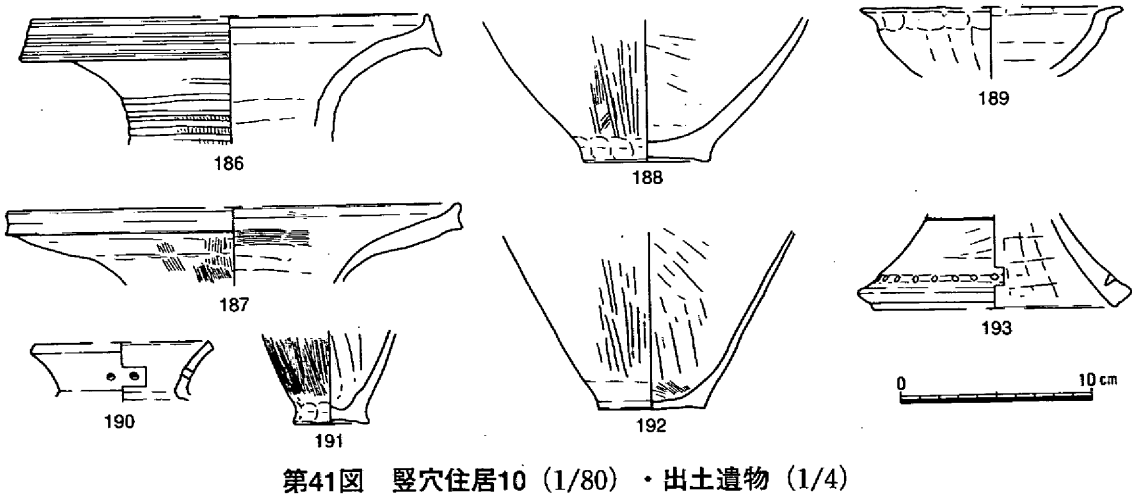
第40図　竪穴住居８・９出土遺物（1/4・1/2）

竪穴住居10（第41・42図、図版６－３、23－３）

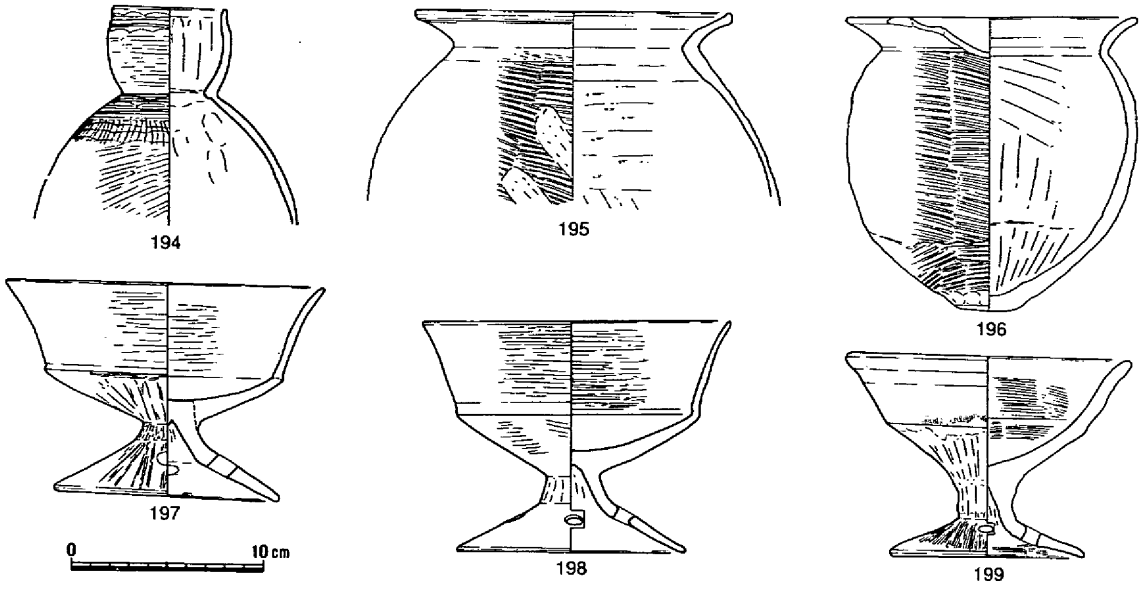
竪穴住居10は、調査区中央部よりやや東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は、住居の北東側で弥・中・Ⅲの住居１や後期Ⅲの住居７を切る。住居の規模は長辺320cm、短辺290cmで、平面形状は隅丸方形である。床面は５層であり、５層上面は標高142cmで平行する。柱穴は、住居の南西隅の壁際ぎりぎりに１本のみ検出される。また住居の中央より北東側では、床面を切る形で土壙があり、土器が多量に出土する。出土土器は、それ以外に住居の南東側で、完形に近い後期Ⅳの土器が床面直上に置いてあった。出土遺物としては、**186**～**193**が弥・後・Ⅱ～Ⅲの資料になる。**194**は直口壺で、口縁部と頸部付近に列点文がある。**195**・**196**は甕で胴部にはタタキ目が残る。この３点は、畿内系の資料である。**197**～**199**は高杯で、いずれも短脚である。この６点は弥・後・Ⅳになり、住居の時期も同じであろう。　（小林）



1　暗褐灰色粘質土〈覆土〉
2　暗灰褐色粘質土〈覆土〉
3　暗褐色粘質土〈住居内土壙〉
4　灰褐色粘質微砂〈住居内土壙〉
5　黄灰褐色粘質土〈床面〉



第41図　竪穴住居10（1/80）**・出土遺物**（1/4）

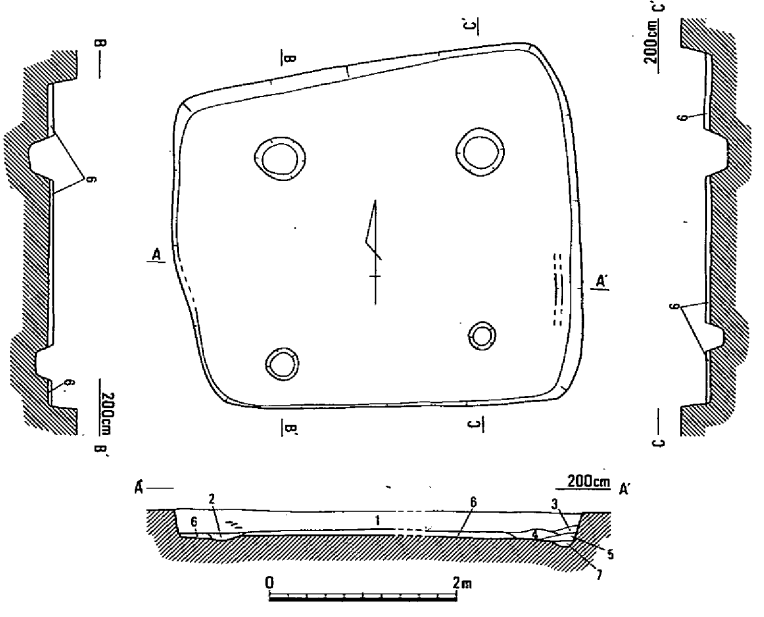


第42図　竪穴住居10出土遺物（1/4）

竪穴住居11　（第43・44図、図版７－１、23－４）

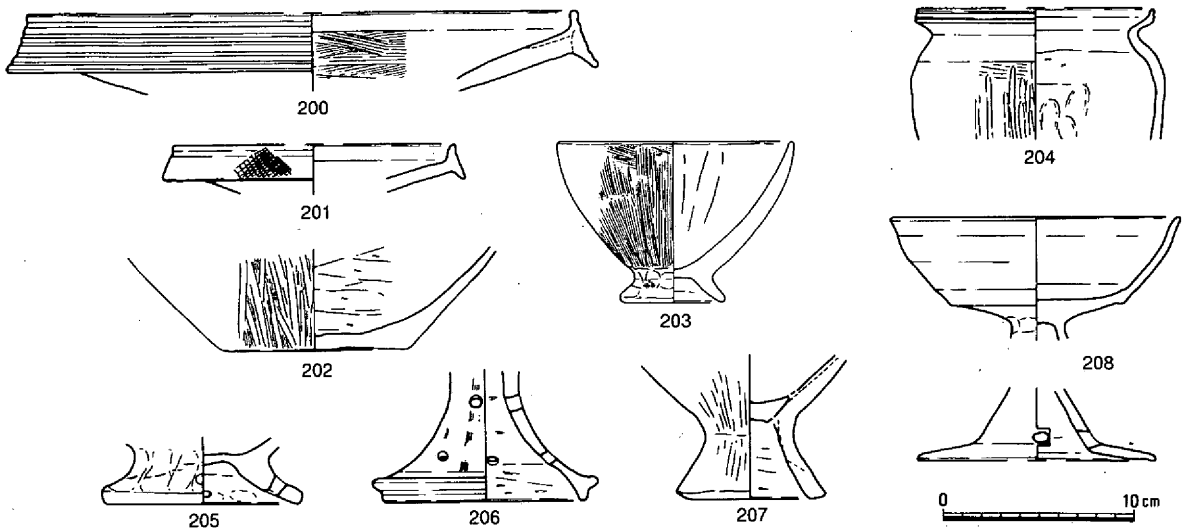
竪穴住居11は、調査区東側部のやや中央よりに位置する。他の遺構との切り合い関係は、弥・中・Ⅲの住居２、後期Ⅱの住居６、後期Ⅲの住居７をはじめ、近接する土壙をすべて切る。住居の規模は、長辺が430cm、短辺が380～400cmで、平面形状は台形を呈する。床面は砂質ではあるが、６層が相当すると思われ、６層の上面は標高152cmで平行する。柱穴は４本が均等に検出され、この住居の床面が１面であったことも併せて、建て替えが無かったものと思われる。柱穴の規模は35～60cmで、すべてが円形を呈する。深さは床面から25cm前後である。壁体溝は東側の断面で検出されるが、住居の基盤層が砂質なため、他では発見出来なかった。

出土遺物には以下のものがある。**200**～**207**までは、**206**が弥・後・Ⅱの古相になる以外、後期Ⅲ・Ⅳになる。**201**の口縁端部には格子状の線刻がある。**203**は台付き鉢の完形になる。しかし床面直上から**208**の高杯が出土し、この１点は川入大溝上層と呼ばれる型式で、古墳時代前期後葉の資料である。住居11の時期は、住居自体が近隣の遺構をすべて切る状況や**208**の存在などから、古墳時代前期後葉になると思われる。　（小林）



1　暗褐灰色粘質粗砂〈覆土〉
2　暗褐色粘質微砂〈住居内土壙〉
3　暗褐色粘質微砂
4　暗褐色粘質粗砂
5　暗オリーブ褐灰色粘質粗砂
6　暗灰褐色粘質微砂
7　暗オリーブ褐色粘質粗砂〈壁体溝〉

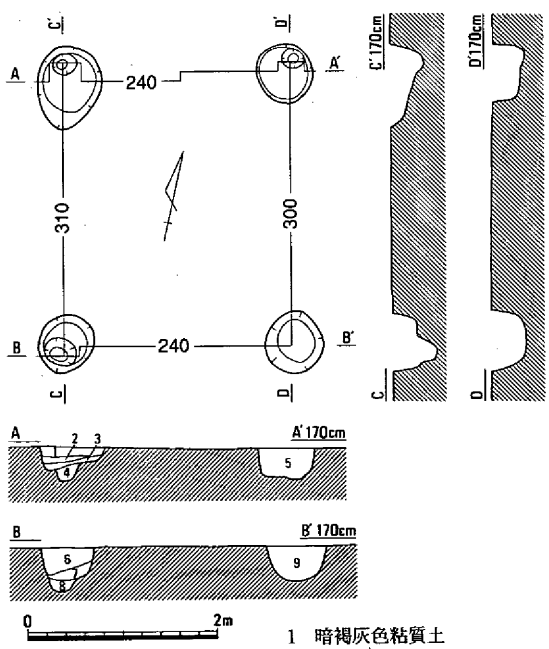
第43図　竪穴住居11（1/80）



第44図　竪穴住居11出土遺物（1/4）

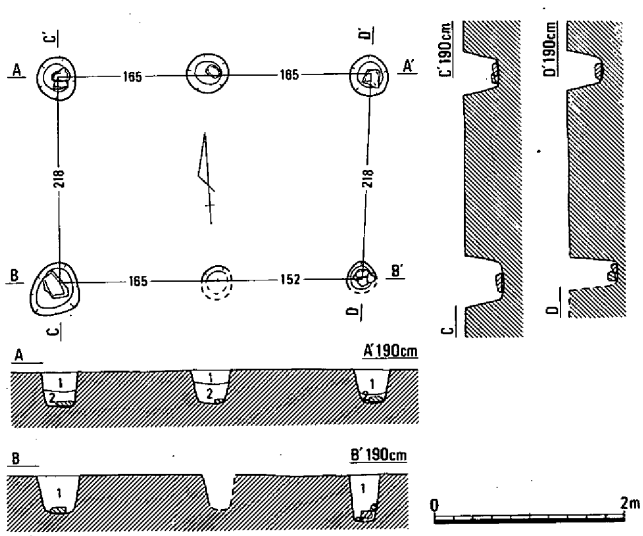
建物１（第45図、図版７－２）

建物１は調査区中央部のやや西側に位置する。南西方向２ｍ付近に竪穴住居４がある。他の遺構との切り合い関係はないが、周りには弥・中・Ⅲの土壙が多い。建物自体は１間×１間になり、棟方向はＮ－14°－Ｗである。桁行は300～310cmで、梁間は240cmを測る。柱の掘り方は60～90cmで、深さは確認面から30～50cmを測る。３つの堀り方から、柱痕跡が見つかっている。またいくつかの掘り方から弥・中・Ⅲの土器片が出土し、この建物１の時期になると思われる。（小林）



1　暗褐灰色粘質土
2　褐灰色粘質土
3　暗褐灰色粘質土
4　暗灰色粘質粗砂
5　暗褐灰色粘質土
6　暗褐灰色粘質土
7　褐灰色粘質土
8　暗灰色粘質細砂
9　暗褐灰色粘質微砂

第45図　建物１（1/80）



1　暗灰色粘質土
2　暗褐灰色粘質微砂

第46図　建物２（1/80）

建物2（第46図、図版12－1）

調査区西側部の南側に位置する。溝10・11の間に位置し、井戸1や土壙47など近接する遺構をすべて切る。建物自体は1間×2間で、主軸はN－86°－Wである。桁行は北側が330cm、南側が317cmで、梁間は218cmである。また桁間は152～165cmを測る。柱の掘り方は、30～60cmの規模で、深さは確認面からおおむね40cmである。5つの柱穴に礎石があり、礎石の上面は、標高150cmで一定する。この建物の時期は、須恵器の出土する柱穴があることから、古墳時代後期になる。（小林）

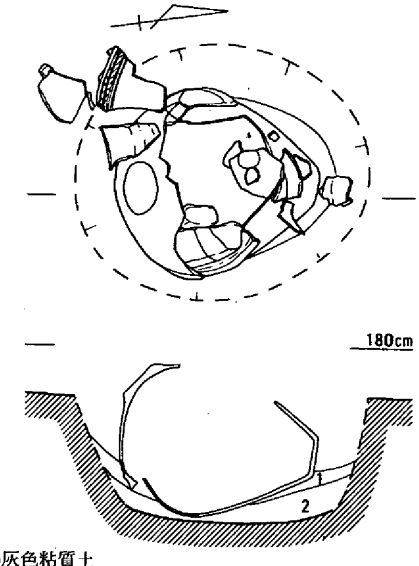
土器棺墓群

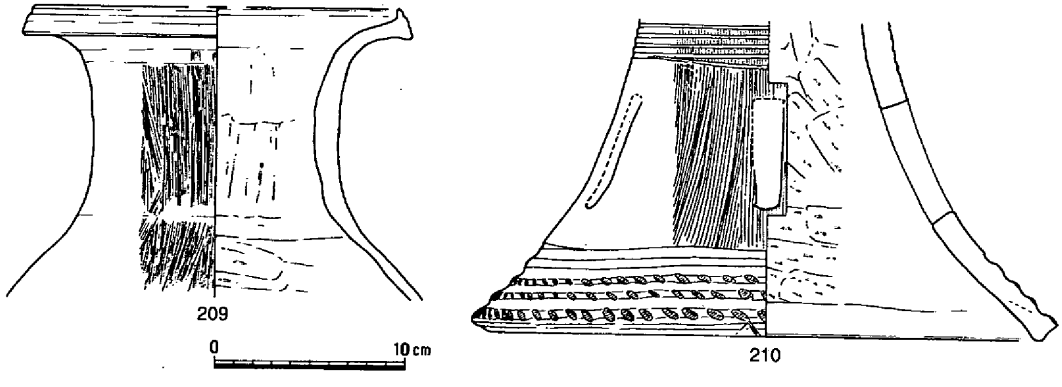
東鬼川市Ⅱ調査区からは、今回土器棺墓が10基検出された。その内8基は溝11・12の12.5m間に存在する。この8基は、溝12の東側5m以内にすべてが収まり、この一角が、一種の土器棺墓群を形成していた様である。またこの一角から外れる土器棺墓8は、溝11のすぐ東側に位置し、頭蓋骨を出土する土壙26もこの位置である。溝11の東側にももう一つの墓壙群が存在したようである。（小林）

土器棺墓1（第47・48図、巻頭2、図版7－3）

土器棺墓1は、調査区の西側に位置する。この土器棺墓1は、今回の調査で発見された土器棺墓のなかで棺自体の大きさが最も大きく、また最も古くなる。同時期になると思われる溝12がすぐ西側を走る。他の遺構との切り合い関係は、溝9を切る。南東側3m付近には、土器棺墓2がある。墓壙の掘り方は、溝9上にあったため、はっきりせず、底の立ち上がりから復元した。おおむね長軸長約80cm、短軸長約70cmで、深さは確認面から35cmを測る。棺の主軸はN－8°－Eである。棺自体は、身が壺**212**で、蓋が鉢**211**の組み合わせである。鉢**211**の上には更に壺**209**と器台**210**が伏せてあった。棺は墓壙内では横に伏せられ、9°の角度で置かれる。また開口部は南側を向く。

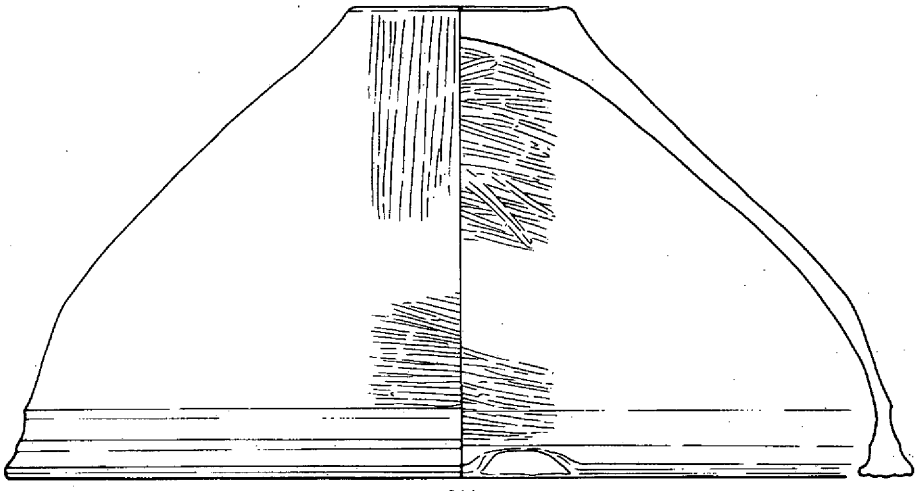
壺**212**は、頸部から上が無く、その部分で径26cm前後の穴があく。胴部の最大径は50.5cmで、最大径よりやや下部に焼成後にあけた1.2cm前後の円孔がある。外面の成形はハケメで、底部と胴部上半付近をヘラミガキで調整する。内面の調整は粗めのヘラケズリである。蓋になる鉢**211**は、口縁部径が48.2cmになり、内側には注口部



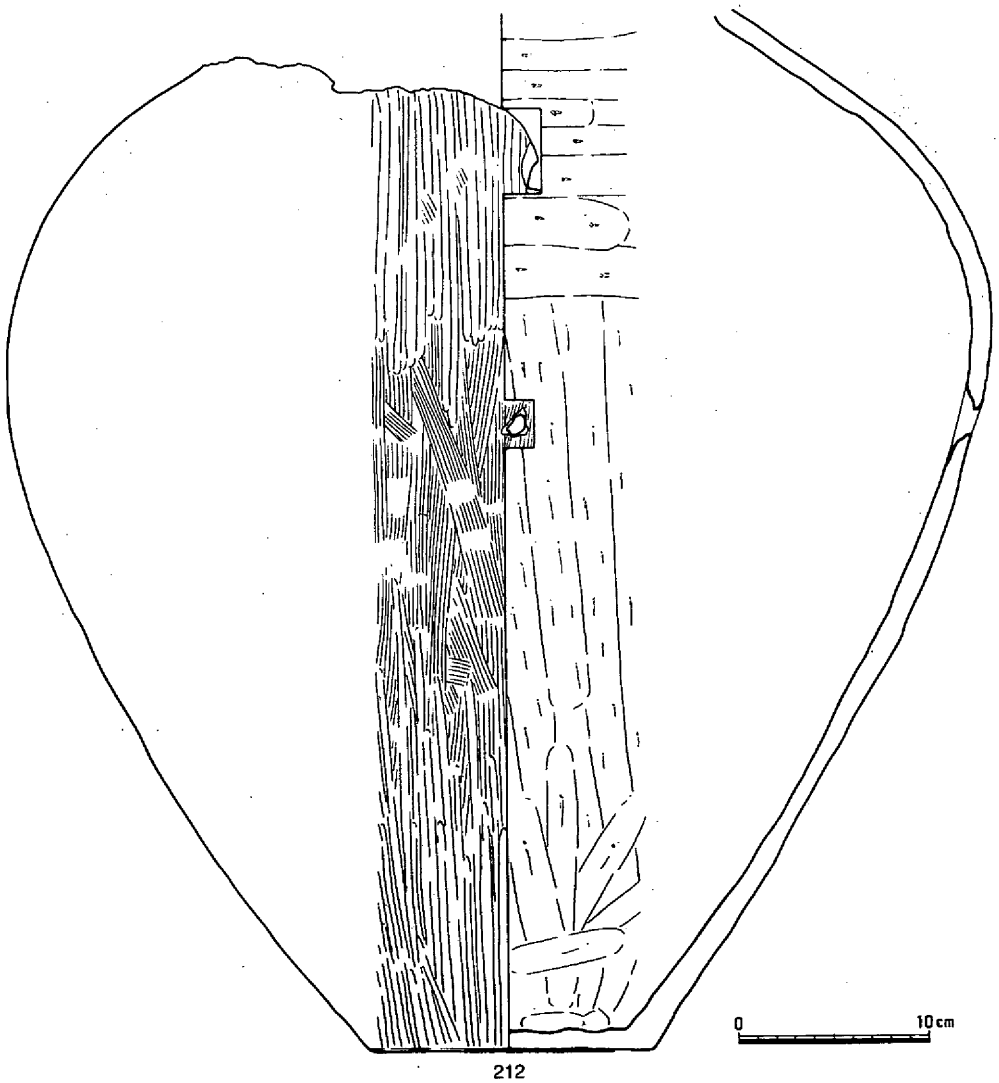


第47図　土器棺墓1（1/20）・出土遺物（1/4）

がある。調整は内外面ともヘラミガキである。鉢211を壺212と組み合わせると、壺212の胴部最大径よりやや上部に鉢211の口縁部が接する。また棺内の土壌を洗浄したところ、伏せた状態である棺の下部から歯が検出された。この歯に関しては、後で小田嶋氏の分析報告が載せてある。この土器棺の時期は弥・後・Ⅰである。　（小林）



211



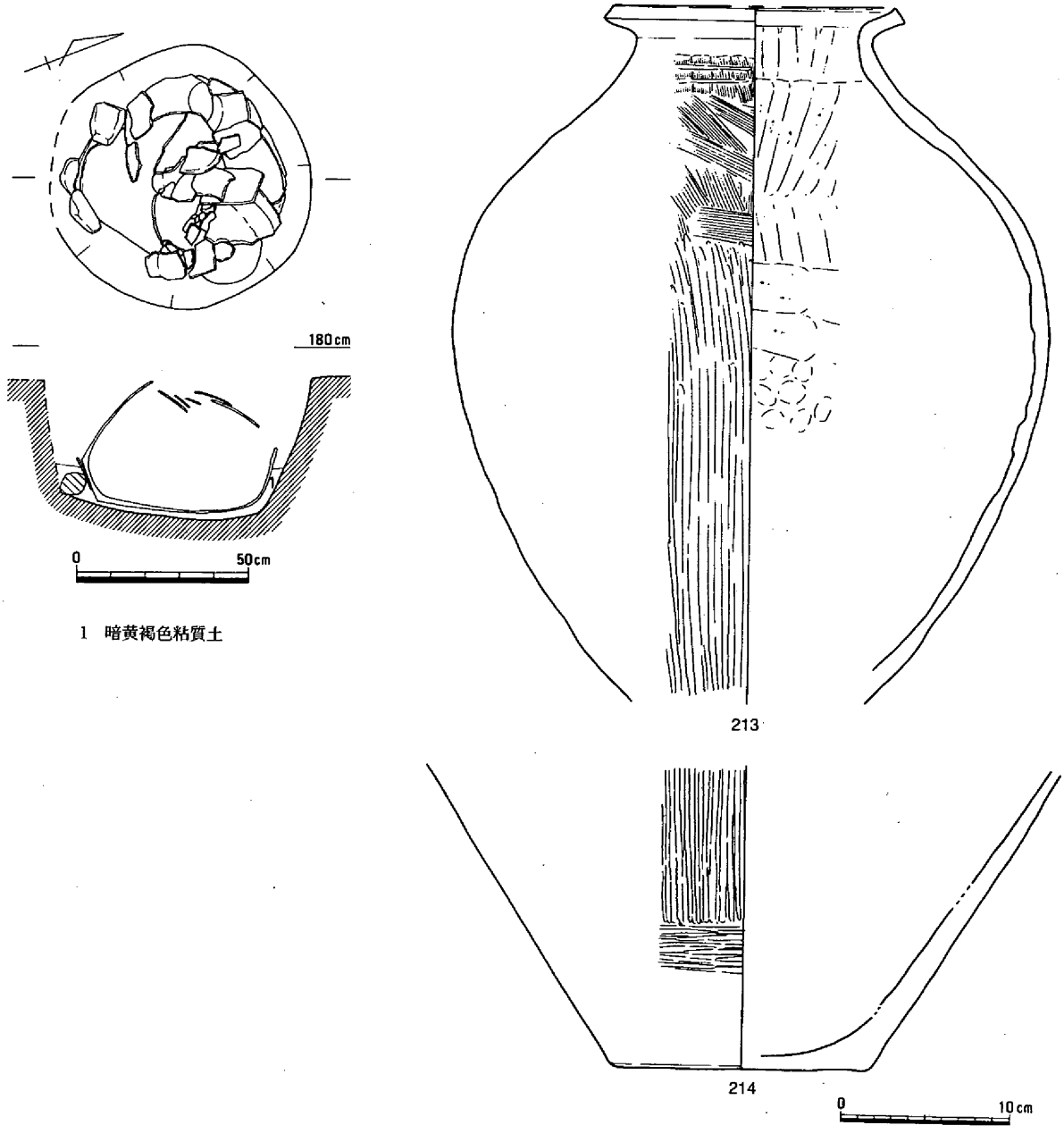
212

第48図　土器棺墓１出土遺物（1/4）

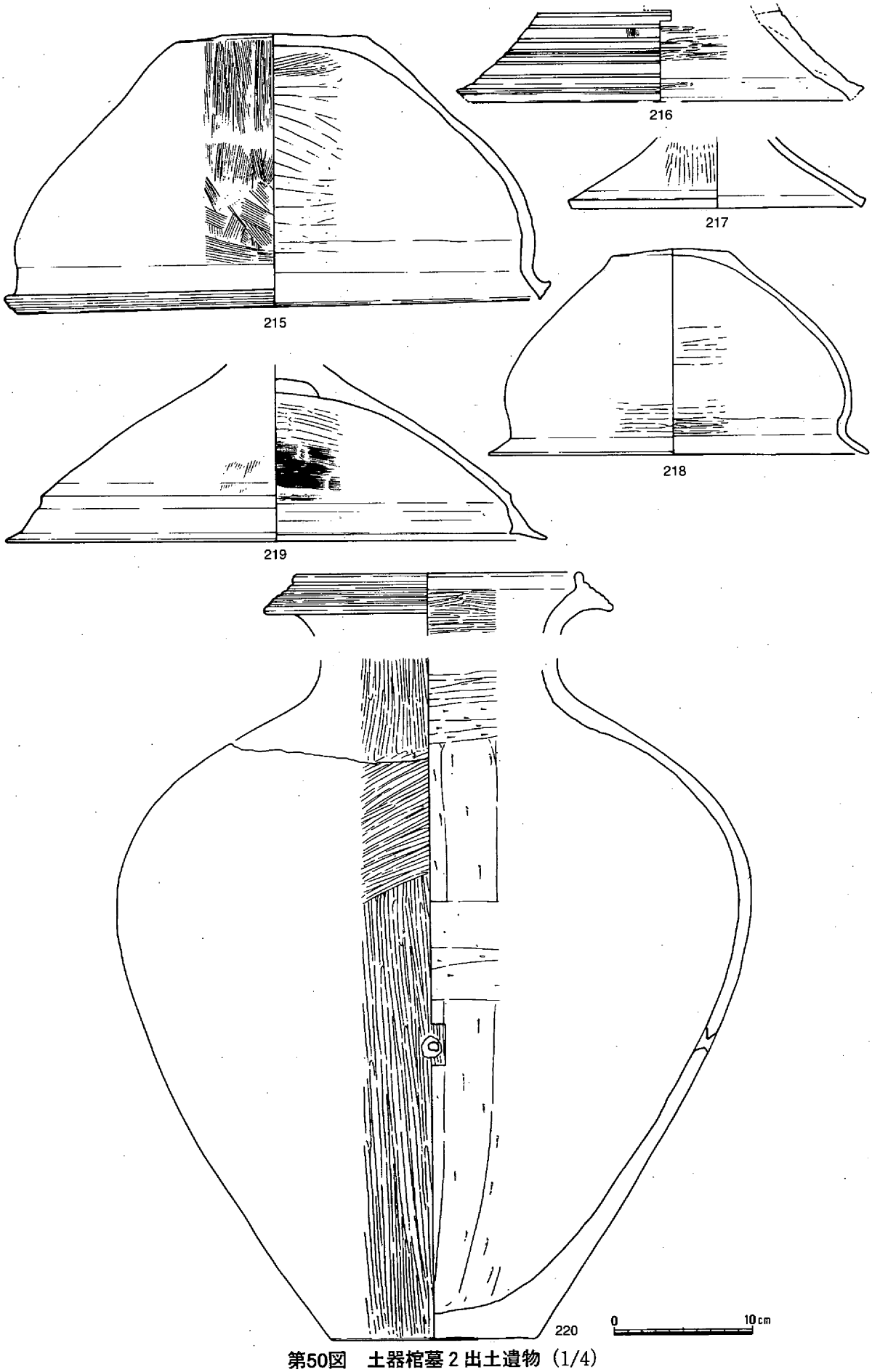
土器棺墓２（第49・50図、巻頭２、図版８－１）

調査区西側に位置し、溝12の東側にある。北東側２ｍには土器棺墓１が、北西側1.5ｍに土器棺６がある。他の遺構との切り合い関係は、溝12を切る形になる。墓壙の堀り方は、長・短軸長とも74cmで、平面形状は不正円形である。深さは確認面から44cmを測り、棺自体の主軸はＮ－22°－Ｅである。棺は17°の角度で横に伏せられ、棺の胴部下半面は掘り方底面に接している。身の開口部は北である。

棺の身となる壺**220**は、胴部最大径が45.4cmになり、頸部付近が、打ち欠かれており、30cm前後の穴があく。また胴部最大径よりやや下半に焼成後に 1.5cm前後の円孔をあける。蓋の位置には鉢**215**・**218**、器台**216**・**217**と高杯**219**など多数の土器が伏せて置いてある。また壺**213**・**214**は、伏せてはいないがやはり同地点にあった。また壺**220**の底部付近に礫を置いて固定している。棺１同様、小片の歯が検出された。この土器棺の時期は、弥・後・Ⅱの新相になる。（小林）



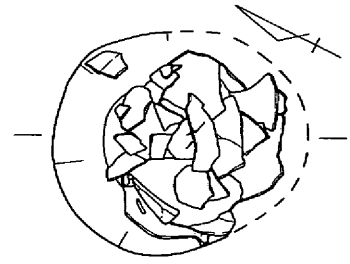
第49図　土器棺墓２（1/20）・**出土遺物**（1/4）

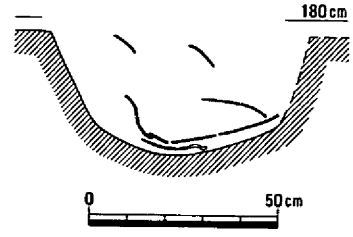


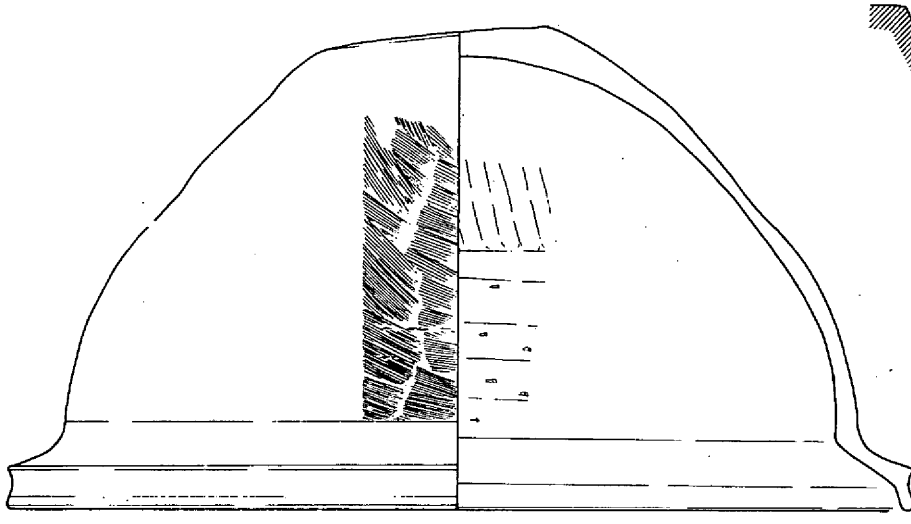
第50図　土器棺墓２出土遺物（1/4）

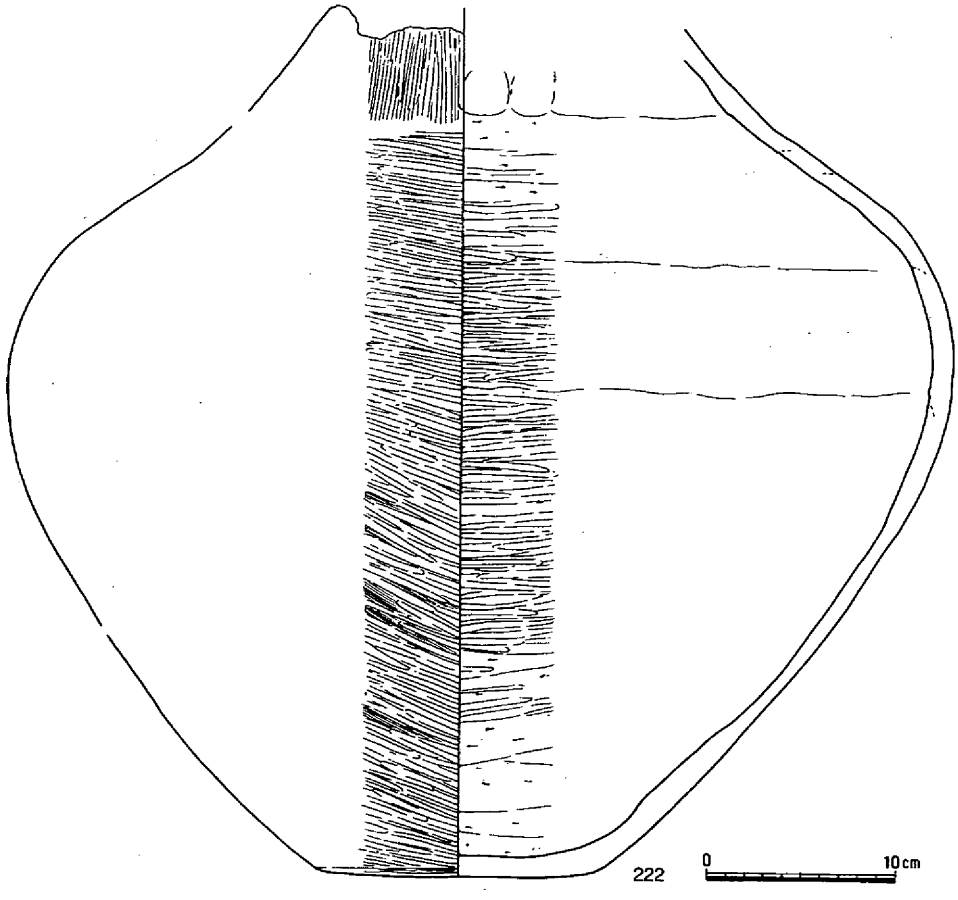
土器棺墓3（第51図、巻頭2、図版8－2）

土器棺墓3は、調査区西側部の北側に位置する。ちょうど調査区の境であり、溝9・10の間にあたる。他の遺構との切り合い関係は、東側で溝10を切る形になる。墓壙の掘り方は、長軸長66cm、短軸長58cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。深さは確認面から33cmである。また棺自体の主軸は、N－27°－Wになり、北側が開口する形になる。









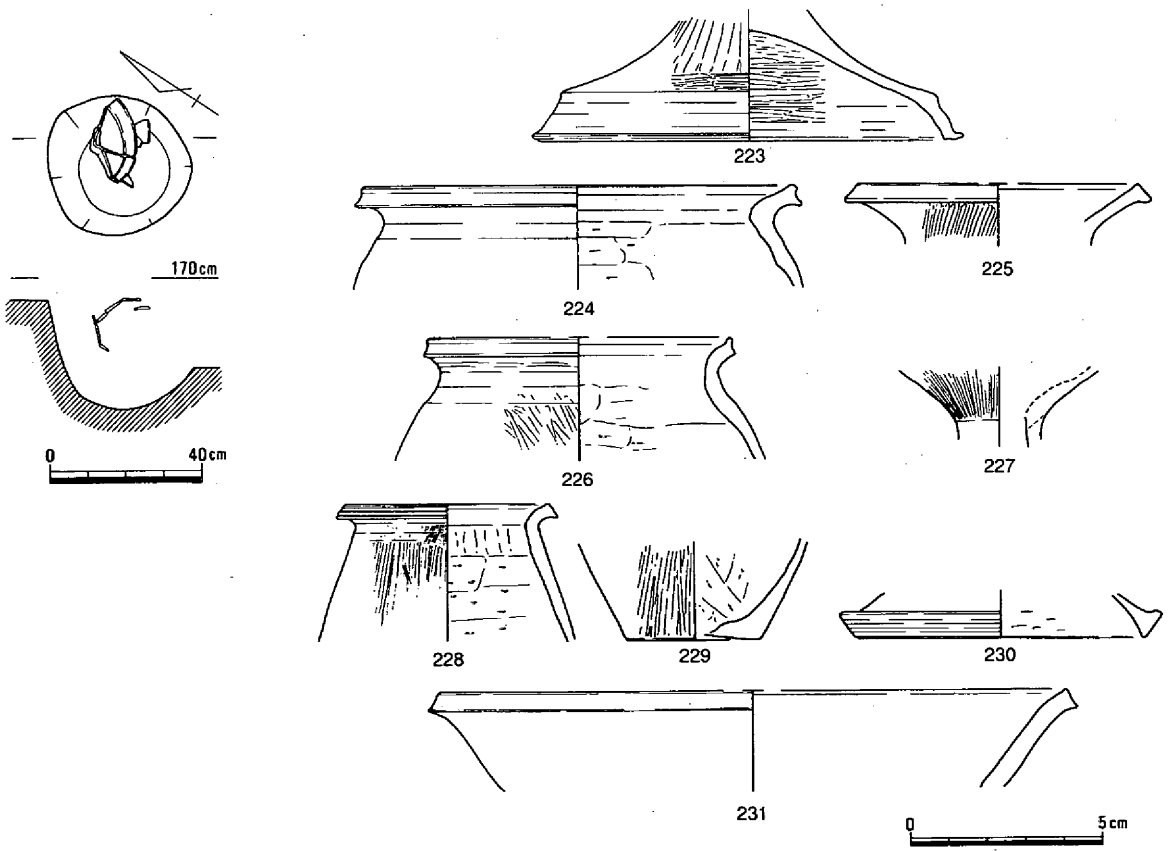
第51図　土器棺墓3（1/20）・出土遺物（1/4）

土器棺墓の組み合わせは、身が壺**222**で、蓋が鉢**221**になる。身・蓋とも検出されたときには上面が押し潰されていた。身自体は、９°の角度で横に伏せられた状態であり、蓋となる鉢**221**は身の下敷きになるように出土した。身となる壺**222**は、頸部より上部が欠けている。その部分には20cm前後の穴が開いているような状態になる。しかし土器棺墓１や２で見られたような、胴部に焼成後円孔は見られなかった。胴部最大径は49cmを測り、やや底部よりになる。胴部も全面ヘラミガキによって調整され、内面もヘラケズリの後広い範囲でヘラミガキが見られる。内外面とも丁寧に調整されるが、形自体は歪である。蓋となる鉢の口縁部径は47.5cmで、壺**222**と調度いい組み合わせになる。時期はどちらも弥・後・Ⅲ～Ⅳの間になり、土器棺墓の時期も同じになる。　（小林）

土器棺墓４（第52図、図版８－３）

土器棺墓４は、調査区西側部の北側に位置し、調査区の境になる。北側40cm先には、土器棺墓５がある。他の遺構との切り合い関係は、位置的には溝12を切る形になる。墓壙の規模は、長軸長38cm、短軸長37cmで、平面形状は不正円形を呈する。深さは確認面から27cmを測る。

この土器棺墓の構造は、蓋となる高杯**223**が伏せた状態で置いてあったが、明確な身となる資料が存在しない。代わりに**224**～**231**が、破片のみで高杯**223**の下から出土する。高杯**223**の脚との接合は、円盤充填によっている。口縁部径は21.4cmになり、普通の高杯と変わりはない。他の土器棺出土の土器は法量が大きくなるのに対し、この土器棺は普通の高杯を転用したようである。弥・後・Ⅰになる。身の位置にくる土器片は、**225**が弥・後・Ⅱ、**224**・**226**は後期Ⅲの甕、**228**・**229**は後期Ⅰの甕、**227**・**230**は後期Ⅰの高杯、**231**は後期Ⅱの鉢になる。蓋も含めて様々な時期があるが、土器棺墓自体の時期は、溝12を切ることなどから弥・後・Ⅲ以降になると思われる。　（小林）

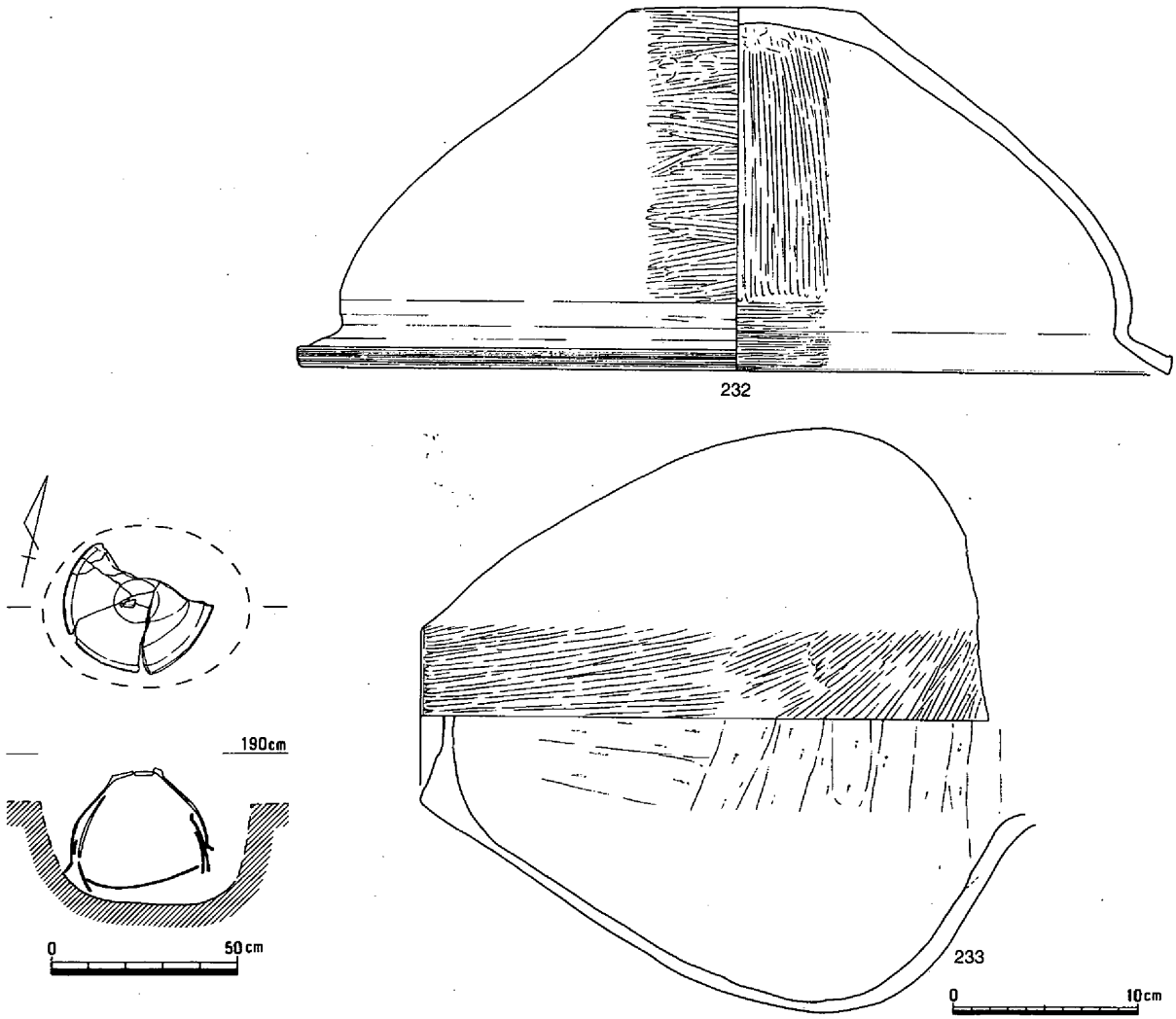


第52図　土器棺墓４（1/20）・出土遺物（1/4）

土器棺墓５（第53図、図版９－１）

土器棺墓５は、調査区西側の北側に位置する。ちょうど調査区の壁面にかかっており、他の遺構との切り合い関係では溝12を切る形になる。大半が壁面にかかっているため、墓壙の正確な規模は不明である。墓壙の底面から復元した規模は、おおむね長軸長55cm前後になる。

この土器棺墓は、身となる壺は横に置かれていて、口縁部径が47.2cmの鉢を伏せて、壺が完全に覆い被さるようになる。身となる壺の主軸はＮ－76°－Ｅで、墓壙底面から10°の角度で置かれる。壺**233**の頸から上部はなく、その部分は16.4cmの穴が開いたようになる。しかし胴部には焼成後円孔などは存在しない。胴部最大径は31.6cmで、蓋の口縁部径よりはるかに小さい。現存での器高は33cmで、横に伏せても蓋にすっぽり入る大きさである。蓋となる鉢**232**は器高が20cmで、口縁に比べて浅くなる。時期は壺・鉢とも弥・後・Ⅲになり、土器棺墓自体も同じ時期になる。（小林）

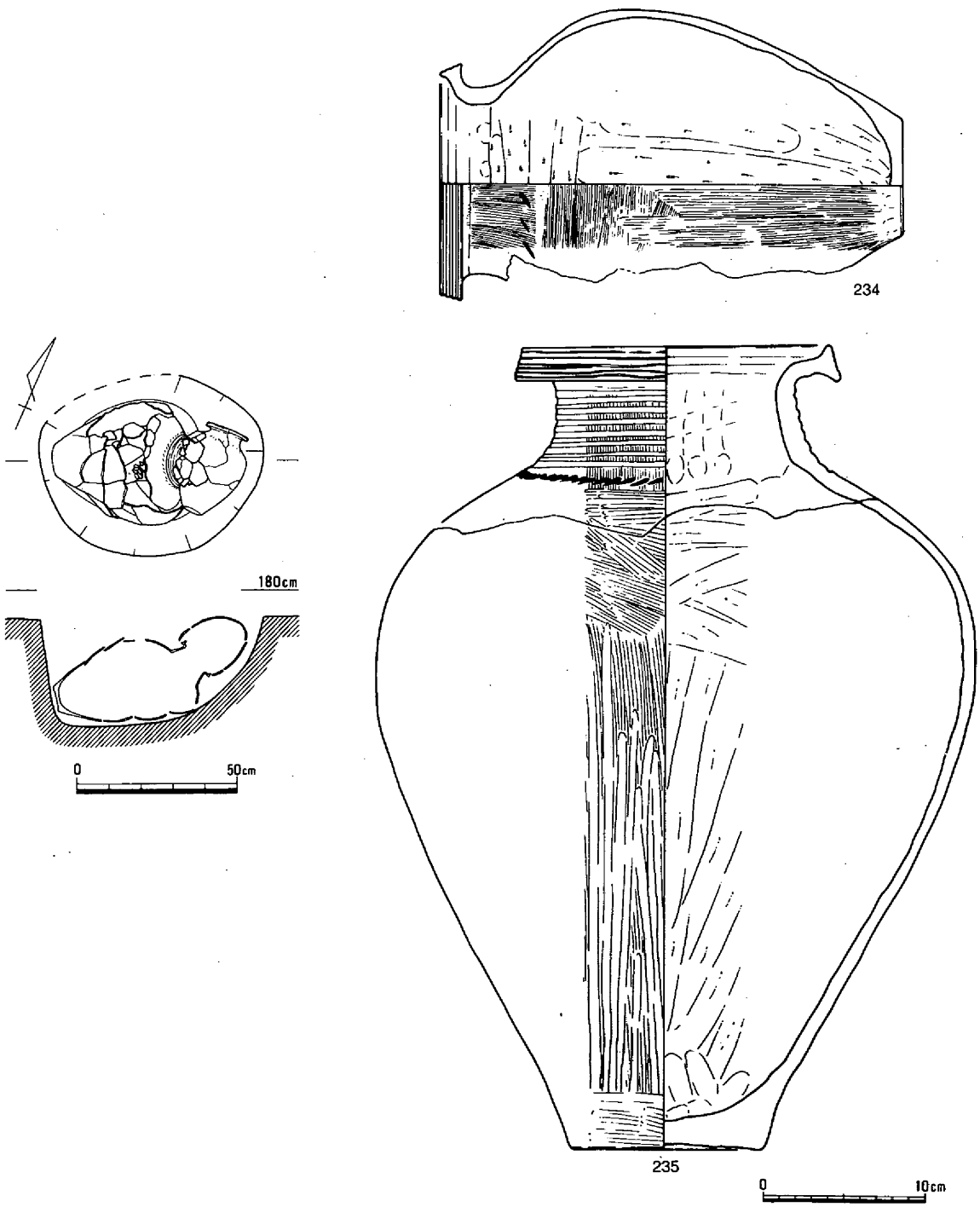


第53図　土器棺墓５（1/20）**・出土遺物**（1/4）

土器棺墓６（第54図、巻頭２、図版９－２）

土器棺墓６は、調査区西側部の中央付近にあり、溝10が西側に位置する。墓壙の北東側は、古墳時代の柱穴によって切られる。この土器棺墓のすぐ東側には、土器棺墓７がある。墓壙の規模は、長軸

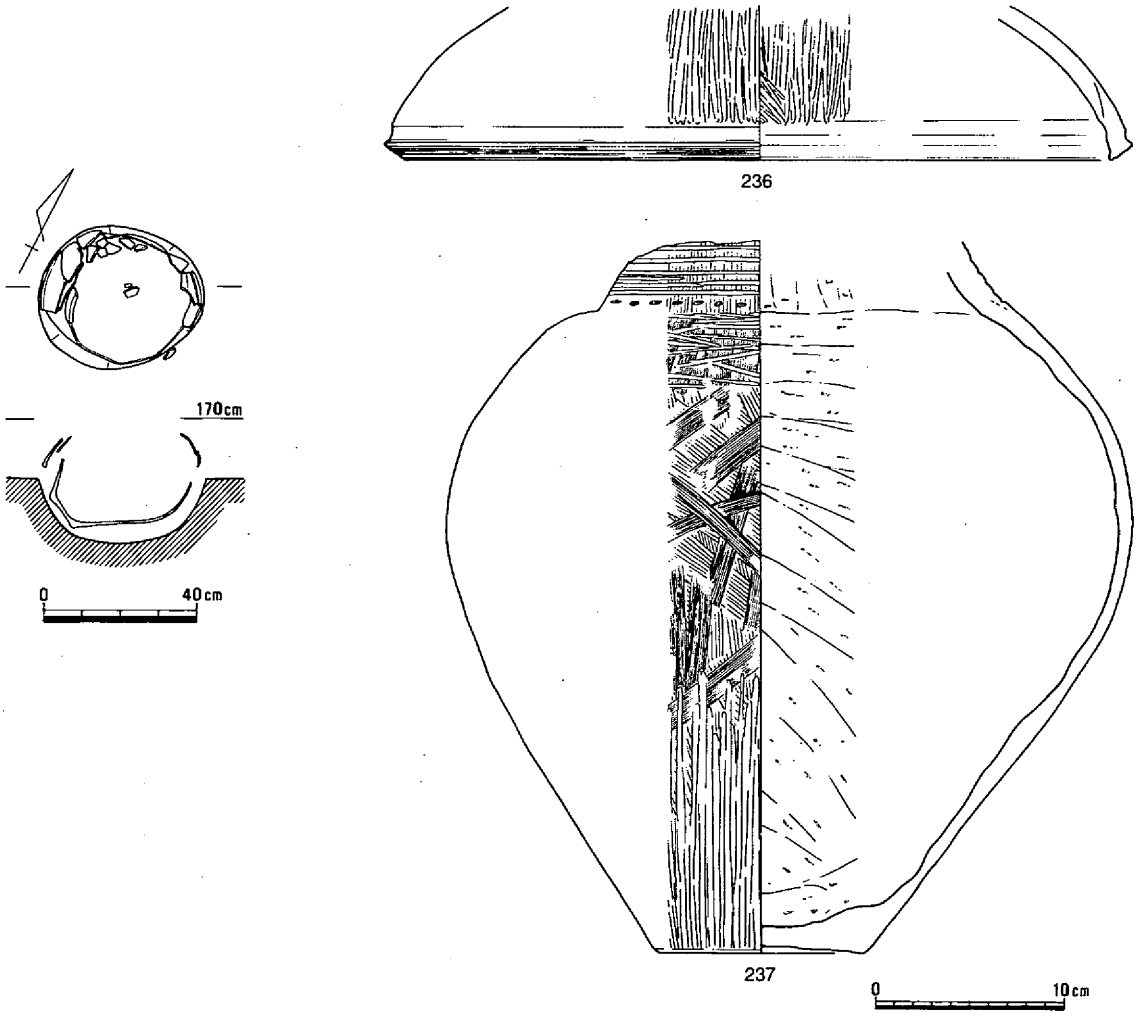
長70cm、短軸長56cmで、平面形状は楕円形を呈する。深さは確認面から34cmを測る。棺自体の主軸は、N－66°－Eを向く。身となる壺**235**は、15°の角度を持って横に伏せられ、墓壙の底面に沿って置かれる。この横に置かれた身に、壺**234**を胴部に約21cmの穴をあけ、蓋にしている。身となる壺**235**の口縁部径は19.4cmになり、**234**に開けられた穴と調度いい大きさになる。**235**は、他の土器棺の身が頸部以上を欠いているのに対し、唯一口縁部まで存在する。しかし**235**は、頸部付近で胴部ときれいにはがれ、その部分は27.5cm前後の穴が開く。おそらく遺体を入れた後、再び口縁部を取り付け、更に**234**によって蓋をしたものと思われる。時期は弥・後・Ⅲである。　(小林)



第54図　土器棺墓6（1/20）・出土遺物（1/4）

土器棺墓７（第55図）

土器棺墓７は、調査区西側部の中央付近に位置する。溝10が西側を走り、すぐ西隣には土器棺墓６がある。基盤層をかなり掘り込んだ状態で検出したため、蓋となる鉢**236**は浮いた状態であった。墓壙の規模は、長軸長43cm、短軸長38cmで、平面形状は不正円形を呈する。深さは確認面から14cmを測る。棺自体の主軸はＮ－63°－Ｅになり、東側が開口する。身となる壺**237**は、胴部の側面が墓壙の底面に沿う形になり、33°の角度で横にして置かれる。頸部より上部はなく、この部分で23cmの穴が開く。蓋となる鉢**236**の口縁部径は、39.6cmになり、壺**237**の胴部最大径36.2cmより大きくなる。むしろ蓋**236**は、墓壙の規模に合い、本来は墓壙自体を覆っていたのかもしれない。蓋と身の時期は、どちらも弥・後・Ⅲになり、土器棺墓の時期も同じになると思われる。（小林）

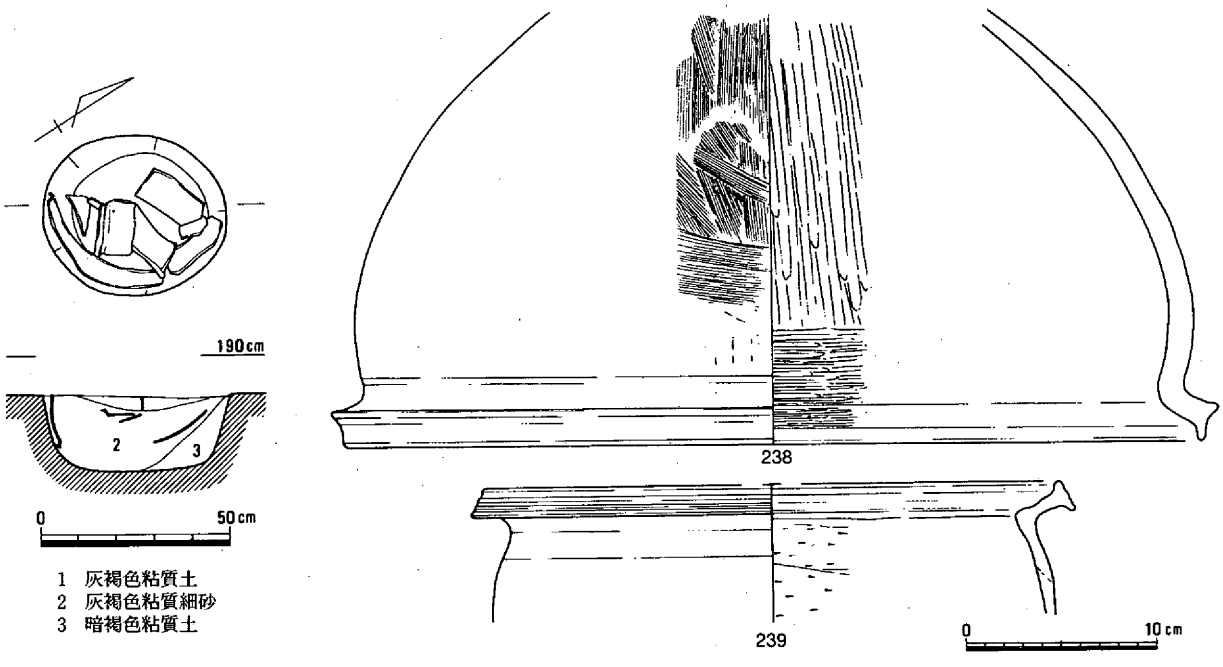


第55図　土器棺墓７（1/20）・出土遺物（1/4）

土器棺墓８（第56図、図版９－３）

土器棺墓８は、調査区西側部の北西よりに位置する。大半の土器棺墓が溝11の西側にあるが、この土器棺墓は頭蓋骨を出土した土壙26と共に東側にある。他の遺構との切り合い関係は、土壙55を切る形になる。墓壙の規模は、長軸長49cm、短軸長38cmで、平面形状は楕円形を呈する。深さは確認面から20cmを測る。この土器棺墓は、身が甕**239**で、蓋が鉢**238**の組み合わせになる。蓋となる鉢**238**は伏

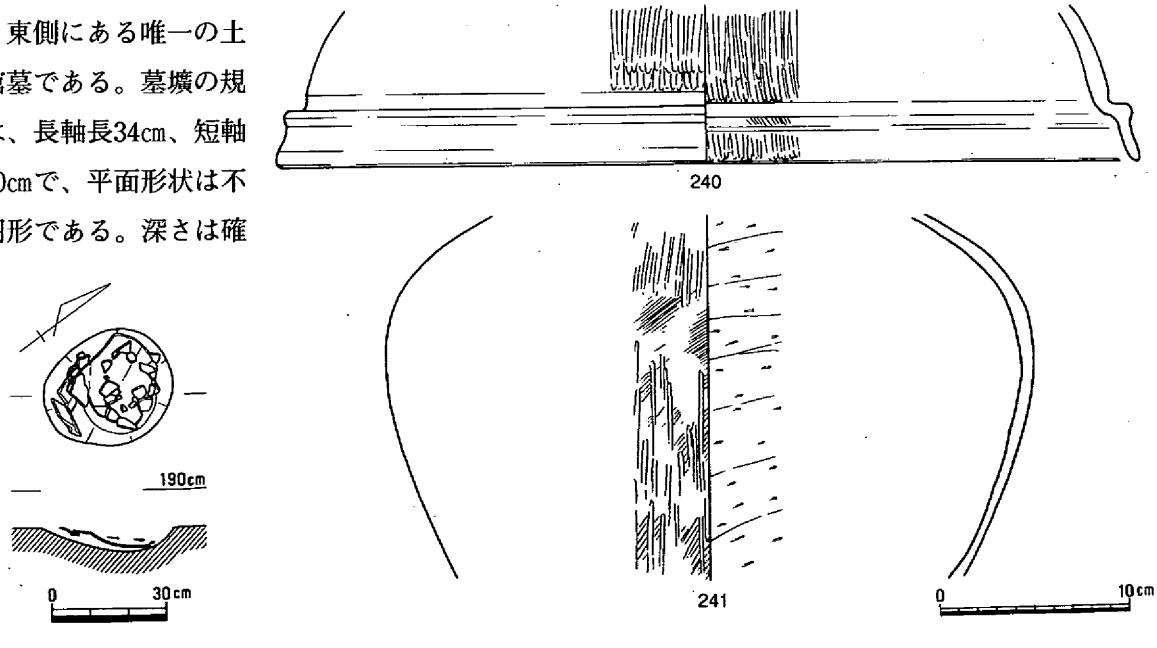
せてあり、墓壙の堀り方に沿う形になる。鉢238の口縁部径は45.6cmを測り、この数値は身となる甕239の口縁部径30.6cmをはるかに凌ぐ大きさである。この数値はむしろ墓壙の長軸長に近く、土器棺墓５・７と同じように墓壙自体を覆う形である。身となる甕239は、法量の上や調整などから見て、特に土器棺用に作られたものではなさそうである。時期は甕239が弥・後・Ⅱ、鉢238が後期Ⅲになり、切り合い関係なども考えると、土器棺自体は弥・後・Ⅲになる。　（小林）



第56図　土器棺墓８（1/20）・出土遺物（1/4）

土器棺墓９（第57図）

調査区最東端の南東側に位置する。竪穴住居群より東側にある唯一の土器棺墓である。墓壙の規模は、長軸長34cm、短軸長30cmで、平面形状は不正円形である。深さは確

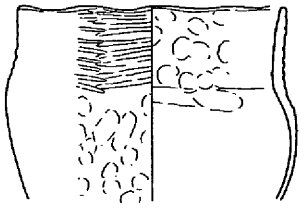


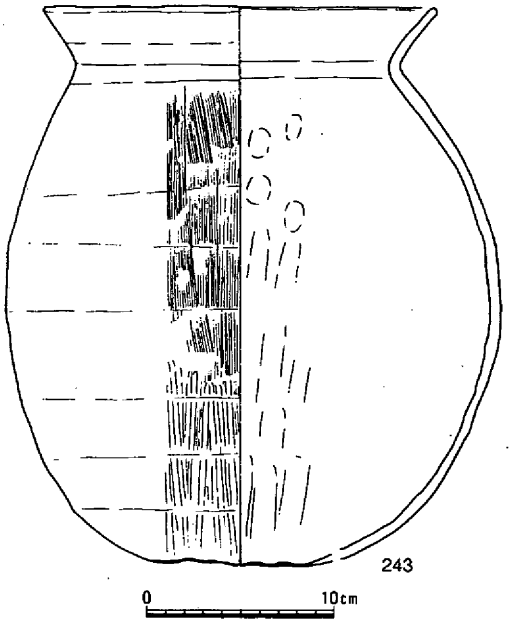
第57図　土器棺墓９（1/20）・出土遺物（1/4）

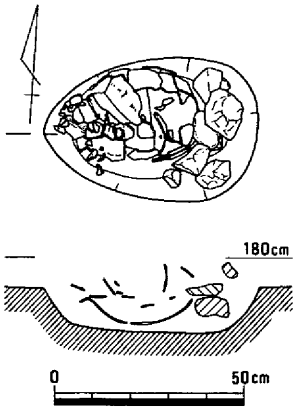
認面から5㎝を測る。棺自体の主軸は、N－36°－Eになり、西側へ開口する。蓋になる鉢240は身になる241の下に入り込んでおり、蓋が身の法量をはるかに凌いでいるが、棺7・8の様に墓壙自体を覆う形にはならない。時期は弥・後・Ⅳである。　(小林)

土器棺墓10（第58図、図版23－6）

土器棺墓10は、調査区西側部の中央北部に位置する。西側へ1.5m付近に溝10が存在する。他の遺構との切り合い関係は、特にない。墓壙の規模は、長軸長56㎝、短軸長38㎝を測り、平面形状は倒卵形を呈する。深さは確認面から13㎝を測る。棺自体の主軸は、N－87°－Eであり、西側が開口する。身となる甕243は8°の角度で横に寝かされるが、上半部はすでに潰れている。甕243の底部付近は礫によって安定させ、口縁部付近には製塩土器242が置かれていた。甕243の口縁部径は21㎝で、製塩土器242の胴部最大径は15.4㎝を測る。法量的に違いがあるが、製塩土器242の置かれている場所から考えて、蓋として使っていた可能性がある。また甕243の底部は焼成後に10.6㎝前後の円孔を開けている。時期は、5世紀後半である。　(小林)



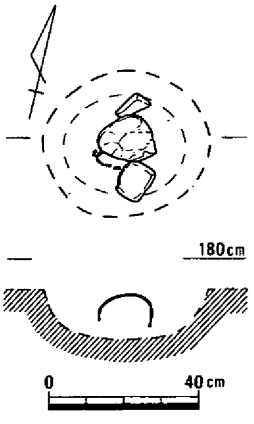


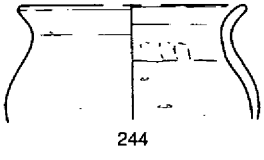


第58図　土器棺墓10（1/20）**・出土遺物**（1/4）

土壙26（第59図、図版10－1）

調査区西側部の東側に位置する。土器棺墓9同様、溝11の東側縁に位置する。他の遺構との切り合い関係は、土壙72を切っている。規模は不明瞭であるが、長軸長が約45㎝になる。この土壙からは、頭蓋骨のみが伏せた状態で検出され、頭蓋骨の両脇は礫で固められている。頭蓋骨の主軸はN－76°－Eを測り、西側を向く。出土土器244～246は、いずれも弥・後・Ⅰになり、土壙の時期も同じになる。なお歯の保存状態は非常に良く、後で小田嶋氏の鑑定が載せてある。　(小林)

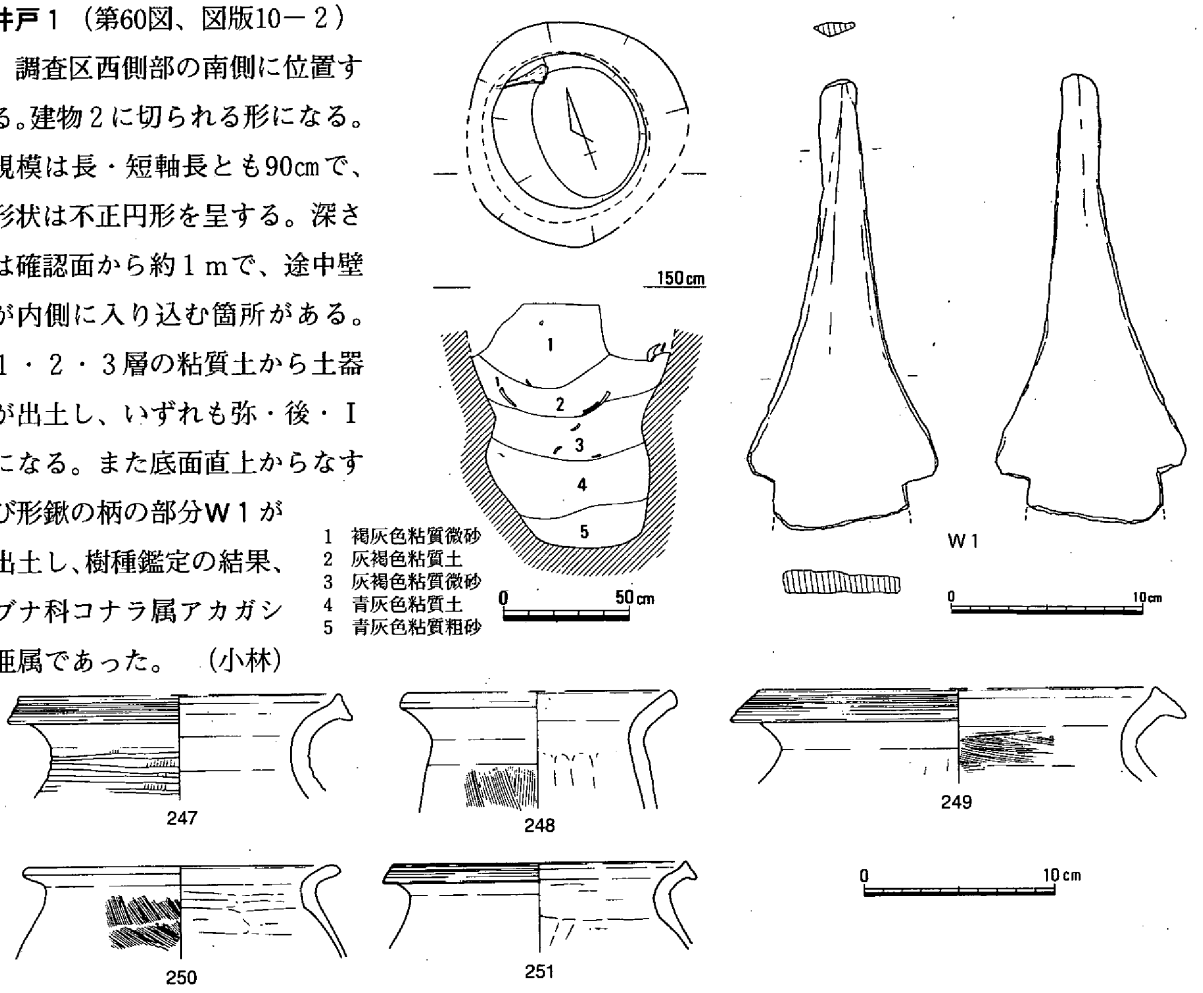




第59図　土壙26（1/20）**・出土遺物**（1/4）

井戸１（第60図、図版10－２）

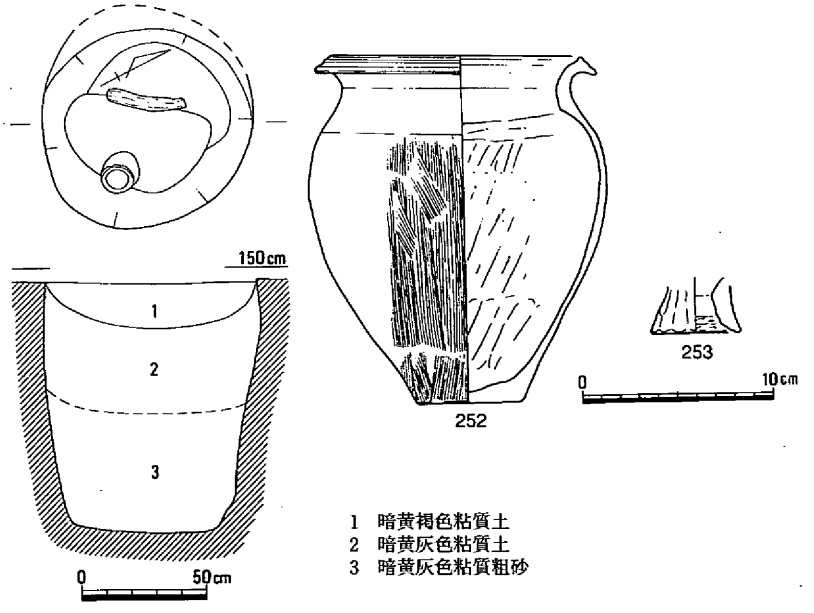
調査区西側部の南側に位置する。建物２に切られる形になる。規模は長・短軸長とも90cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から約１ｍで、途中壁が内側に入り込む箇所がある。１・２・３層の粘質土から土器が出土し、いずれも弥・後・Ⅰになる。また底面直上からなすび形鍬の柄の部分**Ｗ１**が出土し、樹種鑑定の結果、ブナ科コナラ属アカガシ亜属であった。（小林）



第60図　井戸１（1/30）**・出土遺物**（1/4）

井戸２（第61図、図版10－３、23－５）

調査区中央部に位置し、住居密集地の西部にあたる。北東方向４ｍに井戸３がある。竪穴住居５・８には共に切られている。規模は長・短軸とも82cmで、形状は円形を呈する。深さは確認面から100cmで、その内１層にあたる上部18cmは、しまりある粘質土で固められていた。覆土にはほとんど遺物が含まれないが、床面直上に甕**252**がほぼ完形で出土する。器形のどこにも焼成後の穿孔はない。弥・

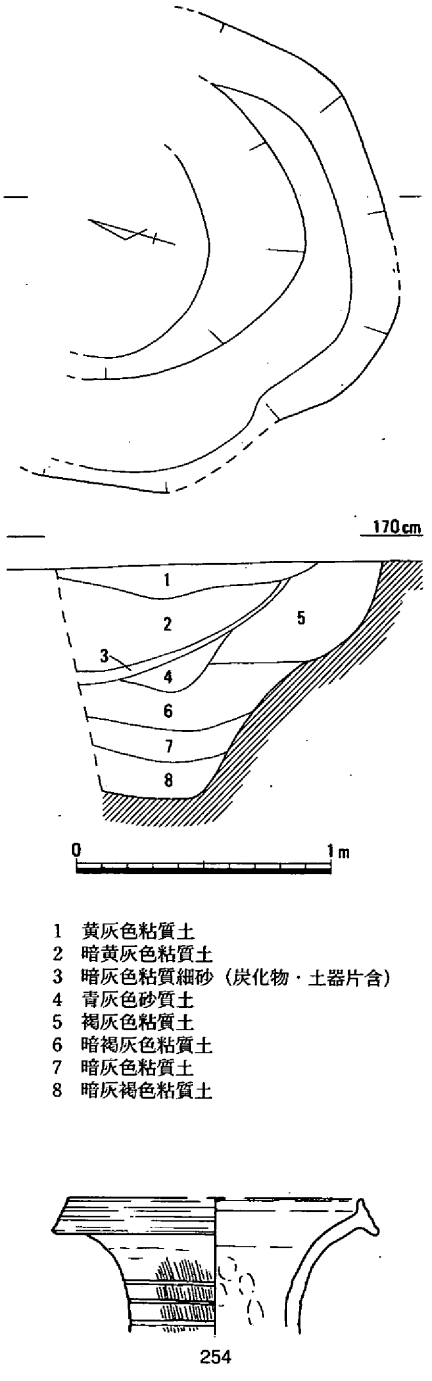


第61図　井戸２（1/30）**・出土遺物**（1/4）

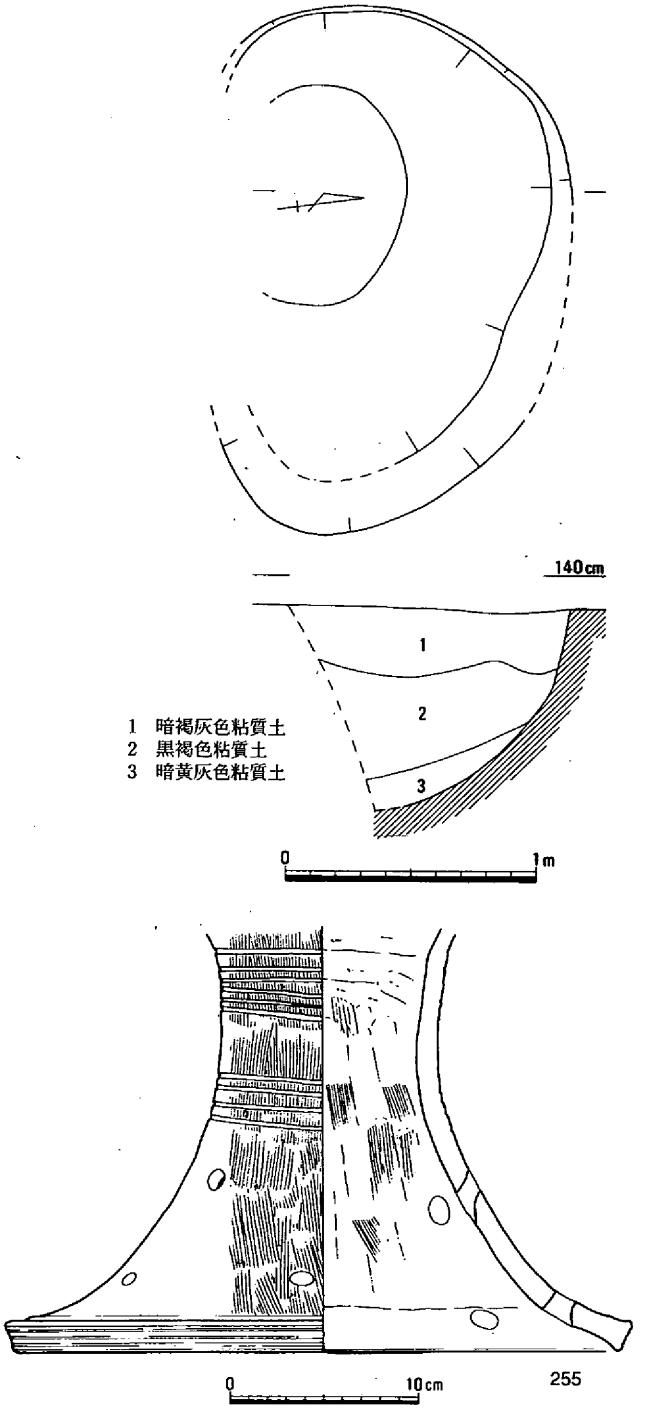
後・Ⅰになる。また同面に棒状木材もあるが、何になるか不明である。遺構の時期は、252の存在や切り合い関係などから、弥・後・Ⅰになる。　(小林)

井戸3（第62図）

井戸3は、調査区中央部の北側に位置する。井戸の北半分は調査区外になるため調査していない。南西方向4m付近に、井戸2が存在する。他の遺構との切り合い関係は、近隣の土壙に悉く切られている。井戸の規模は、長軸長195cmで、平面形状は不正円形を呈する。深さは確認面から90cmを測り、底にいくほど面積が狭くなる。底面の標高は、66cmである。井戸の覆土は粘質土が中心になるが、3



第62図　井戸3（1/30）・出土遺物（1/4）



第63図　井戸4（1/30）・出土遺物（1/4）

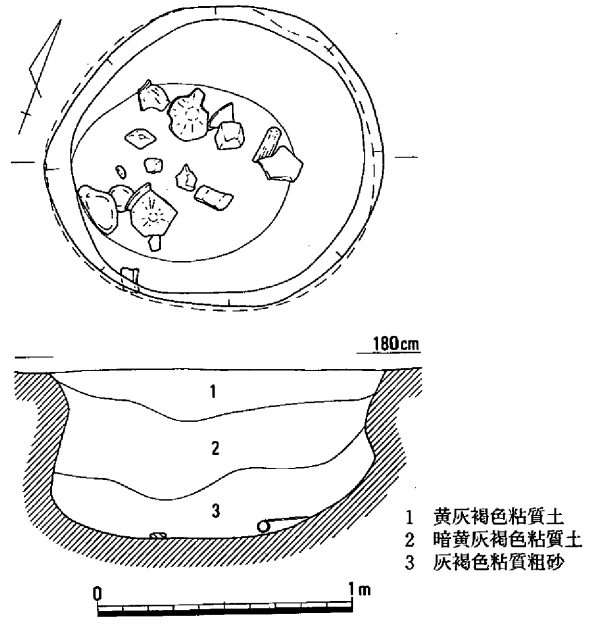
層は炭化物や土器片を多く含んでいる。出土遺物の中には、**254**があり、弥・後・Ⅲの口縁部になる。しかし井戸３は、弥・後・Ⅰ～Ⅱになる近隣の土壙に悉く切られており、**254**は紛れ混みの可能性が強く、実際の時期は後期Ⅰ以前になるだろう。　（小林）

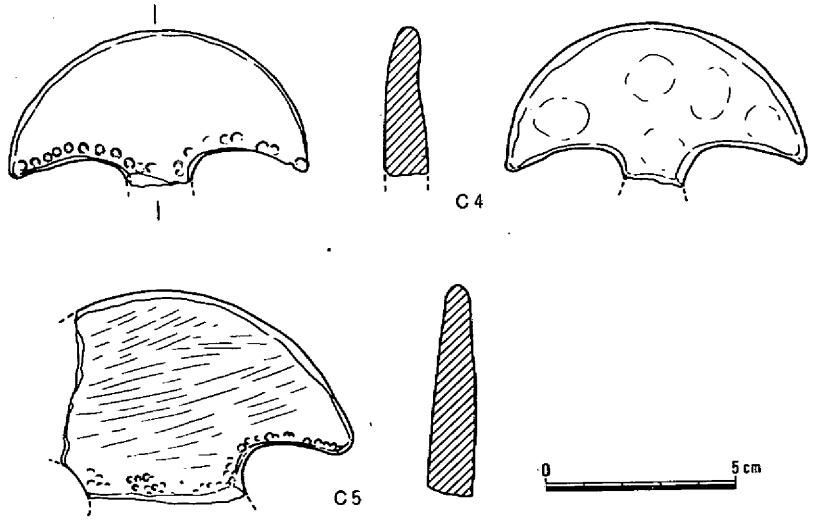
井戸４（第63図）

井戸４は、調査区中央部の南側に位置する。南側1/4は調査区の壁にかかるため、調査が出来なかった。他の遺構との切り合い関係は、竪穴住居５・９に切られる。井戸の規模は、長軸長210cm、短軸長160cmで、平面形状は楕円形を呈する。深さは確認面から80cmを測り、標高は46cmになる。覆土は粘質であり、底面に近づくにつれ狭くなる。この井戸は、竪穴住居５の床面を剥いだ後に確認された。出土遺物は、器台**255**のみ確認された。**255**は、くびれ部に２単位の沈線帯があり、その下部には２列に円孔の左右が対称にならない形で並ぶ。時期は弥・後・ⅠとⅡの間になるが、井戸自体は竪穴住居５に切られることなどから、弥・後・Ⅰの範疇になる。　（小林）

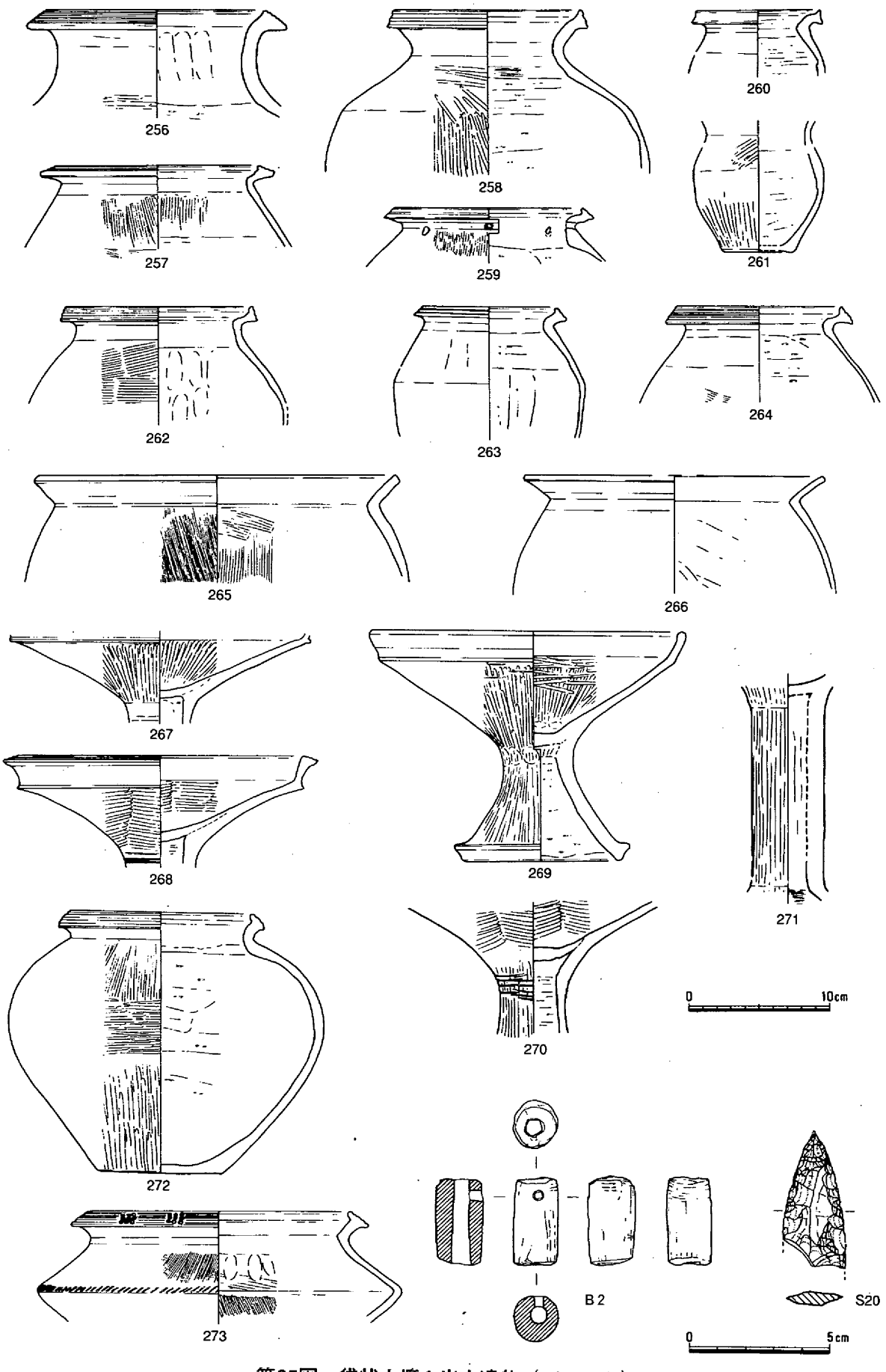
袋状土壙１（第64・65図、図版11－１、24－１）

袋状土壙１は、調査区東側部の中央よりの北側に位置する。弥・中・Ⅲの竪穴住居２を切っている。土壙の規模は、長軸長130cm、短軸長116cmで、楕円形を呈する。底面の標高は108cmになるが、特に平行にはならない。遺物は、特に２層以下の砂質土から他種類・多数が出土する。**Ｃ４・５**は分銅形土製品であり、抉り部には刺突文が巡る。**Ｃ５**の表面には赤色顔料が塗られる。**Ｂ２**は鹿角製の管玉である。骨の髄を抜いて孔にしている。また側面にも孔が開き、縦方向の孔に通じている。**Ｓ20**は現存値で５cmになる大型の石鏃である。土器では、**256・258**は壺になる。甕にはく字になる口縁部（**265・266**）と、口縁端部が内側に立ち上がる（**257・259・262～264**）の２種類がある。また**259**の頸部には、円孔が開けられる。**260・261**は小型壺である。**267～271**は高杯で、**267**のみ胎土が白灰色である。**272・273**は鉢である。**269・272**の２点は、ほぼ完形品である。この土壙の時期は、**267**が弥・中・Ⅲになるが、切り合い関係などからも弥・後・Ⅰになる。　（小林）





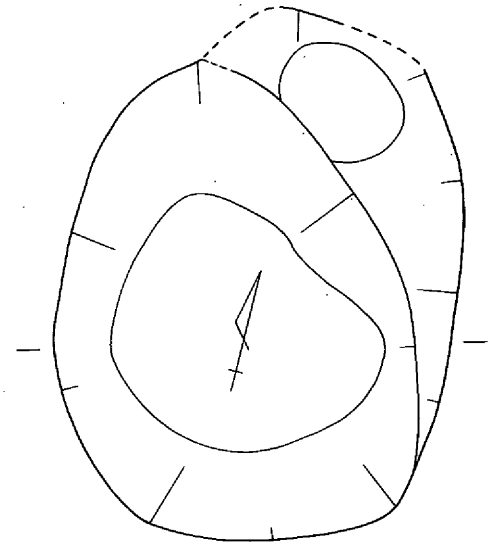
第64図　袋状土壙１（1/30）・出土遺物（1/2）

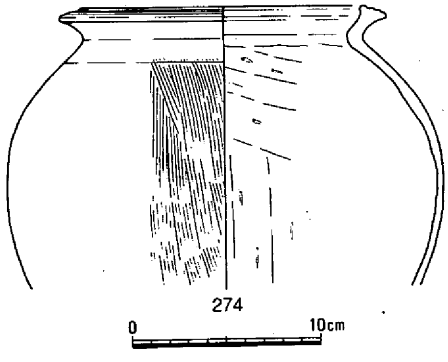


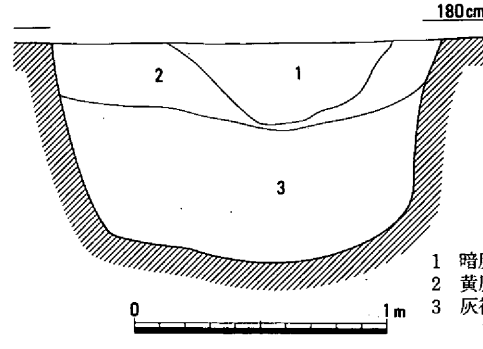
第65図　袋状土壙1出土遺物（1/4・1/2）

土壙27（第66図）

土壙27は、調査区東側部の中央付近に位置する。切り合い関係は、弥・後・Ⅲの土壙185に切られ、中期Ⅲの土壙36を切る。規模は長軸長212cm、短軸長155cmで、平面形状は楕円形を呈する。深さは確認面から86cmを測り、断面形状は椀形である。土壙が大型の割に遺物が少なく、図化できるのは甕**274**ぐらいである。**274**は弥・後・Ⅰになり、土壙の時期も切り合い関係なども含めると弥・後・Ⅰになる。（小林）





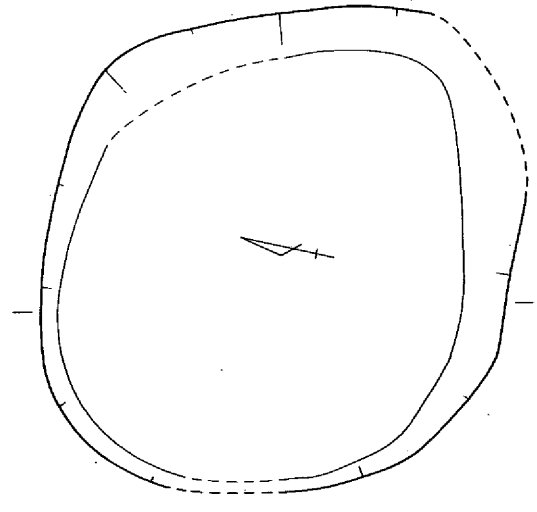


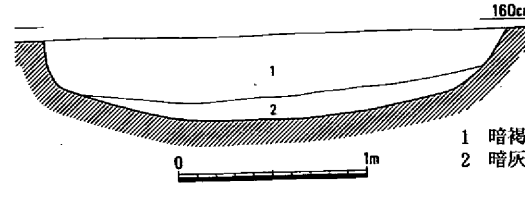
1　暗灰色粘質土
2　黄灰色粘質土
3　灰褐色粘質細砂

第66図　土壙27（1/30）**・出土遺物**（1/4）

土壙28（第67・68図、図版23－５）

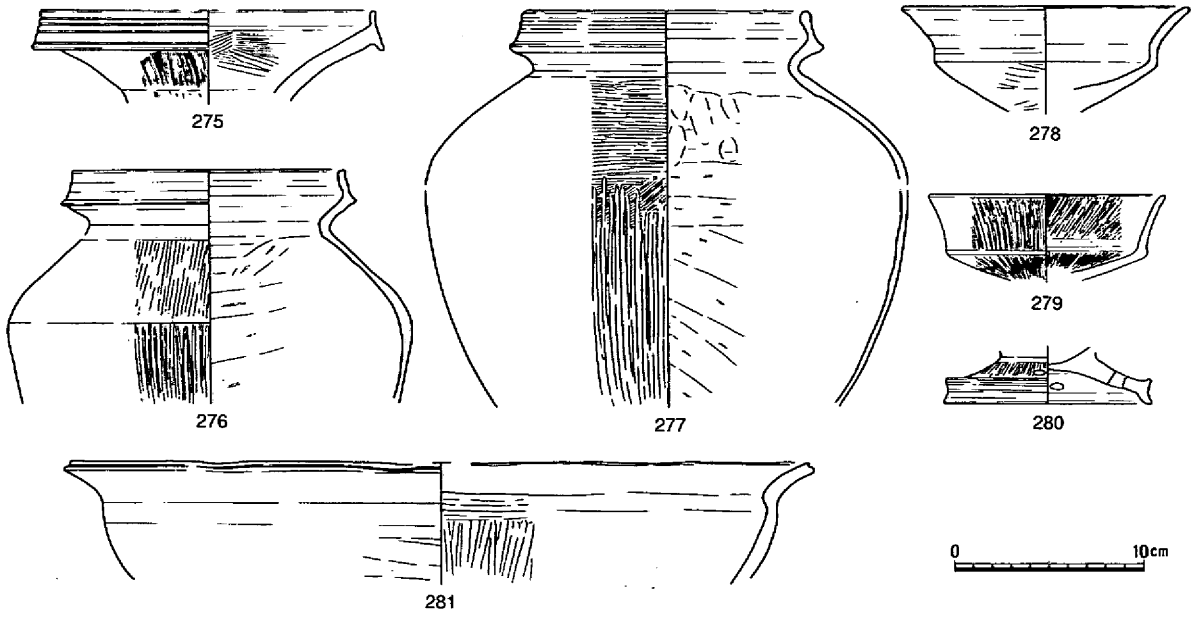
土壙28は、調査区東側部の中央付近に位置する。切り合い関係は、弥・中・Ⅲの竪穴住居２を切り、古墳時代の竪穴住居11に切られる。土壙の規模は、長軸長256cm、短軸長240cmで、平面形状は隅丸方形である。深さは確認面から44cmを測り、断面形状はⅢ形である。出土遺物は多く、**275**は壺か器台の口縁である。**276**・**277**は壺で、頸が短いタイプである。どちらも外面はヘラミガキで丁寧に調整され、口縁端部はやや内側に立ち上がる。**278**・**279**は高杯で、**278**は端部が外反し、**279**は直に立ち上がる。**281**は鉢である。いずれも弥・後・Ⅲになり、土壙の時期も同じになると思われる。（小林）





1　暗褐灰色粘質微砂
2　暗灰色粘質細砂

第67図　土壙28（1/40）



第68図　土壙28出土遺物（1/4）

土壙29（第69図）

土壙29は、調査区西にある溝10と11の中程にある。短径51cm、長径58cmのほぼ方形を呈し、深さは、1段目が6cmほどあり、さらに41cmを測る。土壙北寄りに径20cmほどが深くなる。土壙内からは弥・中・Ⅲ以降の土器片が出土している。

土壙30・31（第69図）

両土壙とも調査区中央部南端に位置する。土壙30は、短径50cm、長径60cm、深さ35cmを測る。西側を土壙85に切られている。土壙31は、短径58cm、長径61cmでほぼ円形を呈する。深さは41cmを測る。両土壙墓内から弥・中・Ⅲ以降の土器片が出土している。これらの土壙に切られているがこの下層には別の土壙が存在する。出土遺物は見られない。

土壙32・33（第69図）

調査区中央部中央にあり、土壙33が32を切っている。土壙32は、短径26cm前後、長径38cm、深さ30cmを測る。土壙33は、短径46cm、長径63cm、深さ19cmを測る。土壙内から弥・中・Ⅲ以降の土器片が出土している。

土壙34（第69図）

調査区東部北端にあり、短軸42cm、長軸80cm、深さ17cmを測る。北側径40cmがわずかに深くなる。土壙内から弥・中・Ⅲ以降の土器片が出土している。

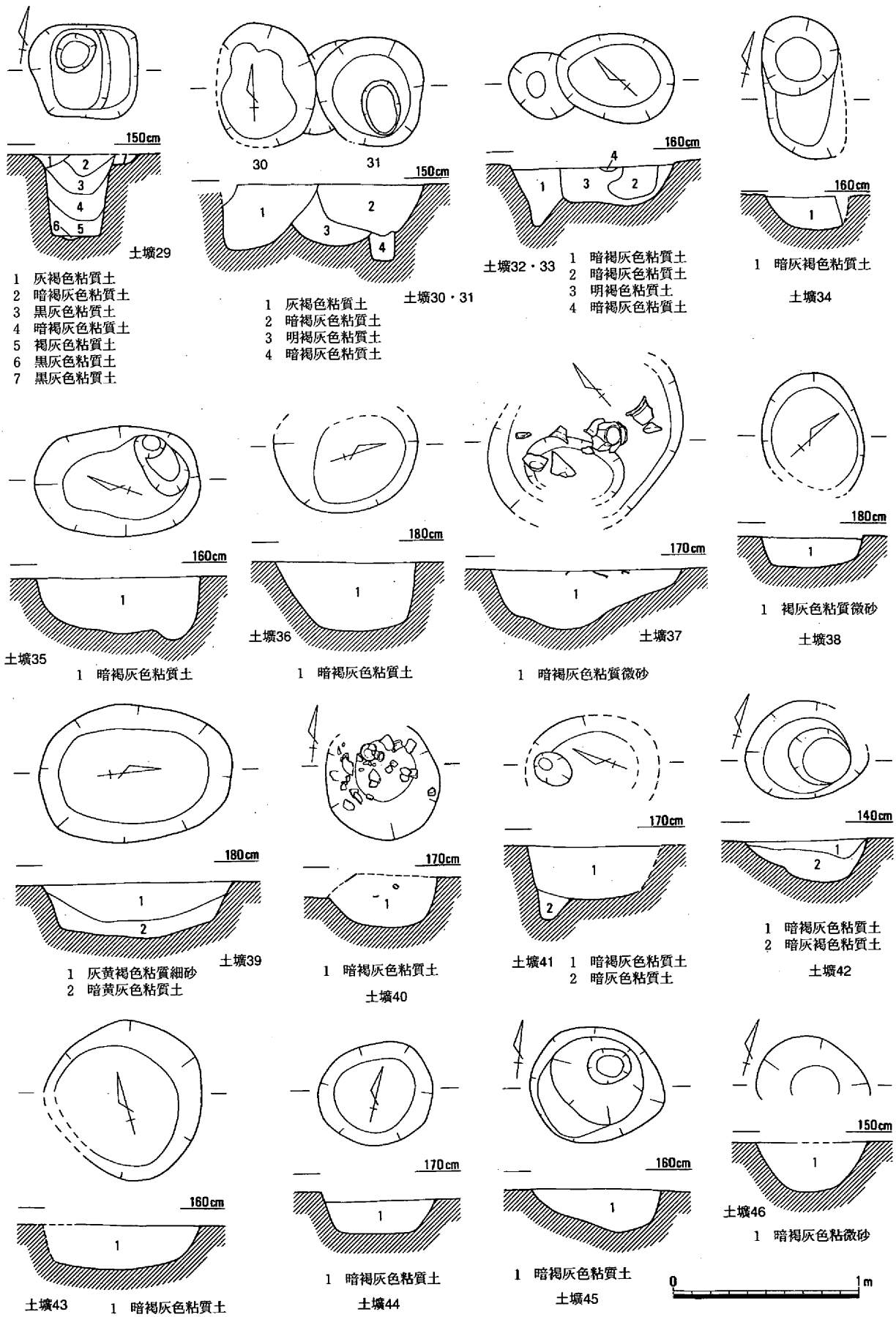
土壙35（第69図）

調査区中央部南よりにあり、短径59cm、長径89cm、深さ32cmの少し大降りの土壙である。土壙内から弥・中・Ⅲ以降の土器片が出土している。

土壙36（第69図）

調査区東部南よりにあり、短径66cm、長径76cmのほぼ円形を呈する。深さは37cmを測る。土壙内から弥・中・Ⅲ以降の土器片が出土している。

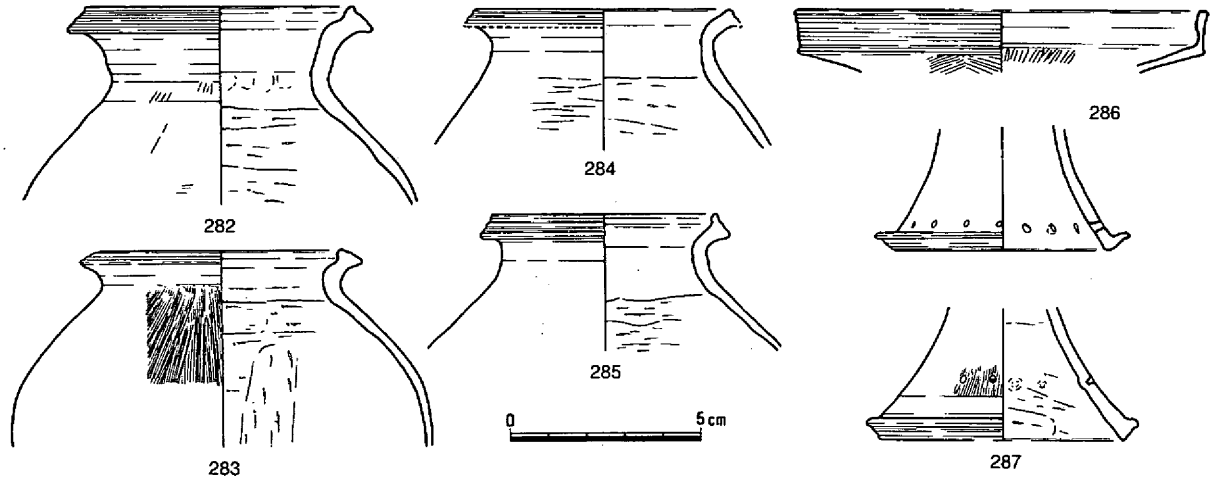
（伊藤）



第69図　土壙29～46（1/30）

土壙37（第69・70図）

調査区東部南よりにあり、短径80cm、長径90cmの円形を呈し深さ39cmを測る。土壙198を切り、土壙200に切られている。土壙内からは、**282～285**の壺、**286・287**の高杯などが出土している。壺の内面は頸部下までヘラケズリが行われ、高杯部口縁は直高し、脚部端部に円孔を穿っている。これらからこの土壙の時期は、弥・中・Ⅲから後・Ⅰに含まれる。



第70図　土壙37出土遺物（1/4）

土壙38（第69図）

調査区東部中央にあり、土壙39に切られている。短径50cm、長径76cmの楕円形を呈する。深さ16cmを測る。土壙内から弥・中・Ⅲの土器片が出土している。

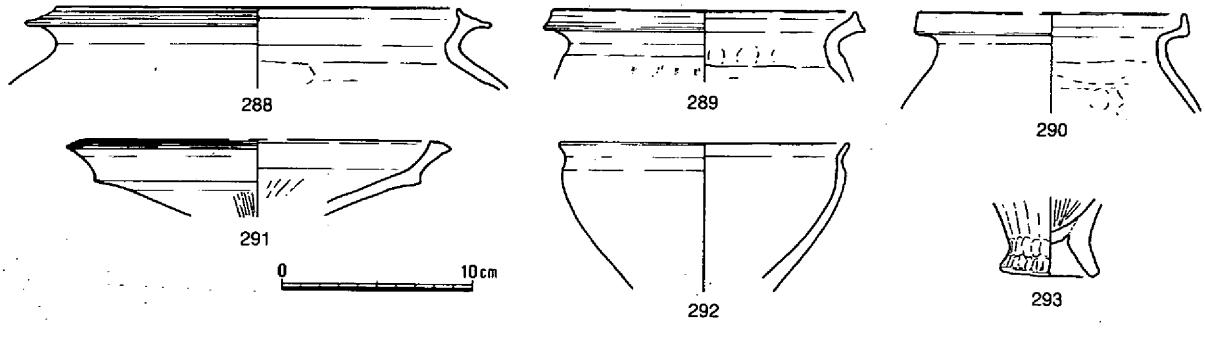
土壙39（第69図）

土壙38の南側に位置し、土壙38を切っている。短径74cm、長径104cmで楕円形を呈する。深さ30cmを測る。土壙内から弥・中・Ⅲ以降の土器片が出土している。

土壙40（第69・71図）

調査区西部北端にあり、溝12の肩部に位置している。短径61cm、長径66cmほどで、深さ29cmを測る。土壙内は、暗褐灰色粘質土の単層で、内部から**288**の壺、**289・290**の甕、**291**の高杯、**292**の鉢、**293**の製塩土器の脚部などが出土している。これらからこの土壙の時期は、弥・中・Ⅲから後Ⅰ・Ⅱまでのものがあるが、中でも後期Ⅱが主流である。

（伊藤）



第71図　土壙40出土遺物（1/4）

土壙41（第69図）

調査区西部の溝12に西半部を、溝９に東・南半部を切られている。推定56～70cm前後の円形になるものと思われる。深さは28cmを測る。土壙内からは、弥・後・Ⅲの土器片が出土している。

土壙42（第69図）

調査区西半部中央、溝10の東にある。短径53cm、長径66cmのほぼ円形を呈し、深さ21cmを測る。土壙内からは、弥・後・Ⅱの土器が出土している。

土壙43（第69図）

調査区西半部南よりに位置し、建物２の北側列中央ピットと重なり、土壙47を切って作られている。短径86cm、長径87cmの円形を呈する。深さは23cmを測る。土壙内からは、弥・後・Ⅰ～Ⅱの土器が出土しているが、後期Ⅱが主流である。

土壙44（第69図）

土壙43の東側に位置し、短径54cm、長径62cmの円形を呈する。深さ18cmを測る。土壙内からは弥・後の小片が出土している。

土壙45（第69図）

調査区西半部南よりに位置し、建物２東側列中程にある。短径62cm、長径72cmの円形を呈する。深さ26cmを測る。土壙内からは弥・後の小片が出土している。

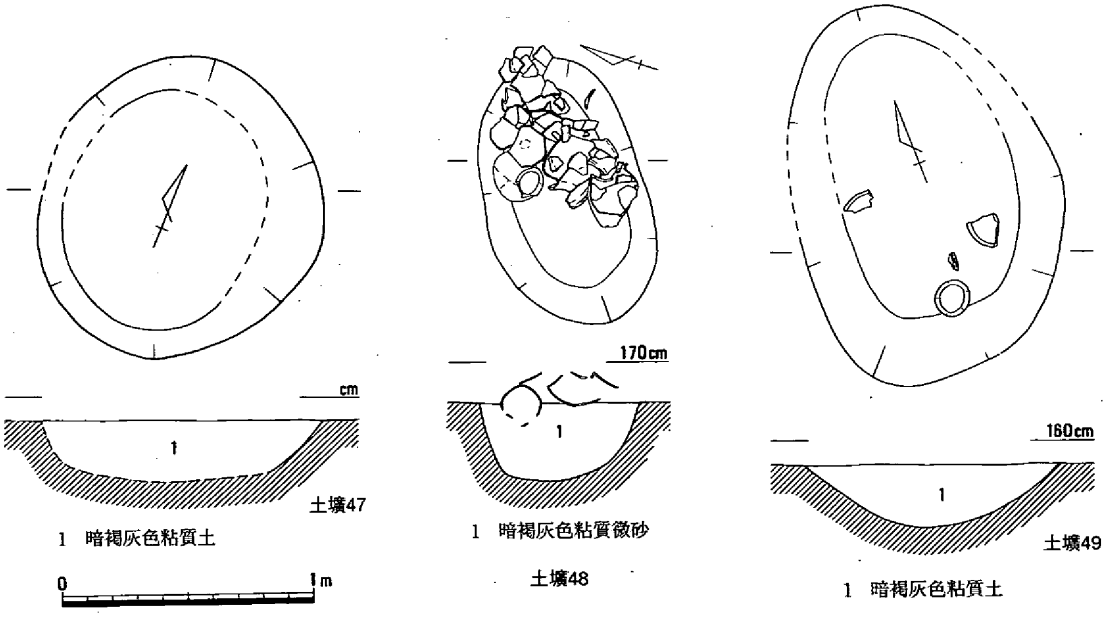
土壙46（第69図）

調査区西半部中程、溝11の西側に位置する。南半部を欠くが、短径42cm前後、長径60cmの円形を呈する。深さは26cmを測る。土壙内からは弥・後の小片が出土している。

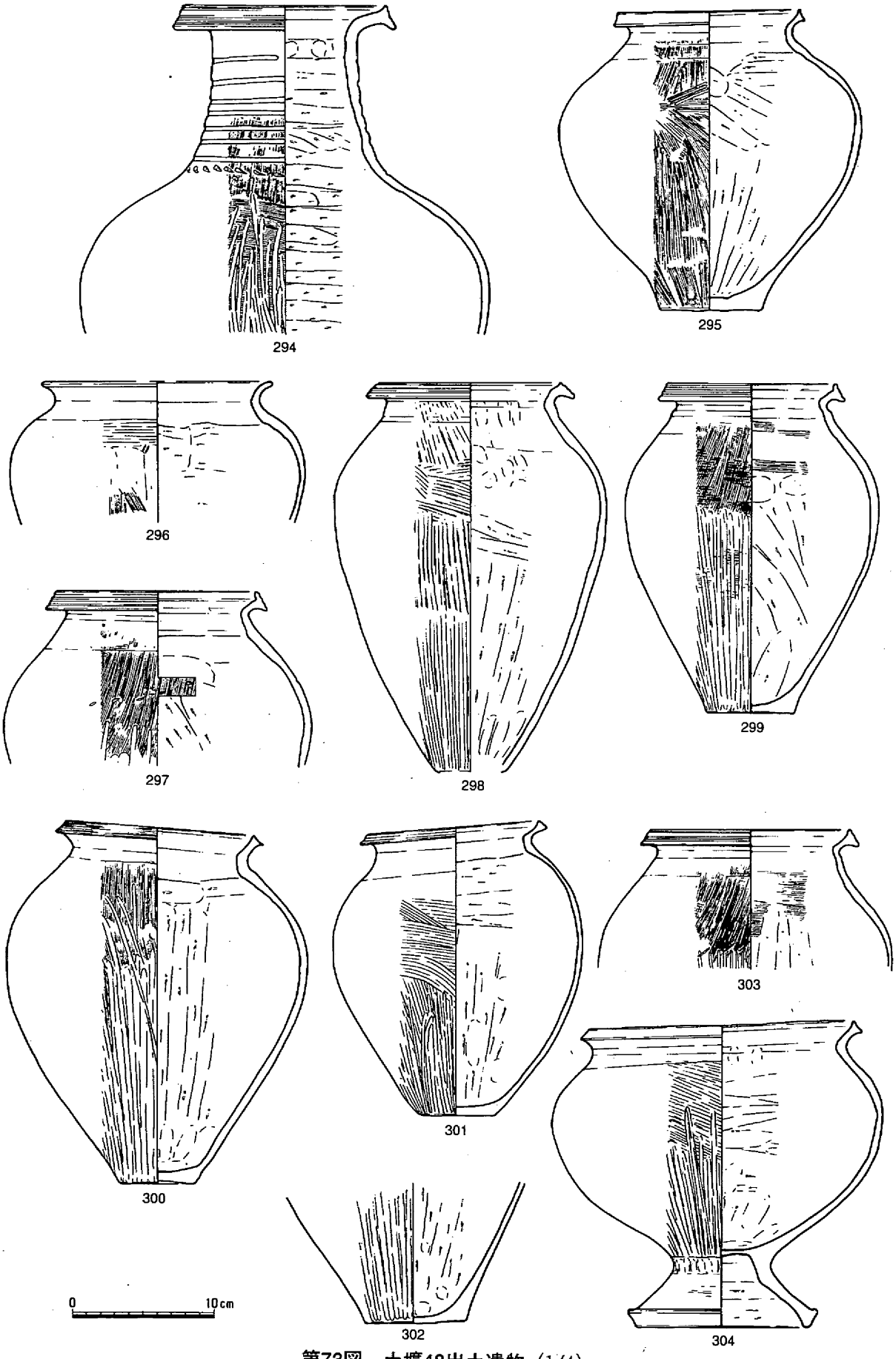
土壙47（第72図）

土壙43と重なり土壙43に切られている。短径112cm、長径121cmで土壙43より一回り大きい円形を呈する。深さは24cmを測り、土壙43とほとんど変わりがない。土壙内からは、弥・後の小片が出土している。

（伊藤）



第72図　土壙47～49（1/30）



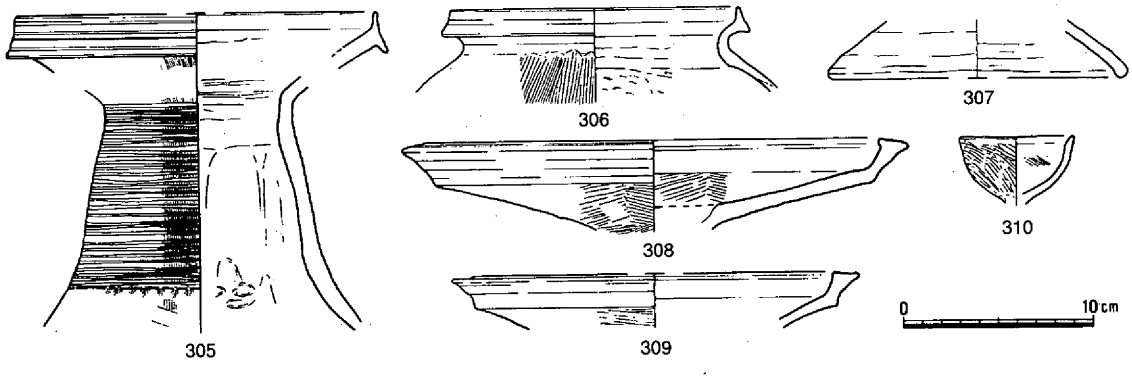
第73図　土壙48出土遺物（1/4）

土壙48（第72・73図、図版24－２）

調査区西半部の最北端、溝11の西肩部にあり、溝11を切って作られている。短径64cm、長径111cmのほぼ東西に長い楕円形を呈する。深さは31cmを測り、埋土は暗褐灰色粘質微砂層である。土壙上面から**294**の壺、**295**～**303**の甕、**304**の台付き鉢などが一括で出土している。**294**の壺は、頸部にヘラによる螺旋状沈線、肩部に刺突文をめぐらす。甕は口縁端部を上下に拡張するものの大（**297**・**298**）小（**299**）と、余り拡張しないもの（**295**・**300**～**303**）、外反するもの（**296**）など数種がある。これらの出土土器からこの土壙の時期は、弥・後・Ⅰのものである。

土壙49（第72・74図）

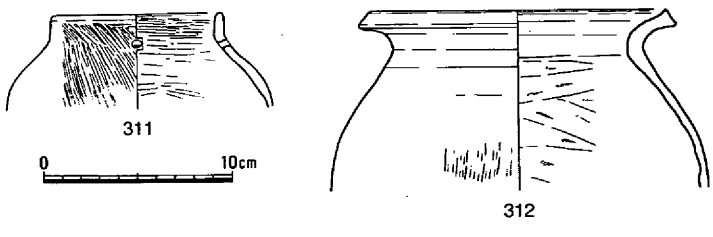
土壙48の南に位置し、この土壙も溝11を切って作られている。短径105cm、長径151cmの楕円形を呈する。深さは25cmで、土壙の埋土は暗褐灰色粘質土である。土壙内からは、**305**の壺、**306**の甕、**308**・**309**の高杯、**310**の小型の鉢形土器などが出土している。土壙内からは弥・後・Ⅰ～Ⅲのものが出土している。しかしこの土壙の時期は、周辺の状況や土器量を多さなどから、後期Ⅰと考えるのが妥当である。



第74図　土壙49出土遺物（1/4）

土壙50（第75・76図）

土壙49の南、調査区南端に位置し、この土壙も溝11を切って作られている。短径134cm、長径150cm、深さ64cmを測る。土壙内から**311**の無頸壺、**312**の甕などが出土している。時期は弥・後・Ⅰ～Ⅲに含まれる。

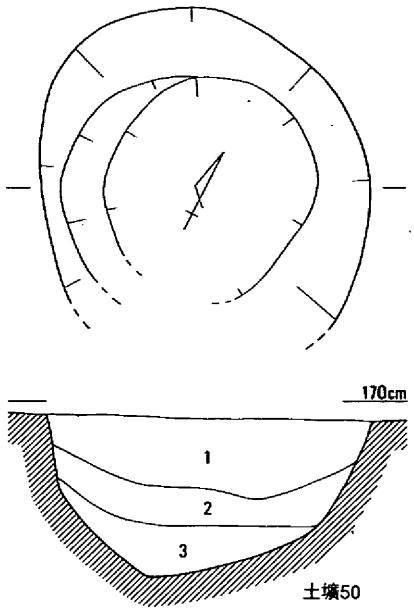


第75図　土壙50出土遺物（1/4）

土壙51（第76・77図）

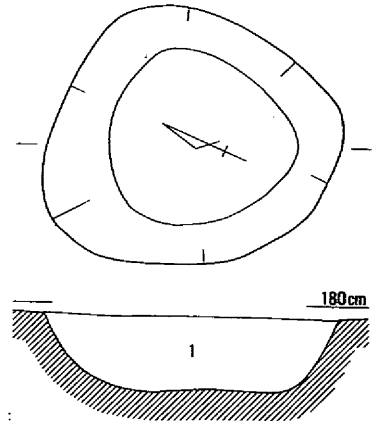
調査区西半部北端に位置し、溝11を切って作られている。短径104cm、長径108cmの略円形を呈する。深さは27cmを測り、断面形状はⅢ形を呈する。土壙内からは、**313**～**316**の甕口縁部および底部、**317**の高杯脚部、**318**の製塩土器脚部などが出土している。これらの土器は弥・後・Ⅰ～Ⅱに含まれるが、後期Ⅱが主流である。

（伊藤）



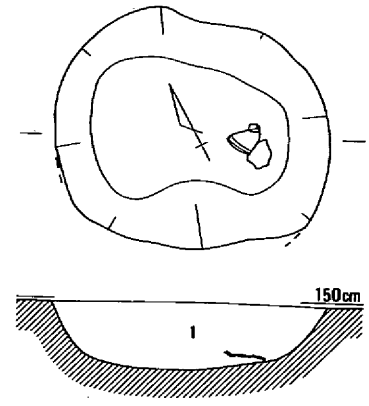
土壙50

1　灰色粘質土
2　暗灰色粘質土
3　黒灰色粘質土



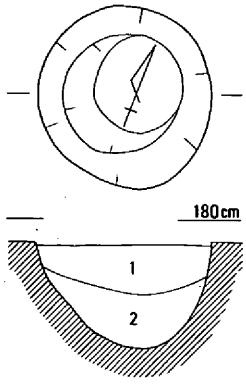
1　暗灰褐色粘質土

土壙51



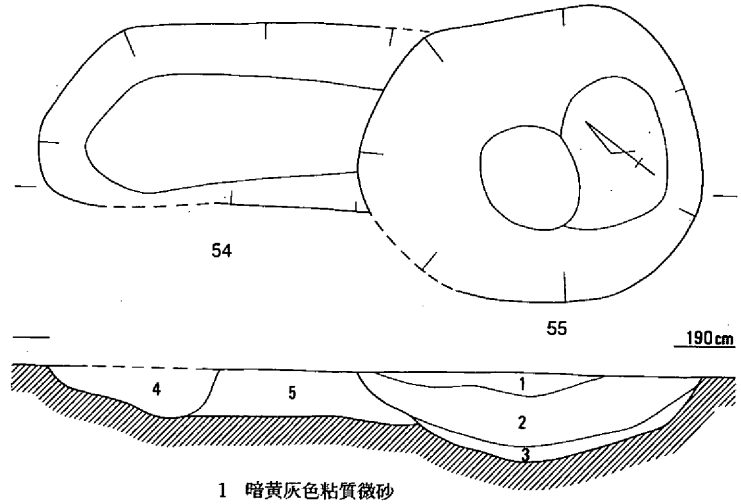
1　暗灰褐色粘質土

土壙52



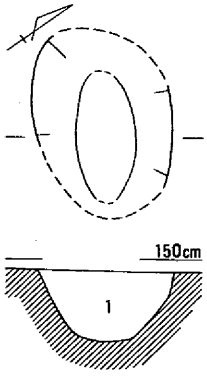
1　暗褐灰色粘質土
2　暗灰色粘質微砂

土壙53



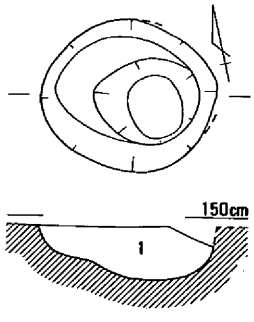
1　暗黄灰色粘質微砂
2　黒灰色粘質微砂
3　暗灰色粘質微砂
4　暗黄灰色粘質微砂
5　暗褐灰色粘質微砂

土壙54・55



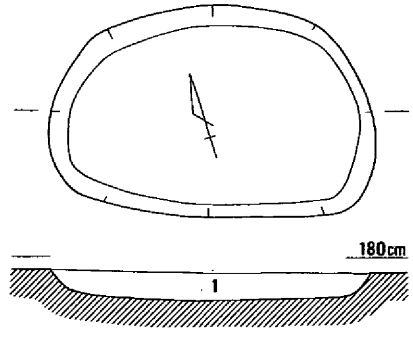
1　暗褐灰色粘質土

土壙56



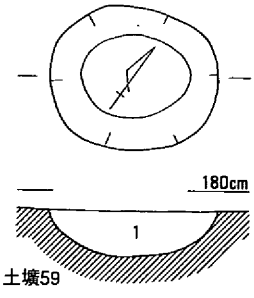
1　暗灰褐色粘質土

土壙57



1　灰黄褐色粘質細砂

土壙58

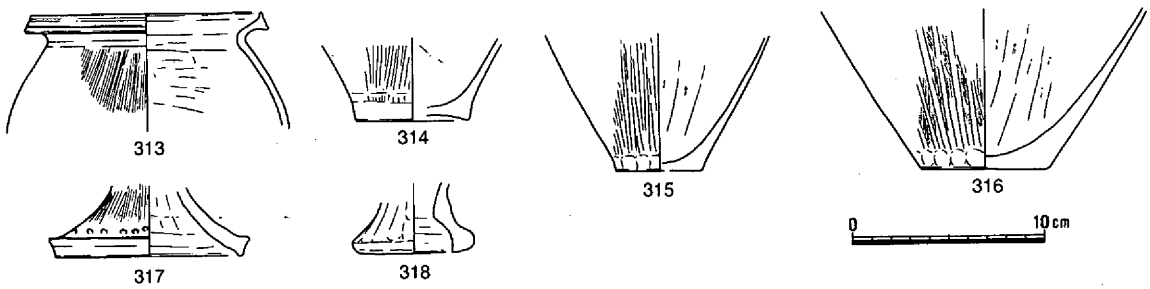


土壙59

1　暗灰褐色粘質微砂

0　1m

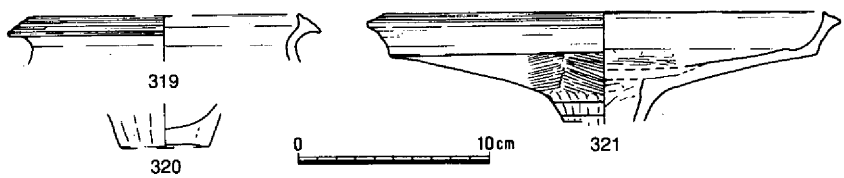
第76図　土壙50～59（1/30）



第77図　土壙51出土遺物（1/4）

土壙52（第76・78図）

調査区西半部北側に位置し、土壙58・65に切られている。短径97㎝、長径108㎝の不正円形を呈する。深さは26㎝を測る。土壙内から**319**・**320**の甕、**321**の高杯が出土している。時期は弥・後・Ⅰである。



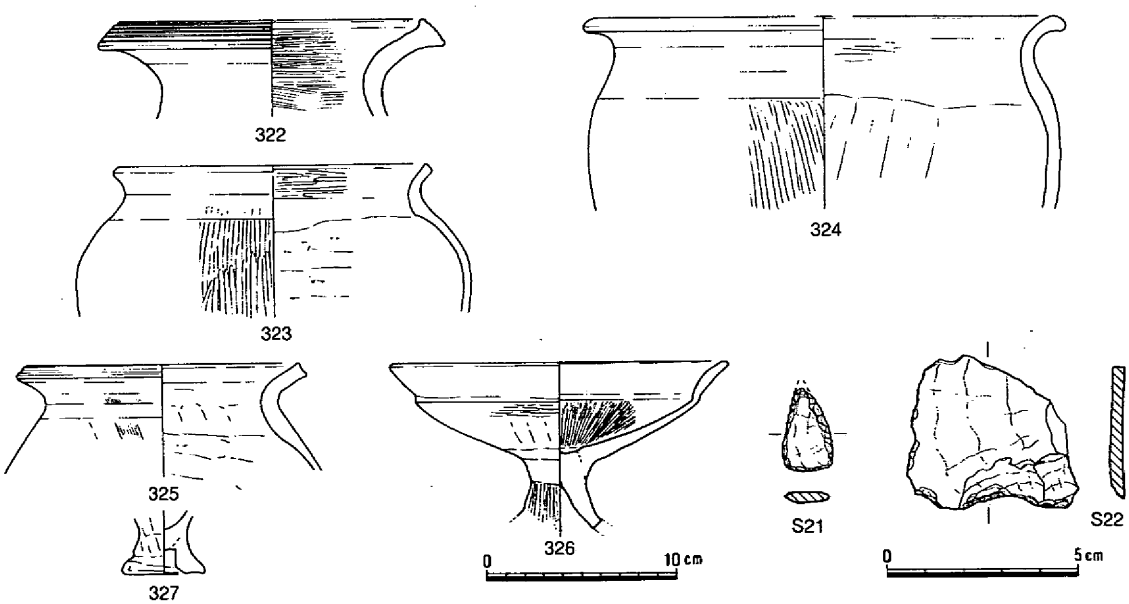
第78図　土壙52出土遺物（1/4）

土壙53（第76図）

調査区西方部中程にあり、溝11を切って作られた土壙である。短径68㎝、長径70㎝、のほぼ円形を呈し、深さ41㎝を測る。出土遺物は弥・後・Ⅲのものである。

土壙54・55（第76・79図、図版25）

調査区西方部北側、溝11の東に位置し、土壙54は土壙55に西南部の一部を土壙58に切られている。土壙54は短軸73㎝、長軸推定130㎝前後の長方形になる。深さは18㎝を測る。土壙55は短径55㎝、長径約76㎝の円形を呈し、深さは36㎝を測る。両土壙内からは、**322**の壺、**323**～**325**の甕、**326**の高杯、**327**の製塩土器脚部、**S21**はサヌカイト石鏃、**S22**はサヌカイトのスクレイパーなどが出土している。出土遺物は弥・後Ⅰ～Ⅲまでのものを含む。（伊藤）



第79図　土壙54・55出土遺物（1/4・1/2）

土壙56（第76図）

調査区西半部の北側、溝11の東にあり、土壙57・55・60などに切られている。短径55cm、長径推定76cm前後の卵形を呈する。深さは28cmを測る。弥・後の小片が出土している。

土壙57（第76図）

土壙56の北側にあり、土壙55・柱穴などに切られ、土壙56を切っている。短径59cm、長径68cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。弥・後の小片が出土している。

土壙58（第76図）

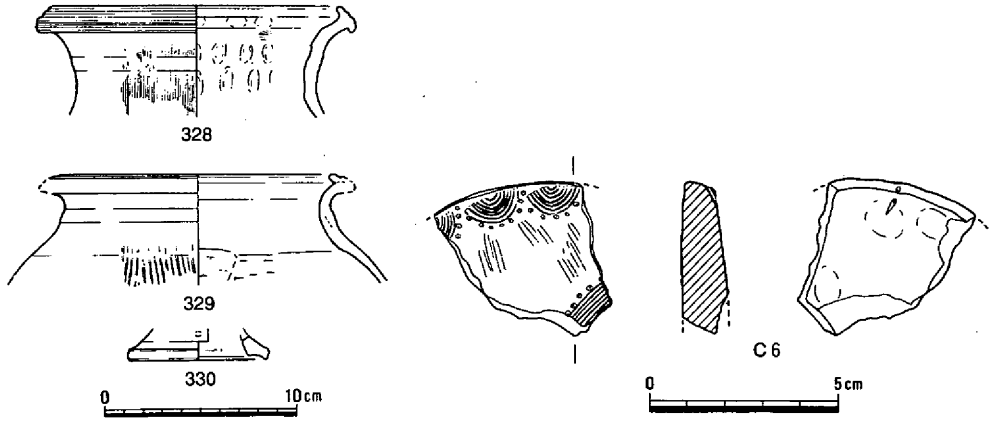
調査区西半部北に位置し、土壙54を切っている。短径84cm、長径129cm、深さ10cmの浅い土壙である。土壙内からは弥・後・Ⅰの土器片が出土している。

土壙59（第76図）

調査区西半部北より、溝11の東側に位置する。短径57cm、長径66cmの円形を呈する。深さは17cmを測る。土壙内からは弥・後・Ⅱと考えられる土器片がある。

土壙60（第80・81図）

調査区西半部中程、溝11の東側に位置する。土壙55に切られ、土壙56を切っている。短軸推定118cm、長軸推定171cmの不正円形を呈する。深さ30cmを測る。土壙内から**328**の壺、**329**の甕、**330**の高杯脚部、**Ｃ６**の分銅形土製品が出土している。出土遺物の時期は弥・後・Ⅰのものである。分銅形土製品は上半部右側部分の破片で上弧に櫛描きによる６条の弧文・刺突文、下辺には６条の櫛描き沈線・刺突文が施されている。厚さは上辺で１cm、下端部で1.2cmである。



第80図　土壙60出土遺物（1/4・1/2）

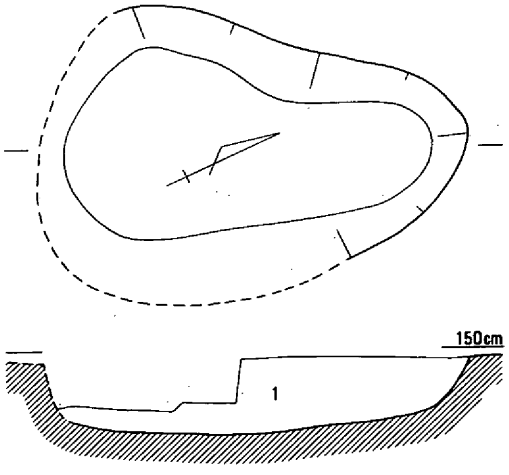
土壙61（第81・82図、図版25）

調査区西半部の南側、溝11の東側に位置している。短軸65cm、長軸推定125cmの小判形を呈する。深さは22cmを測る。土壙内からは**331**の壺、**332**・**333**の甕、**334**・**335**の高杯、**336**の製塩土器脚部などが出土している。出土遺物の時期は、弥・後・Ⅳである。

土壙62・63（第81図）

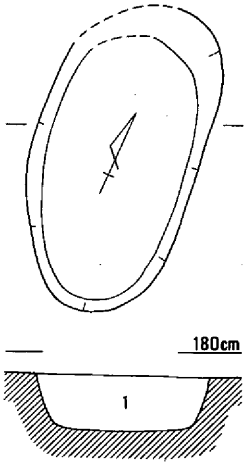
調査区西半部南端に位置し、土壙62は土壙63を切っている。土壙62は推定短径54cm、推定長径59cmである。土壙63は直径76cm前後の円形を呈す。深さは49cmを測る。両土壙から弥・後・Ⅱを中心とする土器片が出土している。

（伊藤）



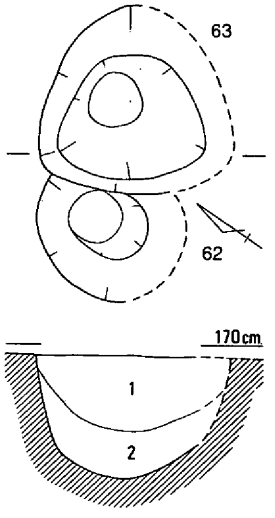
1　暗褐灰色粘質土

土壙60



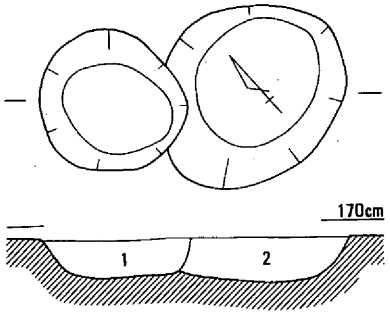
1　暗灰褐色粘質土

土壙61



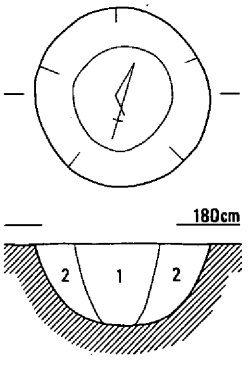
1　暗黄褐色粘質土
2　淡黄褐色粘質粗砂

土壙62・63



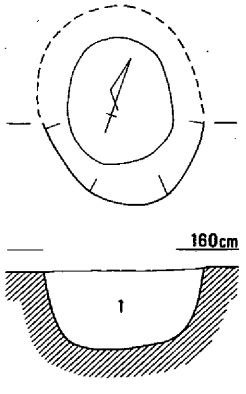
1　暗褐灰色粘質微砂
2　暗褐灰色粘質土

土壙64・65



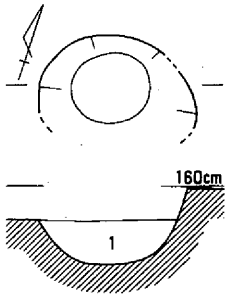
1　暗灰黄色粘質微砂
2　暗灰褐色粘質微砂

土壙66



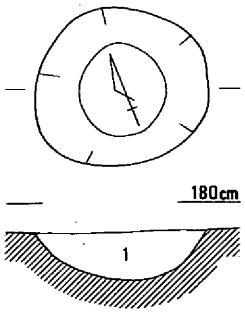
1　暗褐灰色粘質土

土壙67



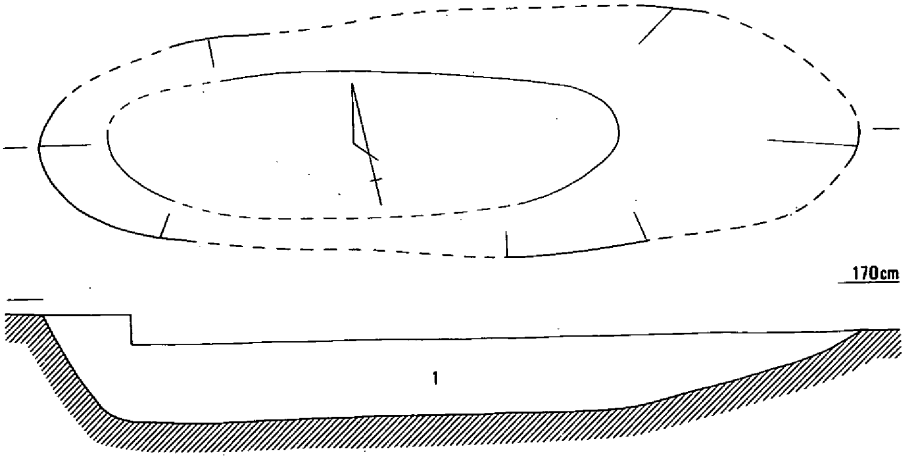
1　暗褐灰色粘質微砂

土壙68



1　暗褐灰色粘質微砂

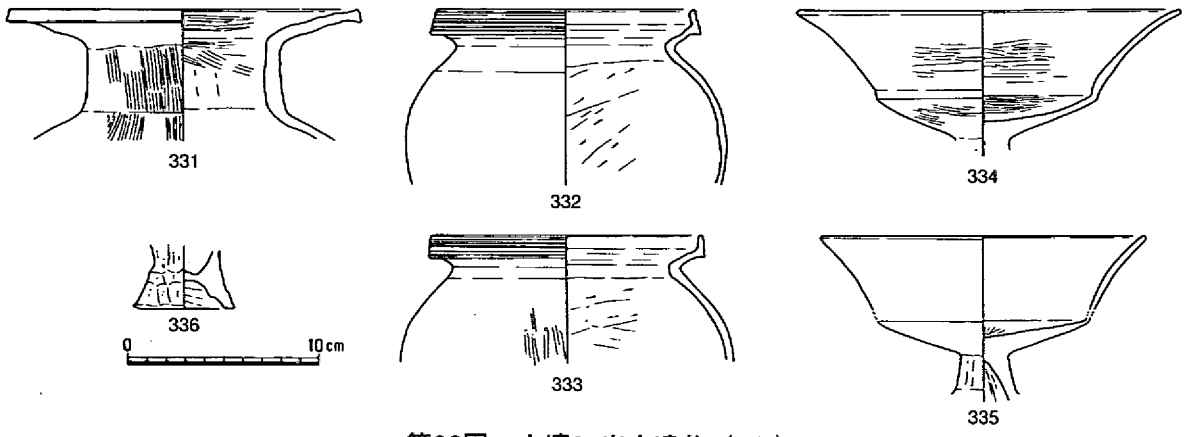
土壙69



1　暗褐灰色粘質粗砂

土壙70

第81図　土壙60～70（1/30）



第82図　土壙61出土遺物（1/4）

土壙64・65（第81図）

調査区西半部北辺、溝11の東側に位置する。土壙64は土壙65を切っている。土壙64の短径69cm、長径83cmの円形を呈する。深さは18cmを測る。土壙65は短径54cm、長径59cmの円形を呈し、深さは13cmを測る。両土壙からは弥・後・Ⅱを中心とする土器片が出土している。

土壙66（第81図）

調査区西半部中程、溝11の東側に位置し、直径70cmの円形を呈する。深さは33cmを測る。土壙内からは弥・後・Ⅱの土器片が出土している。

土壙67（第81図）

土壙66の東に位置する。短径58cm、推定長径68cm、深さ32cmで、円形を呈する。弥・後の土器片が含まれる。

土壙68（第81図）

調査区西半部中程にあり、南半の肩部を欠く。推定短径40cm、長径64cm、深さ17cmを測る。弥・後の土器片が含まれる。

土壙69（第81図）

土壙67の東側にあり、短径62cm、長径69cm、深さ18cmを測る。弥・後・Ⅰの土器片が出土している。

土壙70（第81・83図、図版25）

調査区西半部南端に位置し、竪穴住居4を切り、土壙78などに切られている。推定短軸98cm、長軸324cm、深さ42cmを測る。土壙内からは**337～341**の甕、**342～344**の高杯などが出土している。これらは弥・後・Ⅱを中心とするものである。この土壙は、規模から見て土壙墓の可能性がある。

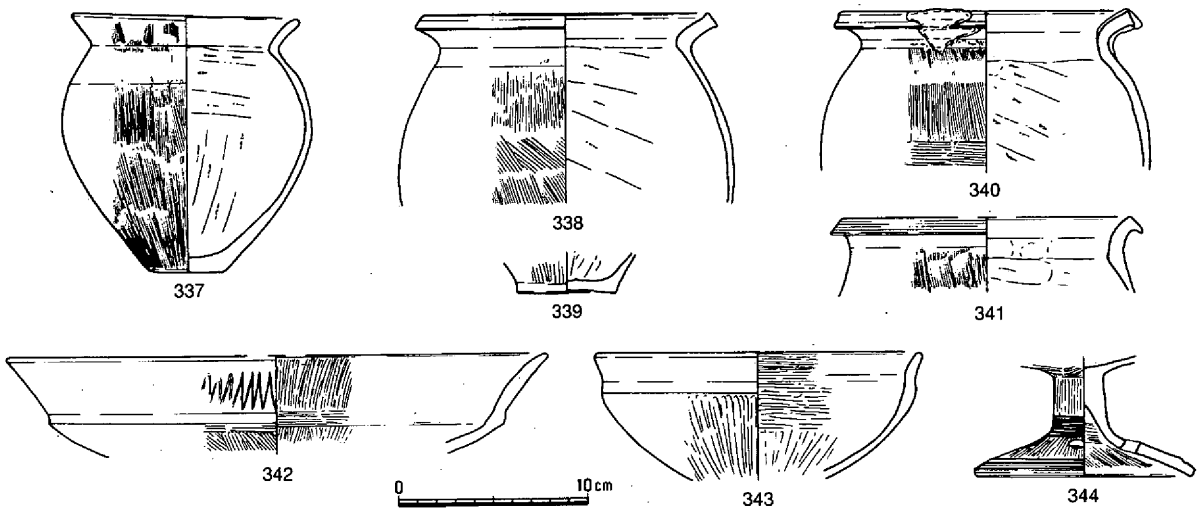
土壙71（第85図）

調査区西半部中程にあり、竪穴住居4のすぐ北に位置し、短径66cm、長径72cmのほぼ円形を呈する。深さは37cmを測る。土壙内からは弥・後・Ⅰの土器が出土している。

土壙72（第85図）

調査区西半部中程、溝11の東側に位置する。短軸68cm、推定長軸102cmの楕円形を呈する。深さは19cmを測る。土壙北よりは、ピットに切られている。土壙内からは、弥・後・Ⅰの土器が出土している。

（伊藤）



第83図　土壙70出土遺物（1/4）

土壙73（第85図）

土壙72の西南に接している。短径52cm、長径55cmの円形を呈する。深さは25cmを測る。土壙内からは、弥・後・Ⅰの土器が出土している。

土壙74（第85図）

土壙73の南、溝11の東肩に接している土壙61を切っている。短径62cm、長径72cmの円形を呈する。深さは29cmを測る。弥・後の土器片が出土している。

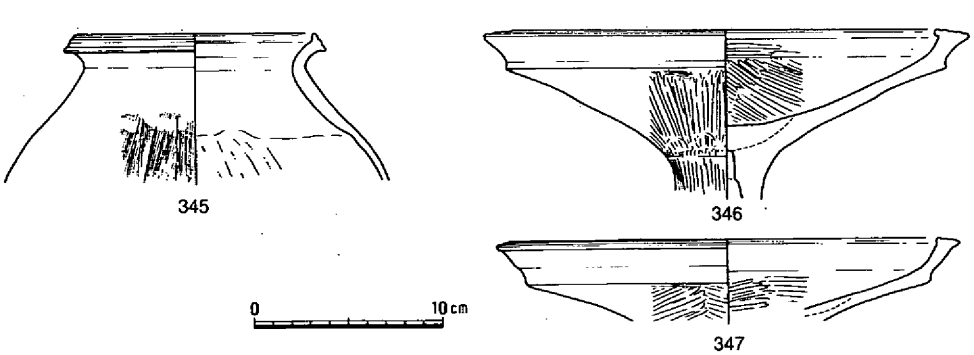
土壙75（第84・85図）

調査区西半部、竪穴住居4内に位置し土壙78の北側に接している。推定短軸50cm、長軸73cmの小判形を呈する。深さは17cmを測る。土壙内からは、**345**の甕、**346**・**347**の高杯などが出土している。これらの時期は弥・後・Ⅰのものである。（伊藤）

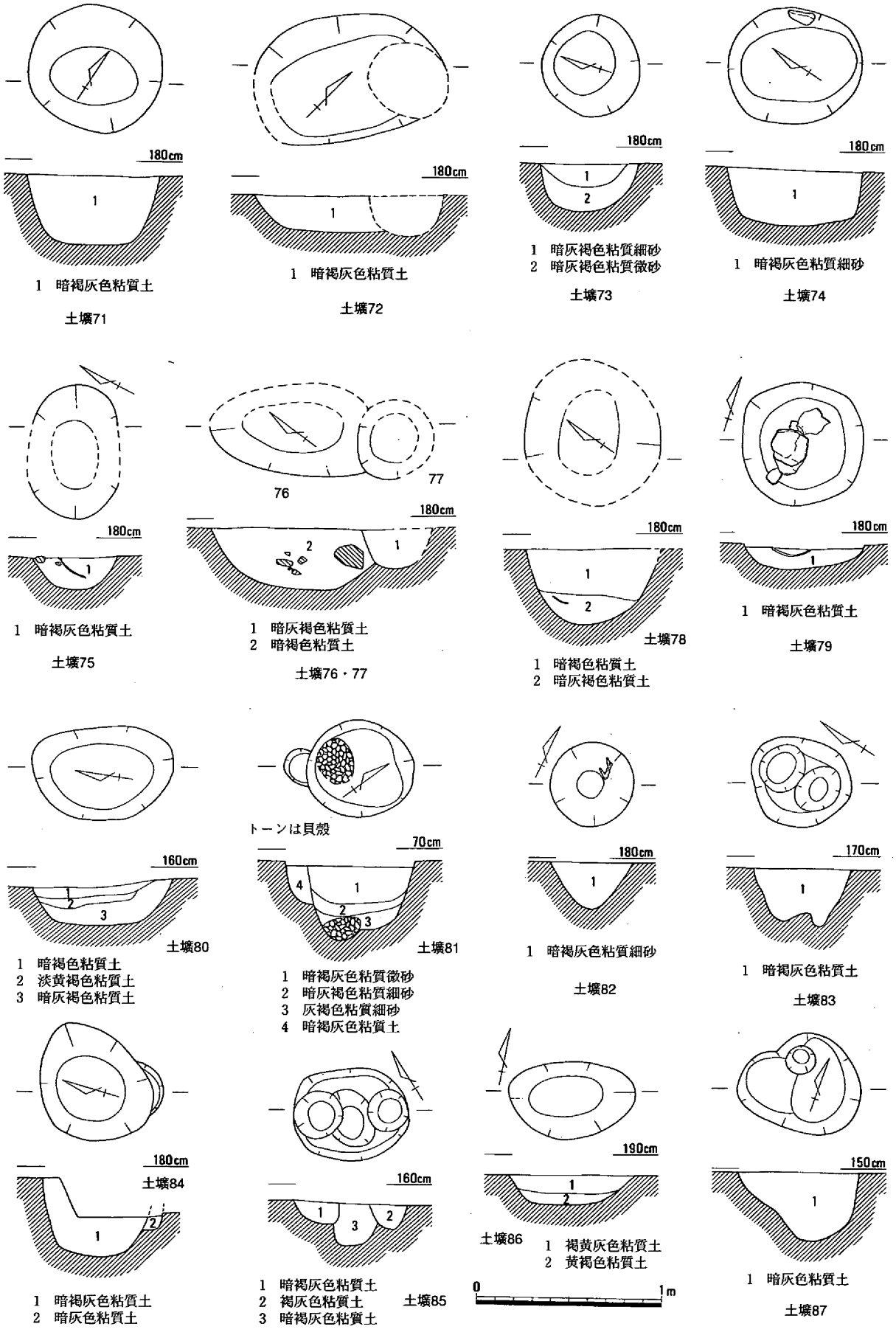
土壙76・77（第85・86図、図版25）

土壙76は、調査区西方部南端に位置し、土壙70を切り、土壙77に切られている。推定短軸50cm、推定長軸88cmの南北に長い楕円形を呈す。深さは33cmを測る。土壙内には大小の礫が多く含まれていた。

土壙77は、土壙62に切られ、土壙77を切っている。推定短径40cm、推定長径43cmのほぼ円形を呈す



第84図　土壙75出土遺物（1/4）

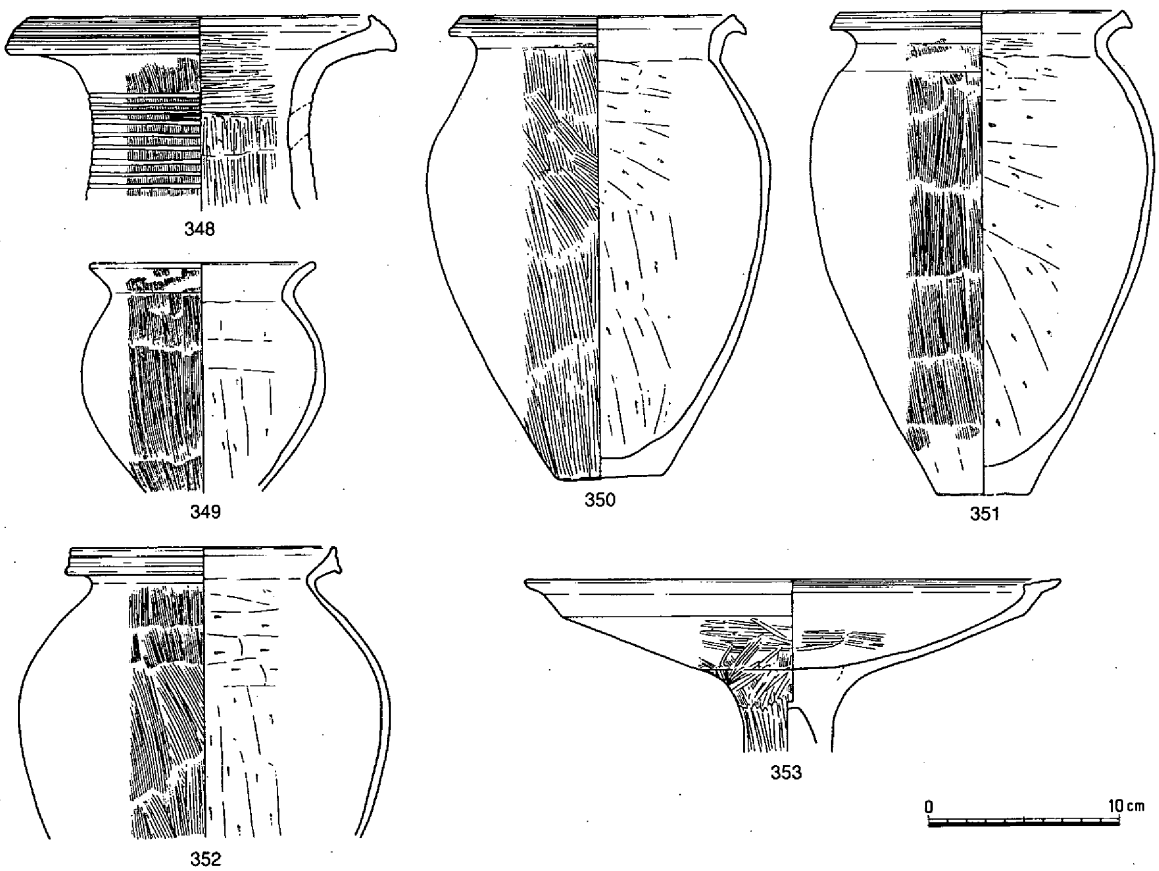


第85図　土壙71～87（1/30）

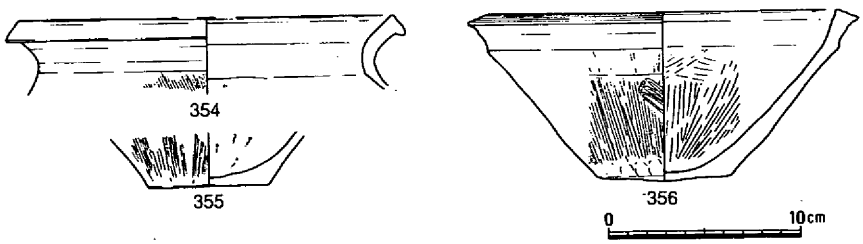
る。深さは21cmを測る。主に土壙76が中心であるが、両土壙からは、第86図**348**の壺、**349**～**352**の甕、**353**の高杯などが出土している。これらは弥・後・Ⅰの特徴を持った土器である。

土壙78（第85・87図）

土壙78は、土壙76の東側に位置し、土壙70を切って作られている。短径72cm、推定長径80cmのほぼ円形を呈する。深さは41cmを測る。土壙内からは、第87図**354**・**355**の甕、**356**の鉢が出土している。これらは弥・後・Ⅰ・Ⅱに含まれる。（伊藤）



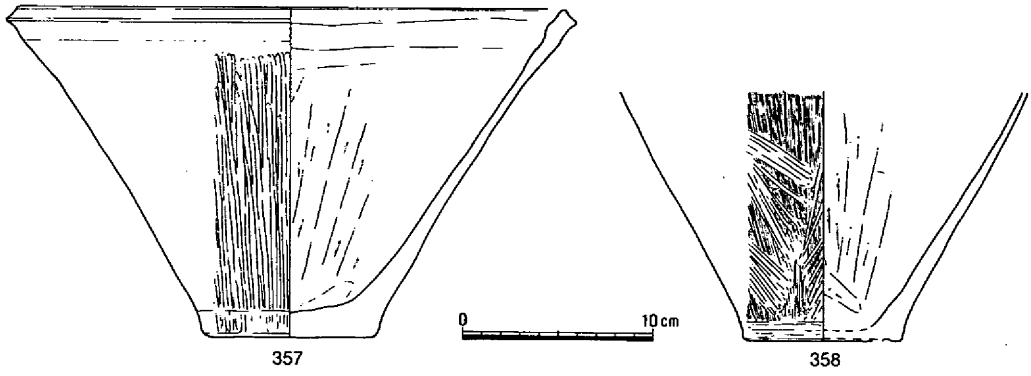
第86図　土壙76・77出土遺物（1/4）



第87図　土壙78出土遺物（1/4）

土壙79（第85・88図、図版25）

調査区西方部北端に位置し、短径64cm、長径67cmのほぼ円形を呈する。深さは12cmを測る。土壙内からは、第88図**357**の鉢、これは口径30cm、高さ17cmを測る大型の鉢である。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリによって調整されている。**358**は甕の底部が出土している。これらは弥・後・Ⅰ～Ⅱに含まれる。



第88図　土壙79出土遺物（1/4）

土壙80（第85図）

調査区西方部南端に位置し、竪穴住居4を切っている。短径50cm、長径74cmの小判形を呈する。深さは22cmを測る。土壙内から弥・後の土器片が出土している。

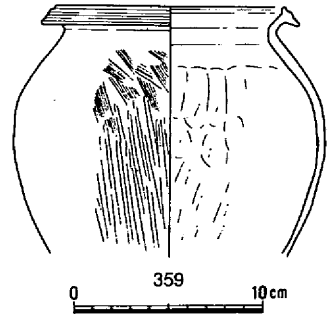
土壙81（第85図）

調査区西方部中程、建物1のすぐ西側に位置し、土壙82に切られている。短径52cm、長径56cmのほぼ円形を呈する。深さは35cmである。底部西辺からハイカイ・ヤマトシジミなどの貝類がナイロン1袋ほど認められた。詳細については、小林園子氏に分析をお願いし、その結果については別項を頂いているので後章を参照されたい。

土壙内からは、弥・後・Ⅰ・Ⅱの土器片が出土している。

土壙82（第85・89図）

土壙82は、土壙81の北側に位置し、土壙81を切っている。直径45cmの円形を呈し、深さは25cmである。土壙内からは、第89図**359**の甕が出土している。これは口縁端部を上下に拡張し、凹線がめぐる。体部外面は上部がハケ、下部はヘラで調整を行い、内面は、体部中程からヘラケズリを行っている。弥・後・Ⅰの段階のものである。



第89図　土壙82出土遺物（1/4）

土壙83（第85図）

調査区西方部中程、建物1南側列の西にあり、短径48cm、長径56cmの円形を呈する。深さは27cmを測る。土壙内からは弥・後の土器片が出土している。

土壙84（第85図）

調査区西方部南端竪穴住居4の東側に位置し、短径56cm、長径67cmの不正円形を呈する。深さは40cmを測る。土壙内からは、弥・後Ⅰ・Ⅱの土器が出土している。（伊藤）

土壙85（第85図）

土壙84の東側にある遺構である。平面形は楕円形を呈し、遺構面からの深さは22cmである。東西方向に円形、楕円形の窪みが3基連なっており複雑な形状を持つ。時期は、弥・後・Ⅰである。

土壙86（第85図）

土壙32の東に位置する遺構である。平面形は東西に長軸をもつ楕円形を呈し、遺構面からの深さは15cmである。床面は平坦で、埋土は2層に分かれる。時期は、弥・後・Ⅰであろう。

土壙87（第85図）

土壙31の東に位置する。平面形は不整円形を示し、遺構面からの深さは36cmを測る。立ち上がりの形状は、東側はほぼ垂直であるが、西側にはテラス状の段を持つ。時期は、弥・後・Ⅱである。

土壙88（第91図）

建物1の北に位置する。平面形は円形をなし、遺構面からの深さは、45cmを測る。床面は中央やや南側が少し深くなる。当遺構の時期は、弥・後・Ⅰの可能性が高い。

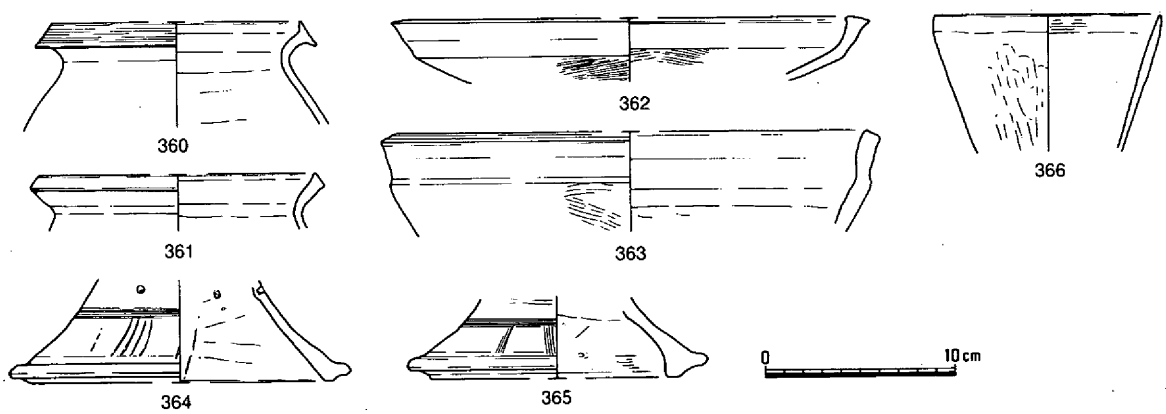
土壙89（第91図）

土壙32の西に位置する。平面形は東西に主軸をもつ楕円形を呈し、遺構面からの深さは51cmである。西壁面の傾斜は急で、東側では緩やかになっている。時期は弥・後・Ⅰ～Ⅱである。

土壙90（第90・91図）

土壙35の北東に位置する遺構である。平面形は隅丸方形を呈し、56×54cmの規模をもつ。遺構面からの深さは68cmを測り、断面形は「U」字形をなす。遺物は**360～366**の土器が出土している。**360・361**は甕、**362～365**は高杯、**366**は製塩土器である。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。

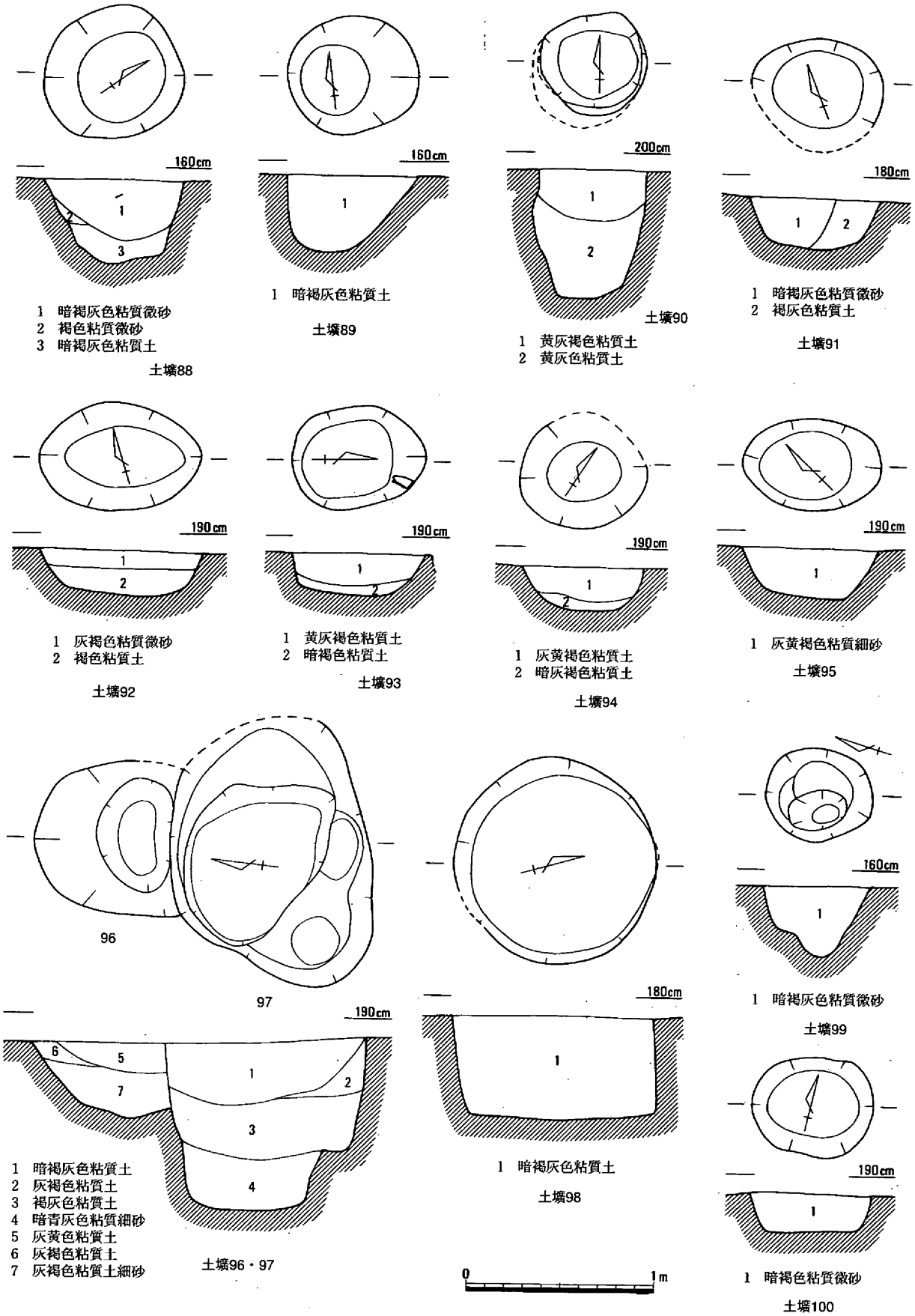


第90図　土壙90出土遺物（1/4）

土壙91（第91図）

土壙92に南側を切られている土壙である。平面形は楕円形を呈すると思われ、残存部は70×48cmを測る。平坦な床面をもち、断面形はⅢ形をなす。また、埋土は2層に区分される。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅱ～Ⅲと思われる。　（蛯原）



第91図　土壙88～100（1/30）

土壙92（第91図）

土壙91の北西側を切って存在する遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸86cm、短軸58cmをそれぞれ測る。床面はほぼ平坦で断面形は逆台形を示す。時期は弥・後・Ⅱである。

土壙93（第91図）

土壙92の南側で検出した遺構である。平面形は楕円形で、長軸71cm、短軸54cmを測る。床面は北側へ緩やかに傾斜し、立ち上がりは急である。この遺構の時期は弥・後・Ⅰである。

土壙94（第91図）

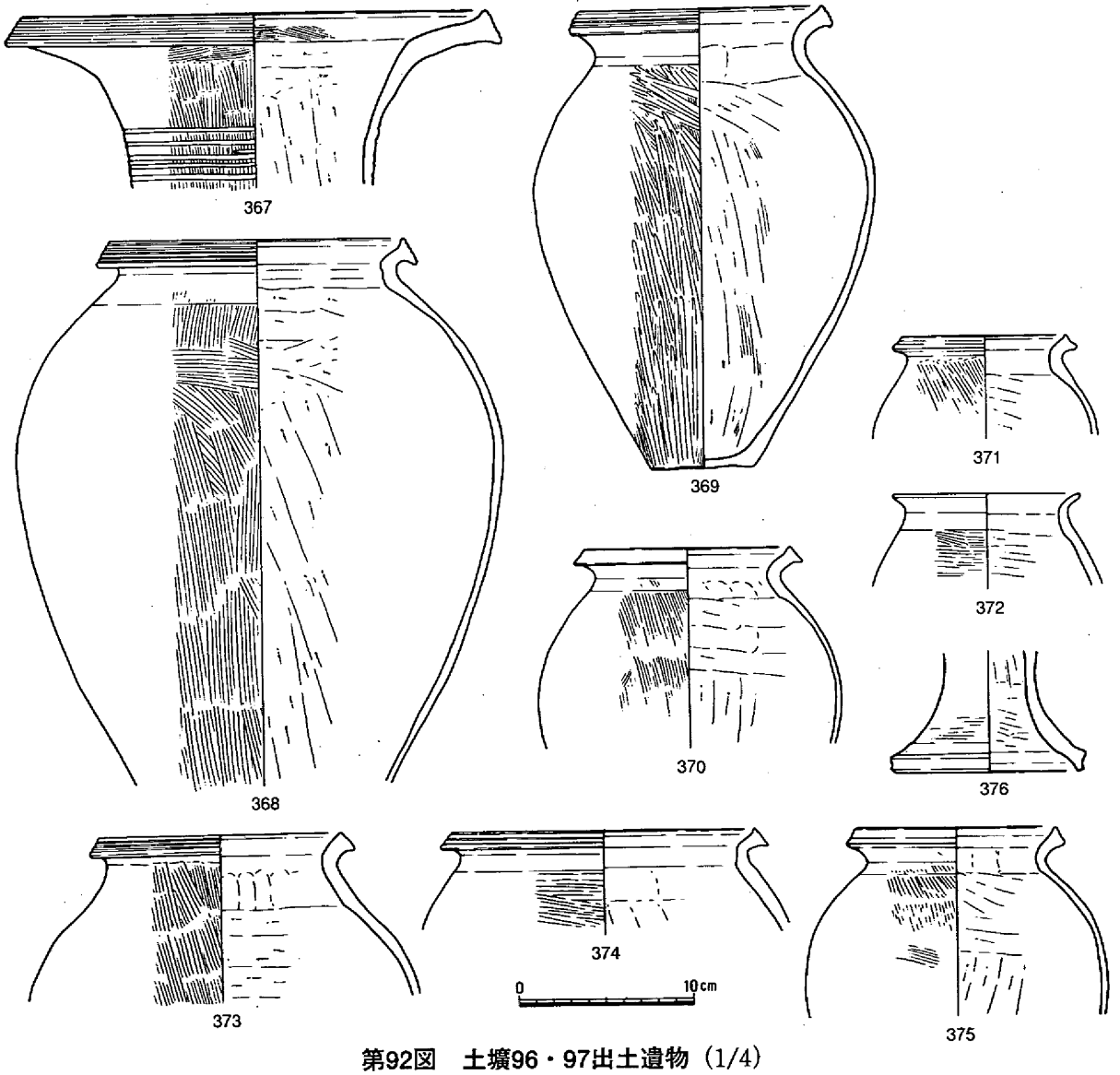
土壙95の北東に位置する遺構である。平面形は円形をなし、直径は66cmを測る。検出面からの深さは23cmで、断面形は椀形を呈する。当遺構の時期は弥・後・Ⅱである。

土壙95（第91図）

土壙94と土壙106の中間に位置する遺構である。平面形は楕円形で、長軸73cm、短軸49cmの規模をもつ。検出面からの深さは27cmである。時期は、弥・後・Ⅰである。

土壙96・97（第91・92図、図版25）

土壙35の南側で検出した遺構である。この２基の土壙は土壙97が土壙96を切る関係にある。土壙97



第92図　土壙96・97出土遺物（1/4）

は、長軸推定144cm、短軸102cmの規模をもつ不整円形を呈し、深さは88cmを測る。底面は中央部が幾分低くなるもののほぼ平坦であり、西部と南部にはテラス状の段が存在する。一方の土壙96は、平面楕円形と判断されるが南側を土壙97に切られているため、全容は不明である。検出面からの深さは39cmで、北側は2段に立ち上がっている。遺物は弥生土器**367～376**が出土しているが、調査時にはこの2基の土壙は同一のものとして判断していたため、分けて掲載することができなかった。これらの遺物より当遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。

土壙98（第91図）

土壙90・93の南側に位置する遺構である。平面形は直径110cmの円形を呈し、検出面からの深さは54cmを測る。平坦な床面をもち立ち上がりもかなり急で、北側には一部袋状になる箇所があることなどから、いわゆる袋状土壙の範疇に入るものかもしれない。この遺構の時期は、出土遺物が細片のみで決定しがたいが、おそらく弥・後・Ⅰであろう。

土壙99（第91図）

土壙100・102・103に囲まれた位置にある遺構である。平面形は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。床面は北側と東側にテラスをもつ複雑な形状をしている。時期は弥・後・Ⅰである。

土壙100（第91図）

土壙99の南側に存在する遺構である。平面形は、東西方向に長軸をもつ楕円形を示す。21cmの深さをもち、床面は平らである。この遺構の時期は弥・後・Ⅱ～Ⅲである。

土壙101（第94図）

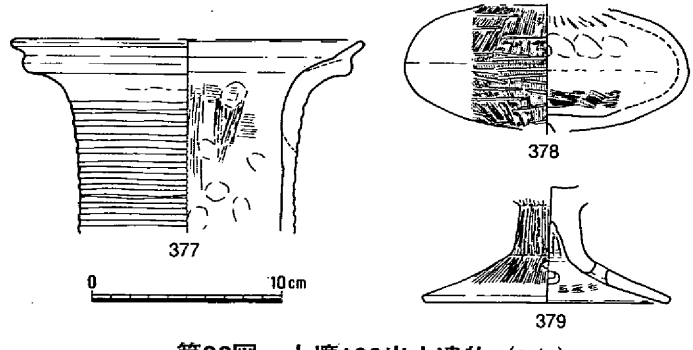
北側を側溝に、南側を土壙102に切られている遺構である。平面形は楕円形を呈すると思われ、規模は推定で長軸118cm、短軸90cmを測る。検出面からの深さは100cmで、床面は西側より東側が1段高くなっている。断面形はU字形をなし、立ち上がりは床面から離れるにしたがって急になっている。また、土層は4層に分けた。この遺構の時期は弥・後・Ⅰである。

土壙102（第94図）

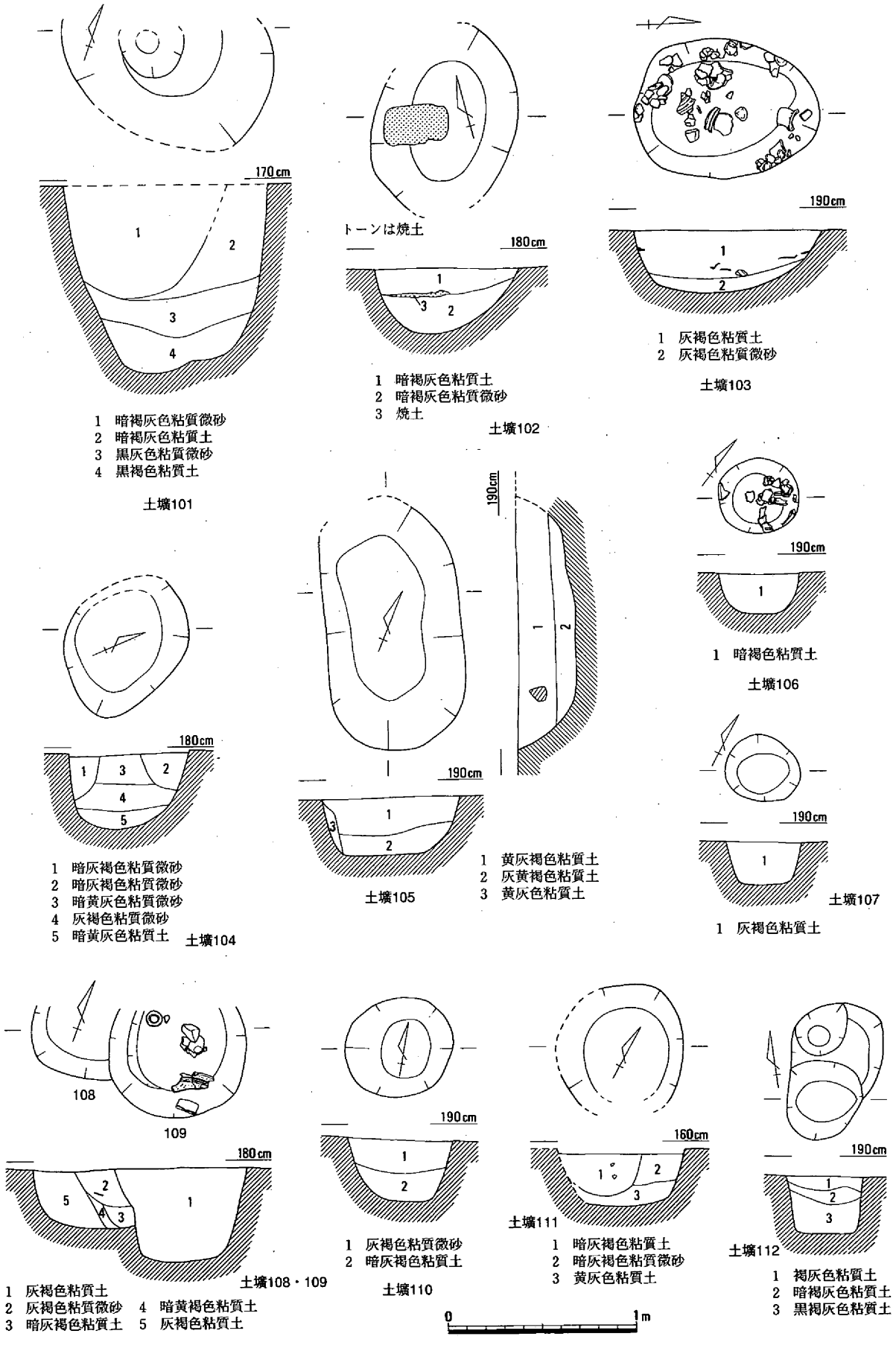
土壙101の南側に所在する遺構である。平面形は南北に長い楕円形をなし、長さ106cm、幅74cmの規模をもつ。断面形は椀形を呈し、全体的に底部は丸みを帯びる。また、検出面から最深部までは34cmである。堆積土は2層に分かれるがそのうちの第2層上面西側に35×20cm、厚さ2cm程の焼土が見られた。ある程度埋まった後に何らかの事情で高熱を受けたのであろう。なお、この遺構の時期は少量出土している土器より勘案して弥・後・Ⅰと思われる。

土壙103（第93・94図、図版11－2）

土壙94と土壙99の間に位置する遺構で、平面形は南北に長い楕円形を呈する。長軸98cm、短軸73cmをそれぞれ測り、検出面からの深さは33cmである。方向はN－1°－Eを示しほぼ南北を向いている。碗形の断面形をもち、床面は中央部に向かって低くなっている。遺物は主に2層に分層するうちの上層より出土している。図示した遺物は**377～379**があり、弥・後・Ⅱ～Ⅲの時期である。　（蛯原）



第93図　土壙103出土遺物（1/4）



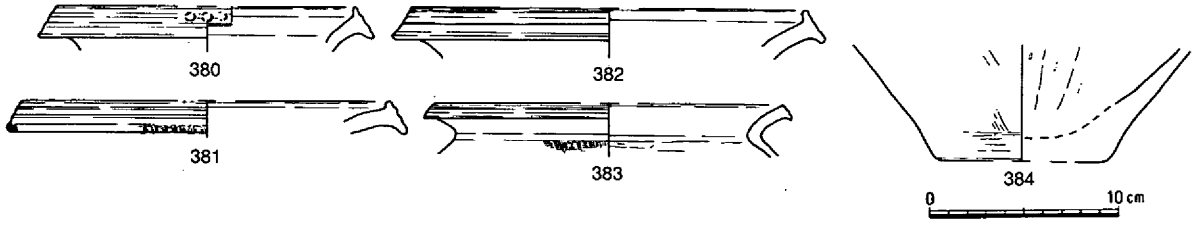
第94図 土壙101～112 (1/30)

土壙104（第94図）

北西側を土壙105に切られている土壙である。堆積土は5層に分けているが、その内の1・2層は当遺構が埋絶した後に掘られたピットによるものの可能性もある。時期は弥・後・Ⅰである。

土壙105（第94・95図）

土壙104と土壙105に挟まれた位置にある遺構である。平面形は長楕円形を呈し、規模は、130×73cmを測る。床面は北側が幾分高いもののほぼ平坦である。検出面からの深さは南側で30cm、北側で25cmである。なお、この土壙と形状が近似している遺構が、周囲に数基ある（土壙118・土壙122・土壙130等）。出土遺物には弥生土器の壺**380**～**382**・**384**、甕**383**がある。そのうちの**380**と**381**には口唇部に竹管文が施されている。当遺構の時期は弥・後・Ⅰ～弥・後・Ⅱにおさまる。



第95図　土壙105出土遺物（1/4）

土壙106（第94・96図）

土壙105の北東隅を切る位置で検出した遺構である。平面形は円形で、42×40cmの規模をもつ。深さは、20cmで断面形は椀形をなす。埋土は暗褐色粘質土の単層で、その中には弥生土器甕**385**が破砕された状況で存在した。

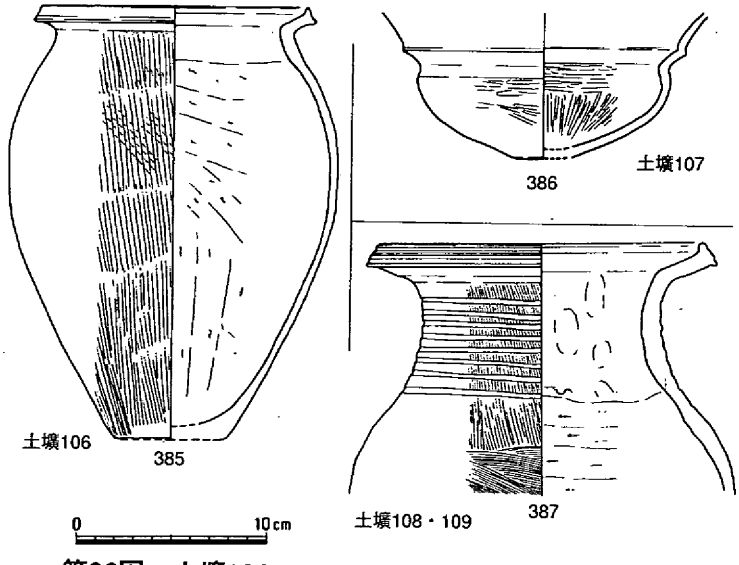
この遺構の時期は**385**より弥・後・Ⅱである。

土壙107（第94・96図）

土壙102と土壙112の間で検出した遺構である。楕円形の平面形をもち、規模は38×34cmを測る。断面形は椀形を呈し、床面はほぼ平らである。また、検出面からの深さは23cm程である。出土遺物には弥生土器鉢**386**があり、当遺構の時期は弥・後・Ⅳである。

土壙108・109（第94・96図）

土壙102の東側で検出した遺構である。いずれも北側を側溝に切られている。土壙109の平面形は卵形をなし推定で73×60cmの規模をもつ。検出面からの深さは、50cmで床面は平らである。出土遺物には弥生土器壺**387**がある。この土器の破片の一部は、土壙108からも出土しており、この2基の遺構の埋没した時期は極めて近いと想定される。時期は弥・後・Ⅱである。　（蛯原）



第96図　土壙106・107・108・109出土遺物（1/4）

土壙110（第94図）

土壙98の東側に存在する遺構で、平面形は楕円形を呈する。58×53cmの規模をもち、深さは32cmを測る。床面は平らで、堆積土は２層に分かれる。時期は弥・後・Ⅱである。

土壙111（第94図）

土壙98の南東で検出した。楕円形の平面形をなし、規模は73×50cmを測る。深さは28cmでⅢ形の断面形をもつ。当遺構の時期は、弥・後・Ⅰないしは Ⅱと想定される。

土壙112（第94図）

土壙107の東側に所在し、平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。掘り方の内側には２箇所の落ち込みがあり、複雑な形状を示している。この遺構の時期は弥・後・Ⅲである。

土壙113（第99図）

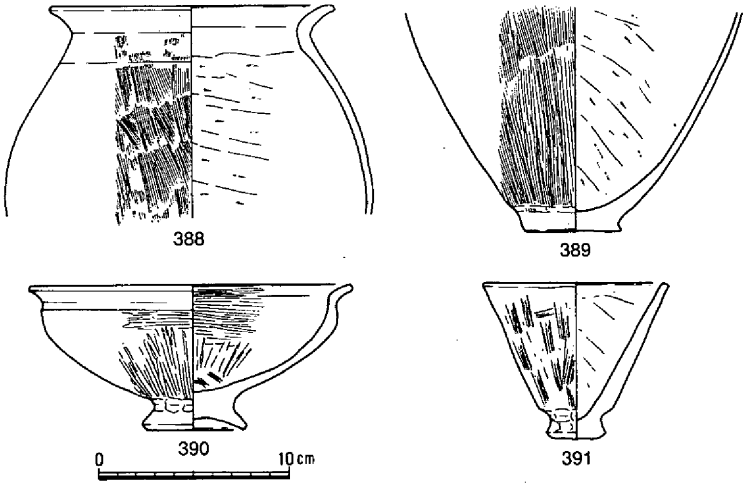
土壙109の東に位置する。北側を側溝で切られているため、全容は不明である。検出面からの深さは36cmで、掘り方内側には明瞭な段を有す。また、北側には浅い窪みがある。出土遺物が少量であったため時期は特定し得ないが、弥・後・Ⅰ～Ⅱの範疇に入ると思われる。

土壙114（第99図）

遺構密度の高い当調査区のなかでも、最も集中している位置にある。東・西・北側の多くが他の遺構（土壙115・土壙123・土壙130）に切られ、南側の一部のみが辛うじて残存している。検出面からの深さは34cmである。この遺構の時期は弥・後・Ⅰであろう。

土壙115（第97・99図、図版25）

土壙114の西側を切る遺構である。楕円形を呈し南北方向に長軸をもつ。102×88cmの規模をもち、深さは37cmを測る。立ち上がりは急で、北から南に向けて緩やかに傾斜する床面をもつ。出土遺物には弥生土器甕**388**・**389**、鉢**390**・**391**がある。鉢**390**は、内外面に入念なヘラミガキが施されている。以上の遺物より、この遺構の時期は弥・後・Ⅱの可能性が高い。



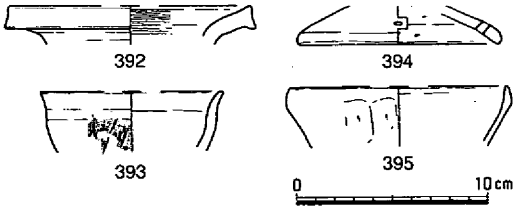
第97図　土壙115出土遺物（1/4）

土壙116（第99図）

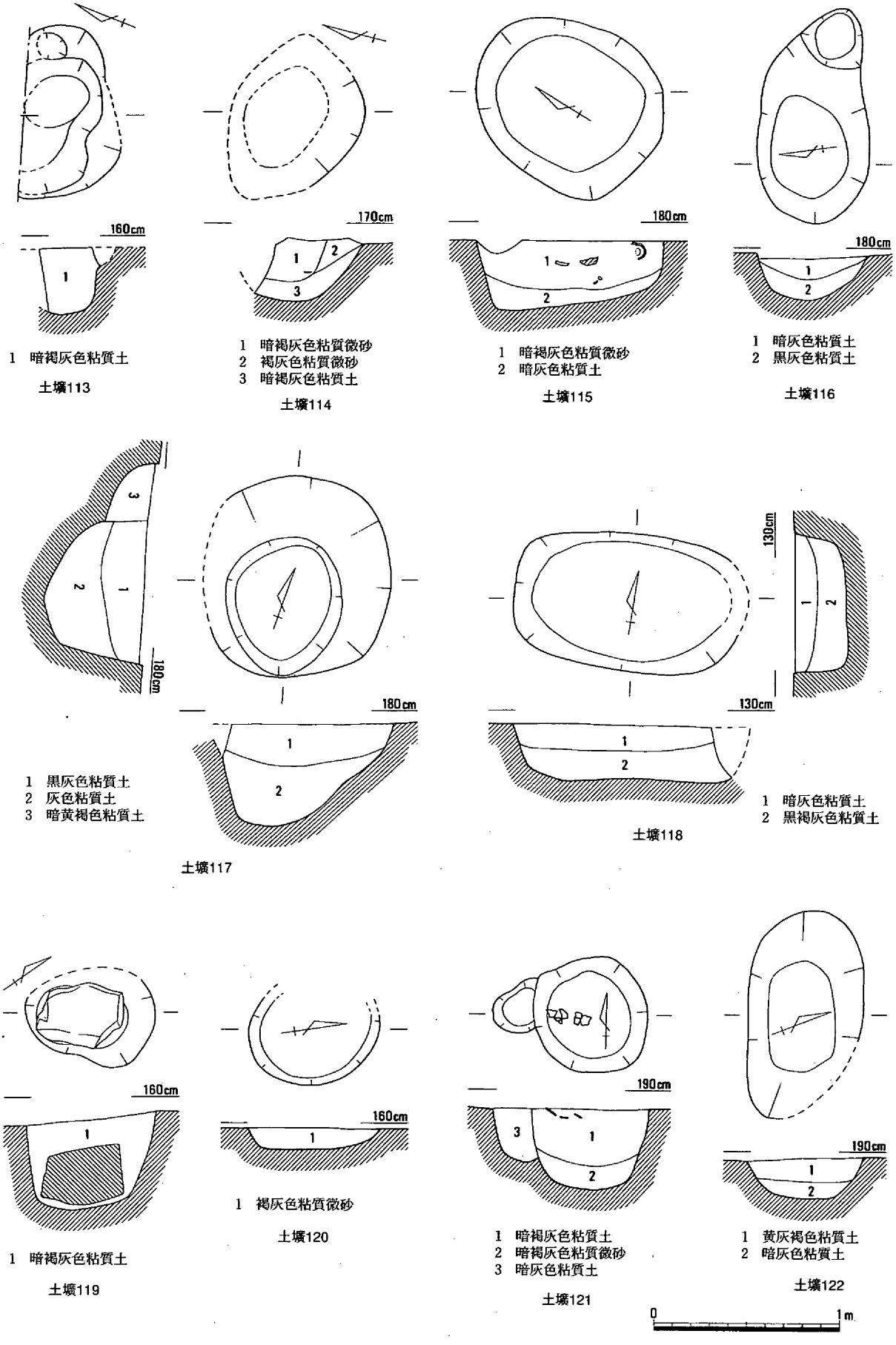
土壙 115に南隣する位置にある。長軸116cm、短軸60cmをそれぞれ測り、深さは22cmである。断面形は底部が丸みを帯びる椀形を呈する。また、南東隅に窪みをもつがこれは、その形状から別個の遺構の可能性もある。時期は弥・後・Ⅰ～Ⅱである。

土壙117（第98・99図）

土壙115の西隣に位置する。西側を土壙112に切られているが、径108cmの円形を呈すると思われる。立ち上がりの中央には段がある。**392**～**395**の遺物があり、これらより弥・後・Ⅱに比定される。　（蛯原）



第98図　土壙117出土遺物（1/4）

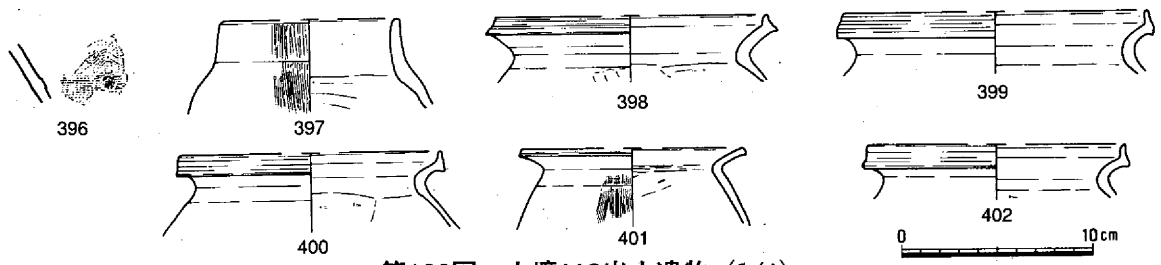


第99図　土壙113～122（1/30）

土壙118（第99・100図）

土壙117の南側で検出した遺構である。平面形は、東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、123×75cmの規模をもつ。また、方向はＮ－87°－Ｅをさす。立ち上がりの角度は、北側や南側で幾分緩やかではあるものの全体的に急である。床面は平坦で検出面からの深さは28cmを測る。

出土遺物には弥生土器**396**～**402**がある。**396**・**397**は壺、**398**～**402**は甕である。壺のうち**397**は短頸壺である。当土壙の時期は、これらの出土遺物より弥・後・Ⅰに比定されうる。



第100図　土壙118出土遺物（1/4）

土壙119（第99図）

土壙113の東側に位置する遺構である。北側の一部を側溝によって切られているが、楕円形を呈するものと思われる。内部には46×34×30cmの角石が床面に近いレベルで存在した。何らかの事情で内部に置かれたものであろう。なお、この遺構の時期は弥・後・Ⅰである。

土壙120（第99図）

土壙119に南隣する位置にある。平面形は楕円形を呈すると思われ、遺構面からの深さは12cmと浅い。断面形は皿形をなし、平坦な床面をもつ。時期は、弥・後・Ⅰである。

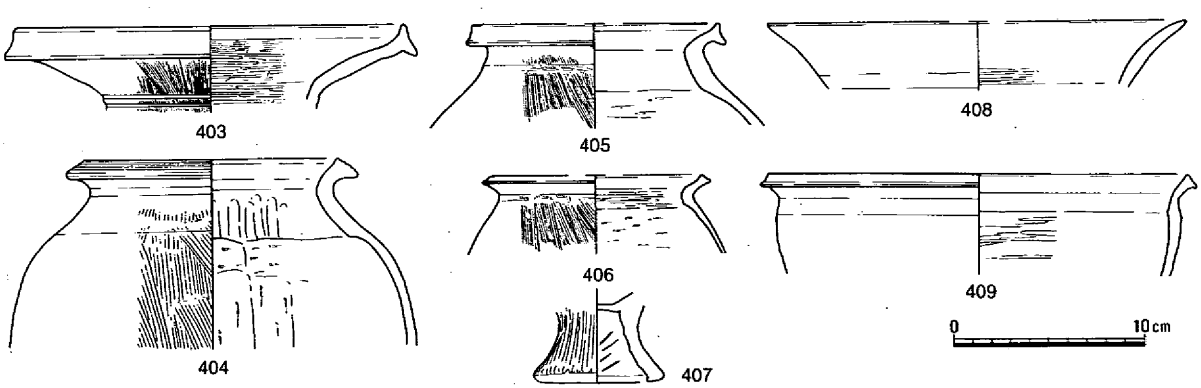
土壙121（第99図）

土壙120の東側に存在する遺構である。平面形は東西に向く８の字形を示し、断面形もこれに呼応している。埋土は３層に分かれる。当遺構の時期は、弥・後・Ⅱの可能性が高い。

土壙122（第99・101図）

土壙121の南側で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し長軸110cm、短軸62cmをそれぞれ測る。検出面からの深さは22cmで、床面は少し丸みをおびるものの平坦である。方向は、Ｎ－65°－Ｗで東西に長軸を持つ。埋土は２層に分かれ、ほぼ水平に堆積している。

出土遺物は、弥生土器**403**～**409**がある。壺**403**、甕**404**～**406**、台付鉢**407**、高杯**408**、鉢**409**を図示している。この遺構の時期は、これらの遺物より弥・後・Ⅱと判断される。（蛯原）

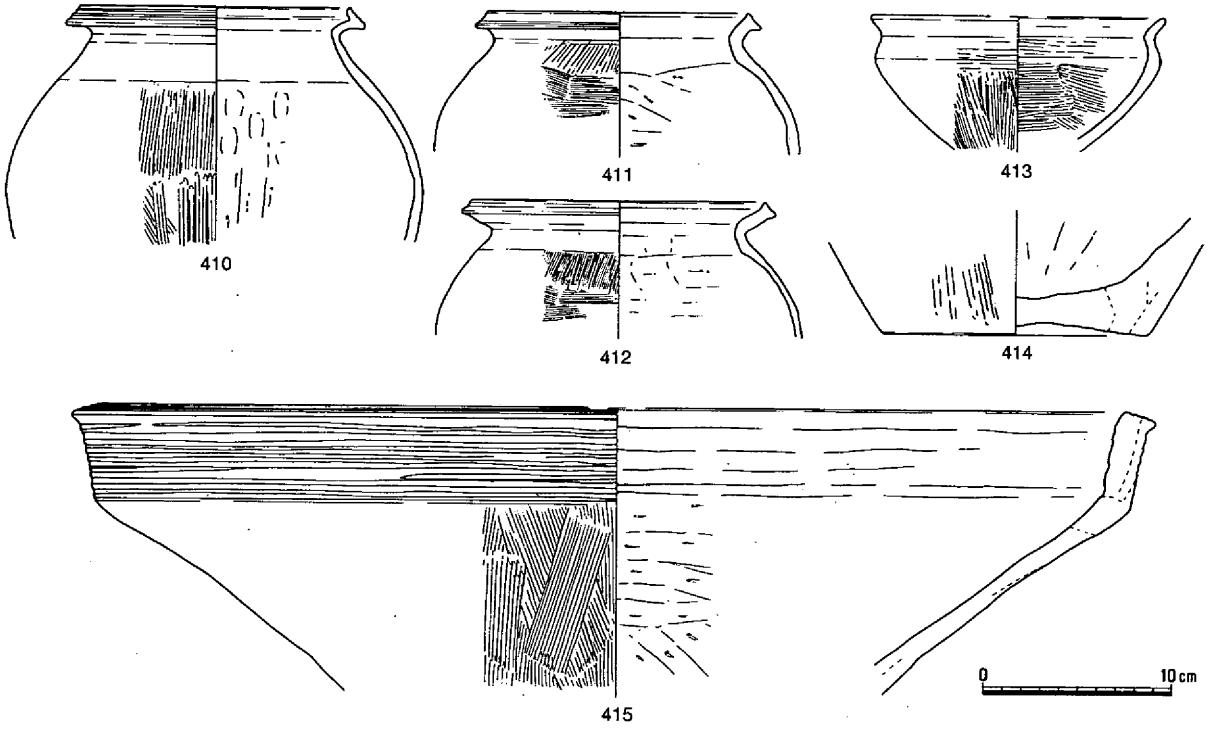


第101図　土壙122出土遺物（1/4）

土壙123（第102・104図、図版25）

土壙122の西側で検出した遺構である。平面形は不整円形をなし、残存部の規模は東西80cm、南北90cmを測る。検出面からの深さは46cmで、断面形は漏斗形をなしている。堆積土は2層に区分されるが、そのうちの第2層は南側からの流入である。遺物は第1層の東側に偏って出土した。

出土遺物には、甕**410**～**412**・**414**、鉢**413**・**415**がある。**415**は最大径が推定で57.4cmと大型で、外面はハケメが、内面にはヘラケズリ調整がなされている。また、**413**には内外面に入念なヘラミガキが施されている。この遺構の時期は、これらの遺物より弥・後・Ⅰと想定される。

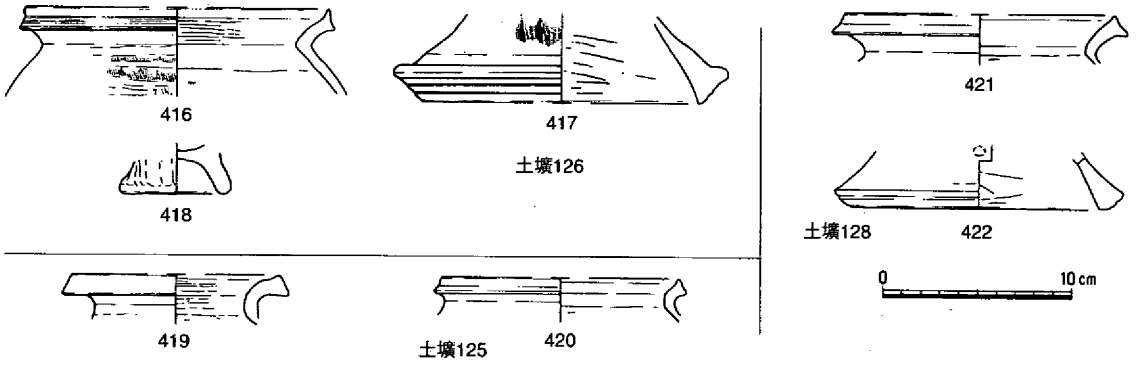


第102図　土壙123出土遺物（1/4）

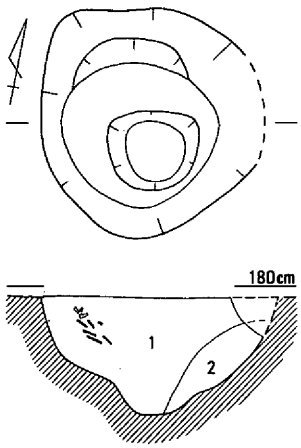
土壙124（第104図）

土壙122の東側に存在する遺構である。周囲を土壙122や土壙125に切られ全容は不明であるが、残存部より、楕円形を呈すると思われる。断面形は逆台形をなし、深さは34cmを測る。

この遺構の時期は、弥・後・Ⅱであろう。　（蛯原）

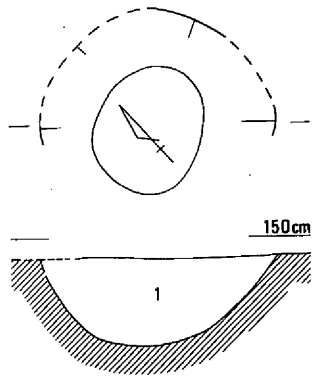


第103図　土壙125・126・128出土遺物（1/4）



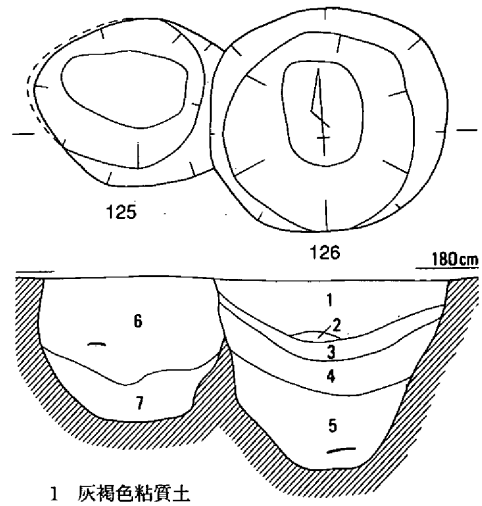
1　黒灰色粘質土
2　暗黄灰色粘質土

土壙123



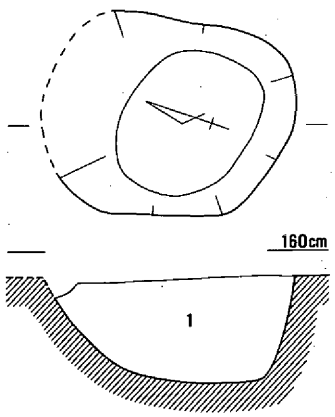
1　暗褐灰色粘質土

土壙124



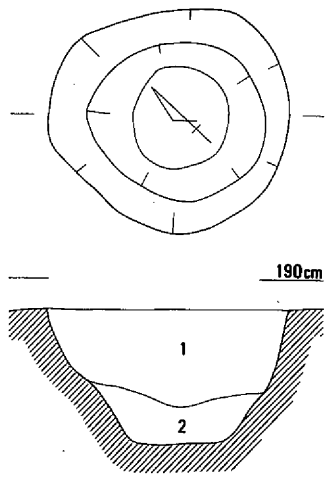
1　灰褐色粘質土
2　黒灰色土
3　暗褐色粘質土
4　暗黄灰色粘質土
5　褐灰色粘質土
6　灰褐色粘質土
7　褐灰色粘質土

土壙125・126



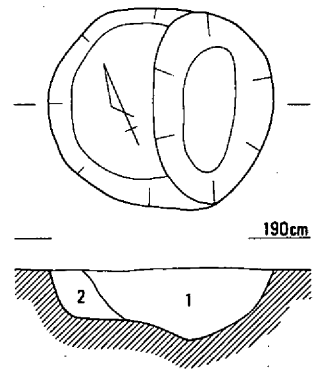
1　暗灰褐色粘質微砂

土壙127



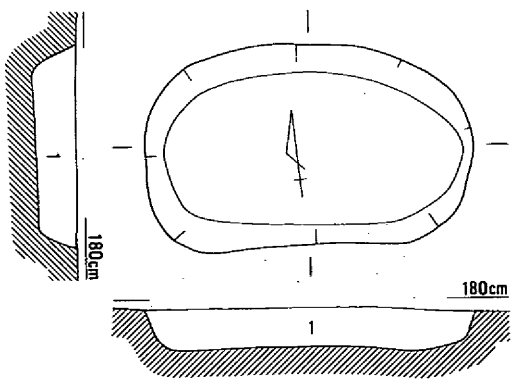
1　暗灰褐色粘質土
2　暗黄灰色粘質土

土壙128



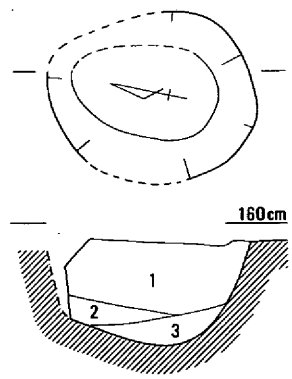
1　黒灰色粘質土
2　黄褐色粘質土

土壙129



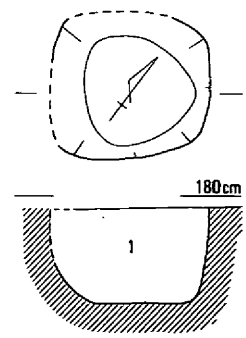
1　黄灰褐色粘質土

土壙130



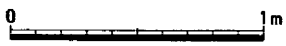
1　暗褐灰色粘質土
2　褐灰色粘質土
3　暗灰褐色粘質微砂

土壙131



1　黄褐色粘質土

土壙132



第104図　土壙123～132（1/30）

土壙125・126（第103・104図）

土壙122の東側に位置する。土壙125は東西に主軸を持つ楕円形を呈し、70×67cmが残存している。深さは58cmを測り、床面は平らである。東側には段を有するがおおむね椀形の断面形を呈している。甕の口縁部**419・420**が出土している。時期は弥・後・Ⅱである。一方の土壙126は94×88cmの円形をなし、深さは75cmである。西側の土壙125を切り存在している。断面は底部に向かってすぼまるような形状であり、埋土は6層に分割できレンズ状に堆積している。出土遺物には甕**416**・高杯**417**・台付鉢**418**等がある。当遺構の時期は弥・後・Ⅲである。

土壙127（第104図）

土壙125・126の南側に存在する遺構である。北側は切られているが、南北に主軸をもつ不整円形を呈すると思われる。また、遺構面からの深さは、40cmを測る。床面は南側が少し低くなるものの、概して平坦である。この遺構の時期は、弥・後・Ⅱと想定される。

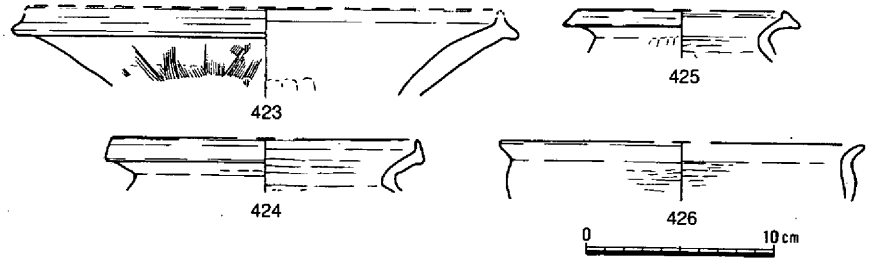
土壙128（第103・104図）

土壙116の南東に位置する。平面形は円形をなし、規模は95×90cmを測る。遺構面からの深さは、53cmである。断面形は若干の段をもつものの逆台形を呈している。床面は平らで、その形状は直径32cmの円形である。また、床面付近には少量の湧水もみられた。

当遺構の時期は、弥・後・Ⅰである。

土壙129（第104・105図）

土壙128の南東にて検出した遺構である。平面形は円形で、89×77cmの規模をもつ。深さは28cmで東側の床面が窪んでいる。立ち上がりは両側とも幾分急で断面形はⅢ型に近いものとなっている。



第105図　土壙129出土遺物（1/4）

主な遺物には、壺**423**、甕**424・425**、鉢**426**がある。いずれも口縁部のみの出土である。これらの遺物や周囲の状況も勘案すると当遺構の時期は弥・後・Ⅲの可能性が高い。

土壙130（第104図）

土壙119の南東側を切る遺構である。平面形は東西に主軸をもつ楕円形を呈し、長さ132cm、幅80cmの規模をもつ。検出面からの深さは16cmと浅い。床面は若干中央部分が高いものの、ほぼ平坦な形状をなしている。また、埋土は黄灰褐色粘質土の単層であった。

この土壙の時期は弥・後・ⅡないしはⅢと考えられる。

土壙131（第104図）

土壙129の東に存在する遺構である。平面形は楕円形を呈し、規模は残存部で82×62cmである。深さは、39cmで南側が深くなっている。時期は弥・後・Ⅰである。

土壙132（第104図）

土壙130と土壙131に挟まれる位置にある。平面形は隅丸方形で、規模は残存部で64×55cmである。深さは37cmで床面は平らである。時期は、弥・後・Ⅰ～Ⅱである。（蛯原）

土壙133（第108図）

土壙139の南東隅を切っている遺構である。平面形は一辺58cmの隅丸方形を呈し検出面からの深さは32cmである。椀形の断面形をなし、中央部分が低くなっている。時期は、弥・後・Ⅱである。

土壙134・135（第108図）

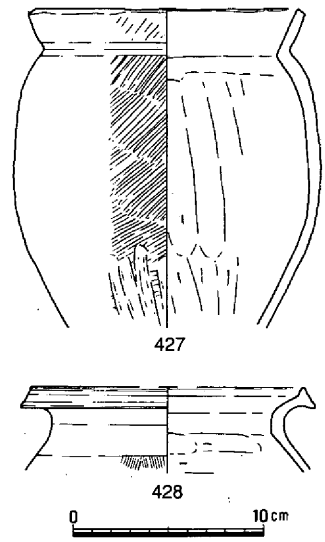
土壙131の南東に位置する。この２基の土壙は共に似た形状を示し、隅丸方形気味の平面で、北側はテラス状になっている。深さも浅く土壙134が12cmで135が17cmである。時期は弥・後・Ⅰである。

土壙136（第108図）

土壙135の南東に位置する。長方形の平面形をなし、深さは24cmを測る。堆積土は２種類に分けられるが第１層のあり方から、柱状のものの存在も考えられる。時期は、弥・後・ⅡないしⅢである。（蛯原）

土壙137（第106・108図、図版11－３）

調査区の中央部より、やや東側に位置する。南側には竪穴住居８が、南東側には土壙138が近接する。規模は長軸長44cm、短軸長42cmで、形状は円形を呈する。深さは確認面から17cmで、断面形状はⅢ形である。**427・428**は甕で、前者は上層から出土する。後期Ⅳである。また埋土中から歯牙が検出され、詳細は付載２に触れてある。　（小林）



第106図　土壙137出土遺物
(1/4)

土壙138（第107・108図）

土壙137の東にて検出した遺構である。断面形は円形を呈し、53×51cmを測る。検出面から28cm低い位置にある。床面は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物には椀**429**がある。

当遺構の時期は弥・後・ⅡないしはⅢであろう。

第107図　土壙138出土遺物
(1/4)

土壙139（第108図）

土壙131の東側に位置する遺構である。一部が切られており全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると思われる。長さ111cm、幅74cmが残存し、深さは23cmを測る。床面はほぼ平らであるが、西側が若干低い。この遺構の時期は、弥・後・Ⅱであろう。

土壙140（第108図）

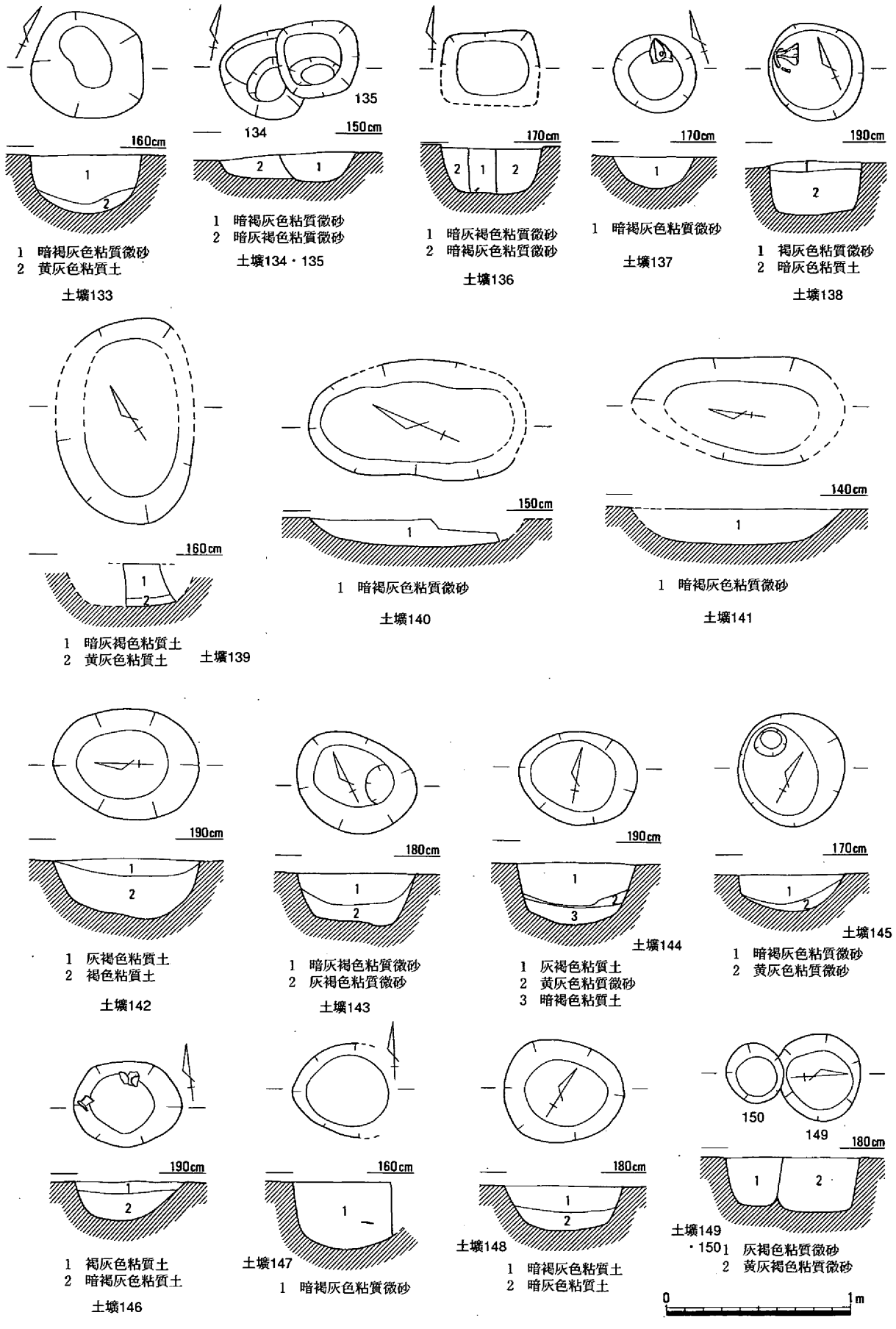
土壙136の南西に位置する遺構である。南側が切られているが、平面形は南北に主軸をもつ楕円形と思われる。南北110cm、東西60cmが残存し、深さは14cmを測る。床面は多少丸みを帯びるがほぼ平らである。この遺構の時期は弥・後・Ⅱと想定される。　（蛯原）

土壙141（第108図）

調査区の中央部南側に位置し、北側に土壙144、南東側に土壙153が近接する。土壙の規模は長軸長約115cm、短軸長68cmで、形状は長楕円形を呈する。深さは確認面から19cmで、Ⅲ形になる。この土壙の西半分は、竪穴住居９に切られる。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙142（第108図）

調査区の中央部南側に位置し、北西側に土壙142が近接する。土壙の規模は長軸長78cm、短軸長60cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から32cmを測り、断面形状は、椀形を呈する。出土遺物は図化出来ないほどの小片しかない。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。　（小林）



第108図　土壙133～150（1/30）

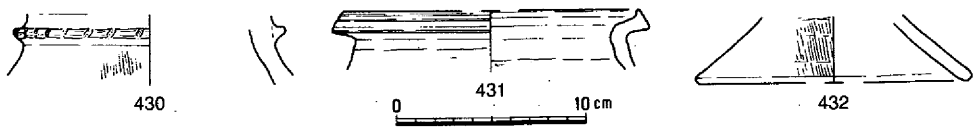
土壙143（第108図）

調査区の中央部南側に位置し、竪穴住居9より後出する。規模は、長軸長65cm、短軸長51cmで不正円形を呈し、深さは29cmである。時期は、弥・後・Ⅳになると思われる。

土壙144（第108・109図）

調査区の中央部南側に位置し、南側に土壙141が近接する。規模は長軸長64cm、短軸長51cmで、形状は倒卵形を呈し、深さは34cmである。出土遺物の内、**430**は壺の頸部で、**431**は甕の口縁部、**432**は蓋になる。

弥・後・Ⅰと Ⅱの両者があるが、Ⅱの方が中心である。



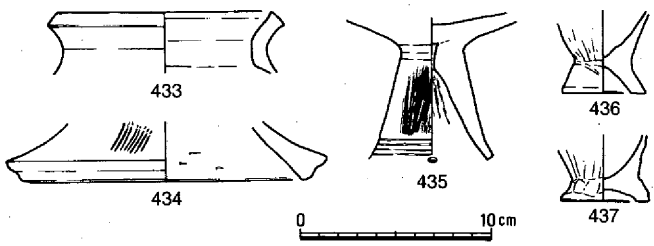
第109図　土壙144出土遺物（1/4）

土壙145（第108図）

調査区の中央部北側に位置し、竪穴住居1より後出する。規模は長軸長61cm、短軸長57cmで、円形を呈する。深さは20cmで断面形状は皿状を呈する。時期は弥・後・Ⅰになると思われる。

土壙146（第108・110図）

調査区の中央部北側に位置し、竪穴住居1より後出する。規模は長軸長58cm、短軸長46cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から21cmで、断面形状は皿状である。出土遺物中**433**は甕の口縁、**434**・**435**は高杯、**436**・**437**は製塩土器の脚部である。出土遺物の大半が、弥・後・Ⅰ新相～Ⅱ古相になり、土壙の時期も、この時期になる。



第110図　土壙146 出土遺物（1/4）

土壙147（第108図）

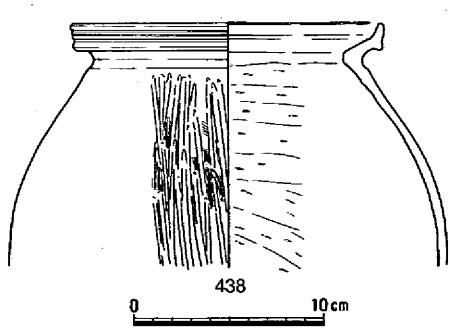
調査区の中央部よりやや東側に位置し、北側に土壙156が近接する。また竪穴住居10より後出する。規模は長軸長52cm、短軸長49cmで、形状は倒卵形を呈し、深さは36cmで断面形状は椀形である。

土壙148（第108図）

調査区の中央部よりやや北東側に位置し、北東側に土壙158、南西側に149が近接する。規模は長軸長64cm、短軸長54cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から24cmで、断面形状は、皿形である。出土遺物は図化出来ないほどの小片しかないが、時期は弥生後期になると思われる。

土壙149・150（第108・111図）

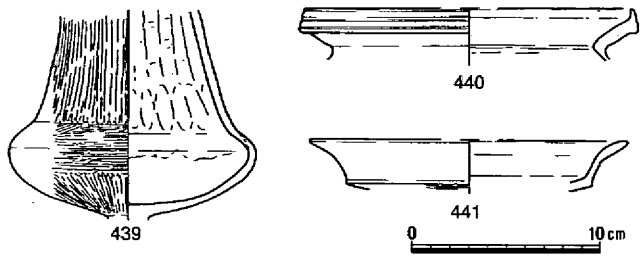
土壙149・150は2つの土壙が連なっており、土壙150が後出する。調査区の中央部よりやや東側に位置し、北東側に土壙148が近接する。規模は、土壙149が長軸長48cm、短軸長約46cm、深さ29cm、形状は円形になる。土壙150は長軸長33cm、短軸長30cm、深さ26cm、形状は円形である。**438**は土壙149から出土した弥・後・Ⅳの甕である。（小林）



第111図　土壙149出土遺物（1/4）

土壙151・152・153（第112・115図）

土壙151・152・153は3つの土壙が連なっており、数字順に時期が後出する。調査区の中央部よりやや南東側に位置し、北西側に土壙141が近接する。規模は、土壙151が長軸長約70cm、短軸長約45cm、深さが8cmで、形状は楕円形である。土壙152は長軸長約70cm、短軸長56cm、深さ17cmで、形状は楕円形である。土壙153は長軸長約130cm、短軸長約112cm、深さ24cmで、形状は不正三角形を呈すると思われる。図化した**439**は弥・後・Ⅲの脚付直口壺で、土壙153出土である。**440**は甕、**441**は高杯でどの土壙に伴うかわからない。



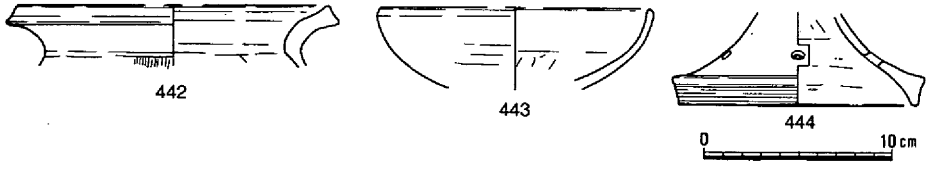
第112図　土壙153出土遺物（1/4）

土壙154（第115図）

調査区の中央部よりやや北東側に位置し、竪穴住居1を切る。規模は長軸長約72cm、短軸長69cm、深さ45cmで、形状は不正円形である。時期は弥・後・Ⅰになると思われる。

土壙155（第115図）

調査区の中央部よりやや東側に位置し、北側に土壙146、南側に土壙156が近接する。規模は長軸長98cmで、短軸長は64cmになり、形状は楕円形である。深さは19cmで、断面形状は方形を呈する。**442**は甕口縁部、**443**は椀、**444**は高杯脚部で、弥・後・Ⅱの古相になる。



第113図　土壙155出土遺物（1/4）

土壙156（第114・115図、図版25）

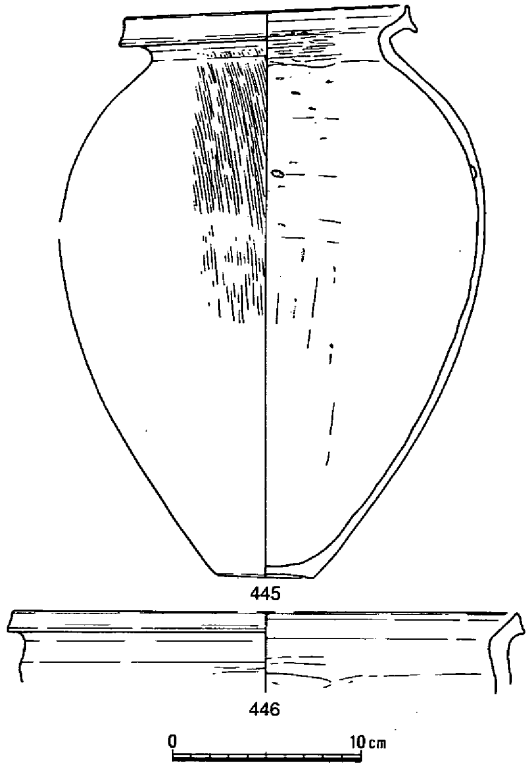
調査区の中央部よりやや東側に位置し、北側に土壙155、南側に土壙147が近接する。規模は長軸長100cm、短軸長91cmを測り、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から24cmで、断面形状はⅢ形である。出土遺物中**445**は甕のほぼ完形品で、**446**は鉢の口縁部である。弥・後・Ⅲの時期に当たる。

土壙157（第115図）

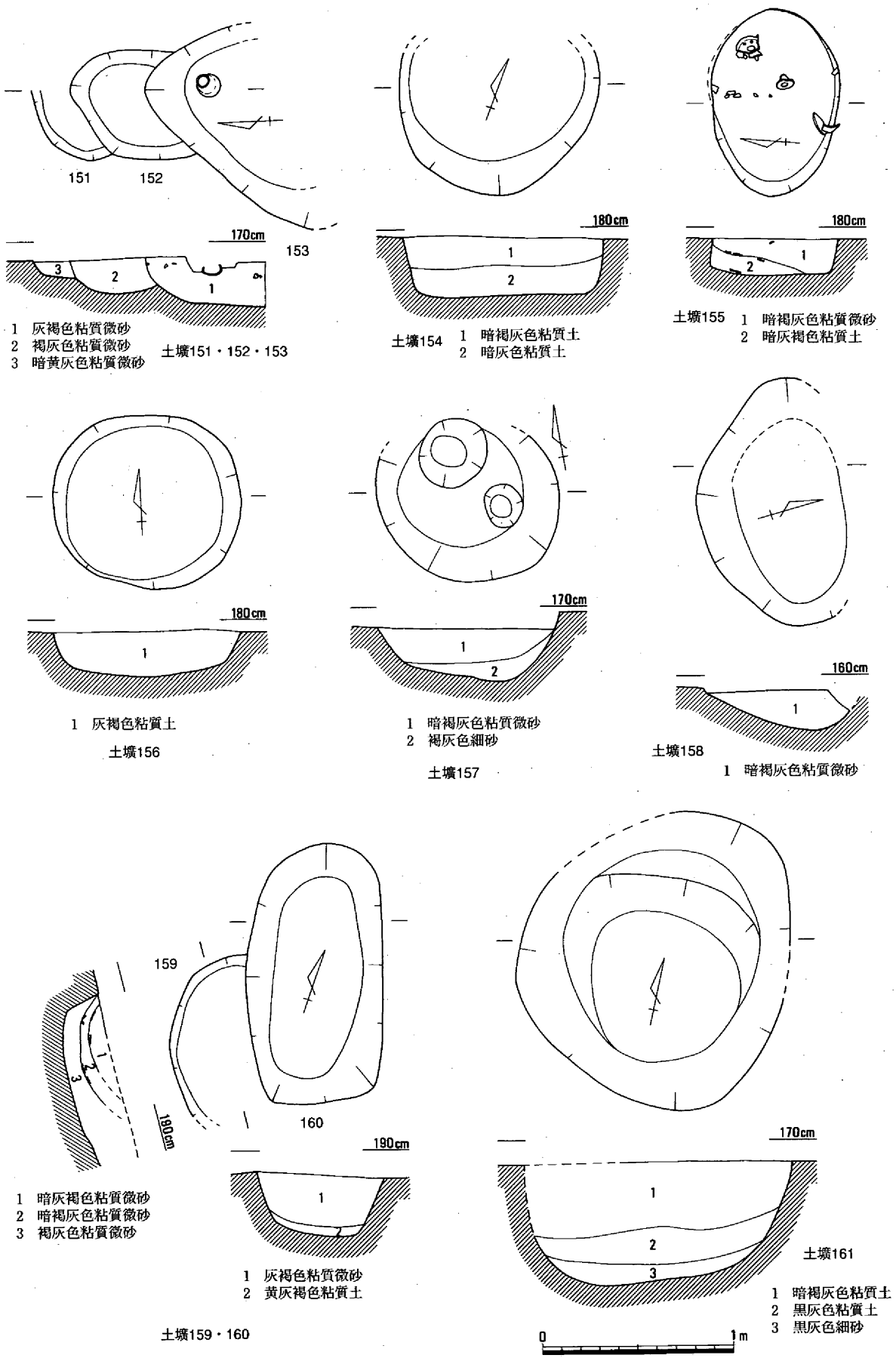
調査区の東側より、やや北西側に位置する。規模は長軸長・短軸長とも約90cmで、形状はほぼ円形である。深さは27cmで、断面形状はⅢ形である。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙158（第115図）

調査区の東側よりやや北西側に位置し、北東側に土壙166、南西側に土壙148が近接する。規模は長軸長130cm、短軸長約78cm、深さ20cmで、形状は長楕円形である。時期は弥・後・Ⅱである。（小林）



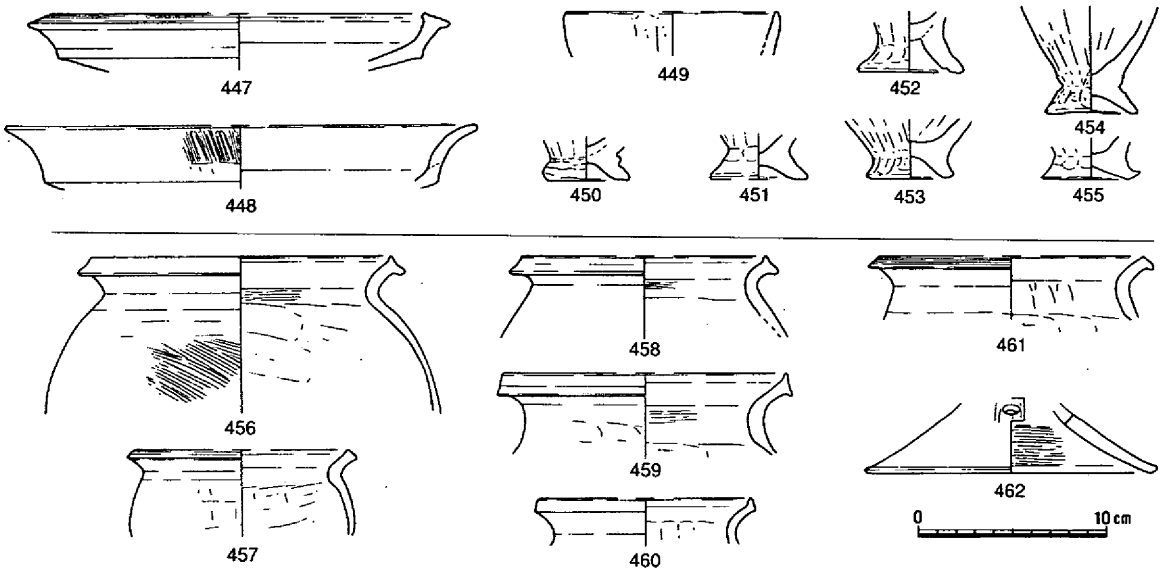
第114図　土壙156出土遺物（1/4）



第115図　土壙151～161（1/30）

土壙159・160（第115・116図）

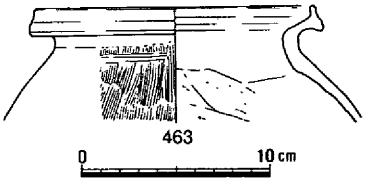
調査区の東側よりやや南西側に2つ連なって存在し、土壙160の方が後出する。土壙159の規模は、長軸長約100cm、短軸長約70cm、深さ24cmを測る。遺物は**447**（後Ⅰ新）・**448**（後Ⅱ古）が高杯の口縁部、**449**～**455**は製塩土器になる。特に製塩土器は、1・2層から10個体前後の破片が出土している。土壙160の規模は、長軸長138cm、短軸長72cm、深さ32cmで、長楕円形を呈する。出土遺物は、**456**～**461**が甕の口縁部で、**462**が高杯の脚部である。時期的には**459**・**460**が弥・後・Ⅲの様相を呈する他は、弥・後・Ⅱの範疇である。



第116図　土壙159（上）・160（下）出土遺物（1/4）

土壙161（第115・117図）

調査区の東側よりやや西側に位置し、北西側にある土壙167・171に調査時には切られると判断した。規模は長軸長137cm、短軸長72cm、深さは63cmで、形状は不正円形である。出土遺物は規模の割に小片しかないが、**463**は弥・後・Ⅳの甕口縁部である。土壙167・171より新相になる。



第117図　土壙161出土遺物（1/4）

土壙162（第118図）

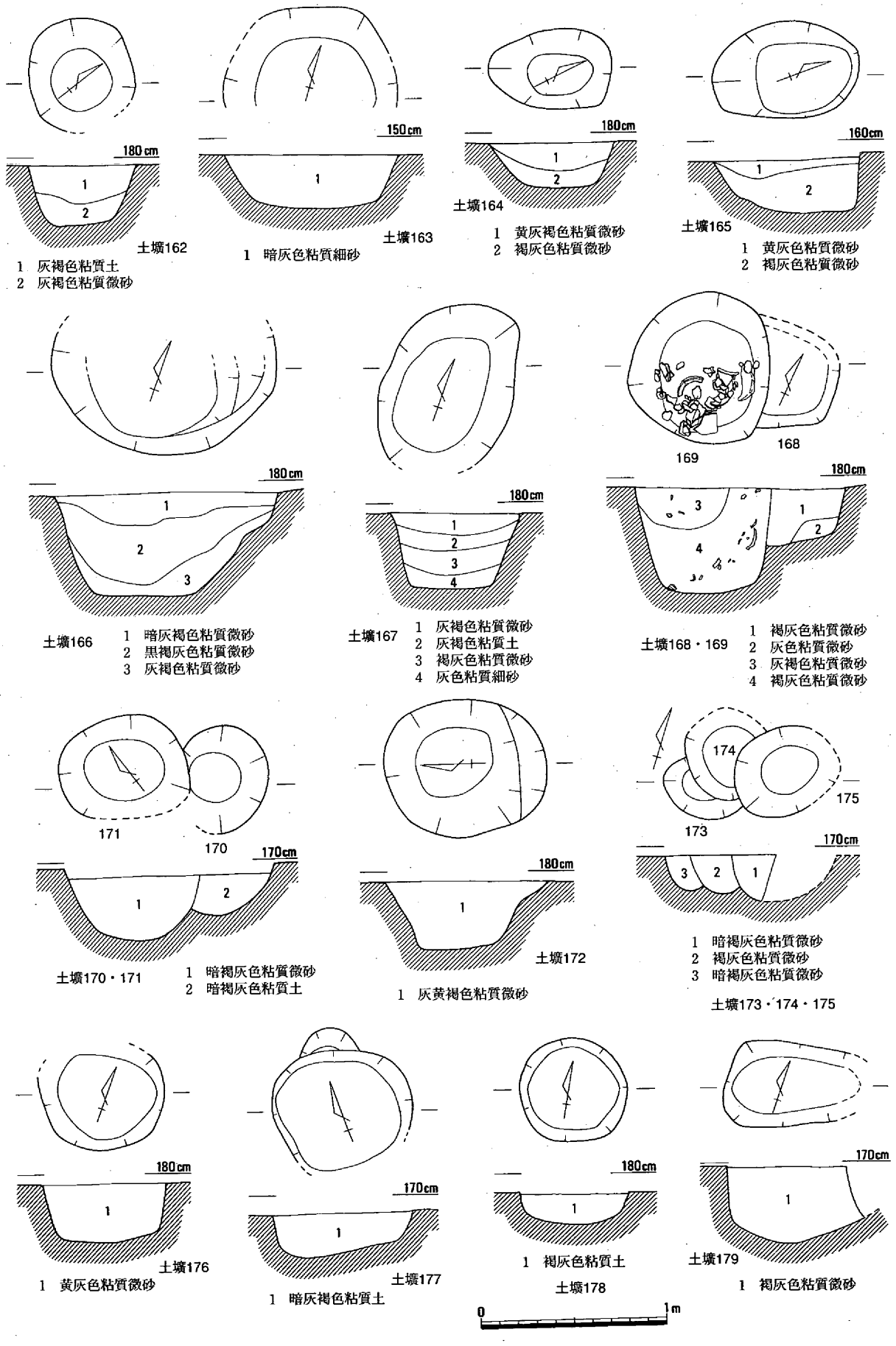
調査区の東側よりやや中央部よりに位置し、竪穴住居11に切られる。規模は長軸長約61cm、短軸長56cm、深さ33cmで、形状は不正円形である。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙163（第118図）

調査区の東側よりやや南西側に位置し、北東側に土壙159・160が近接する。竪穴住居6を切る形となる。規模は長軸長94cm、短軸長約74cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から29cmで断面形状はⅢ形である。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙164（第118図）

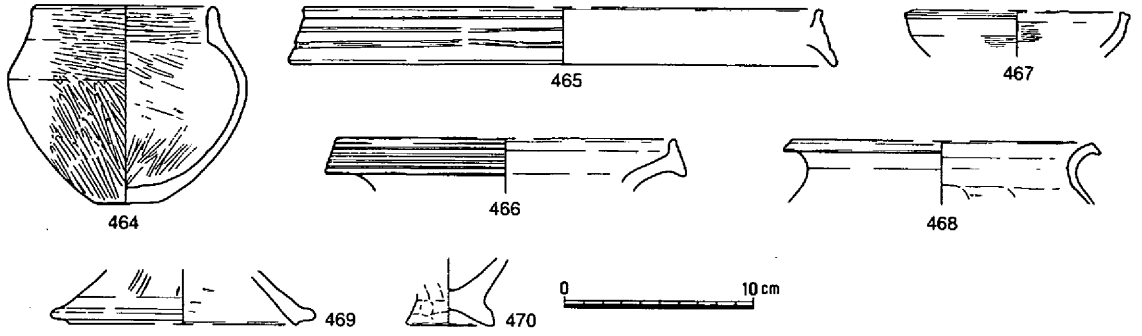
調査区の東側の北西側に位置し、北側には土壙166が近接する。規模は長軸長66cm、短軸長44cm、深さ24cmで、形状は倒卵形である。時期は弥・後・Ⅲになると思われる。（小林）



第118図　土壙162～179（1/30）

土壙165（第118・119図、図版25）

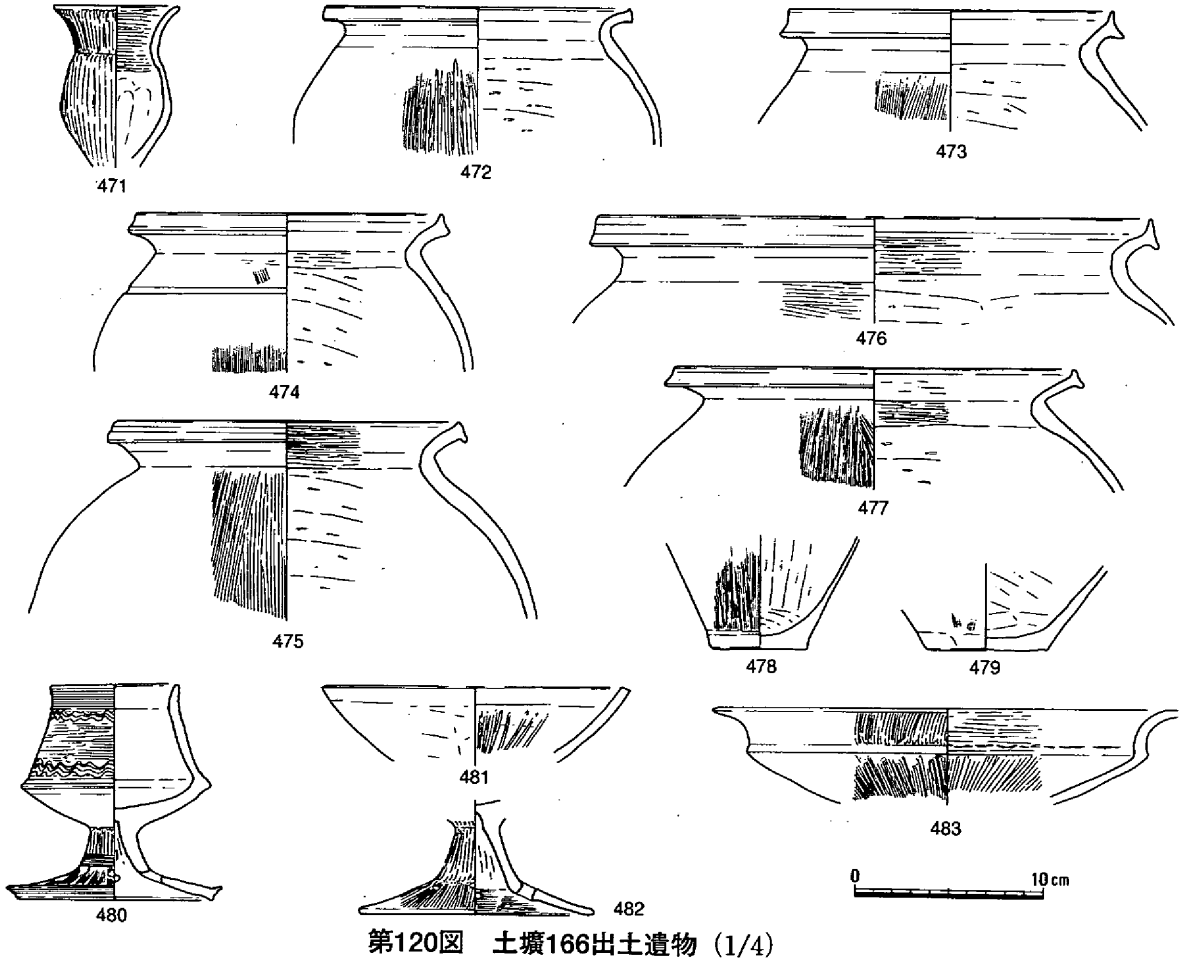
調査区東側の南西よりに位置し、竪穴住居6を切り、竪穴住居11に切られる。規模は長軸長82cm、短軸長53cmで、形状は倒卵形を呈する。深さは確認面から30cmで、断面形状は椀形である。出土遺物は**464**が無頸壺でほぼ完形である。内外面ともきれいにヘラミガキしている。**465**・**466**は壺の口縁部、**467**は杯部、**468**は甕口縁部、**469**は高杯の脚部、**470**は製塩土器である。弥・後・Ⅱと Ⅲの資料が存在するが、数量的には後期Ⅲが主流になると思われる。



第119図　土壙165出土遺物（1/4）

土壙166（第118・120図、図版26）

調査区東側の北西脇に位置し、南側に土壙164、南西側に土壙158が近接する。規模は長軸長121cm、短軸長約62cmで、形状は楕円形を呈するものと思われる。深さは確認面から54cmで、断面形状は椀形



第120図　土壙166出土遺物（1/4）

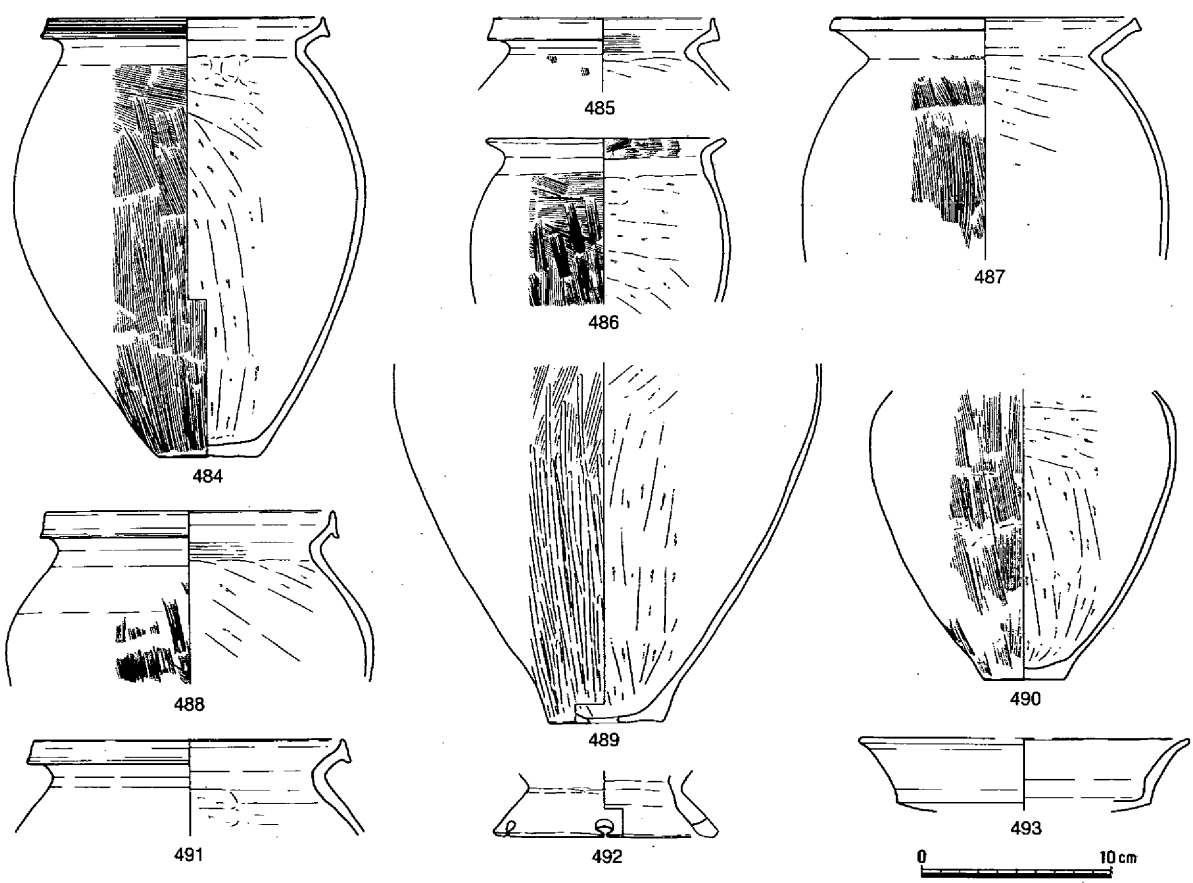
である。出土遺物は**471**が小型壺で外面は丁寧にヘラミガキされる。**472**～**477**は甕の口縁部付近で、**478**・**479**は底部になる。底部はあまり上底されない。**480**は脚付鉢になり、鉢部の外面には櫛描き波状文が上下に2本ある。**481**・**483**は杯部で、**482**は脚部になる。**474**・**475**の甕や**483**などの高杯は、弥・後・Ⅱ新相の様相を持つが、主流をなすのは**473**・**476**のように口縁端部を上方につまみ上げた弥・後・Ⅲの資料である。

土壙167（第118図）

調査区東側の西端に位置し、北側に土壙171・東側に土壙161が近接する。規模は長軸長94cm、短軸長70cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から41cmを測り、断面形状は方形を呈する。時期は弥・後・ⅡとⅢ両方の土器片があるが、Ⅲの様相が強い。

土壙168・169（第118・121図、図版26）

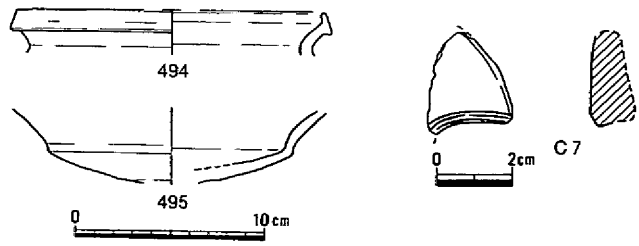
調査区東側の南東部に2つが連なっており、どちらも竪穴住居11によって切られる。土壙168・169の2つでは、土壙169の方が後出し、また出土した遺物もほとんど土壙169からである。土壙168の規模は、長軸長約65cm、短軸長約58cmで、長方形に近い。深さは確認面から31cmで、断面形状は方形になると思われる。土壙169の規模は、長軸長80cm、短軸長74cmで、形状は不正円形である。深さは確認面から56cmで、断面形状は方形である。土壙169からは多量の遺物が出土したが、**484**～**491**は甕になる。この内**484**はほぼ完形になる。**492**は脚部であるが、端部に円孔が穿かれる。**493**は高杯の杯部口縁である。出土遺物の時期は、弥・後・ⅡとⅢ両方の様相があるが、Ⅲの資料の方が多い。よって土壙168の時期はⅢ以前になるであろう。（小林）



第121図　土壙168・169出土遺物（1/4）

土壙170・171（第118・122図）

調査区東側の西端に位置し、２つが連なっている。土壙170の規模は、長軸長68cm、短軸長約50cm、深さ34cmである。土壙171の規模は、長軸長約59cm、短軸長約40cm、深さ23cmである。図化した遺物は土壙171のもので、Ｃ７は分銅形土製品である。



第122図　土壙170・171出土遺物（1/4・1/2）

土壙172（第118図）

調査区東側の西端に位置し、南東方向に土壙176が近接する。規模は長軸長87cm、短軸長73cm、深さ19cmで、形状は楕円形を呈する。時期は弥・後・Ⅳになると思われる。

土壙173・174・175（第118図）

調査区東側の北端に位置する、３つの土壙が連なっている。土壙173・174・175の順で後出する。土壙173の規模は、長軸長約48cm、短軸長約34cm、深さ19cmである。土壙174は、長軸・短軸長とも約48cmで、深さは21cmである。土壙175は、長軸長約56cm、短軸長46cm、深さ19cmである。３つの土壙とも形状は不正円形を呈する。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙176（第118図）

調査区東側の西端に位置し、北西方向に土壙172が近接する。規模は長軸長68cm、短軸長約54cm、深さ32cmで、形状は不正円形である。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙177（第118図）

調査区東側の北端に位置し、北東方向に土壙178が近接する。規模は長軸長75cm、短軸長約63cmで、形状は不正円形である。深さは確認面から23cmで、断面形状はⅢ形である。また北側には土壙が１つ連なる。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙178（第118図）

調査区東側の北端に位置し、南西方向に土壙177が近接する。規模は長軸長58cm、短軸長55cm、深さ14cmで、形状はほぼ円形である。時期は弥生後期の範疇になると思われる。

土壙179（第118図）

調査区東側の中央付近に位置し、北東方向に土壙183が近接する。規模は長軸長約82cm、短軸長47cm、深さ41cmで、形状は長楕円形である。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙180（第123図）

調査区東側の北端に位置し、南西方向に土壙175が近接する。規模は長軸長82cm、短軸長66cm、深さ30cmで、形状は長楕円形を呈する。時期は弥・後・ⅠとⅡの両方の要素がある。

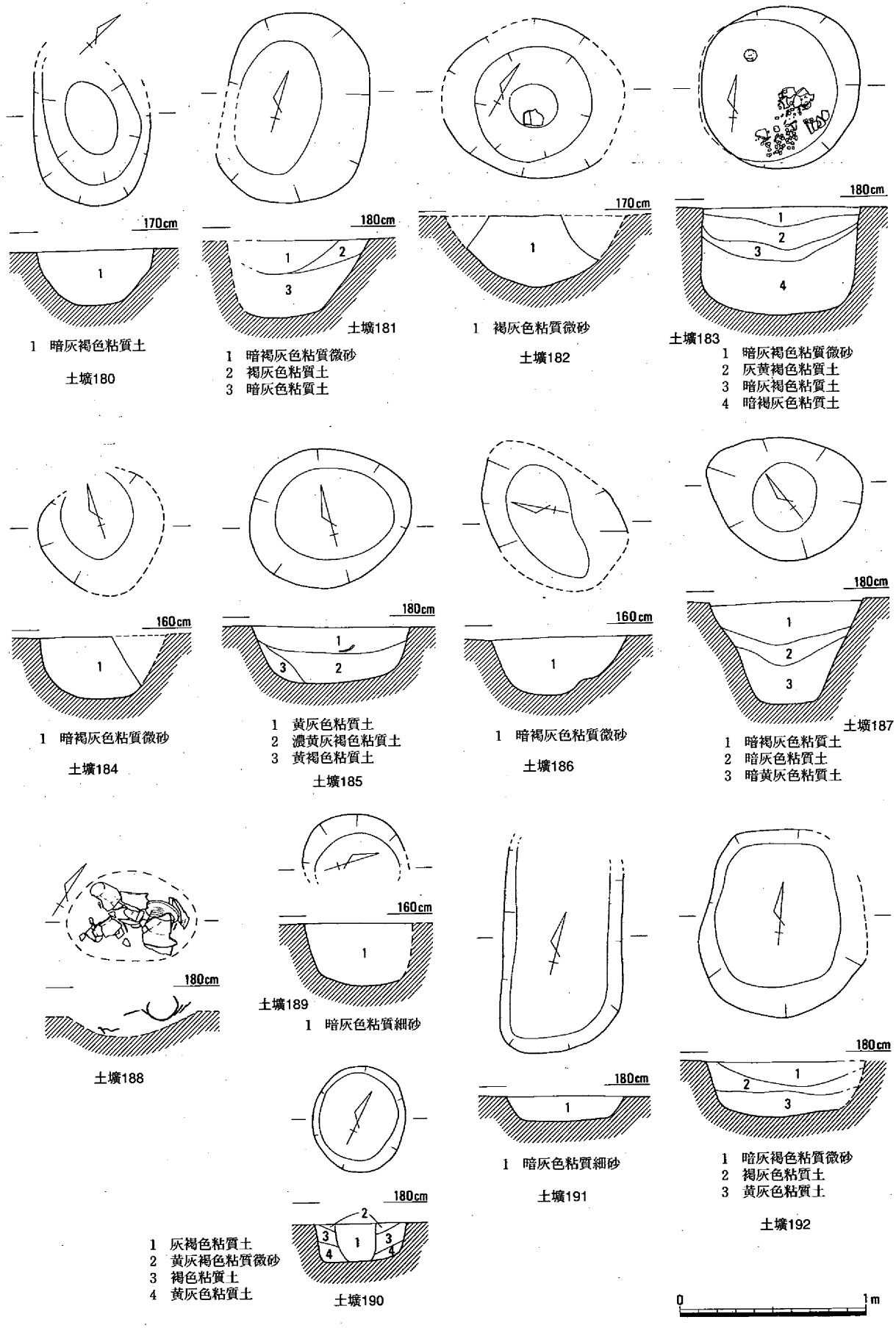
土壙181（第123図）

調査区東側の中央部付近に位置し、北東方向に土壙182が近接する。規模は長軸長105cm、短軸長78cm、深さ41cmで、形状は長楕円形を呈する。時期は弥・後・Ⅰになると思われる。

土壙182（第123図）

調査区東側の中央部付近に位置し、南西方向に土壙181が近接する。規模は長軸長約97cm、短軸長86cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から38cmになり、断面形状はⅢ形になる。遺物は図化するほどのものはないが、弥・中・Ⅲ～後期Ⅰのものがある。

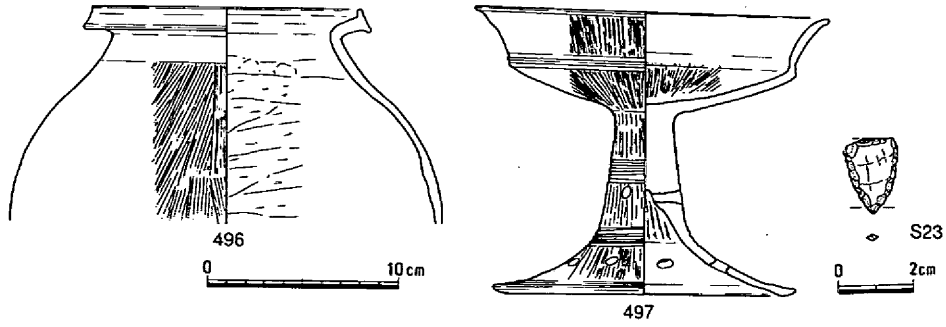
（小林）



第123図　土壙180～192　(1/30)

土壙183（第123・124図）

調査区東側の中央部付近に位置し、東側に土壙181、南西方向に土壙179が近接する。規模は長軸長87cm、短軸長84cmで、形状は不正円形を呈する。深さ58cmで、断面形状はやや袋状を呈する。出土遺物は、**496**が甕、**497**が高杯の完形品になる。いずれも弥・後・Ⅱの時期になる。**S23**は石錐になると思われる。



第124図　土壙183出土遺物（1/4・1/2）

土壙184（第123図）

調査区東側の中央部に位置し、東側に土壙185が近接する。規模は長軸長約62cm、短軸長58cm、深さ34cmで、形状は不正円形である。時期は弥・後・ⅡとⅢの両方の要素がある。

土壙185（第123図）

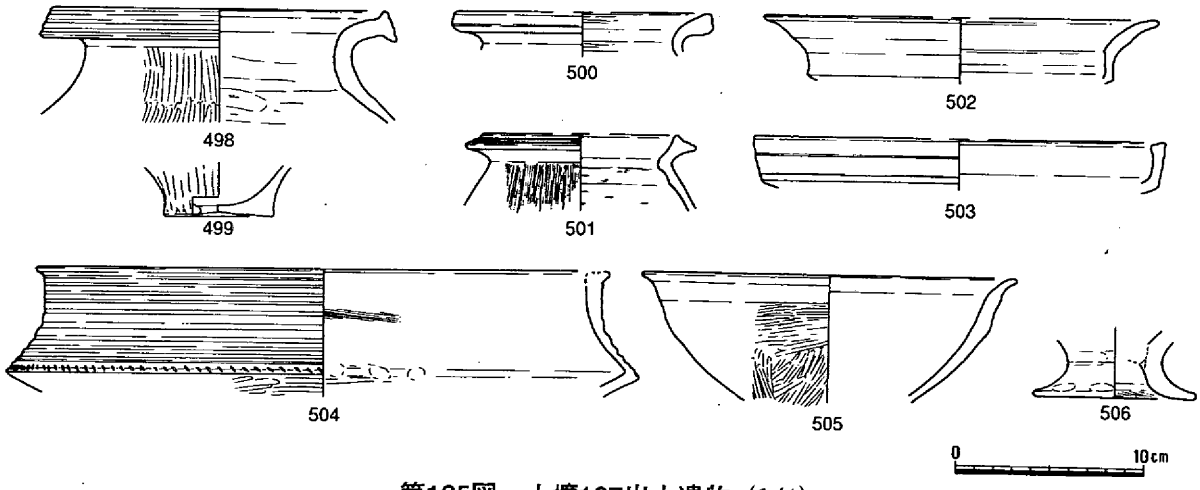
調査区東側の中央部に位置し、西側に土壙184が近接する。規模は長軸長90cm、短軸長約76cm、深さ31cmで、形状は倒卵形を呈する。時期は弥・後・Ⅲになると思われる。

土壙186（第123図）

調査区東側の中央部よりやや南側に位置し、南東側に土壙37や200が近接する。規模は長軸長約70cm、短軸長約55cm、深さ31cmで、形状は、倒卵形を呈する。弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙187（第123・125図）

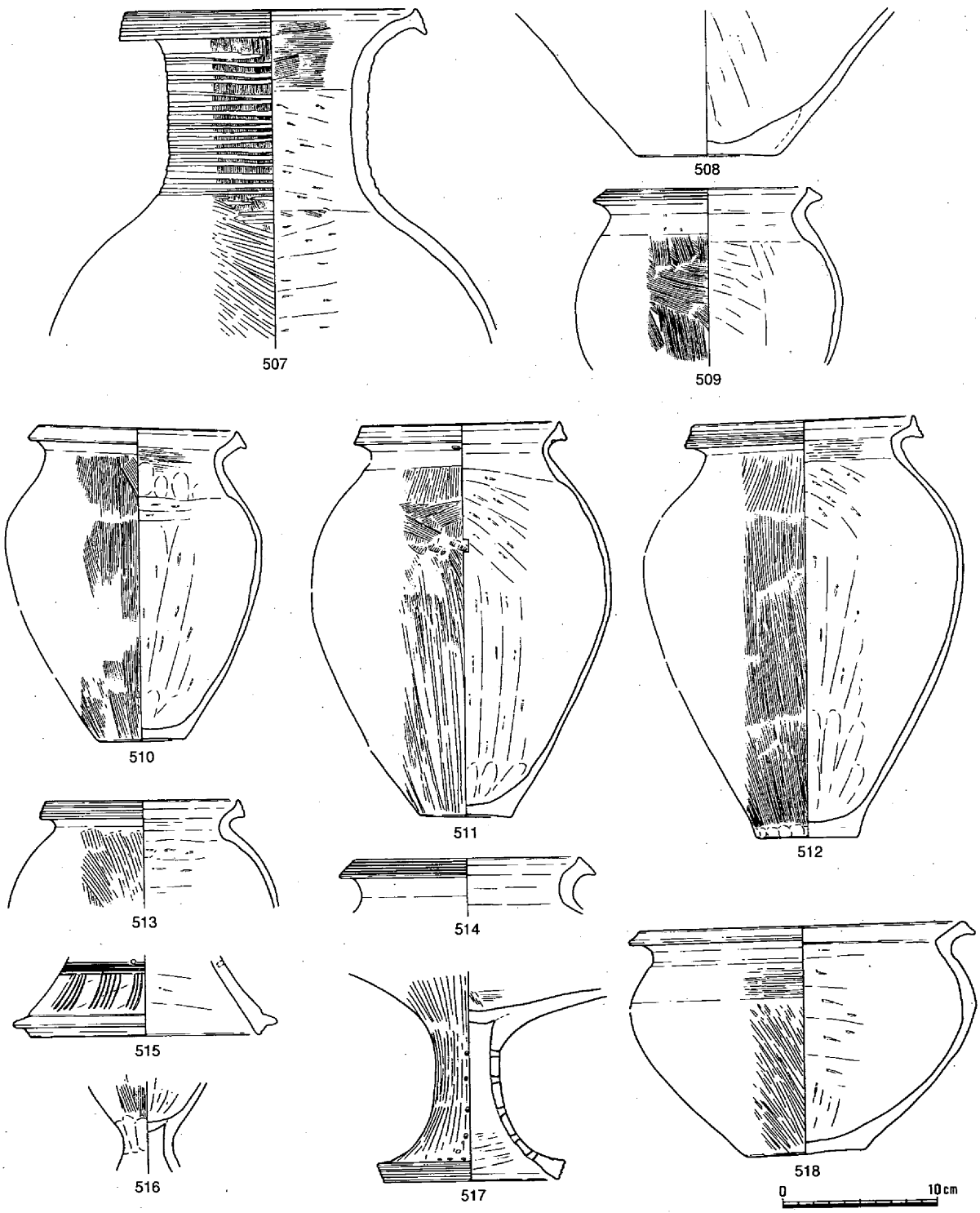
調査区東側の中央部よりやや南側に位置し、北側に土壙193が近接する。規模は長軸長86cm、短軸長65cmで形状は倒卵形を呈する。深さは56cmで、断面形状は箱薬研形である。出土遺物は、**498**が壺口縁部、**500**・**501**が甕口縁部である。**499**は底部片であるが、焼成後に穿孔される。**502**・**503**は高杯の口縁部である。**502**は端部が外方に開くタイプで、**503**は直上に立ち上がって終わる。**504**・**505**は鉢である。**504**はおそらく脚付になると思われ、胴部は算盤形に近い形状を示す。**501**が弥・後・Ⅰの要素を示す他は、弥・後・Ⅱの範疇になる。（小林）



第125図　土壙187出土遺物（1/4）

土壙188（第123・126図、図版26）

調査区の中央部よりやや南側に位置し、北東側に土壙31が近接する。この土壙188からは、**510**・**511**・**512**・**518**などほぼ完形に近い土器や、**507**・**509**・**517**などの1/2個体の土器が集中して出土した。その範囲はおおむね70cm×50cmになるが、土壙自体の掘込みを確定するにはいたらなかった。またこの土壙の確認面は標高で166cmになり、土壙31とは20cmほど高い位置になる。出土遺物は先述した通り、完形や完形に近い土器が、まとまって出土している。**507**・**508**は壺である。**507**は長頸壺の



第126図　土壙188出土遺物（1/4）

口縁部～胴部上半にかけてである。口縁の凹線部は直立せず内側に傾くが、沈線がある頸部はほぼ直立して立ち上がる。**509～514**は甕になる。口縁部の形態は、内側へ斜めに傾くタイプがほとんどで、内面のヘラケズリは頸部の下方付近で終わるものが多い。**515・517**は高杯の脚部である。**516・518**は鉢になり、**516**は脚付である。これらの遺物の時期は、**515**が弥・後・Ⅰの新相になる以外は、おおむね後期Ⅱの古相になるものがほとんどである。

土壙189（第123図）

調査区東側の中央部よりやや南側に位置し、北側に土壙184、南西側に土壙186が近接する。規模は約50cm×30cmで、不正円形になる。時期は、弥・後・Ⅰになると思われる。

土壙190（第123図）

調査区東側の中央部より北側に位置し、北東側に土壙34が近接する。規模は長軸長57cm、短軸長50cm、深さ20cmで、形状は円形を呈する。土層断面の観察により、柱穴になると思われる。

土壙191（第123図）

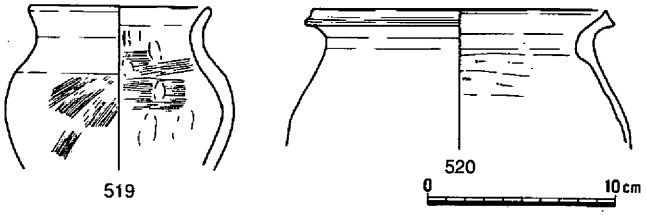
調査区東側の中央部より北側に位置し、北側に土壙192が近接する。規模は長軸長約120cm、短軸長86cmで、形状は隅丸長方形を呈する。深さは30cmで、断面形状は皿形である。遺物は土器片が少数出土するのみだが、弥・後・Ⅲになる土壙192に切られることから、それ以前の時期になる。

土壙192（第123図）

調査区東側の中央部より北側に位置し、南側に土壙191が近接する。規模は長軸長100cm、短軸長約90cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から30cmで、断面形状は椀形である。遺物は図化できないほどの小片しかないが、弥・後・Ⅲになると思われる。

土壙193（第127・128図）

調査区東側の中央部より南側に位置し、北東側に土壙200、南西側に土壙187が近接する。規模は長軸長約90cm、短軸長66cm、深さ21cmで、形状は長楕円形を呈する。出土遺物中、**519**は短頸壺で、**520**は甕の口縁部になる。弥・後・Ⅱの範疇である。



第127図　土壙193出土遺物（1/4）

土壙194（第128図）

調査区東側の中央部より北側に位置し、西側に土壙192・193が近接する。規模は長軸長約124cm、短軸長約88cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から21cmで、断面形状は皿形である。遺物は図化出来ない小片ばかりだが、時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

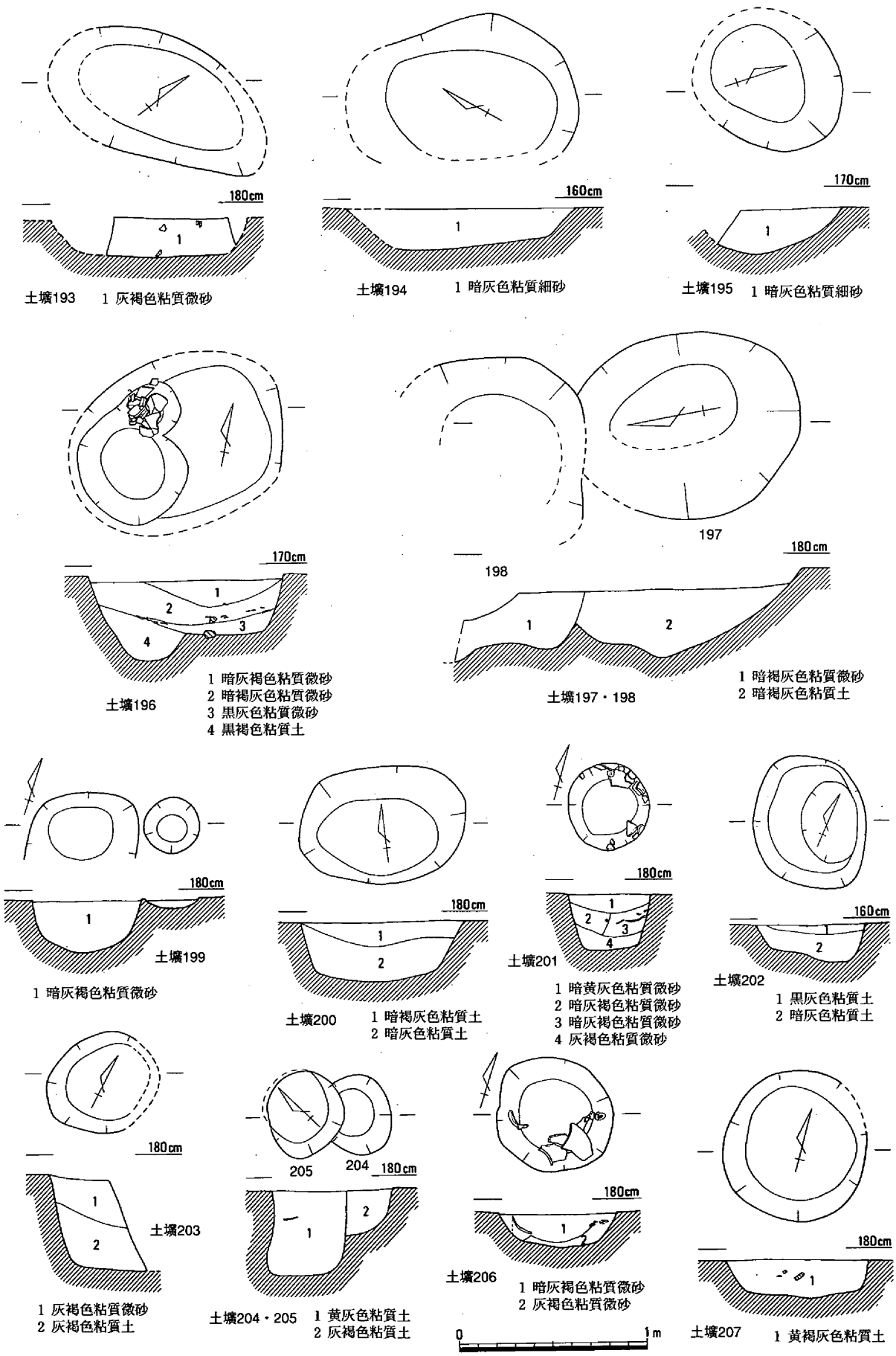
土壙195（第128図）

調査区最東端部の北側に位置し、土壙208・209・210などが近接する。規模は長軸長約81cm、短軸長約72cm、深さ23cmで、形状は不正円形を呈する。時期は弥・後・Ⅱの範疇である。

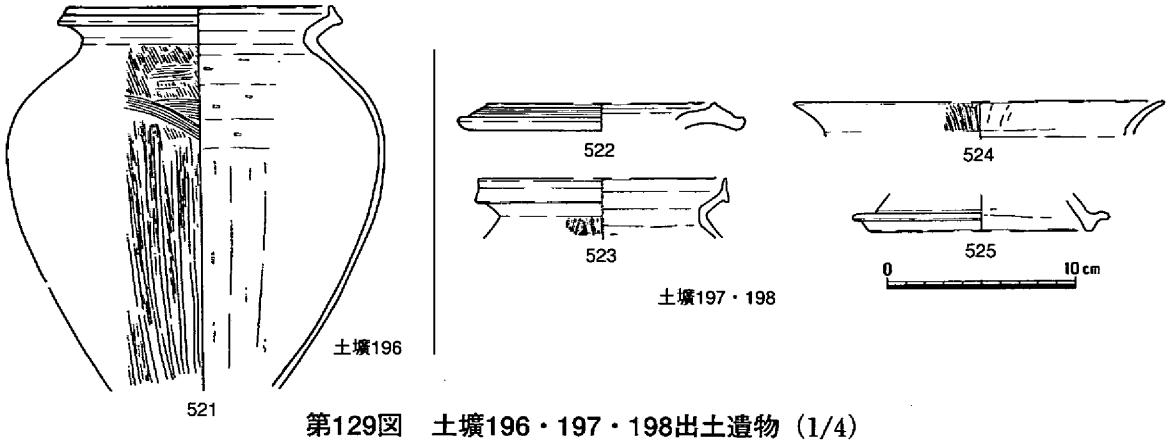
土壙196（第128・129図、図版26）

調査区東側の中央部より南側に位置し、北側に土壙197が近接し、これに切られる。規模は長軸長約122cm、短軸長約91cmで、形状は倒卵形を呈する。深さは西側が深くなり、確認面から43cmを測る。断面形状は皿形ではあるが、西側は凸状になる。また西側に**521**の破片が集中しており、甕になる。時期は弥・後・Ⅰの新相になると思われる。

（小林）



第128図　土壙193～207（1/30）



第129図　土壙196・197・198出土遺物（1/4）

土壙197・198（第128・129図）

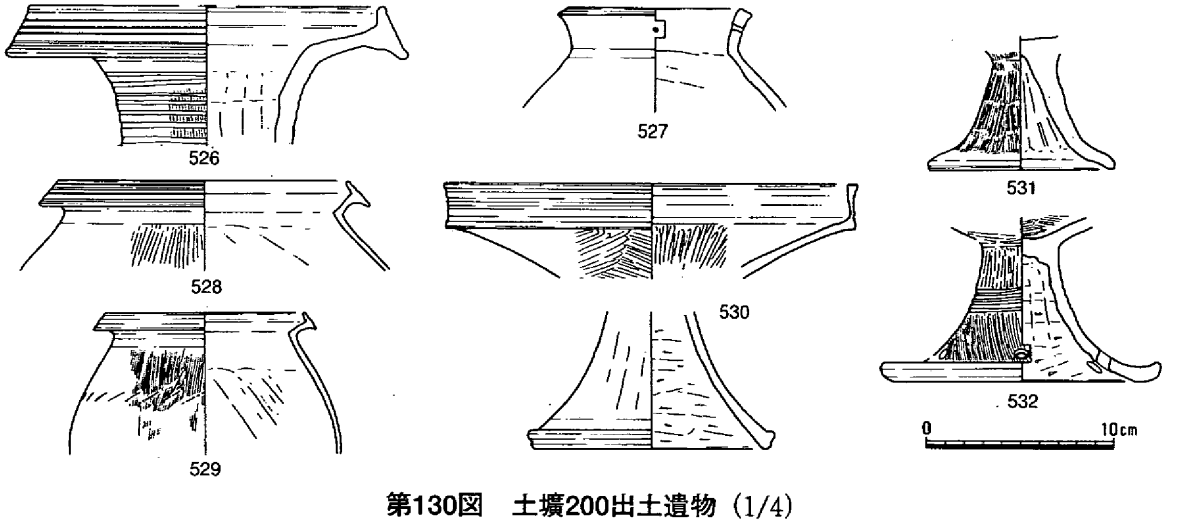
調査区東側の中央部より南側に２つが連なっており、南側に土壙196が近接する。規模は、土壙197が長軸長約112cm、短軸長99cm、深さは確認面から28cmで、土壙198が長軸長・短軸長とも約110cm、深さは確認面から28cmである。形状は土壙197が楕円形、土壙198が隅丸方形である。出土遺物は２つの土壙から小片のみ出土しており、**522**は壺口縁部、**523**は甕口縁部、**524**・**525**は高杯である。弥・後・Ⅰ～Ⅲまでのものが混じるが、後期Ⅱが多い。

土壙199（第128図）

調査区東側の中央部より南側に位置し、北東側には小土壙が近接する。規模は長軸長57cm、短軸長約38cmで、形状は隅丸長方形を呈する。深さは確認面から27cmで、断面形状は椀形を呈する。出土遺物は小片しかないが、弥・後・Ⅱの新相になる。

土壙200（第128・130図）

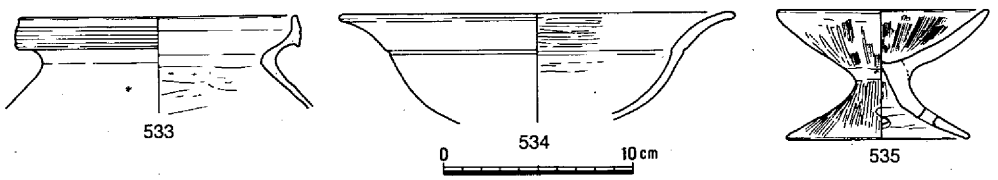
調査区東側の中央部より南側に位置し、北東側に土壙37、南西側に土壙193が近接する。規模は長軸長88cm、短軸長63cmで、形状は倒卵形を呈する。深さは確認面から31cmを測り、断面形状はⅢ形である。出土遺物は**526**が長頸壺の口縁部、 **527**が短頸壺の口縁部、**528**・**529**が甕、**530**～**532**が高杯である。この内**526**・**531**・**532**などは弥・後・Ⅱ～Ⅲの様相を示し、**528**～**530**は中期Ⅲになる。切り合いなどからこの土壙の時期は弥・後・Ⅱ～Ⅲになると思われ、断面などでも観察できなかったが、下層に中期Ⅲの土壙があった可能性が高い。　（小林）



第130図　土壙200出土遺物（1/4）

土壙201（第128・131図）

調査区最東端の北側に位置し、土壙211を切る形になる。規模は長軸長・短軸長ともに46cmで、形状はほぼ円形になる。深さは確認面から30cmを測り、断面形状は箱形を呈する。この土壙からは弥生土器片が集中して出土しており、**533**は甕口縁部、**534**・**535**は高杯になる。**534**は口縁端部が外方に屈曲するタイプで、**535**は口縁部が拡張しないでそのまま終わる。これらの土器はいずれも弥・後・Ⅳの範疇であり、この土壙の時期も同じであろう。



第131図　土壙201出土遺物（1/4）

土壙202（第128図）

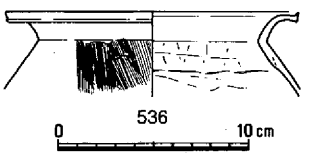
調査区最東端の北側に位置し、北側の土壙208を切る形になる。規模は長軸長68cm、短軸長58cm、深さ18cmで、形状は不正円形である。時期は弥・後・Ⅲになると思われる。

土壙203（第128図）

調査区最東端の中央部に位置し、東側の土壙204・205に切られる形になる。規模は長軸長56cm、短軸長約52cm、深さ18cmで、形状は倒卵形を呈する。時期は弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙204・205（第128・132図）

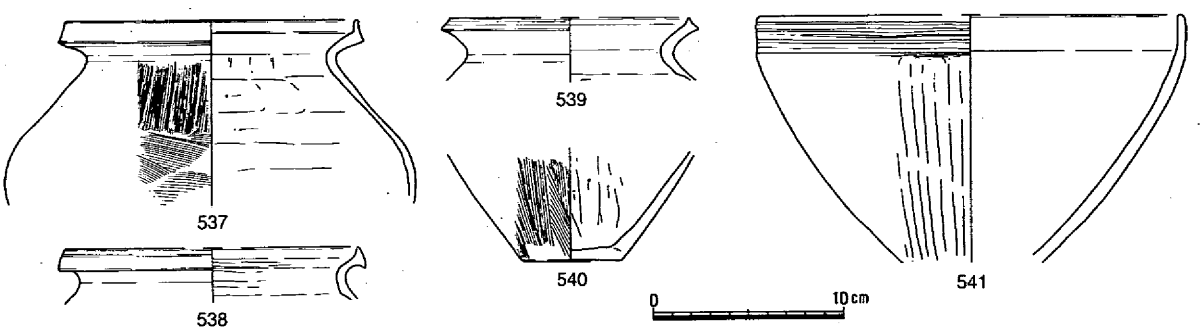
調査区最東端の中央部に位置し、２つが連なって、西側の土壙203を切っている。規模は、土壙204が長軸長43cm、短軸長約41cm、深さ23cm、土壙205が長軸長46cm、短軸長40cm、深さ45cmを測る。**536**は土壙205から出土した甕口縁部で、弥・後・Ⅳになる。



第132図　土壙205出土遺物（1/4）

土壙206（第128・133図）

調査区最東端の中央部よりやや南側に位置し、北東側に土壙203が近接する。規模は長軸長62cm、短軸長60cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から17cmで、断面形状はⅢ形である。この土壙からは弥生土器が集中して出土しており、**537**～**540**は甕で、**541**は鉢になる。この内**537**・**538**は弥・後・Ⅲの要素があり、**539**は後期Ⅱになる。**541**の鉢は口縁に凹線文があり、胴部外面はヘラミガキによって丁寧に作られる。後期Ⅲの範疇である。この土壙206の時期は、後期Ⅱの資料も含まれるが、後期Ⅲになる可能性が強い。（小林）



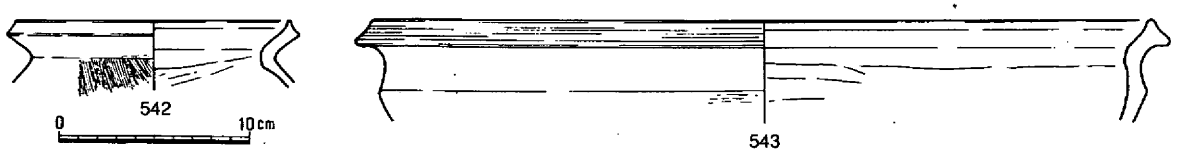
第133図　土壙206出土遺物（1/4）

土壙207（第128図）

調査区東側の中央部より南側に位置する。規模は長軸長80cm、短軸長76cm、深さは確認面から20cmで、形状は不正円形を呈する。時期は弥・後・ⅢとⅣの要素がある。

土壙208（第134・136図）

調査区最東端の北側に位置し、北側の土壙210・211、南側の土壙202にそれぞれ切られる。規模は長軸長151cm、短軸長約100cmで、形状は倒卵形を呈する。深さは確認面から16cmを測り、断面形状はⅢ形になると思われる。遺物は弥生土器の小片が出土しており、**542**は甕口縁部、**543**は鉢口縁部である。どちらも弥・後・Ⅱになり、この土壙の時期もその時期である。



第134図　土壙208出土遺物（1/4）

土壙209（第136図）

調査区最東端の北側に位置し、北側の土壙195、西側の土壙208をそれぞれ切っている。規模は長軸長104cm、短軸長84cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から43cmで、断面形状は椀形である。時期は弥・後・Ⅱの範疇になる。

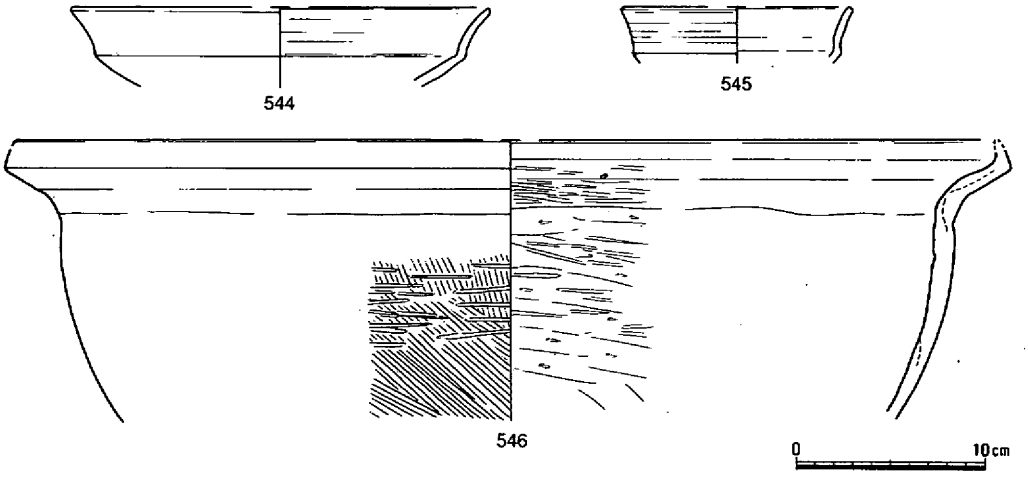
土壙210（第136図）

調査区最東端の北側に位置し、東側の土壙211に切られる。規模は長軸長125cm、短軸長約88cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から41cmを測り、断面形状はおおむねⅢ形であるが、中央部が凸状になる。時期は弥・後・Ⅲ以前のなる可能性が高い。

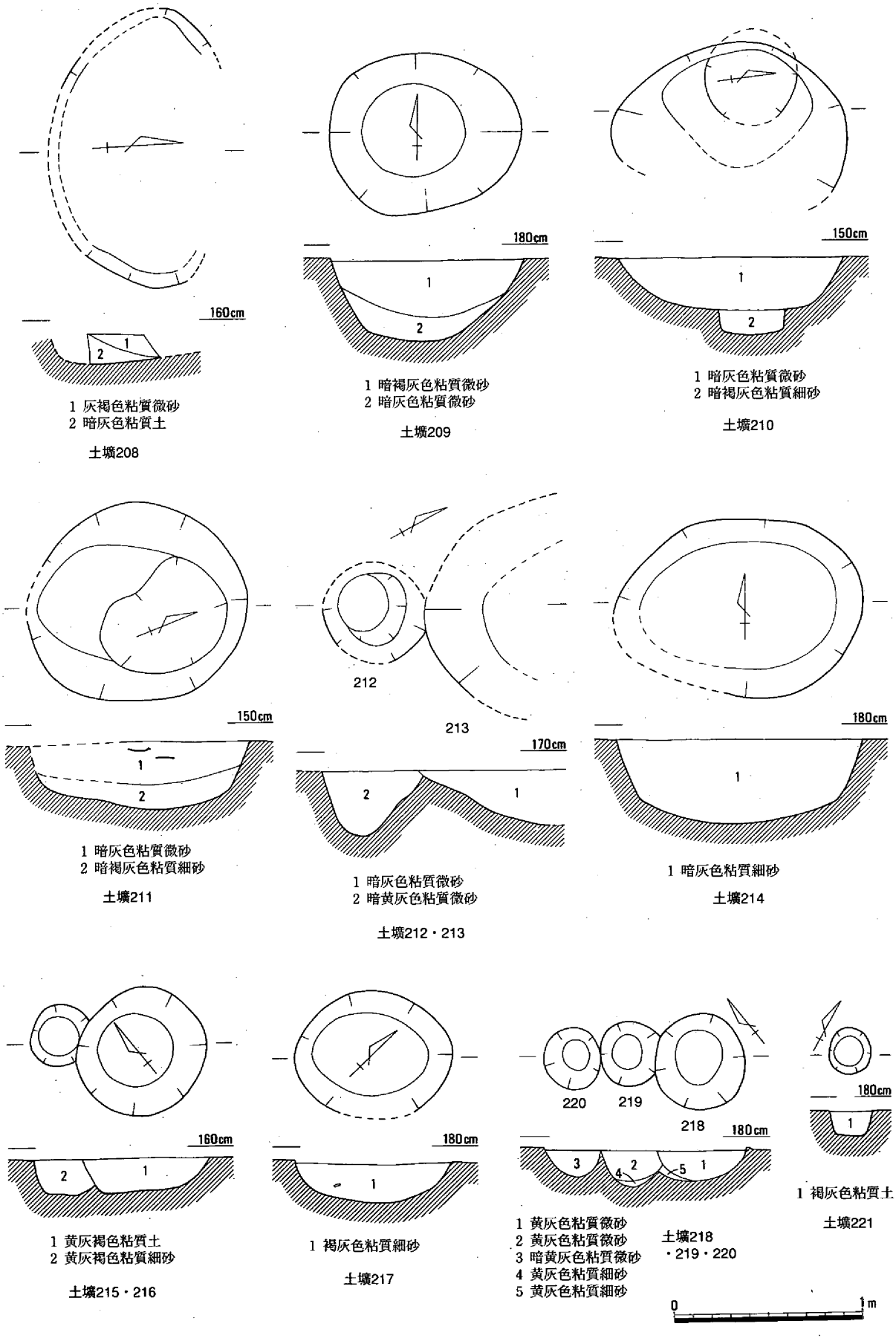
土壙211（第135・136図）

調査区最東端の北側に位置し、弥・後・Ⅳの土壙201に切られ、土壙210を切る。規模は長軸長120cm、短軸長106cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から36cmで、断面形状はⅢ形である。弥生土器片が数点出土しており、**544**・**545**は高杯口縁部、**546**は鉢である。**544**は端部が外方に開くタイプで、**545**はわずかにしか開かない。いずれの土器も弥・後・Ⅲの範疇になり、この土壙の時期も同様になるであろう。

（小林）



第135図　土壙211出土遺物（1/4）



第136図　土壙208～221（1/30）

土壙212・213（第136図）

調査区最東端の北側に位置し、2つが連なっている。西側に土壙208や土壙211が近接する。規模は、土壙212が長軸長約58cm、短軸長約53cm、深さは確認面から36cmで、形状は円形を呈する。土壙213は長軸長約150cm、短軸長約122cm、深さは確認面から29cmで、形状は円形になると思われる。時期は両方とも弥・後・Ⅱの範疇になると思われる。

土壙214（第136図）

調査区最東端の中央部に位置し、土壙231・232に切られる。規模は長軸長131cm、短軸長95cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から45cmを測り、断面形状は皿形である。時期は、小片しか出ていない土器片から判断して、弥・後・Ⅱの範疇になる。

土壙215・216（第136図）

調査区最東端の中央部よりやや南側に位置し、2つが連なっていて土壙216が後出する。規模は、土壙215が長軸長34cm、短軸長約32cm、深さ19cmで、形状は円形である。土壙216は長軸長70cm、短軸長64cm、深さ18cmで、形状は円形である。時期はともに弥・後・Ⅱになると思われる。

土壙217（第136図）

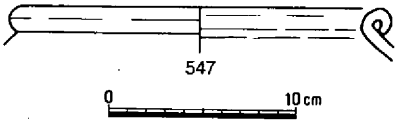
調査区最東端の中央部よりやや南側に位置し、南西側の土壙234に切られる。規模は長軸長84cm、短軸長約64cm、深さ20cmで、形状は楕円形を呈する。時期は弥・後・Ⅱになる。

土壙218・219・220（第136図）

調査区最東端の中央部に位置し、3つが連なって土壙222を切る。規模は、土壙218が長軸長52cm、短軸長48cm、深さ16cmで、形状は円形である。土壙219は長軸長35cm、短軸長32cm、深さ20cmで、形状は円形である。土壙220は長軸長33cm、短軸長30cm、深さ14cmで、形状は円形である。3つの土壙とも弥生後期になると思われるが、細分は出来ない。

土壙221（第136・137図）

調査区最東端の中央部に位置し、西側の土壙222を切る。規模は長軸長33cm、短軸長30cmで、形状は円形を呈する。深さは20cmを測り、断面形状は箱形である。547は壺の口縁部であるが、端部は巻き込むタイプである。弥・後・Ⅰになる。



第137図　土壙221出土遺物（1/4）

土壙222（第138図）

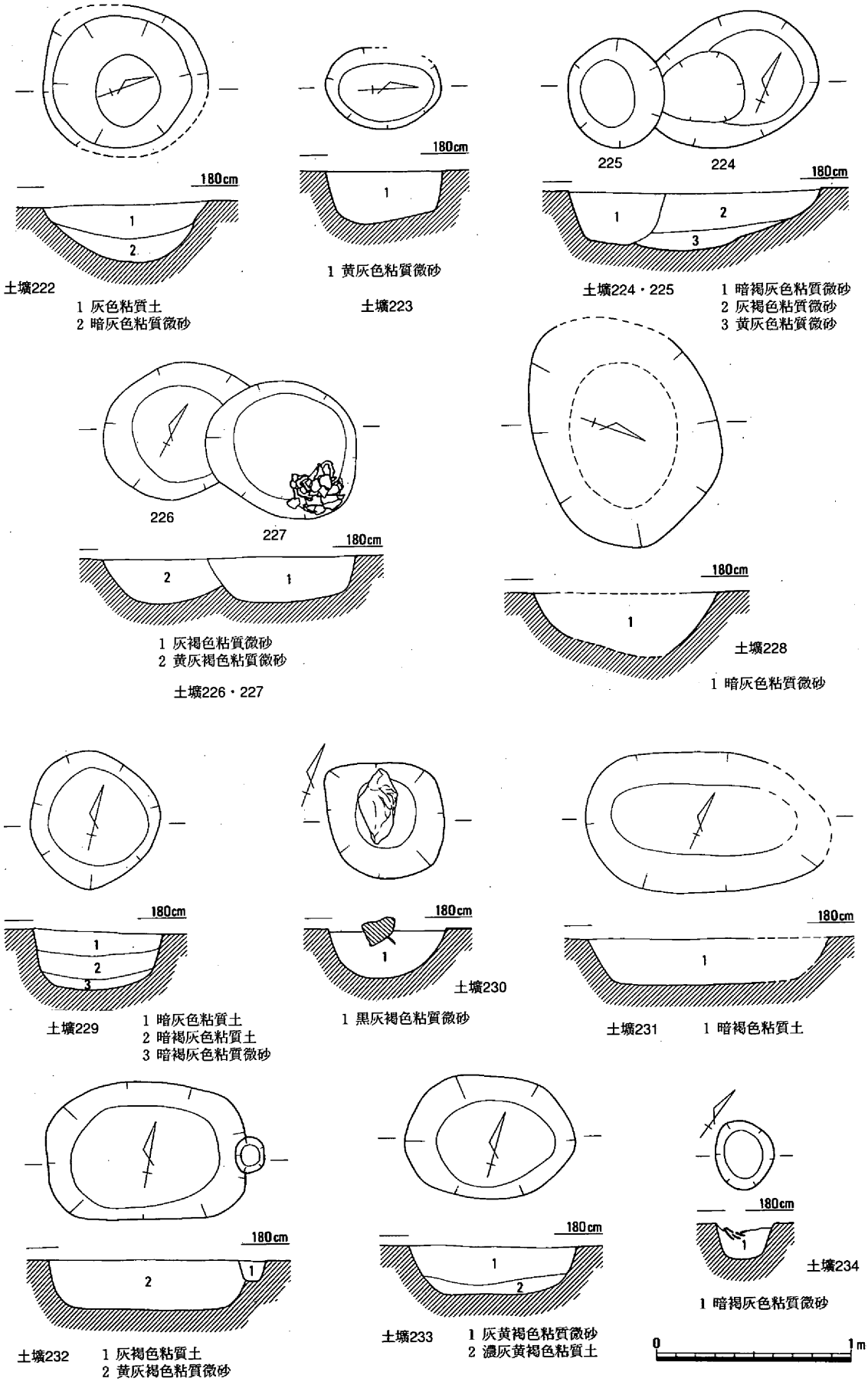
調査区最東端の中央部に位置し、東側の土壙221、西側の土壙218・219・220に切られる。規模は長軸長85cm、短軸長約76cmで、形状は円形である。深さは確認面から30cmで、皿形である。時期は土壙211に切られることから、弥・後・Ⅰもしくはそれ以前になると思われる。

土壙223（第138図）

調査区最東端の中央部よりやや南側に位置し、南西側に土壙227が近接する。規模は長軸長60cm、短軸長約40cm、深さ24cmで、断面形状は箱形である。弥生後期ではあるが、細分は不明である。

土壙224・225（第138図）

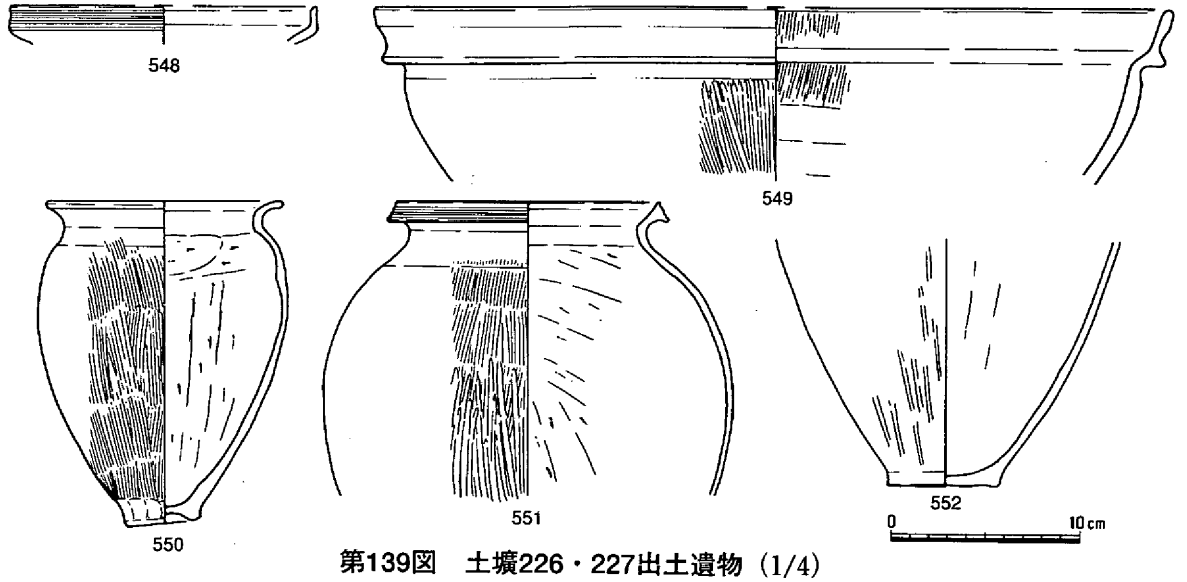
調査区最東端の南側に位置し、2つが連なって、土壙228を切る。2つの土壙の関連では、土壙225が後出する。規模は、土壙224が長軸長約82cm、短軸長68cm、深さは確認面から28cmで、形状は楕円形である。土壙225は長軸長56cm、短軸長49cm、深さは確認面から24cmで、形状は円形である。時期は土壙224が弥・後・Ⅰ～Ⅱの要素があり、土壙225は後期Ⅱの要素がある。（小林）



第138図　土壙222～234（1/30）

土壙226・227（第138・139図、図版26）

調査区最東端の南側に位置し、２つが連なっている。この２つの土壙中では、土壙227が後出すると調査時では考えていた。近接する土壙としては、北西側に土壙216が、北東側に土壙223が存在する。規模は、土壙226が長軸長約88cm、短軸長69cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から23cmを測り、断面形状は皿形である。土壙227は長軸長80cm、短軸長69cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から23cmで、断面形状は皿形である。出土遺物は**548・549**が土壙226で、**550・551・552**が土壙227のものである。土壙226出土の方は**548**が古墳時代前期の甕で、**549**が弥・後・Ⅲ～Ⅳの鉢である。土壙227出土のものは、いずれも弥・後・Ⅱになり、切り合い関係とあわない。



第139図　土壙226・227出土遺物（1/4）

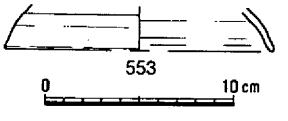
土壙228（第138図）

調査区最東端の南側に位置し、土壙224・225に切られる。規模は長軸長117cm、短軸長95cm、深さ約30cmで、形状は楕円形である。時期は弥・後・Ⅰになると思われる。（小林）

古墳時代以降の土壙

土壙229（第138・140図）

調査区の西側に位置し、西側に土器棺墓10が近接する。規模は長軸長72cm、短軸長66cmで、形状は不正円形を呈する。深さは確認面から30cmで、断面形状は椀形に近い。**553**の様な須恵器が出土しており、ＴＫ209になると思われる。土壙自体の時期も同じになるだろう。



第140図　土壙229出土遺物（1/4）

土壙230（第138図）

調査区の中央部よりやや南東側に位置し、竪穴住居８・９を切る形である。規模は長軸長61cm、短軸長59cmで、形状は方形に近い。深さは確認面から25cmを測り、断面形状は皿形である。土壙のほぼ中央部には、約40cmの礫が存在するが、底面から浮いているため、礎石にはならないと思われる。

土壙231（第138図）

調査区最東端の中央部に位置し、東側で近接した土壙232に切られ、土壙214を切る。規模は長軸長約125cm、短軸長73cmで、形状は長楕円形を呈する。深さは確認面から25cmを測り、断面形状は皿形である。出土遺物はないので、この土壙の正確な時期は不明である。（小林）

土壙232（第138図）

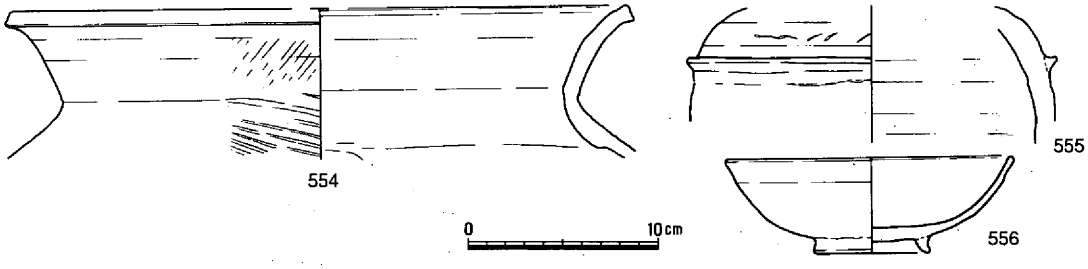
調査区最東端の中央部に位置し、土壙214・231を共に切る形になる。規模は長軸長106cm、短軸長71cmで、形状は隅丸長方形である。深さは確認面から26cmを測り、断面形状は皿形である。遺物は出土していないので、この土壙の正確な時期は不明である。

土壙233（第138図）

調査区最東端の中央部に位置し、北西側で土壙39、南側で土壙205、南東側で土壙215が近接する。規模は長軸長88cm、短軸長62cmで、形状は楕円形を呈する。深さは確認面から25cmを測り、断面形状は皿形である。遺物が出土しないので、この土壙の正確な時期は不明である。

土壙234（第138・141図）

調査区最東端の南側に位置し、北西側で土壙217を切る形になる。規模は長軸長36cm、短軸長30cmで、形状は不正円形である。深さは確認面から14cmを測り、断面形状は椀形である。土壙自体は小型であるが、土器片が土壙の上層部から多量に出土する。**554**は須恵器の甕であり、**555**は瓦質の土釜で、**556**は吉備系土師質椀である。出土遺物の幅は古墳時代後期～中世まであり、この土壙に時期は中世段階になると思われる。（小林）



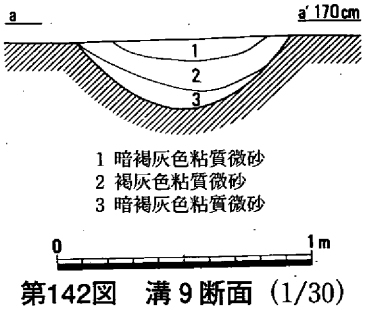
第141図　土壙234出土遺物（1/4）

溝

東鬼川市Ⅱ調査区では、溝が４条検出されており、その内最も西側に位置する溝はⅠ調査区から続く溝12である。

溝９（第142図）

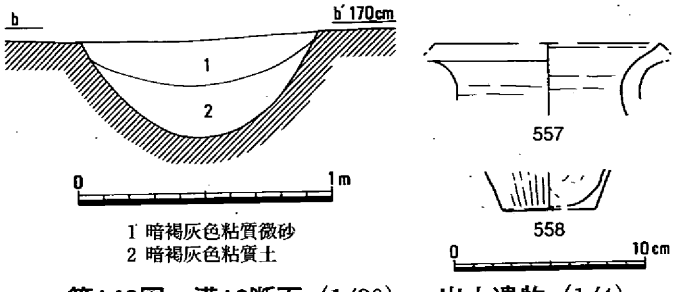
溝９は調査区の最西端部に位置し、溝12や土器棺墓１に切られる形になる。この溝は北側から南側に流れる。溝の幅は確認面でおおむね85cm前後になり、深さは確認面から28cmを測る。断面形状は椀形である。時期は弥・中・Ⅲ～後期Ⅰになる。



第142図　溝９断面（1/30）

溝10（第143図）

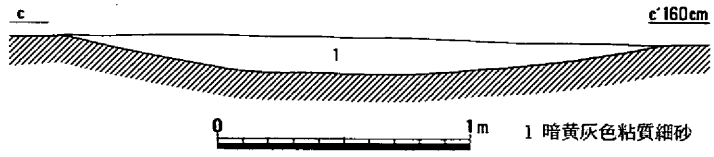
溝10は調査区の最西端に位置し、西側に溝９が近接し、また土器棺墓２に切られる。この溝は北側から南側に流れる。溝の幅は確認面でおおむね95cm前後になり、深さは確認面から38cmを測る。断面形状は椀形である。**557**は弥・後・Ⅰ、**558**は弥・中・Ⅲの甕になる。（小林）

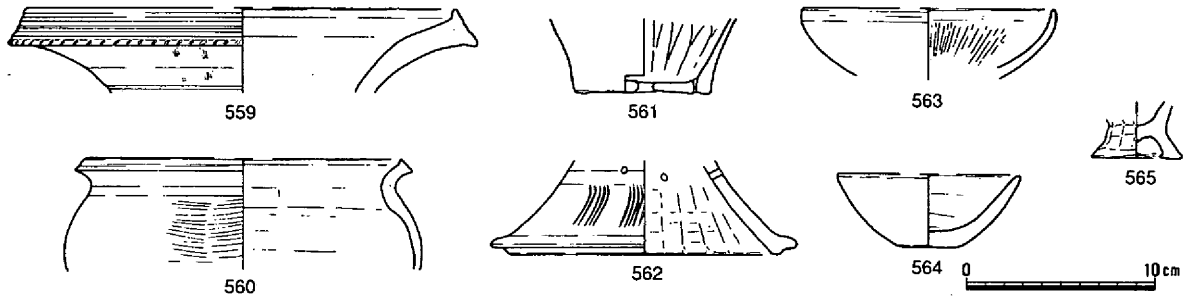


第143図　溝10断面（1/30）・**出土遺物**（1/4）

溝11（第144図）

溝11は、調査区の西側部の東よりに位置する。過去の調査では、東鬼川市Ｄ４にあたる。この溝は調査区内では、北から南に向かって直線的に南流する。ほぼ溝12と平行している。溝の幅は、北側で290cm、南側で170cmを測り、深さは13cmで断面形状はⅢ形である。出土遺物は、**559**が壺で、**560**・**561**は甕、**561**は底部に焼成後穿孔がある。**562**・**563**は高杯、**564**は鉢、**565**は製塩土器である。弥・後・Ⅰ～Ⅱの両方がある。（小林）

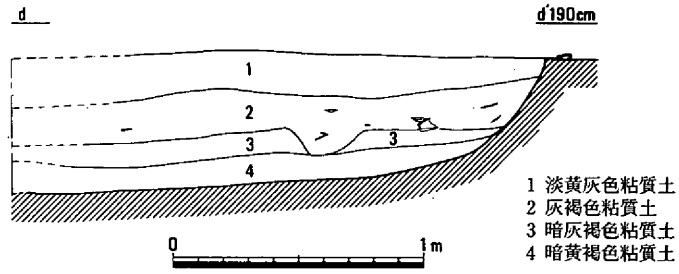




第144図　溝11断面（1/30）**・出土遺物**（1/4）

溝12〈土器溜まり〉（第145・146図）

溝12は、東鬼川市Ⅰ調査区の東端から、東鬼川市Ⅱ調査区の西端までまたがる位置にある。よって幅は広く、北側で約10.5mで、南側では約10.8mを測り、今回発見された溝の中で最大の規模を誇る。溝の流れは、調査区内では北から南へ直線的に南流する。この溝の深さは、確認面から50cmでほぼ一定するが、最深部では80cmを測る。この溝からは、多量の弥生土器が出土した。

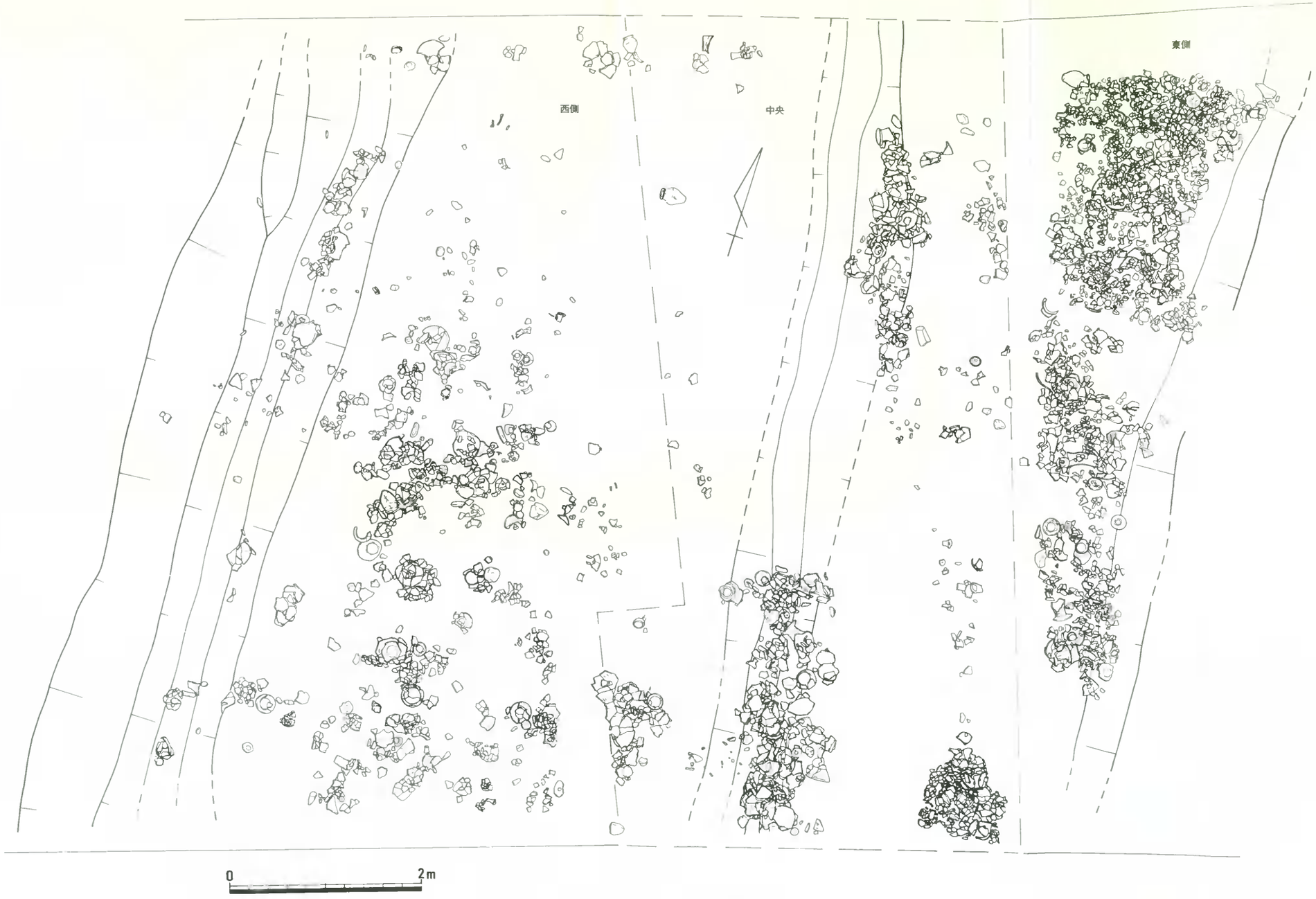


第145図　溝12断面（1/30）

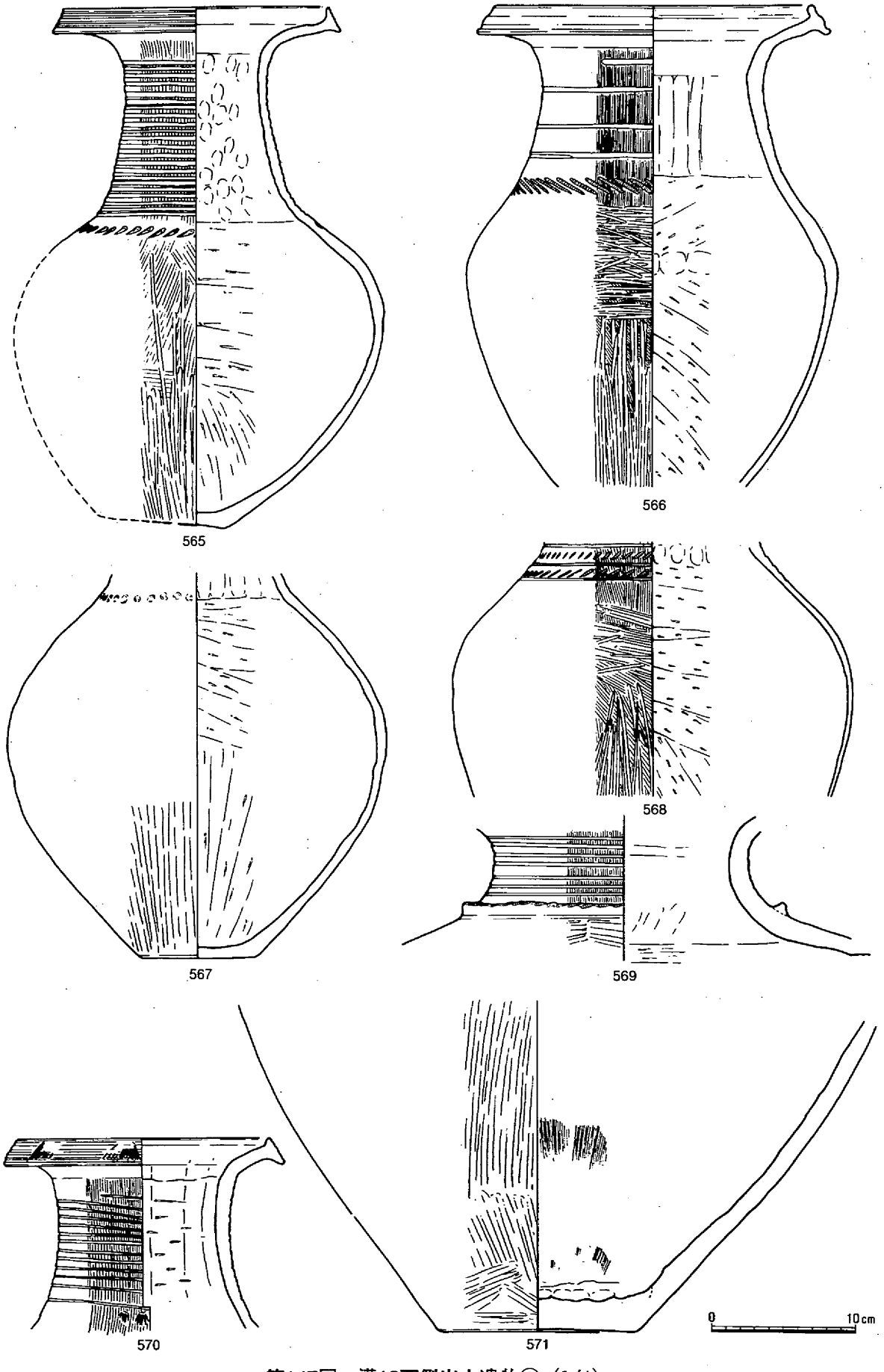
土器の出土状況には、地点によって多少の差異があり、溝の西側では、土器は全体としては散財しているが、個体同士は固まっている。溝の最深部付近は、最も土器が集中的に出土している。東側では、土器片が多量に、しかも集中的に出土するが、個体同士のまとまりは西側ほどではない。ただし層位的に見て、上層と下層に分けられ、下層には弥・中・Ⅲと後期Ⅰが多い。（小林）

出土遺物（西側）　（第147～153図、図版２－２、27、28－１）

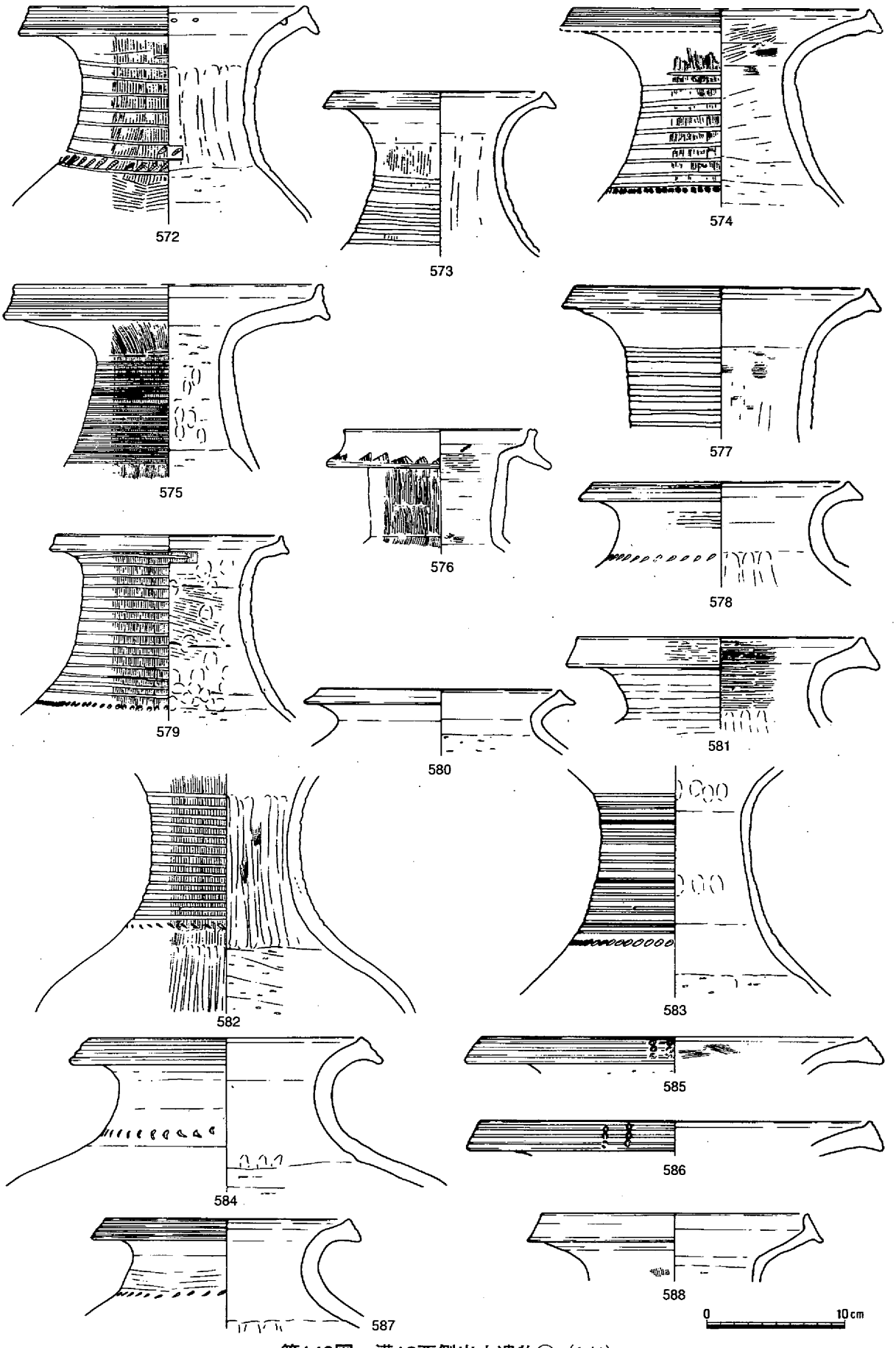
溝12の中でも、東鬼川市Ⅰ調査区内出土のものとする。中央部から南側にかけて土器が多く出土し、ほとんどが底面近くにある。壺には頸が長くなるものと、長くならないものがある。長くなるものの中で、**566**は弥・後・Ⅰになり、口縁部は上下に拡張し、頸部は器高の割りには径が太い。頸部にある沈線は、１本１本の幅は広くなる。**565**・**567**・**570**・**572**・**573**・**574**・**577**・**579**・**582**・**583**は後期Ⅱになる。口縁部の形態を分類すると、上へ拡張する**565**、下へ拡張する**572**、上下へ拡張する**570**、三角形に近い形になる**573**・**577**などがある。また**579**は、端部をつまみ上げている。頸部の形態は、**582**・**583**の様に頸部内で湾曲するものは、口縁形態が下に拡張するものと三角形になるものに多い。



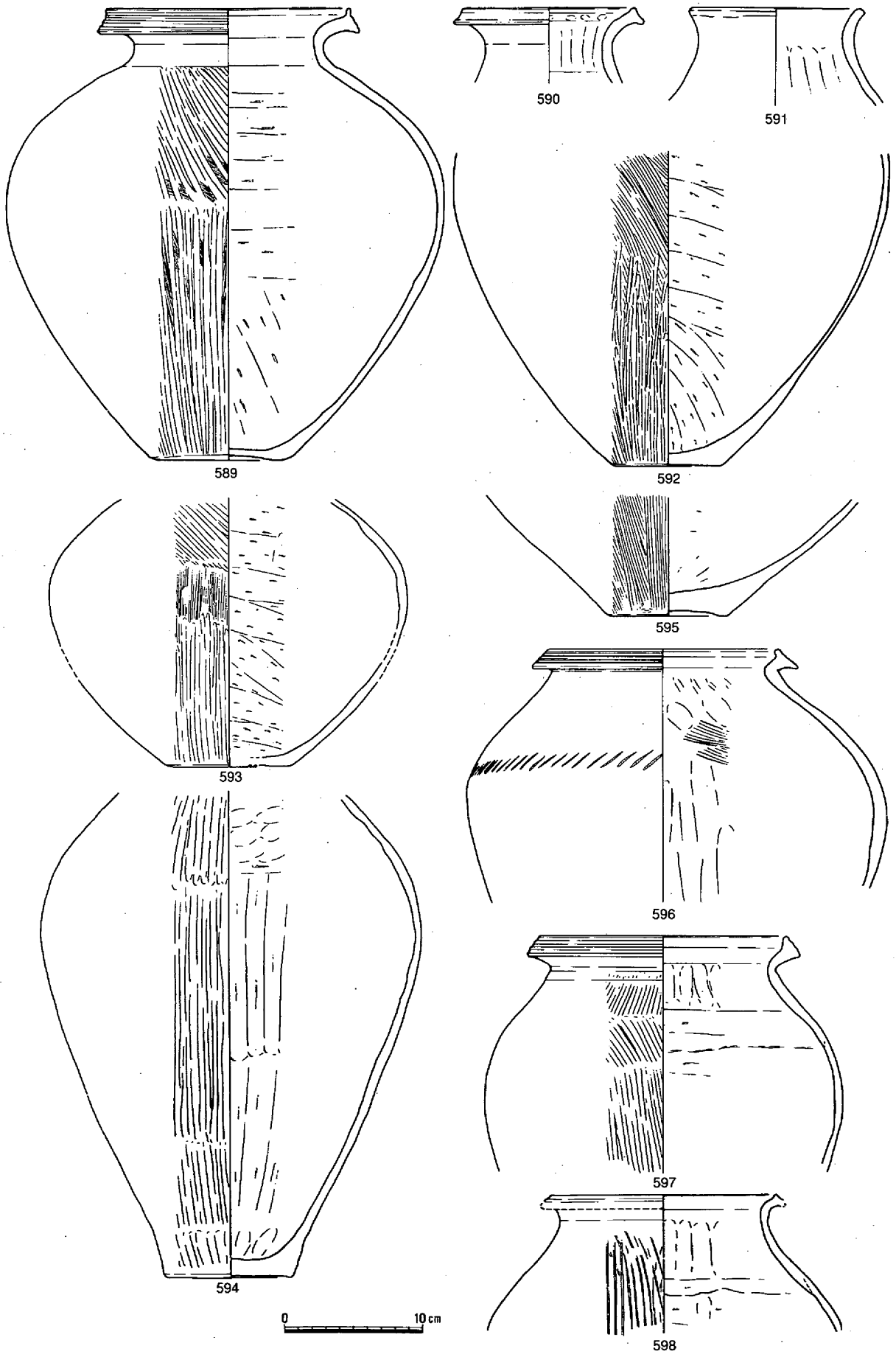
第146図　溝12土器出土状態（1/40）



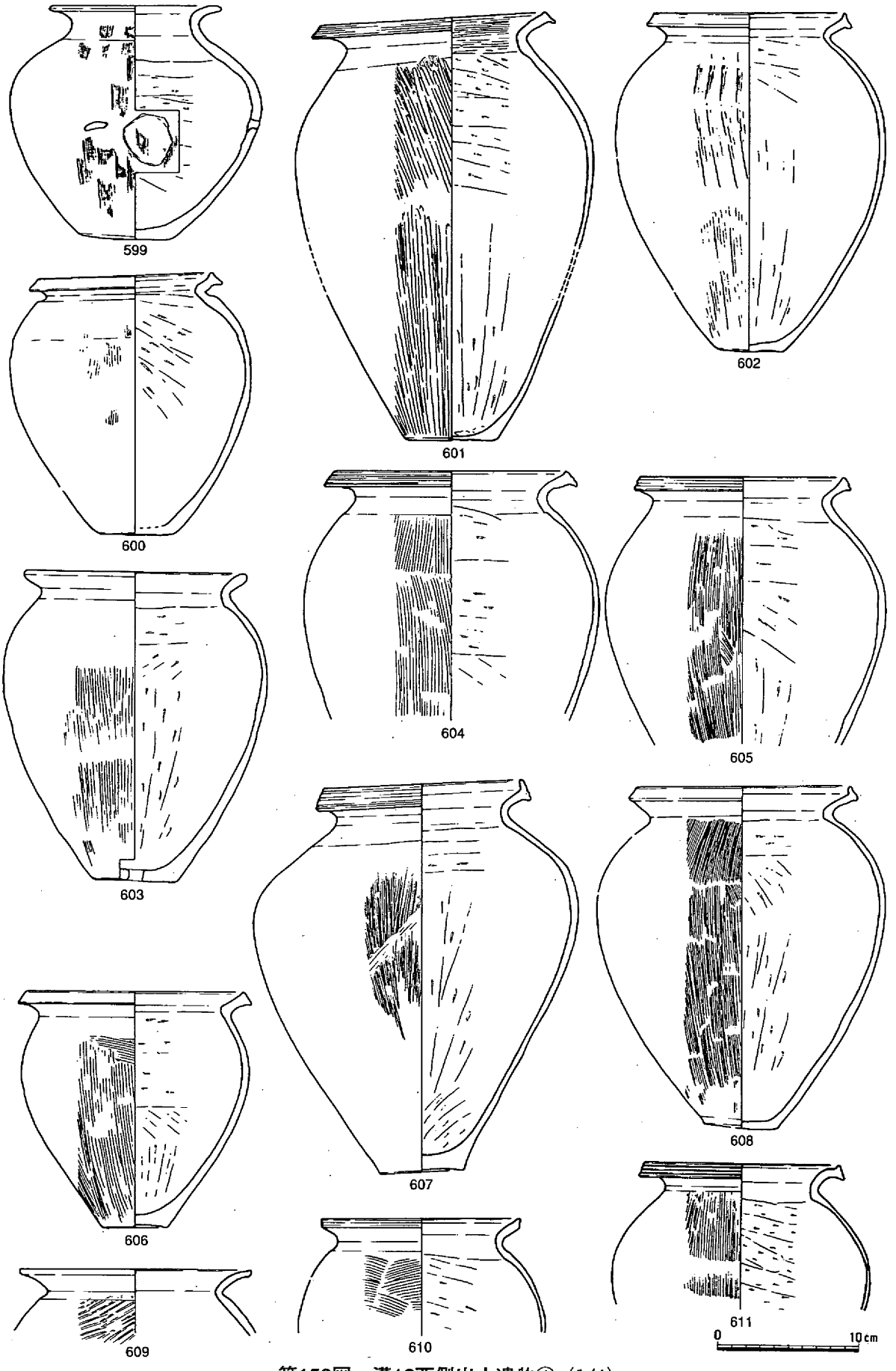
第147図　溝12西側出土遺物①（1/4）



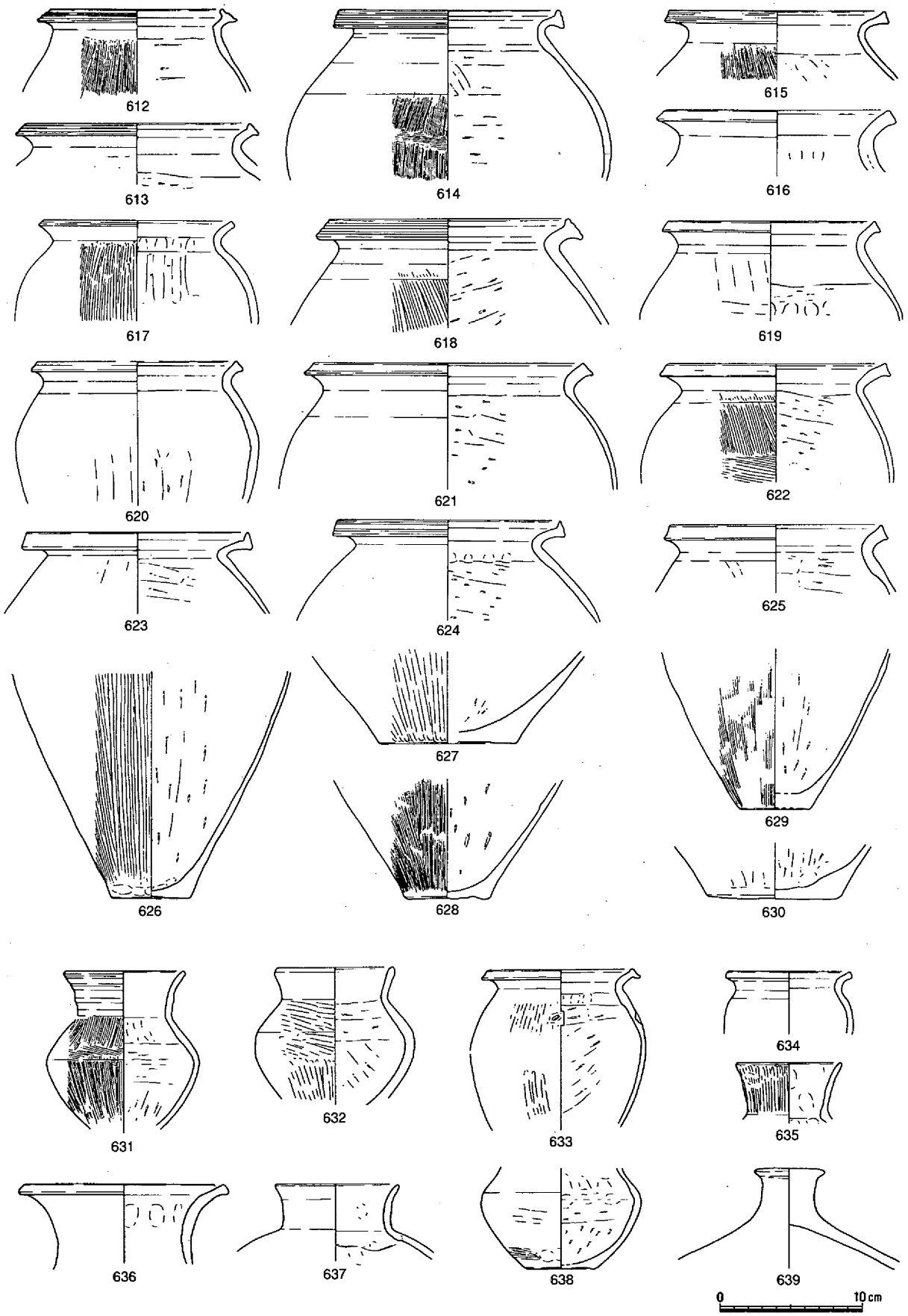
第148図　溝12西側出土遺物②（1/4）



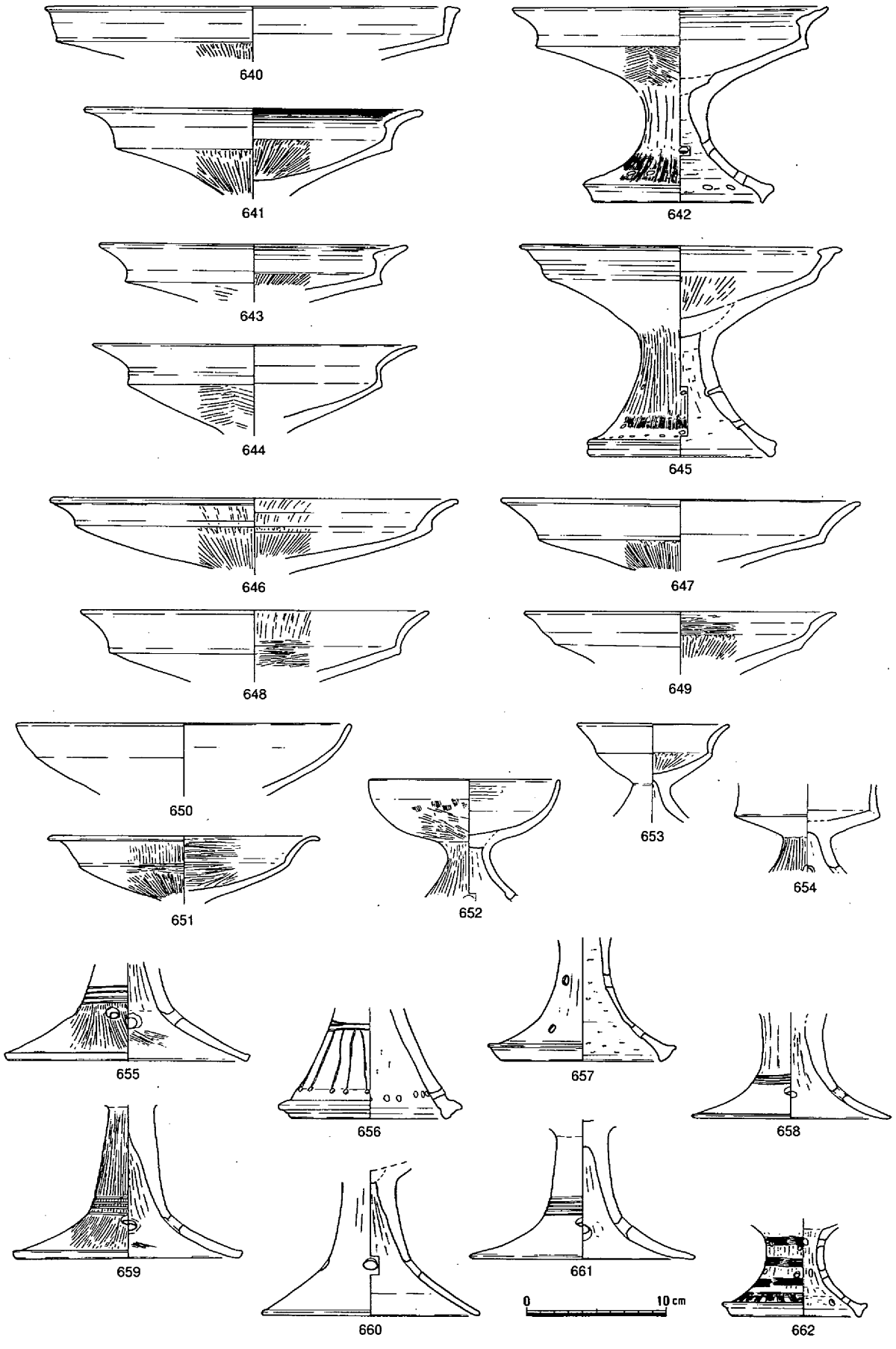
第149図　溝12西側出土遺物③（1/4）



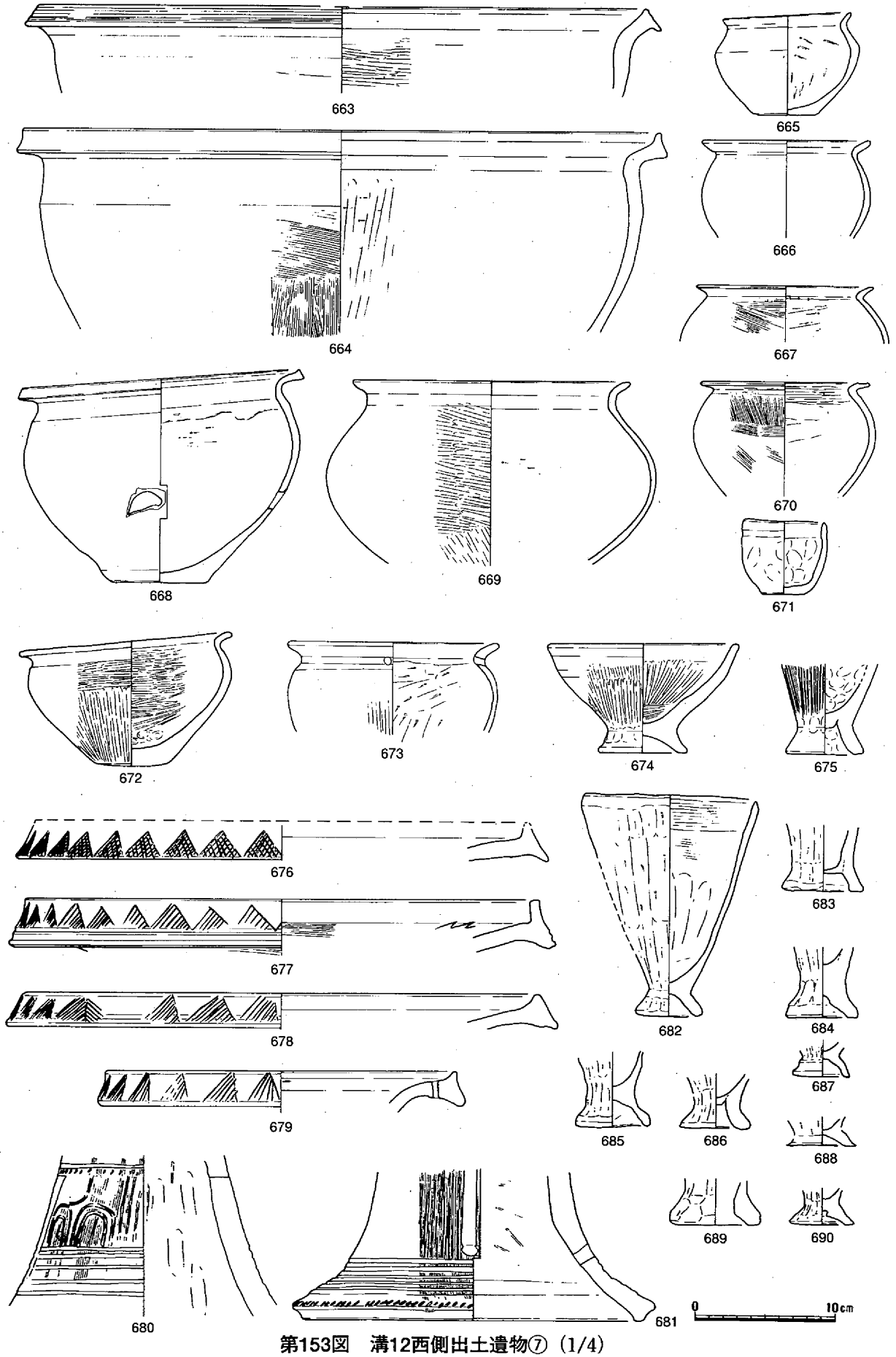
第150図　溝12西側出土遺物④（1/4）



第151図　溝12西側出土遺物⑤（1/4）



第152図　溝12西側出土遺物⑥（1/4）



第153図　溝12西側出土遺物⑦（1/4）

ハ字になるものは、口縁形態が上へ拡張するものに多い。これは後期Ⅱの中でも新相になり、後期Ⅲに近い。

甕は、後期Ⅱが多い。破片ではあるが、後期Ⅳも数片混じる。596・597・603・612・618は後期Ⅰになる。口縁部の形態は、上下に拡張する596・612・618、上に拡張する597、く字になる603などがある。後期Ⅱの口縁部形態は、大半が三角形になる（601・604・605・613・615)。その中でも601・604は下へも拡張している。後期Ⅲの口縁部形態は、端部をつまみ上げる602・608・611、真上へ拡張する614・623・624、斜め上へ拡張し擬凹線がある607などがある。後期Ⅳは609・610である。609は胴部にタタキがあり、610の口縁端部は外側につまみ上げている。

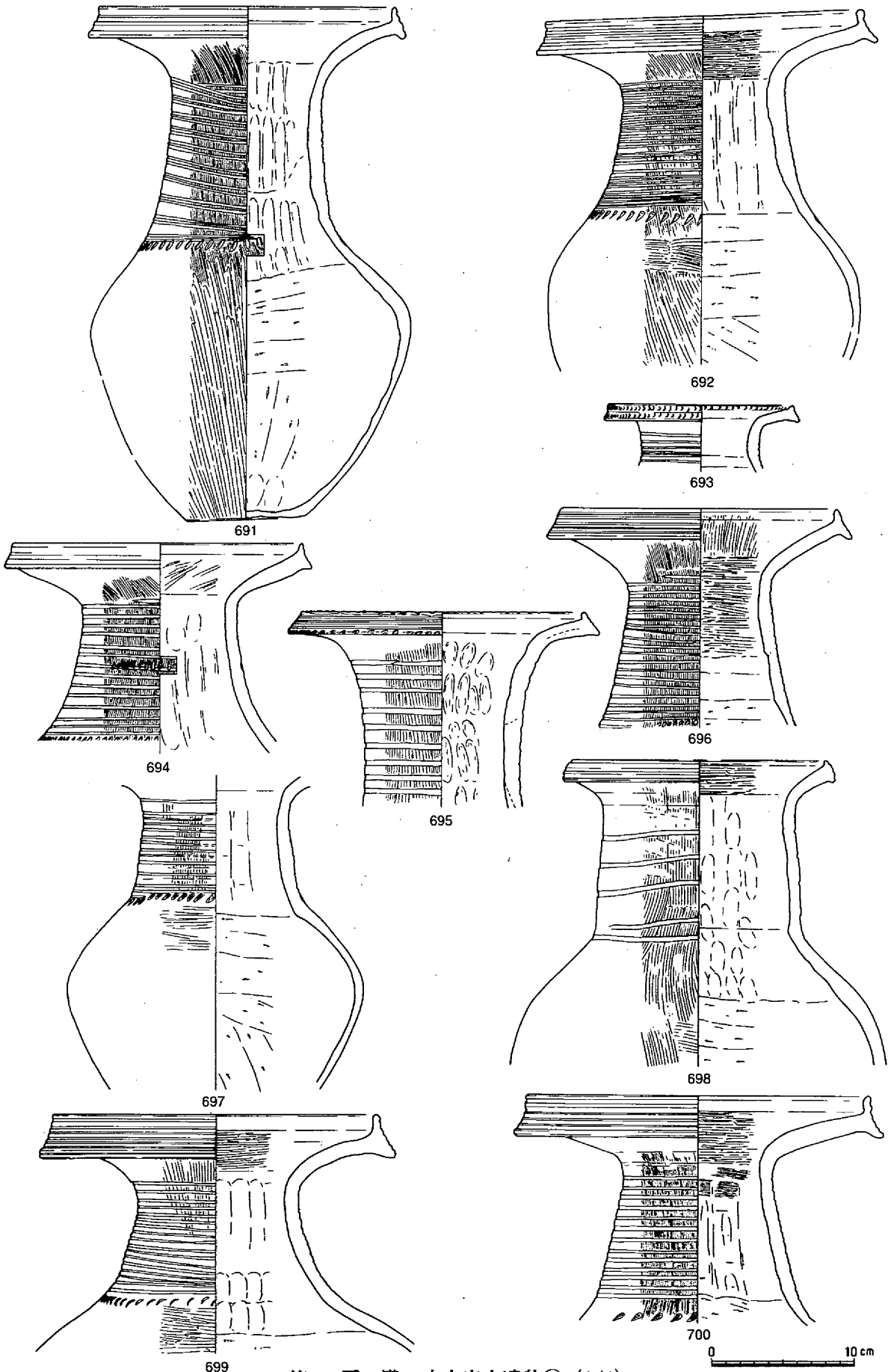
631・632・638は小型壺で、633・634は小型甕になる。635・637は直口壺で、639は蓋になる。640～662は高杯である。その内640は中期Ⅲになる。641～645は後期Ⅰになるが、644は新相になるであろう。身の部分の形態は、641～643が直に立ち上がって外反し、641は内側の面には凹線がある。645は口縁端部が上下に拡張する。642・645は完形になるが、645の方がにぶい形である。646～651は、口縁部が外反するするタイプで、後期Ⅱ・Ⅲになる。651は外反してさらに下に向く。652～654は小型の高杯である。652は身が丸く収まり、653は身が深く口縁は外反する。654は口縁が直口する。662は脚部で、横方向の櫛描文が４単位あり、一番下の単位からは縦方向の単位が出る。

663～674は鉢である。668は完形であり、胴部には焼成後穿孔がある。676～681は器台である。680の外面には、アーチ状の線刻が上下に描かれる。682～690は製塩土器である。後期Ⅱが多く、後期Ⅲが少量ある。682はほぼ完形で、後期Ⅱの新相になる。（小林）

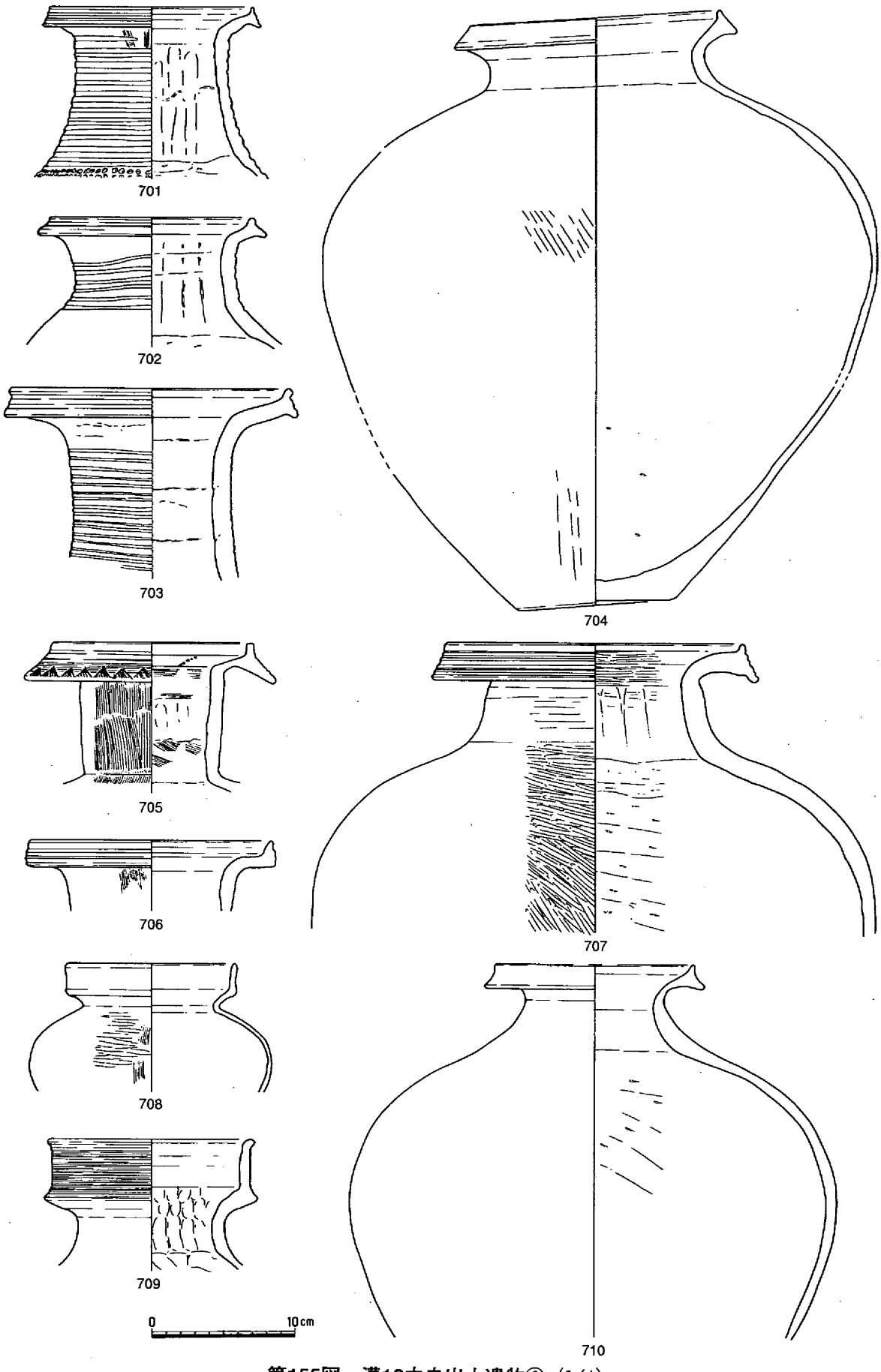
中央（第154～163図、図版２－３、28－２、29～31）

東鬼川市Ⅰ・Ⅱ調査区の間にある、現代の水路を掘り下げた地点の遺物である。この地点は、溝の最深部になるため遺物の量は多い。図上で途中遺物が途切れるのは、現代の水路による攪乱である。

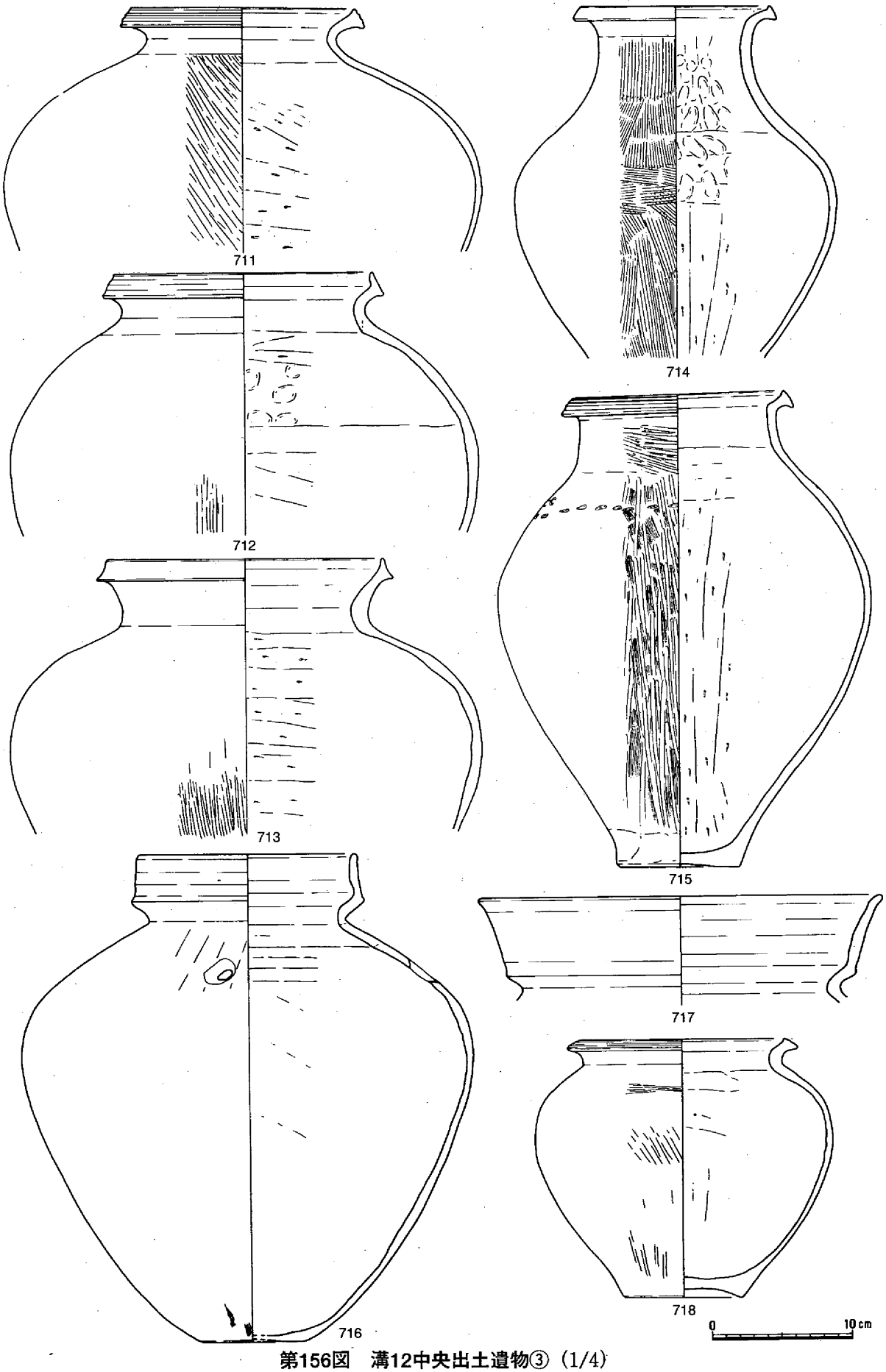
出土遺物中、691～715は壺である。この内691～706は頸が長くなり、大半が後期Ⅱ・Ⅲに入る。後期Ⅱになるのは、口縁部を上へつまみ上げ、内外面に半竹管文のある693、口縁部が上へ拡張する695、口縁端部が曲線的になる698などがある。後期Ⅲは、口縁が上下に拡張する691・692・696・700～705、上へ拡張する694・699・706などがあり、何れも頸部はハ字になる。なお691の沈線は、２本が１単位である。短頸壺で、後期Ⅱは704・710・711があり、口縁部は三角形になる。後期Ⅲには口縁部が上へ拡張する712・713と直上に拡張する716がある。716は、胴部に穿孔がある。後期Ⅳは、709のように口縁部が直上よりやや外側へいく。717は亀川上層式であり、混入であろう。甕も後期Ⅰ～Ⅲまでがあり、その内後期Ⅰは720・726・730である。720は口縁部が内側に拡張し、胴部には焼成後穿孔がある。726の口縁部は、三角形に近い。後期Ⅱの内、719・721・724・731・736の口縁部は上へ拡張し、738は下へ拡張、722・728・733・735は三角形になる。729は上へ拡張するが、後期Ⅲに近い。後期Ⅲの内、723・732は口縁部が上へ拡張し、725・727・737・739は直上に立ち上がる。740・742・743・745は直口壺で、749～751・754～756は脚が付く。その内749は胴部の文様帯に鋸歯文がある。757・760～774は高杯である。その内761～763は後期Ⅰで、764は後期Ⅱ、後期Ⅲは多く、765～769・771がそれに当たる。小型の高杯として、770～773がある。鉢の内、脚付は775・777・778で後期ⅠかⅡになる。大型の鉢は779～781・788で、小型は782～787になり、後期Ⅱが多い。器台の内、798・799は中期Ⅲで、800～802は後期Ⅰ、803・805は後期Ⅱ、807は多条の沈線があり、後期Ⅰ・Ⅱの間になる。（小林）



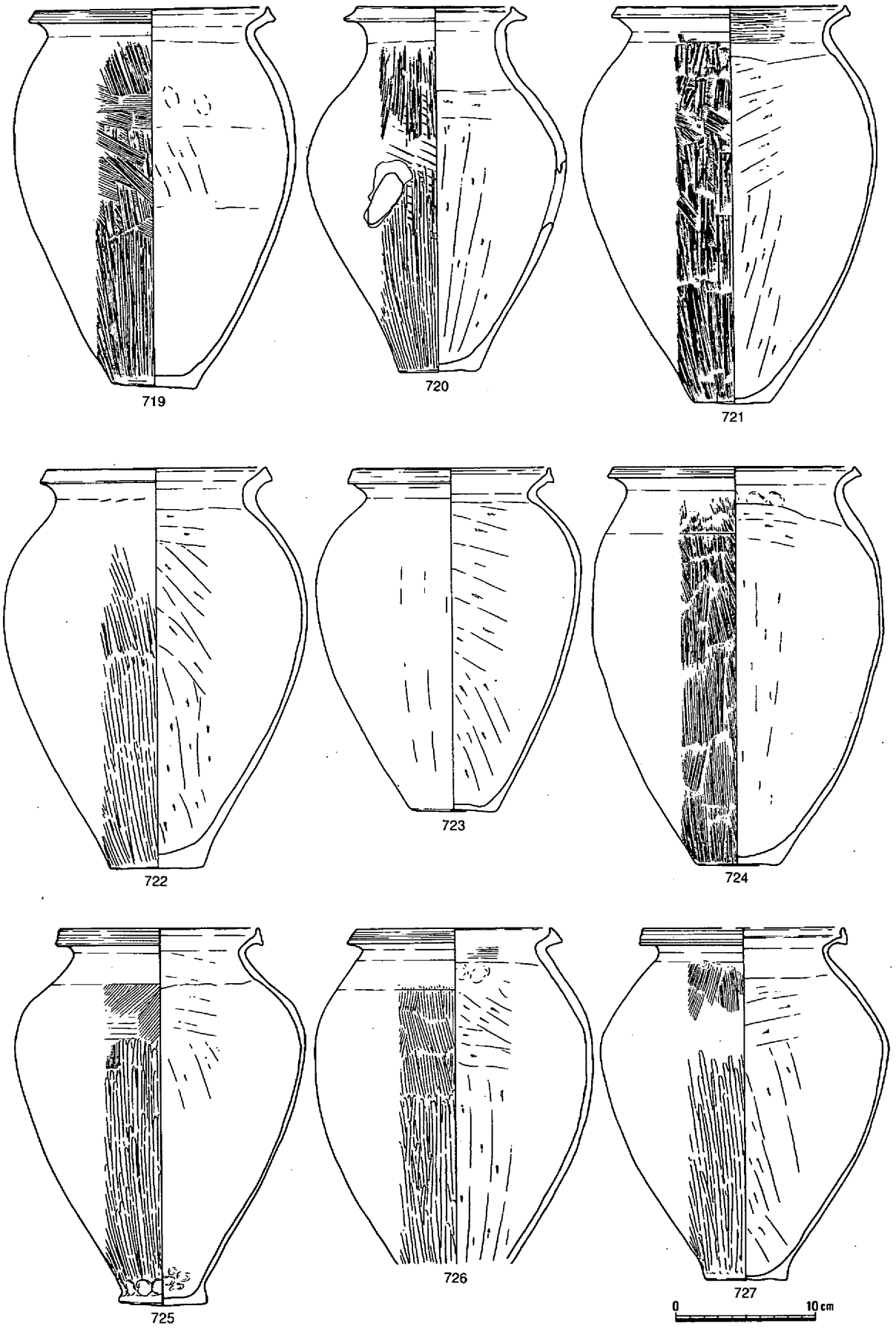
第154図　溝12中央出土遺物①（1/4）



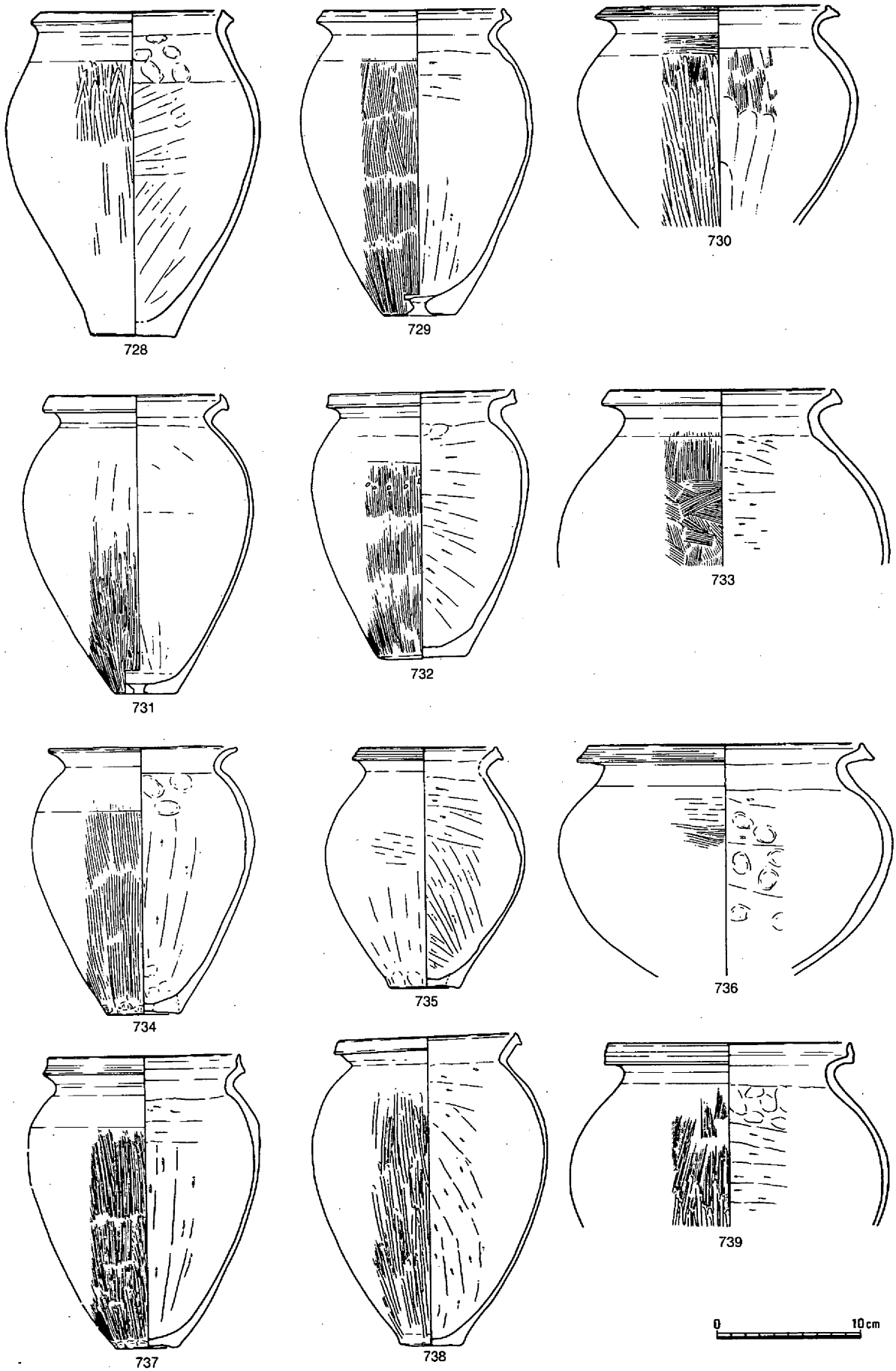
第155図　溝12中央出土遺物②（1/4）



第156図　溝12中央出土遺物③（1/4）

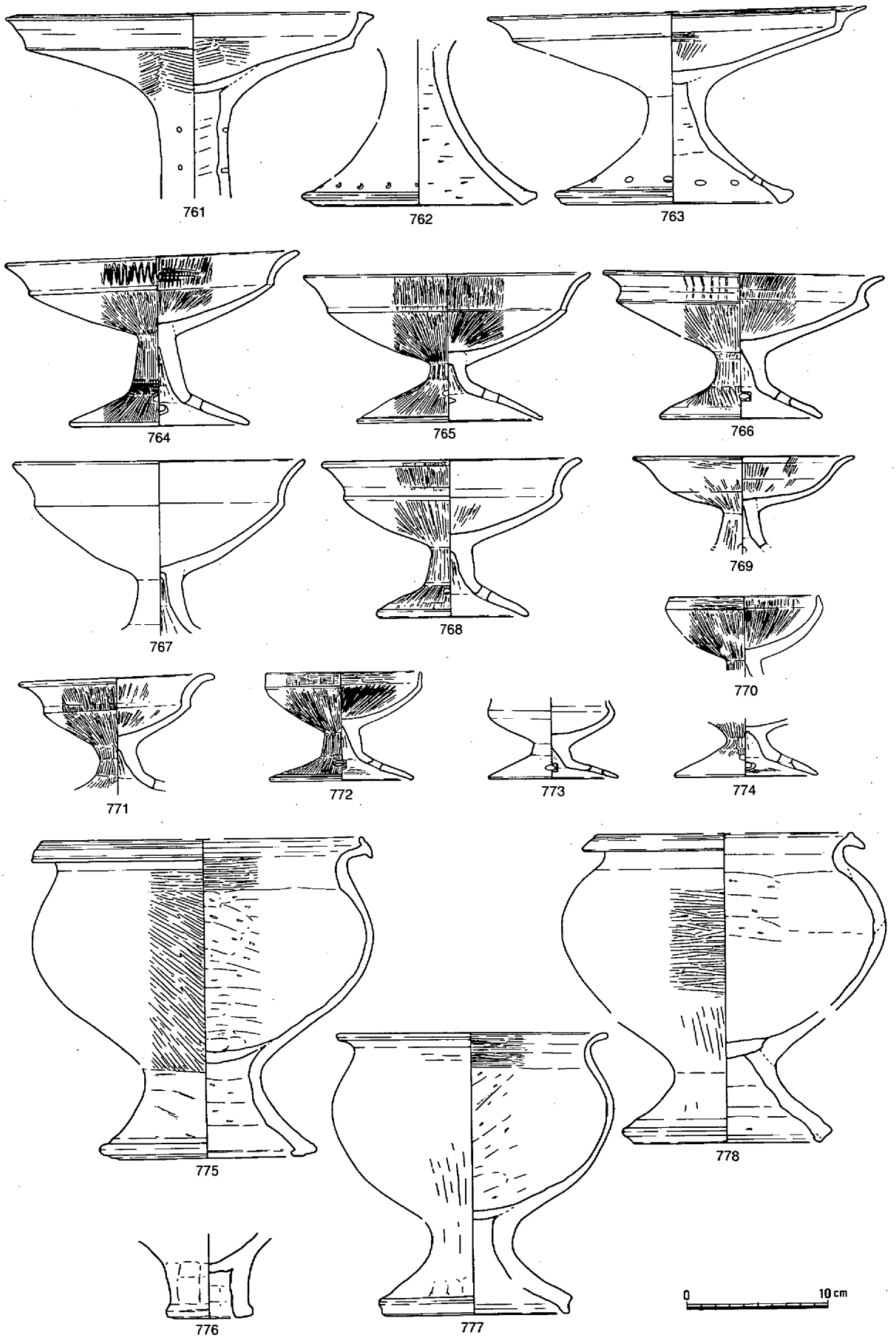


第157図　溝12中央出土遺物④（1/4）

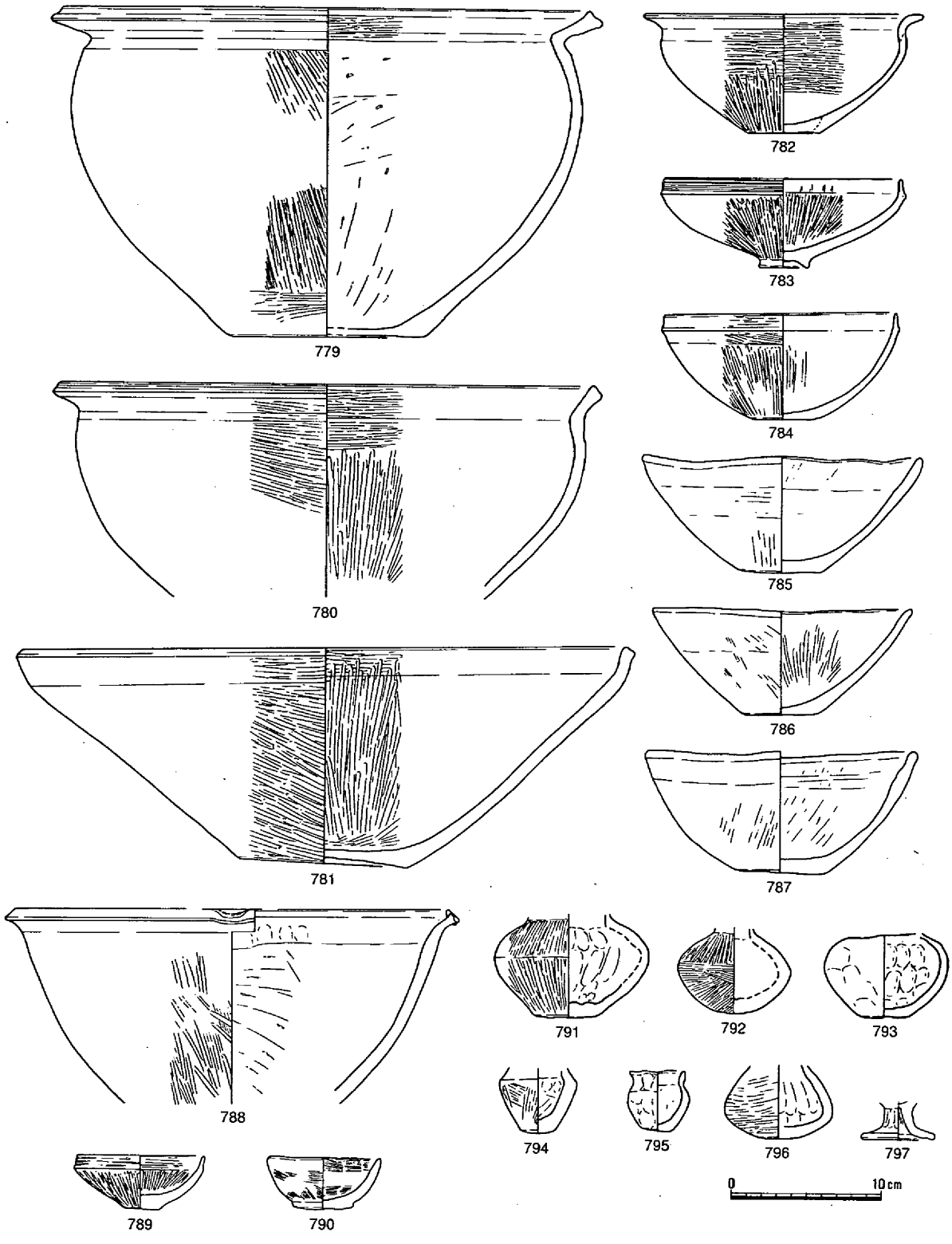


第158図　溝12中央出土遺物⑤（1/4）

第159図　溝12中央出土遺物⑥（1/4）



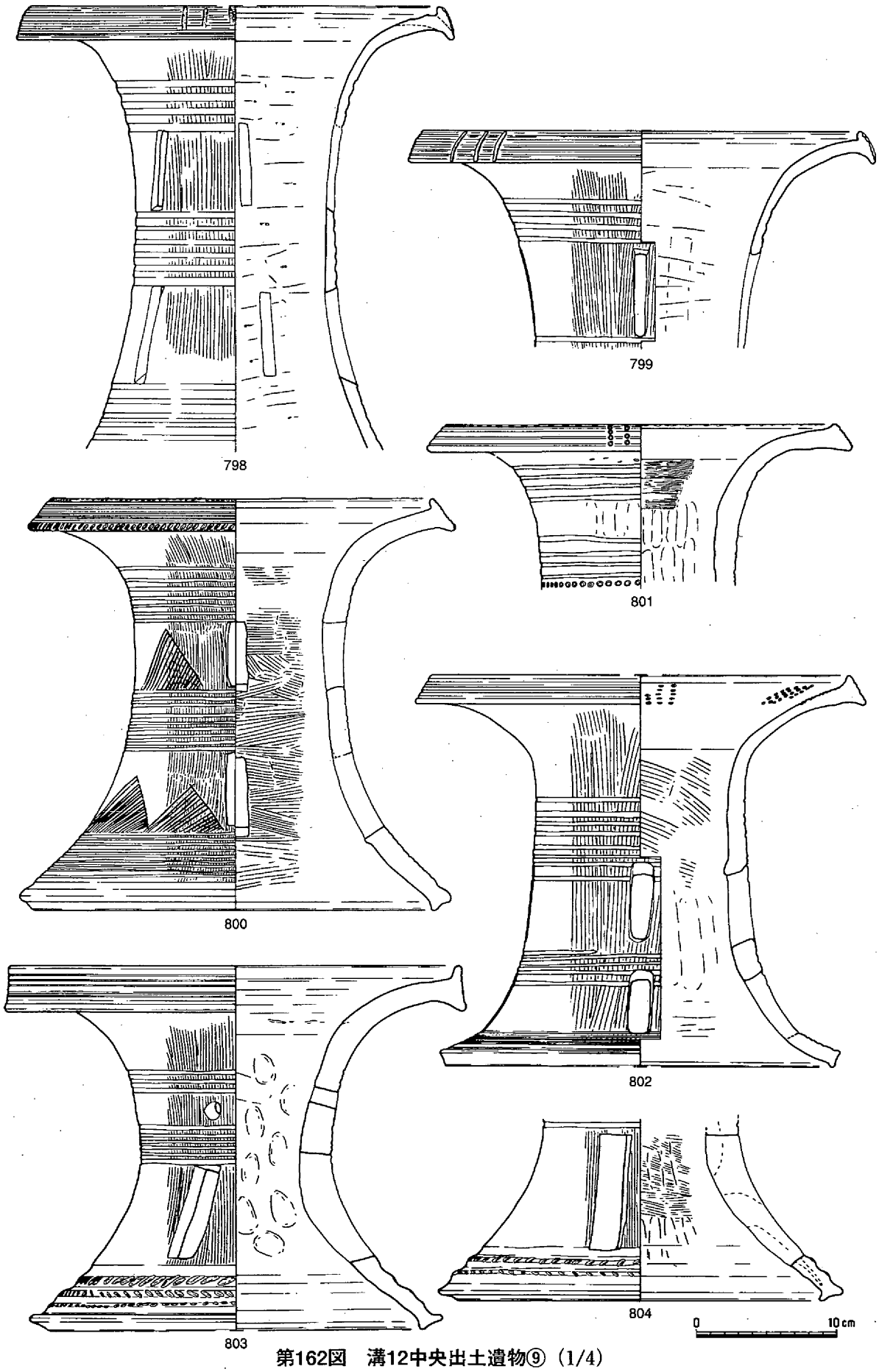
第160図　溝12中央出土遺物⑦（1/4）



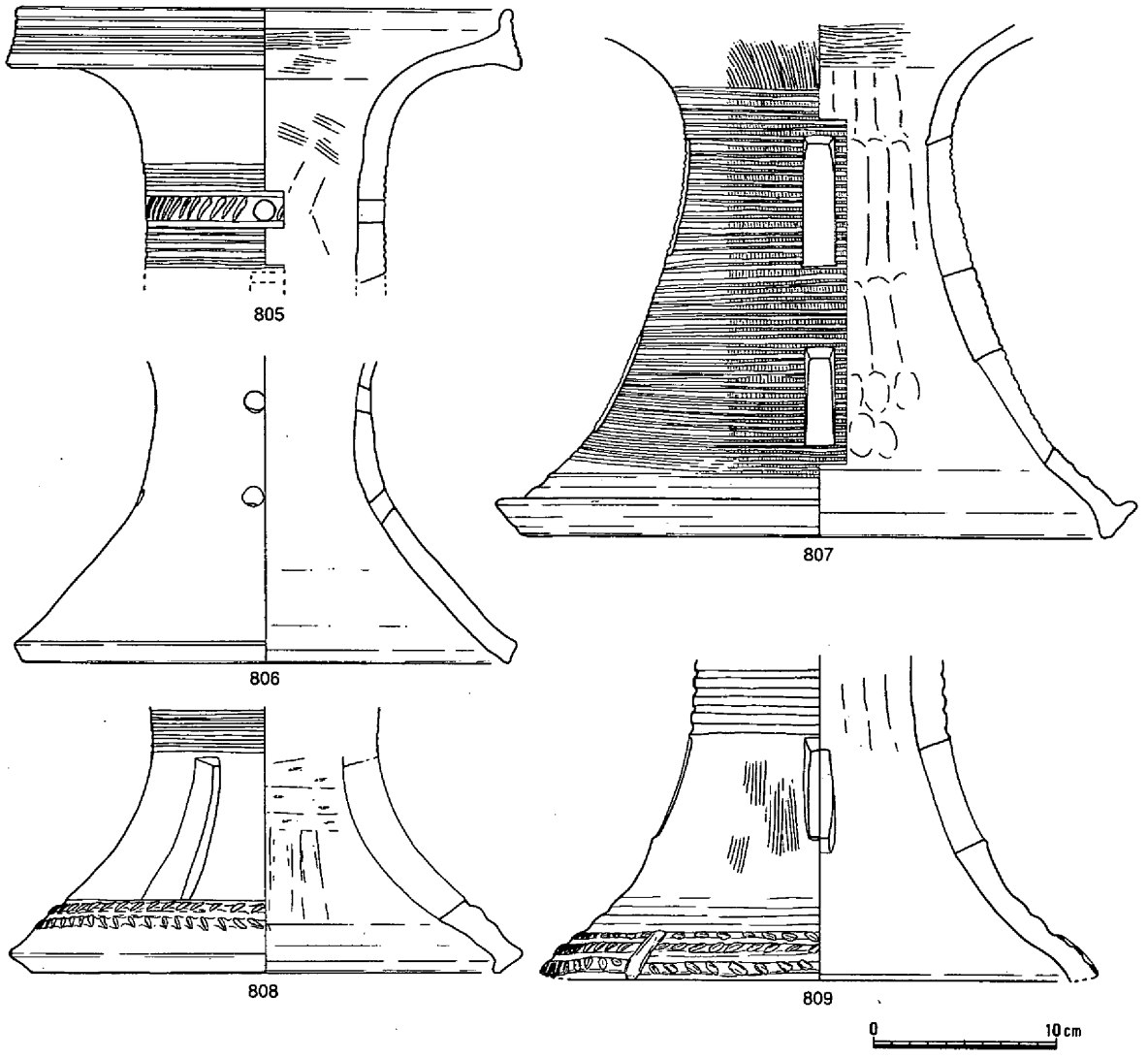
第161図　溝12中央出土遺物⑧（1/4）

東側（第164～169図、図版３－１、32、33－１、36－３）

東鬼川市Ⅱ調査区に当たる地区の内でも、上層部出土の物をさす。壺の内、**810・812**は中期Ⅲになり、どちらも頸が長くなる。**812**は頸部の下半に、１単位が長い刺突文がある。**813・819・823**は、後期Ⅰになる。どれも長くなった頸は、頸部内で僅かに屈曲する。**814～818・820・822**は、後期Ⅱ



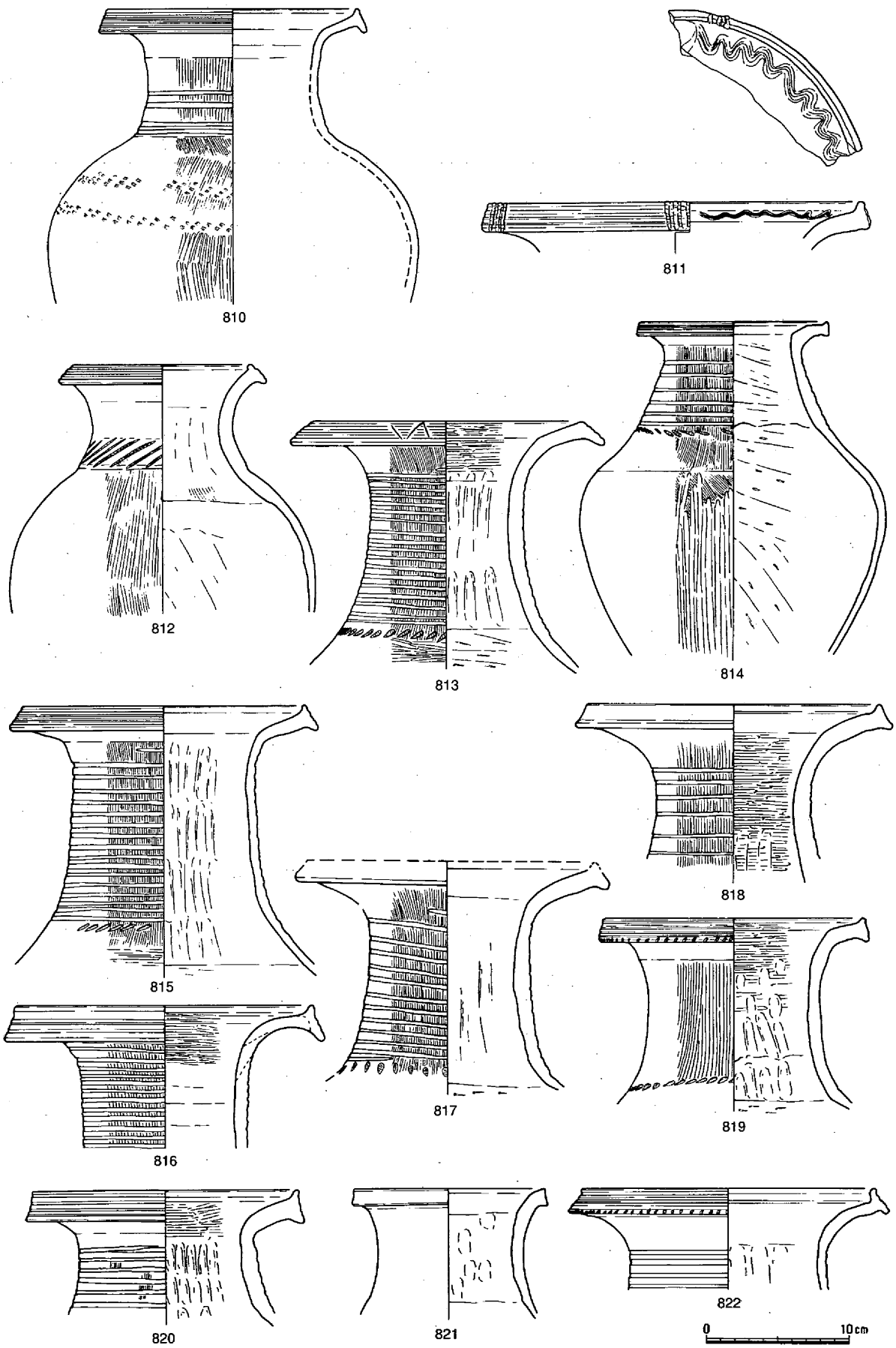
第162図　溝12中央出土遺物⑨（1/4）



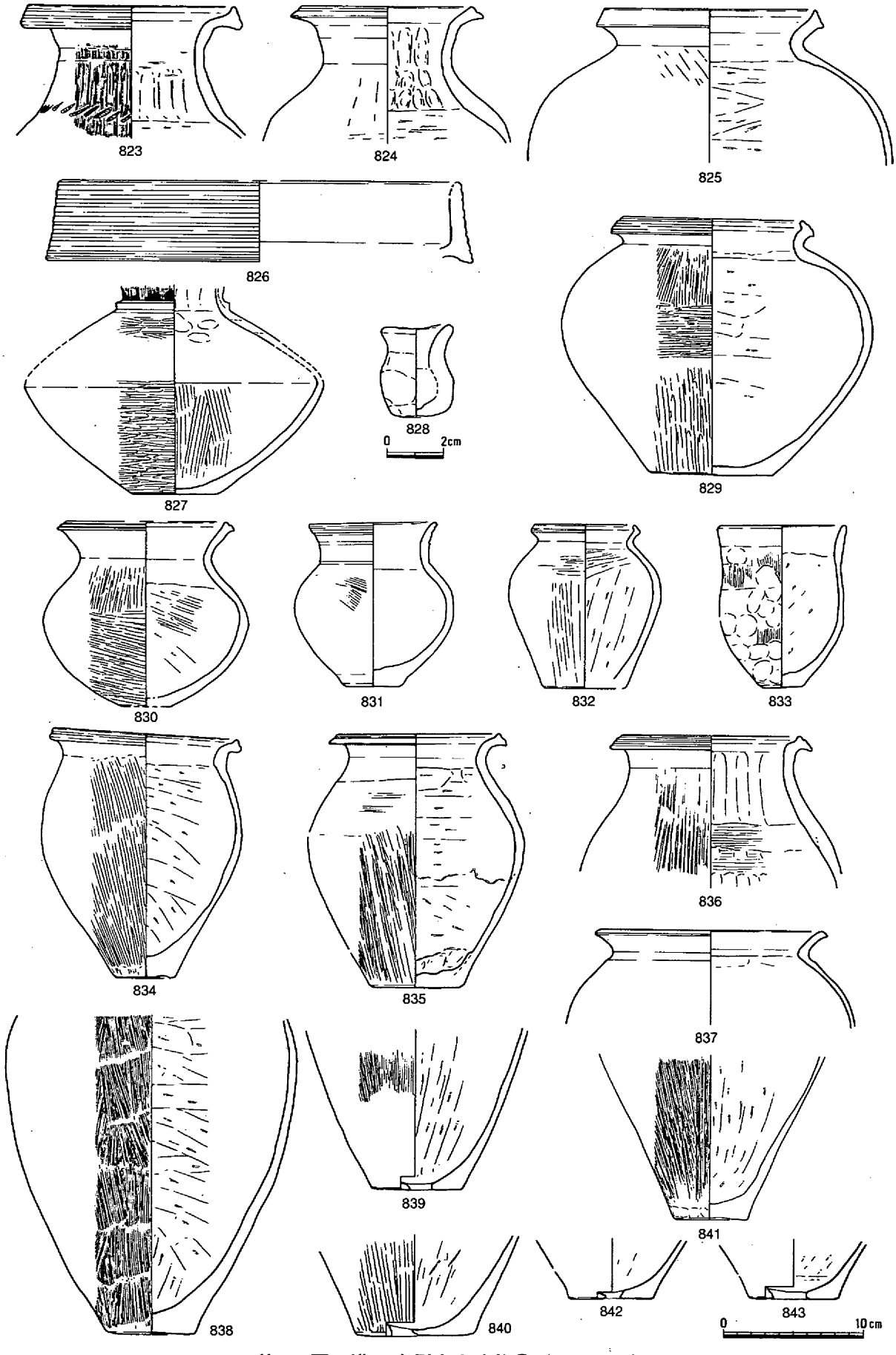
第163図　溝12中央出土遺物⑩（1/4）

である。口縁部の形態は、815・816・820・822の様に上下に拡張するものが多く、次いで817・818の様に三角形になるものが続く。頸部は、816以外は全てハ字形になる。854は口縁部の一部が欠けており、意図的に割ったものと思われる。口縁のみであるが、826は後期Ⅲである。口縁は真上に立ち上がる。その他に、細頸になり胴部が算盤形になる827、小型壺の830・831、ミニチュアの828などがある。甕にうち、844は中期Ⅲになる。834・835・849・850は後期Ⅰになり、口縁部は上へ拡張するものが多い。後期Ⅱは837・845・846・853・855～859があり、口縁部は837がく字になり、845・846が上に拡張、853・856が上下に拡張する以外は全て三角形になる。846・847は後期Ⅲになり、口縁部は上へ拡張する。全ての時期を通じて底部穿孔されたものが多く、839・840・842・843・856がそうである。高杯は860～867であり、860は中期Ⅲ、861・862は後期Ⅰ、863～865は後期Ⅱ、866・867は後期Ⅲである。868・869・873は脚付の壺で、口縁部は868・869が直口になり、873が逆ハ字になり段をつけて外方に向かう。870・876～881は鉢であり、870は算盤形で、他の口縁部では877はそのまま立ち上がり、878～881は外反する。881は底部が丸底に近い。882～888は器台であり、882は後期Ⅰ、885は後期Ⅰ・Ⅱの間、883・884は後期Ⅱである。888は脚部下半に縦列の竹管文が1周めぐる。

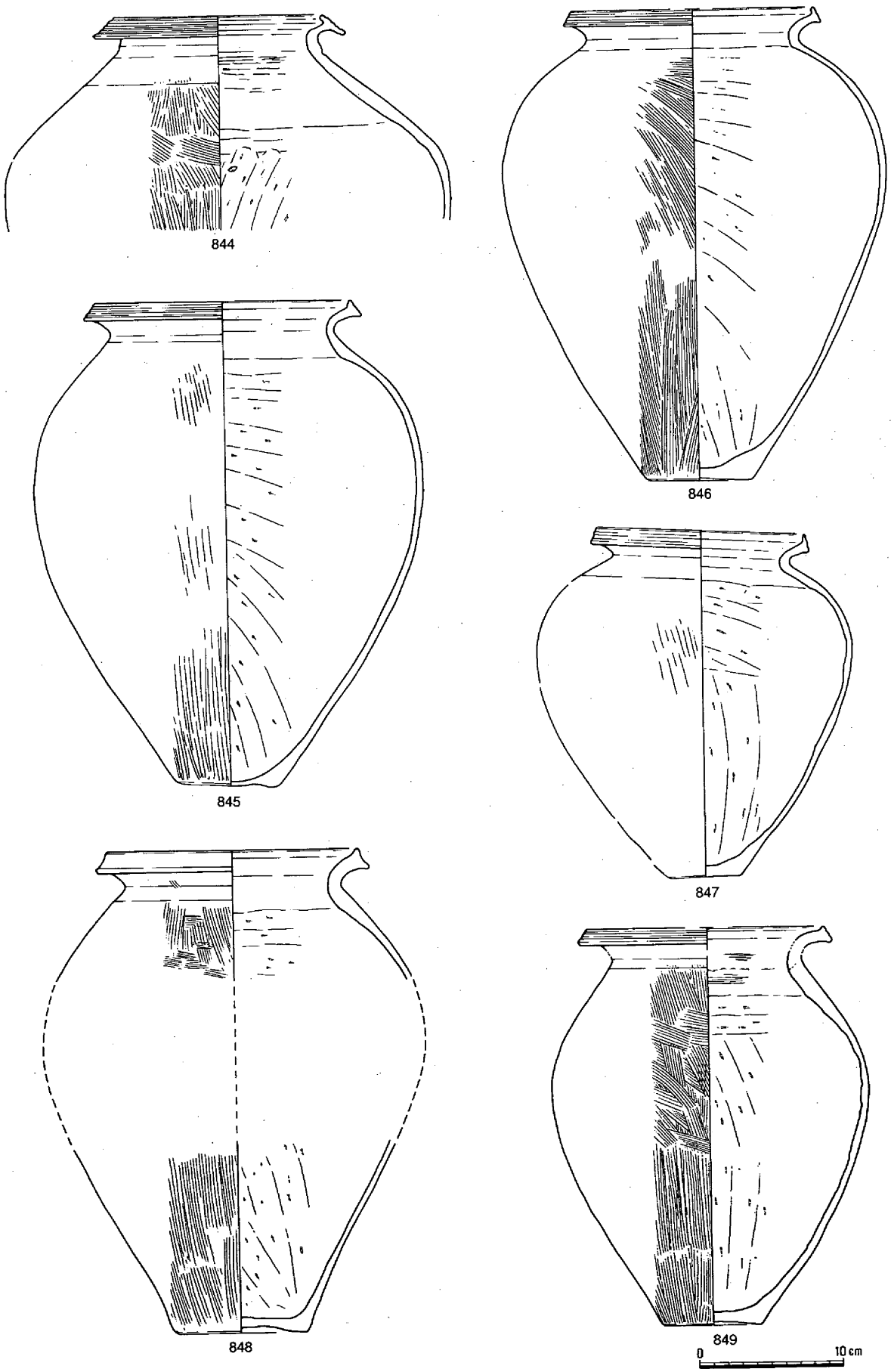
（小林）



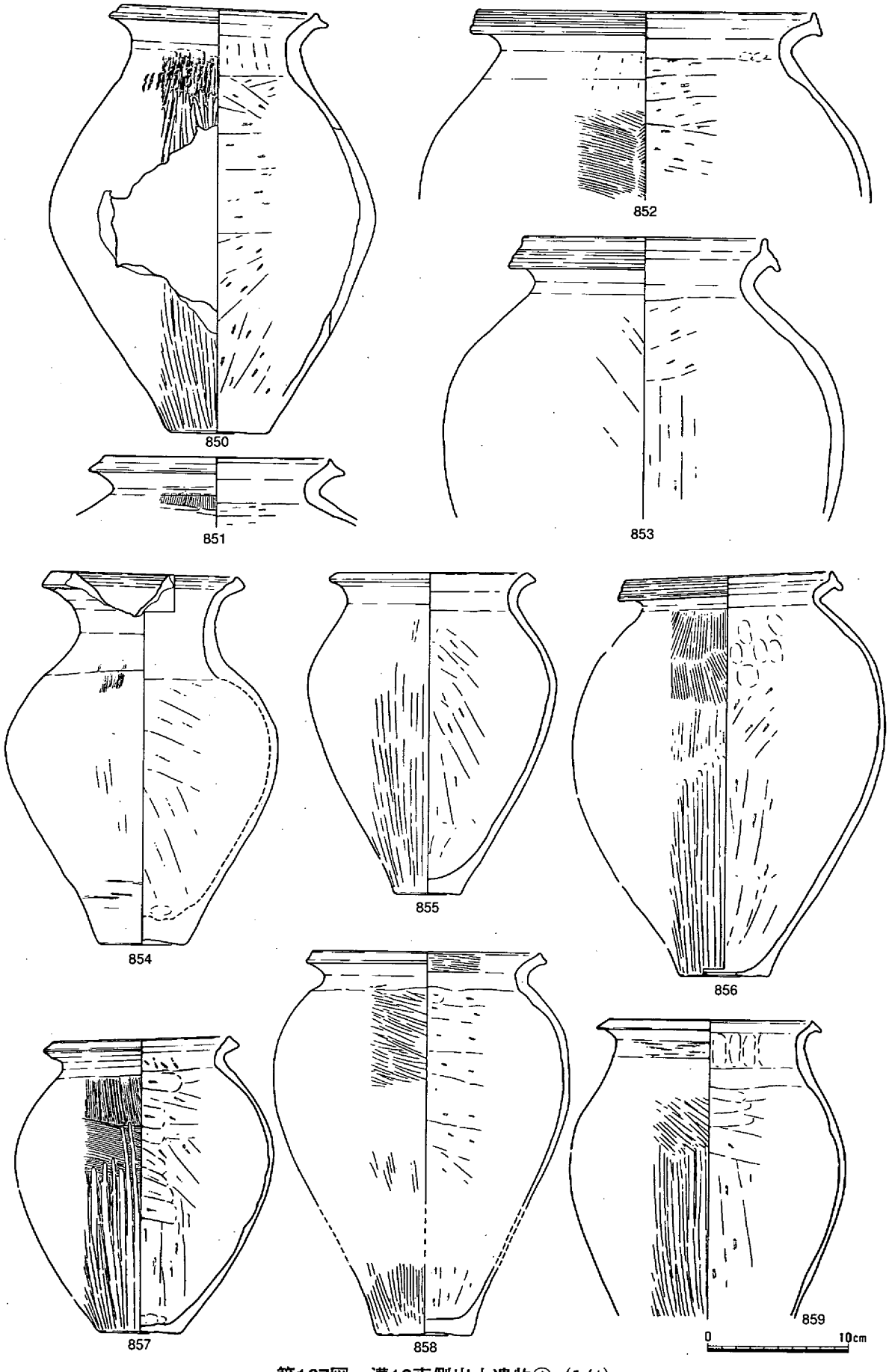
第164図　溝12東側出土遺物①（1/4）



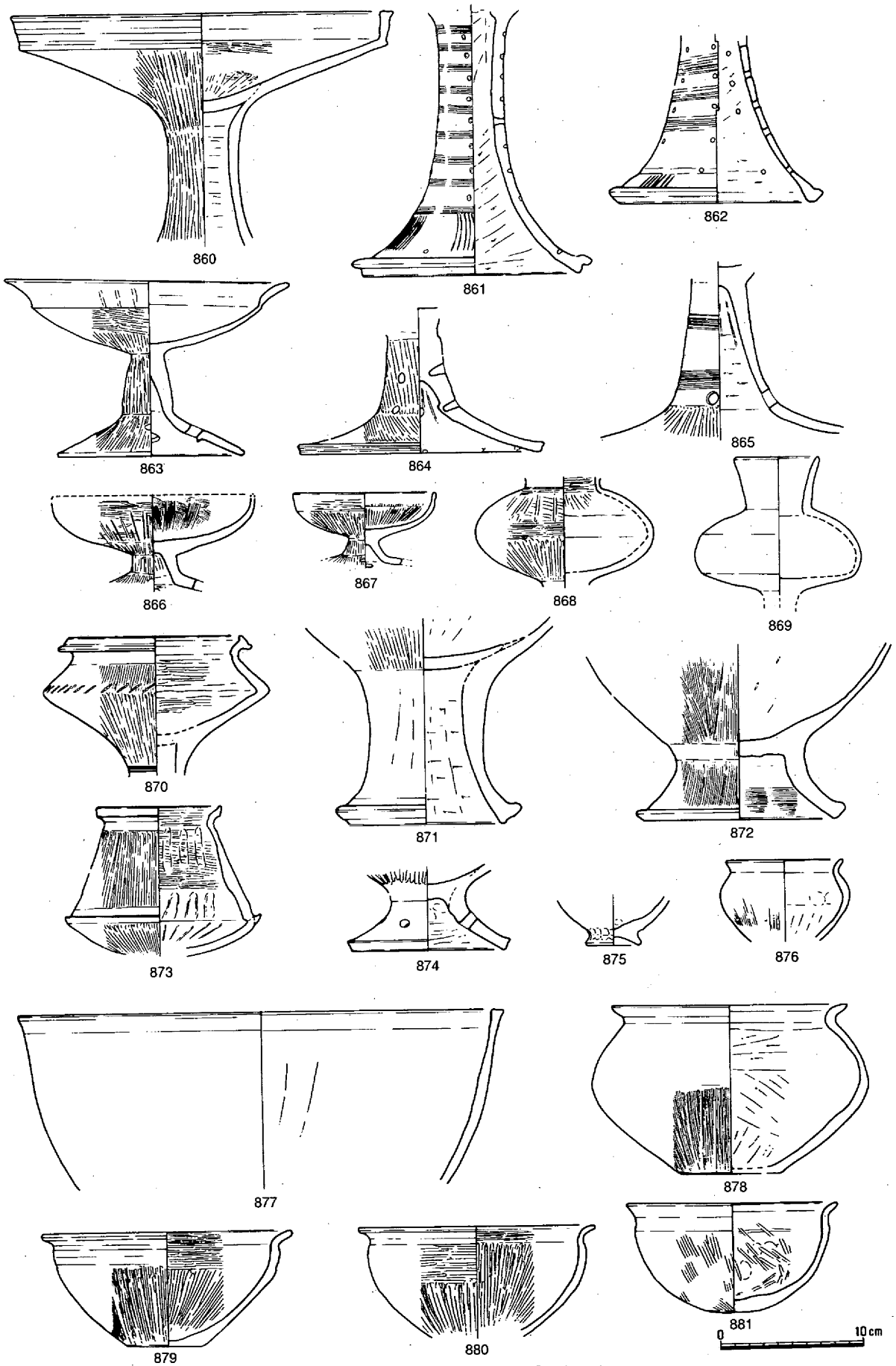
第165図　溝12東側出土遺物②（1/4・1/2）



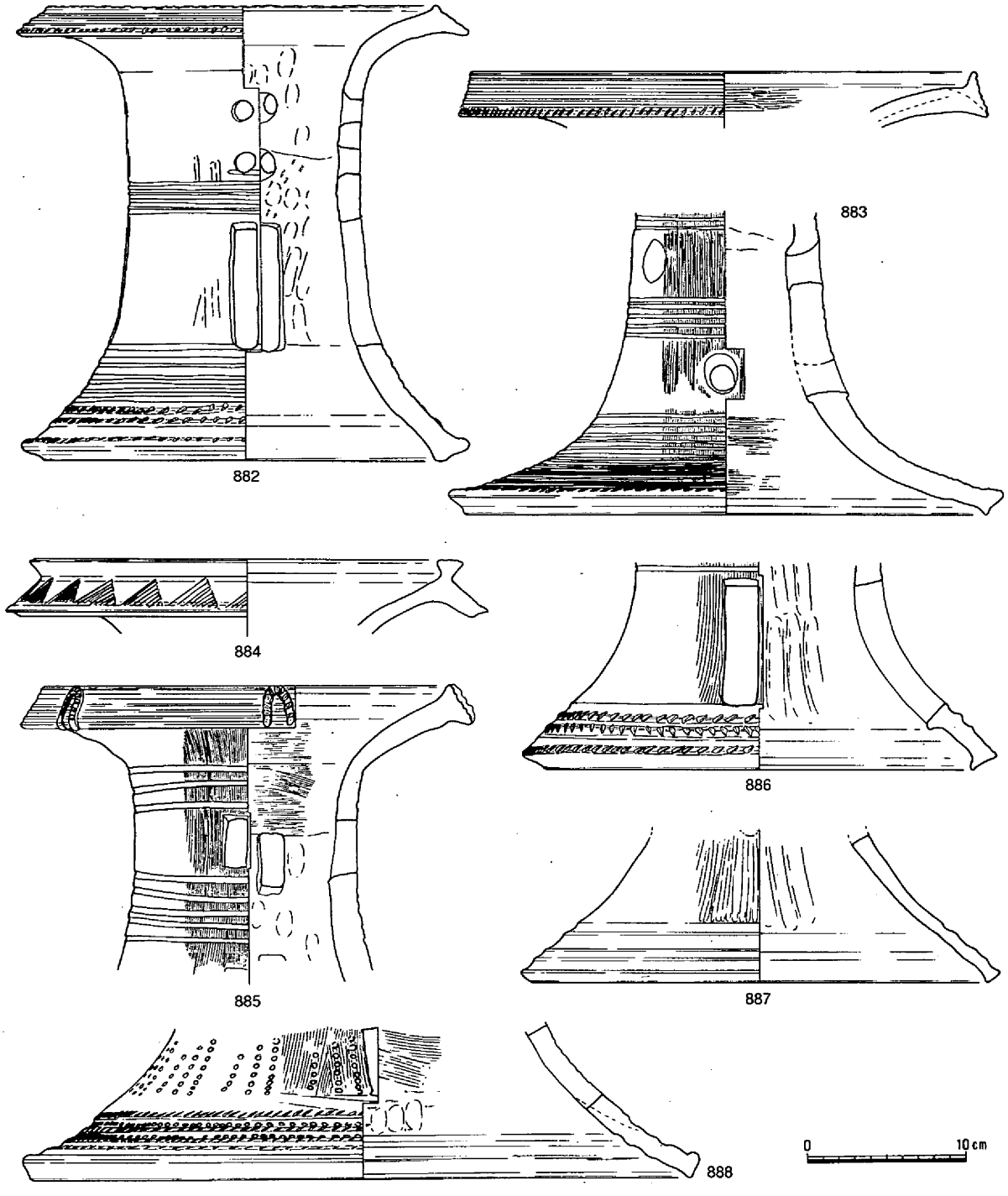
第166図　溝12東側出土遺物③（1/4）



第167図　溝12東側出土遺物④（1/4）



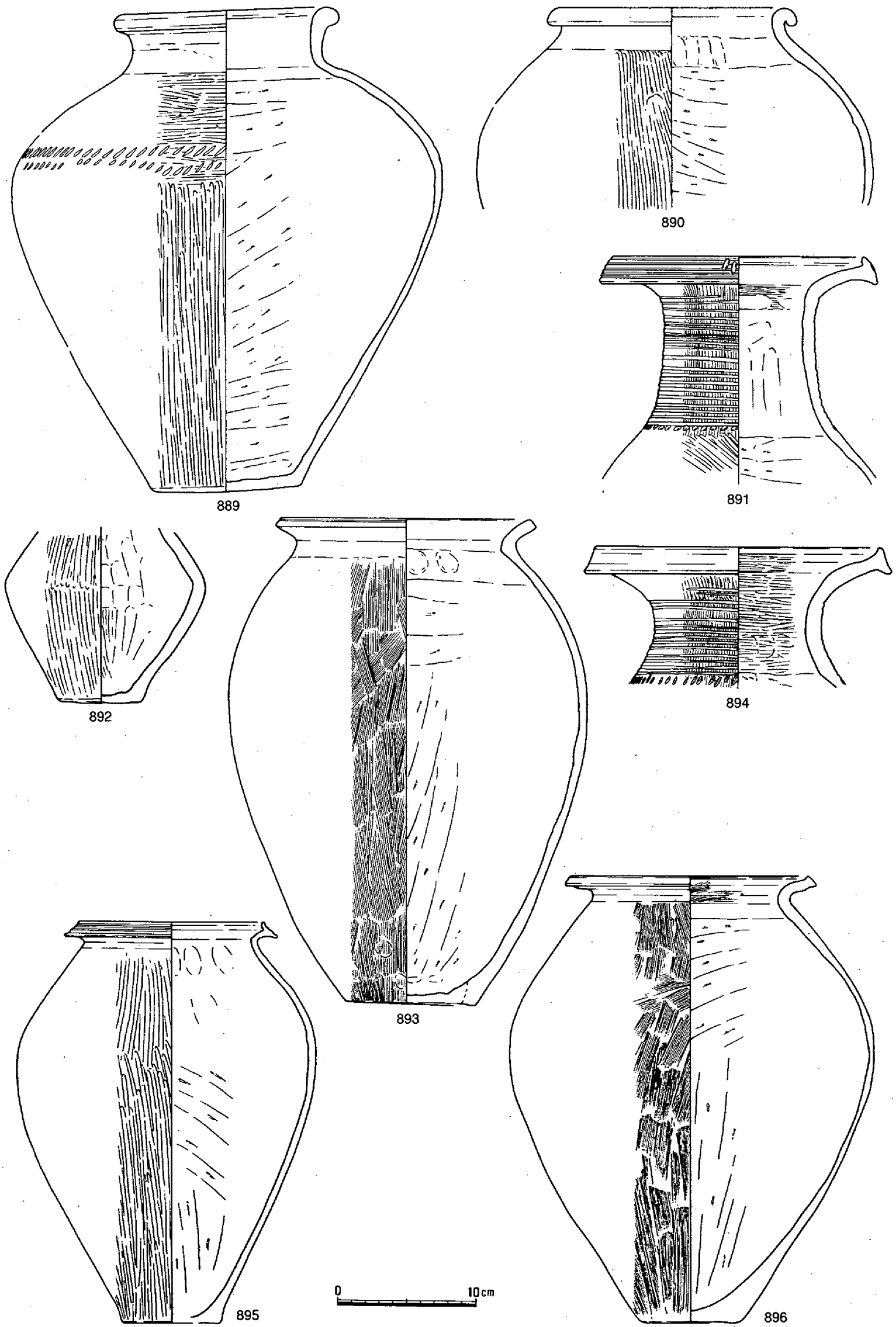
第168図　溝12東側出土遺物⑤（1/4）



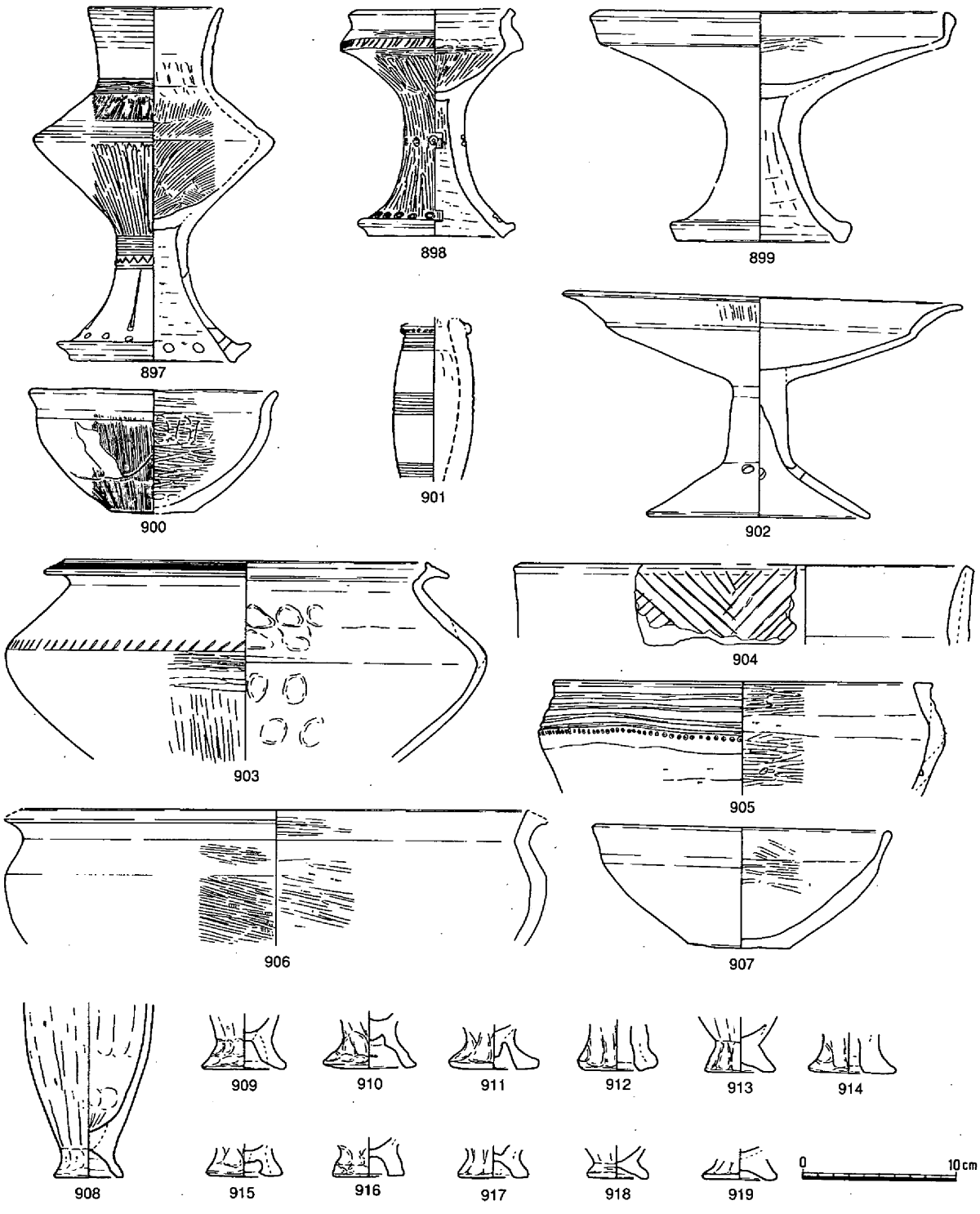
第169図　溝12東側出土遺物⑥（1/4）

北側（第170～172図、図版33－２・34－１）

調査区の北壁沿いから出土したものを一括する。壺の内でも**889**・**890**は口縁部が巻き込むタイプである。どちらも後期Ⅰになり、**889**は完形で、胴部最大径付近に２列の刺突文がある。**890**は上半のみが口縁部を上にして置かれていた。**891**は頸が長くなり、後期Ⅰである。口縁部の形態は、斜め上に拡張し、頸部は直上に立ち上がる。甕は**893**・**895**・**896**であり、**895**は中期Ⅲ、**893**・**896**は後期Ⅱになり、口縁はどちらも三角形をしている。**897**は脚付の直口壺で、身は算盤形をしていて、脚部との接合方法は円盤充填であり、後期Ⅰになる。**898**は脚付の鉢になるのか。後期Ⅰの新相になる。

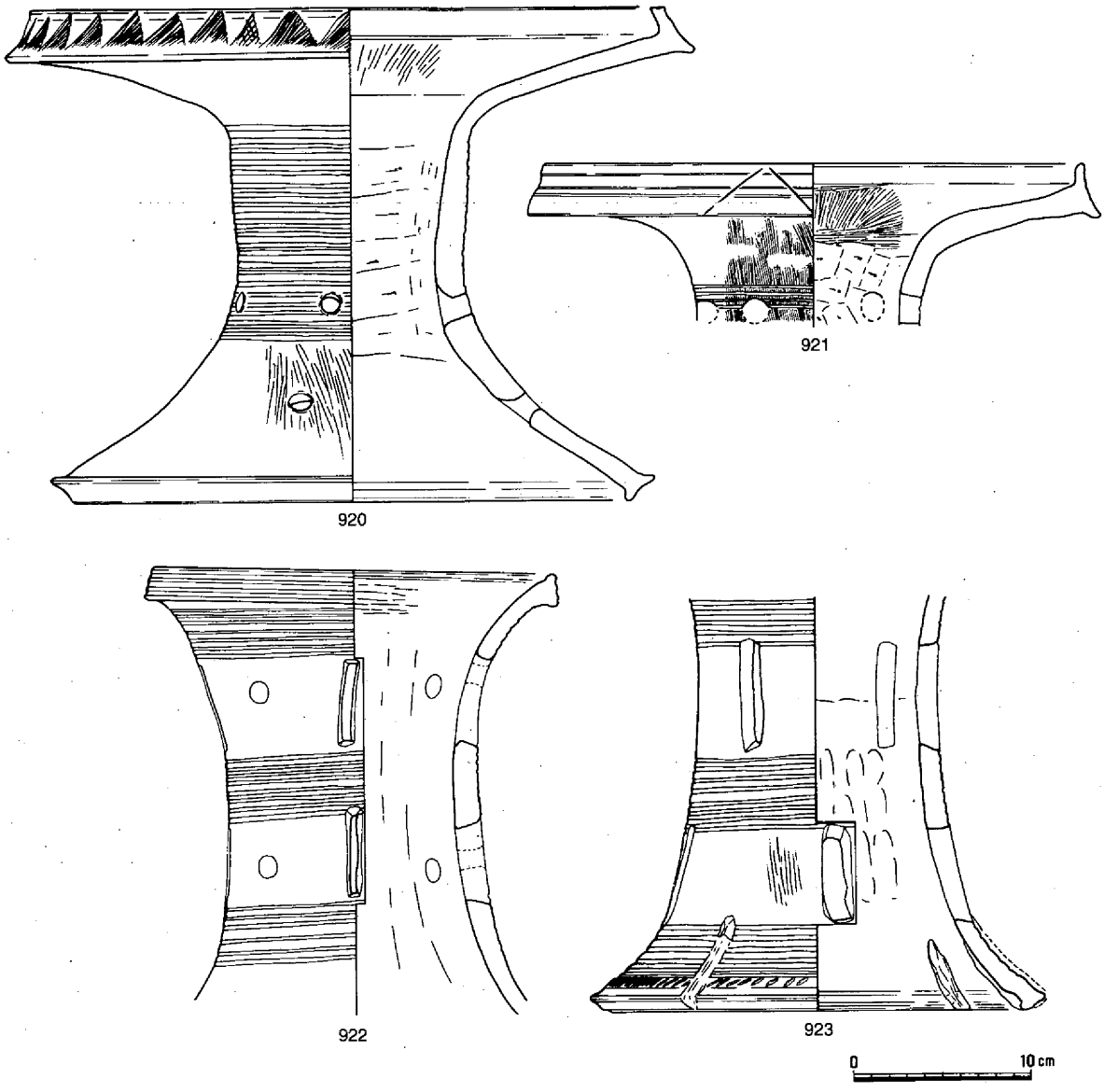


第170図　溝12北側出土遺物①（1/4）



第171図　溝12北側出土遺物②（1/4）

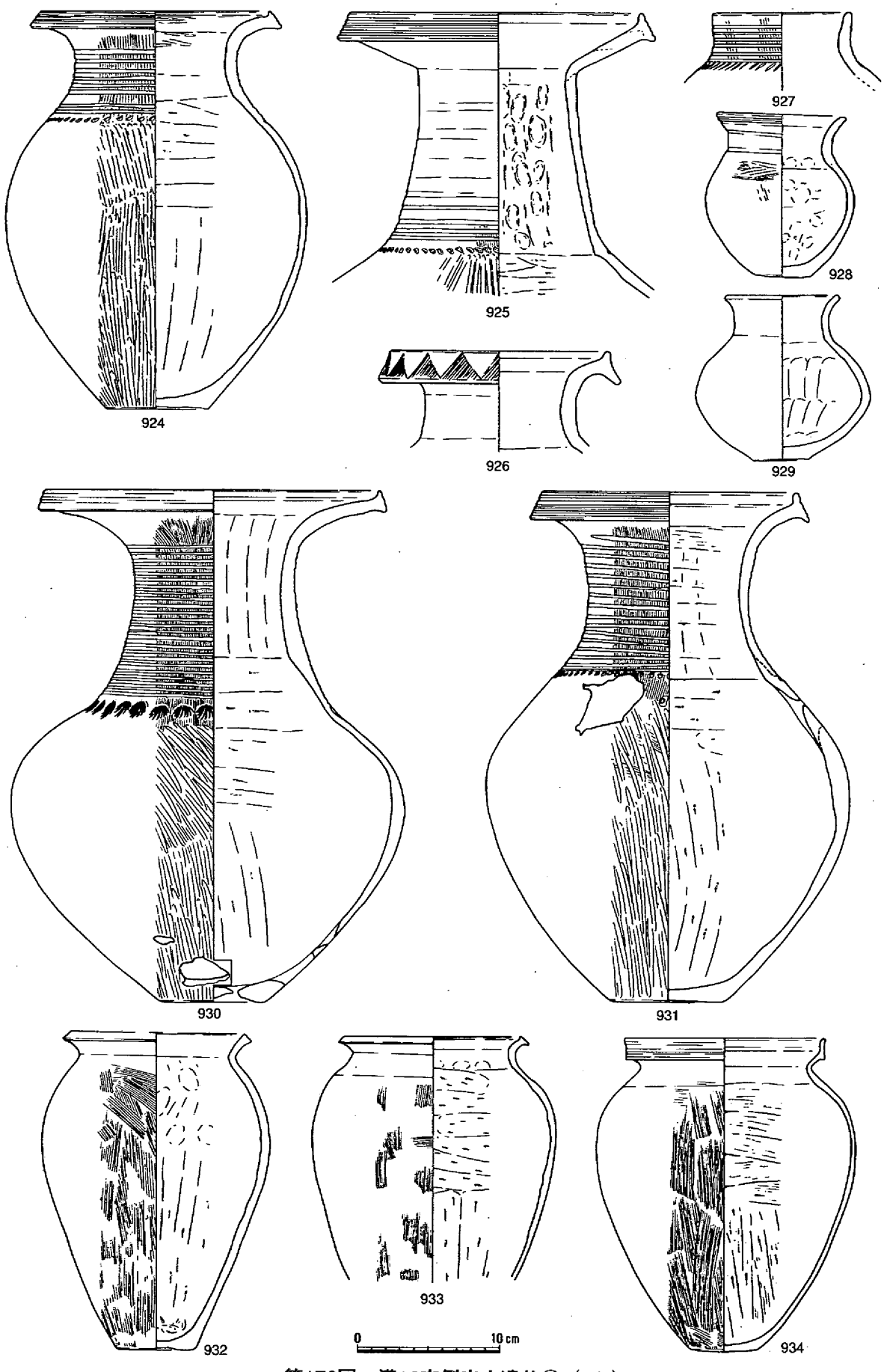
899・901・902は高杯になる。899・902はほぼ完形で脚部との接合方法は、前者が円盤充填で時期は後期Ⅰ、後者は差込みで時期は後期Ⅱである。901は脚部であり、後期ⅡかⅢである。鉢は900・903・905・906・907で、後期Ⅰは903・905、後期Ⅱは906、後期Ⅲは900・907である。908～919は製塩土器である。後期Ⅱが多い。920～923は器台である。920は完形で、後期Ⅰになる。922・923は口縁径のわりに器高が高く、923は粘土による補修痕がある。（小林）



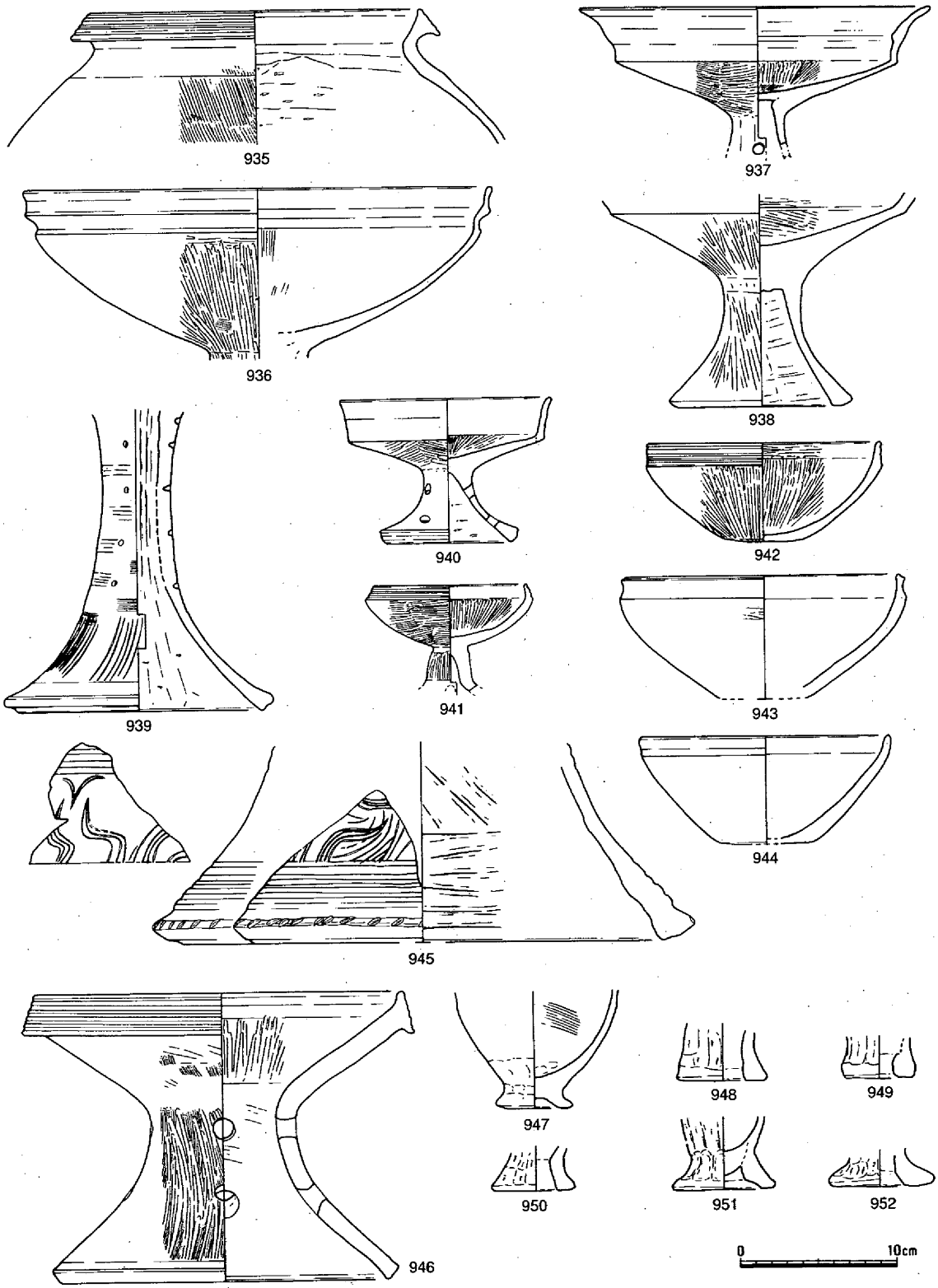
第172図　溝12北側出土遺物③（1/4）

南側・大型品　（第173～175図、図版34－2・35－1）

調査区の南壁沿いから出土したものを一括する。壺は**924**～**931**で、この内後期Ⅰは**924**・**927**で、前者は頸がやや長くなり、後者は短頸になる。**930**・**931**は後期Ⅱになり、どちらも完形品である。口縁部の形態は、**930**が上へ拡張し、**931**は上下に拡張する。**930**は頸部下半に貝殻による押型文がある。**930**・**931**はとも焼成後の穿孔がある。**925**は後期Ⅲで、口縁部と頸部の境は稜をもって屈曲する。**928**・**929**は小型壺である。甕は**932**～**935**で、この内後期Ⅰが**935**、後期Ⅱが**932**・**933**で口縁形態は三角形になり、**934**は口縁がやや外気味に立ち上がり、底部は存在するが不明瞭である。後期Ⅳである。**936**～**941**は高杯で、この内後期Ⅰは**937**・**939**で**937**は新相になる。**938**は後期Ⅱの古相で、**936**は後期Ⅲになり、2段口縁である。小型の高杯には**940**・**941**があり、前者が後期Ⅱ、後者が後期Ⅲである。鉢は**942**～**944**で、いずれも後期Ⅱである。**945**・**946**は器台で、前者には曲線中心の線刻文があるがモチーフは不明である。後期Ⅱになる。後者は完形で、後期Ⅲになる。**947**～**952**は製塩土器で、**947**が後期Ⅲになる以外は後期Ⅱになる。

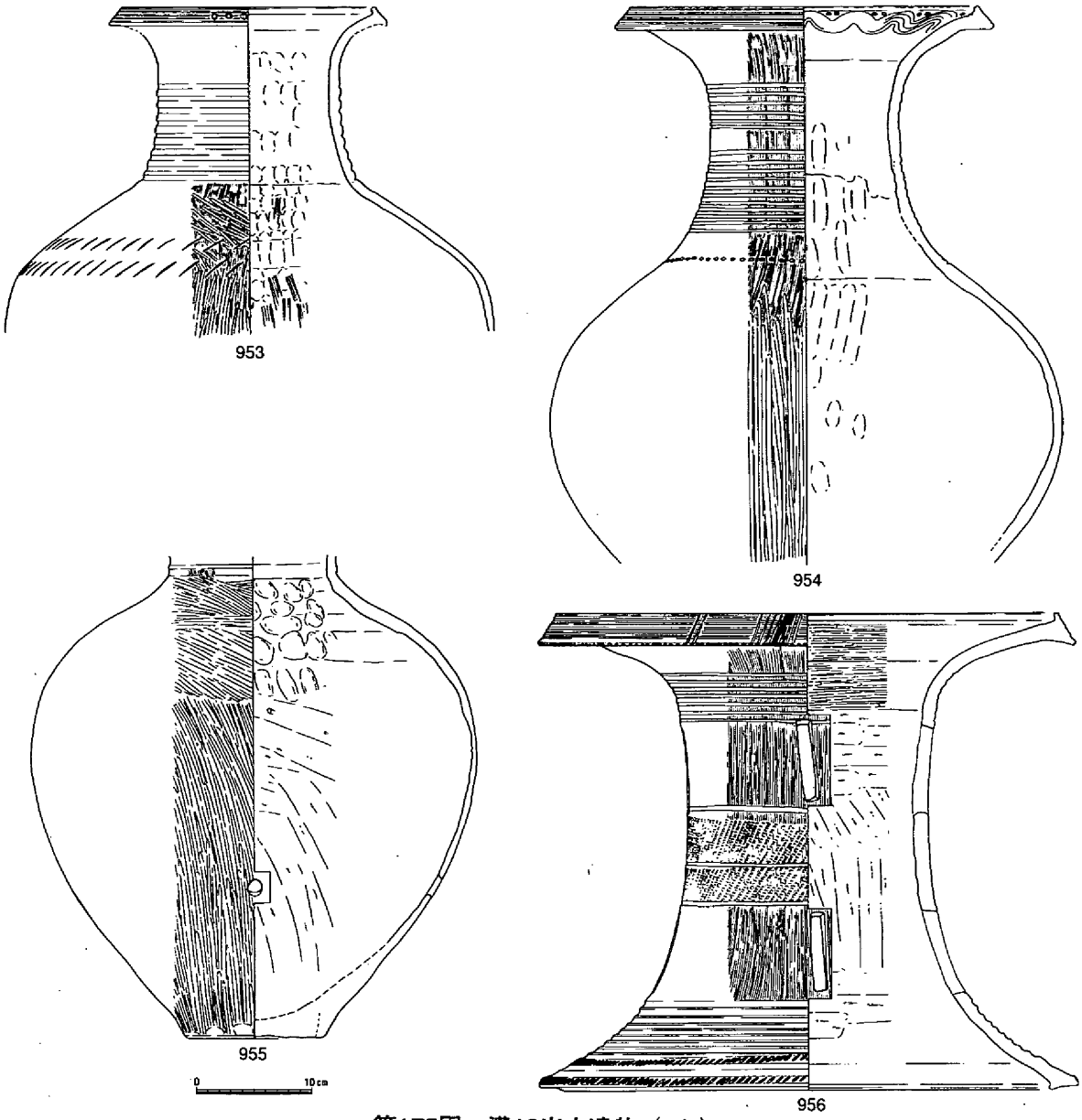


第173図　溝12南側出土遺物①（1/4）



第174図　溝12南側出土遺物②（1/4）

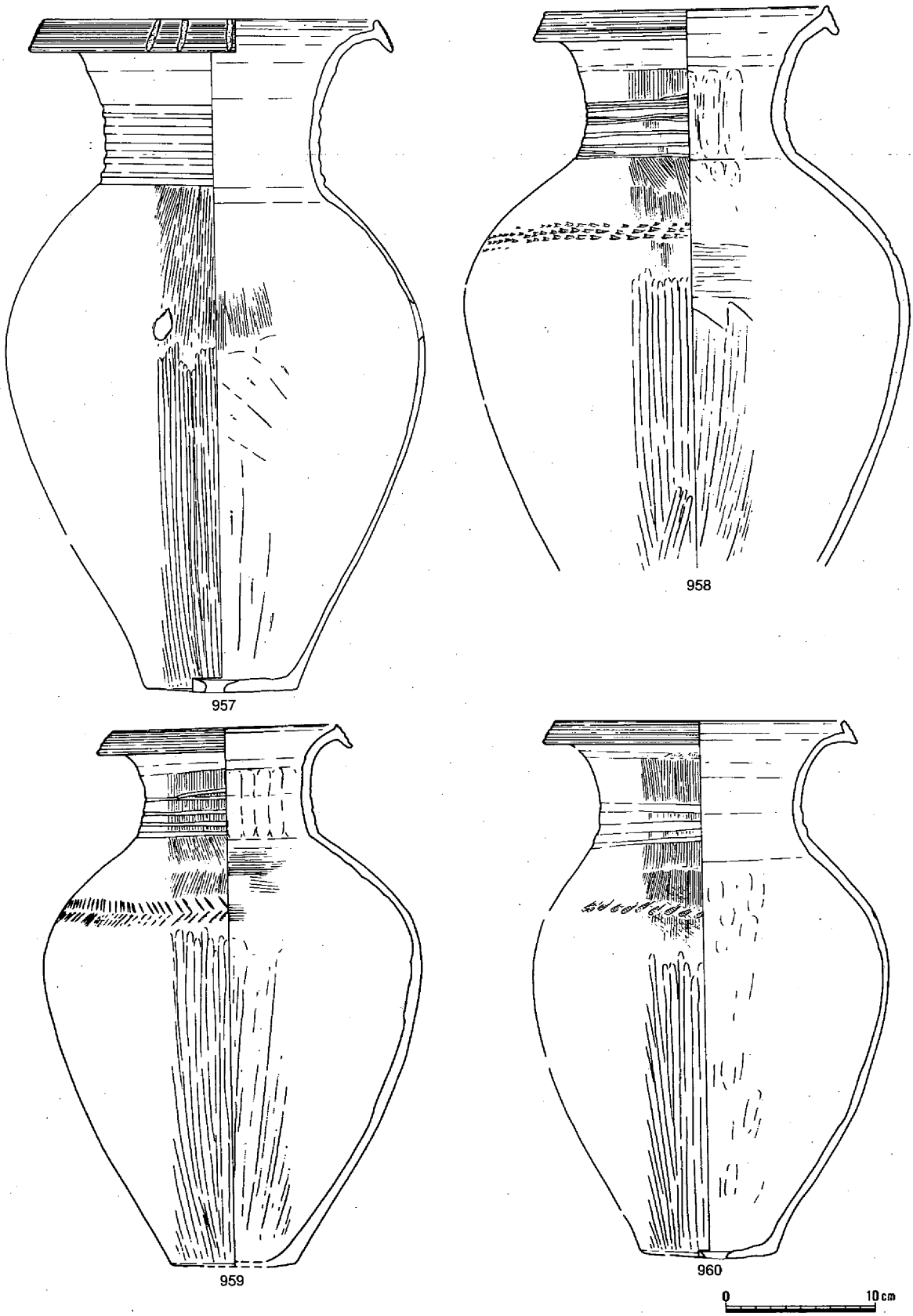
大型品として**953**～**956**があるが、**953**は中期Ⅲの壺で、東側の最下層出土である。**954**・**955**は後期Ⅰの長頸壺で、**954**は口縁内部に曲線文があり、曲線文上部の隙間に刺突文がある。**955**は胴部下半に焼成後穿孔がある。前者は中央部、後者は東側出土である。**956**は後期Ⅰの器台で、胴部径の比率が高い。中央部出土で、法量と出土地点を考えると、**954**とセットになるかもしれない。　（小林）



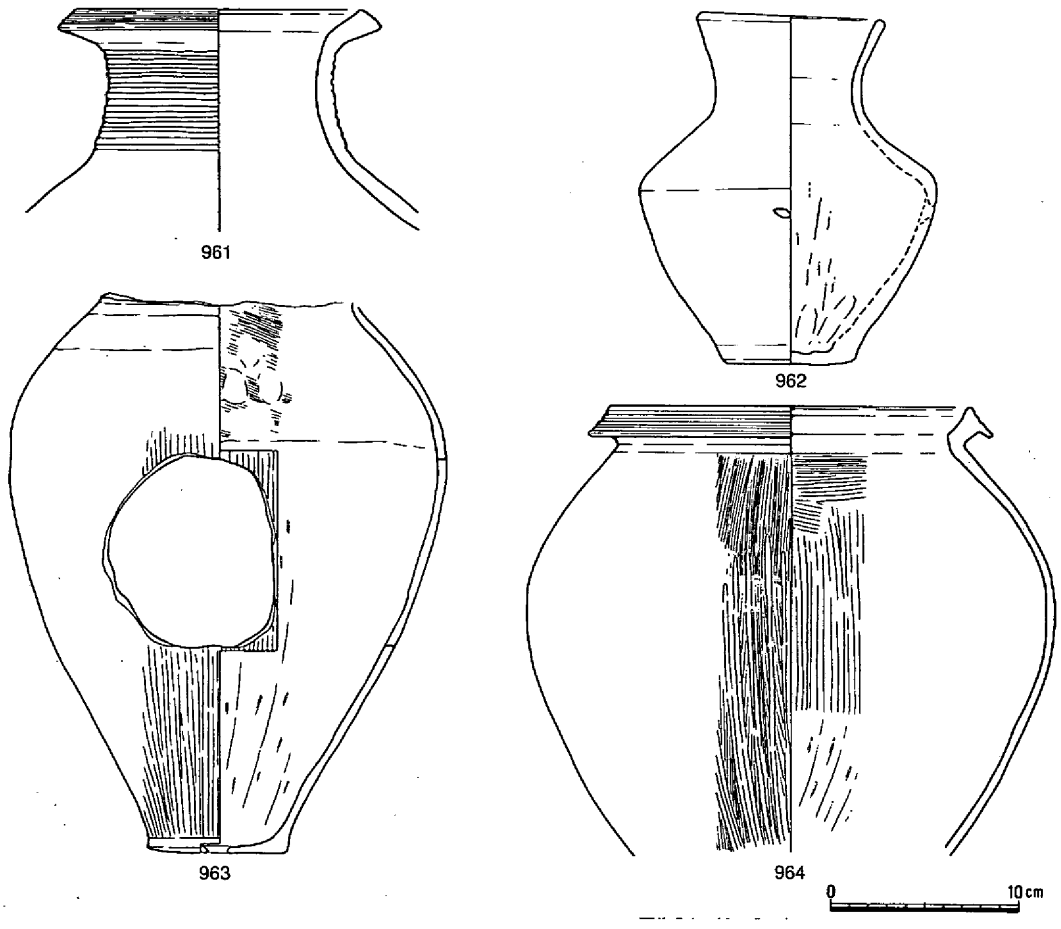
第175図　溝12出土遺物（1/6）

下層（第176～179図、図版3－2、35－2、36－1）

東鬼川市Ⅱ調査区内の下層（3・4層）出土の土器を一括する。大半の土器は、溝の底面直上にほぼ完形に近い状態で出土する。弥・中・Ⅲと後期Ⅰの資料が多い。壺の内、**957**～**960**は中期Ⅲで、**957**には胴部と底部に、**960**には底部に焼成後穿孔がある。**961**・**962**は後期Ⅰになり、前者は頸が長く、後者は直口になる。**981**は把手付の壺であり、後期Ⅰになる。**983**は脚付の直口壺で、算盤形である。中期Ⅲになる。**963**～**974**は甕になる。この内**965**～**967**は中期Ⅲになり、口縁部の形態は、**965**・**967**が上へ拡張し、**966**が上下に拡張する。**966**の胴部には2箇所焼成後穿孔がある。後期Ⅰは**968**～**970**・**972**・**974**であり、口縁部に形態は上下に拡張する**968**、斜め上に拡張する**969**、三角形になる**970**などがある。破片ではあるが後期Ⅲの**971**が混じる。**975**～**979**は高杯で、**977**・**979**は後期Ⅰになるが、他は中期Ⅲである。**980**・**982**・**984**は鉢であり、**980**・**984**は中期Ⅲで、**982**は後期Ⅱになる。**986**・**987**は器台であり、どちらも中期Ⅲになる。（小林）



第176図　溝12下層出土遺物①（1/4）



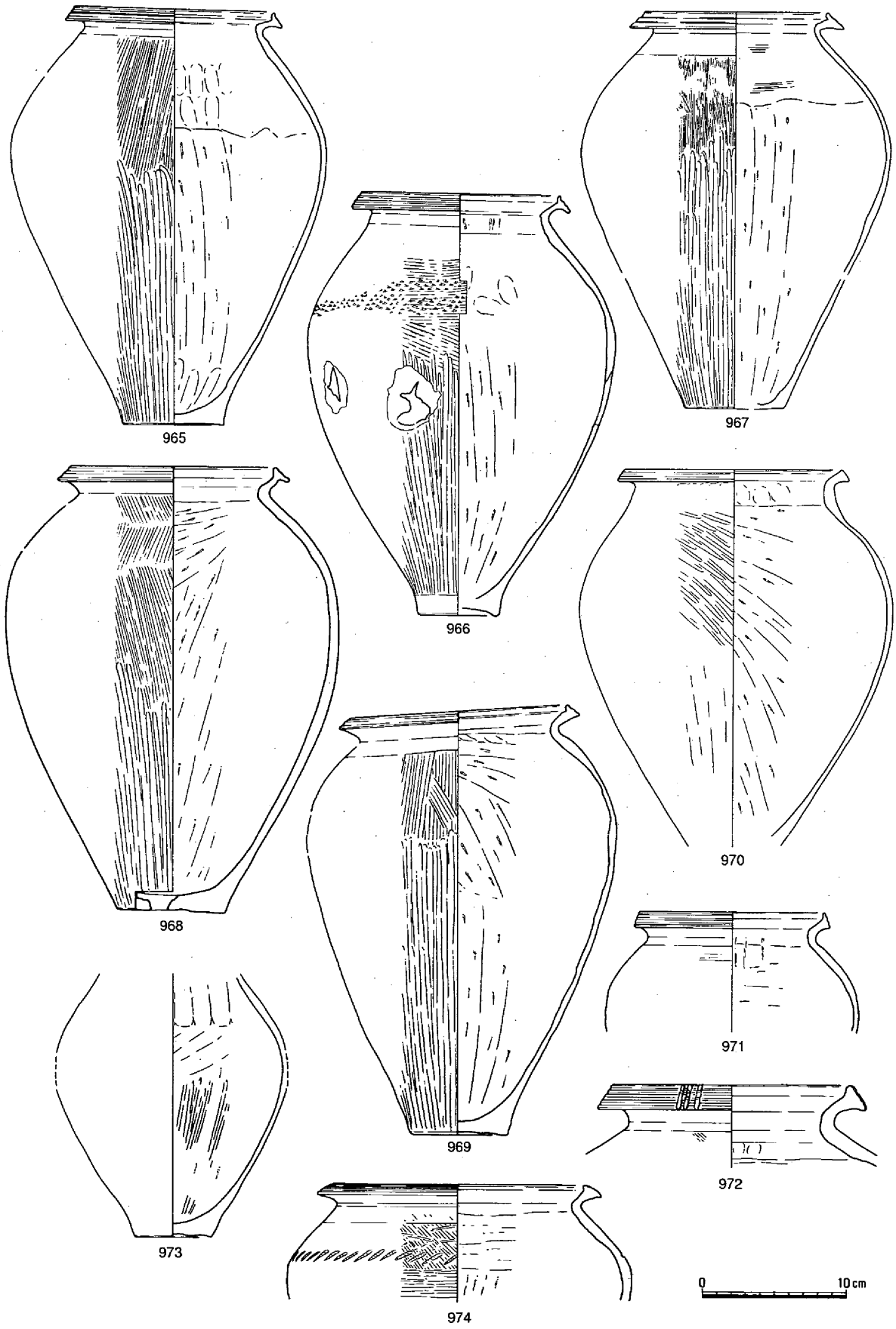
第177図　溝12下層出土遺物②（1/4）

土製品・石器、遺構に伴わない遺物（第180～182図、図版36－3、41－1・2、42）

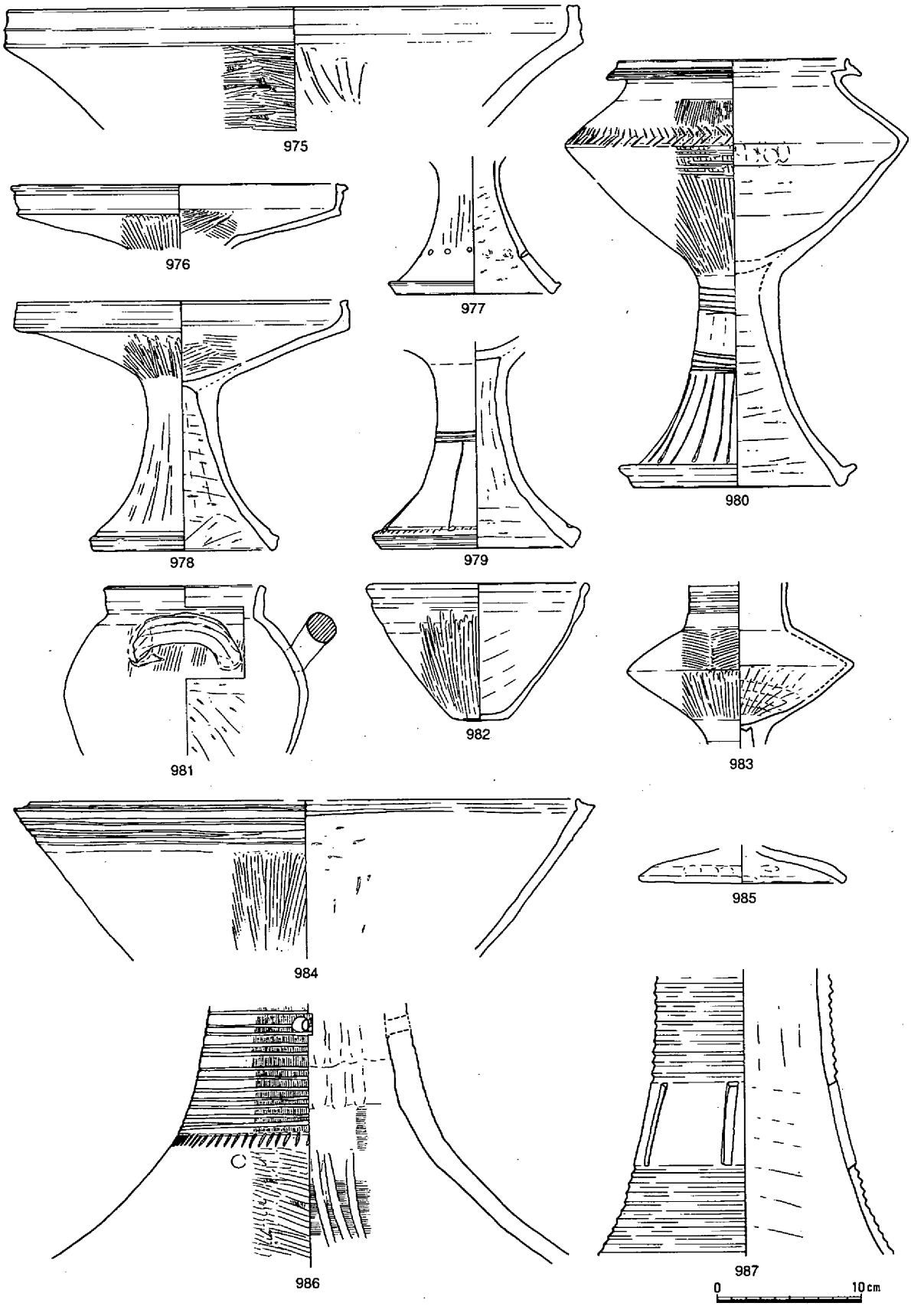
溝12出土の土製品と石器を一括する。**C 8・10・12～15**は分銅形土製品である。この内**C 8**は、表面に顔が描かれている。顔の眉と鼻は粘土を隆起させて形作っており、ただし鼻の部分は粘土が取れ、跡だけが残る。また目と口は線刻で描かれる。端部には3～4条ほどの弧状線刻が、抉り部には2条の線刻と刺突文が巡る。裏面は丁寧な横ヘラミガキで調整される。**C10**は、端部に弧状の線刻と刺突文が巡る。**C12**は、抉り部に2条の線刻がある。**C13**は完形であり、抉り部が小さい。上部の端部に円形の押型文が巡り、また表面には鋸歯文がある。**C15**は端部に弧状の、抉り部には沿う形で刺突文が巡る。**C 9**は円盤形の土製品で、表面には無数の刺突文があり、裏面には上部の端部にのみ刺突文がある。雄町遺跡などには無数の刺突文がある分銅形土製品があり、**C 9**は分銅形土製品の退化型である可能性が強い。**C11**は木の葉形の土製品である。表には葉の葉脈をそのまま押しつけ、木の葉を形づくる。裏面は何の調整もされない。**C16**は球形の土玉であるが穿孔はない。**C17・18**は紡錘車で、**C17**には穿孔がある。**S24・25**は石鏃である。**S26**は細粒花崗岩製の石錘である。**S27**はスタンプ状石器と呼ばれるものである。**S28～31**は石包丁で、**B 3**は勾玉の未製品で石製である。

東鬼川市Ⅱの遺構に伴わないものを一括する。**988・990**は完形の鉢である。**989**は破片であるが、放射状の線刻がある。**991**はミニチュア土器で、竪穴住居9付近から出土した。**C19～22**は分銅形土製品である。**C23**は球形の土玉で穿孔があり、**C24**は土錘である。**S32～35**は石鏃である。**S36**はたたき石で、磨製石斧の転用品である。

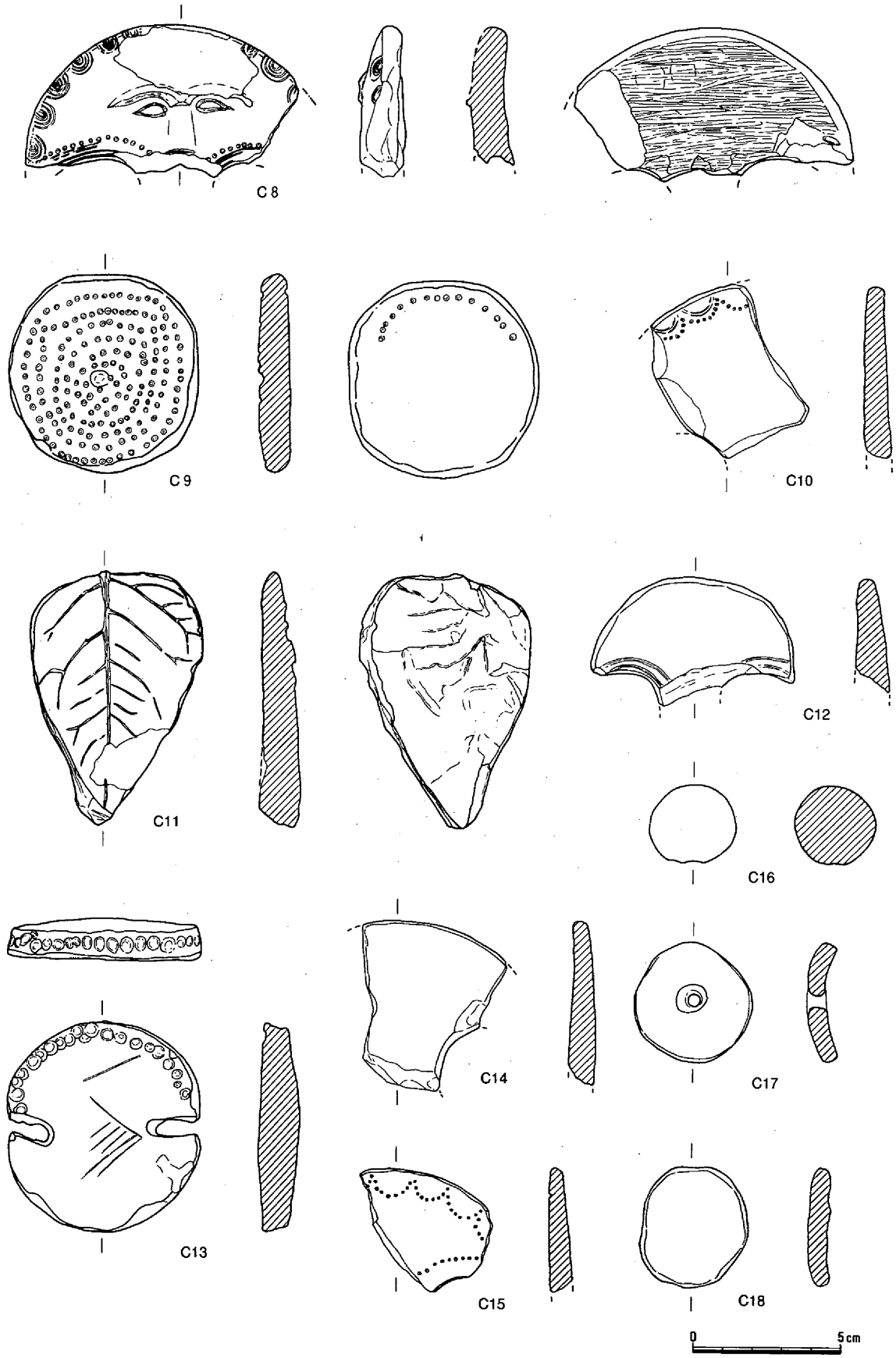
（小林）



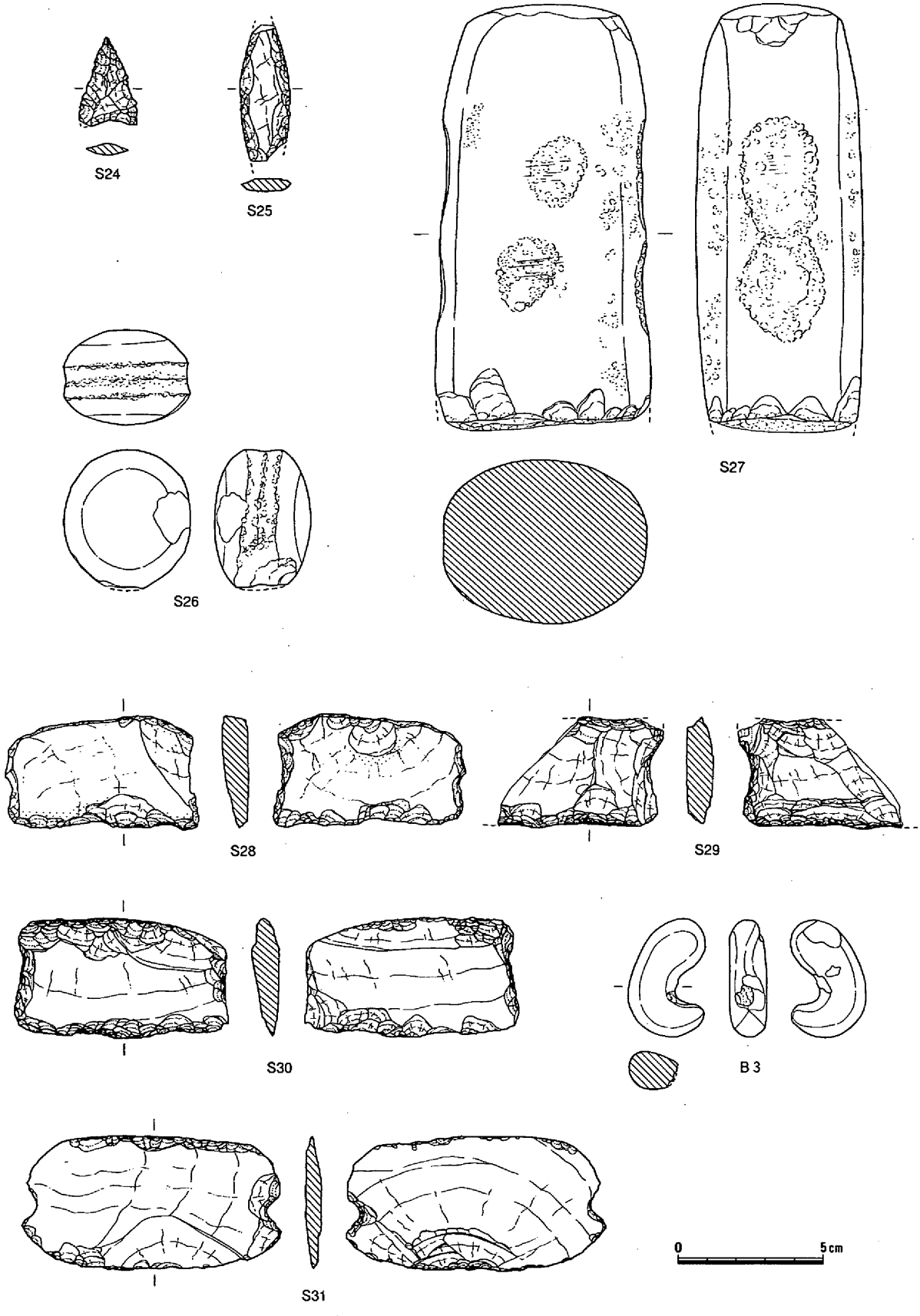
第178図　溝12下層出土遺物③（1/4）



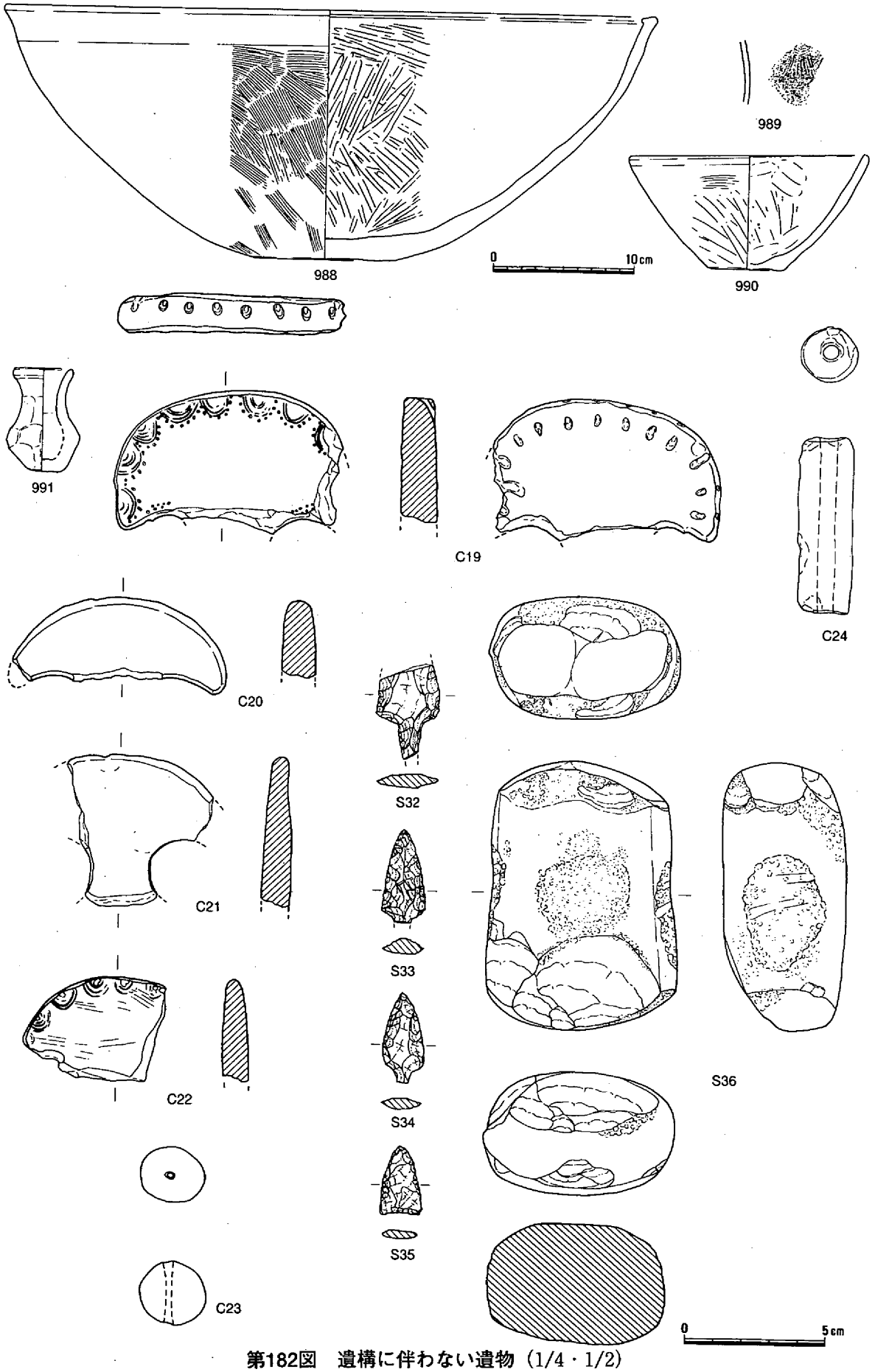
第179図　溝12下層出土遺物④（1/4）



第180図　溝12出土土製品（1/2）



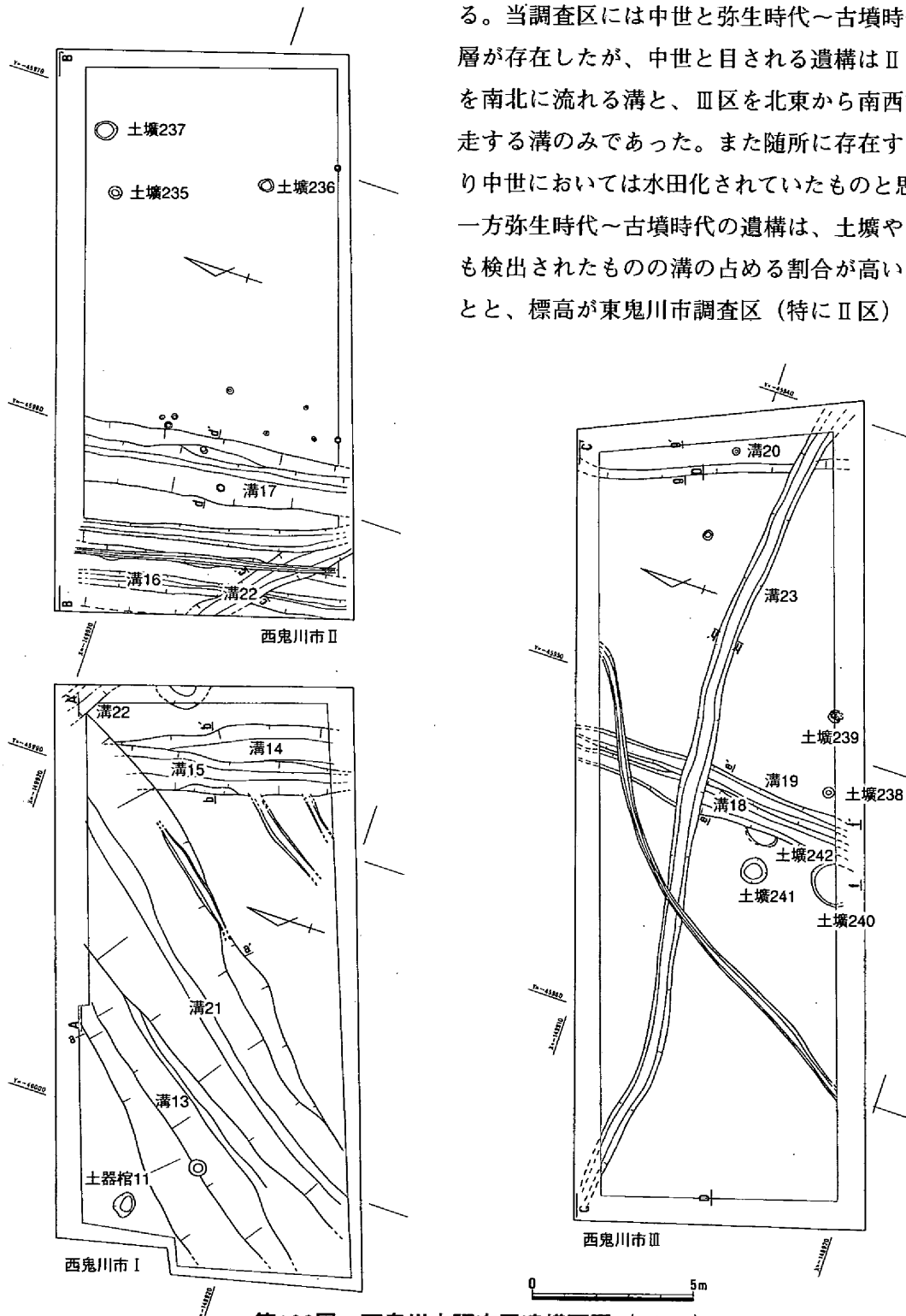
第181図　溝12出土石器（1/2）



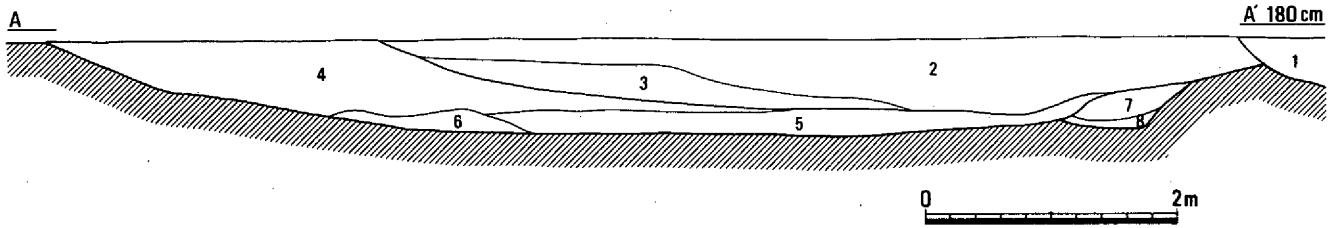
第182図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

第7節　西鬼川市調査区　調査の概要

上東遺跡西鬼川市調査区は、東西70m、南北10mの調査区で、現存する畦畔により西鬼川市Ⅰ～Ⅲに分割している。東は字境の用水を介し東鬼川市調査区、西は田所調査区にそれぞれ挟まれて所在する。地形的には東鬼川市調査区より続く微高地の西半にあり、東から西に向けて緩やかに傾斜している。当調査区には中世と弥生時代～古墳時代の包含層が存在したが、中世と目される遺構はⅡ区の西側を南北に流れる溝と、Ⅲ区を北東から南西方向に流走する溝のみであった。また随所に存在する鋤痕より中世においては水田化されていたものと思われる。一方弥生時代～古墳時代の遺構は、土壙や、土器棺も検出されたものの溝の占める割合が高い。このことと、標高が東鬼川市調査区（特にⅡ区）と比べて

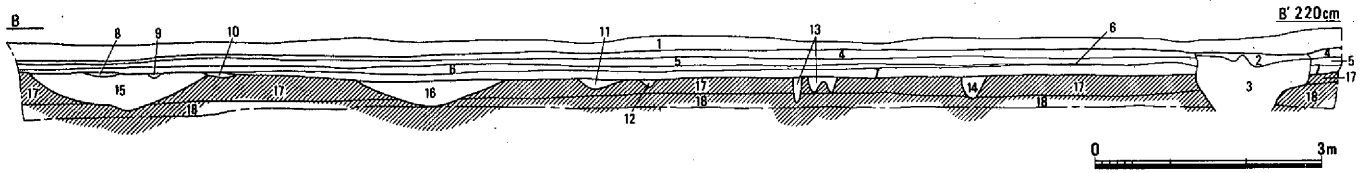


第183図　西鬼川市調査区遺構配置（1/200）



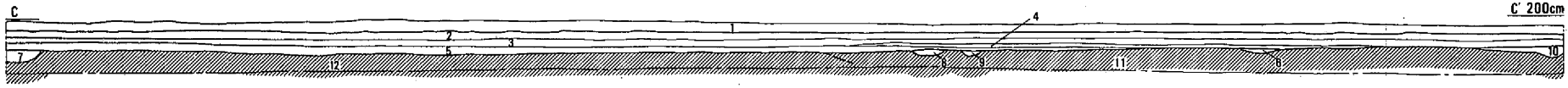
1　暗灰色粘質土〈溝22〉
2　暗褐灰色粘質土〈溝21〉
3　黒灰色粘質土〈溝21〉
4　褐灰色粘質土〈溝13〉
5　暗灰色砂質土〈溝13〉
6　灰色砂質土〈溝13〉
7　暗灰色粘質細砂〈溝14〉
8　暗灰色砂質粘土〈溝14〉

第184図　西鬼川市Ⅰ北壁断面（1/60）

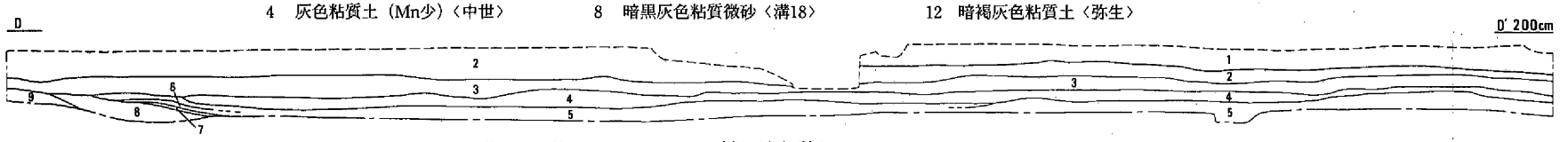


1　暗灰色土〈耕作土〉
2　灰色粘質細砂〈撹乱〉
3　暗青灰色粘質土〈撹乱〉
4　白灰色粘質土（Fe含）〈中世〉
5　灰色粘質土（Mn含）〈中世〉
6　灰色粘性砂質土〈中世〉
7　暗灰色粘質土（Mn含）〈土器片含〉
8　灰色粘質土〈中世土壙？〉
9　灰色粘性細砂〈中世溝〉
10　灰色粘性細砂〈中世溝〉
11　暗褐灰色粘質土〈土壙？〉
12　暗褐灰色粘質土〈土壙？〉
13　暗褐灰色粘質土〈土壙？〉
14　暗褐灰色粘質土〈土壙？〉
15　暗褐灰色粘質土〈溝16〉
16　暗褐灰色粘質土〈溝17〉
17　黄灰色粘質細砂〈弥生〉
18　灰色粘質細砂

第185図　西鬼川市Ⅱ北壁断面（1/100）



1　〈耕作土〉
2　明灰色粘質微砂（Mn含）〈中世〉
3　明灰色粘質微砂（Mn少）〈中世〉
4　灰色粘質土（Mn少）〈中世〉
5　褐灰色粘質土（Mn含）〈中世〉
6　暗褐灰色粘質微砂〈溝20〉
7　暗黒褐色粘質土〈溝23〉
8　暗黒灰色粘質微砂〈溝18〉
9　暗灰色粘質微砂〈溝19〉
10　暗褐灰色粘質微砂
11　明黄灰色粘質細砂〈弥生〉
12　暗褐灰色粘質土〈弥生〉



6　黄灰色砂質土
7　灰色粘性砂質土
8　黄灰色粗砂
9　灰色粗砂

1　暗褐灰色粘質土
2　暗黄灰色粘質土
3　黄灰色粘質土
4　黄灰色砂質土
5　灰色砂質土

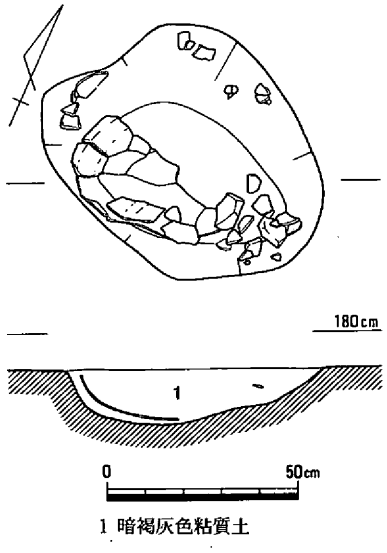
第186図　西鬼川市Ⅲ北壁（上）・中央（下）断面（1/100）

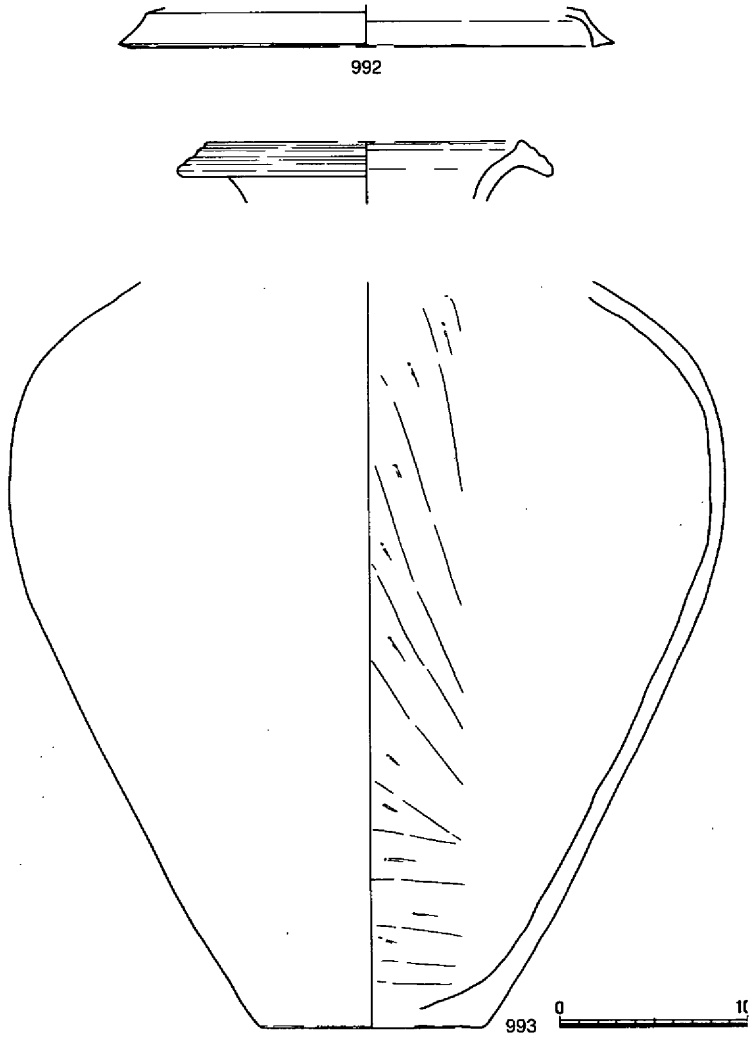
低いこととを想起すると、当地点においては農業に関すること、および東鬼川市調査区内にて展開していた集落区域を画する土地利用がなされていたと思われる。特に、溝13と土器棺墓11との位置関係は、ある時期（具体的には弥・後・Ⅰ）における集落域の境界を示唆しているのかもしれない。なお、当調査区出土遺物の中には、遺構以外の包含層で発見されたものも多く、また、その時期も弥生時代～中世の各時代にわたっていることから、当初はさらに多くの遺構が存在した可能性もある。（蛯原）

第8節　西鬼川市調査区　弥生・古墳時代の遺構・遺物

土器棺墓11（第187図）

西鬼川市Ⅰ区の北西隅に存在する遺構である。平面形は不整円形を呈し、規模は、長径およそ80cm、短径55cmをそれぞれ測る。検出面からの深さが浅いことや、棺身の壺**993**の胴部から底部にかけての半分のみが元位置に近い位置であることから削平をかなり受けていると思われる。弥・後・Ⅰだろう。





第187図　土器棺墓11（1/20）**・出土遺物**（1/4）

土壙235（第188図）

土壙237の西側の位置で検出した遺構である。平面形は円形をなし、直径40cm程の規模をもつ。深さは18cmで、床面は中央部分が窪んでいる。時期は弥生時代後期の範疇に入るであろう。

土壙236（第188図）

土壙235の南側で検出した遺構である。平面形は48×40cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは7cmと浅い。また、断面形は皿状をなす。この遺構の時期は弥生時代後期である。（蛯原）

土壙237（第188図）

土壙235の東側にある遺構である。平面は不整円形をなし、73×60cmの規模をもつ。深さは16cmを測り、床面は西に向かってゆるく傾斜している。時期は弥生時代後期であろう。

土壙238（第188図）

土壙240の東の位置で検出した遺構である。平面は円形で、規模は直径35cmを測る。深さは28cmを測り、断面形はＵ字形をなす。当遺構の時期は弥生時代後期と思われる。

土壙239（第188図）

土壙238の東側で検出した遺構で、平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは46cmを測り、床面は２か所の窪みをもつ複雑な形状をなす。時期は弥生時代後期であろう。

土壙240（第188図）

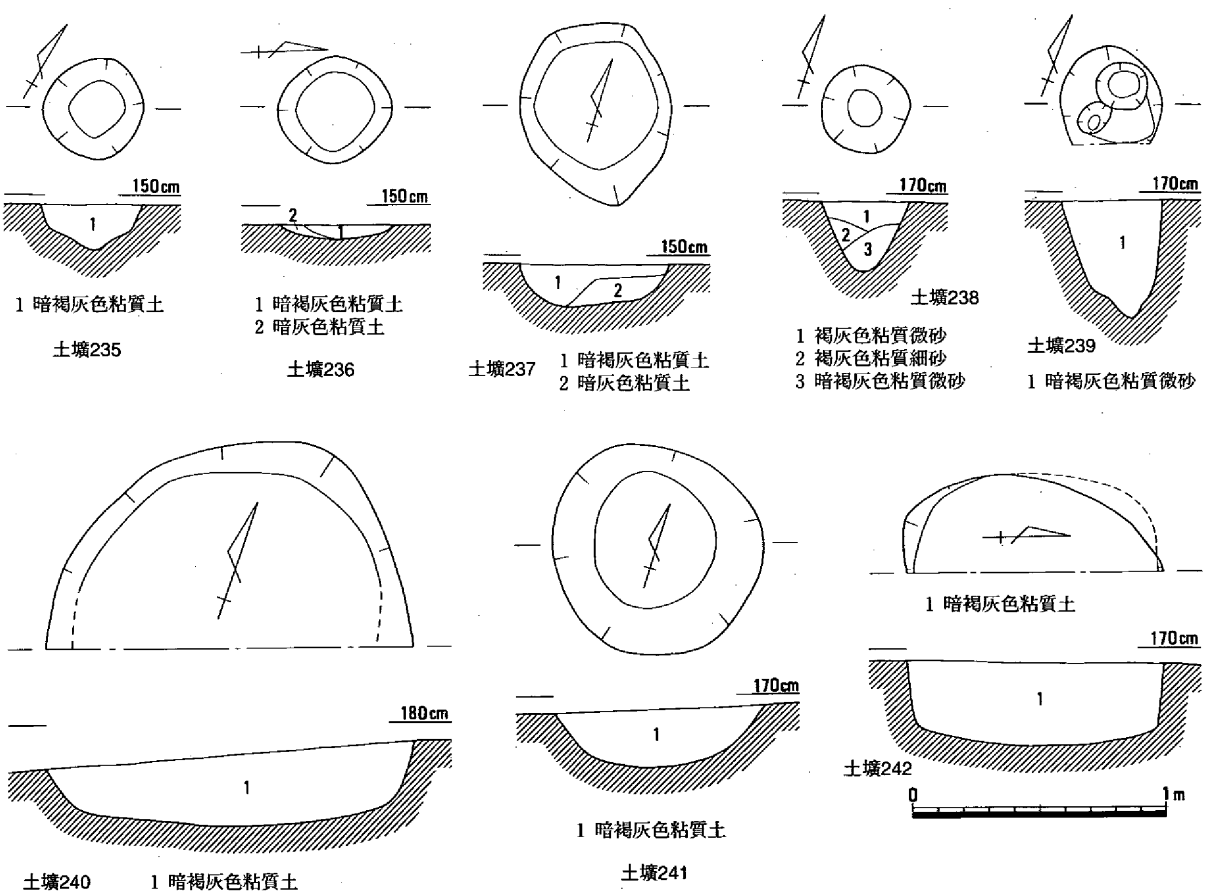
土壙241の南側に存在する遺構である。南側を側溝によって切られているが円形の平面形をなすと思われる。深さは28cmを測り、床面はほぼ平らである。時期は弥生時代後期であろう。

土壙241（第188図）

土壙242の西側に存在する遺構である。平面は直径82cmの円形を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。断面形はⅢ状をなす。この遺構の時期は弥生時代後期であろう。

土壙242（第188図）

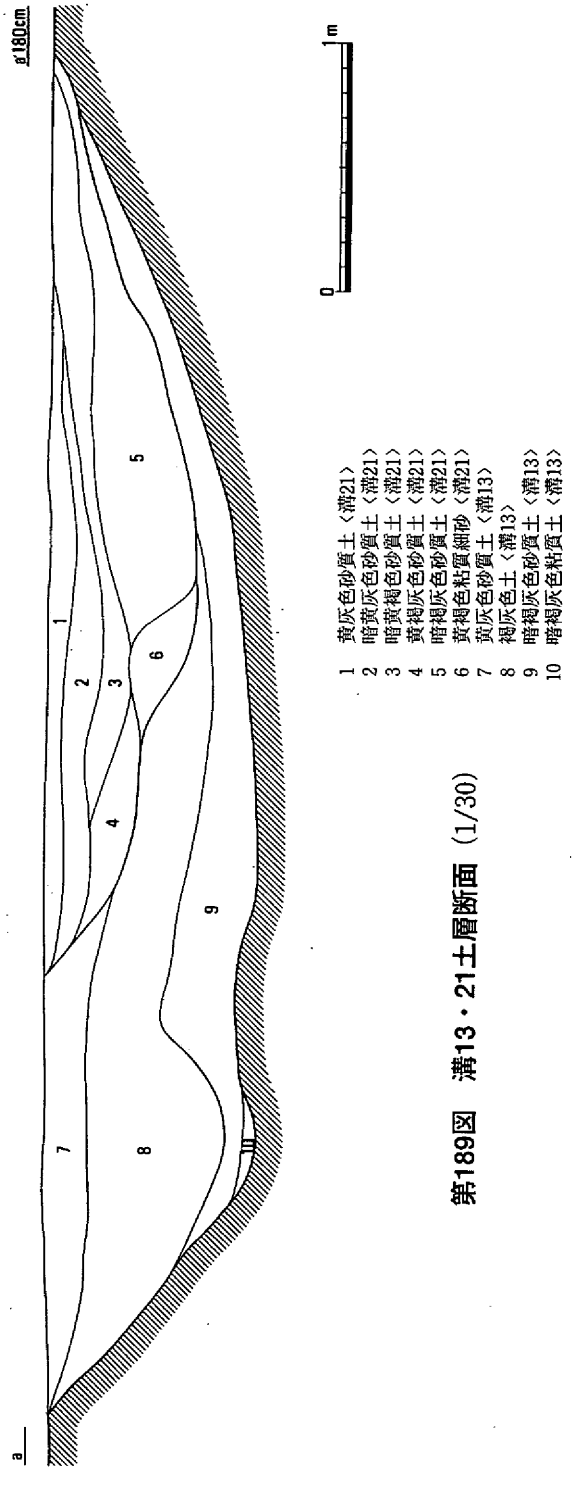
西鬼川市Ⅲ区の中央にあり、東側を溝18に切られている遺構である。32cmの深さを持ち、床面は平坦で両側の立ち上がりは急である。北西部分では袋状となる。時期は弥生後期。　（蛯原）



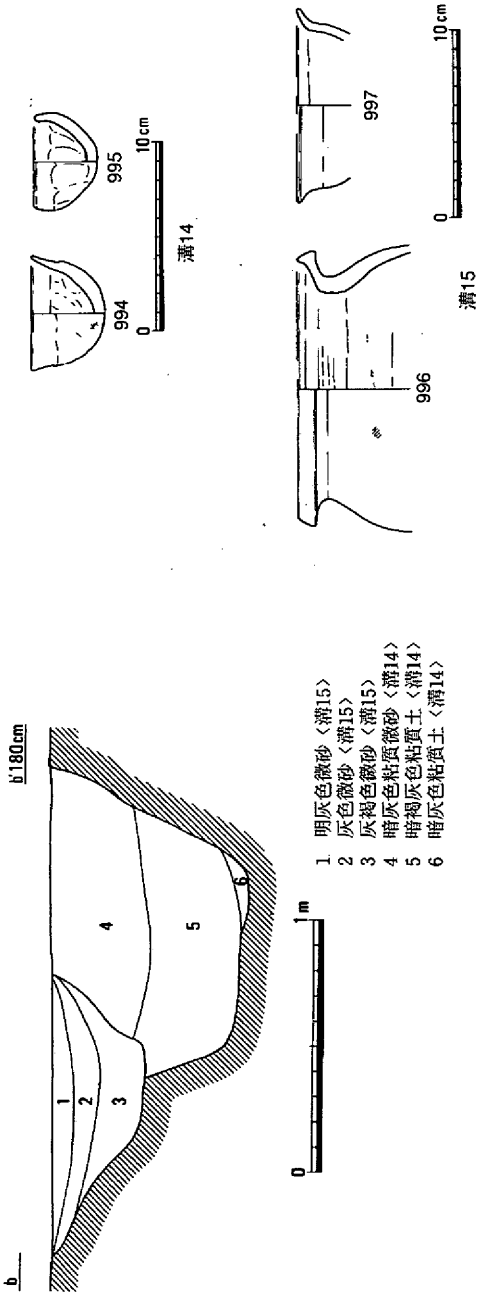
第188図　土壙235～242（1/30）

溝13・21（第189・191・192図、図版12－２、37－１）

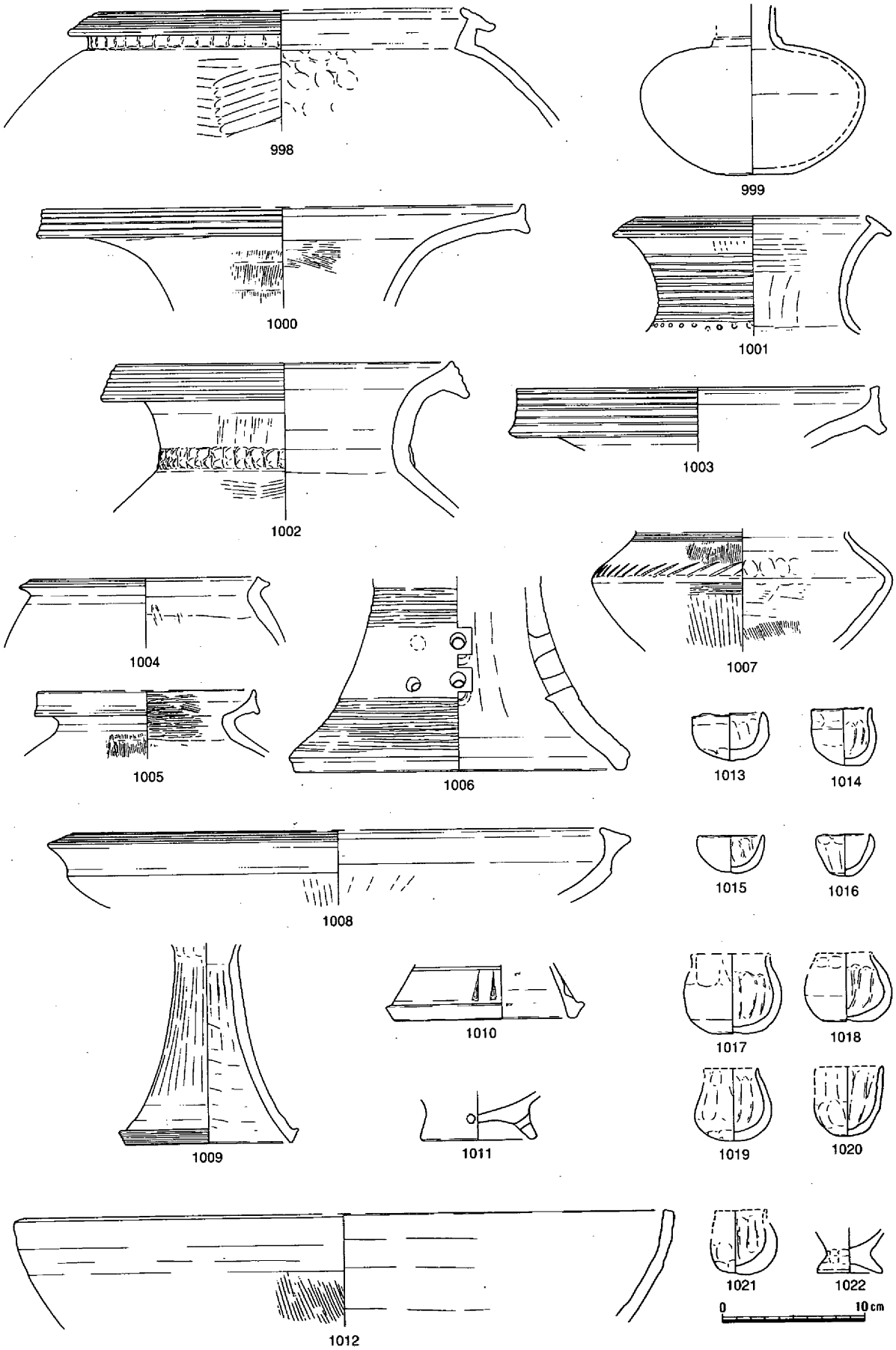
西鬼川市Ⅰ区を北東から南西に向かって流走する溝で、上東遺跡（山陽新幹線）のＤⅠ（溝13）・Ｄ２（溝21）につながると思われる。この２本の溝はほぼ重なって存在するが、土層観察及び出土遺物より溝21が溝13を切る関係にある。溝13は推定530cm程の幅、深さ84cmの規模をもち、断面形は、底の北西隅に浅い窪みがみられるが、やや深めのⅢ状を呈する。また、北西側の掘り方には若干の段があり、立ち上がりも緩やかな南東側に比べてやや急である。底の北西隅には深さ６cmの窪みを持つ。溝13の出土遺物は、弥生土器**998～1022**、分銅形土製品**Ｃ25**、打製石包丁**Ｓ37**・**Ｓ38**がある。



第189図　溝13・21土層断面（1/30）

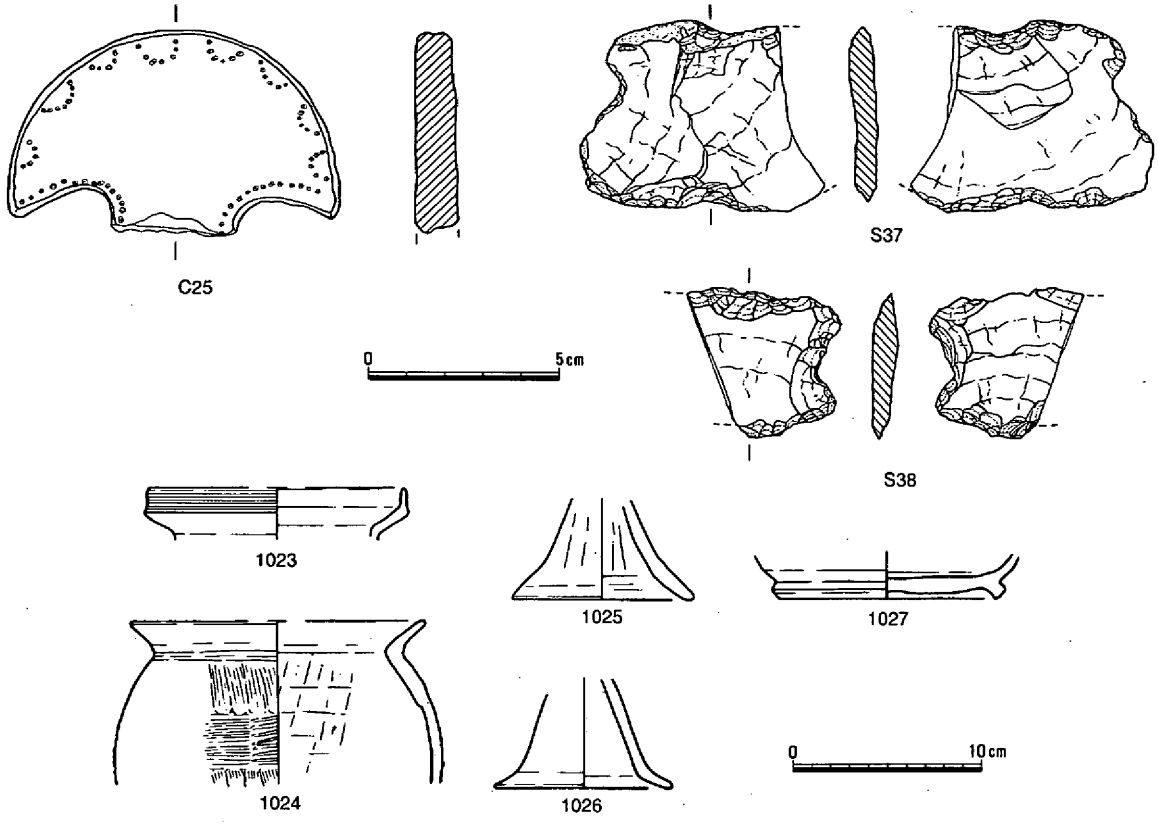


第190図　溝14・15土層断面（1/30）・**出土遺物**（1/4）



第191図　溝13出土遺物①（1/4）

一方の溝21は、幅242、深さ57cmを測る。当初は、北西側の掘り方に顕著な段が見られることと堆積状況から２条の溝の重複と考えたが、堆積土間に大きな相違や、明白な間層が皆無であった為、何らかの事情で掘りなおされたものとしておく。埋土は大きく６層に分層できた。出土遺物には、土師器**1023～1026**等がある。時期は古・前・Ⅱであろう。　（蛯原）



第192図　溝13②（上）・21（下）・出土遺物（1/2・1/4）

溝14・15（第190図）

西鬼川市Ⅰ区の東側を南北に流走する溝で、上東遺跡（山陽新幹線）のＤ６につながる。この２条の溝は重複しながら存在しているが、土層観察より溝15が溝14を切る関係にある。

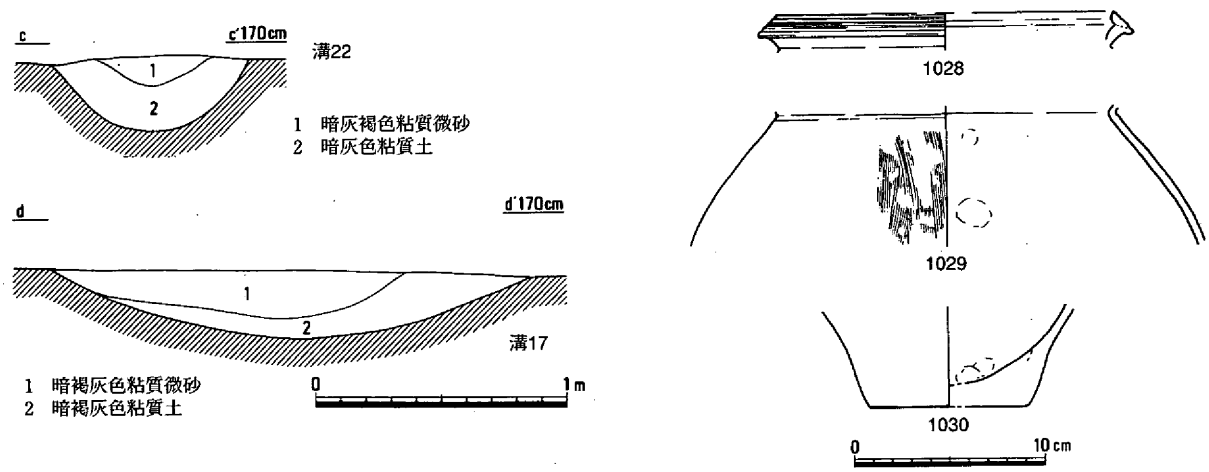
溝13は、深さ79cmを測り、底は東隅に浅い窪みを有するもののほぼ平らである。堆積土は大きく２層に分かれる。出土遺物には甕**996**、鉢**997**がある。甕**996**は若干新相を呈するがこれは調査時の紛れ込みであると思われる。一方溝14は幅113cm、深さ36cmの規模をもつ。堆積土は３層に区分できレンズ状に堆積していた。これらの溝の時期は弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰであろう。　（蛯原）

溝22（第193図）

西鬼川市Ⅰ区の北東隅より西鬼川市Ⅱ区の南西部にかけてに存在する遺構である。幅78cm、深さ30cmをそれぞれ測る。断面形は椀形を呈し底部は丸みを帯びていた。この遺構の時期は遺物が細片のため特定しにくいが、溝21を切っており溝21よりは新しいとみることができる。　（蛯原）

溝17（第193図）

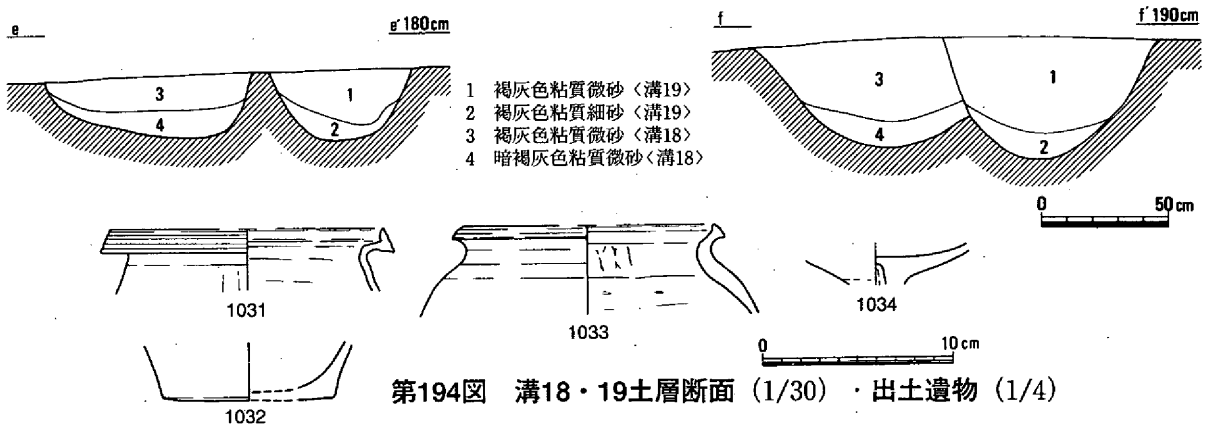
西鬼川市Ⅱ区の西側にあり溝16と並行する位置にある。また、上東遺跡（山陽新幹線）のＤ５とつながる可能性がある。規模は幅188cm、深さ27cmを測る。断面形はⅢ形をなし底部はやや丸みを帯びている。出土遺物には甕**1028～1030**がある。時期は弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰであろう。　（蛯原）



第193図　溝22・17土層断面（1/30）**・出土遺物**（1/4）

溝18・19（第194図）

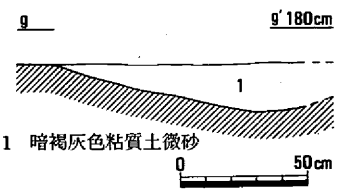
西鬼川市Ⅲ区の中央部を南北に流走する溝である。この２条の溝はほぼ重複して存在しているが、断面観察等により溝19が溝18を切っている。だが埋土は酷似しており、あまり時間を経ないで掘られたものと思われる。**1031～1033**の土器が出土している。時期は弥・後・Ⅰである。　（蛯原）



第194図　溝18・19土層断面（1/30）**・出土遺物**（1/4）

溝20（第195図）

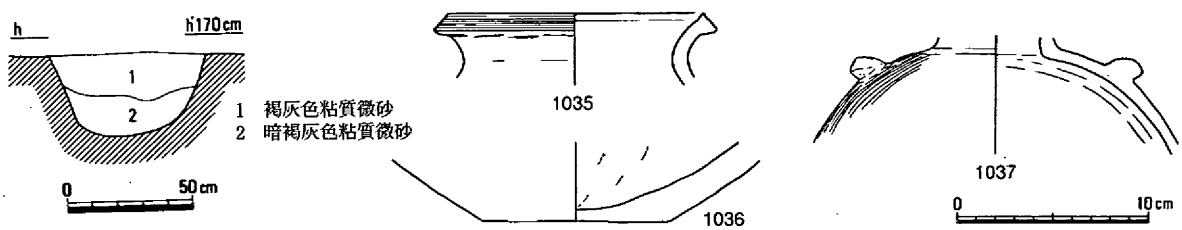
西鬼川市Ⅲ区の東端を南北に流走する溝である。東側は調査区外に出るため全容は不明である。深さは18cmを測る。埋土は暗褐灰色粘質微砂の単層である。時期は弥・後・Ⅱ～Ⅳに収まるであろう。（蛯原）



第195図　溝20土層断面（1/30）

溝23（第196図）

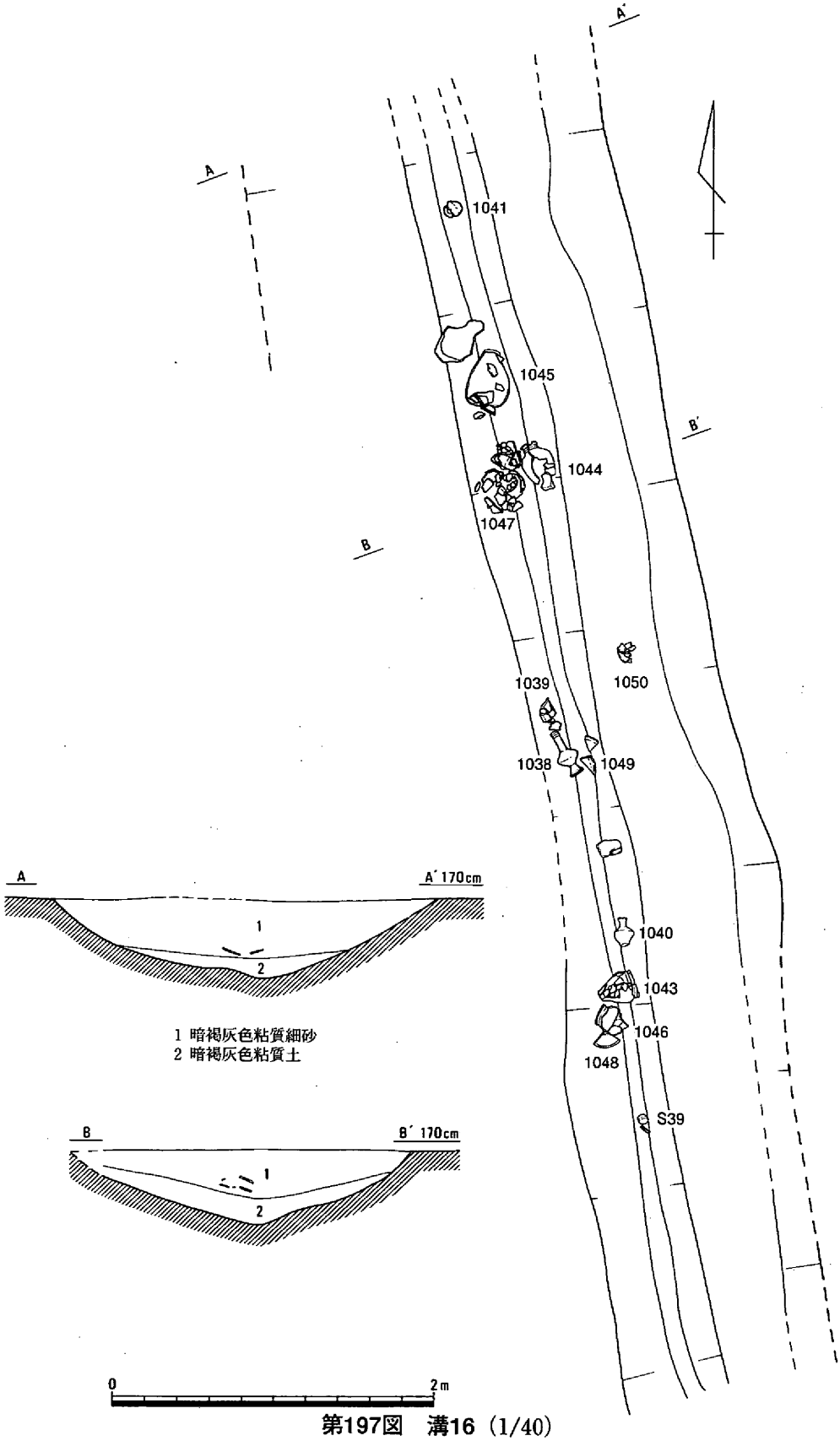
西鬼川市Ⅲ区を北西から南東に向けて横断する溝である。幅60cm、深さ33cmをそれぞれ測り、断面形は椀形をなす。埋土は２層に区分され、ほぼ水平に堆積している。遺物は弥生土器**1035・1036**および須恵器提瓶**1037**の出土をみた。このうち弥生土器は紛れ込みと思われる。　（蛯原）



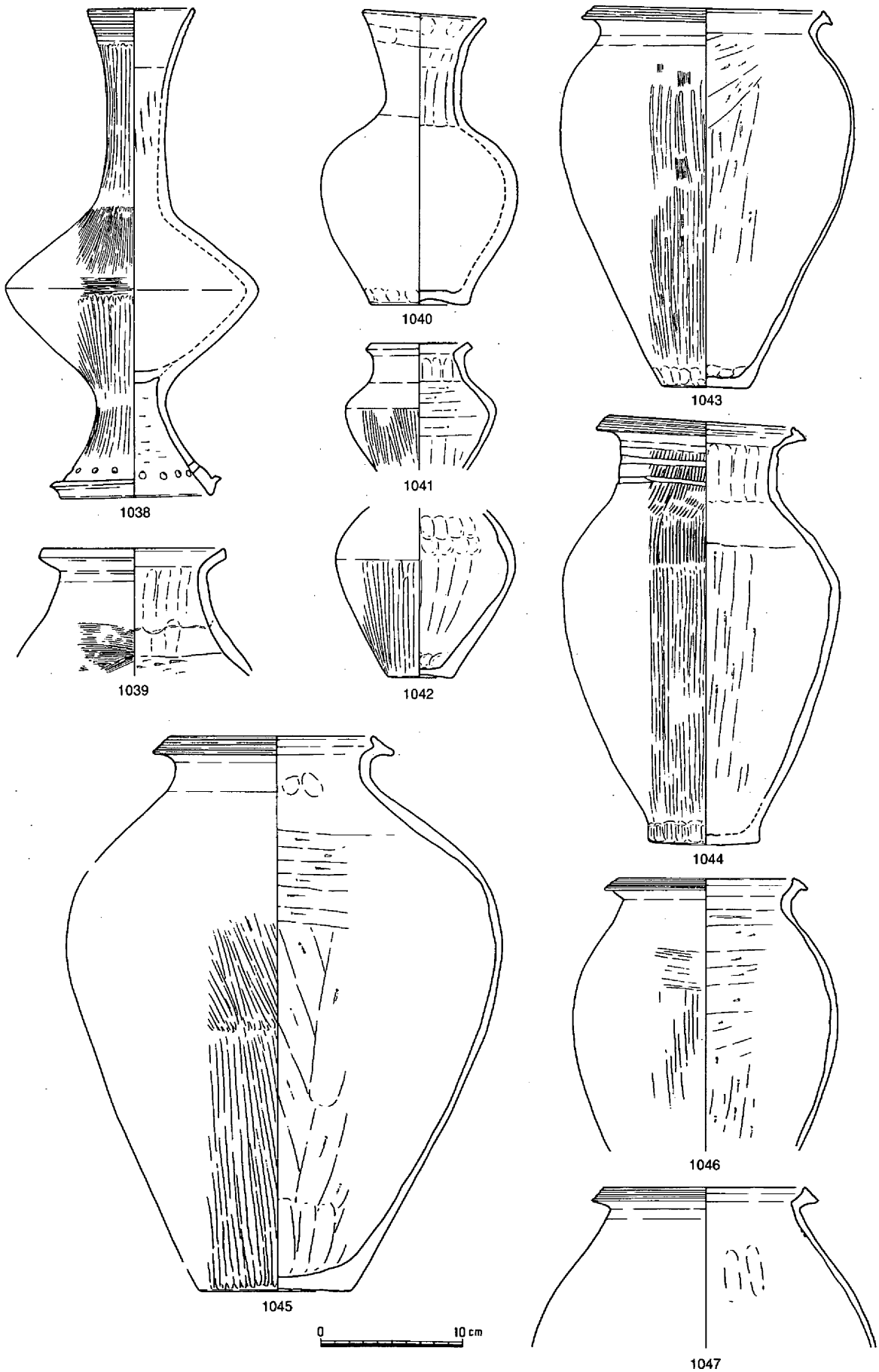
第196図　溝23土層断面（1/30）**・出土遺物**（1/4）

溝16（第197～199図、図版13－２、37－２）

溝16は、西鬼川市Ⅱ調査区の西端に位置し、過去の調査においては西鬼川市Ｄ４と呼ばれた。溝の西側の肩部は、調査区境に当たり、断面以外では確認できない。切り合い関係は、溝22に切られる形



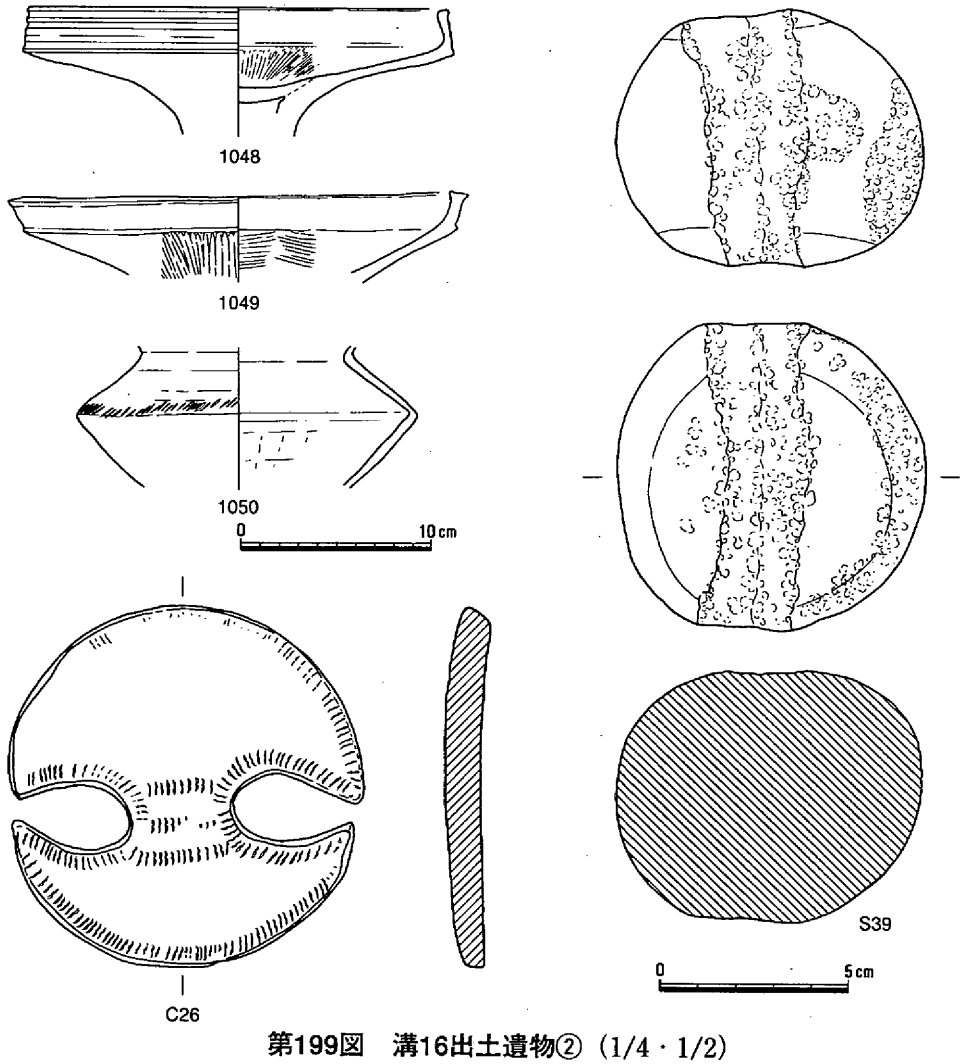
第197図　溝16（1/40）



第198図　溝16出土遺物①（1/4）

になる。この溝は、北北西から南南東方向へ向けてほぼ直線的に南流している。溝の幅は北側で220cmを測り、深さは確認面から50cmになる。これは標高で122cmになる。また断面形状はⅢ形である。覆土は2層からなり、粘質土が基本である。特に上部の1層から遺物が多く出土する。遺物の出土状態を見ると、平面的には溝のほぼ中央部に列をなすような形で出土する。断面的に見ると、遺物は溝の底面直上から出土するのではなく、15cmほど浮いた部分から出土する。覆土が粘質土であることを考えれば、遺物を意図的にこのような形で廃棄したものと思われる。この状況は溝5も同じである。

出土遺物中**1038**～**1042**・**1044**・**1045**は壺である。**1038**は脚付の直口壺である。胴部は算盤形をしており、外面の調整は全面へラミガキで丁寧に仕上げている。胎土は白灰色で、時期は弥・中・Ⅲになる。この**1038**以外の壺の胎土は、赤褐色を呈する。**1040**は口縁の形態が外反する形である。**1041**・**1045**は短頸になり、前者が小型で後者が大型になる。**1044**は頸部が僅かに長くなり、沈線文が施られる。**1043**・**1046**・**1047**は甕である。口縁の端部は、内側もしくは上下に拡張し、拡張して作られた面には数条の擬凹線が施られる。**1048**・**1049**は高杯である。**1048**は口縁部が直に立ち上がり、胎土は白灰色である。**1049**は口縁が外気味に立ち上がり、胎土は赤褐色を呈する。**1050**は算盤形の鉢である。**C26**は分銅形土製品であり、抉り部で2つに割れていた。縁の全周と抉り部を結ぶ位置に刺突文が施られる。**S39**は斑糲岩製の石錘である。以上、**1038**・**1048**は弥・中・Ⅲの資料であるが、他は全て弥・後・Ⅰになり、溝自体の時期も弥・後・Ⅰにするのが妥当であろう。　(小林)



第199図　溝16出土遺物②（1/4・1/2）

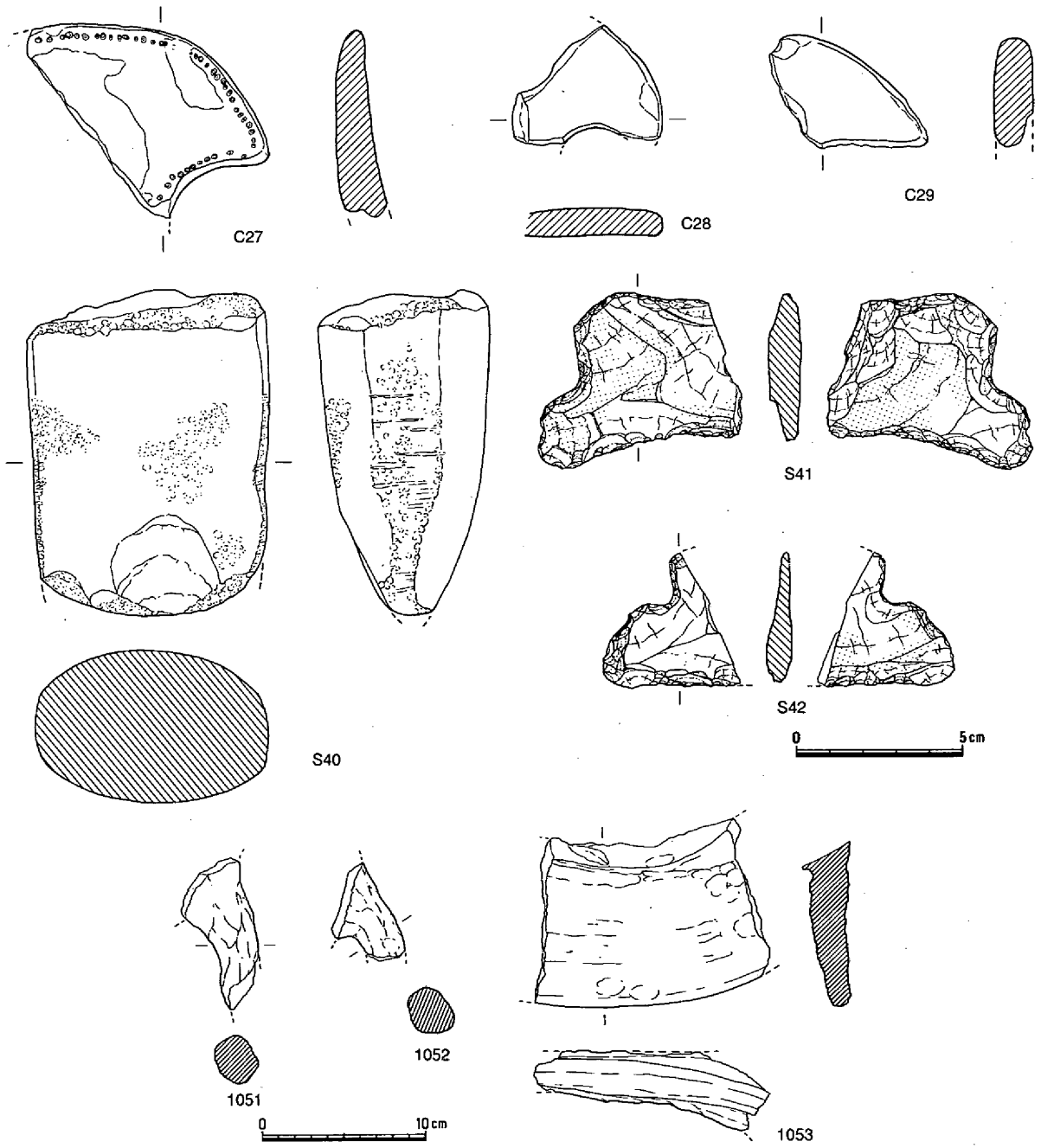
遺構に伴わない遺物（第200図）

ここでは遺構から遊離して出土したものを取り上げている。それらの遺物は、量的には遺構内出土遺物とほぼ同数あり、また時期も弥生時代から中世まで到っているが、代表的なものを掲載している。その種別は土師器**1051**～**1053**・土製品**Ｃ27**～**Ｃ29**・石器**Ｓ40**～**Ｓ42**である。

Ｃ27～**Ｃ29**は分銅形土製品である。文様などは比較的簡素なもので、認められないものも存在する。**Ｃ27**は端面に刺突文を施している。これらはいずれも弥生時代後期の所産であろう。

Ｓ40は太形蛤刃石斧で、緑色流紋岩製である。刃先の部分は折れている。また、**Ｓ41**と**Ｓ42**はともに打製石包丁である。

1051・**1052**は土鍋の脚部、**1053**はカマド上部の庇である。　（蛯原）



第200図　西鬼川市調査区遺構に伴わない遺物（1/2・1/4）

第４章　田所・下田所微高地の調査

第１節　田所調査区　調査の概要

田所調査区は、西鬼川市調査区の西側、下田所調査区の東側に位置する。下田所調査区との境は、現代の道路によって分けられている。調査区の幅は、南北が10mで、東西が41mの広さである。この田所調査区は、亀川・東鬼川市・西鬼川市と続いてきた上東遺跡最大の微高地が終わる地点であり、また西側においても下田所微高地が終わる地点である。しかし今回の調査では調査区の西側に近世の溝があるため、下田所微高地の落ち込み部は確認できなかった。

過去２回の調査では、特に遺構は検出していない。土層断面において鬼川市・下田所両微高地の落ち込みを確認し、さらに両者の間にある溝を確認している。今回の調査では、近世の溝１条、中世は東西方向に走る溝と土壙１基、古墳時代は、東側に溝２条と微高地の落ち込み部に水田・たわみ、弥生時代は溝３条と土壙１基、他に層位的に水田層を確認している。また鬼川市調査区の落ち込み部は、調査区内において北辺では東から9.5m、南辺では東から14mの地点になり、方位的にはほぼ真北から真南に向かって伸びる。

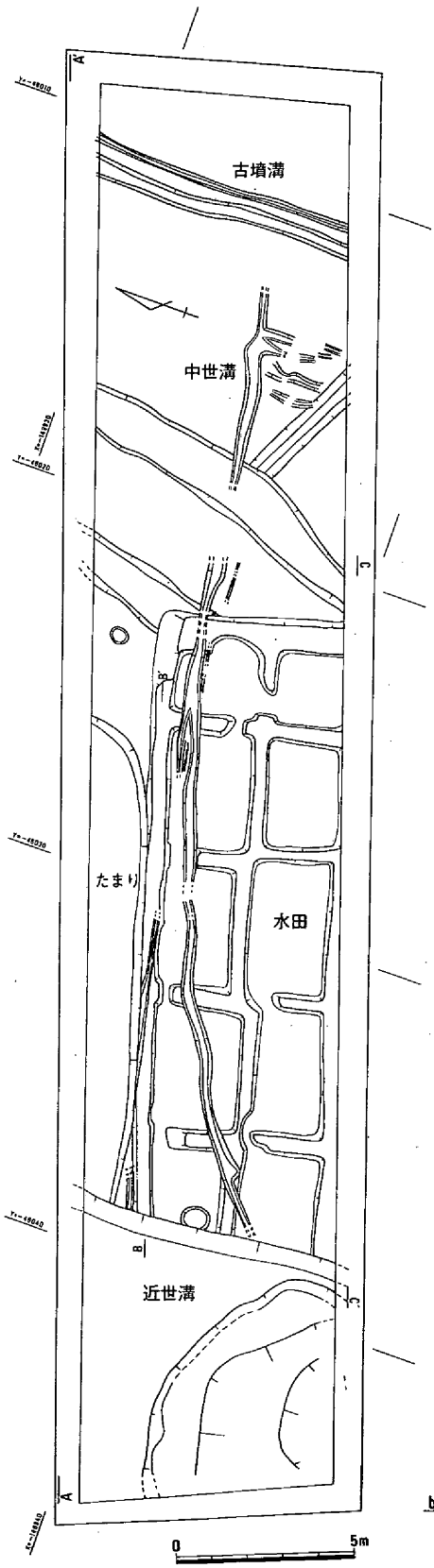
田所調査区を層位的に見ると、北壁と南壁では多少の差異がある。北壁（第204図上）では、１層の耕作土の直下から２層の近世溝が始まる。７・８・９層は中世水田層で、その直下から14・15層の２条の溝が築かれる。この溝からは須恵器の破片が出土しており、古墳時代後期になると思われる。鬼川市微高地の落ち込み部は10層になり、標高140cmから落ち込む。11層はたわみであるが、標高では古墳水田層と同じ高さになる。南壁（第204図下）では、２層の水田層を確認している。古墳時代の水田層は４層で、６層が畦畔になる。水田層の床面は、東側で標高120cm、西側で110cmになり、若干東側が高い。９・10層は弥生時代の水田層になり、やはり若干東側が高くなる。それらの層の下層（第204図中）は、砂質が中央付近に向かって溝状に落ち込んでいる。この堆積状況は、過去の調査の断面で確認したものと同じになるであろう。

今回新たに２層の水田層を確認したことにより、上東遺跡においても、住居などを多数確認した微高地のすぐ脇に、生産域が存在することが明らかになった。（小林）

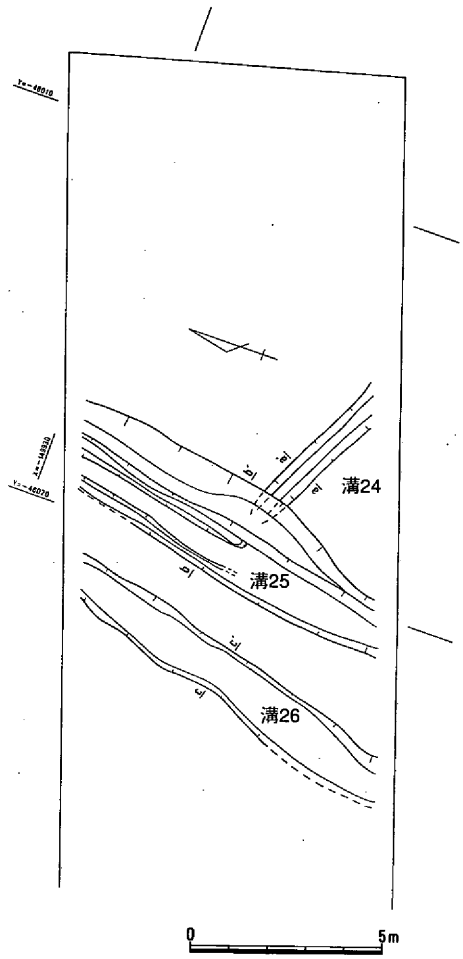
第２節　田所調査区　弥生・古墳時代の遺構・遺物

水田（第205図、図版13－３・14－１）

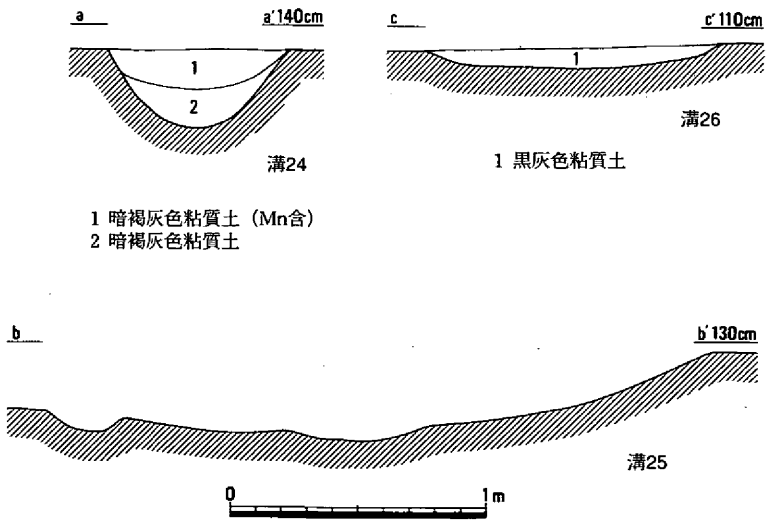
調査区中央部よりやや西よりの部分から、西側部にかけて広がる。最西端部においては、近世以降の溝によって切られる。亀川調査区から続く微高地の西側端部から３～４m離れた箇所に存在する。この水田は、微高地の落ち込み部分を20cm近く掘込んだ面で確認した。水田は、今回の調査区内では、18×5.5mの範囲で確認された。一番北側辺にある畦畔は、遺構確認中でも、最もはっきり確認が出来た。この畦畔の幅自体は60cm前後で、高さが14～15cm前後と、他の畦畔と変わりがない。しかしこ



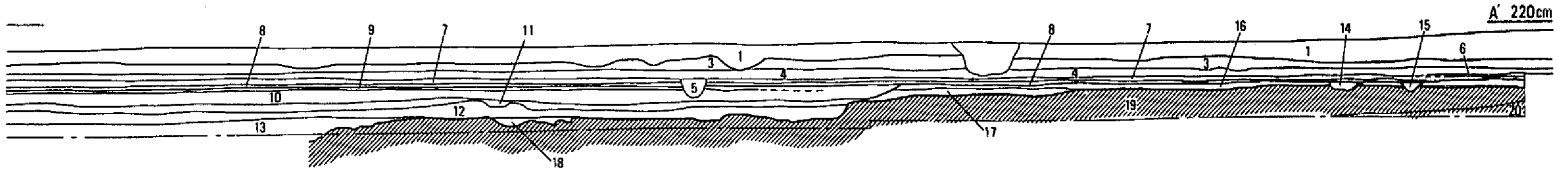
第201図　田所調査区
遺構配置（1/200）

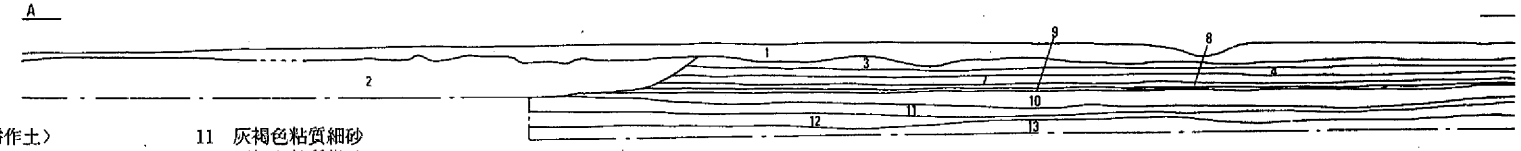


第202図　田所調査区下層遺構配置（1/200）

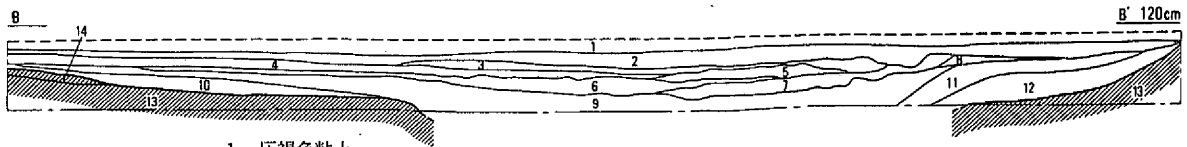


第203図　溝24～26断面（1/30）

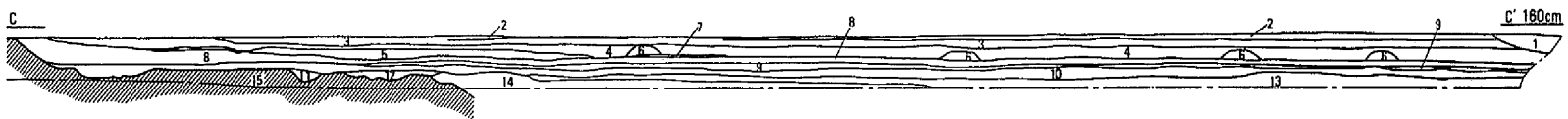




1　黄灰色粘質細砂〈耕作土〉
2　褐灰色粘質土〈溝〉
3　暗灰色粘質土
4　褐灰色粘質土
5　灰黄色粘性粗砂
6　黒褐色粘質土
7　暗灰色粘質微砂〈中世〉
8　灰褐色粘質微砂〈中世〉
9　灰黄色粘質土〈中世〉
10　灰黄色粘質土〈微高地の落ち込み部〉
11　灰褐色粘質細砂
12　灰褐色粘質微砂
13　暗灰褐色粘質微砂
14　灰褐色粘質微砂〈溝〉
15　灰褐色粘質微砂〈溝〉
16　黄褐灰色粘質細砂〈古墳包含層〉
17　黄褐灰色粘質微砂〈弥生包含層〉
18　黒灰色粘質土〈溝26〉
19　褐灰色粘質細砂
20　黄褐灰色粘質細砂



1　灰褐色粘土
2　灰褐色粘質微砂
3　暗灰褐色粘質細砂
4　灰褐色粘質細砂
5　暗灰色粘質細砂
6　灰褐色粘質微砂
7　暗灰褐色粘質細砂
8　褐灰色粘質細砂
9　灰色粘質粗砂
10　暗灰色粘質微砂
11　暗灰褐色粘質細砂
12　暗青灰色粘質微砂
13　暗青灰色粘質粗砂〈地山〉



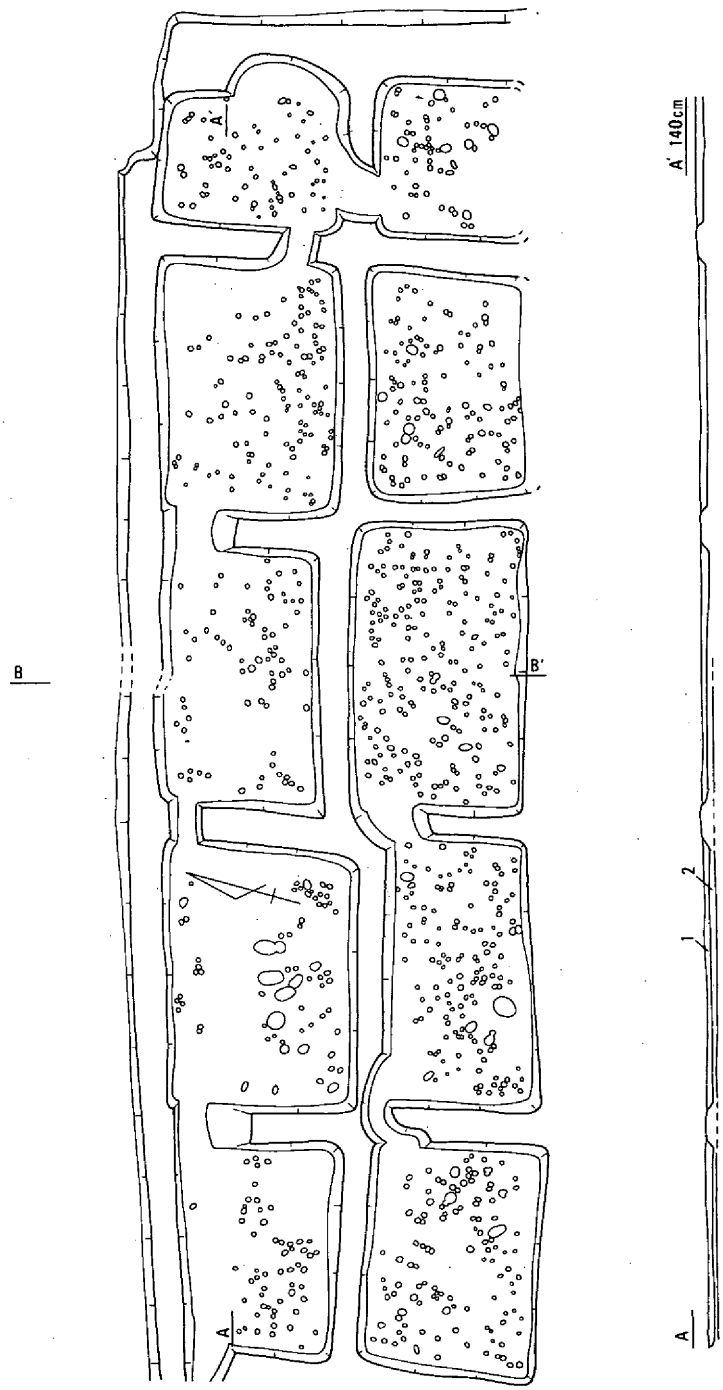
1　褐灰色粘質土〈溝〉
2　暗褐灰色粘質土（Mn含）
3　暗灰色粘質土
4　暗褐灰色粘質土（Mn含）〈古墳水田層〉
5　暗褐灰色粘質微砂
6　暗褐灰色粘質土〈畦畔〉
7　暗灰褐色粘質土
8　灰褐色粘質土（Mn含）
9　暗褐灰色粘質土〈弥生水田層〉
10　褐灰色粘質土〈弥生水田層〉
11　暗灰色粘質土（Fe含）
12　黒灰色粘質土〈溝26〉
13　暗褐灰色粘質土
14　暗灰色粘質土

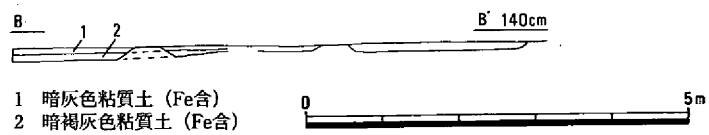
第204図　田所調査区北壁（上）・中央（中）・南壁（下）断面（1/100）

れより北側は、上層に溜まりがあったせいでもあるが、畦畔を確認できなかった。今回の調査区のすぐ北側に位置する過去２回の調査区には、水田が検出されなかったことなどを考えれば、この北辺の畦畔が水田自体の最北端になるのかもしれない。最も東にある畦畔は、他の畦畔より広く、幅が95cm前後を測る。この畦畔より東へ進むとすぐ微高地にあたってしまうことを考えると、ここが水田自体の東端になる可能性が高い。つまり今回の調査では、水田の北東端を発見したのであって、本来水田は調査区より南西方向にのびるものと思われる。他の畦畔は、幅が50～70cmで、高さは10～15cmになり、法量的には北辺の畦畔と変わりがない。また８か所で、畦畔が切れる所がある。

この水田は、一面が３～3.5×２m前後になる小区画水田で、今回の調査区内では10面を確認した。水田面の標高は、東側で120cm、西側で110cmを測り、東側が高くなる。おそらく東側から西側へ水を流したのであろう。また稲株の跡も確認しており、１㎡あたり多い所で28個、少ない所14個、平均で21個と百間川の遺跡群などと比べるとかなり低い数値である。

遺物には、畦畔から須恵器の杯蓋**1054**が出土しており、ＴＫ209になる。この水田自体、弥生時代の微高地とは角度が一致せず、むしろ東側にある古墳時代の溝に向きが近いことから、古墳時代後期のものになる可能性が高い。　（小林）

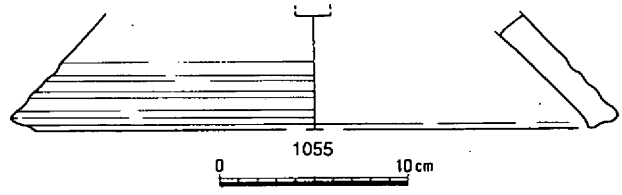




第205図　水田（1/100）・出土遺物（1/4）

下層水田（第206図）

前述した水田の畦畔をはずした下層に、もう１層水田面を確認した。第204図（下）の第９・10層がそれに相当する。この水田の範囲は、東側では微高地の落ち込み部分まで続いていたようで、西側は前述の水田と同じく近世以降の溝によって切られる。この水田層の標高は、東側で110cmで、西側で102cmになり、やはり東側が高くなる。この水田層の東側にある溝24が、当時水路として使用されていたと推測され、水路に近い側の標高が高くなるのは必然であろう。調査区の北側に溜まりがあったため、その地点での確認は困難であったが、第204図（上）の12層は同じ水田層になるかもしれない。そうなればこの下層水田は、微高地落ち込み部の西側全てに広がることになる。この水田層は丹念に掘り下げたが、畦畔などは確認できなかった。ただし土壌分析の結果、僅かに稲が検出され、水田層であることを確認した。出土遺物としては、**1055**があり、弥・後・Ⅱの器台脚部である。おそらく水田層自体の時期も、弥・後・Ⅱまで下ることが予想される。（小林）



第206図　下層水田出土遺物（1/4）

溝24（第203図・図版14－２）

溝24は、調査区東側部の南側に位置する。南東方向から北西方向に流れ、最終的には微高地の落ち込み部に到達し、それ以上は伸びない。幅は70cm前後で、深さは確認面から30cmを測り、断面形状はⅢ形である。この溝24は、下層水田の水路になると思われ、東側にある西鬼川市調査区の溝13辺りを水源にしていたのであろう。時期は弥生後期の範疇になる。（小林）

溝25（第203図・図版14－２）

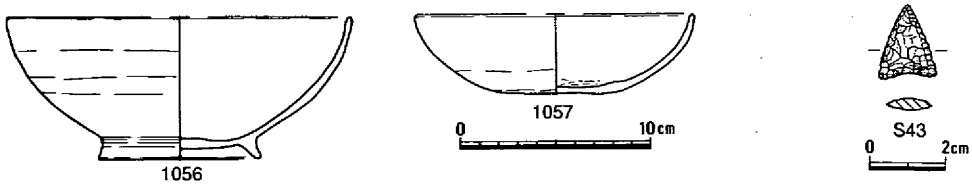
溝25は、微高地の落ち込み部のすぐ西側に位置する。この溝25は下層水田と同一位置にあり、層位的にも２つを分けることが困難であった。ただ水田層が、ほぼ水平の体積をしているのに対し、溝25周辺は溝状の窪みをもっていた。おそらく、下層水田に伴う水利施設であろう。（小林）

溝26（第203図・図版14－２）

溝26は、調査区の中央部よりやや東側に位置する。調査区内では、北側から南側に向かって直線的に南流したものと思われる。この溝は下層水田の更に下から検出した。溝の幅は、北側で123cm、南側で145cmを測り、溝の底は標高90cm前後になる。断面形状はⅢ形を呈する。遺物は出土しないが、時期は弥生後期でも古い方になるであろう。（小林）

微高地の落ち込み部（第207図）

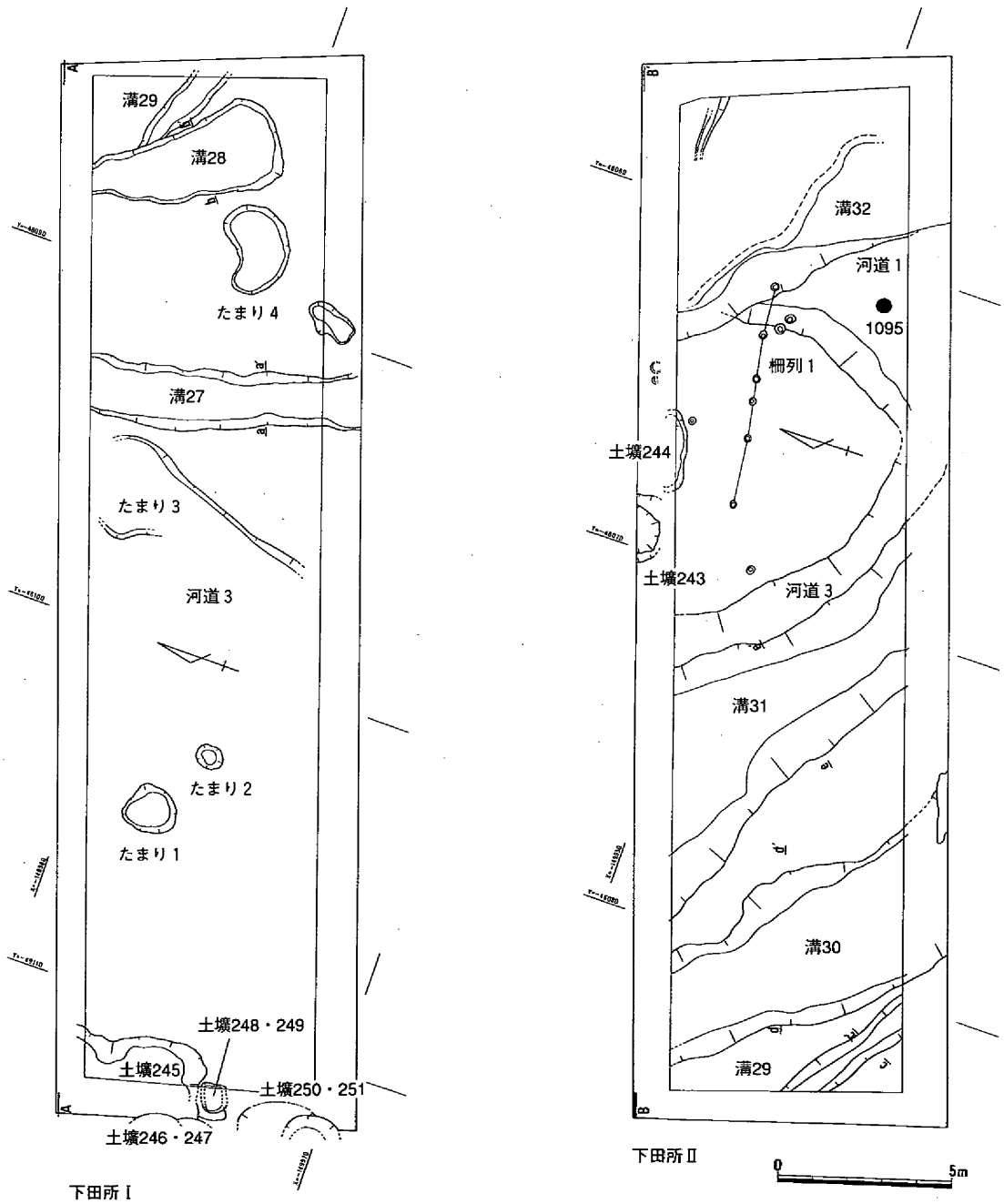
微高地の落ち込み部のすぐ脇に、**1056**・**1057**がそろっておいてあった。**1056**は高台付の土師質椀で、**1057**には高台が無い。別地点で**S43**があり、弥生後期の石鏃になる。



第207図　微高地落ち込み部出土遺物（1/4・1/2）

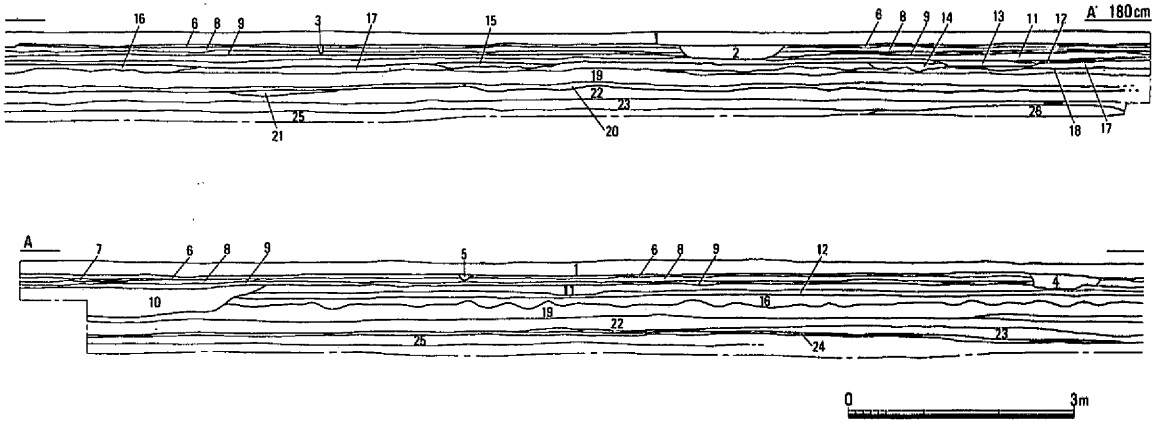
第３節　下田所調査区　調査の概要

下田所調査区は田所調査区と才の元調査区との間に位置する。調査区の規模は、東西長約59m、南北幅約10mであり、便宜的に調査区西側半分をⅠ区、東側半分をⅡ区として調査を行った。発掘調査着手前は調査区全体が水田に利用されていた。調査区の北側には山陽新幹線が東西に走っており、1973年の調査地点が北接している。過去の調査では、下田所調査区において北西に延びる微高地が確認され、弥生時代～中世の遺構が検出されるとともに、微高地西斜面を確定し、才の元微高地との間に旧河道があることを明らかにした。



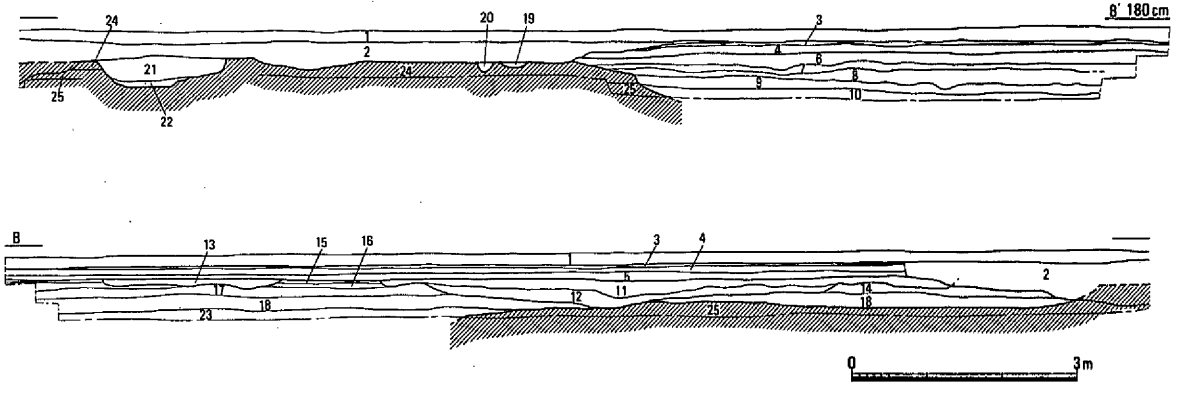
第208図　下田所調査区遺構配置（1/200）

1　褐灰色土〈耕作土〉
2　黄褐色粘質土〈暗渠〉
3　暗灰色粘質土
4　淡褐灰色土＋黄褐色ブロック
5　褐灰色土＋黄褐色粘質土
6　にぶい灰褐色土
7　灰色粘質微砂
8　黄灰色粘質土（Fe含）〈中世〉
9　灰色粘質土（Mn含）〈中世〉
10　暗灰色粘質微砂〈中世〉
11　暗灰色粘質土〈中世〉
12　暗灰褐色粘質土〈中世〉
13　黄褐色粘質土〈暗渠〉
14　黒色粘質土〈溝28〉
15　黒色粘質土〈溝27〉
16　黒褐色粘質土〈古墳〉
17　灰黄色粘質土
18　にぶい黄色粘質細砂
19　淡褐灰色粘質土
20　淡褐灰色粘質細砂
21　灰色細砂〈たわみ3〉
22　褐灰色粘質土（Fe含）
23　青灰色粘質土
24　暗褐灰色粘質土
25　暗灰色粘質土
26　灰色細砂



第209図　下田所Ⅰ北壁断面（1/100）

1　褐灰色土〈耕作土〉
2　暗灰褐色粘質土
3　にぶい灰褐色粘質土
4　黄灰色粘質土（Fe含）〈中世〉
5　灰色粘質土（Mn含）〈中世〉
6　暗褐灰色粘質土（溝32）
7　黄褐灰色粘質土（溝32）
8　黄褐色粘質土（溝32）
9　明褐灰色粗砂（溝32）
10　オリーブ灰色粘質土（溝32）
11　黒褐色粘質土（溝31）
12　暗灰色粘質土（溝31）
13　黒褐色粘質土（溝30）
14　明黄褐色粘質細砂〈旧河道〉
15　暗灰褐色粘質土〈旧河道〉
16　灰黄色粘質土〈旧河道〉
17　にぶい黄色粘質細砂（炭化物含）〈旧河道〉
18　褐灰色粘質土〈旧河道〉
19　褐灰色粘質細砂〈柱穴〉
20　褐灰色粘質細砂〈柱穴〉
21　にぶい褐色粘質細砂（Mn含）〈土壙243〉
22　灰褐色粘質微砂〈土壙243〉
23　褐灰色粘質土＋細砂〈旧河道〉
24　淡褐灰色粘質細砂（Mn含）〈微高地〉
25　淡灰色細砂〈微高地〉



第210図　下田所Ⅱ北壁断面（1/100）

今回の下田所調査区では、弥生時代のたわみ４、古墳時代の溝６条、弥生～古墳時代の河道１、中世の柵列１、中～近世の土壙９基を検出した。現耕作土直下には第209図－第８・９層に見られるように鉄分とマンガンの互層が約20cmの厚さで水平に堆積しており、東西方向の耕作痕を多数確認した。時期は出土遺物から中世～近世に比定され、当該期には調査区一帯に乾田が営まれていたと考えられる。また微高地上で中世の柵列を確認したことから、下田所微高地は中世までは存続していたと思われる。中世～近世の水田層除去後、海抜約135cmで、Ⅱ区中央部やや東寄りにおいて弥生時代後期以降の微高地を確認した。この微高地は1973年・1977年の調査でも確認されており、北へ広がりを持つ狭長な微高地と考えられる。下田所微高地は、鬼川市調査区の基盤層である黄褐色泥砂層とは異なり、淡褐灰色粘質細砂を基調としている。今回の調査では微高地がⅡ区南側で東西・南方向へ落ち込むことを確認したため、下田所微高地の南端にあたると考えられる。微高地上では、弥生時代後期の土壙１基、弥生～古墳時代の土壙１基、中世の柵列１、柱穴を検出するに止まり、住居・建物・井戸などは認められなかった。

弥生時代の遺構は、Ⅱ区中央部に微高地を確認し、調査区北端に弥・後・Ⅱの土壙243が認められるのみである。下田所微高地では、過去の調査において弥生時代中期中葉の遺構・遺物が確認されており、微高地全体としては弥生時代中期中葉以降、中世まで集落が営まれたと考えられる。微高地は調査区内において東西・南方向へ緩やかに落ち込んでおり、微高地の東・西側、南側には低位部が広がる。低位部は旧河道と考えられ、微高地南東側に位置する河道１は北東から南西方向へ流走していると思われ、対する肩口は田所調査区の東側で確認されている。また微高地南西部の低位部は後述する才の元Ⅳ区の河道３に相当する。河道３は北西から南西方向に流走しており、微高地南側において河道１と合流している。Ⅰ区全体は河道３の最深部にあたり、海抜50cmまで掘削したが、底面を確認するには至らなかった。なお、特筆すべき遺物として、河道１の北西肩口付近の底面から出土した弥生後期に比定される生漆（きうるし）入りミニチュア土器（**1095**）があげられる。

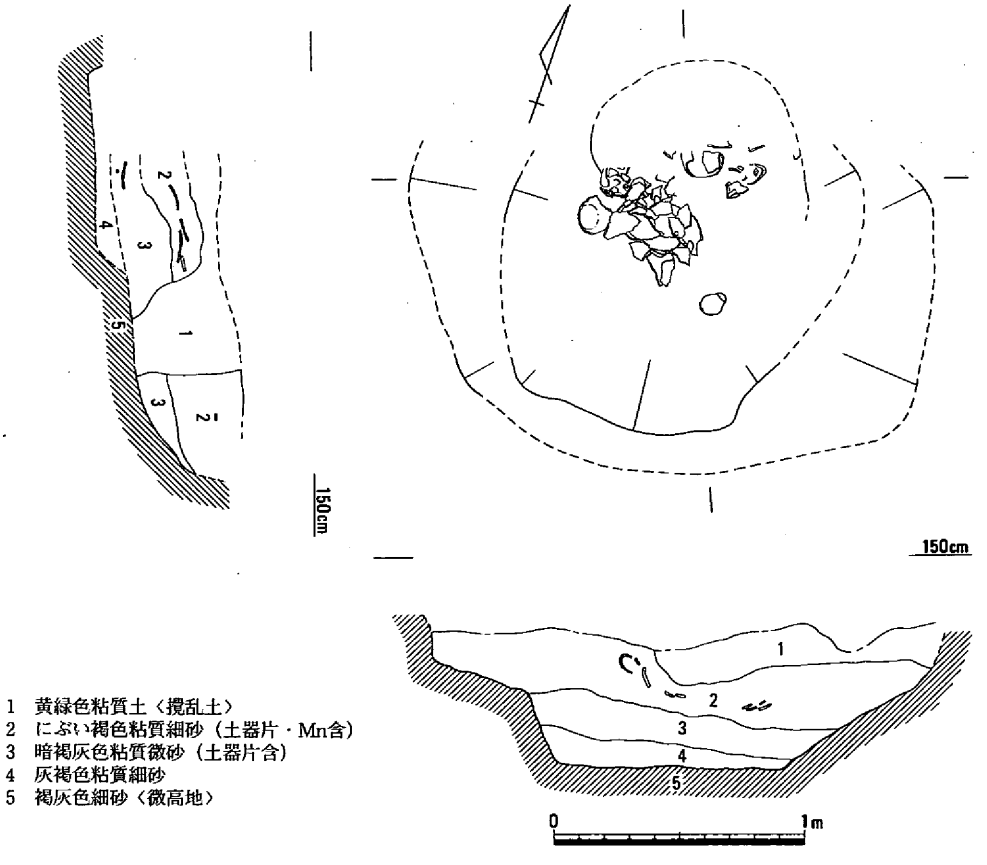
古墳時代における微高地上の遺構は、土壙244や柱穴らがその範疇に収まる程度である。微高地・低位部の輪郭は前段階を踏襲しているが、河道３の上層である第210図－第17層からは**1109**が出土しているため、河道３は古墳時代中期前葉までにほとんど埋没している。したがって河道３は古墳時代前半期までに堆積が進行していると思われる。後期以降になると、河道３の上面には、北西から南東方向に走る溝27～31が認められ、微高地の低位部上面には数条の溝が流れていたと考えられる。また河道１の上面にあたる海抜126cmにおいて、厚さ５cmの暗褐灰色粘質土が水平に堆積しているのを確認した。下田所調査区ではこの層が堆積している範囲が狭く、畦畔などを面的に確認するには至っていないため、水田層としての根拠に乏しいが、田所調査区で確認した古墳時代後期の水田層に相当する可能性も否定できない。ただし、Ⅰ区およびⅡ区西側の下田所微高地の南西部に広がる低位部では認められないため、もし田所調査区と同様に下田所調査区も水田域に利用されているならば、今回調査区の南側に水田域が展開する可能性がある。

古代の遺構は認められず、調査区のほとんどが水田に利用されるのは中世以降である。微高地上では柵列、微高地の東側では溝を検出したが、微高地以西は水田に利用されている。水田層では東西方向に耕作痕が認められたが、マンガンが凝集しているような畦畔は確認できなかった。また、近世～近代にかけてはⅠ区東端に土壙群が認められ、水田耕作に伴う土壙と考えられる。（米田）

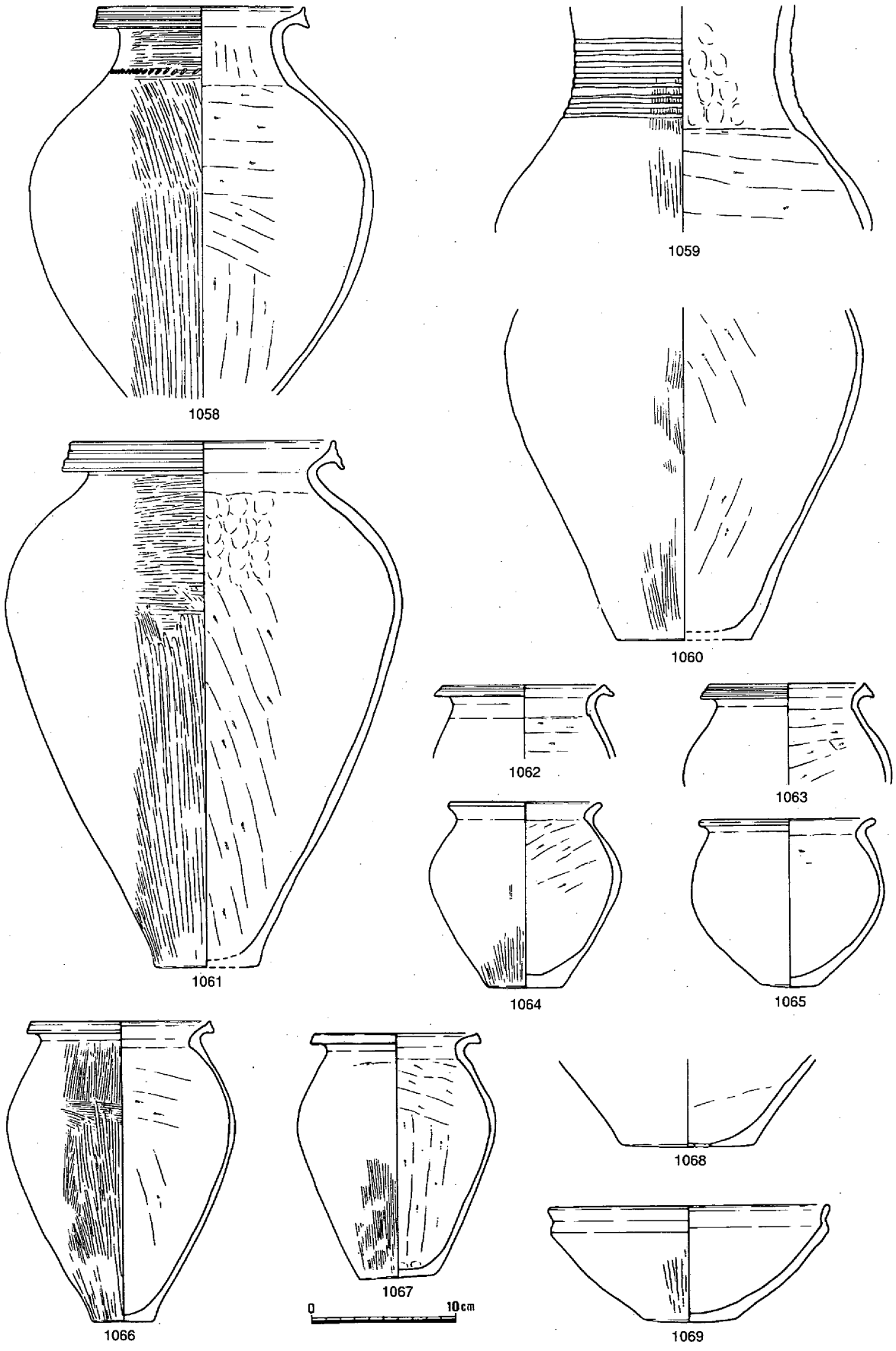
第４節　下田所調査区　弥生・古墳時代の遺構・遺物

土壙243（第211・212図、図版15－２・38－１）

Ⅱ区北端中央部、微高地上のやや西寄りで検出した。遺構の大半は山陽新幹線南側沿いの側溝設置による攪乱が著しい。平面北半部は調査区外のため検出できなかったが、平面は不整円形で、径約200cmである。断面は逆台形で、底面は平坦であり、深さは検出面から約53cmを測る。遺物は第２層から比較的多くの土器が出土した。**1058**は壺で、口縁部に凹線文、頸端部に刺突文を施す。外面はヘラミガキで調整されているが、部位によってミガキの方向が異なる。また内面には頸部に絞り目、胴部にヘラケズリが認められる。**1059**の長頸壺は、外面にハケメの後ヘラミガキによって調整した後、頸部に８条のヘラ描沈線文を施す。内面の調整は、頸部は指頭圧痕、胴部上半はヘラケズリによっている。**1060**～**1067**は甕である。**1061**は口縁部に３条の凹線文を施している。外面調整は、胴部上半は横方向、下半は縦方向のヘラミガキである。内面は胴部下半までヘラケズリが及んでおり、肩部は指頭圧痕を残す。**1062**・**1063**は口縁部に２～３条の凹線文を施し、内面は頸部までヘラケズリされている。**1064**・**1065**は口縁部の形状が「く」の字を呈し、口縁端部に丸みを持たしている。**1066**・**1067**は口縁部の凹線文が退化し、内面ヘラケズリが部位によって方向を異にしながら頸部まで達している。**1066**の胴部下半外面には縦方向のヘラミガキが施されている。**1068**の底部には、ほぼ中央に穿孔が行われている。**1069**の鉢は口縁部を屈曲させ、端部を丸くおさめている。時期は弥・後・Ⅱと考えられる。



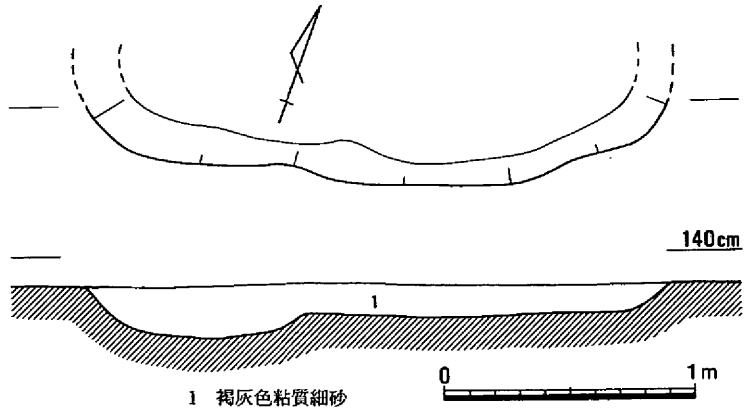
第211図　土壙243（1/30）



第212図　土壙243出土遺物（1/4）

土壙244（第213図）

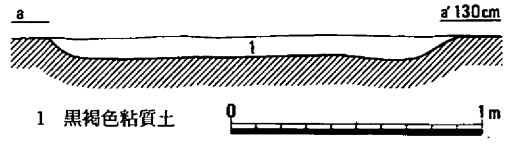
Ⅱ区北端中央部、微高地上の中央で検出した。平面は楕円形を呈し、北半部は調査区北壁土層断面において確認できなかったため、調査区内に設けた側溝内で土壙の北半部がおさまると思われる。長軸幅は約220cm、深さは最深部で約13cmである。遺物は出土していないが、埋土から弥生後期～古墳時代の範疇か。　（米田）



第213図　土壙244（1/30）

溝27（第214図）

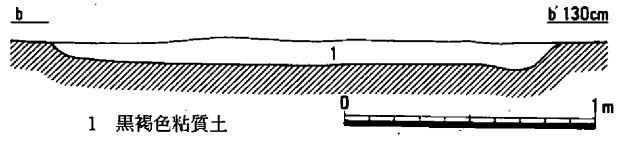
Ⅰ区中央やや東寄りに位置し、南北に流走する。幅は約1.6mである。埋土は単層であり、深さは約10cmと浅い。遺物は出土していないが、後述する河道3の上面で検出しており、溝31と埋土を同じくするため、時期は古墳時代後期と思われる。　（米田）



第214図　溝27土層断面（1/30）

溝28（第215図）

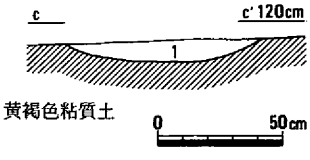
Ⅰ区東側において南北方向に検出したが、溝の南端は調査区内で止まる。幅は約2.1m、深さは約10cmである。溝の北側は幅狭く、南側が幅広で丸く収まるため、たまり状を呈する。出土遺物は皆無であるが、溝27と同様に古墳時代後期と考えられる。　（米田）



第215図　溝28土層断面（1/30）

溝29（第216図）

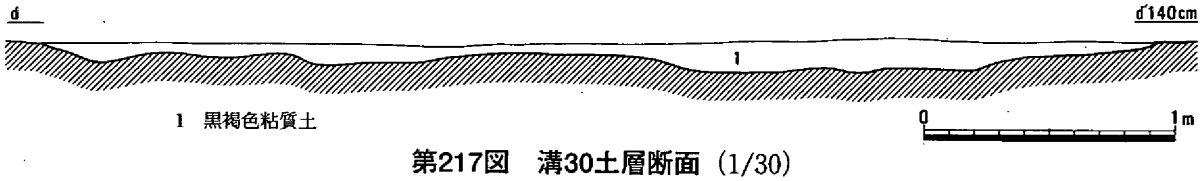
Ⅰ区東端からⅡ区西端にかけて位置する。幅は約74cm、深さは約10cmである。北西から南東へ流走している。溝29は溝28に切られており、その北端については特定することができなかった。遺物は出土していないが、層位関係から古墳時代前期から後期の範疇に収まる。　（米田）



第216図　溝29土層断面（1/30）

溝30（第217・218図）

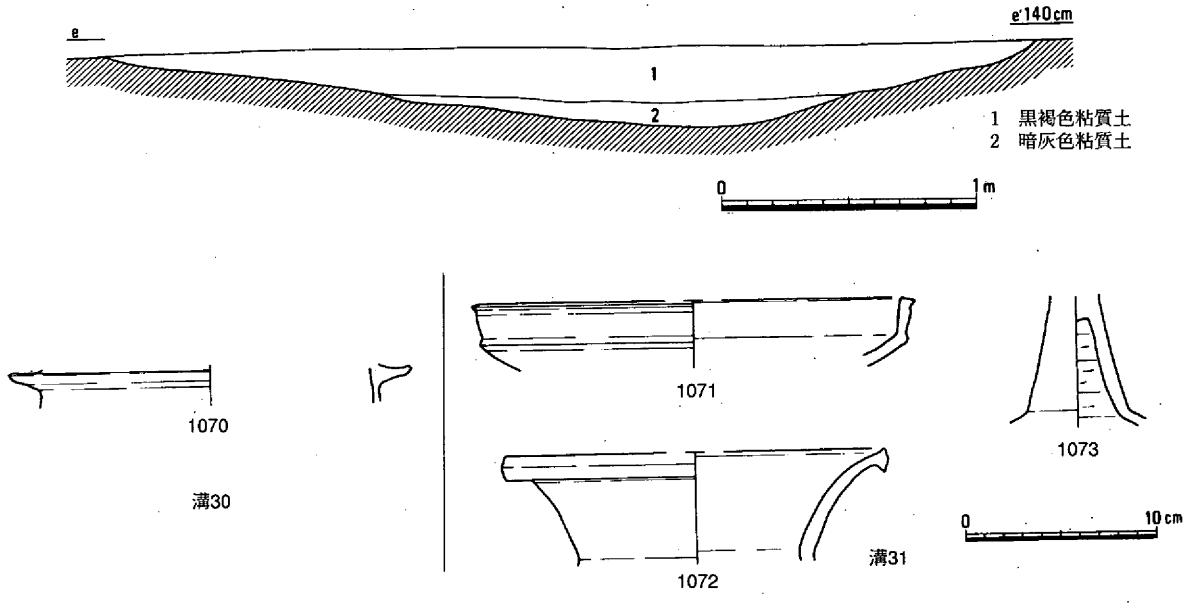
Ⅱ区西側において、北西から南東方向に延びていた。幅は約4.4m、深さは14cmである。底面は起伏が著しい。溝両肩の北側は比較的緩やかであるが、南側は急に立ち上がる。出土遺物は極めて少なく、図示し得たのは1070の室町時代後半の瓦器釜のみであるが、溝上面で出土したため、遺構の時期を特定することは容易にできない。ただ、埋土は溝27・28と同様である。　（米田）



第217図　溝30土層断面（1/30）

溝31（第218図）

Ⅱ区中央部、微高地の西端部に沿うように、北西から南東にかけて検出した。幅約3.7m、最深部までは約32cmある。土層は二層に分層にでき、第２層から**1071**の弥・後・Ⅰの高杯、第１層から**1072**の６世紀前半の須恵器甕、**1073**の古・前・Ⅱの高杯が出土している。溝31の第１層は前述した溝27・28・30の埋土とも類似しており、これらの溝は北西から南東に流走している。したがって、溝31はもとより、溝27・28・30も古墳時代後期前半の同時期に流れていた可能性がある。　（米田）



第218図　溝31土層断面（1/30）・溝30・31出土遺物（1/4）

たまり１

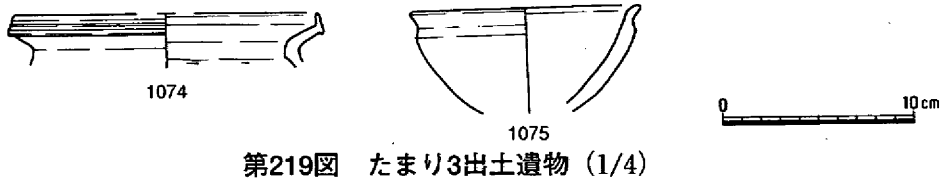
Ⅰ区西側で検出した。検出面は第209図ー第22層上面である。平面は不整円形、断面は椀形を呈する。径は約1.3m、深さは約17cmである。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は出土していないが、層序から弥生時代後期と思われる。　（米田）

たまり２

Ⅰ区西側のたまり１に南東接隣に位置する。検出面はたまり１と同様である。平面は円形、断面は逆台形を呈する。径は70cmである。埋土は黄灰色粘質土で、最深部までは約22cmある。出土遺物は皆無であるが、検出面の層序を考慮すると、弥生時代後期に収まるのではなかろうか。　（米田）

たまり３（第219図）

Ⅰ区中央部において、北東から南西方向にかけて確認した。平面形は北側が膨らみ、南側が窄まり、全体は調査区内で収まると思われる。規模は推定で長軸約７m、最大幅 3.5m、深さは約10cmである。埋土は第209図ー第21層の灰色細砂であり、比較的多くの土器片が出土したが、図示し得たものは少ない。**1074**は甕の口縁部で、２条の凹線文を施しており、内面調整は頸部までヘラケズリが及んでいる。**1075**の鉢は口縁部が屈曲してわずかに外反する。時期は弥・後・Ⅲに比定できる。　（米田）



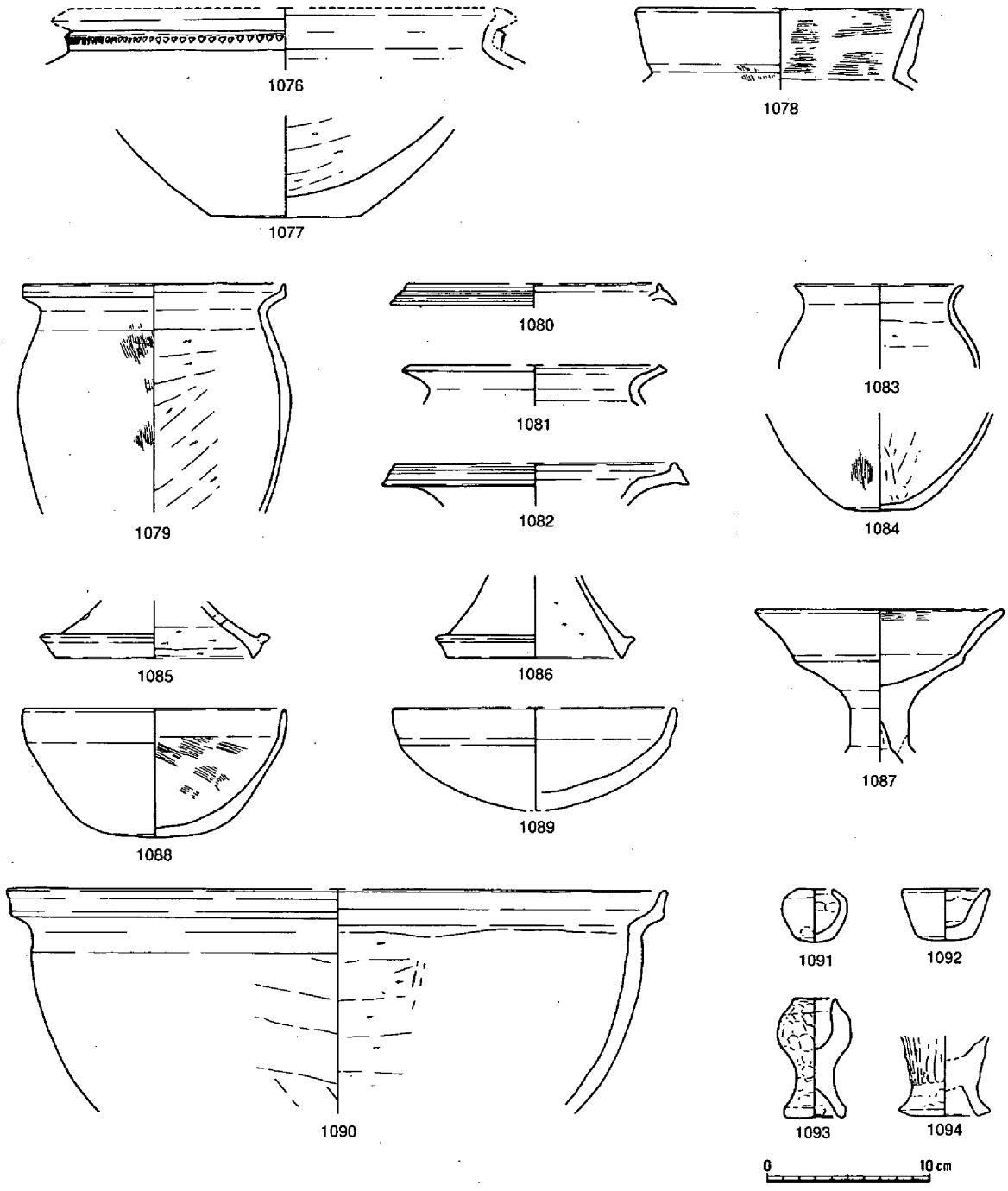
第219図　たまり3出土遺物（1/4）

たまり４

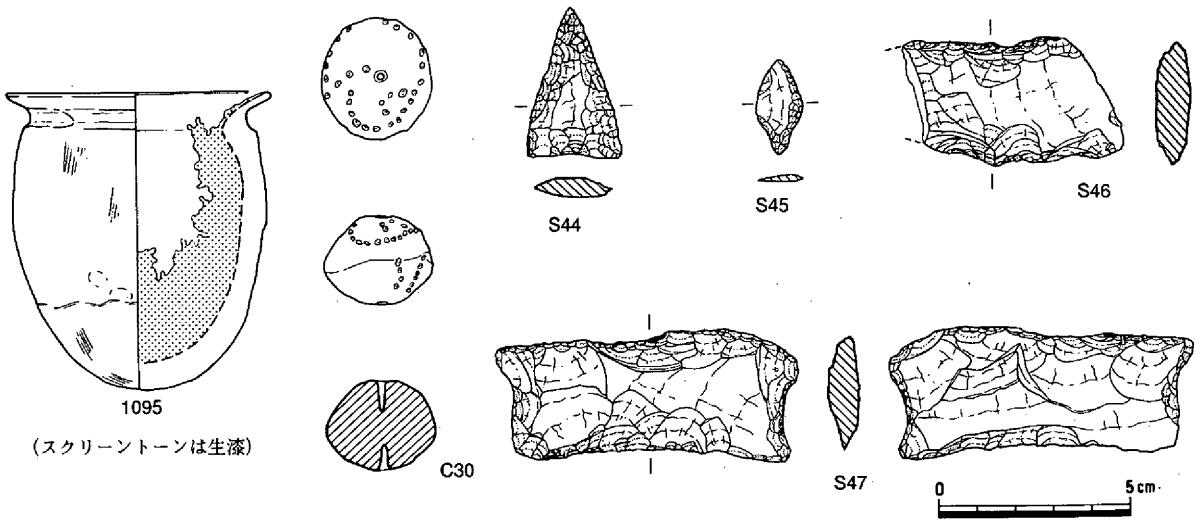
Ⅰ区東側において、第209図－第22層上面で検出した。平面は北側が屈曲する不整楕円形を呈する。径は約227cmである。断面は逆台形で、最深部は約16cmである。埋土は黄灰色粘質土であり、遺物は出土していない。時期を特定することが容易でないが、検出面から弥生時代後期と思われる。

河道１　（第220・221図、巻頭１－５、図版15－３・37－３・41－２）

河道１はⅡ区の中央部で確認した微高地の東側を北東から南西方向に流走している。大部分が溝32に切られている。微高地南端で下田所Ⅰ・才の元Ⅳ区河道３との切り合い関係については、調査区内では検討することができなかった。



第220図　河道１出土遺物①（1/4）



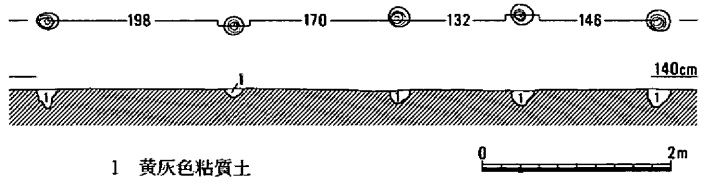
第221図　河道１出土遺物②（1/2）

Ⅱ区微高地が南東方向に落ち込む部分にあたる河道１の底面から漆入り土器の**1095**が出土し、その周辺からは比較的まとまりをもった状態で**1077**・**1079**・**1083**・**1084**・**1088**・**1090**・**1093**などが出土した。**1076**は弥・後・Ⅰの甕の口縁部である。頸部に突帯を張り付け、その上方に逆三角形の刺突文を施しており、古相を示す。**1077**は壺の底部である。**1078**は古・前・Ⅲの甕の口縁部であり、内面はハケメによって調整されている。**1079**は弥・後・Ⅳの甕であり、口縁端部をわずかに上方へ拡張している。外面調整はハケメ、頸部以下の内面はヘラケズリである。**1080**は甕の口縁部である。**1081**は弥・後・Ⅲの甕であり、口縁端部をわずかに上方内側へ摘み上げている。**1082**は弥・後・Ⅱの壺である。**1083**は古・前・Ⅰの壺、**1084**は弥・後・Ⅳの甕の底部である。**1085**・**1086**は弥・後・Ⅰの高杯の脚部である。**1087**は高杯であり、弥・後・Ⅳと思われる。**1088**・**1089**は鉢である。**1088**は内面をハケメで調整しており、弥・後・Ⅳに比定される。**1090**は弥・後・Ⅳの鉢であり、内面は頸部までヘラケズリが行われている。**1091**・**1092**は鉢形、**1093**は高杯形のミニチュア土器である。いずれも手捏ねによって整形されており、内外面には指頭圧痕が顕著に見られる。**1094**は弥・後・Ⅱの製塩土器であり、外面はヘラケズリが施されている。**1095**は口径7.1cm、器高7.9cmで、完形に近いミニチュア土器である。土器を含めた重量は229.64ｇである。形態は丸底を呈し、口縁部が外反する。外面にはハケメ・指頭圧痕がわずかに残る。アミ目で表現した部分は、内面に黒褐色を呈する有機物が充填されている部分である。内容物の上方中央部には径３cm、深さ３cm程度の空間があるが、ほぼ内面一杯に詰まっている。外表は多孔質で、シワが随所に認められる。内容物の自然科学的分析は、漆器文化財科学研究所の四柳嘉章氏に依頼し、「分析は、フーリエ変換赤外分光高度計で１mgを採取し、ＫＢＲ法で行った。その結果、全体の波形と表面観察を総合して、生漆（きうるし）と判断される。全体として漆の成分が良好に残っている貴重な資料である」との報告を受けている。**C30**は土玉であり、算盤玉状を呈する。穿孔は焼成前に両面から穿たれているが、貫通していない。表面には螺旋状に不規則な刺突文が施されている。**S44**は平基式の石鏃、**S45**は石錐である。**S46**は上下端面のみ二次調整が行われており、打製石庖丁が欠損した可能性がある。**S47**は打製石包丁であり、両側に抉りが認められ、刃部の調整は背部ほど丁寧に行われていない。**S44**～**S47**はいずれもサヌカイト製である。　（米田）

第５節　下田所調査区　中・近世の遺構・遺物

柵列１（第222図）

Ⅱ区微高地の中央部やや東寄りに位置する。５つの柱穴が東西方向に直線的に並んでいる。間隔は約130～200cmと一定ではない。建物を構成する桁とも思われたが、梁にあたる柱穴などが確認できなかったため、その可能性は低い。主軸や埋土、溝32に切られていることから、中世と思われる。（米田）



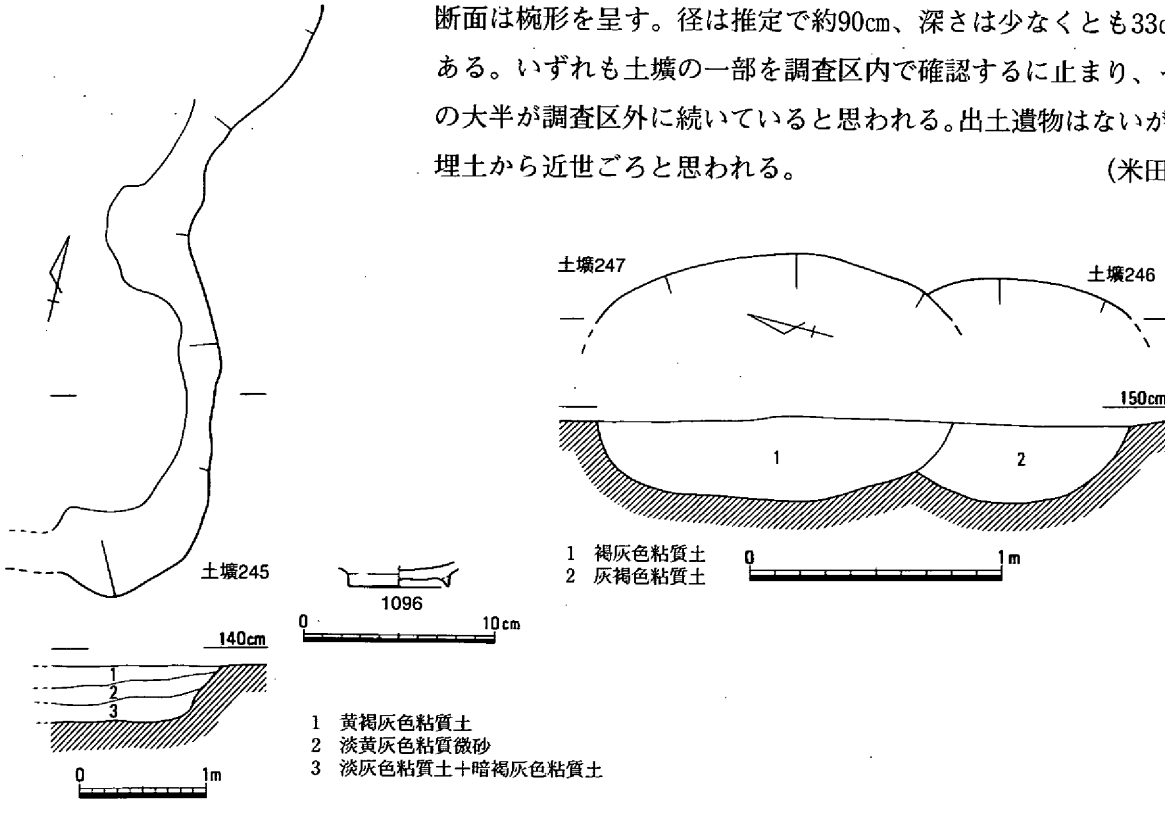
第222図　柵列1（1/80）

土壙245（第223図）

Ⅰ区北西隅において検出した。調査区内では全体の４分の１程度しか検出していないが、平面は不整長方形を呈すると思われ、池状遺構が示唆される。**1096**は中世の土師質土器の高台付椀である。Ⅰ区西端で確認した土壙245～249のうち、土層の切り合い関係では土壙245が最も古い。　（米田）

土壙246・247（第223図）

Ⅰ区西端中央部に位置する。土壙247は土壙246を切っており、さらに両土壙は前述した土壙245を切っている。土壙246は平面は円形、断面は椀形を呈すると思われる。径は約140cm、深さは約31cm以上ある。土壙247は土壙246より若干径が大きく、平面は円形、断面は椀形を呈す。径は推定で約90cm、深さは少なくとも33cmある。いずれも土壙の一部を調査区内で確認するに止まり、その大半が調査区外に続いていると思われる。出土遺物はないが、埋土から近世ごろと思われる。　（米田）



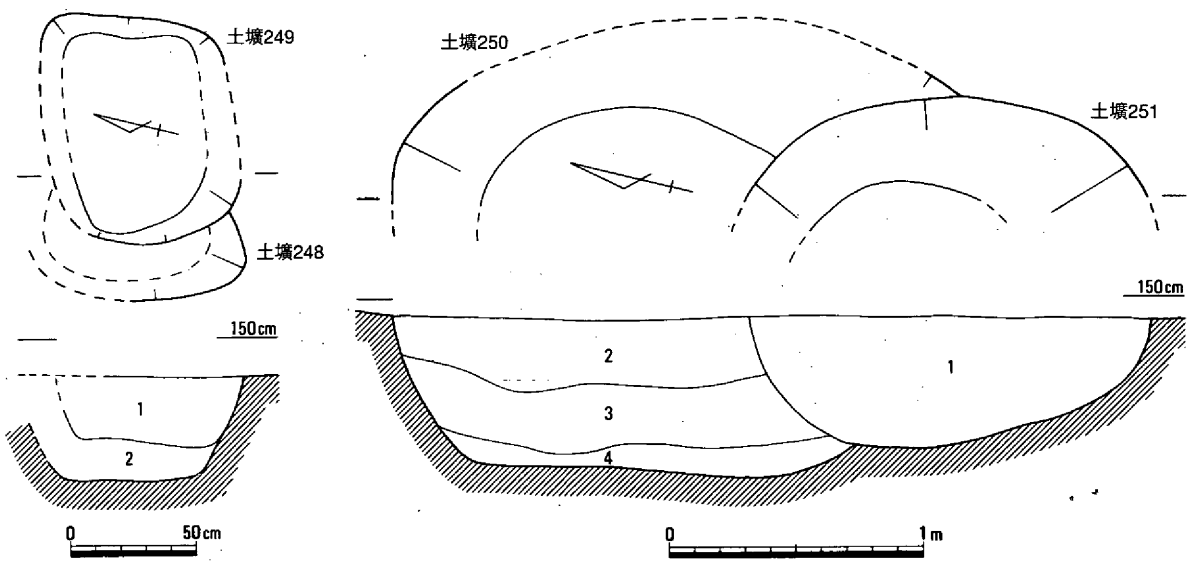
第223図　土壙245（1/60）**・246・247**（1/30）

土壙248・249（第224図）

Ⅰ区西端中央部に位置する。土壙248は土壙249に切られており、平面は台形、断面は逆台形を呈すると思われる。幅は長辺で約80cm、深さは約40cmである。土壙249は平面は一辺約65cmの正方形、断面は逆台形で最深部までは約27cmある。両土壙はほぼ同一規模であり、埋土には黄褐色土のブロックをまだらに含んでいた。また、両者ともに前述した土壙245を切っている。いずれの土壙からも出土遺物はないが、埋土や切り合い関係から、近世の範疇に収まると考えられる。（米田）

土壙250・251（第224図）

Ⅰ区西端南側において確認した。土壙250の平面は楕円形を呈し、断面は逆台形に近く、土壙251に切られている。径は推定で約210cm、深さは約60cmである。埋土は３層に分層でき、黄褐色土のブロックをまだらに含んでいる。土壙251の平面は径約165cmの円形、断面は椀形で、深さは約50cmである。規模は土壙250の方がひとまわり大きい。両者ともに調査区内において土壙全体の半分を検出したのみである。遺物は出土していないが、埋土や層序関係から時期は近世ごろと思われる。（米田）



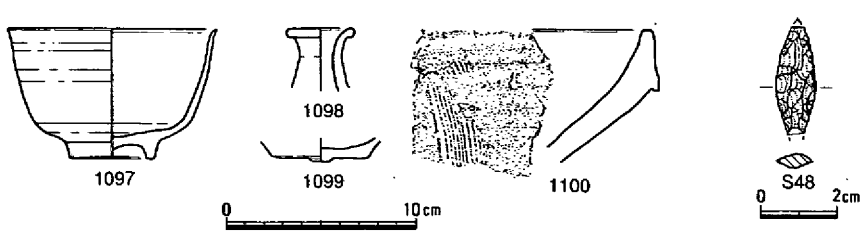
1　灰褐色粘質土＋黄褐色ブロック
2　暗褐色粘質土＋黄褐色ブロック

1　褐灰色粘質土＋褐色ブロック
2　灰褐色粘質土＋黄褐色ブロック
3　褐灰色粘質土＋黄褐色ブロック
4　暗褐灰色粘質土＋黄褐色ブロック

第224図　土壙248～251（1/30）

溝32（第225図）

Ⅱ区東端において溝の肩口を確認した。溝は北西から南東方向に流走している。上層からは**1097**の磁器椀、**1098**の陶器瓶、**1099**の土師質皿、第210図－第10層からは15世紀の備前焼擂鉢**1100**が出土した。また、**S48**のサヌカイト製石鏃も混入している。時期は中～近世で、1973年調査の下田所地区Ｄ－３に続く可能性がある。（米田）



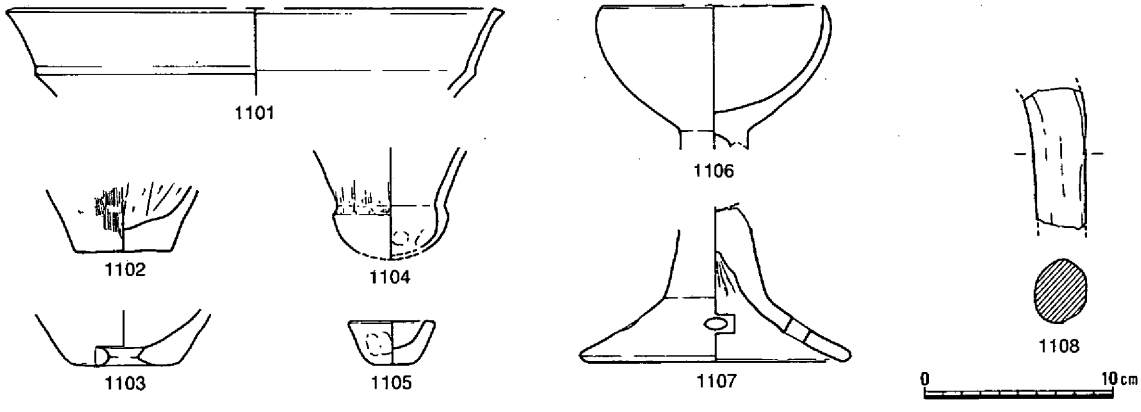
第225図　溝32出土遺物（1/4・1/2）

遺構に伴わない遺物（第226・227図、図版37－4）

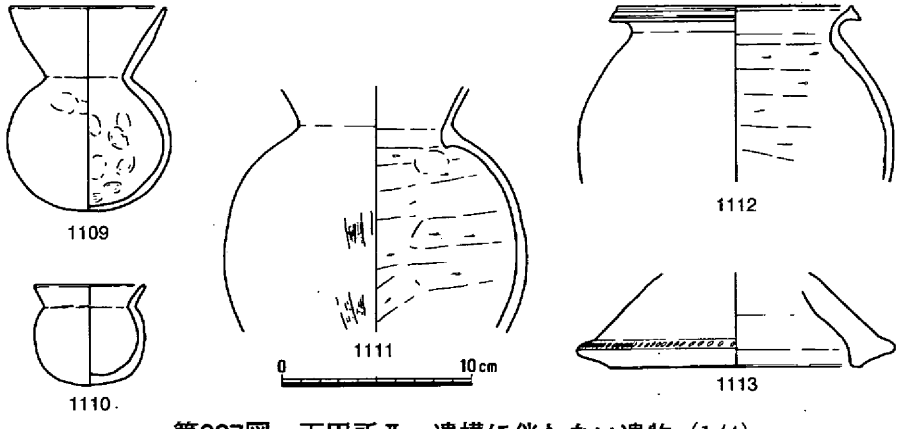
Ⅰ～Ⅱ区にかけて河道3の堆積土や中～近世の包含層から弥生土器、土師器などが出土している。

1101は古・前・Ⅱの壺の口縁部であり、複合口縁の端部をわずかに外方へ摘んでいる。**1102**は弥生土器の底部であり、外面はハケメ、内面はヘラケズリによって調整されている。**1103**は弥生土器の底部であり、底部の中央に焼成後穿孔している。**1104**は土師器の小型丸底壺であり、外面は指頭圧痕後に縦方向のハケメ、内面底部には指頭圧痕が残る。口縁部は外に大きく開き、体部に対して口縁部が発達している。**1105**は鉢形のミニチュア土器であり、手捏ねによって整形されており、外面に指頭圧痕が残る。**1106**は弥生土器の高杯であり、弥・後・Ⅳに属すると思われる。杯部は深く、椀形を呈す。**1107**は古・前・Ⅰの高杯であり、円孔が4方向に施されている。脚部内面には絞り目が認められる。**1108**は中世土鍋の脚部であり、体部との接合部よりやや下部に相当すると思われる。全体的に丁寧なナデによって調整されている。

1109は古墳時代中期前葉の小型丸底壺であり、胴部の内外面には指頭圧痕が明瞭に残る。口縁部は外方に延び、体部は球形に近い。体部高に比べて口縁高がやや短い。**1110**は壺形のミニチュア土器であり、器壁は薄く仕上げられている。外面の頸部には爪先の痕跡が見受けられる。古墳時代中期のものか。**1111**は土師器の甕であり、外面調整は縦方向のハケメ、内面は頸部まで横方向のヘラケズリが行われている。**1112**は弥・後・Ⅱの甕であり、わずかに下方へ拡張した口縁部には2条の凹線文を施し、内面は頸部まで横方向のヘラケズリによって調整されている。**1113**は弥生土器の高杯の脚部と思われ、外面下端には列点文が施してある。（米田）



第226図　下田所Ⅰ　遺構に伴わない遺物（1/4）



第227図　下田所Ⅱ　遺構に伴わない遺物（1/4）

第５章　才の元微高地の調査

第１節　調査の概要

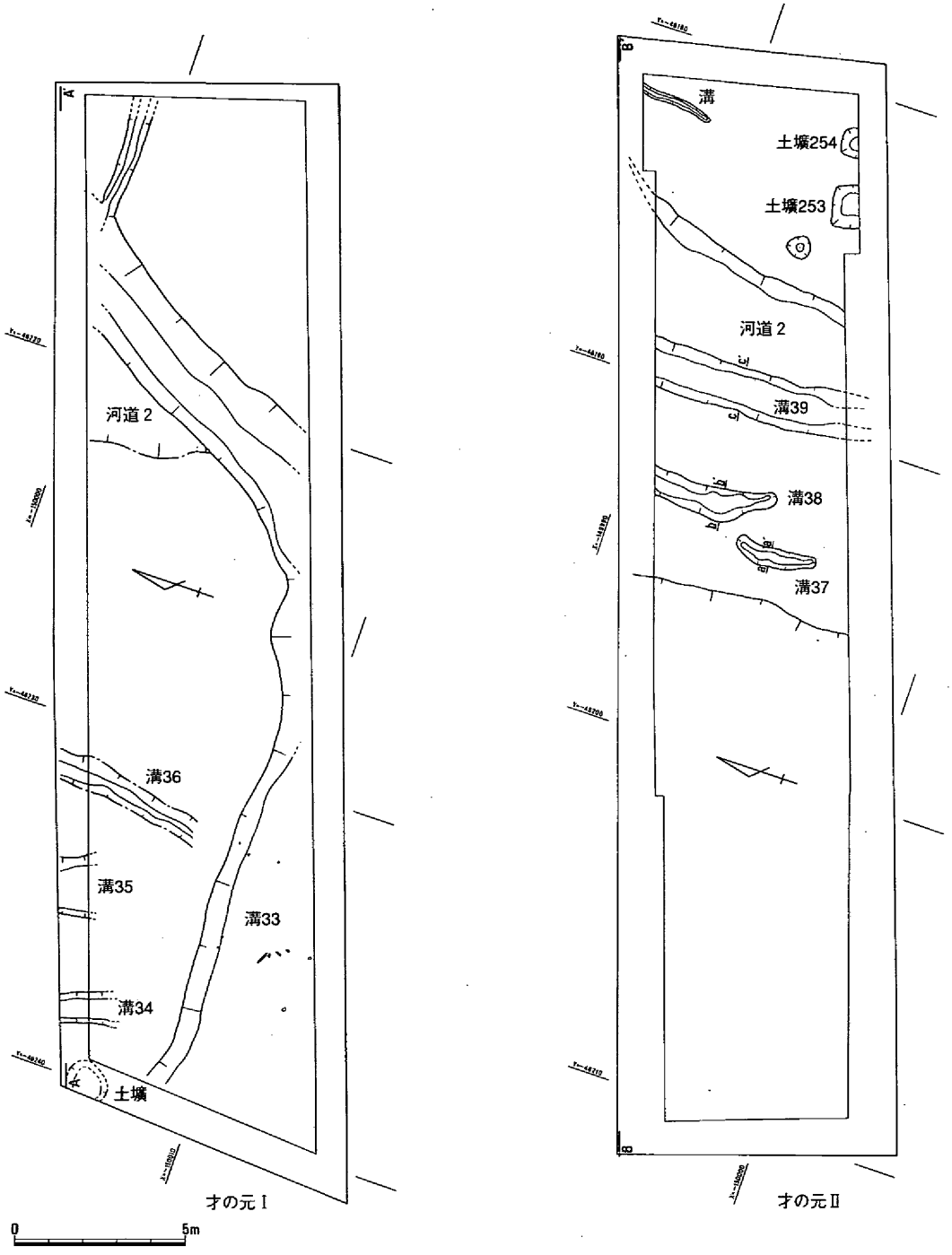
才の元調査区は下田所調査区と五反田調査区との間に位置する。調査区の東限は下田所調査区との境を為す道路、西限は五反田調査区との境に流れる「ねんね川」であり、調査区の規模は東西長約134m、南北幅約10mであり、才の元調査区は非常に狭長である。そこで今回は調査区を便宜的に４区画に分け、西端からⅠ区と定め、東端のⅣ区まで調査を行った。調査区の北隣には現在の山陽新幹線が東西に走っており、1973年の調査区がⅠ区とⅢ区に北接している。Ⅲ区北接部分にあたる1973年の調査区では、南へ広がりをもつ才の元微高地の北端にあたると想定し、弥生時代後期前半以降の遺構が認められた。またⅠ区北側にあたる才の元調査区西端の調査地点において、弥生時代後期以降の南北へ走る溝が数条検出された。1977年にはさらにその北側の調査が行われ、溝を検出するとともに、微高地が東へ落ち込むことが確認された。以上、過去２回の調査では、才の元調査区の部分的な調査が行われたに過ぎないが、才の元調査区の２箇所に微高地が存在することを明らかにした。今回の調査は、狭長ながら、才の元調査区の東西全域にわたるため、微高地と低位部との関係を具体的に確認することが可能であるように思われた。

才の元調査区は、現耕作土直下には第233図－第８～12層に見られるように鉄分・マンガン沈着層が約20cmの厚さで互層に堆積しており、中～近世に比定される乾田の水田層と考えられる。堆積はほぼ水平で、東西方向の耕作痕が多数認められた。その水田層を除去した後、Ⅰ区では第229図－第６層の古墳時代後期以降の包含層、第16層の弥生時代後期以降の包含層があり、Ⅰ区北西部では海抜約75cm前後において淡褐灰色粘質土を基調とする微高地を確認した。この微高地は1977年に才の元調査区西端で確認された微高地に続くと思われ、調査区内で微高地が南へ緩やかに下る傾斜を有していたため、Ⅰ区北西部は微高地の南端にあたると考えられる。また、Ⅱ区以東では中～近世水田層除去後、海抜約130cm前後において灰褐色粘質細砂を基調する微高地をⅡ区東側、Ⅲ区、Ⅳ区西側で確認した。1973年に調査された才の元調査区中央部に広がる微高地がⅡ区東側では北西方向に、Ⅳ区西側では北東方向に微高地が落ち込んでいくことを確認したため、Ⅱ区東側からⅢ区、Ⅳ区西側にかけては、才の元微高地の北端付近にあたることが想定される。才の元微高地は南へ広がると思われ、現在の才の元集落が当該期の集落の中心を踏襲していると考えられる。才の元調査区では全体として、弥生後期の溝３条、古墳時代初頭の土壙１基、井戸４基、弥生～古墳時代の溝４条・河道２、中世の溝２条、近世の土壙３基、柱穴などを検出したが、住居・建物などは認められなかった。

弥生時代の遺構は比較的少なく、Ⅰ区北西部の微高地上では後期の溝を３条検出したのみである。またⅠ区南西部の溝33では、弥生後期から古墳後期の範疇に収まる杭列が検出され、木製品なども出土した。Ⅲ区を中心に広がる微高地上では当該期の遺構は認められなかったが、1973年の調査では後期の井戸が検出されている。Ⅰ区東部からⅡ区西部にかけては、北西から南西方向に延びる低位部があり、旧河道と考えられる。また同様に、Ⅳ区東部から下田所Ⅱ区中央部にかけて、北西から南西方

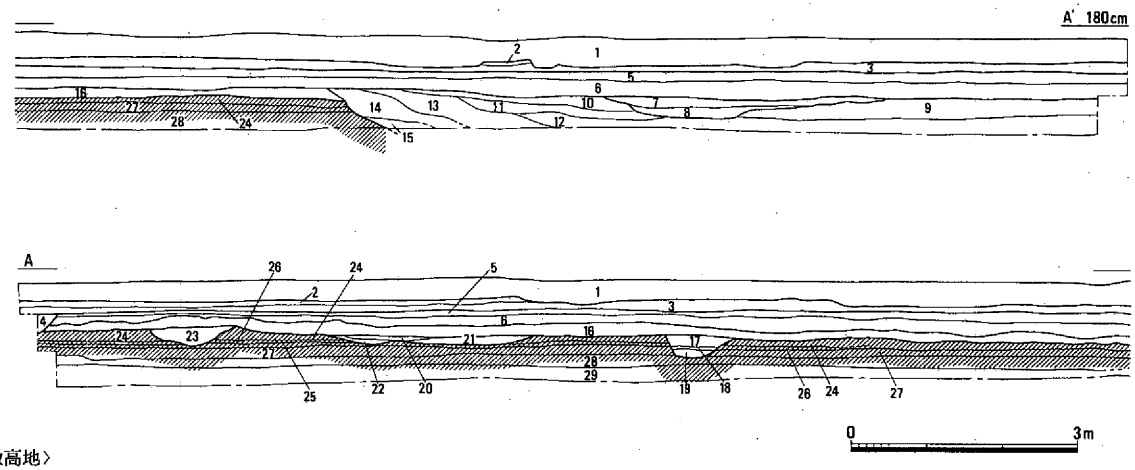
向に低位部を確認し、河道２・３はⅢ区北側の微高地北端において分流したものと考えられる。

古墳時代の遺構として、Ⅲ区・Ⅳ区東部の微高地において土壙１基、井戸４基が認められた。微高地上で検出された柱穴もおそらく当該期にあたるものと思われるが、建物を構成するには至っていない。また住居も認められなかった。今回の調査区は微高地北端付近に位置するため、集落の縁辺部に井戸を配置し、居住域と給水地点を空間的に分化していることが想定される。Ⅲ区を中心とする才の元微高地は集落の縁辺部と思われるため、遺構密度は高くない。しかしながら、弥生時代の遺構が少ない才の元微高地において古墳時代の遺構が比較的多く認められることは、当該期に集落範囲が次第に拡散する傾向にあることを表していると考えられる。



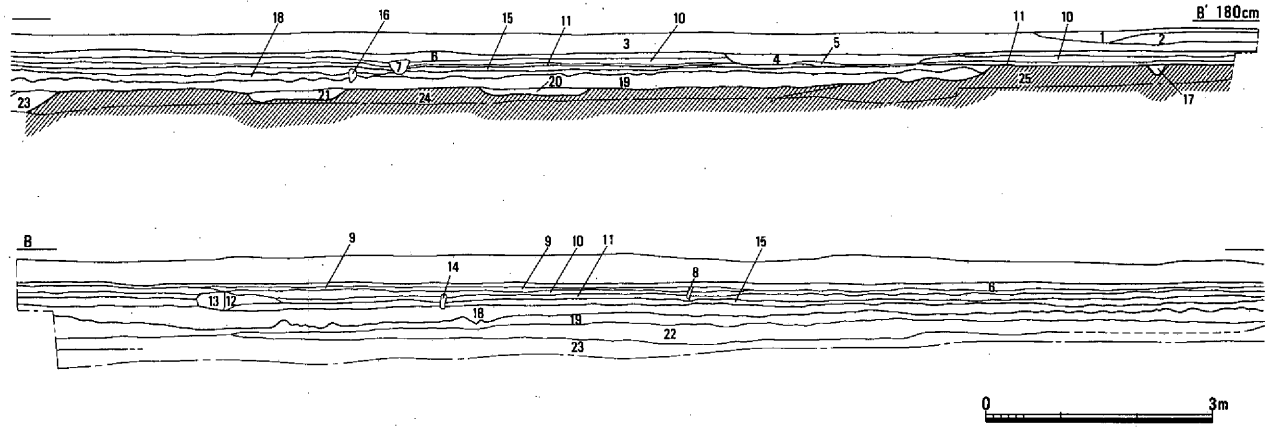
第228図　才の元Ⅰ・Ⅱ調査区遺構配置（1/200）

1　褐灰色土〈耕作土〉
2　明褐灰色粘質土
3　明黄褐色粘質土（Fe含）＋黄灰色粘質土
4　暗黄褐色粘質土〈近世？土壙〉
5　灰褐色粘質土〈中世〉
6　暗褐灰色粘質土〈古墳後～古代〉
7　暗灰色粘質土〈溝33上層〉
8　暗褐灰色粘質微砂〈溝33下層〉
9　褐灰色粘質土（Fe含）
10　黄灰色粘質微砂
11　灰褐色粘質土（Fe含）＋淡灰色粘質細砂（Mn含）
12　暗灰色粘質細砂
13　青灰色粘質微砂
14　暗灰褐色粘質土＋細砂
15　暗黄灰色粘質細砂
16　黄褐灰色粘質細砂
17　明黄褐色粘質細砂〈溝36〉
18　黄褐色粘質細砂〈溝36〉
19　暗青灰粘質細砂〈溝36〉
20　淡黄褐色粘質細砂
21　明黄褐色粘質細砂
22　淡黄灰色細砂
23　暗黄褐灰色粘質細砂〈溝34〉
24　暗灰黄色粘質土〈微高地〉
25　褐灰色粘質土〈微高地〉
26　黄灰色粘質土〈微高地〉
27　淡褐灰色粘質土〈微高地〉
28　暗褐灰色粘質土（しまり有り）〈微高地〉
29　暗褐灰色粘質土（粘性有り）〈微高地〉



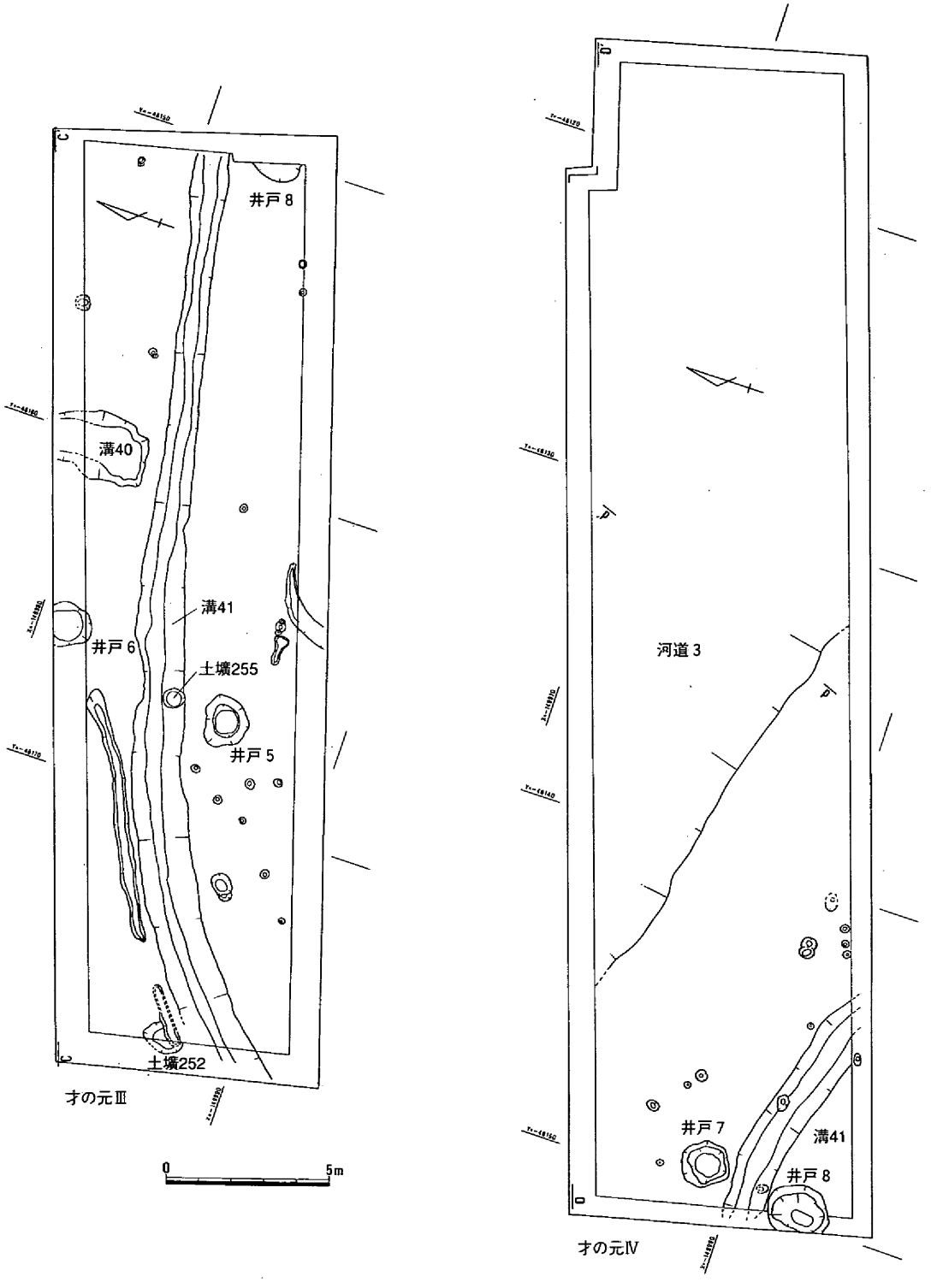
第229図　才の元Ⅰ調査区北壁断面（1/100）

1　淡褐灰色土
2　黒褐色土
3　褐灰色土〈耕作土〉
4　灰褐色粘質土（貝殻含）〈撹乱〉
5　明黄褐色粘質土
6　にぶい灰褐色粘質土
7　暗青灰色粘質土＋緑灰色砂利
8　灰色粘質土
9　黄灰色粘質土（Fe含）
10　黄褐色粘質土（Fe含）〈中世〉
11　黄灰色粘質土＋細砂（Mn含）〈中世〉
12　黄灰色粘質土（粘性弱い）
13　黄灰色粘質土（粘性強い）
14　灰色粘質土
15　灰褐色粘質土
16　灰色粘質土
17　灰褐色粘質細砂〈溝〉
18　黒褐色粘質土〈古墳〉
19　淡褐灰色粘質土〈古墳〉
20　暗褐灰色粘質土〈溝39〉
21　褐灰色粘質土〈溝38〉
22　灰黄褐色粘質土
23　暗灰色粘質土＋微砂
24　暗褐灰色粘質土
25　褐灰色粘質土〈微高地〉



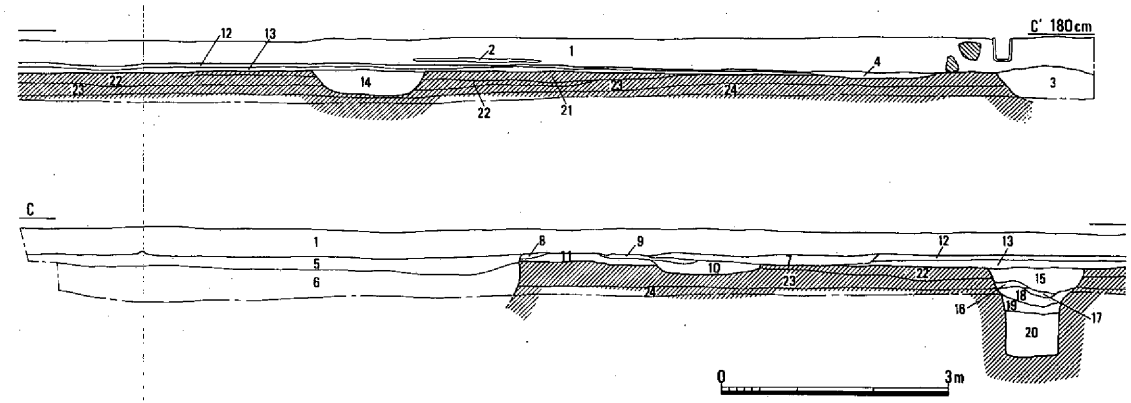
第230図　才の元Ⅱ調査区北壁断面（1/100）

古代の遺構は皆無に等しく、中～近世は調査区のほぼ全体が水田に利用されていると考えられる。水田層は鉄分とマンガンの互層であり、東西方向の耕作痕が認められた。またⅢ区では、中世の溝41が、調査前の現代の水田畦畔に沿うように検出され、中世以降の微地形が現代まで踏襲されている例と言える。さらにⅢ区中央部では、近世の土壙墓と思われる土壙255が検出された。　(米田)



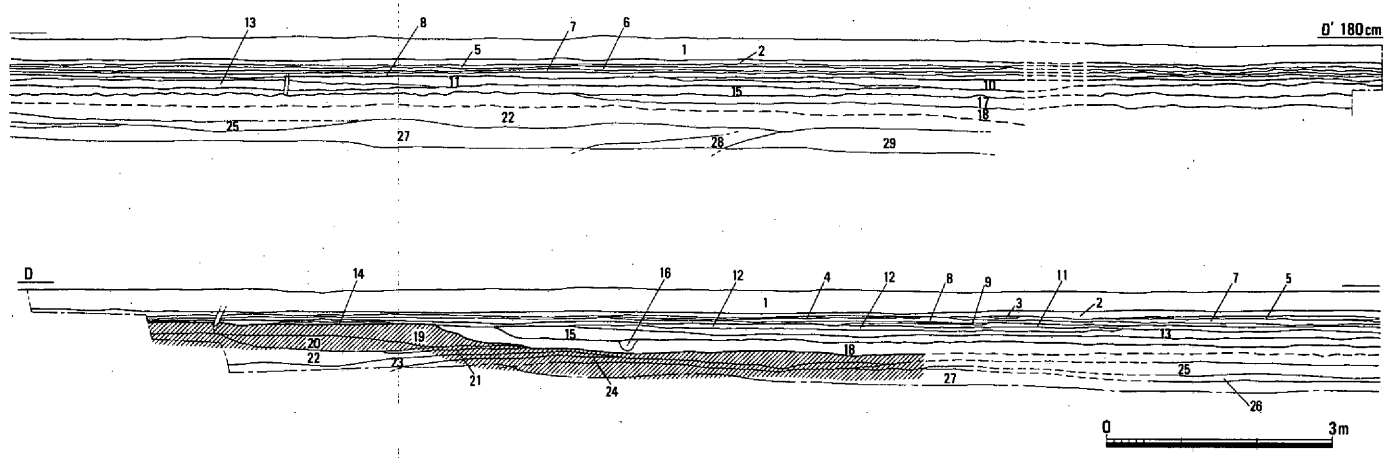
第231図　才の元Ⅲ・Ⅳ調査区遺構配置（1/200）

1　褐灰色土〈耕作土〉
2　灰白色細砂（貝殻含）〈撹乱〉
3　灰白色細砂（貝殻含）〈撹乱〉
4　灰白色細砂（貝殻含）〈撹乱〉
5　灰白色細砂（貝殻含）〈撹乱〉
6　緑灰色細砂〈撹乱〉
7　灰白色細砂（貝殻含）〈撹乱〉
8　緑灰色粘質土〈撹乱〉
9　暗緑灰色粘質土〈撹乱〉
10　暗緑褐色粘質土〈撹乱〉
11　緑褐灰色粘質土〈撹乱〉
12　明黄褐色粘質土
13　灰褐色細砂〈中世水田層〉
14　褐灰色粘質土〈溝40〉
15　暗灰色粘質細砂〈井戸6〉
16　明黄褐色粘質細砂〈井戸6〉
17　褐灰色細砂〈井戸6〉
18　灰褐色粘質細砂〈井戸6〉
19　淡黄灰色細砂〈井戸6〉
20　暗青灰色粘質微砂〈井戸6〉
21　淡褐黄灰色粘質細砂〈微高地〉
22　明褐色粘質細砂〈微高地〉
23　灰褐色粘質細砂〈微高地〉
24　灰黄色細砂〈微高地〉



第232図　才の元Ⅲ調査区北壁断面（1/100）

1　灰色粘性砂質土〈耕作土〉
2　浅黄色細砂（Fe含）
3　明褐灰色粘質微砂
4　橙色微砂（Fe含）
5　灰色粘質微砂（Mn含）
6　明褐色粘質微砂（Fe含）
7　にぶい黄橙色粘性微砂
8　明褐灰色細砂（Mn含）〈中世〉
9　にぶい黄橙色微砂（Fe含）〈中世〉
10　灰褐色粘質土〈中世〉
11　浅黄橙色粘質微砂（Mn含）〈中世〉
12　黄灰色微砂（Mn含）〈中世〉
13　灰黄色微砂
14　にぶい橙色微砂
15　黒褐色粘質土（土器片含）〈古墳〉
16　褐灰色粘質微砂
17　褐灰色粘質土
18　淡褐灰色粘質土
19　灰褐色砂質土〈微高地〉
20　灰色微砂
21　灰色粘質土
22　灰黄色細砂
23　灰褐色粗砂（礫含）
24　灰黄色粗砂
25　オリーブ灰色粘質細砂
26　暗オリーブ灰色粘質細砂
27　濃灰色粘質微砂
28　濃灰色粘質土
29　暗灰色粘質土

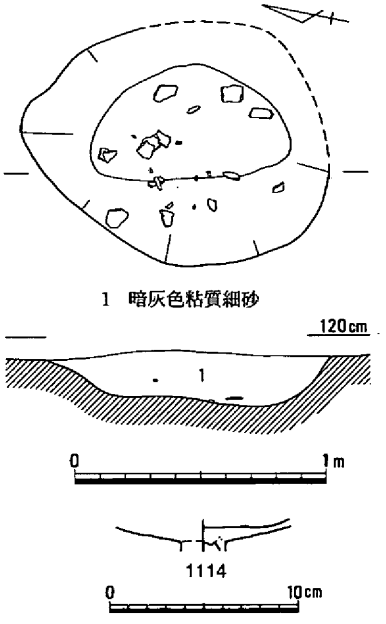


第233図　才の元Ⅳ調査区北壁断面（1/100）

第２節　弥生・古墳時代の遺構・遺物

土壙252（第234図、図版17－３）

Ⅲ区西端中央部北寄りに位置する。平面は不整楕円形、断面は逆台形を呈する。長軸の径は約124cm、深さは約20cmである。底面は緩やかな凹凸があり、南側ほど深い。埋土は暗灰色粘質細砂であり、底面付近には少なからず土器片が散在していた。**1114**は高杯の杯部下半である。このほかにも土器片が認められたが、いずれも細片で図示し得なかった。時期は古・前・Ⅰに属すると思われる。（米田）

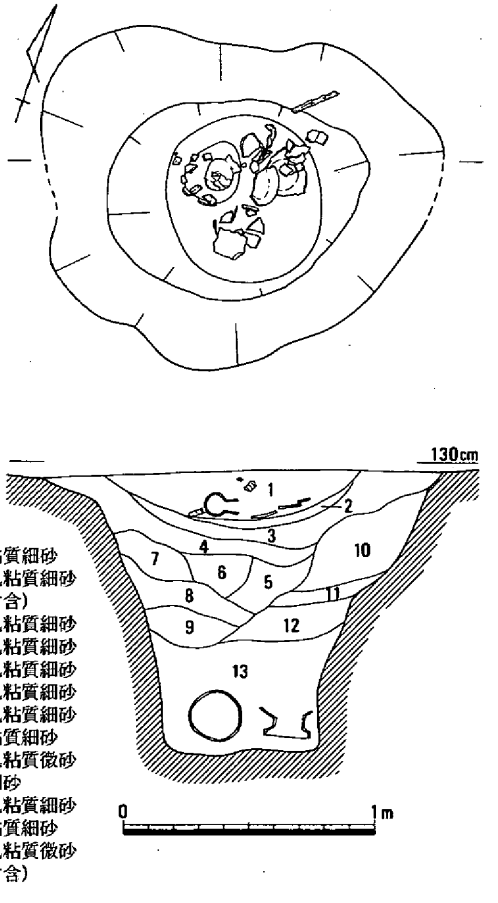


第234図　土壙252（1/30）**・出土遺物**（1/4）

井戸５（第235・236図、図版18－１・２、37－５）

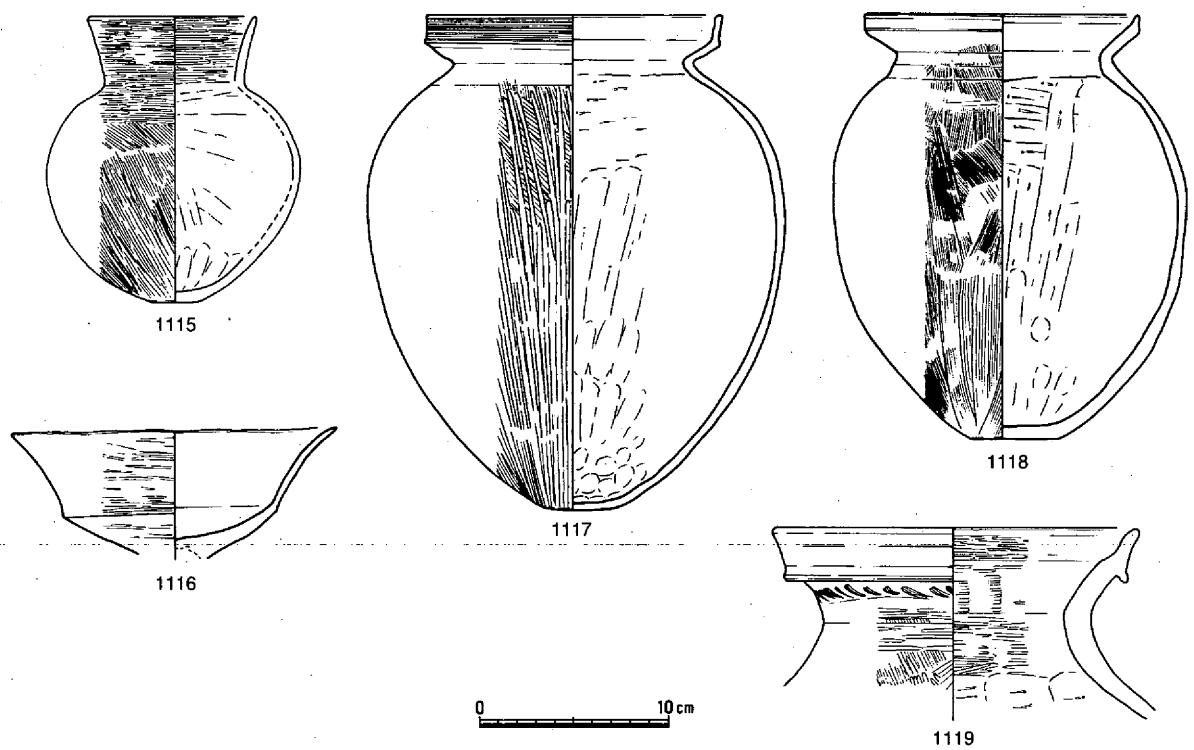
Ⅲ区中央部において検出した。平面は凹凸が著しく、不整楕円形を呈している。規模は長軸160cm、短軸128cm、深さは112cmである。断面は逆台形であるが、上部はテラス状の緩斜面があるため、外方へ大きく開く。底面は平坦で、海抜高16cmであり、基盤層下の海抜20cm以下に堆積する青灰色砂利層まで達している。埋土の堆積状況によると、第13層から第10層まで埋まることによって井戸としての機能を失った後、第９層まで掘り返している可能性があり、最終的に上層凹部に土器を廃棄したと考えられる。遺物は、上層の第１～２層から**1115**・**1116**などの土器片が出土し、最下層の第13層からは完形の**1117**・**1118**、**1119**が検出された。

1115は、ほぼ完形で出土した直口壺であり、口縁部はやや外へ開き、胴部は球形に近く、底部はわずかに平底を止めている。胎土は精製されており、外面には丹塗りが施してあり、明赤褐色を呈す。外面全体および口縁部の内面は細かなヘラミガキによって調整されており、非常に丁寧な作りである。内面の胴部はヘラケズリ、底部は指頭圧痕が残る。**1116**の高杯は、精製された胎土を使用しており、口縁部は外反して延びる。外面には細かいヘラミガキが施されている。**1117**は甕で、口縁部が垂直に立ち上がり、８条の櫛描沈線文を施している。胴部は肩が張っており、倒卵形を呈す。底部はわずかに平底を残している。外面はハケメの後、縦方向のヘラミガキによって調整され



第235図　井戸5（1/30）

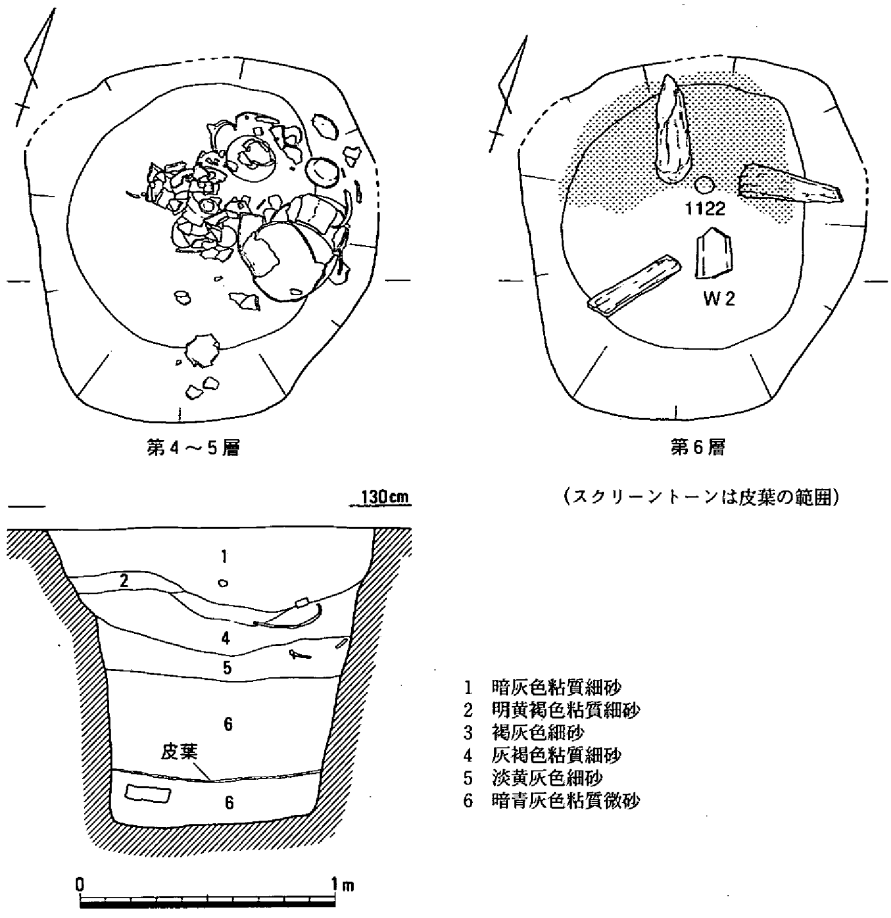
ており、全体に煤が付着している。また内面は、底部は指頭圧痕、胴部は２方向のヘラケズリが行われている。**1118**の甕は、外反した口縁部の端部をわずかに上方へ拡張している。胴部下半がわずかに膨らんでいるが、底部は平底である。外面の調整はハケメであり、全体に煤が付着している。内面の底部は指頭圧痕、頸部下はヘラケズリによって調整されている。**1119**は壺の肩部から口縁部にかけての部位である。頸部には刺突文を施している。内面の頸部よりやや上は全体に摩滅しており、ヘラケズリの痕跡が確認しづらい部分がある。肩部以下に相当する土器片は全く出土しておらず、出土した肩部より上の部位は完形で、欠損部が面一であるため、故意に壺の上半部を欠損させ、器台として転用していた可能性がある。上層・最下層から出土したそれぞれの遺物は時期的な差違はほとんど認められず、時期は古・前・Ⅰに比定できよう。　（米田）



第236図　井戸５出土遺物（1/4）

井戸６（第237～239図、巻頭１－３、図版18－３、38－２、39－１、41－４）

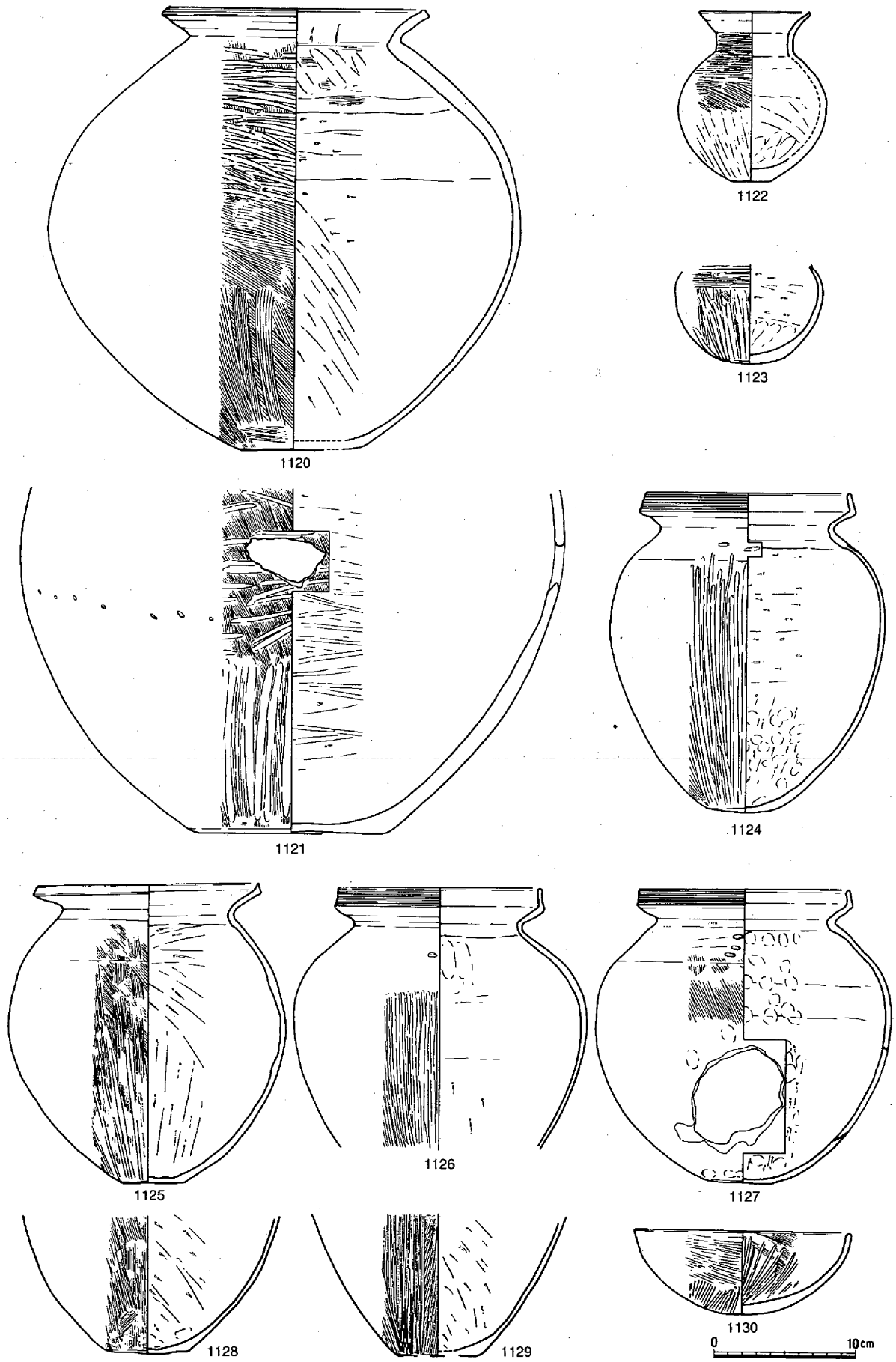
Ⅲ区北側中央部、前述した井戸５の北側5.6mに位置する。平面形は不整円形で、径は約130cm、深さは121cmを測る。底面は海抜－5cmで、基盤層下の海抜20cm以下の青灰色砂利層まで達す。断面は、上部はやや外方へ開くが、第４層以下はほぼ垂直に落ち、逆台形を呈す。底部は平坦である。第４～５層から多くの土器が出土し、東側では完形に近い土器も認められたが、中央部の多くは破損した状態であった。また第６層では加工痕のある木を３箇所で確認した。北側と東側の木はそれぞれ長さ約44cm、径13cmの丸木で、壁面に沿うように斜めに立った状態であった。南側の木は長さ37cm、径９cmの角材で水平に置かれていた。さらに第６層半ばの北側では、草の皮葉が北側壁面に張り付いているような状態で認められた。皮葉は東側の木の上、北側の木の下に存在し、格子状に編み込まれているようにも見受けられたが、網籠状製品であるという判断には至らなかった。遺物は第４～５層から**1120・1121・1123～1135**、第６層の底面から**1122**の壺、**W２**の木製作業台が出土した。



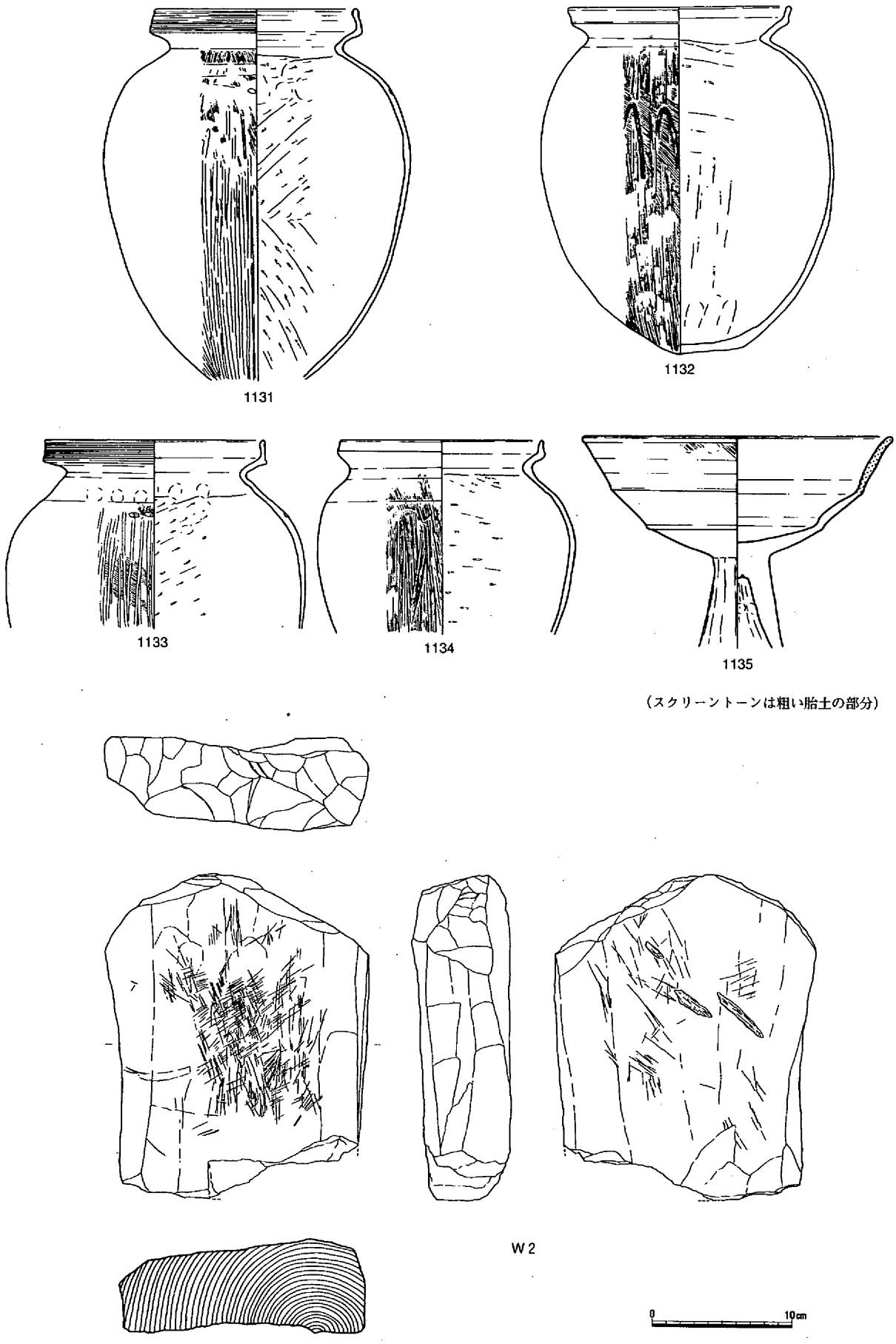
第237図　井戸6（1/30）

1120は甕で、外反する口縁部を持ち、胴部中央が大きく張り、底部は平底である。**1121**は壺の胴下半部で、胴部中央には故意に体部を打ち欠いた孔の痕跡が認められる。**1122**は第６層の底面から出土した完形に近い壺であり、口縁部は外に緩やかに開き、胴部は球形、底部は平底を止めており、全体的に丁寧な仕上がりである。**1123**は壺の胴下半部である。**1124**～**1129**・**1131**～**1134**は甕であり、いずれもわずかに平底を残す。甕の口縁部は、口縁部を上方に拡張して多条の櫛描沈線文を施すもの、外反する口縁部の端部をわずかに上方に摘み上げるもの、口縁部を上方に拡張して文様を施さないものがある。また胴部は倒卵形、球形に近いものに分かれる。さらに甕の肩部に意図的に孔を穿った痕跡が見受けられるものがあり、**1124**は貫通しているが、**1131**・**1133**は米粒状の刺突痕に止まり貫通はしていない。また**1127**の胴下半部には故意に打ち欠いた5～6㎝の破損孔が認められる。煤はいずれの甕にも認められ、胴下半部（**1124**・**1127**）、肩部以下（**1125**・**1126**・**1131**～**1134**）に付着している。**1130**は鉢であり、半球形の体部を持つ。**1135**は同一個体の高杯でありながら、部位によって使用されている胎土が異なる。杯部下半から脚部にかけては赤褐色を呈し、精製された胎土であるが、断面のトーンで示した口縁部分は淡橙褐色を呈し、細砂を含む粗い胎土が用いられている。**W２**は木製作業台であり、樹種はブナ科シイ属である。縁辺部は大まかに削られており、平面は四角形に近い形状を呈す。表裏面の平坦面には線状の細かく浅い刃物痕が無数に認められ、刀子の使用を示唆させる。また表面の左端には斬（ちょうな）の使用を想起させるような垂直に深く刻まれた痕跡も残る。

各層からの出土遺物にはほとんど時期差は認められず、時期は古・前・Ⅰである。　　（米田）



第238図　井戸6出土遺物①（1/4）



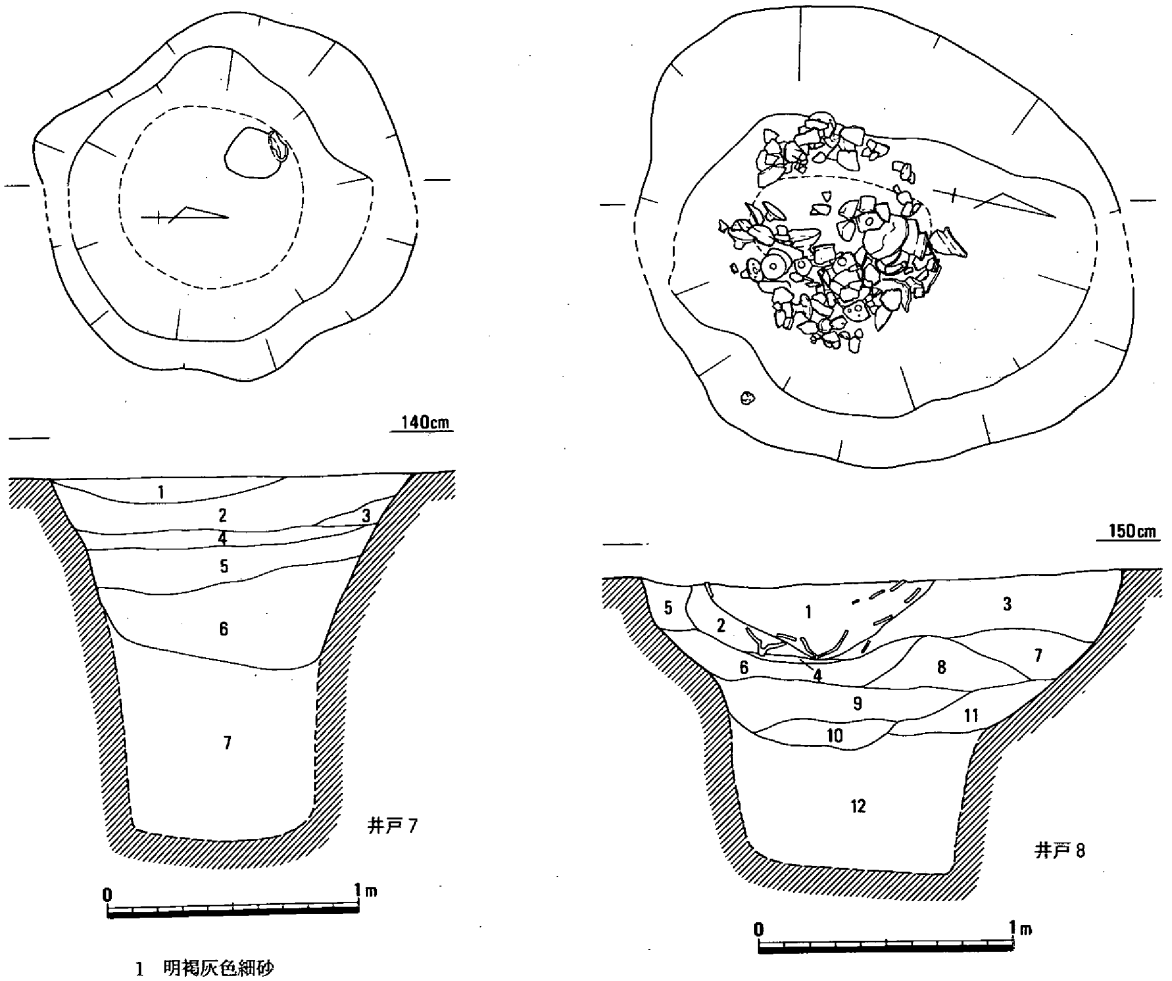
第239図　井戸6出土遺物②（1/4）

井戸７（第240・241図、図版19－１、39－２）

才の元Ⅳ区の西端に位置する。径約1.4ｍのほぼ円形の井戸である。検出面からの深さは約1.4ｍを測るが、井戸の下半部は湧水が激しく、掘り下げ後、まもなく崩壊し、底部については十分な調査が行えなかった。しかし、甕**1136**の出土位置等から、井戸の底部は標高－0.2ｍ付近と推測される。甕**1136**は井戸底部から出土し、口径15cm、最大径19.8cm、器高23.4cmを測る。胴部に穿孔がみられるが、ほぼ完形の土器である。甕の外面上半部にはハケメ、内面上半部にはヘラケズリが施されている。内面下半部はヘラケズリの痕跡も確認できるが、板状工具のようなもので粘土を掻きあげたような痕跡を残す。これにより、この井戸の廃棄された時期は古・前・Ⅰに比定できる。　（金田）

井戸８（第240・241・242図、図版19－２、図版40）

才の元Ⅲ区と才の元Ⅳ区の調査区の境に位置する。井戸の平面形は円形で、径約２ｍを測る。井戸の上半部は擂鉢状に掘りこまれており、上面に近い位置で多くの土器が廃棄されていた。土器は特に第１層と第２層中に多くみられ、井戸が使われなくなり、廃棄する過程で土器が投棄されたようにみ

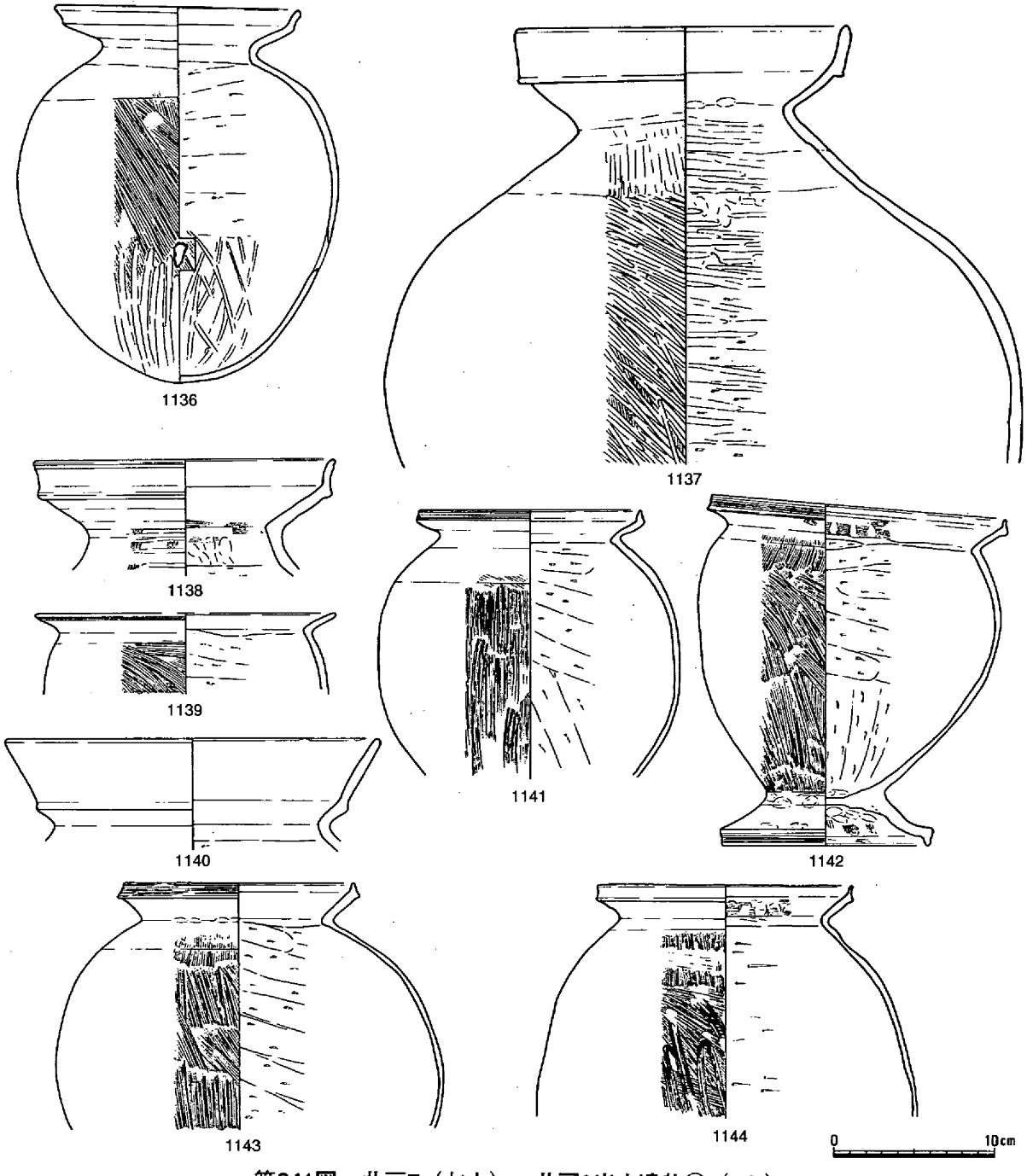


1　明褐灰色細砂
2　灰褐色細砂
3　褐灰色細砂
4　褐色粘質粗砂
5　黄灰色粗砂
6　青灰色粗砂
7　暗灰色粘質細砂

1　黄褐色砂質土
2　褐灰色粘質土（炭化物含）
3　濃灰褐色砂質土
4　暗灰色粘質土
5　褐灰色土
6　濃灰褐色粗砂
7　淡褐灰色微砂
8　濃灰褐色細砂
9　暗灰褐色細砂
10　暗青灰色粘質土
11　にぶい黄褐色細砂
12　暗青灰色粘質微砂

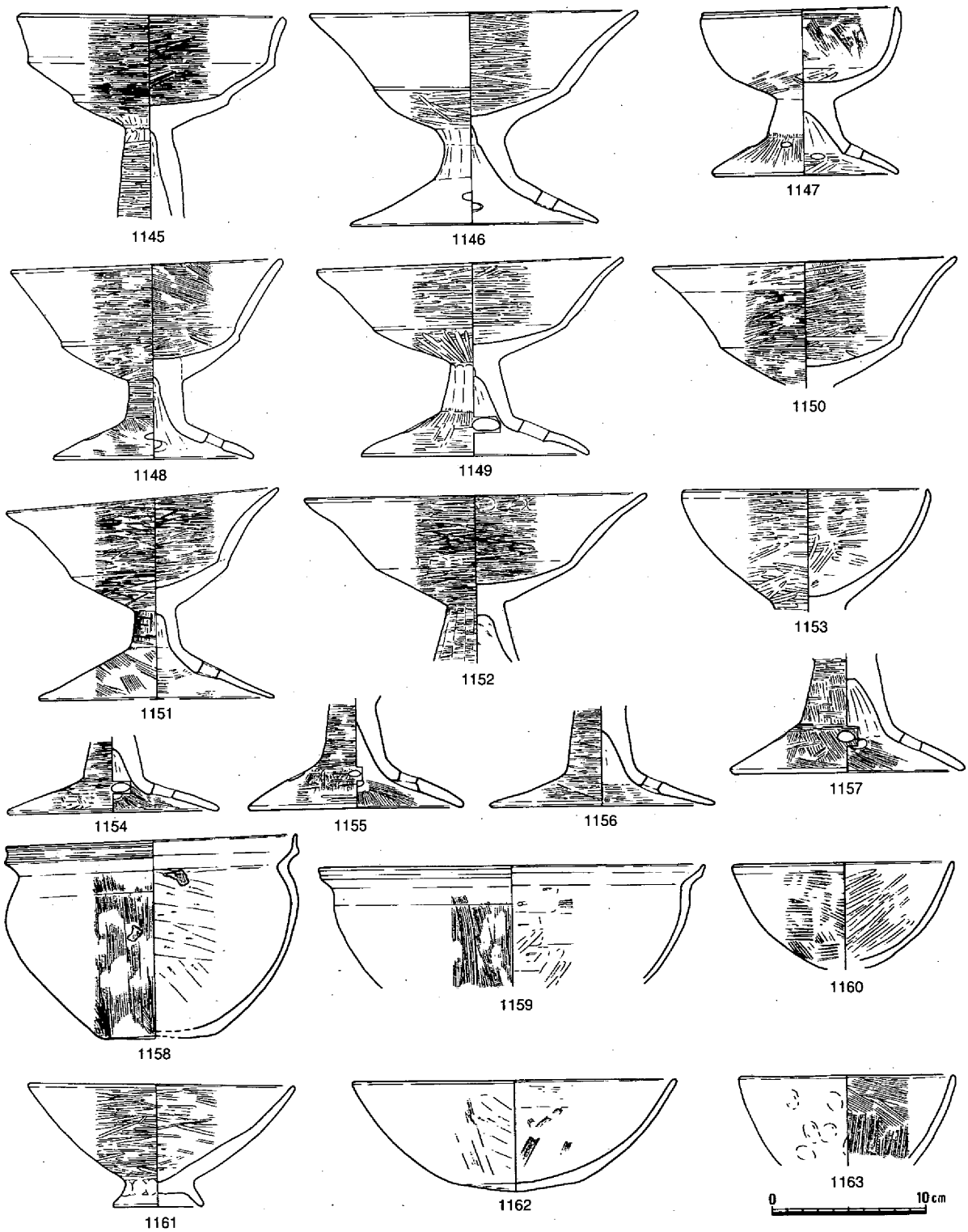
第240図　井戸７（左）・井戸８（右）（1/30）

うけられる。他方、井戸の下半部は掘り下げ後、まもなく周囲の土砂が崩落し、良好な状態で検出することができなかったが、おそらく標高0.2m付近が井戸の底部であると推測できる。井戸からは、先述した上半部を中心に甕、高杯などの土器が出土した。**1137**、**1138**は壺である。**1137**は上方にのびる口縁部をもつ。**1139**～**1144**は甕である。**1139**は「く」の字状の口縁をもつ甕である。外面にはハケメ、内面にはヘラケズリがみられる。**1140**は二重口縁をもつ甕である。**1141**～**1144**は口縁端部が上方につまみ上げられた形態の口縁をもつ甕である。いずれも外面はハケメが、内面にはヘラケズリがみられる。**1142**は全体を復元することが可能で、甕の底部に台をもつ。口径18.4cm、最大径18.9cm、台部を含む器高は21.2cmであるが、全体に歪んでいる。**1145**～**1157**は高杯である。**1147**および**1153**は椀形の杯部をもつ高杯であり、その他のものは２段に屈曲する杯部をもつものである。



第241図　井戸7（左上）・井戸8出土遺物①（1/4）

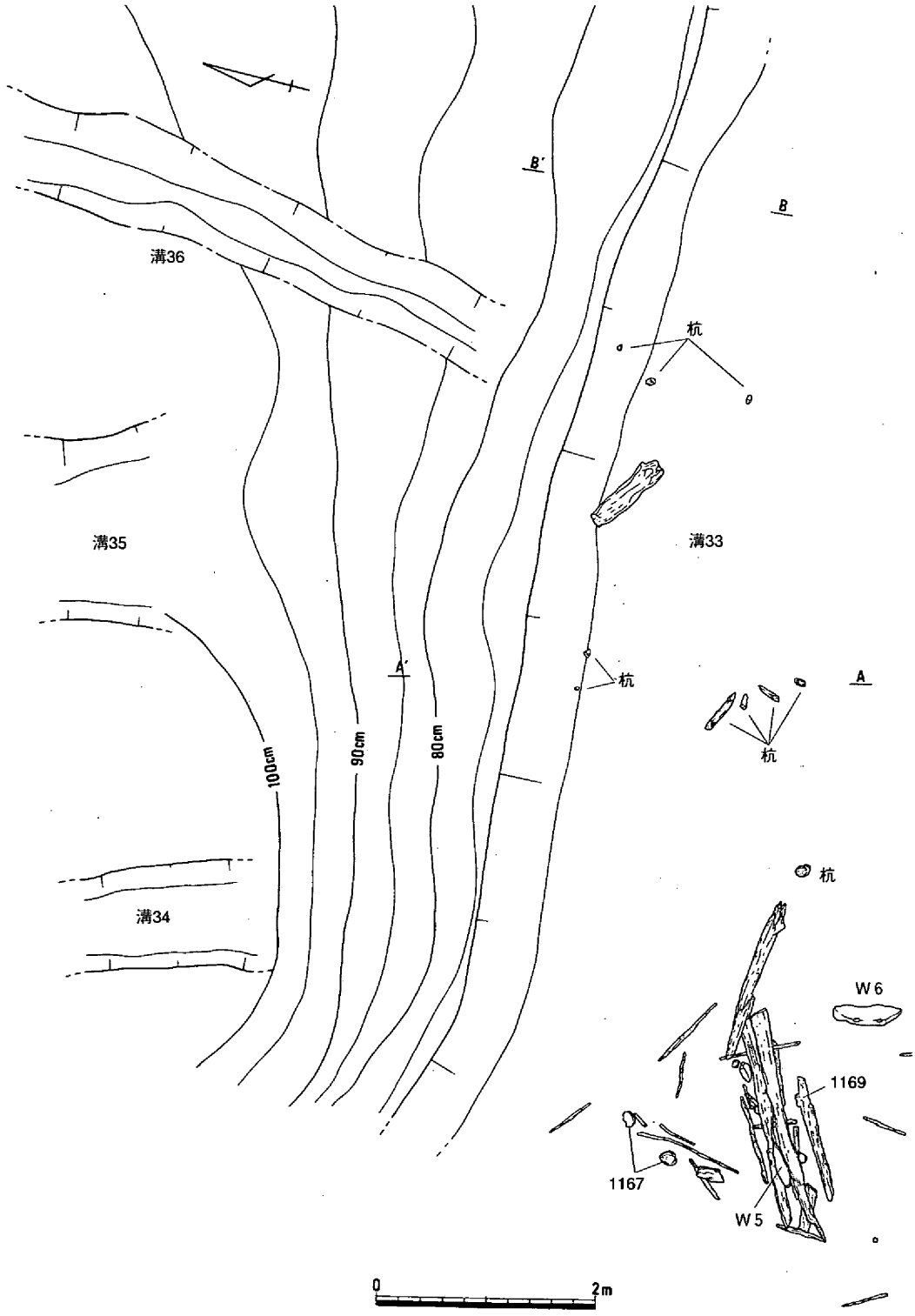
杯部の内外面には基本的にヨコ方向のヘラミガキが施されている。脚部には透かし孔がみられる。**1158**～**1163**は鉢である。**1158**、**1159**の口縁端部は上方に摘み上げられている。**1160**、**1163**は椀形を呈する。**1161**の底部には脚台がついており、内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが施されている。胎土はいわゆる精製された粘土が使用されている。これらの出土遺物から井戸８の埋没時期は古・前・Ⅰを中心とする時期に比定できよう。（金田）



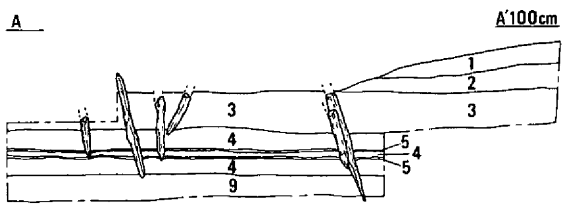
第242図　井戸8出土遺物②（1/4）

溝33（第243～246図、図版16－２・３、39－３、41－４）

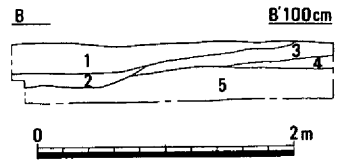
Ⅰ区東側から南側にかけて位置する。溝の東側は幅約2.2mであり、Ⅰ区北側から南流し、微高地南東部において西に湾曲すると同時に、幅も広くなっている。埋土は２層に大別でき、溝の西側のＢ－Ｂ’断面の第２層下面において10本の杭を検出した。杭は丸太材もしくは半裁材を用い、杭先を鋭角に削出したものが打ち込まれていた。杭列は少なくとも２列あり、溝に直交するように配置されている。性格は不明だが、護岸の補強杭、もしくは溝35・36に伴う小規模な堰の一部であろうか。



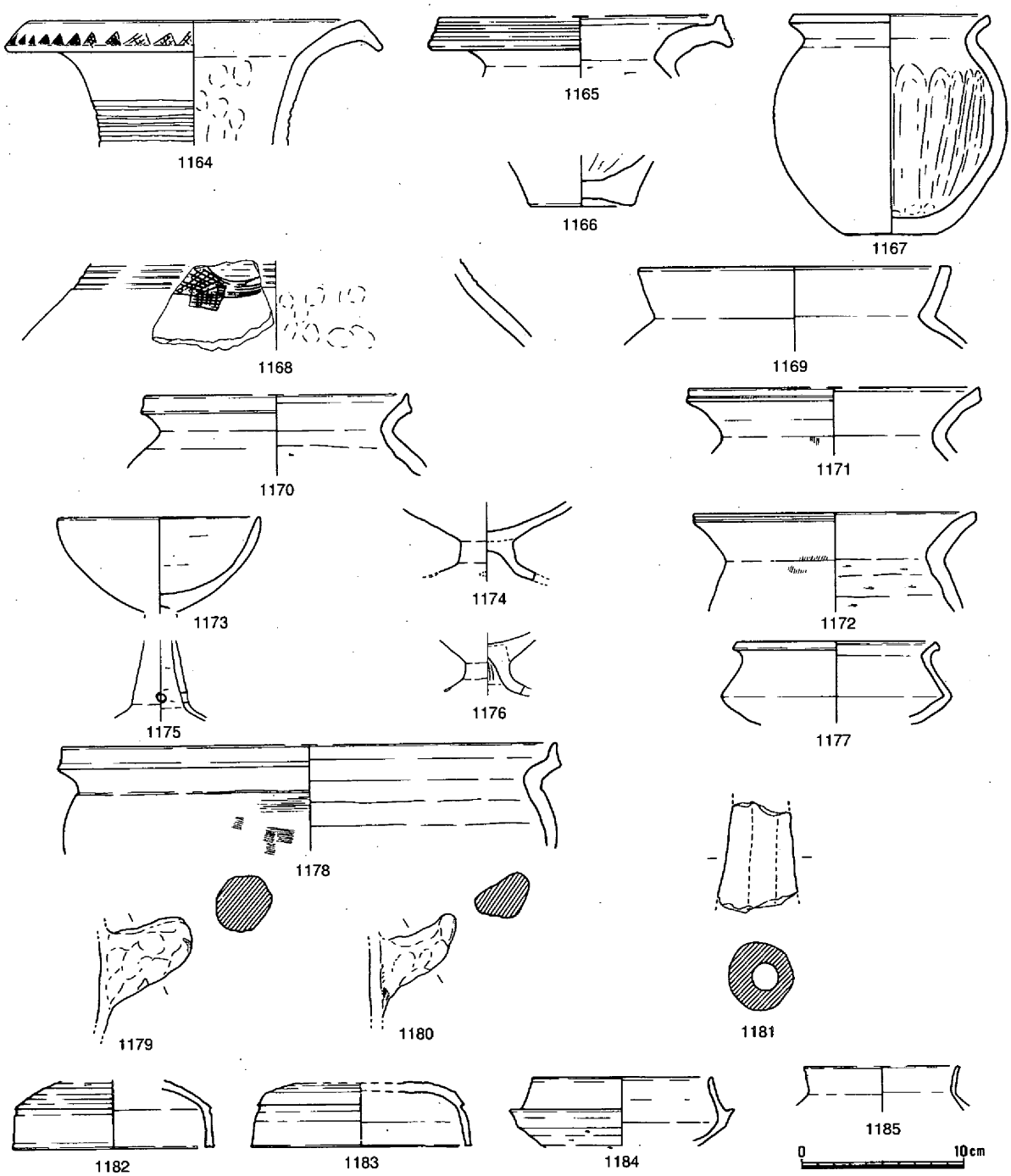
第243図　溝33・34・35・36（1/60）



1　黄褐灰色粘質細砂
2　淡灰色粘質土
3　暗灰褐色粘質土
4　灰青色細砂
5　暗灰色粘質土
6　灰青色細砂
7　暗灰褐色粘質土
8　灰青色細砂
9　暗褐色粘質土



1　暗灰色粘質土〈溝33〉
2　暗褐灰色粘質細砂〈溝33〉
3　黄褐灰色粘質細砂
4　淡灰色粘質土
5　暗褐灰色粘質土

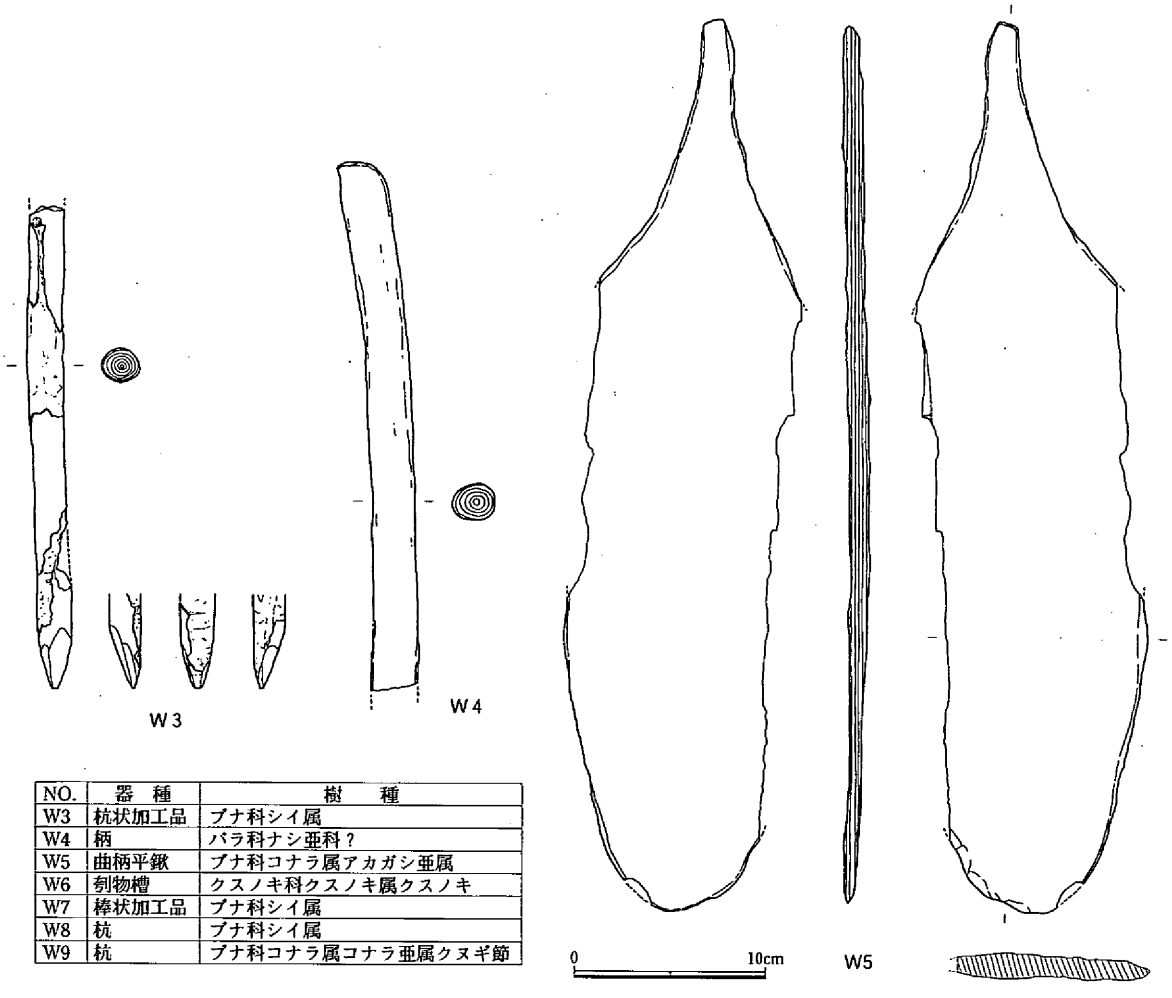


第244図　溝33土層断面（上）（1/30）・出土遺物（1/4）

遺物は杭列の西側で集中して認められ、第１～２層から弥生土器・土師器・須恵器、第２層からＷ３～Ｗ７の木製品が出土した。**1164**は弥・後・Ⅱの壺で、下方へ拡張した口縁端部に鋸歯文、頸部にヘラ描沈線文を施す。**1165**は弥生土器の壺、**1166**は底部である。**1167**の甕は内面に圧延痕が明瞭に残り、弥・後・Ⅳと思われる。**1168**は壺の肩部であり、沈線文の後、ヘラ描によって斜格子・弧文状の文様を施す。**1169**～**1172**は弥・後・Ⅲ～Ⅳの甕である。弥・後・Ⅳの**1173**は椀形の杯部をもつ高杯、**1174**～**1176**は脚部である。**1177**は弥・後・Ⅰの鉢で、体部は大きく屈曲する。**1178**は弥・後・Ⅲの鉢で、体部がわずかに張り、口縁端部を上方へ拡張している。**1179**・**1180**は土師器鍋・甑の把手である。**1181**は羽口と思われ、全体に被熱を受けている。須恵器の**1182**・**1183**は蓋杯、**1184**は杯身であり、いずれも６世紀前葉の様相を示す。**1185**は６世紀中葉の須恵器の短頸壺である。

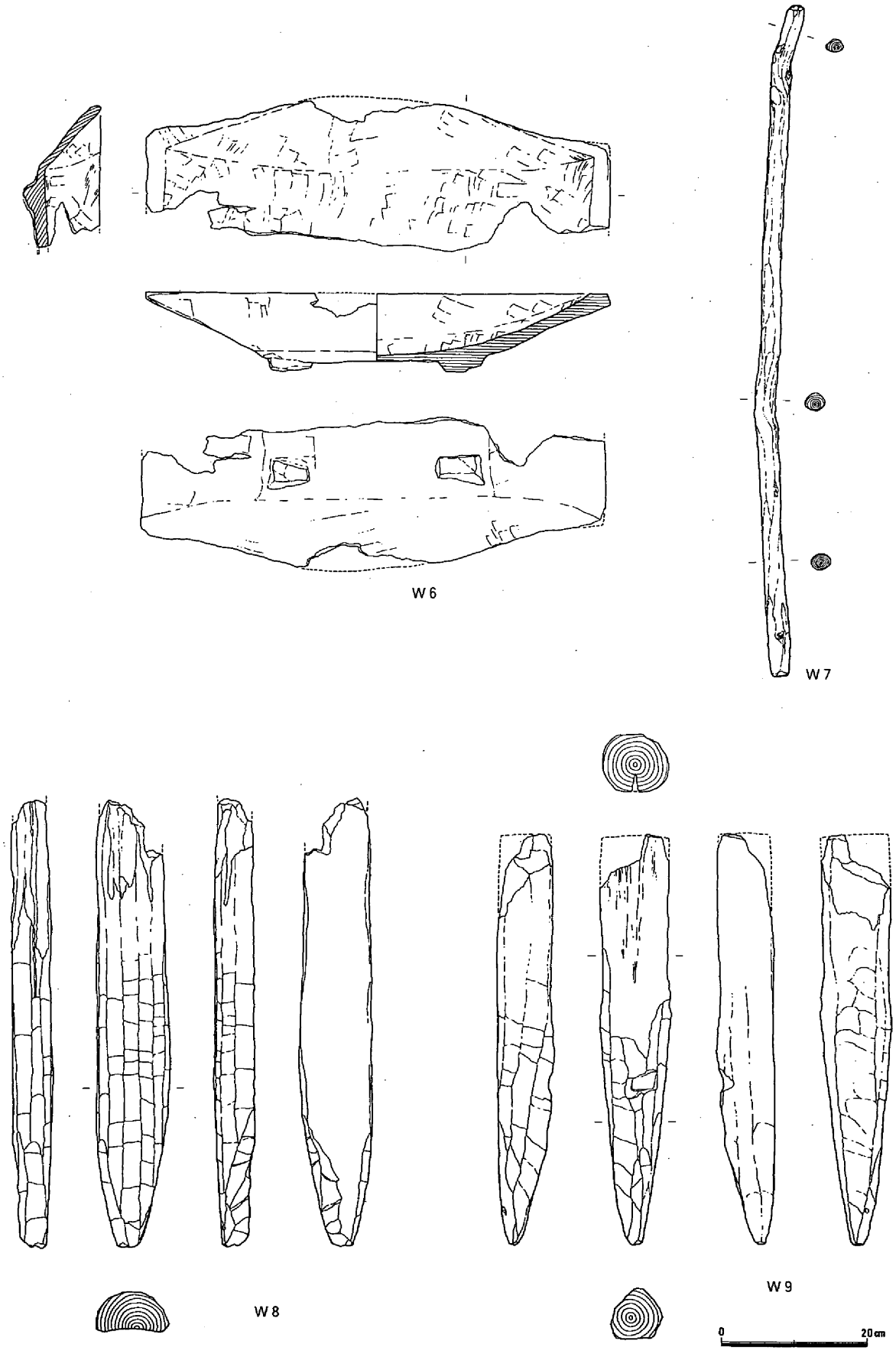
Ｗ３は杭状加工品で、全体に表皮を残す。Ｗ４は農耕具の柄と思われる。Ｗ５は組合式の曲柄平鍬である。Ｗ６は刳物槽であり、長辺半分が残存する。底部には削出された長方形の台脚が２箇所に確認できる。また内面には加工痕が明瞭に残り、底面と側面との加工痕の方向を変えることで稜線を作出している。Ｗ７は棒状加工品で、上下端のみ削りを施している。Ｗ８・Ｗ９は杭列を形成する杭であり、Ｗ８は板目に沿って半裁した材、Ｗ９は丸太材を使用している。

木製品・杭列の周辺からは前述した弥・後・Ⅳを中心とした土器が多く出土しているが、第２層から**1184**が出土しているため、弥生後期から古墳後期の範疇として捉えておきたい。　　(米田)



NO.	器　種	樹　種
W3	杭状加工品	ブナ科シイ属
W4	柄	バラ科ナシ亜科？
W5	曲柄平鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
W6	刳物槽	クスノキ科クスノキ属クスノキ
W7	棒状加工品	ブナ科シイ属
W8	杭	ブナ科シイ属
W9	杭	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節

第245図　溝33出土木製品①（1/4）



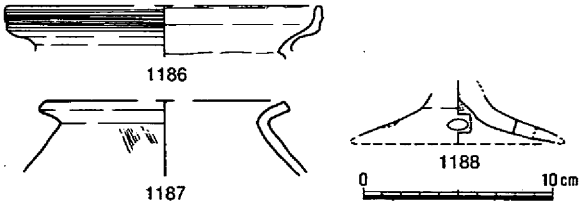
第246図　溝33出土木製品②（1/8）

溝34

Ⅰ区北西部において確認した微高地の北西隅に位置する。埋土は暗黄褐灰色粘質細砂であり、1973年調査のＤ－Ａに続くと思われる。出土遺物はないが、弥生時代後期の包含層である第229図－第16層下面において検出しているため、同様の時期かそれ以前である。（米田）

溝35（第247図）

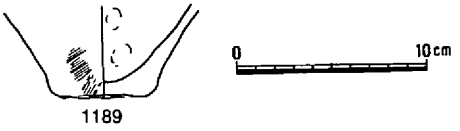
Ⅰ区微高地の北西部、溝34と36の間で検出した。埋土は第229図－第20～22層であり、深さは約10cmと浅い。遺物は**1186・1187**の甕、**1188**の高杯が出土しており、若干の時期幅がある。地点的には1973年調査のＤ－Ｃに続く可能性がある。



第247図　溝35出土遺物（1/4）

溝36（第248図）

Ⅰ区微高地の中央部において検出した。断面は逆台形を呈し、両肩は垂直気味に下がる。埋土は第229図－第17～19層であり、深さは約30cmを測る。出土遺物は**1189**の弥生土器の底部のみである。1973年調査のＤ－Ｄに続くと考えられる。



第248図　溝36出土遺物（1/4）

溝37（第249図）

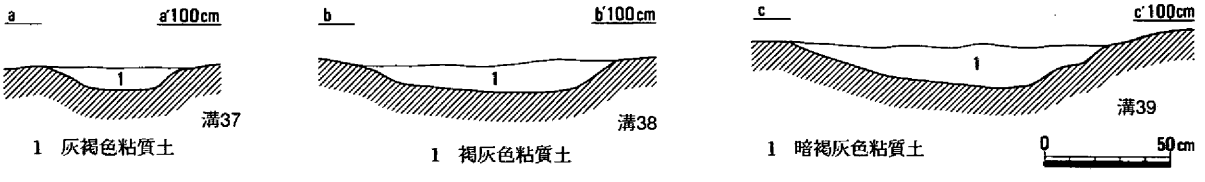
Ⅱ区中央部に位置する。第230図－第24層上面の微高地低位部において南北方向に検出した。断面は逆台形に近い。溝の長さは約2.4ｍと短く、撓んだような溝であったと思われる。出土遺物は皆無であるが、層位から弥生時代後期から古墳時代の範疇か。（米田）

溝38（第249図）

Ⅱ区中央部の北側において南北方向に検出した。溝の両肩は緩やかに立ち上がる。溝の南端は調査区の中央部で収まるが、北側については調査区外に続いていると考えられる。遺物は出土していないが、時期については、層位から溝37と同様であろう。（米田）

溝39（第249図）

Ⅱ区中央部やや東寄りに位置し、溝38に東隣する。溝は、微高地が落ち込む肩口に沿うように南北方向に流走しており、南北端ともに調査区外に続くと思われる。出土遺物はないが、微高地低位部において検出した溝37・38とほぼ同時期であろう。（米田）



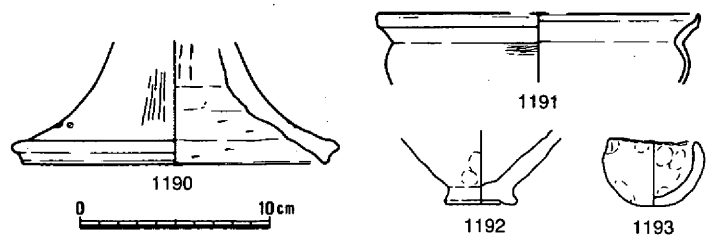
第249図　溝37・38・39土層断面（1/30）

溝40

Ⅲ区北側中央部において検出した。南端は調査区内で収まるが、北側は1973年調査のＤ－Ｃに続くと思われる。幅は約2.2ｍ、断面は逆台形に近く、埋土は第232図－第14層の褐灰色粘質土である。出土遺物は細片のために図示し得なかったが、中世の土師質土器が出土している。（米田）

河道２（第250図）

Ⅰ区南東部からⅡ区中央部以西にかけて位置する。微高地低位部は河道と思われ、Ⅰ区北東部、Ⅱ区東部でそれぞれ確認した微高地端部が河道の肩部に相当する。河道２は幅約38ｍあり、北東から南西に流走していると思われる。河道の底面は確認できなかった。遺物はⅡ区東部の微高地が落ち込む肩口付近において比較的多く出土した。**1190**は弥・後・Ⅰの高杯、**1191**は弥・後・Ⅳの鉢、**1192**は弥生後期の甕、**1193**は鉢形のミニチュア土器である。時期は弥生後期から古墳前期を中心とするが、古墳後期には東側大半が埋没し、溝33のみが流走する。（米田）



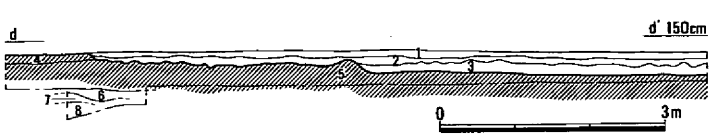
第250図　河道２出土遺物（1/4）

河道３（第251・252図）

才の元Ⅳ区の東半部をしめる河道である。才の元Ⅳ区の西端部には南にひろがる微高地が確認されており、この河道はこの才の元調査区とこれより東に位置する下田所調査区にみられる微高地との間をながれる自然河道と考えられ、推定幅で約35ｍを測るものである。

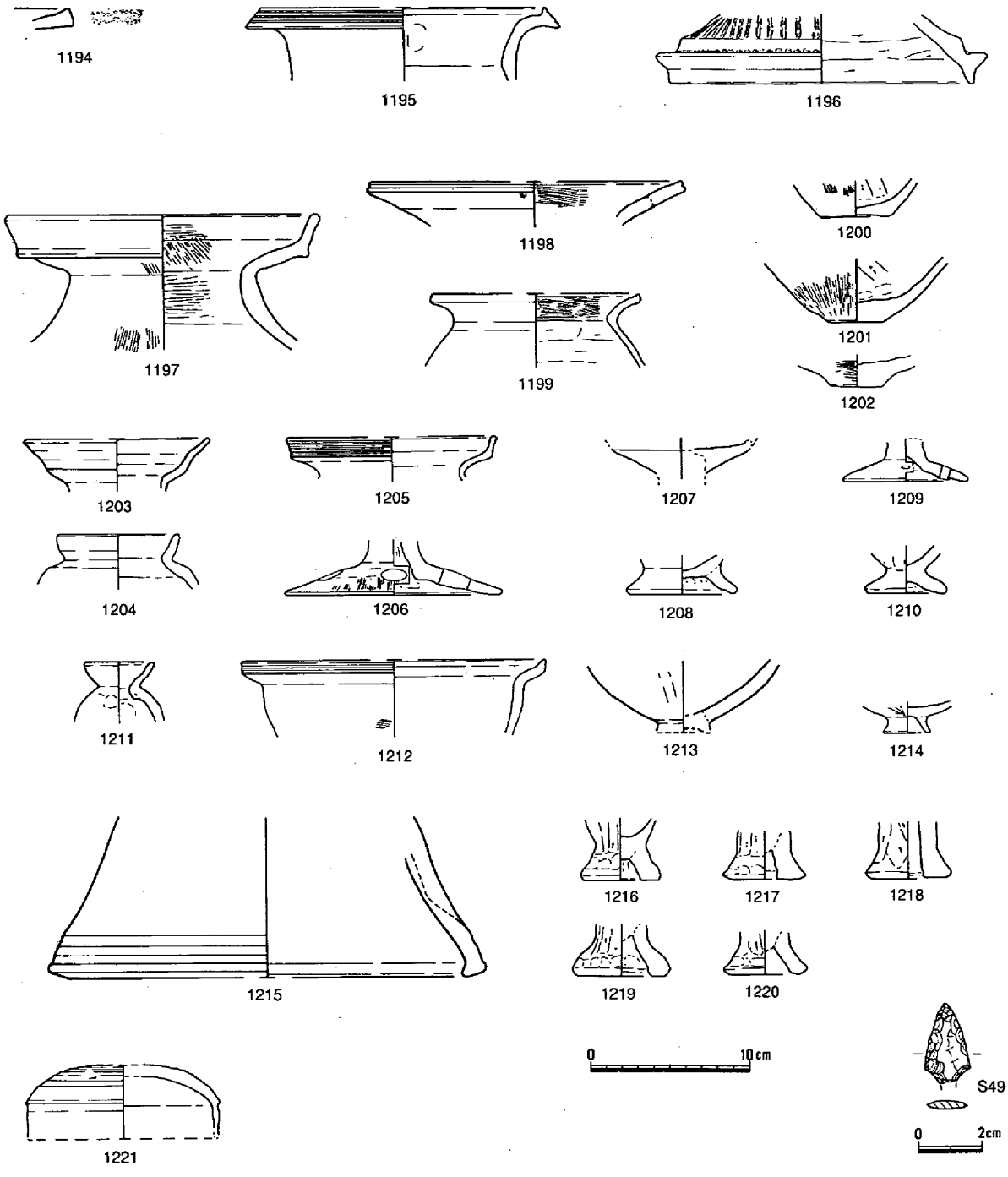
河道３は才の元調査区における中世水田面を掘り下げた後に検出され、北西から南東方向に流れている。河道３は南西から北東にいたるにつれて緩やかに傾斜している。河道３の埋土は大きく３層に区分できるが、いずれも低湿地の様相を示す粘質土あるいは砂質土を呈する。その中で第２層の黒灰色土層から**1221**にみられる須恵器が検出され、この河道の存続時期を示す遺物となった。その他、河道３から弥生土器および土師器を中心とする土器が出土したが、出土量はそれほど多くはなく、いずれも破片で、磨耗が激しい。

1194は壺口縁部で端部に刻目がみられる。**1195**は壺口縁部である。口縁端面には凹線がみられる。**1196**は高杯の脚裾部である。三角形の透かし孔がみられ、その下には円形の刺突文が認められる。**1197**は二重口縁をもつ壺である。**1198**は壺の口縁部と推測できる。**1199**はいわゆる「く」の字状の口縁をもつ甕である。**1200**・**1201**・**1202**は壺あるいは甕の底部である。いずれも底面に若干の平坦面を遺している。**1203**・**1204**は小型の壺である。**1205**は甕の口縁部である。口縁部に櫛描沈線が施されている。**1206**および**1209**は高杯脚部である。脚裾部に４つの透かし孔がみられる。**1207**は高杯の杯底部である。**1208**・**1210**は台部である。**1211**は小型壺である。いわゆる手捏土器である。**1212**は鉢である。**1213**は台付鉢である。**1215**は器台である。**1214**、**1216**～**1220**は製塩土器である。いずれも脚台部の破片である。**1221**は須恵器杯蓋である。口径は復元で約12cmを測る。**S49**は石鏃である。



1　暗黄褐色土
2　黒灰色粘質土
3　淡黄褐色粘質土（明黄褐色ブロック含）
4　濃黄褐色粘質土〈微高地〉
5　褐灰色粘質土（明黄褐色ブロック含）〈微高地〉
6　オリーブ灰色粘質微砂
7　暗褐灰色粘質土
8　暗オリーブ灰色粘質細砂

第251図　河道３土層断面（1/100）



第252図　河道３出土遺物（1/4・1/2）

残存長 2.5cm、幅約 1.5cmを測る。

なお、河道３の時期であるが、河道３から出土する土器の大部分は弥生土器である。特に第３層中の土器の大部分は弥生土器で、その大半を弥生時代後期のものが占める。また、第２層からの須恵器**1221**が出土しており、この層が古墳時代後半以降のものであると推定することができる。そして、河道３の上面には中世水田が広がっていることから、河道３は弥生時代後期から古墳時代後半あるいは古代頃まで存在していた可能性が考えられる。（金田）

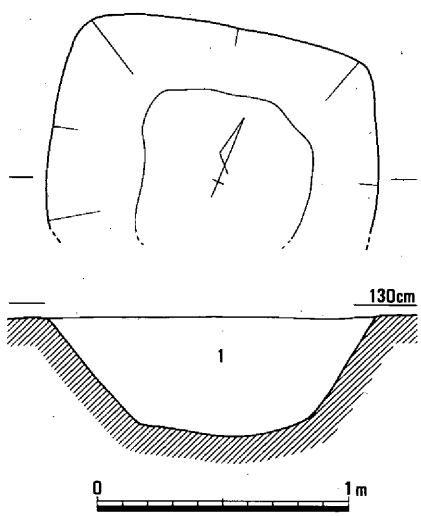
第３節　中・近世の遺構・遺物

土壙253（第253図）

Ⅱ区東部南端、土壙254に西隣する。平面は隅丸方形を呈し、一辺の幅は約130cmを測る。断面は逆台形で深さは約47cmである。遺物は図示し得なかったが、陶磁器の細片が出土している。時期は、混在土の多い埋土や陶磁器片から判断して近世にあたると思われる。（米田）

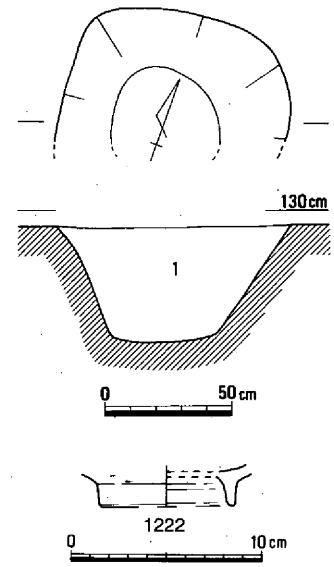
土壙254（第254図）

Ⅱ区東部南端、土壙253に東隣する。平面は不整方形で幅は約90cm、断面は逆台形を呈し、深さは約45cmを測る。**1222**は土師質土器の椀であり、外面に淡灰褐色釉が付着している。時期は土壙253と同様に近世と思われ、水田耕作に関連する性格の土壙であると想定される。



1　褐灰色細砂（濃灰色・黄褐色ブロック含）

第253図　土壙253（1/30）

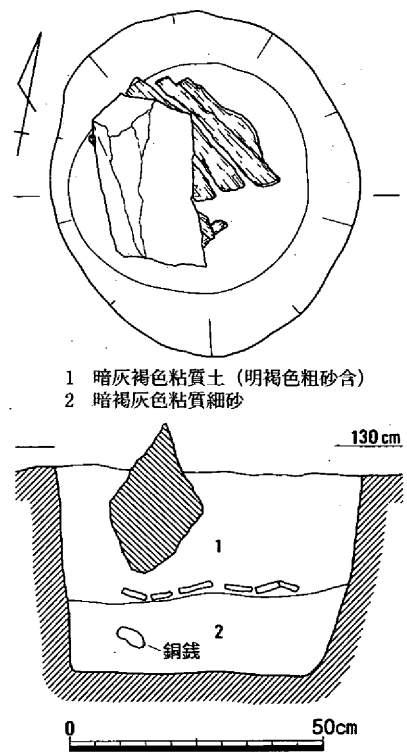


1　褐灰色細砂（濃灰色・黄褐色ブロック含）

第254図　土壙254（1/30）
・出土遺物（1/4）

土壙255（第255図、図版20－１、41－３）

Ⅲ区中央部に位置し、中世の溝41を切っている。平面はほぼ円形を呈し、径は約61cmを測る。断面は長方箱形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さは約40cmである。第１層上方には断面が菱形を呈するように整形された花崗岩が置かれており、石垣構築などに認められる所謂「検地石」に似た印象を受ける。第１層下面には長さ30cm前後、幅５cm程度、厚さ約１cmの板状に加工した木が６枚敷かれており、平面形が長方形を呈するように面一に並べられていた。第２層は粘性が強く、腐敗が著しい骨片が混じる。また、平面の西寄り、第２層半ばから銅銭が数枚重なった状態で出土した。銅銭は錆膨れが著しく、銘は解読不明。枚数は３枚程度と思われる。出土遺物は銅銭以外は認められなかった。土壙の形状、骨片の遺存度、層序、埋土、銅銭などから判断すると、時期は近世と考えられる。土壙の性格は土壙墓である可能性が極めて強い。（米田）



第255図　土壙255（1/15）

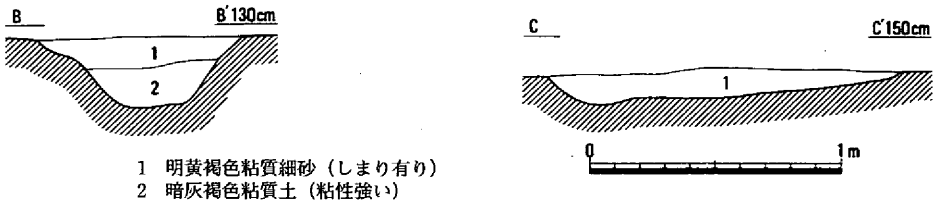
溝41（第256～258図、図版19－３）

Ⅲ区からⅣ区南東部にかけて、調査区中央部を北へ膨らむように緩やかに湾曲しながら流走している。溝は東および西側は幅が約150cmであるが、中央部は幅100cm程度である。断面は逆台形に近く、深さは東側が約15cmと浅く、中央は約29cm、西側は約30cmである。埋土は２層に大別でき、第２層は粘性が強く、中央部から西側にかけて海抜約115cm以下に埋没している。以上のような溝底面の深度や埋没状況から判断して、東から西に向かって流走するように掘削されたと考えられる。

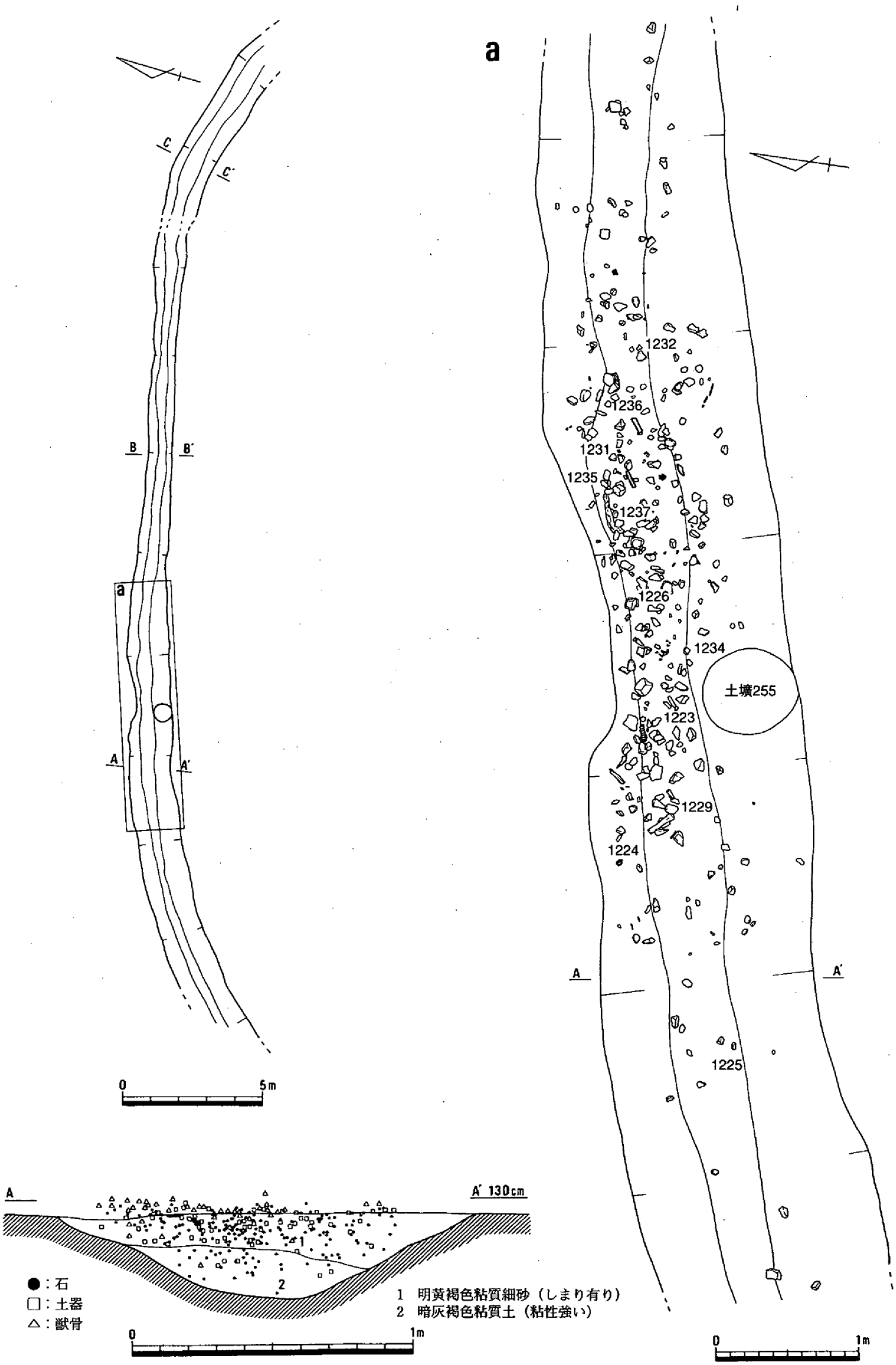
遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦のほか、ウシの骨・歯、多量の拳大の円礫が出土した。遺物は層位に関係なく認められるが、第１層から多く出土している。遺物は土器、獣骨類、円礫に大別できるが、その分布は種別ごとに若干異なる。土器は溝中央部に散在しており、溝の東側や西側ではほとんど認められない。また土器は小片が多く、整理作業においても接合できるものがほとんどなかった。獣骨類の出土は溝中央部の北半にほぼ限られるが、まとまりをもった出土状況は認められず、溝の北半に散見できる程度である。獣骨の種名はウシである。さらに円礫は、土器・獣骨類と比較して数量が最も多い。分布は土器などと同様に溝中央部に集中する傾向にあるが、溝の東・西側においても認められる。円礫は溝底面直上からの出土は皆無であり、自然に流れていたものが埋没の過程で溜まったという状況は伺えない。この状況は土器などにも言えることであり、遺物が溝の中央部の北半に集中する傾向にあることは、廃棄地点を意識的に限定していたことが示唆される。

1223は弥生土器の底部である。**1224**は須恵器の壺の肩部であり、８世紀前半の様相を示す。**1225**は須恵器で、小型壺の体部と思われる。**1226**は瓦器の鍋である。**1227**・**1228**は備前焼の擂鉢で、内面にはそれぞれ４・６条一単位の卸目を断続的に施しており、上方に拡張された口縁部の特徴から15世紀に比定できる。**1229**・**1230**は土鍋の脚部である。**1231**は亀山焼の甕の胴部であり、外面は格子目叩き、内面はヨコハケによって調整している。**1232**・**1234**は備前焼の擂鉢の底部であり、内面に卸目を施す。**1233**は青磁椀であり、内外面には暗緑色の釉薬がかかる。外面には蓮弁文が施されており、その単位の幅は４㎜程度と狭い。形態や文様の特徴から15世紀後半ごろに属する。**1235**・**1236**は備前焼の擂鉢であり、内面にはそれぞれ卸目が断続的に施されている。口縁端部はわずかに上下方に拡張する程度で、15世紀前半の特徴をもつ。**1237**は土鍋で、口縁端部を丸くおさめており、内面はヨコハケによって調整している。**1238**・**1239**は13世紀中頃の亀山焼の擂鉢であり、内面はヨコハケによって調整した後、６条一単位の卸目を施している。**1240**は平瓦で、凸面には格子目叩きが残る。焼成は不良で、色調は黄褐色を呈す。

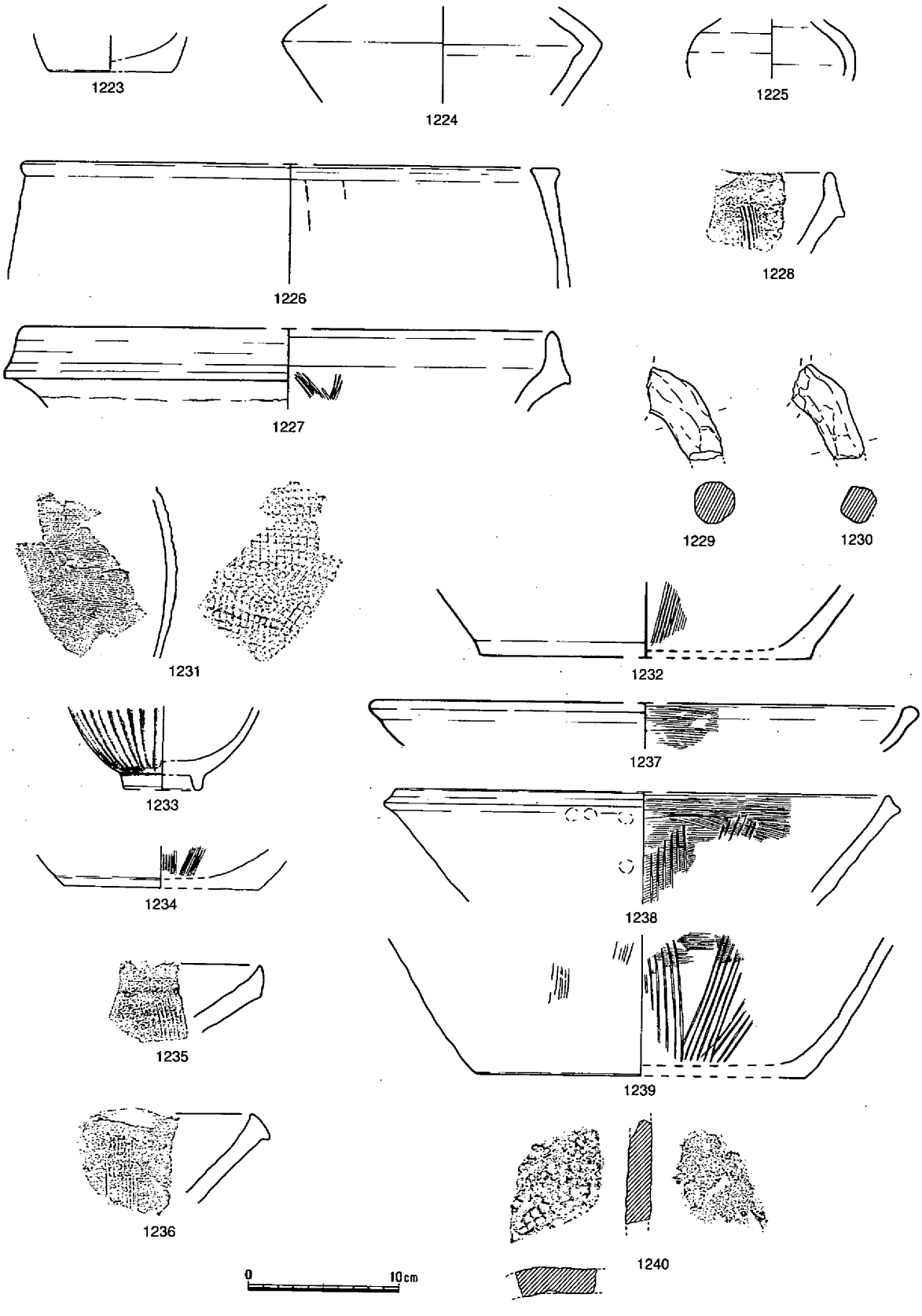
溝の存続期間は不明であるが、15世紀後半ごろには廃絶している。調査前のⅢ～Ⅳ区は水田に利用されており、現代の水田を区画する畦畔が溝41に沿うように、そのほぼ直上に巡っていた。現代の水田区画が中世の溝41に規制されて形成されており、興味深いものがある。（米田）



第256図　溝41土層断面（1/30）



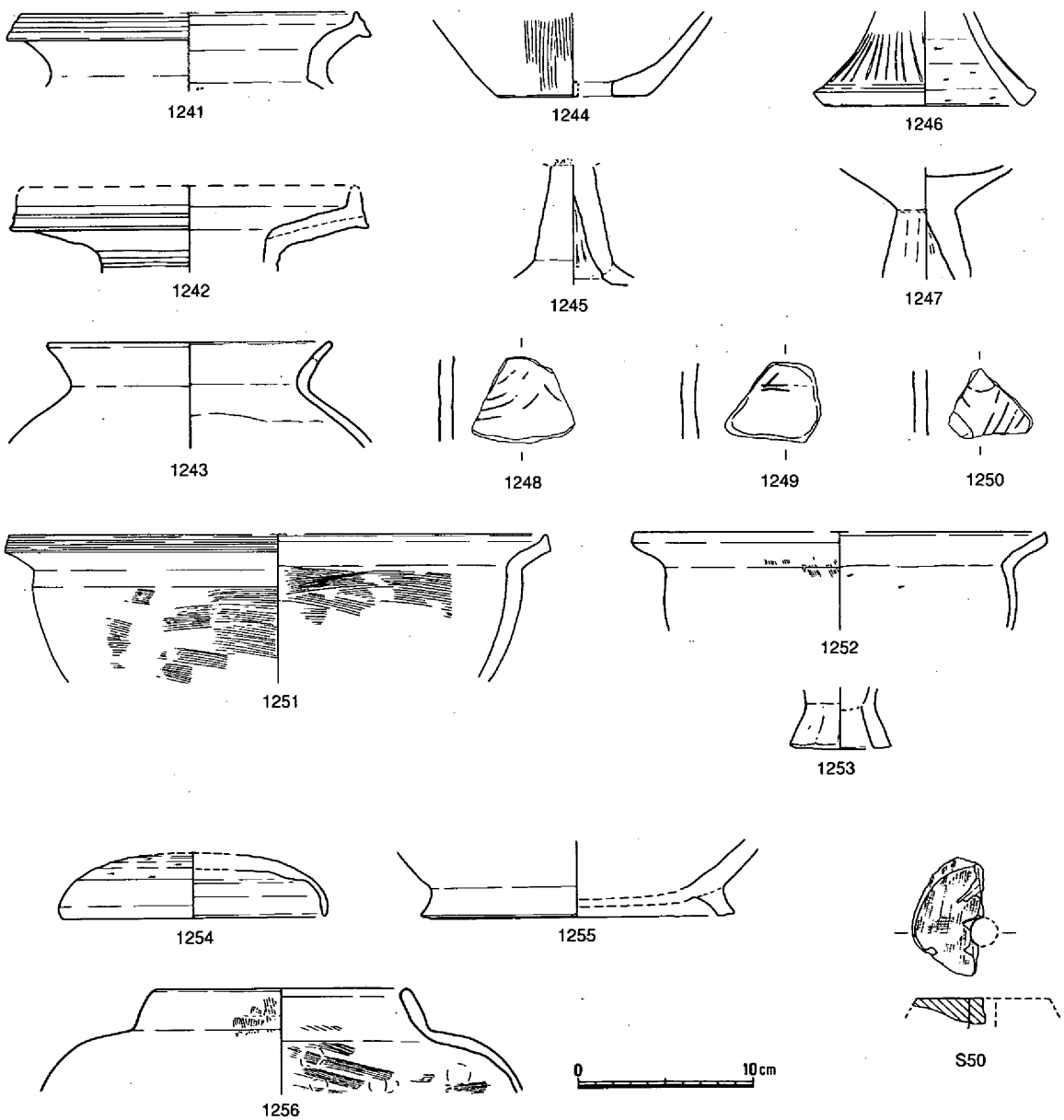
第257図　溝41（左上1/200・左下1/20・右1/40）



第258図　溝41出土遺物（1/4）

遺構に伴わない遺物（第259図、図版41－３）

1241は弥・後・Ⅱの壺で、口縁端部に２条の凹線文を施す。**1242**の弥・後・Ⅲの長頸壺は口縁端部に凹線文、頸部に沈線文を施す。**1243**は土師器の甕である。**1244**は弥生土器の甕で、底部に焼成後穿孔を施している。**1245**は古墳時代前期、**1246**は弥・後・Ⅰ、**1247**は弥・後・Ⅱの高杯である。**1248**～**1250**は弥生後期の壺の体部と思われ、焼成・胎土・文様などから同一個体の可能性がある。いずれも細片のために文様構成は不明であるが、外面には極細のヘラ描によって弧状の文様を施している。**1251**は弥・後・Ⅲの鉢であり、口縁端部をわずかに上方へ拡張し、３条の凹線文が施されている。調整は内外面ともにヨコハケである。**1252**は弥・後・Ⅳの鉢と思われる。**1253**は弥・後・Ⅱの製塩土器の底部である。**1254**は６世紀後半の須恵器蓋杯である。**1255**は須恵器長頸壺の底部であり、８世紀前半と思われる。**1256**は15世紀後半ごろの瓦器釜である。外面はハケメ、内面は指頭圧痕の後ヨコハケによって調整している。**S50**は滑石製紡錘車で、研磨は良好である。大半を欠いているが、断面は台形を呈すと思われ、中心部分に円孔を穿っている。（米田）



第259図　才の元調査区　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

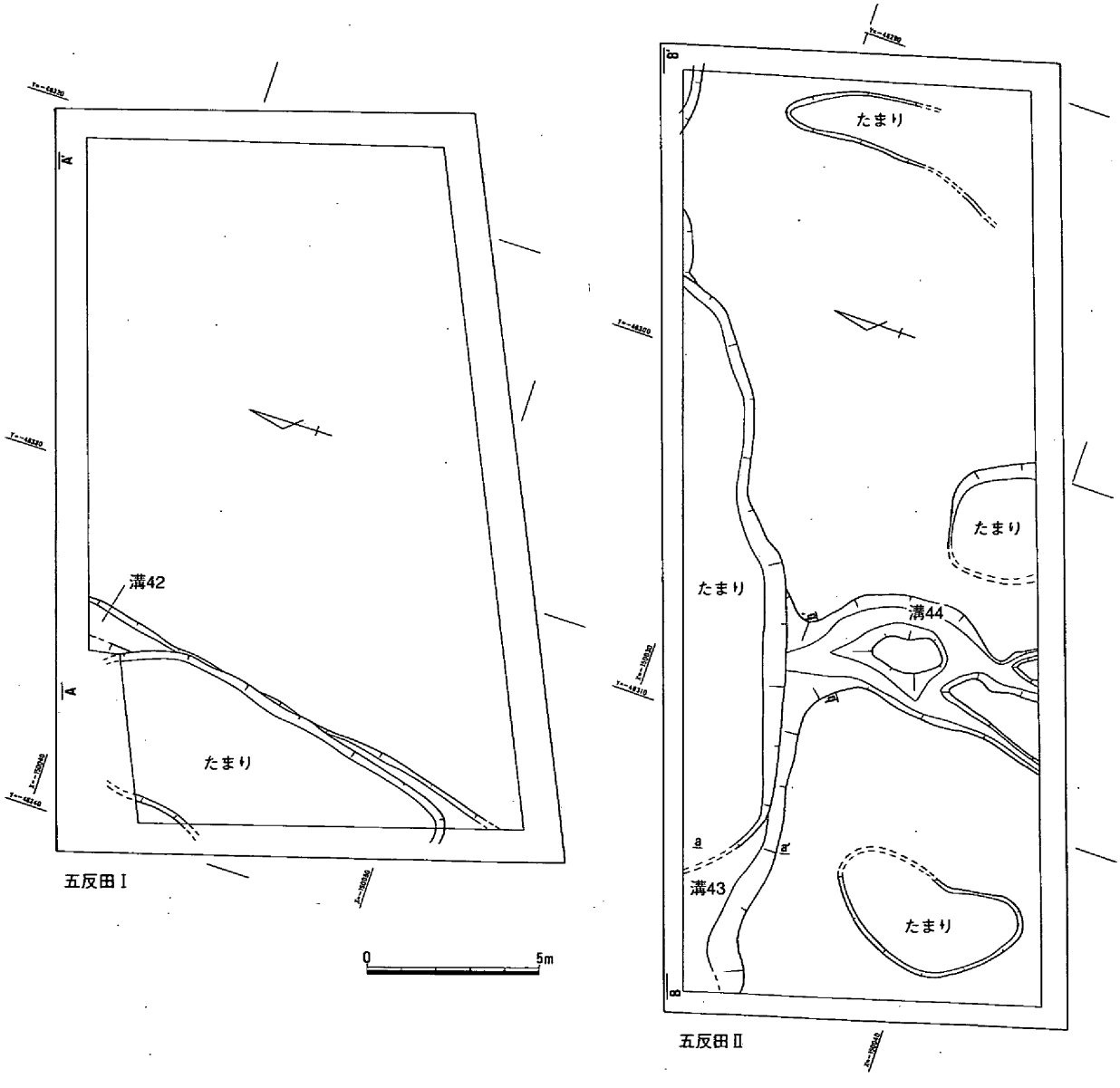
第６章　五反田・九つ田調査区の調査

第１節　五反田調査区　調査の概要

五反田調査区は、才の元調査区の西側に位置し、現在の道路を挟んでさらに西側に九つ田調査区が存在する。調査区中にあった現在の畦を境に調査区を３つに分け、西からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と名付ける。

五反田Ⅰ区にある遺構は、調査区の西境に中・近世の溝とその上層にたまりがあるのみである。調査区全体で見ても、明確な基盤層はなく、湿地帯であったものと思われる。

五反田Ⅱ区もⅠ区同様に明確な基盤層が無く、やはり湿地帯であったと思われる。しかしⅠ区に比



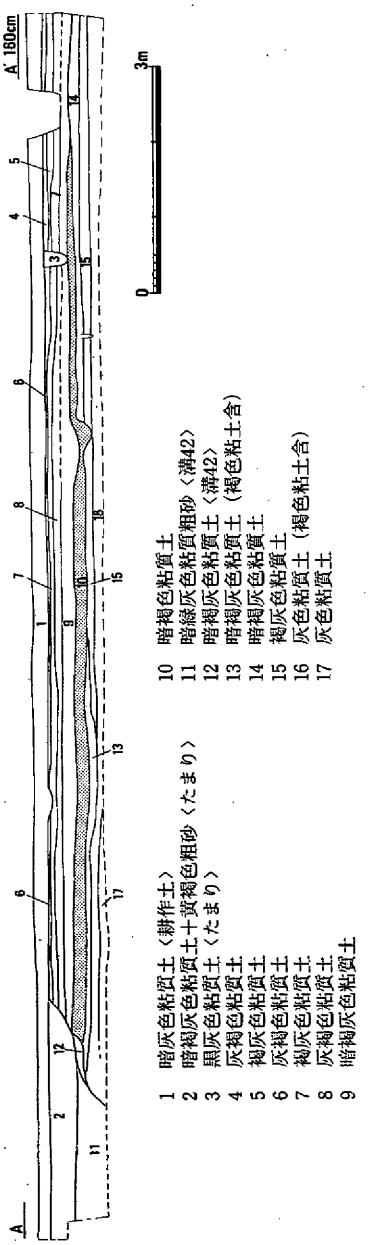
第260図　五反田Ⅰ・Ⅱ調査区遺構配置（1/200）

べると、溝やたまりが調査区全体に見られるようになる。溝43は、調査区の東西に走る溝であり、溝44は南北に走り、溝44に注ぐ。

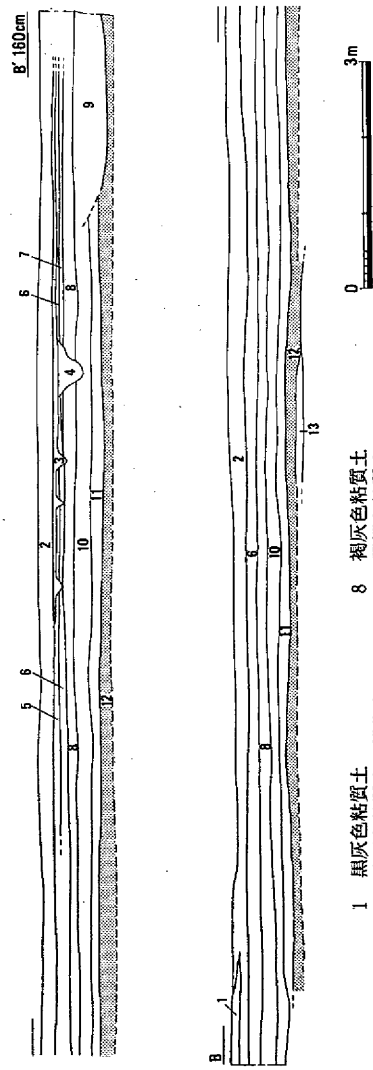
五反田Ⅲ区は東西約40m、南北約10mの調査区である。調査前は水田として利用されていた。水田面の標高は約1.3～1.4mを測り、他の調査区に比べ低い土地に位置している。調査の結果、この調査区の大部分が河道であることが判明した。また、河道以外の場所も基本的には湿地の様相を呈しており、人が居住できる環境でなかったことがわかった。

五反田Ⅲ区で検出できた主な遺構は、この調査区を東西に流れる溝45および溝46と、調査区の東端を流れる溝47・48・49である。溝45および溝46からは弥生土器、土師器、須恵器、石器、木器が出土した。このことから、古墳時代から古代にかけてのものと推測できる。溝47・48・49は溝45・46と切り合い関係にあり、後者の溝群のほうが新しい遺構であることが判明している。出土遺物から、中世から近世にいたる溝と考えられる。この溝群は流路を若干東に移動しながらも、現在の用水路につながる溝であると推定できる。

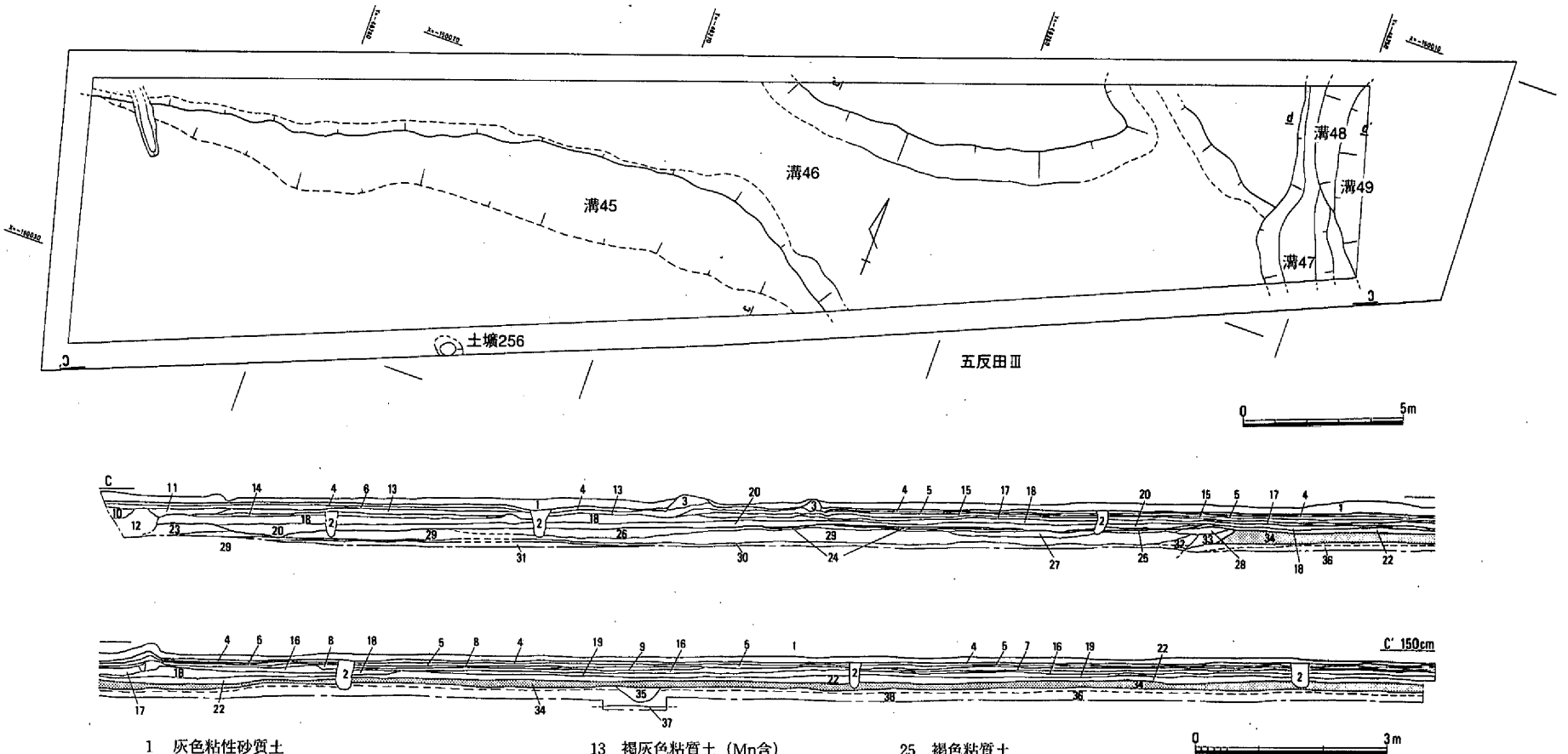
（金田・小林）



第261図　五反田Ⅰ調査区北壁断面（1/100）



第262図　五反田Ⅱ調査区北壁断面（1/100）



1　灰色粘性砂質土
2　オリーブ灰色粘質土〈暗渠〉
3　明褐色土
4　褐灰色土（明黄褐色ブロック含）
5　明褐灰色粘質土（Fe含）
6　明灰褐色粘質土（Fe含）
7　褐灰色粘質土（Mn含）
8　暗黄灰色粘質土（Mn含）
9　褐灰色粘質土（Mn含）
10　暗青灰色粘質土＋褐色土〈溝〉
11　灰黄褐色土（灰色粗砂含）〈溝〉
12　濃灰褐色土（青灰色粘質土・褐灰色砂質土含）〈溝〉
13　褐灰色粘質土（Mn含）
14　明褐色粘質土
15　褐灰色粘質土
16　明褐灰色粘質土（Fe・Mn含）
17　黄褐灰色粘質土
18　濃灰褐色粘質土
19　暗褐灰色粘質土
20　黄褐色土
21　明褐色粘質土（Fe含）
22　黄褐色土（細砂含）
23　褐色粘質土
24　灰褐色粘質土（Mn含）
25　褐色粘質土
26　灰褐色粘質土
27　暗灰褐色粘質土
28　暗灰色粘質土
29　灰黄褐色土
30　オリーブ褐色粘質土
31　黒褐色粘質土
32　暗褐色粘質土
33　暗褐灰色粘質土（黄褐色ブロック含）〈溝45〉
34　黄褐色粘質土〈溝46〉
35　暗灰色粘質土〈土壙256〉
36　淡灰色粘質土
37　暗灰褐色粘質土

第263図　五反田Ⅲ調査区遺構配置（1/200）（上）・南壁断面（1/100）（下）

第２節　五反田調査区の遺構・遺物

土壙256

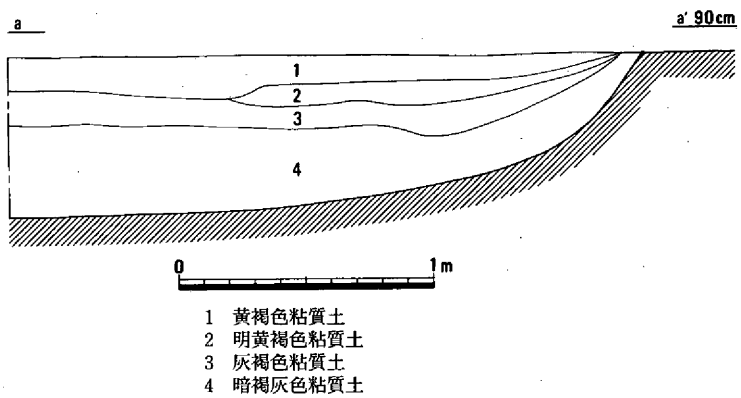
五反田Ⅲ区の南壁の西よりで検出された土壙である。側溝の掘り下げ中に南壁の土層断面観察で存在が明らかとなった。土壙256は径約0.7m、深さ約0.4mを測り、埋土は暗灰色粘質土である。土壙の層序から古墳時代以前の土壙と考えられるが、詳細は不明である。（金田）

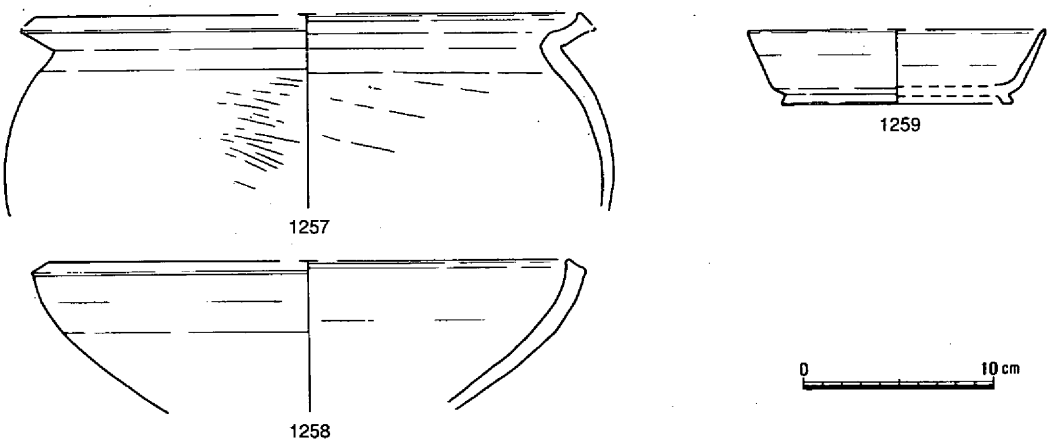
溝42

五反田Ⅰ調査区の西側端に位置する。この溝の上層には、溜まりがあってこれに切られる。この溝は、ほぼ真北から真南に向かって直線的に南流する。溝の幅は440cm前後で、深さは確認面から70～80cmになる。図化するほどの遺物はないが、時期は中・近世になると思われる。（小林）

溝43（第264図）

五反田Ⅱ調査区の北側端に位置する。調査区内では、東から西に向かって西流する。深さは確認面から62cmを測る。出土遺物は、**1257**が鉢、**1258**が高杯になり、弥生後期Ⅱ・Ⅲである。**1259**は須恵質の高台付椀になる。溝の存続期間は長かったと思われる。（小林）

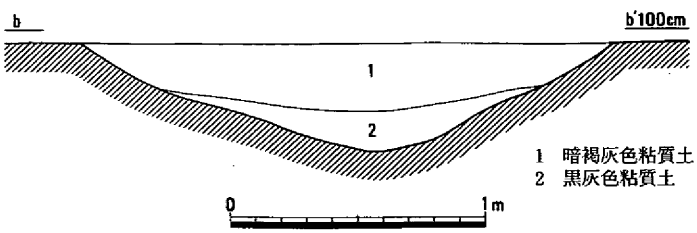




第264図　溝43土層断面（1/30）**・出土遺物**（1/4）

溝44（第265図）

五反田Ⅱ調査区の中央よりやや西側に位置する。南側から北側に北流し、溝43に注ぐ。幅は北側で210cmを測るが、南では２条に枝分かれする。深さは北側で42cmを測り、断面はⅢ形である。（小林）

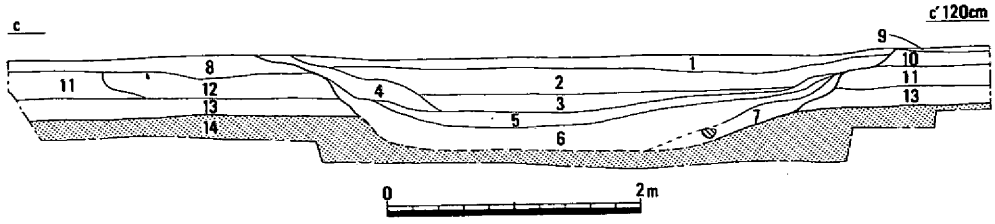


第265図　溝44土層断面（1/30）

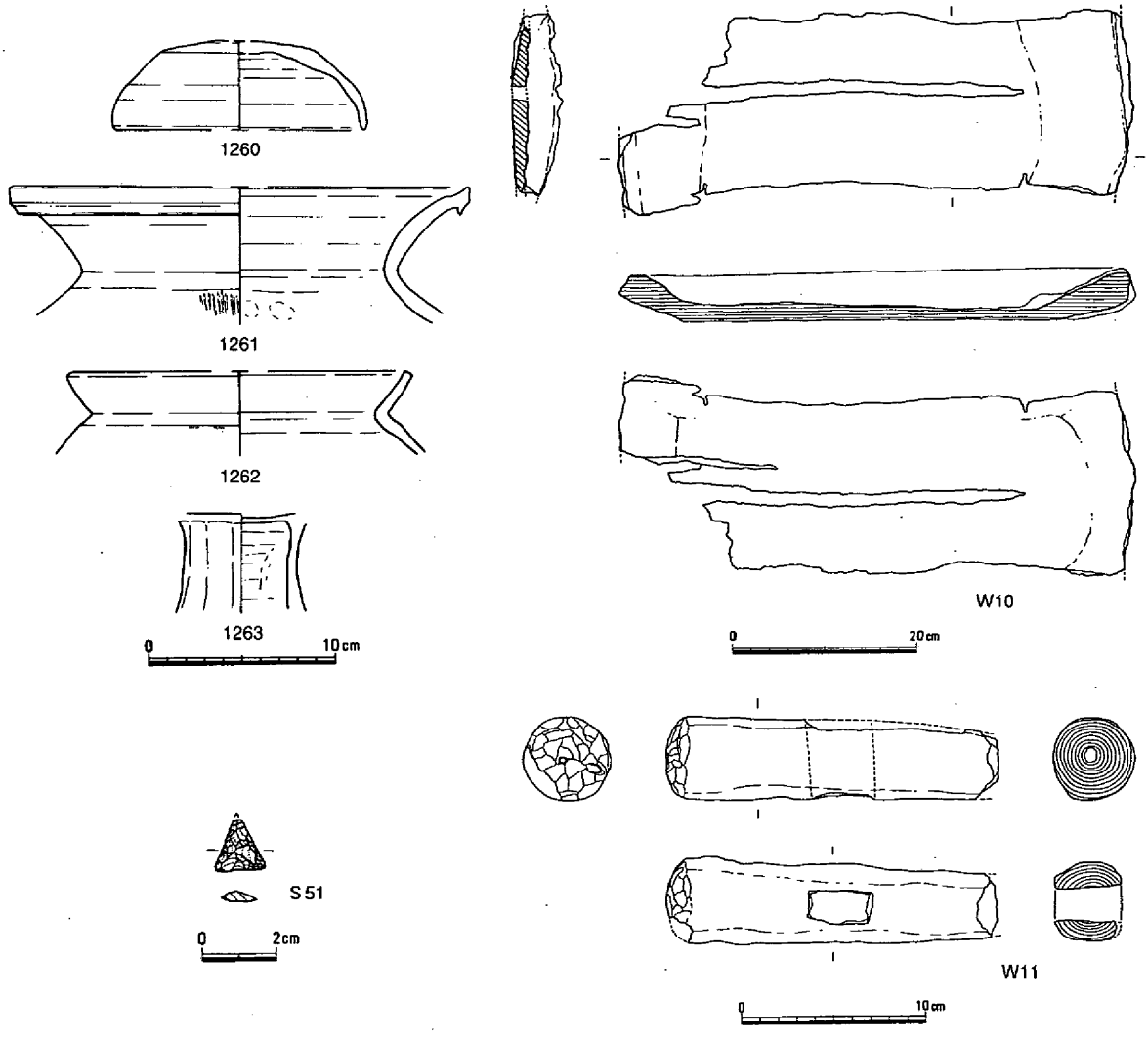
溝45・46（第266図）

五反田Ⅲ区を西から東に向かって流れる溝である。溝は土層断面観察から、最低２条の溝が確認でき、古い溝を溝45、新しい溝を溝46と呼称する。なお、溝の東端は溝47・48・49に切られている。

溝45は溝46より古い溝であるが、溝のラインを良好に検出することができなかった。第266図の土



1　にぶい黄灰色粘質土（Mn含）〈溝46〉
2　暗褐灰色粘質土〈溝46〉
3　黒褐色粘質土（炭化物含）〈溝46〉
4　暗褐色粘質土〈溝46〉
5　暗褐灰色粘質土〈溝46〉
6　暗灰色粘質土〈溝46〉
7　褐灰色粘質微砂〈溝46〉
8　暗黄褐色土
9　褐灰色粘質土
10　明黄褐色細砂
11　暗黄褐色粘質土
12　暗褐色粘質土〈溝45〉
13　淡灰色粘質土
14　暗灰色粘質土（明灰色混）



第266図　溝45・46土層断面（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

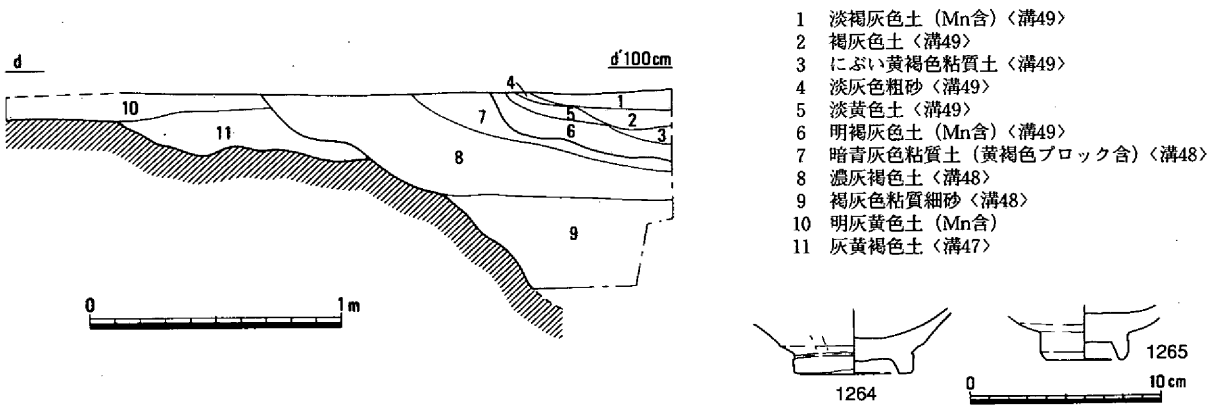
層断面図の第12層がこれに相当するが、他の場所で設けたトレンチでは、第12層に相当する層が検出できず、大部分が溝46で破壊されている可能性がある。

溝46は溝45より新しい溝である。幅は一定でなく、両岸が確認できるところで、４ｍ～６ｍを測る。深さは検出面から約0.75ｍである。溝46の埋土は粘質土を中心とする土で、上半部では鉄分およびマンガンの付着がみられた。また、下半部は非常に粘性の強い層で、中から土器、石器、木器が出土した。**1260**は須恵器杯蓋である。**1261**は須恵器甕である。**1262**はいわゆる「く」の字状の口縁をもつ土師器甕である。**1263**は土師器高杯の脚部である。土器表面の磨耗が激しく赤色顔料の付着は確認できなかった。**S51**は石鏃である。**W10**は槽である。長さ約55cm、残存幅約18cmを測る。樹種はニレ科ケヤキ属ケヤキである。**W11**は槌である。残存長約18cm、径約4.4cmを測る。中央部に長さ3.8cm、幅1.8cmの枘穴が設けられている。樹種はイヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤである。

以上の出土遺物から、この溝の時期は古墳時代から古代を中心に比定することができ、その形状から溝45・46は自然河道であった可能性が高い。　（金田）

溝47・48・49（第267図）

五反田Ⅲ区の東端を北から南に向かって流れる溝である。溝47～49は土層断面観察において切り合い関係が認められ、溝47が一番古く、つづいて溝48、溝49の順に新しくなる。溝の東岸はいずれも調査区外のため、溝の幅は不明であるが、深さは溝47で約0.2ｍ以上、溝48で約0.8ｍ以上、溝49で約0.3ｍ以上を測る。溝内からは若干の遺物が出土している。**1264**は近世陶器の高台と推測される。**1265**は青磁の高台である。これらの出土遺物から、溝47～49は中世から近世にかけて営まれたものと考えられる。なお、溝47～49は流路を若干東に変えつつも、現在の用水路に引き継がれているものと推測できる。　（金田）

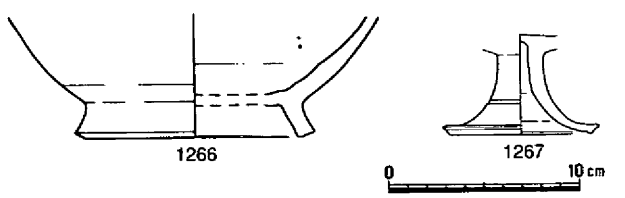


1　淡褐灰色土（Mn含）〈溝49〉
2　褐灰色土〈溝49〉
3　にぶい黄褐色粘質土〈溝49〉
4　淡灰色粗砂〈溝49〉
5　淡黄色土〈溝49〉
6　明褐灰色土（Mn含）〈溝49〉
7　暗青灰色粘質土（黄褐色ブロック含）〈溝48〉
8　濃灰褐色土〈溝48〉
9　褐灰色粘質細砂〈溝48〉
10　明灰黄色土（Mn含）
11　灰黄褐色土〈溝47〉

第267図　溝47・48・49土層断面（1/30）**・出土遺物**（1/4）

遺構に伴わない遺物（第268図）

五反田Ⅲ区では、遺構に伴ってはいないが、土器片が出土している。その中で図示しえたものとして第268図の須恵器があげられる。**1266**は須恵器壺の底部および高台部である。**1267**は須恵器高杯の脚部である。いずれも破片である。　（金田）



第268図　遺構に伴わない遺物（1/4）

第3節　九つ田調査区　調査の概要

九つ田調査区は県道箕島高松線との交差点の西側に位置する。調査は前年の一次調査により確認されていた微高地部分を中心に実施し、微高地の東西部分はトレンチにより、土層の堆積状況を確認し終了した。その結果、当調査区からは東西約50mの微高地を確認するとともに、僅かながら土壙4基、溝2条などを検出した。

調査区の基本層序は現耕作土（第1層）、褐灰色粘質土（第2層）、明灰色粘土（第3層）、暗灰色粘質土（第4層）、の4層に分層され、以下、微高地部分においては黄褐色粘質土の基盤層に達するのに対し、その東西部分は黒灰色粘質土層が堆積していた。なお、第1層を除きいずれも粘性が強く、また、遺物は上層から磨滅した土器数片、後記する溝から瓦片が出土したのみであった。

第4節　九つ田調査区の遺構

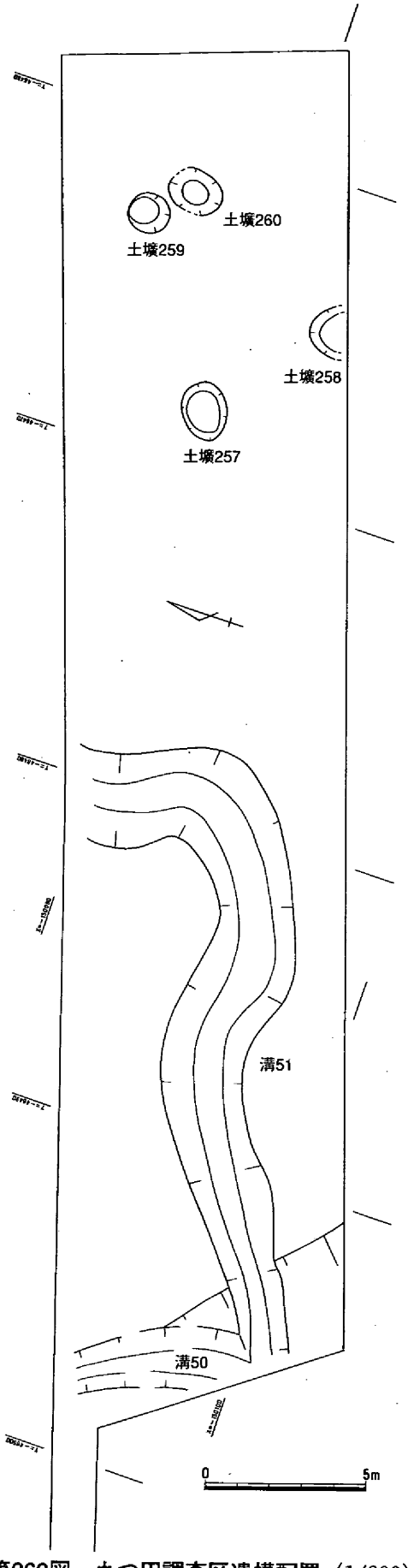
土壙257～260（第269図）

微高地の中央部から4基検出された。平面円～楕円形を呈し、規模は径1.2～1.8m、深さ20～40cm、底部の海抜は0.2mを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、土壙内は黄褐色粘質土塊と灰黒色粘質土塊が斑文を描くように堆積していたが遺物は皆無であった。

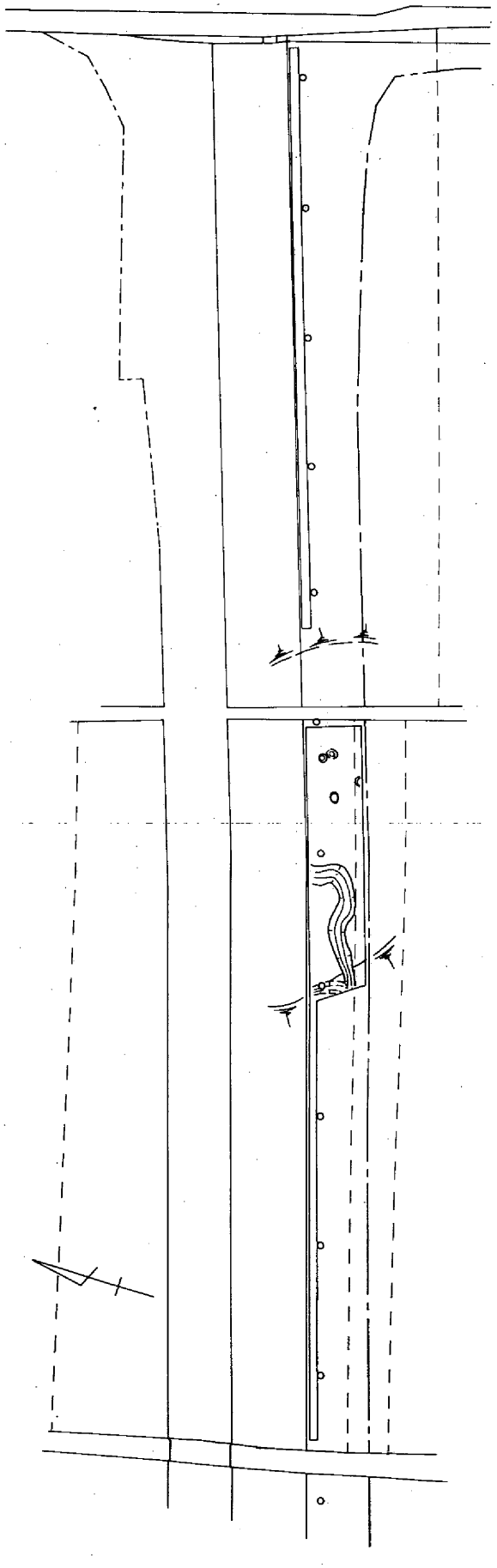
溝50・51（第269図）

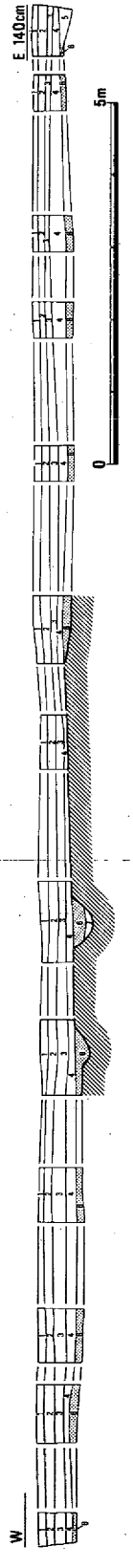
微高地の中央西寄りおよび微高地縁辺から検出された溝で、両者は微高地南西端で1条に合流するものと判断された。前者の溝51は蛇行しながら微高地西斜面に向かう。幅約2.5m、深さ約40cmを測る。断面は緩い逆台形状を呈し、埋土は黒灰色粘質土と暗灰色粘土の2層からなり、遺物は僅かに溝の肩口から瓦片が出土するにとどまった。破片は表面縄目、裏面布目痕跡を残すもので、このことから、当溝は古代以降に埋没したものと推定される。

一方、後者は北西から南東に延びる微高地西斜面付近を南流する溝で、幅約2m、深さ約40cmを測る。埋土は微高地周辺に堆積すると同様の黒灰色粘質土で、遺物は皆無であった。



（江見）　**第269図　九つ田調査区遺構配置（1/200）**





1　〈耕作土〉
2　褐灰色粘質土
3　明灰色粘土
4　暗灰色粘質土
5　暗灰色砂質土
6　黒灰色粘質土〈微高地の落ち込み部〉
7　暗灰色粘土〈溝51〉

第270図　九つ田調査区（上）・北壁断面（下）

第７章　まとめ

第１節　弥生時代の遺構

今回の調査を含め、３回の調査[1][2]では、弥生時代から中世までの遺構が検出されている。その中でも最も多いものは弥生時代であり、そのうち中期Ⅲから後期にかけてのものが大半を占める。この時期の遺構は全調査区から検出されており、まさに上東遺跡の中心をなす時期と言えよう。全調査区の中でもとりわけ東鬼川市調査区の遺構密度は最も高く、３回の調査を通じて竪穴住居が検出されたのは、全てこの調査区だけである。よってこの項では、東鬼川市調査区を中心に弥生時代の主要遺構の消長を時期別に見ていきたい。東鬼川市調査区は、鬼川市微高地の東側に位置する。鬼川市微高地自体、南北に長い微高地であり、３回の調査はこの微高地に東西方向に向けてトレンチを入れたようなものである。３回の調査を合わせても、微高地全体の１/10にも満たない面積であろう。よってここで述べることはあくまでも調査範囲内の話であり、必ずしも微高地全体を把握するものではない。

中期Ⅲ

中期Ⅲの主な遺構の数は、竪穴住居３軒、建物１棟などがある。いずれも98年度調査区内に存在し、３回分の調査区の中で見ると南側に集中する。また今回の調査区で言うと、東鬼川市Ⅱ調査区の西端に溝９・10という２条の溝もこの時期のものである。この溝は調査区内を北東方向から南西方向に流れ、その東側のみに竪穴住居や建物が築かれている。よって中期Ⅲの時期には鬼川市微高地全体に住居を築いていたのではなく、２条の溝から亀川調査区の落ち込みまでの狭い範囲のみを利用していたものと思われる。２条の溝は、おそらく同時に存在したものと思われ、当時は２重の区画溝であったろう。住居は３軒のみで、何れも５～６ｍ前後の規模になる。この規模は、次の時期である後期Ⅰの住居に比べると一回り小さい規模である。またこの３軒の住居は、いずれも建て替えが行われたという確実な証拠がない。この３軒の住居と溝９・10の調度間に、建物１が存在し、建物のみ住居とは隔絶した位置にあり、当時の空間利用の跡が伺える。土壙は数が少なく、住居と建物周辺に集中する。

この時期は遺構から出土する土器量も少ない。また住居の建て替えなどもほとんど行われなかったことも考えると、この微高地内での存続期間はきわめて短く、すぐ後期に入ったものと思われる。

後期Ⅰ

後期Ⅰの主な遺構の数は、竪穴住居４軒、井戸５基、袋状土壙１基、土器棺墓１基、頭蓋骨を埋めた土壙１基である。中期Ⅲの区画溝であった溝９・10はすでに埋まり、溝12の位置に溝があったと思われる。ただし10ｍもの規模はなかったと思われ、過去の調査時での溝３が南下していたと思われる。また同時期に溝11も築かれていたと思われ、中期Ⅲ同様２重の溝が住居を囲んでいた。ただし中期Ⅲとは違い、溝３（過去の調査）は北側にさらに伸びており、この時期には微高地の全体を集落として使用していたことが伺える。住居の数は４軒で中期Ⅲと比べて１軒しか増えていないが、３回の調査区を合わせた南側に住居５がある以外、残りの３軒は北側に集中している。この住居の配置から見ると、本来集落の中心は調査区のさらに北側に広がる傾向がある。井戸は４基あるが、この内住居５周

辺に３基が集中する。特におおむね住居５の北側に位置しており、この位置には袋状土壙１基も築かれている。北側の住居集中区と住居５の間には住居が築かれない空間があり、この位置に井戸や袋状土壙が築かれ、また多数の土壙が集中する。土壙は前時期に比べると格段と数が増え、しかも増えた土壙は集中する傾向がある。集中する箇所は２箇所で、前述した住居５の北側周辺と溝11周辺である。

４軒ある住居の規模は、いずれも８ｍ前後になる。この規模は、前時期の中Ⅲ期と比べると一回り大きくなる。しかし全ての住居が８ｍ前後になり、特別大きい住居もなければ小さい住居も存在しない。また住居５では最低でも３回の建て替えがあり、住居の存続期間は比較的長いと思われる。

この時期になると土器棺墓が出現する。位置は溝12のすぐ東側で住居がある区画とは離れた位置にある。また土器棺墓ではないが、頭蓋骨をそのまま埋葬した土壙26もこの時期であり、位置は溝11のすぐ東側でやはり住居区とは少し離れる。この溝12と11周辺は後々まで土器棺墓が築かれる地域で、この時期から墓域としての意識が芽生え始める。

後期Ⅱ

後期Ⅱの主な遺構は、竪穴住居６軒、井戸７基、土器棺墓１基、製塩炉１基、製塩土器を多量に出土する土壙１基である。土壙は後期Ⅰよりもさらに増える。この時期の区画溝はやはり、溝12周辺になると思われ、過去の調査における溝２がそうであろう。この溝２も調査区外の北側まで伸び、後期Ⅰ同様集落は、微高地全体に広がっていたものと思われる。他に溝11周辺にも依然として土壙が集中し、まだ溝11も存在していたと思われ、後期Ⅰ同様２条の溝が距離を置いて存在したであろう。

住居は６軒あるが、後期Ⅰの配置とほぼ一致する。すなわち調査区の北側では、過去の調査のＨ４・12・14・15が近接し、南側では住居６が築かれる。この２つの区画の間のは、後期Ⅰと同様住居が存在しない空間ができる。北側に集中する４軒の住居から、後期Ⅰ同様、さらに北側に住居が伸びると想像できる。また前時期とは違い、Ｈ８は今までに住居がない溝２（過去の調査）周辺に築かれる。

井戸は、ほとんどが溝２（過去の調査）周辺に集中する。この位置にはＨ８（過去の調査）もあり、前時期と比べてわずかに住居域が拡大する。このＨ８と他の２つの住居域を結んだ位置に生じた空間に製塩炉（過去の調査）が築かれる。また製塩土器を多量に廃棄した土壙が現れるなど、この時期に製塩という生業が行われるようになった。

住居は６軒あるが、その規模は、ほとんどが８ｍ前後になる。しかしＨ４（過去の調査）が8.5ｍ、Ｈ15（過去の調査）が９ｍとやや大きい住居が現れる。またＨ４・15（過去の調査）で小玉、Ｈ14で銅鏃と小玉、など土器以外の遺物を出す住居が増える。この時期は前回の後期Ⅰに比べて住居の数は増え、規模も内容も僅かに良くなる。しかし住居が建てられた位置は、後期Ⅰとあまり変わらない。

土器棺墓は、１基のみである。やはり溝12の東側に築かれている。土壙は、調査区内の全体に広がる。数自体も全時期を通して最大になる。住居６の北側の空間には、１ｍ弱で長楕円形の土壙が多数存在する。これらの土壙は総じて土器量が多く、中には獣骨を検出するものもある。井戸は前出した通り、Ｈ８（過去の調査）周辺に築かれるが、井戸枠を持つものがあるなど、後期Ⅰのものよりしっかりした作りである。

後期Ⅲ

後期Ⅲの主な遺構は、竪穴住居２軒、井戸４基、土器棺墓５基である。前時期に比べると、住居など主要な遺構だけでなく、土壙なども数が減る。唯一土器棺墓だけは５基存在し、数が増える。この時期ぐらいから、溝12は存在したと思われる。土器棺墓５が、位置的には溝11のすぐ東側にあるため、

この時期にも溝11が存在した可能性がある。竪穴住居は2軒で、数が減るだけでなく、位置も調査区の南側のみに限定される。この2軒の住居の規模は、住居8が6m前後、住居7が3.5mと小さくなる。住居7は、柱穴が2本しかなく、しかも南側に寄っている。砥石などの石器も多く出土しており、何らかの作業小屋である可能性が強い。もう1軒の住居8も確実な規模はわからず、前時期に比べると数も内容も劣る。しかし後期Ⅲの住居集中区が、調査区内外にあった可能性も否定できない(3)。

井戸は4基あるが、調査区内に散在しており、集中しない。土壙も調査区全体にあるが、特に集中区があるわけではなく、数も減る。唯一数が増える土器棺墓は、全てが溝12と11周辺に築かれる。この位置を、完全に墓域として意識していたのだろう。この墓域は北側には伸びず、調査区の南側に伸びるか、この周辺のみで収まるであろう。

後期Ⅳ

後期Ⅳの主な遺構は、竪穴住居3軒、土器棺墓1基で、井戸などは存在しない。竪穴住居は、前時期同様調査区の南側に集中し、全体には広がらない。竪穴住居のうち、H3（過去の調査）は、後期Ⅰ～Ⅲにかけて全く住居の無かった位置に築かれる。今まであまり変化の無かった住居域に、若干の変化が生じ始める。土器棺墓は1基のみで、検出されたものの中で最も小さいものが、墓域を離れて住居集中区の近くに築かれている。この時期には、おそらく溝12は埋まったであろう。3軒ある住居は、いずれも規模が小さい。住居の数が減るだけでなく、規模も減少するわけである。住居などの集中区が調査区外に移った可能性もあるが、包含層中の土器量は少なく、その可能性はうすい。

後期Ⅳの時期には溝12も埋まり、今まで無かった位置に住居が築かれるなど、集落のあり方に変化が見られる。土器棺墓も住居の近くに築かれ、今まで墓域として使っていた場所から離れる。ただし溝12周辺の墓域は、古墳時代に再び復活する。

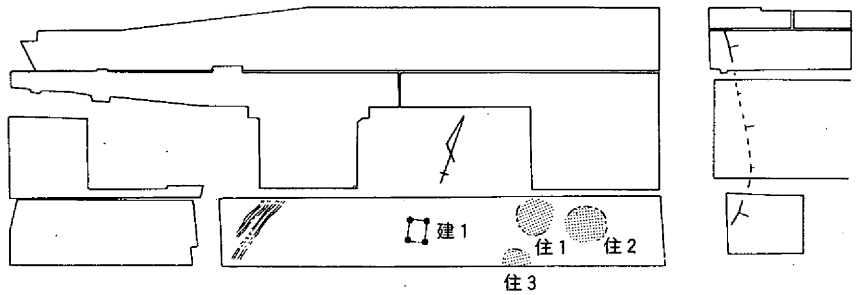
以上のように東鬼川市調査区では、集落が中期Ⅲから形成されるが、土器量・遺構数などから見て後期Ⅰ・Ⅱが中心となるであろう。とりわけ後期Ⅱの時期に集落の絶頂を迎えるものと思われる。そして後期Ⅲになると、集落自体は縮小に向かう。竪穴住居は後期Ⅰ～Ⅲを通じてほぼ同じ箇所に築かれており、時期ごとに一定の単位が微高地内を移動することはない。土器棺墓も、住居とは別な位置ではあるが、一定の個所につくられ続けている。後期Ⅳの時期になると、竪穴住居は若干位置を変え、土器棺墓にいたっては住居と同じ位置に築かれている。この時期の至って微高地内の空間利用に変化が現れるのである。このように竪穴住居などが、全ての時期を通じてほとんど移動することなく同じ箇所に作られ続けるということは、この東鬼川市調査区が上東遺跡全体を通して、最も集落として適した場所だったのだろう。上東遺跡の周りは、小林園子氏の分析にあるように、海に近いかもしくは湿地帯の様な場所であったことが予想される。この様なけっして立地条件の良くない箇所に集落を築かなければならない理由があったものと思われ、そのため他よりは少しでも良地である東鬼川市調査区に遺構を集中させたものと思われる。

（小林利晴）

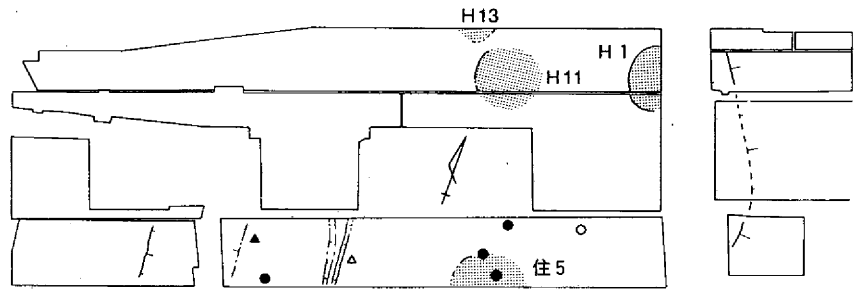
註

（1）伊藤晃・柳瀬昭彦・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第二集　岡山県教育委員会　1974年
（2）柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977年
（3）高畑知功「弥生時代の津寺遺跡」「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 岡山県教育委員会　1998年

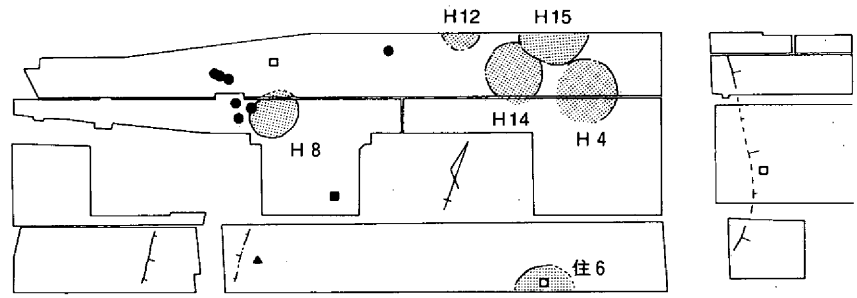
弥・中・Ⅲ～後・Ⅰ古



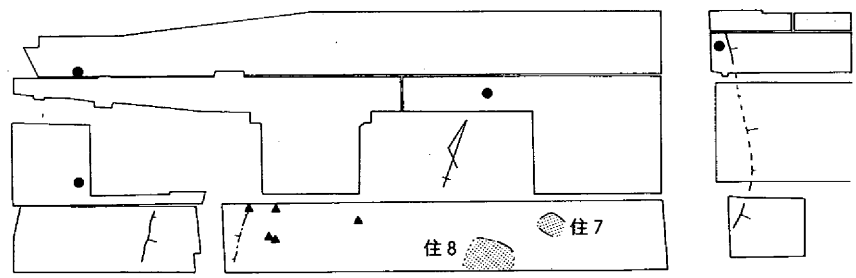
弥・後・Ⅰ



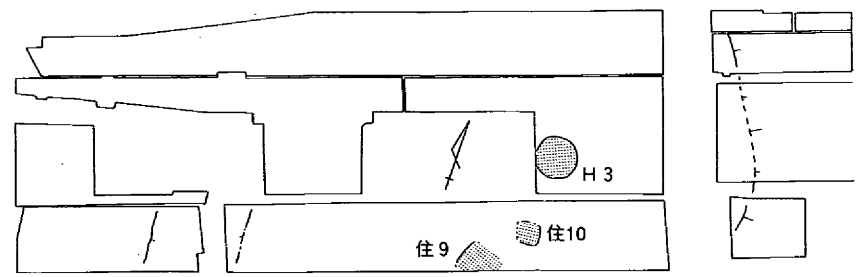
弥・後・Ⅱ



弥・後・Ⅲ



弥・後・Ⅳ



⬭：竪穴住居　⬚：建物　●：井戸　○：袋状土壙
▲：土器棺墓　△：人骨埋納土壙　■：製塩炉　□：製塩土壙だまり

第271図　鬼川市微高地　弥生時代主要遺構変遷図（1/1,000）

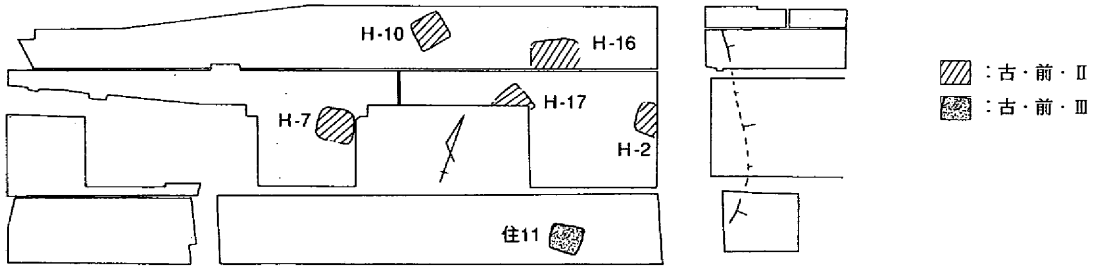
第２節　古墳時代のまとめ

今回の調査で確認した古墳時代の遺構は、竪穴住居１軒、建物１棟、土壙８基、土器棺墓１基、井戸４基、水田１、溝７条などであり、現時点では集落構造を具体的に把握できる状況ではないが、過去の調査成果[1]を踏まえつつ、主要遺構についてまとめておく。

古墳時代の竪穴住居は過去２回の調査成果を含めると、古・前・Ⅱが５軒、古・前・Ⅲが１軒であり、古・前・Ⅰの住居は今のところ検出されていない。住居はいずれも鬼川市微高地の東側に立地しており、集落内で居住域が限定されているように見受けられる。住居の平面形は方形・隅丸方形を呈しており、規模は一辺が約４ｍ強のものがほとんどであり、規模のうえで突出している住居の存在は認められない。古・前・Ⅲに属する住居は現時点では１軒のみであり、前段階と比べて激減している。

今回の調査における特筆すべき成果は、田所調査区における水田遺構の検出である。時期は古墳時代後期に比定され、水田域は田所調査区の低位部に展開しており、南西方向に広がることが想定される。水田は一面が約２坪前後の小区画水田であり、ほぼ東西方向に整然と区画されている。中世以前の上東遺跡は旧海岸線が付近まで及んでいたと想定されており、塩害等の影響で当地の水田経営は困難であるように思われるが、海岸付近の稲作技術について今後検討する必要があろう。

このほか古墳時代の上東遺跡における集落の構成要素として井戸があげられる。井戸は下田所微高地で１基、才の元微高地で５基確認しており、いずれも古墳時代初頭に属する。井戸の周辺では住居・建物は認められず、微高地の中心に居住域、微高地の縁辺部に井戸が配置されていることが示唆



第272図　鬼川市微高地　古墳時代前期主要遺構変遷図（1/1,000）

第１表　微高地別遺構消長

時期＼微高地	才の元	下田所	鬼川市	才の町
弥・中・Ⅲ				
弥・後・Ⅰ				
弥・後・Ⅱ				
弥・後・Ⅲ				
弥・後・Ⅳ				
古・前・Ⅰ				
古・前・Ⅱ				
古・前・Ⅲ				

される。なお井戸については次節でまとめているので参照されたい。

また東鬼川市調査区西側では５世紀末に比定される土器棺墓10を検出した。古墳時代の土器棺墓は県内では類例が少なく、矢部58号墳・10号墳、郷境５号墳、津寺遺跡、斎富古墳群、長坂１号墳で確認されている程度である[2]。県下における弥生～古墳時代の土器棺墓については草原孝典氏がまとめており、棺身の使用では弥生時代の原理を踏襲している傾向にあるが、矢部58号墳・長坂１号墳の土器棺には多くの土器を組み合わせる厚葬傾向が認められるという。古墳時代中期の土器棺墓はこれまで皆無であり、本遺跡が初例と思われる。土器棺墓10は時期的に希少であると同時に、土器棺の蓋として製塩土器が用いられている可能性があるため、棺身と蓋の器種構成が極めて特異と言える。

古墳時代の上東遺跡は、全体として遺構数・密度とともに弥生時代と比べると急激な縮小傾向にある。弥生時代は鬼川市微高地を中心として夥しい遺構が幾重にも切り合うように集中しており、弥・後・Ⅱに全盛期を迎える。そして弥・後・Ⅳごろから才の町微高地において井戸が見られるようになり、次第に他の微高地でも遺構が認められるようになる。古・前・Ⅰ以降、鬼川市微高地において集落が継続する一方で、下田所・才の元微高地へ集落が拡散し、古・前・Ⅲには全体的に遺構数が激減、そして廃絶する。鬼川市微高地は古墳時代に移行しても竪穴住居が集中して配され、弥生～古墳時代を通して上東遺跡の中核的な集落と言える。しかし、鬼川市微高地では古・前・Ⅲに住居が前段階の５軒から１軒に激減しており、それ以降は終息し、古墳後期に建物・土器棺墓が散見されるまで、集落形成に空白期間が認められる。上東遺跡では古・前・Ⅰになって本格的に鬼川市以外の微高地に集落が拡散するが、才の町・下田所・才の元微高地では集落の縁辺部を調査しているに過ぎないため、各微高地の集落構造については把握が困難で、資料不足の感は否めない。鬼川市微高地の空白時期に他の微高地で集落が存続していることも否定できないが、鬼川市・亀川調査区以外では古・前・Ⅱ以降の遺構・遺物が認められないため、その可能性は低いように思われる。

弥生時代から続く集落が古・前・Ⅲに廃絶・縮小する傾向は、備中地域では足守川流域の津寺遺跡、足守川加茂Ａ遺跡・足守川加茂Ｂ遺跡・足守川矢部南向遺跡、備前地域では旭川流域の百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡などでも見られる。各遺跡の規模は様々であるが、古・前・Ⅲに集落が衰退するという点で共通している[3]。逆に古・前・Ⅲ～古墳時代中期に集落が拡大する遺跡として、備前地域の百間川兼基・今谷遺跡、備中地域の高塚遺跡があげられる[4]。各地域の集落遺跡は古・前・Ⅲを画期として、廃絶・縮小する集落が存在する一方、別の集落が出現・拡大するようになり、岡山県南部の各地域で集落の再編が行われた可能性が高い。こうした現象は隣接する集落遺跡のみならず、各地域の古墳の動向も踏まえて捉えるべきであろうが、問題が極めて多岐にわたるため、小稿では避けたい。

（米田克彦）

註

（１）ａ．伊藤晃ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第二集　岡山県教育委員会　1973年
　　ｂ．柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第16集　岡山県教育委員会　1977年

（２）草原孝典「土器棺について」『長坂古墳群』岡山市教育委員会　1999年
　　草原氏の集成に加え、県内の古墳時代の土器棺墓出土例を報告したものに以下の文献がある。
　　伊藤晃ほか「松尾古墳群　斎富古墳群　馬屋遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会　1995年

（３）平井勝「岡山における弥生時代のムラとクニ（上）」『古代吉備』第21集　古代吉備研究会　1999年

（４）弘田和司「古墳時代の集落について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第150集　岡山県教育委員会　2000年

第3節　上東遺跡における井戸の様相

はじめに

近年における井戸の研究は、宇野隆夫氏[1]によって総合的に集約された後に進展する。各地域の井戸の様相については、中野雅美氏[2]が岡山県南部を、藤田三郎氏[3]が奈良県・大阪府を中心にまとめている。特に中野氏は岡山県南部主要遺跡の弥生～古墳時代の井戸を集成し、井戸の変遷、各集落内における井戸のあり方について言及し、岡山県南部における井戸の地域的特徴を示唆している。最近では堀大介氏[4]が全国的な規模で井戸を考察し、その成立を渡来技術と関連づけている。また大和弥生文化の会[5]が大和地方の弥生集落の井戸について研究報告を行い、井戸研究の現状と課題が認識された。

上東遺跡では1973年・1977年の調査成果[6]に加え、1998年度の調査においても新たに8基の井戸を検出したため、弥生～古墳時代の井戸は計29基を数える（第2表）。これに対し、弥生時代中期後半～古墳時代前期の竪穴住居は24軒検出されており、上東遺跡は主要遺構のなかで井戸の占める割合が比較的高いことが考えられる。これは上東遺跡において井戸が集落を形成するうえで必要不可欠な存在であったことを表しているとも捉えられる。そこで本節では、上東遺跡における井戸の様相について明らかにすることで、上東遺跡の集落構造の一端を探る足がかりとしたい。

1．井戸の配置

上東遺跡で確認された弥生～古墳時代の井戸は計29基であり、そのうち弥・後・Ⅰが6基、後・Ⅱが9基、後・Ⅲが5基、後・Ⅳが3基、古・前・Ⅰが6基であり、全てが微高地上に立地している。

第271・272図に従って、集落内における各時期の井戸の配置について見ていきたい。弥・後・Ⅰは住居に隣接して設けられており、竪穴住居付属の井戸が存在する。弥・後・Ⅱには、井戸の配される場所が鬼川市調査区の中央北西寄りに集中しており、住居・土器棺墓・製塩炉もそれぞれ地点に偏りが認められる。つまり、集落を構成する遺構の種別によって、微高地の空間的利用を分化している可能性が高く、当該期の井戸は集落縁辺部の定められた場所に配置するように規制されていたと考えられる。弥・後・Ⅲになると、井戸は居住・墓域から離れた集落縁辺部に散在しており、井戸が一箇所に集中してみられた前段階とは様相を異にする。弥・後・Ⅳの才の町微高地では集落縁辺部に集中して配される傾向が認められ、古・前・Ⅰには下田所・才の元微高地においてもその状況が確立されるように思われる。全体としては、時期が下るにつれて井戸が住居から次第に離れた地点に設けられる傾向が伺える。

2．井戸の形態・規模

上東遺跡における井戸の構造は、素掘りが25例、井戸側（いどがわ）を有すもの（可能性があるものを含む）が4例あり、各時期を通して素掘り井戸が主流と言える。井戸側は、縦板を平面が円形になるように組むものに限定され、弥・後・Ⅱ～Ⅲの鬼川市微高地のみで認められる。比較的深く掘削している井戸に井戸側を有しており、地下壁面を補強しているように判断される。

平面形は井戸側の有無に関わらず、円形・不整円形を呈するものが多い。その規模は径70～210cmまでと幅広いが、井戸の平均的な径の規模は各時期で変化していることが言及できる。弥・後・Ⅰは径80cm前後と径200cm前後の2タイプ、後・Ⅱは径80～160cm、後・Ⅲは径130cm前後、弥・後・Ⅳの様相は把握しづらい。古・前・Ⅰは径150cm前後が主流であり、各時期にそれぞれの井戸の規格が存

在していた可能性がある。井戸は湧水地点に達するまで掘削されるため、深さは一定ではないが、底面海抜高は各微高地単位でまとまった傾向を見せ、現在の足守川右岸に隣接する才の町微高地では井戸の底面海抜高が他の微高地と比べて低い。断面形はＹ字形（下部が円筒形で上部が擂鉢状に開くもの）、Ｕ字形（壁面が垂直に近い円筒形を呈すもの）・逆台形（壁面がある程度の傾斜を持つ円筒形を呈すもの）に分類でき、逆台形のもの半数を占める。しかしながら、断面形の差異に、井戸の構造・形態・時期的変化との相関関係は見受けられない。また井戸の土層断面を観察する限り、井戸の拡張・再利用を行っているような堆積状況や、上下各層から出土した土器などに時期差が認め難いことから、井戸の掘削から使用・放棄までの期間は比較的短いことが想定される。

３．井戸からの遺物出土状況

井戸は、集落から離れた河川や湧水・天水などから水を確保することに比べると、集落内で安全かつ安定的に水が得られるため、その存在意義は大きい。そのためか、井戸からは多種多様な遺物が出土したり、井戸下層に完形土器（完形に近い土器を含む）が意図的に放置されている状況が認められることから、井戸の放棄における「祭祀」と関連づけられることも少なくない。

上東遺跡の井戸から出土する遺物の大半は土器であるが、井戸によっては木製品・種子・打製石包丁・石錘などが出土することもあり、その主な出土位置は上層・中層・下層に大別できる。上層は井戸上部にレンズ状に堆積した土層を示し、井戸放棄後の混入の可能性が高い。中層は上・下層との間層を示すが、中層から遺物が出土する在り方は各遺跡・井戸によって異なるため、必ずしも中層から出土する遺物が人為的に廃棄されているとは言えない。下層から出土する遺物は完形土器が多く、土器の器種的な偏りが認められることから、井戸放棄時もしくはその直後に遺物が意図的に放置された可能性が極めて高い。井戸からの遺物出土位置は弥・後・Ⅰ～Ⅲまでは上層・中層が大半を占め、弥・後・Ⅳ～古・前・Ⅰは下層が主流となり、時期的変化を明示している。第２表には報告書掲載点数をもとに土器の器種別個体数を記しており、この数値は本来の器種構成を表しているわけではない

第２表　上東遺跡　時期別井戸一覧

No.	調査区	遺構名	時期	構造	平面形	断面形	長軸cm	短軸cm	深さcm	底面海抜高cm	出土層	壺	甕	高杯	器台	鉢	椀	鍋	ミニ	木製品	種子	その他
1	才の町77	P-2	弥後Ⅰ	素堀り	円	U字	70	-	140	-100	上	1	1	2		1				桶・匙	ウリ・モミ	打製石包丁1
2	才の元74	井戸Ⅲ	弥後Ⅰ	素堀り	円	Y字	180	170	60	57		6	3	7						加工木		打製石包丁片1
3	東鬼川市Ⅱ	井戸1	弥後Ⅰ	素堀り	円	不整逆台	90	-	98	48	中	1	4							鍬	モモ・クリ・ソラマメ・ウリ	
4	東鬼川市Ⅱ	井戸2	弥後Ⅰ	素堀り	円	逆台	83	-	98	46			1					1				石錘3、砥石1
5	東鬼川市Ⅱ	井戸3	弥後Ⅰ	素堀り	不整円	Y字	(194)	-	93	66	中	1								台・鋤・杵・蓋	モモ	
6	東鬼川市Ⅱ	井戸4	弥後Ⅰ	素堀り	楕円	U字	210	(140)	80	46					1					匙・えぶり・又鋤・不明		土器円板1
7	才の町77	P-1	弥後Ⅱ	素堀り	不整円	Y字?	80	20	200	-100	中下	4	6	4		1	1	1			米・アワ	
8	才の町74	P-イ	弥後Ⅱ	素堀り	円	Y字	150	130	330	-22	中	4	20	10	2	7				竪杵		土器円板1
9	東鬼川市77	4P-2	弥後Ⅱ	素堀り	円	逆台	90	80	140	3	上	1	6	2	1	1		3		又鋤		ガラス玉
10	東鬼川市77	4P-3	弥後Ⅱ	素堀り	円	逆台	100	-	140	0	中	1	11	1			1	3				鉄器1
11	東鬼川市77	4P-1	弥後Ⅱ	素堀り	円	逆台	110	-	150	22	上	1	6	2		2			1	鋤・槍・盾・不明		
12	東鬼川市77	7P-2	弥後Ⅱ	縦板組	円	逆台?	160	145	120	33以下	中	1	4	2		1						
13	東鬼川市74	P-2	弥後Ⅱ	素堀り	不整楕円	Y字	205	-	(135)	-15	中	1	1	1				10		きぬた		
14	東鬼川市74	P-3	弥後Ⅱ	縦板組	不整円	Y字	200	-	140以上		上	1	11	6		1		200				
15	東鬼川市74	P-4	弥後Ⅱ	縦板組	隅丸方形	逆台	125	115	152以上		上	1	5	2	3			20		槽・浮き・又鋤・建材		
16	才の町74	P-ハ	弥後Ⅲ	素堀り	円	逆台	140	-	155	-25		2	15	11	1	7		1				
17	亀川77(東鬼)	P-2	弥後Ⅲ	素堀り	円	U字	120	-	150	-17	上下	3	3	3		2			3	作業台		
18	東鬼川市77	P-2P-38	弥後Ⅲ	素堀り	円	逆台	80	70	130	12	中	3	3	5		3		1				
19	東鬼川市74	井戸Ⅰ	弥後Ⅲ	縦板組	不整円	逆台	180	-	156以上		上	4	26	15		7						
20	東鬼川市74	井戸Ⅱ	弥後Ⅲ	素＋板	不整円	逆台	130	-	150以上		上	4	7	2		20						
21	才の町74	P-ヘ	弥後Ⅳ	素堀り	円	U字	100	-	160	-24	上下	5	30	13		4			2			
22	才の町74	P-ニ	弥後Ⅳ	素堀り	不整円	?	160	-	200	?			4	4		2		1				
23	才の町74	P-ト	弥後Ⅳ	素堀り	楕円	Y字?	210	140	260	-148	中下	17	37	10	1			1				
24	才の元74	P-2	古前Ⅰ	素堀り	円	逆台	80	-	86	27	下		2									
25	下田所77	P-4	古前Ⅰ	素堀り	不整円	U字?	150	130	110	22	上下	1	15	3		1						
26	才の元Ⅲ	井戸5	古前Ⅰ	素堀り	不整楕円	逆台	160	128	112	16	上下	2	2	1								
27	才の元Ⅲ	井戸6	古前Ⅰ	素堀り	不整円	逆台	130	-	121	-5	上下	3	11	1		1						
28	才の元ⅢⅣ	井戸7	古前Ⅰ	素堀り	不整円	逆台	147	-	(145)	(-20)	上	1	8	13		3	3					
29	才の元Ⅳ	井戸8	古前Ⅰ	素堀り	不整円	Y字	188	-	(116)	(20)	下		1									

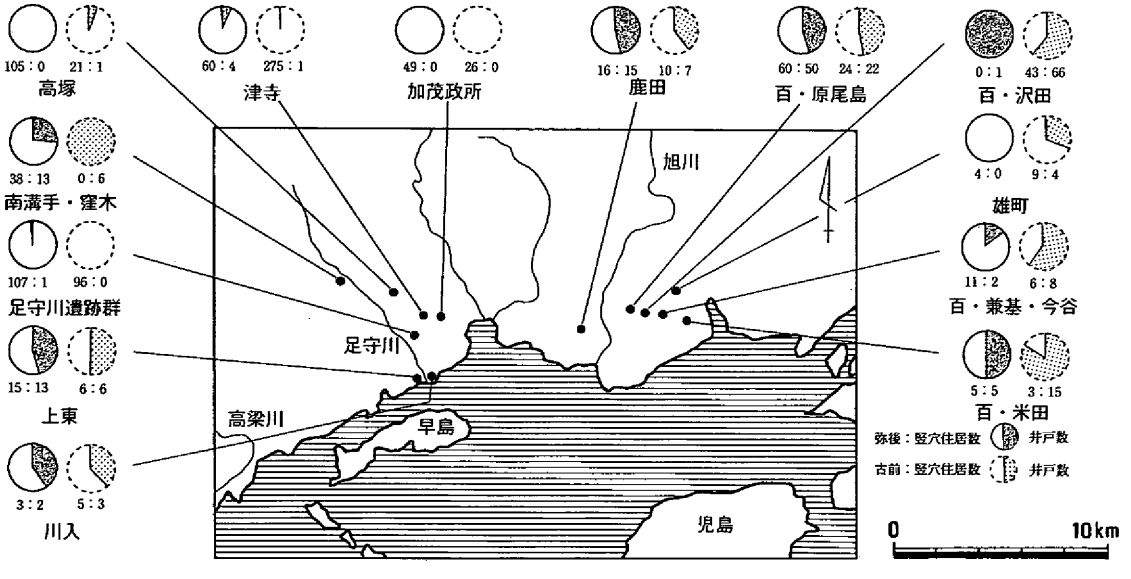
が、その傾向に大差はないことを前提とし、論を進めたい。弥・後・Ⅰは器種が偏っている遺物は認め難い。後・Ⅱになると上・中層から比較的多くの器種が出土しており、特に甕と高杯の個数が多いが、突出しているような状況ではない。また当該期には製塩土器も多く出土しており、東鬼川市74のＰ－３・４最上層は製塩土器廃棄場として利用されている。後・Ⅲは多くの器種が認められ、個体数も前段階より多い。中でも甕の比率が高いが、高杯・鉢も目立つ。後・Ⅳは下層に完形の甕が放置されるようになる。特に才の町74のＰ－トからは下層に６個体の完形甕・木製品、中層からは30個体以上の完形甕が一括投棄されており、井戸放棄が人為的に行われた可能性が示唆される。古・前・Ⅰは下層から完形甕が出土する例が多く認められ、器種も甕の比率が高い。

以上のように、弥・後・Ⅰ～Ⅲは井戸の中～上層に土器が多く見られることから、井戸放棄後に遺物の廃棄場として利用され、井戸放棄が人為的に行われた状況は認め難い。しかし弥・後・Ⅳには井戸下層に完形土器を放置する兆候が認められ、古・前・Ⅰにはその行為が確立したと考えられる。この時期は井戸が集落縁辺部に配置される時期でもあり、上東遺跡において井戸の在り方が変化する画期となる。古・前・Ⅰになると、個々の井戸と単一住居が相関関係に存在することから、各住居ごとに井戸放棄における祭祀的行為が行われたことが示唆されているが[7]、この現象がその現れだろうか。

４．岡山県南部の集落遺跡における井戸の保有率

現在、岡山県南部の主要な集落遺跡で確認された弥生～古墳時代の井戸は、管見によると総計で約245基にも及ぶ[8]。この数値は弥生時代の大和における井戸の事例数[9]と比較しても決して少なくない。第273図は弥生～古墳時代の岡山県南部の主要集落遺跡における竪穴住居と井戸の事例数をグラフに置き換えたものである。集落の構成要素は多岐にわたるため、竪穴住居と井戸だけで集落内の井戸の保有率を求めることは適当ではないが[10]、今回はこの二者によって求めた。

第273図によると、遺跡によって井戸の比率が大きく異なる。足守川河口付近の上東遺跡、川入遺跡は隣接する集落で井戸の比率が約40～50％あり、ほぼ同じ傾向を示す。足守川下流域にはいくつかの拠点集落が展開するが、高塚遺跡、津寺遺跡、加茂政所遺跡、足守川（加茂Ａ・加茂Ｂ・矢部南向）



第273図　岡山県南部の集落遺跡における井戸の比率（1/350,000）

遺跡では、多数の竪穴住居に対して井戸数が皆無に近い。調査頻度によることも否定できないが、多数の遺構が検出されているのにも関わらず、井戸が少ない（無い）という傾向が近隣する集落で共通して認められることからその可能性は低い。足守川中流域の南溝手・窪木遺跡は小規模な拠点集落ながら井戸の比率は高く、下流域の拠点集落とは様相を異にする。旭川下流域右岸の鹿田遺跡、左岸の百間川原尾島遺跡は各時期を通して45％前後の井戸の比率を示しているが、百間川沢田、兼基・今谷、米田（旧当麻）遺跡では古墳時代になると井戸数が竪穴住居数を大きく上回り、興味深い。

このように井戸の数・比率によって集落を見た場合、集落における井戸の在り方は隣接する遺跡で共通しており、小地域性を形成をしていることが考えられる。また同一水系でも足守川下流域と河口付近の遺跡では顕著に差異が認められる。足守川下流域の拠点集落で井戸が少ない（無い）ことは、集落内や近辺に良好な水供給地が存在していた可能性があることも考慮しておく必要があろう。

おわりに

小稿では上東遺跡における井戸の配置、形態・規模、遺物の出土状況についてまとめ、井戸の配置や遺物の出土状況から、弥・後・Ⅳを画期として集落内の井戸の在り方に変化が生じることを示唆した。上東遺跡では井戸は集落内で重要な位置づけにあり、その配置は集落を有機的に形成するために規制されていたと考えられる。また岡山県南部の集落遺跡では井戸の多い集落と少ない集落があり、集落内の井戸保有率に小地域性が認められる。岡山県は弥生～古墳時代の井戸の事例数が多く、集落遺跡におけるその重要性が高いため、その研究によって県内の集落遺跡の構造をより具体的に明らかにできる可能性がある。さらに、未だに増加傾向にある井戸の事例を整理することで岡山県南部における井戸の様相を把握し、他地域との比較を通して地域的特徴を捉えねばならない。　（米田克彦）

註

（１）宇野隆夫「井戸」『弥生文化の研究　第７巻　弥生集落』雄山閣　1986年

（２）堀大介「井戸の成立とその背景」『古代学研究』第146号　古代学研究会　1999年

（３）中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸－岡山県南部の沖積地集落を中心に－」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論集刊行会　1988年

（４）藤田三郎「弥生時代の井戸－奈良・大阪の井戸を中心に－」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ　1986

（５）大和弥生文化の会『みずほ』第30号　1999年

（６）ａ．伊藤晃ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　岡山県教育委員会　1973年
　　ｂ．柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第16集　岡山県教育委員会　1977年

（７）註3文献

（８）註3文献による集成のほかに、岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74・84・88・94・97・98・100・104・106・107・114・116・119・120・124・127・138・150、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第６冊　1993年による成果を加えた。

（９）川上洋一「大和の井戸と周辺」註５文献

（10）それぞれの事例数が少ない場合、確認数が多い遺構があたかも集落を占有しているような状況を示すが、それは調査頻度に大きく起因しているため、比率そのものが本来の様相を示すものではないことを断っておく。

付載　自然科学分野における分析・鑑定

付載１　岡山県、上東遺跡のプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

上東遺跡田所の発掘調査では、土層壁面において畦畔状の盛り上がりが認められたことから、当時の水田跡ではないかと考えられた。そこで、当該層における稲作の確認とその他の層における稲作跡の探査を目的にプラント・オパール分析を行うことになった。

２．試料

調査地点は南壁面である。分析試料は、上位より暗褐色灰色粘質土（試料１）、灰褐色粘質土（試料２）、褐灰色粘質土（試料３）、褐灰色粘質土（試料４）の４点である。このうち、畦畔状の盛り上がりが認められていたのは試料２の層準である。

３．方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976)」をもとに、次の手順で行った。

１）試料土を絶乾（105℃・24時間）する。

２）試料土約１ｇを秤量後、ガラスビーズ（直径約40μm 、約0.02ｇ）を添加する。

　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電気炉灰化法により有機物を処理する。

４）超音波（300W・42KHz・10分間）により試料を分散する。

５）沈底法により微粒子（20μm 以下）を除去後乾燥する。

６）封入剤（オイキット）中に分散しプレパラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネ（赤米）は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、ネザサ節型は0.48、クマザサ属型（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

４．分析結果

試料１～４について分析を行った結果、イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科（ネザサ節型，クマザサ属型）のプラント・オパールが同定された。これらについて定量を行い、その結果を表１、図１に示した。主要な分類群については巻末に顕微鏡写真を示す。

５．考察

（１）上東遺跡における稲作の可能性

畦畔状の盛り上がりが認められた試料２では、分析の結果イネのプラント・オパールが検出された。したがって、当該層は水田耕作層と考えられる。なお、プラント・オパール密度は1,300個／ｇと水田跡を判断する際の基準値である5,000個／ｇに対し低い値である。このことの要因として以下のようなことが考えられる。すなわち、１）耕作期間が非常に短かった、２）稲藁の大部分が水田の外に持ち出されていた、３）稲の生産性が低かった、４）耕作土が流失あるいは人為的に移動されたなどである。

試料１，３および４でもイネのプラント・オパールが検出されている。ただし、プラント・オパール密度は1,300～1,500個／ｇとここでも低い値である。したがって、これらの層準においても稲作が行われていた可能性が考えられるものの、耕作域はあるいは本地点ではなく近辺であったかもしれない。

（２）プラント・オパール分析から推定される植生・環境

試料４～１では、イネの他にススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型のプラント・オパールが検出されている。こうしたことから、これらの層の堆積時の周辺は、多くはないがネザサ節やクマザサ属さらにススキ属の生育するイネ科植生であったと推定される。なお、試料３および２の堆積時は一部にヨシの生育する湿地が存在していたと推定される。

６．まとめ

上東遺跡においてプラント・オパール分析を行い稲作跡の検証と探査を試みた。その結果、畦畔状遺構の検出されていた試料２の層準からは低密度ながらイネが検出されたことから、当該層において稲作が行われていたことが確認された。また、試料１，３および４の層準においても稲作の行われていた可能性が認められた。ただし、いずれも低密度の検出量であったことから、耕作域は調査地点の周辺であった可能性が高いと推察された。なお、各層準の堆積時はネザサ節やクマザサ属さらにススキ属が部分的に生育するイネ科植生であったと推定された。また、試料３および試料２の時期は近傍にヨシの生育する湿地が存在したと推定された。

参考文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー，考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）ー福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）ープラント・オパール分析による水田址の探査ー，考古学と自然科学，17，P.73-85.

表1　岡山県、上東遺跡のプラント・オパール分析結果

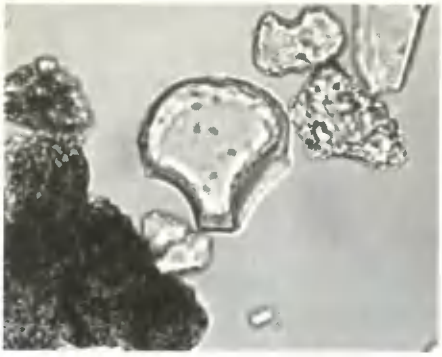
検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）	試　料	南壁(層)			
		1(4)	2(6)	3(9)	4(10)
イネ科	Gramineae(Grasses)				
イ　ネ	*Oryza stiva(domestic rice)*	*15*	*13*	*14*	*13*
ヨシ属	*Phragmites*		*13*	*7*	
ススキ属型	*Miscanthus type*	*7*	*7*	*7*	*13*
タケ亜科	Bambusoideae(bamboo)				
ネザサ節型	*Pleioblastus sect Nezasa type*	*52*	*99*	*20*	*44*
クマザサ属型	*Sasa(except Miyakozasa)type*	*82*	*40*	*27*	*57*
その他	Others	*15*	*7*	*7*	*6*
未分類等	Unknown	*275*	*112*	*137*	*146*
プラント・オパール総数		*446*	*291*	*219*	*279*

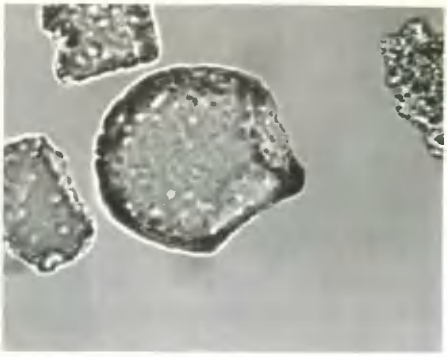
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イ　ネ	*Oryza stiva(domestic rice)*	*0.44*	*0.39*	*0.40*	*0.37*
ヨシ属	*Phragmites*		*0.83*	*0.43*	
ススキ属型	*Miscanthus type*	*0.09*	*0.08*	*0.08*	*0.16*
ネザサ節型	*Pleioblastus sect Nezasa type*	*0.25*	*0.48*	*0.10*	*0.21*
クマザサ属型	*Sasa(except Miyakozasa)type*	*0.61*	*0.30*	*0.20*	*0.43*

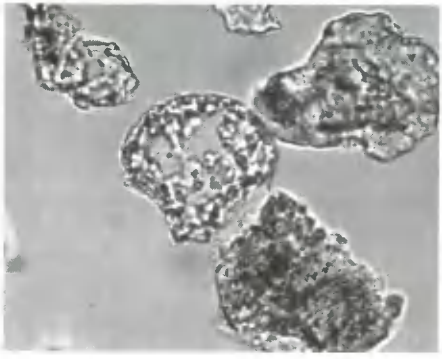
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



1．イネ　南壁　2

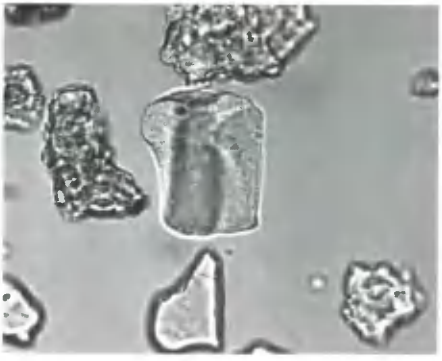


4．ヨシ属　南壁　2

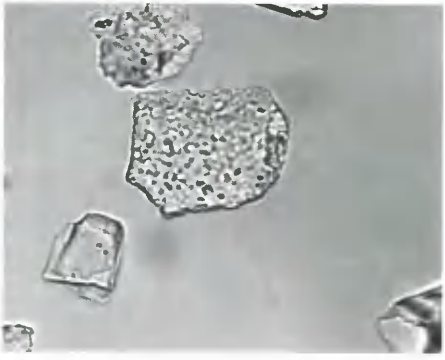


2．イネ　南壁　4

5．タケ亜科（ネザサ節型）　南壁　2



3．ウシクサ族（ススキ属）　南壁　4



6．タケ亜科（クマザサ属型）　南壁　1

プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真

付載２　上東遺跡から出土した歯牙の鑑別報告

小田嶋　梧郎

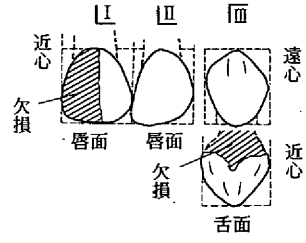
土器棺墓１

小歯片３７個を除き、一部欠損あるも、７個の個体乳歯が判別できたので報告する。

検索歯の歯式：

○	○	○	○	○	Ⅰ	Ⅱ	○	Ⅳ	○
Ⅴ	○	○	○	○	○	○	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ

即ち、左・上顎乳中切歯　（⌊Ⅰ）
　　左・上顎乳側切歯　（⌊Ⅱ）
　　左・下顎乳犬歯　（⌈Ⅲ）
　　左・上顎第一乳臼歯（⌊Ⅳ）
　　左・下顎第一乳臼歯（⌈Ⅳ）
　　右・下顎第二乳臼歯（Ⅴ⌉）
　　左・下顎第二乳臼歯（⌈Ⅴ）



第１図　左・上顎乳中切歯（⌊Ⅰ）歯冠唇面図
左・上顎乳側切歯（⌊Ⅱ）歯冠唇面図
左・下顎乳犬歯（⌈Ⅲ）歯冠の唇・舌面図

○左・上顎乳中切歯（⌊Ⅰ）［図１］

歯冠の近心半部欠損の例であるが、歯冠の唇面で計測すると、6.0㎜の歯冠長があり、遠心縁が外方へ凸湾し、上顎乳側切歯との差異が見られない。しかしながら、左上顎乳側切歯の近心縁がほぼ直線を描き、乳中切歯の遠心縁が外方へ凸湾して両者が接触していることから考え、左上顎乳中切歯と判別した。

○左・上顎乳側切歯（⌊Ⅱ）［図１］

歯冠の唇面に欠損なく完全な外形で、著明に丸味を帯びた台形をなし、上下径が近遠心径より大きい。すなわち、

歯冠の長さ：6.0㎜（平均値6.0㎜）　歯冠の幅：5.0㎜（平均値5.3㎜）

であるが、歯冠の舌面は殆ど欠損している。切縁の近心半部は直線をなすが、遠心半部は斜上方へ傾斜する。歯頚線は歯根側に軽度凸湾する。近心縁が直線を描くのに反し、遠心縁は外側に向かって強く凸湾する。

近心切縁隅角はおよそ80°の角度をなすが、遠心切縁隅角はほとんど角を示さず、著明な丸味を帯び、隅角徴がある。唇面前体が平滑で、しかも膨らみが左右径の中央からやや近心よりにあることから乳側切歯の右側か左側かを決定する鑑別点になり、しかも永久歯でない判別に、唇面溝、唇面隆線および歯頚横走隆線などが認められない特徴がある。

○左・下顎乳犬歯（⌈Ⅲ）［図１］

歯冠の長さ：6.6㎜（平均値6.8㎜）　歯冠の幅　：5.6㎜（平均値6.0㎜）

歯冠唇面の外形が不正五辺形で、上顎乳犬歯との差は上下径が近遠心径より大きい点である。尖頭尖が切縁の中央からやや近心よりで、上方に向かって突出している。それ故に、遠心切縁が近心切縁

より大きい。

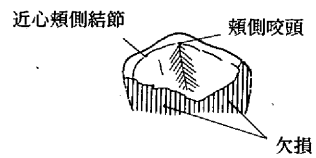
近心縁と遠心縁とがほぼ直線を画き、遠心切縁隅角は丸味を帯びる。

歯冠唇面の膨隆の頂点から切縁に向かって中央唇面隆線がタテに上行する。

なお、上顎乳犬歯ならば、歯冠の幅と長さがほぼ同長であることからも、本例が下顎乳犬歯であると鑑別できる。

○左・上顎第一乳臼歯（⌊Ⅳ）［図２］

歯冠の遠心切縁の一部、および舌側半部の欠損範位は大きいが、咬合面から見て、上顎第一乳臼歯としての頬側咬頭の近心に近心頬側結節を認め、咬合面から眺めて、頬側咬頭が近遠心径のほぼ中央に位置する。



第２図　左・上顎第一乳臼歯の咬合頬側部（拡大図）

遠心頬側隅角の欠損があっても、近心頬側隅角は約80°の鋭角をなすことから判別は容易である。

○左・下顎第一乳臼歯（⌈Ⅳ）

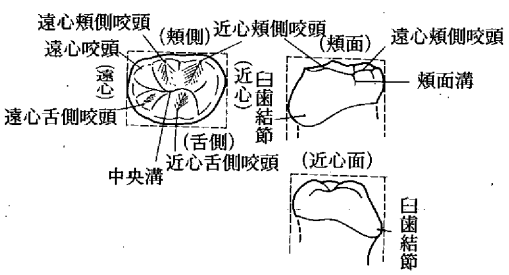
歯冠の頬舌的圧平が強い不正長方形をなし、歯根は欠如している。また、多咬頭（４咬頭）で、一見して下顎大臼歯に似ているが、歯冠の厚さが小さく、歯冠頬側面の臼歯結節などに留意すれば、下顎第一乳臼歯の鑑別は容易である。

歯冠の長さ：6.6㎜（平均値6.8㎜）

歯冠の幅：8.7㎜（平均値8.6㎜）

歯冠の厚さ：7.5㎜（平均値7.5㎜）

歯冠の頬面：①外形は不正四辺形で４縁を区別する。②歯頚線の近心半部が強く突出する。この膨隆を臼歯結節と呼ぶが、下方へ強く凸湾する特徴がある。③咬合縁は近心頬側咬頭と遠心頬側咬頭に一致して突出する［図３］。④咬合縁の遠心よりに頬面溝がタテに走る［図３］。



第３図　左・下顎第一乳臼歯

歯冠の近心面：①外形は不正四辺形である。②頬側縁が最長で、しかも傾斜が著しい［図３］。

咬合面観：①外形は長方形で、近遠心径が長く、頬舌径が短い。②解剖学的咬合縁で、頬側縁が最も長く、ほぼ直線をなす。③近心頬側隅角部が強く突き出るので鋭角となり、遠心頬側隅角は丸味を帯びた直角となる。④咬合縁に沿って、頬側に２個の咬頭（近心頬側咬頭と遠心頬側咬頭）、舌側に２個の咬頭（近心舌側咬頭と遠心舌側咬頭）があり、遠心舌側咬頭の遠心に遠心咬頭が出現した例である［図３］。⑤ほぼ中央を走る中央溝は、近心窩と遠心窩とを結ぶ溝で、頬側に向かって凸湾する［図３］。

下顎第一乳臼歯の鑑別で特に注意することは、歯冠の頬舌的圧平が強く、そのために咬合面も細長い長方形をなし、４咬頭の基本型に遠心咬頭の出現を加える多咬頭性を念頭に置く必要がある。しかしながら、近心面から眺めて、頬側の傾斜が強い下顎乳臼歯の特徴に留意すれば判別は容易である。

○右および左下顎第二乳臼歯（⌉Ⅴ・⌈Ⅴ）

下顎第二乳臼歯は、下顎第一大臼歯の形態と殆ど変わらず、ただ小形であって、上顎第二乳臼歯が上顎第一大臼歯に酷似しているのと同様である［図４］。

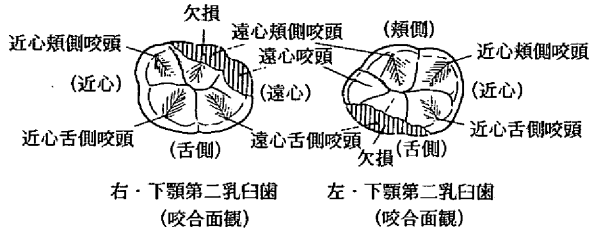
本症例は歯根の欠損、および右側乳歯の頬側半部に欠損があり、左側乳歯の舌側半部に欠損はあるものの、鑑別にはさしたる影響はない。

歯冠の長さ：6.0㎜（右）6.0㎜（左）（平均値6.0㎜）

歯冠の幅：10.5㎜（右）10.2㎜（左）（平均値10.5㎜）

歯冠の厚さ：計測不可（右）8.7㎜（左）（平均値9.0㎜）

①歯冠はほぼ立方形で、欠損部分を考慮すれば5咬頭をもつ。すなわち、近心頬側咬頭、遠心頬側咬頭（右側は欠損）、近心舌側咬頭、遠心舌側咬頭（左側は欠損）、および遠心咬頭（右側は欠損）を持っている［図4］。②歯冠長が比較的短く、頬側上半部が強く傾斜する特徴がある。③近遠心径が頬舌径より大きい。④解剖学的咬合面の形態が近遠心的に長い矩形である。因みに、下顎第一大臼歯はほぼ正方形である。



第4図　右および左下顎第二乳臼歯の咬合面

以上の鑑別点から、右および左下顎第二乳臼歯と判別した。

――歯冠部の欠損を除けば、咬耗がなく、発育良好な乳歯であることと、壺棺内出土と合わせ考えれば、生後間も無い一個体の乳歯群で、しかも各歯が顎骨内に埋状したままの状態であろうと推察する。なお、性別は不詳である。

土器棺墓2

小歯片のみで、鑑別不能。

土壙26

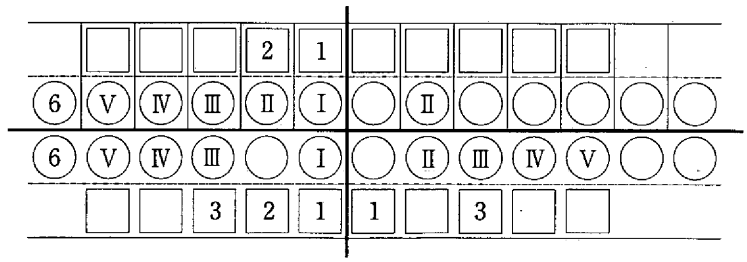
歯の正常な発育経過を考慮しながら試料を検索していると、乳歯および永久歯の発育の時期概要が浮かんできた。

歯牙年齢を歯の萌出状態から観察して鑑別決定する場合、現代人と異なって弥生時代の小児歯牙は、歯根部の残されていることは稀有であるが、今回の検索試料には歯根の一部が残された乳歯が比較的多くみられ、かつまた右側上顎および下顎の乳犬歯、第一乳臼歯、第二乳臼歯のすべてが完全な状態で並び、更に加生歯の第一大臼歯が顎骨内に埋伏のまま出土したことにある。乳歯および加生歯と代生歯との区別は、エナメル質の色調にあって、光沢のある乳白色をした乳歯群と、茶褐色の完全な歯冠をもった加生歯と代生歯とが判別され、歯牙年齢4歳児と確証をもって鑑別できたので報告する。

なお付け加えるならば、文献を渉猟して、乳歯の研究が永久歯よりも難しく、しかも標本収集が永久歯よりも難しいこともあってか、特に弥生時代に溯っての報告はほとんど無いに等しく、間違った小児埋葬報告に気づくのである。

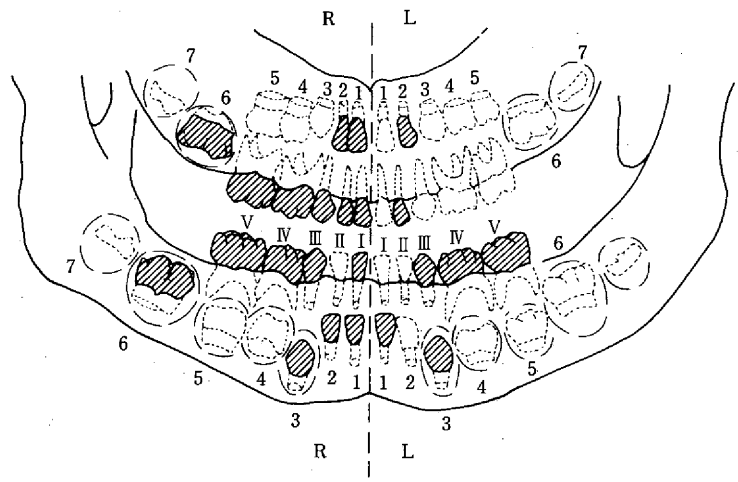
種々推考した結果、小児歯牙の発育状況を図5に描き、個々の乳歯及び永久歯（加生歯と代生歯）の詳細な鑑別記録を後述する。

検索歯の歯式：



上述の歯式で歯牙記号を用い、歯列を構成する歯種を一目瞭然に表示したものである。本来は各歯のラテン語名の頭文字で現わすべきであるが、臨床家の使用する数字、すなわち、乳歯をローマ数字、永久歯をアラビア数字（現代の算用数字）で表わし、歯列を前から見て、水平線は上・下顎の境、鉛直線を右・左側の顎の境界とした。

また、図6を描いた理由は、右側面観すなわち歯列を唇側および頬側から眺めて、本列が歯牙年齢4歳児と確証した推察図である。



第5図　歯牙年齢4歳児の加生歯を含む乳歯列の推察図

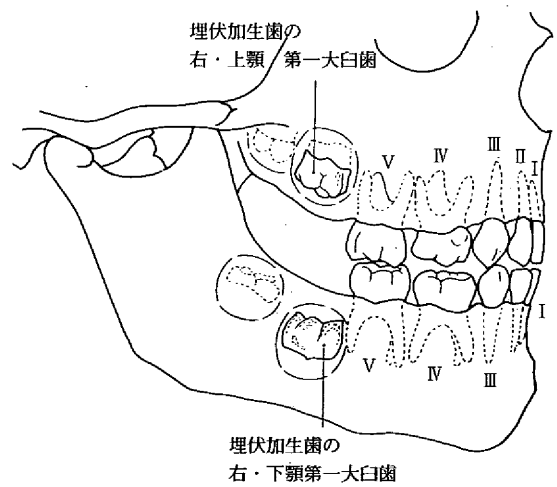
○右・上顎乳中切歯（I̲|̲）

歯冠の長さ6.0㎜で、歯冠唇側の近心2／3が残され、歯冠舌側はほとんど欠損した歯片であるが、近心切縁隅角は直角よりもやや小さく突き出し、切縁がほぼ直線に走り、歯頚線は歯根に向かって軽度に凸湾していることから右上顎乳中切歯と判別した。

○右・上顎中切歯（1̲|̲）

歯冠長7.8㎜、歯冠幅7.3㎜で、発育途上の埋伏代生歯と推察した。歯冠の唇面および舌面において上顎中切歯の特徴を具えている。

すなわち、切縁において近心切縁隅角から遠心切縁隅角へ向かう傾斜と隅角徴が著明で、しかも舌面における辺縁稜は、近心のものが遠心のものよりも細くて鋭いことなどから、左右歯の鑑別の決め手となった。



第6図　歯牙年齢4歳児の右側歯列
（唇側および頬側から眺めた推察図）
但し、代生歯は図示していない。

○右・下顎乳中切歯（$\overline{\mathrm{I}}$|）

歯冠長5.0㎜、歯冠幅3.5㎜で、やや小さく、歯冠唇面の遠心１／３が欠損した歯片であるが、丸味をもった歯根2㎜が残され、断端の中央部に１個の根管を持っている。検索中、力が加わり一部破壊してしまったが、切縁は歯軸と直角で直線をなし、歯冠舌面の歯冠結節（舌面歯頸結節）が強く突出して、やや遠心に偏位していることなどから左右側の鑑別点とした。

○右・下顎中切歯（$\overline{\mathrm{I}}$|）

歯冠長7.5㎜、歯冠幅5.0㎜で、発育途上の代生歯である。すでに３個の切縁結節を認め、歯冠舌面の辺縁稜の発育が弱く、舌面窩は僅かであることから判別した。

○右・上顎乳側切歯（$\underline{\mathrm{II}}$|）

歯冠長6.0㎜、歯冠遠心側1/5欠損と舌面欠損しているが、歯冠唇面の近心縁が直線を画き、近心切縁隅角がおよそ80°の角度をなすことから判別した。

○右・上顎側切歯（$\underline{2}$|）

歯冠の唇面半部のみで、そのほかはすべて欠損した埋伏代生歯の決め手となった鑑別点は、歯冠幅7.0㎜、歯頸部を除いた歯冠唇面を囲む３縁のうち、切縁が可成り丸味を帯び、遠心切縁隅角が特に鈍円化、すなわち隅角徴があるので、歯冠全体が丸味を帯びることで判別した。

○右・下顎側切歯（$\overline{2}$|）

発育途上の埋伏した代生歯で、歯冠長6.8㎜と短いが、歯冠幅5.8㎜は平均値とほぼ同長である。歯冠の切縁が歯軸に対して、近心から遠心へと歯根側に向かって傾斜し、近心切縁隅角に比べて遠心切縁隅角が丸味を帯び、かつ、切縁の中央部分が尖頭状に突出して犬歯化の傾向を示していることから判別した。

○左・下顎中切歯（|$\overline{1}$）

歯冠長6.7㎜、歯冠幅5.1㎜で、歯冠歯頚部の欠損を伴った発育途上の埋伏代生歯を下顎中切歯と判別した根拠は、歯冠唇面の外形が細長いU字形で、唇面の幅が著しく小さく細長く見え、萌出前の切縁に３個の切縁結節があるほか、歯冠はほぼ左右対稱で、近心切縁隅角と遠心切縁隅角とがほぼ同大のため隅角徴が見られない。また、唇面の近心縁も遠心縁も真っ直ぐに下行し、歯頚の狭窄が少ないことからである。

○左・上顎乳側切歯（|$\underline{\mathrm{II}}$）

歯冠半部欠損例で、遠心切縁隅角が角を示さず、著明な丸味を帯び、他の歯片と比較検討して鑑別した。

○左・下顎乳側切歯（|$\overline{\mathrm{II}}$）

歯冠長6.0㎜、歯冠幅5.0㎜、歯冠厚4.0㎜で平均値と同じの歯根上部を伴った典型の下顎乳側切歯であった。すなわち、歯冠唇面の外形は上下径が近遠心径より大きい逆台形をなし、切縁の近心半部が直線で、遠心半部は下方へ斜めに傾くため、近心切縁隅角は約85°前後であるのに比べ、遠心切縁隅角は著しく鈍円となる隅角徴がある。また、歯冠の舌面観で、その外形は上下径の大きい不正三角形をなし、遠心辺縁稜は著明であるのに反して、近心辺縁稜は小隆線化すると同時に、歯冠結節の突出度が弱く、隆線化して帯となることから判別した。

○右・上顎乳犬歯（$\underline{\mathrm{III}}$|）

歯冠長6.8㎜、歯冠幅6.8㎜、歯冠厚5.8㎜で平均値と近似した大きさで、歯冠唇面の外形が正五角形

をなし、上下径と近遠心径とが同長である。切縁の中央が強く下方に突出して尖頭尖を作り、ほぼ同長の近心切縁と遠心切縁とに区別できる。また、両切縁の傾斜が強く、ほぼ直線を画く。近心切縁隅角と遠心切縁隅角とは約100°で丸味を帯び、尖頭尖の突出度は約80°の鋭角を示す典型的な上顎乳犬歯である。

○右および左下顎乳犬歯（$\overline{\text{III}}$ ・ $\overline{\text{III}}$）

右左とも歯冠長6.8㎜、歯冠幅6.0㎜、歯冠厚5.2㎜で、平均値とほぼ同大で、歯根の１部を伴い、その歯冠唇面の外形は不正五辺形で、上下径が近遠心径より大きいことが上顎乳犬歯との相違点である。

尖頭尖は切縁の中央からやや近心よりで、上方に向かって突出するため、遠心切縁が近心切縁より大となる。歯冠舌面の外形は菱形で、近心辺縁稜と遠心辺縁稜とが隆線化した歯冠結節を先端とするＶ字形を作ることなどから判別した。

○右および左下顎犬歯（$\overline{3}$ ・ $\overline{3}$）

上顎犬歯に比べて歯冠幅が短く（右側6.7㎜、左側6.8㎜）、近遠心的に圧平されて細長く、各隆線の発育が悪い特徴と色調から萌出前の埋伏した代生歯と推察した。歯冠唇面の外形が細長い五角形で、近心切縁は遠心切縁よりも著しく短い。また、歯冠舌面において、辺縁稜も歯冠結節も発育が悪いので低いなどから判別は容易である。

○右・上顎第一乳臼歯（$\underline{\text{IV}}$）

歯冠の頬側咬合縁の僅かな欠損あるものの、咬合面観のみで右側上顎第一乳臼歯と鑑別できるほど典型的特徴を持った乳臼歯である。すなわち、咬合面の外形は不正四辺形で、頬側縁が最も長く、近心頬側隅角は約80°の鋭角をなすが、遠心頬側隅角は約100°の鈍角をなし、咬合面の中央を近遠心方向に走る中央溝で頬側咬頭と舌側咬頭との２咬頭に分ける。

○右および左下顎第一乳臼歯（$\overline{\text{IV}}$ ・ $\overline{\text{IV}}$）

歯冠の頬舌的圧平の強い不正長方形をなし、４咬頭をもち、歯冠頬面で歯頚線の近心半部が強く膨隆突出する臼歯結節（頬面歯頚結節）があり、歯冠の接触面から見て頬側縁が最長で、しかも傾斜が著しい特徴を持った乳歯であることから判別は容易である。

○右・上顎第二乳臼歯（$\underline{\text{V}}$）

４咬頭で、咬合面が菱形をなし、その全体観は上顎第一大臼歯に比べて大きさが小さい程度で、形態に大差ない代表的な形状を示す乳臼歯である。

○右および左下顎第二乳臼歯（$\overline{\text{V}}$ ・ $\overline{\text{V}}$）

基本的には下顎第一大臼歯の形態とほとんど変わらず、ただ小形であって、よく似ているが、歯冠長が比較的短く、頬側上半部が強く傾斜し、近遠心径が頬舌径より大きい。また、解剖学的咬合面の形態が近遠心的に長い矩形である。

歯冠長（右6.0㎜、左6.0㎜）、歯冠幅(右10.5㎜、左10.5㎜)、歯冠厚(右8.5㎜、左8.7㎜)の歯冠はほぼ立方形で５咬頭（近心頬側咬頭・遠心頬側咬頭・近心舌側咬頭・遠心舌側咬頭・遠心咬頭）をもつが、右側歯は舌側遠心隅に第六咬頭と呼ぶ小咬頭をもち、左側歯にはこの第六咬頭以外に小さいながら近心舌側咬頭と遠心舌側咬頭との間に第七咬頭を見る。

○右・上顎第一大臼歯（$\underline{6}$）

歯冠長6.8㎜、歯冠幅10.7㎜、歯冠厚11.4㎜で、上顎歯のうち歯冠幅と歯冠厚とが最も大きい埋伏加生歯の出土を見た。

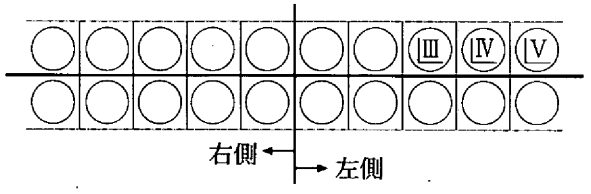
本来の咬合面、すなわち解剖学的咬合面が4個の咬頭頂を結んだ縁に囲まれた平行四辺形に、舌側半部を斜走する遠心舌側溝によってできる遠心舌側咬頭に特徴があるので、右左別の鑑別も容易である。

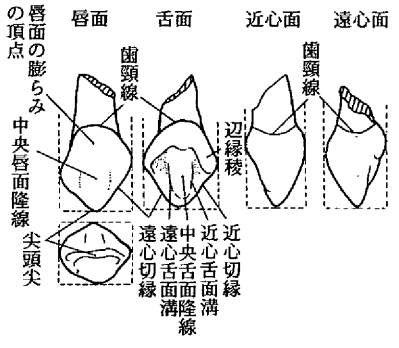
○右・下顎第一大臼歯（$\overline{6|}$）

歯冠幅（11.6㎜）と歯冠厚（11.0㎜）とが下顎のすべての歯より最も大きく、しかも下顎第一大臼歯の大きな特徴が5咬頭性で、そのうちの4咬頭（近心頬側咬頭・遠心頬側咬頭・近心舌側咬頭・遠心舌側咬頭）は、咬合面を十字形に4等分する配列で咬合面の各隅角部を占め、もう1つの咬頭、すなわち遠心咬頭が遠心頬側咬頭と遠心舌側咬頭との間で頬側よりに位置し、これら5咬頭のひろがりを比較すれば、歯冠のみで判別可能である。

土壙82の中から出土した乳歯の鑑別報告

試料は判別困難な歯片4個を除外した、ほぼ完全な歯冠部を具え、然も1個体のうち3個の左上顎乳歯群であることが鑑別できたので、その記録を図説する。





第7図　左・上顎乳犬歯（$\underline{|Ⅲ}$）

○左・上顎乳犬歯（$\underline{|Ⅲ}$）

歯冠の長さ：7.3㎜（平均値6.8㎜）

歯冠の幅：6.3㎜（平均値6.8㎜）

歯冠の厚さ：5.5㎜（平均値5.8㎜）

歯冠の唇面：①外形はほぼ正五角形で、歯冠の上下径、すなわち長さが平均値よりやや大きいが、歯冠の近遠心径、すなわち歯冠の幅は平均値と同長である。②切縁の中央が強く下方に突出して尖頭尖［7図参照］を作り、近心切縁と遠心切縁とは後者がやや長い。また、両切縁の傾斜が強く、ほぼ直線を画く。③歯頸線は歯根に向かって軽度凸湾し、歯冠の近心縁と遠心縁はともに強く凸湾する。④近心切縁隅角と遠心切縁隅角とは約100°で、丸味を帯びる。⑤尖頭尖の突出角度は約80°の鋭角を示す。⑥唇面の膨らみの頂点［7図参照］は上下径の上1/4で、左右径のほぼ中央に位置している。⑦唇面の膨らみの頂点から尖頭尖に向かって、中央唇面隆線が下行する。

歯冠の舌面：①外形は菱形で、歯冠結節または舌面歯頸結節［7図参照］が歯頸線に沿って強く突出し、その両側に低く幅広い辺縁稜が近心縁および遠心縁に沿って逆V字形に走る。②尖頭尖から上方に向かって中央舌面隆線が縦走し、舌面の中央付近で消失する。③中央舌面隆線によって、辺縁稜との間に、それぞれ近心舌面溝、遠心舌面溝ができる。

歯冠の接触面：外形は底辺の長い逆三角形であるが、高さは底辺よりも少し大きい。歯頸線は歯冠

側に向かって凸湾する。

歯根：歯頸線近くの残された歯根の一部を眺めて、唇舌的圧平の著明な三角錐体形で、唇面、近心面および遠心面の３面を区別できる。歯根尖が完全に残されておれば、接触面から見て歯根尖の1/3が唇側へ折れ曲がっていて、乳犬歯の鑑別はより確実である。以上の形態的特徴から左(側)上顎乳犬歯（⌊Ⅲ）と判別した。

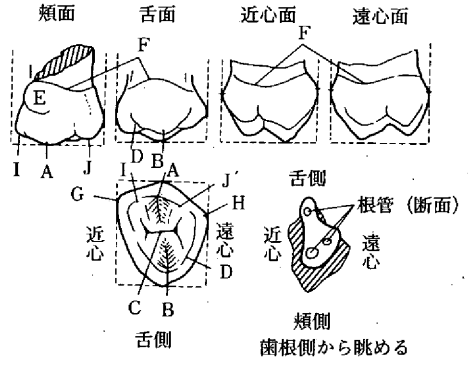
○左・上顎第一乳臼歯（⌊Ⅳ）

歯冠の長さ：6.0㎜（平均値6.0㎜）

歯冠の幅：7.5㎜（平均値8.0㎜）

歯冠の厚さ：9.0㎜（平均値9.0㎜）

歯冠の咬合面の外形は、不正四辺形をなし、頬側咬頭（A）と舌側咬頭（B）が中央溝（C）を挟んでともに発育がよいので、小臼歯に似た形態をなす。しかしながら、頬側縁に近心頬側結節と遠心頬側結節とが、頬側咬頭の近心および遠心にそれぞれ並び、舌側縁で舌側咬頭の遠心に遠心舌側結節（D）が並び、かつ歯根が３根（頬側根２本、舌側根１本）が見られるので、上顎大臼歯に似ているのが上顎第一乳臼歯の大きな特徴であることを念頭にいれて鑑別した［図８］。



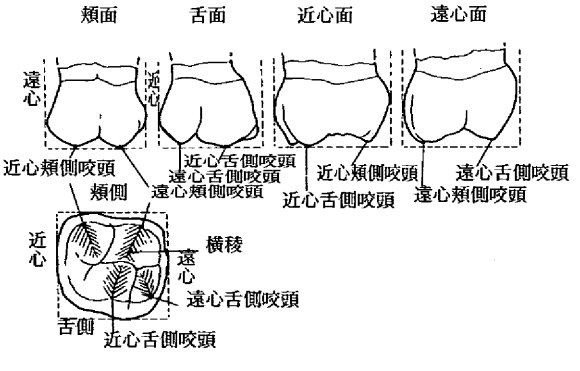
第８図　左・上顎第一乳臼歯（⌊Ⅳ）

歯冠の頬面：①外形は咬合縁を底辺とする不正四辺形である。②頬面の近心半部の歯頸線付近は、強く前方に突き出して臼歯結節または頬面歯頸結節（E）を作る。③近心縁は遠心縁よりも長く、両縁は軽度凸湾する。④歯頸線（F）は臼歯結節があるため、近心半部が歯根側に凸湾する。⑤咬合縁と近心縁とのなす角に比べて、遠心縁とのなす角が丸味を帯びる隅角徴がある。⑥咬合縁の全形は、近心から頬側咬頭に向かって下方へ傾斜し、次いで遠心へ向かって上方に傾斜する。また、その両端で、近心頬側結節と遠心頬側結節に一致した小さな凸湾を作る。

歯冠の舌面：①外形は丸味を帯びた不正台形で、歯頸線が歯根へ向かって軽度凸湾する。②咬合縁はほぼ中央に位置する舌側咬頭（B）が下方に向かって凸湾し、遠心に遠心舌側結節（D）に一致した小さな湾曲がある［図８］。

歯冠の接触面：①外形は歯頸線を底辺とする逆台形である。②歯頸線はやや歯冠へ向かって緩やかに凸湾する。③咬合縁の中央が逆Ｖ字形に切痕を作る。

咬合面の特徴：①近心頬側隅角（G）は約80°の鋭角をなすが、遠心頬側隅角（H）は約100°の鋭角をなす湾曲徴がある。②頬側咬頭（A）と舌側咬頭（B）との２咬頭のほか、頬側縁に近心頬側結節（I）と遠心頬側結節（J）とがあって、前者は近心頬側隅角にある小結節で、後者は遠心頬側隅角にある小結節で、前者よりも大きい。舌側咬頭の遠心縁に遠心舌側結節（D）がある。③咬合面の中央を近遠心方向に走る中央溝があって、低位で深い。



第９図　左・上顎第二乳臼歯（⌊Ⅴ）

以上の形態的特徴から、前記の左上顎乳犬歯に続

く左上顎第一乳臼歯と判別した［図８］。

○左・上顎第二乳臼歯（ ⌊V）

歯冠の長さ：6.0㎜（平均値6.0㎜）

歯冠の幅：9.3㎜（平均値9.4㎜）

歯冠の厚さ：10.0㎜（平均値10.4㎜）

上顎第二乳臼歯の特徴は、上顎第一大臼歯とよく似ている点である。すなわち、多咬頭性（４咬頭）で、咬合面観が菱形で、全体観からして大きさが小さい程度で、その形態に大差なく、代表的な形態を示している。また、本例は歯根部の欠損があるため、上顎第一大臼歯と見分けがつかないほどであるが、歯頸に近いところの歯冠部が著明に膨らんでいるので、歯頸部が狭窄されていることから、その判別は容易であった［図９］。

そのほかの形態的特徴として、近心舌側咬頭からの三角稜と遠心頬側咬頭からの三角稜とが接続して、連続した横稜を作っているので、上顎第一大臼歯ではほとんど見られないことからも、その判別は容易である。

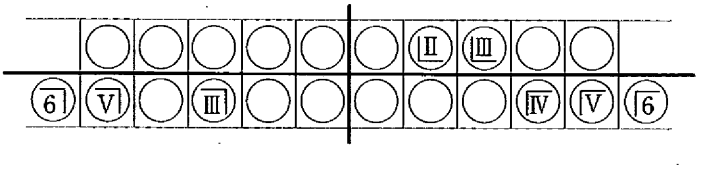
――以上３個の左・上顎乳歯群を観察して、各歯とも咬耗が見られず、生後18ヵ月以後の幼児期乳歯群と推察する。

土壙137の歯牙出土例

乳歯および乳歯に代わって後に生える代生歯に加え、乳歯列の後方に萌え出る加生歯が多数の歯片に入り交じった複雑な個体歯群の鑑別報告例である。

しかも、右および左側の下顎第二乳臼歯（$\overline{V}$⌉・⌈$\overline{V}$）の咬合面の浮彫像が第一大臼歯よりも複雑で、副溝や小窩がよく発達しているため、舌側遠心隅に小咬頭（第六咬頭）を見るほか、舌側の両咬頭（近心舌側咬頭と遠心舌側咬頭）の間にも小咬頭（第七咬頭）を見るので七咬頭性となっている（図13）。また、これに加えて興味あることは、加生歯で、しかも下顎骨内に埋状した状態と考えられる左側下顎第一大臼歯（⌈$\overline{6}$）の歯冠上半部がほぼ完全に残されていたことである。しかも、下顎大臼歯は五咬頭性、すなわち頬側に３個、舌側に２個の咬頭を具えているのが基本形であるのに加え、遠心咬頭（第五咬頭と呼ぶ）と遠心舌側咬頭との間に、遠心咬頭よりやや小さい咬頭があって、Hellman（1928）の命名による第六咬頭の出現を見たことである［図14］。

多数の砕けた骨片と歯片の中から、辛うじて判別の出来た例を加えた８個の個体歯群を鑑別した歯科学的歯式は下記の如くである。

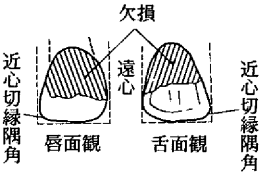


○左・上顎乳側切歯（⌊II）

切縁部を残した歯冠部のみで判別することは些か無理ではあるが、歯冠の幅5.7㎜（平均値6.0㎜）を計測した。

①歯冠の唇面観で、その外形は恐らく丸味を帯びた方形で、切縁がほぼ直線に走り、近心切縁隅角は直角よりやや小さく、遠心切縁隅角は丸味を帯び、およそ100°の角度を示す隅角徴が著明である

ことから左側上顎乳側切歯と判別した。②歯冠の接触面の外形で、切縁を頂点とした三角形をなすことも推察に加えた。③歯冠の舌面観で、近心および遠心の辺縁稜に囲まれた舌面窩は浅く、中央舌面隆線は著明でなく、近心辺縁稜の発育が悪い［図10］。

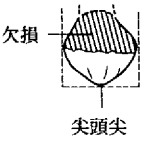


第10図　左・上顎乳側切歯（⌊Ⅱ）

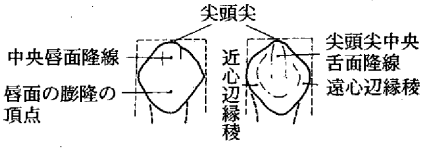
○左・上顎乳犬歯（⌊Ⅲ）

歯冠の歯頸線側半部は欠損しているが、歯冠の幅6.7㎜（平均値6.8㎜）で、次の左・下顎乳犬歯よりも大きいことで上顎歯か下顎歯かの判別は可能である。

切縁の中央が強く下方に突出して、約80°の尖頭尖を作り、ほぼ同長の近心切縁と遠心切縁を区別し、両切縁の傾斜が強く、ほぼ直線を描く［図11］。また、近心切縁隅角と遠心切縁隅角とは約100°で、丸味を帯びる。歯冠の舌面観で、尖頭線から上方に向かう中央舌面隆線が縦走し、辺縁稜との間にそれぞれ近心舌面溝、遠心舌面溝が出来ることなどから左側の上顎乳犬歯と鑑別した。



第11図　左・上顎乳犬歯（⌊Ⅲ）



第12図　右・下顎乳犬歯（⌈Ⅲ）

○右・下顎乳犬歯（⌈Ⅲ）

歯冠の長さ：7.0㎜（平均値6.8㎜）

歯冠の幅：5.8㎜（平均値6.0㎜）

歯冠の厚さ：5.2㎜（平均値5.3㎜）

歯冠の唇面の外形が不正五辺形で、中央は膨隆し、タテに上行する中央唇面隆線が認められる。また、上下径が近遠心径より大きく、前述の上顎乳犬歯との差異が明らかである。なお、遠心切縁が近心切縁より大きく、近心切縁隅角が遠心切縁隅角よりやや小さく、後者は丸味を帯びる隅角徴を認める［図12］。

歯冠の舌面観で、外形は菱形をなし、中央舌面隆線は低く幅広く、上顎乳犬歯と異なって近心および遠心舌面溝は浅い。

歯冠の接触面を眺めると、その外形は上顎乳犬歯よりも幅が狭く、高い三角形をなしているなどから右側下顎乳犬歯と判別した。

○左・下顎第一乳臼歯（⌈Ⅳ）

本例は土器棺1から出土した個体乳歯のうちの左・下顎第一乳臼歯で詳しく判別記載したものとほぼ所見が一致しているので簡略して述べると、

歯冠の長さ：6.8㎜（平均値6.8㎜）

歯冠の幅：8.7㎜（平均値8.6㎜）

歯冠の厚さ：7.0㎜（平均値7.5㎜）

すなわち、歯冠の頬舌的圧平の強い不正長方形をなし、歯冠の厚さが小さく、多咬頭（4咬頭）を持ち、歯冠頬側面の臼歯結節や、近心面から眺めて、頬側の傾斜が強いなどの特徴から、その鑑別は容易である。

○右および左下顎第二乳臼歯（⌈Ⅴ・⌈Ⅴ）

前文記載の如く、下顎第二乳臼歯は、普通5咬頭を具えているにもかかわらず、本例は右左共に咬

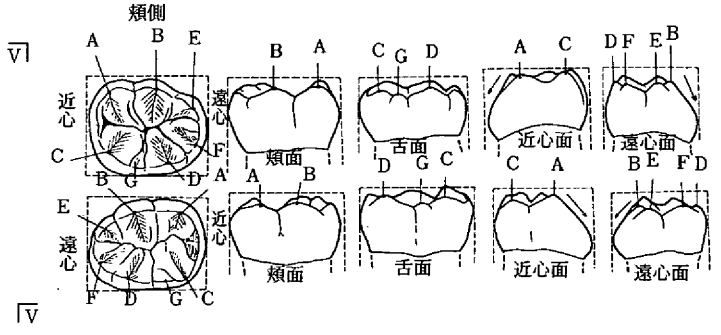
合面において副溝や小窩が発達し、舌側遠心隅に小咬頭、すなわち第六咬頭［図13・F］が生じているばかりでなく、咬合面舌側の近心舌側咬頭（C）と遠心舌側咬頭（D）との間に、小さいながら第七咬頭［図13・G］の出現した稀有な乳歯である。

歯冠の長さ：（右）6.0㎜　（左）6.0㎜（平均値6.0㎜）

歯冠の幅：（右）10.2㎜（左）10.3㎜（平均値10.5㎜）

歯冠の厚さ：（右）9.1㎜　（左）9.0㎜（平均値9.0㎜）

歯冠はほぼ立方形で、解剖学的咬合面の縁に沿って、近心頬側咬頭（A）、遠心頬側咬頭（B）、近心舌側咬頭（C）、遠心舌側咬頭（D）、遠心咬頭（E）のほか、舌側遠心隅に第六咬頭（F）および近心舌側咬頭と遠心舌側咬頭との間に小さな第七咬頭（G）の出現を見た。このほかの鑑別は①下顎第二乳臼歯の大きさが下顎第一大臼歯よりもやや小さく、②歯冠長が比較的短く、頬側上半部が強く傾斜［図13・近遠心面→印］し、近遠心径が頬舌径より大きい。③解剖学的咬合面の形態が近遠心的



第13図　右および左下顎第二乳臼歯（上：右，下：左）

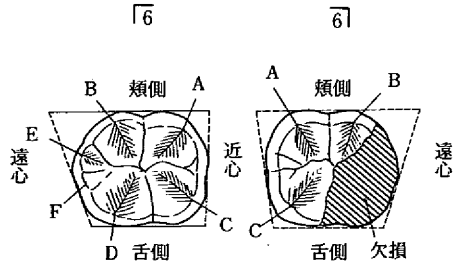
に長い矩形である。これらの形態面から右および左側の下顎第二乳臼歯を判別した。

○右および左下顎第一大臼歯（$\overline{6|}$・$\overline{|6}$）

前文記載の如く、本例が乳臼歯に属さず、加生歯の下顎第一大臼歯と鑑別した理由は、特に左側歯冠咬合面がほぼ完全に残され、咬合縁の頬側に３個、舌側に２個の咬頭を具えた五咬頭性であると同時に、このうちの第五咬頭と呼ばれる遠心咬頭［図14・E］と遠心舌側咬頭（D）との間に遠心咬頭より小さい第六咬頭（F）の出現を見たことにある。

しかしながら、歯冠の計測値で、歯冠長は僅かに4.0㎜、歯冠幅9.7㎜、歯冠厚9.0㎜といずれも小さく、形態学的に上顎乳臼歯とは適合しないことから、恐らく発育不良の矮小歯であろうと推察する。

何れにしても、乳歯列の後方に萌え出る加生歯が、発育途上の埋状した状態と考えられ、生後20～24か月の個体歯群と判別した。



第14図　右・下顎第一大臼歯（$\overline{6|}$）と左・下顎第一大臼歯（$\overline{|6}$）の咬合面観

付載３　上東遺跡土壙81出土の貝類について

小　林　園　子

１．資料と分析

上東遺跡土壙81において貝ブロックが検出された。この貝ブロックの内容を調べるために、貝層を全量、土・貝含めて持ち帰り、水洗選別・乾燥ののち、分析をおこなった。分析はまず貝類の同定をおこない、巻貝は軸部を1点、二枚貝は左殻・右殻を分類の後、殻頂部分を残すものをそれぞれ1点として個数を数えた。そして、貝の出土量から最小個体数を算出し、その組成比率を算出している（表２）。なお、最小個体数の算出にあたっては、巻貝は出土量をそのまま採用し、二枚貝については左・右殻いずれかの最大数を採用している。また、二枚貝のうちハイガイとヤマトシジミについて殻長計測をおこなった（図１）。

２．結果

今回の分析では貝類7種を確認した（表１）。他に土器の小破片が若干混入していたが、魚骨・獣骨等は含まれていなかった。貝層は当初、その貝の大きさからハイガイが目立っており、ヤマトシジミとハイガイ主体の貝層に思われたが、予想外にも巻貝のカワアイガイが多く含まれていた。最小個体数からの出土比率を比較すると（表２参照）、ヤマトシジミが48.6％と最も多く、次にカワアイガイが27.4％、ハイガイが19.4％、マガキが2.3％である。その他、ウネナシトマヤガイ1点、アカニシ1点、スガイのフタと貝破片が各1点出土している。

殻長の計測は、ヤマトシジミの左殻42点とハイガイ21点についておこなった（図１）。その結果、ハイガイでは殻長27.0～59.0㎜までの大きさが出土しており、平均は40.4㎜であった。ヤマトシジミでは殻長13.6～30.8㎜までの大きさが出土しており、平均は20.6㎜であった。両貝種とも小型～やや大型の貝をまんべんなく採取しており、特定の大きさの貝を選択して採取している様子ではない。
また、マガキについては、殻高約４～6㎝程度の大きさのものが出土しており、カワアイガイについては、比較的よく成長したものが出土しているが、その大部分は、殻頂部が欠損している。

おわりに

今回出土している主な貝種の生息域から、どのような状況で貝類の採取をおこなっていたかを検討してみる。ヤマトシジミは汽水産といわれる貝で、主に海水と淡水の入り混じる河口域を生息場所としている。また、カワアイガイは主に内湾の潮間帯の砂泥底で生息しているが、河口などのかなり塩分の低いところでも生息しており、よくヤマトシジミとともに出土する。ハイガイは内湾奥部の泥底に生息する貝種で、マガキは一般に内湾岩礁性ともいわれるが、河口付近の干潟にカキ礁をつくる場合もある。ウネナシトマヤガイは小型の二枚貝であるが、よくマガキが出土する貝層から検出される貝種である。

以上の結果、これらの貝の採取場所を検討すると、ハイガイは内湾奥部の泥底干潟のような場所で採取され、ヤマトシジミは河口近辺、カワアイガイ、マガキは河口近くの干潟といった場所が想定できる。上東遺跡は現在でも足守川の東岸に位置し、また、当時この付近まで海岸線が湾入していたと考えるならば、この付近で十分採取可能な貝であったと思われる。

表1　上東遺跡貝類種名表

マキガイ綱（腹足類）
　スガイ
　カワアイガイ
　アカニシ
ニマイガイ綱（二枚貝類）
　ハイガイ
　マガキ
　ヤマトシジミ
　ウネナシトマヤガイ

表2　貝類出土量表と組成比率

貝　種	左右	個数	最小個体数	組成比率
カワアイガイ	―	48	48	27.4%
ハイガイ	左殻	34	34	19.4%
	右殻	20		
マガキ	左殻	3	4	2.3%
	右殻	4		
ヤマトシジミ	左殻	77	85	48.6%
	右殻	85		
その他	アカニシ軸1・破片1、スガイのフタ1・破片1、ウネナシトマヤガイ1、種不明巻貝破片1		4	2.3%

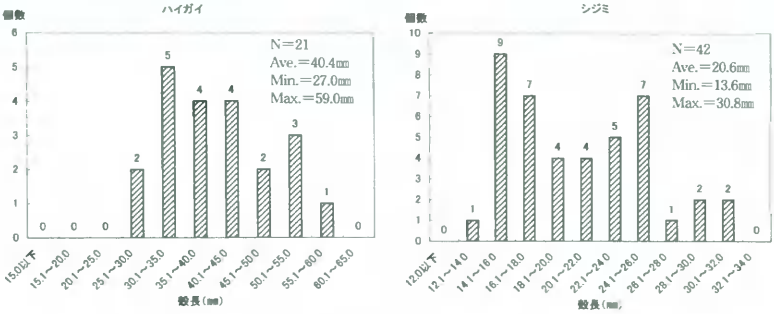
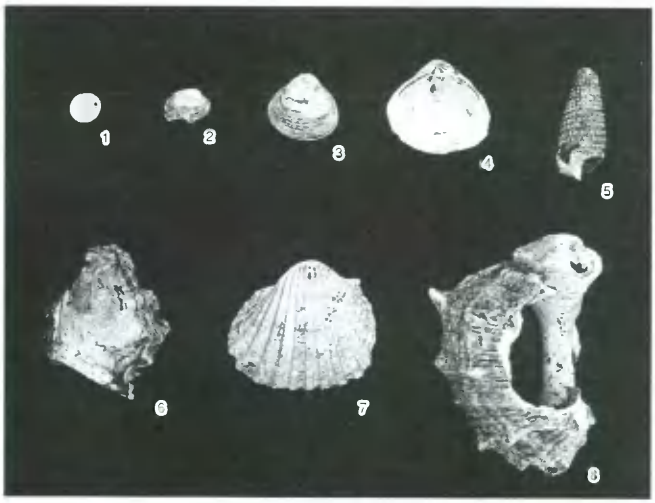


図1　上東遺跡土壙81出土ハイガイ、シジミの殻長分布

※　Nは資料数、Ave.は平均値、Min.は最小値、Max.は最大値を示す
※　グラフの中の数値は個数を示す



上東遺跡　土壙81出土貝類（約70%）

1．スガイのふた　2．ウネナシトマヤガイ　3・4．ヤマトシジミ　5．カワアイガイ
6．マガキ　7．ハイガイ　8．アカニシ

1　亀川調査区
全景（南から）

2　東鬼川市Ⅰ調査区
全景（西から）

3　東鬼川市Ⅰ調査区
溝３・４・５
（南から）

図版 2

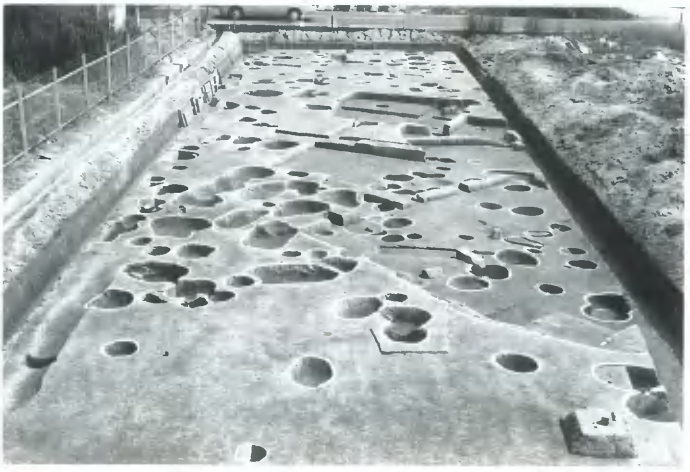
1　東鬼川市Ⅰ調査区
溝５遺物出土状況
（南から）

2　東鬼川市Ⅰ調査区
溝12（土器溜まり）
遺物出土状況
（南から）

3　東鬼川市(用水路内)
溝12（土器溜まり）
遺物出土状況
（南から）

1　東鬼川市Ⅱ調査区
溝12（土器溜まり）
遺物出土状況
（北東から）

2　東鬼川市Ⅱ調査区
溝12（土器溜まり）
下層（南西から）



3　東鬼川市Ⅱ調査区
東側全景（西から）

図版 4

1　東鬼川市Ⅱ調査区
全景（東から）

2　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居 1
（南から）

3　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居 2
（南から）

1　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居 3
（南から）

2　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居 4
（北から）

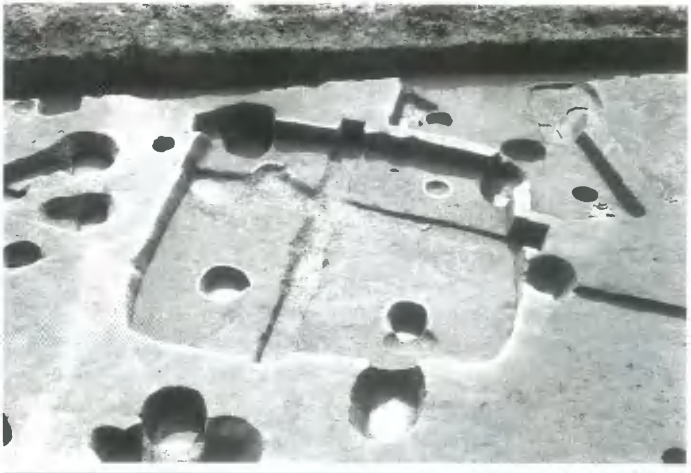
3　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居 5
（南東から）

図版 6

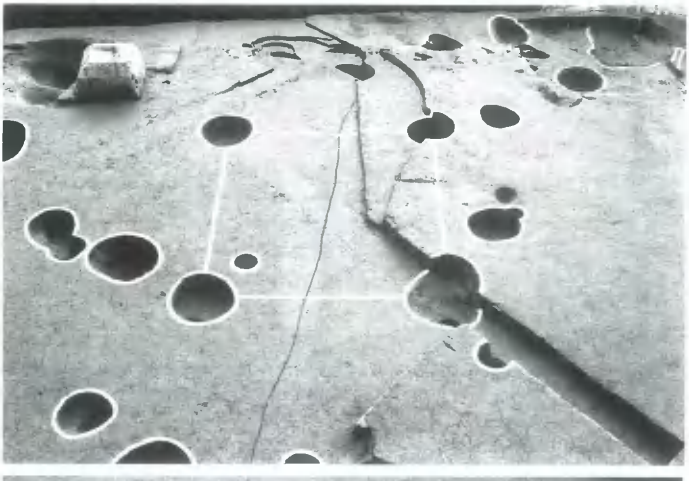
1　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居 6
（北から）

2　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居 7
（北から）

3　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居10
（南から）



1　東鬼川市Ⅱ調査区
竪穴住居11
（北から）



2　東鬼川市Ⅱ調査区
建物1（北から）

3　東鬼川市Ⅱ調査区
土器棺墓1
（南から）

図版 8

1　東鬼川市Ⅱ調査区
土器棺墓 2
（東から）

2　東鬼川市Ⅱ調査区
土器棺墓 3
（南から）

3　東鬼川市Ⅱ調査区
土器棺墓 4
（南から）

1　東鬼川市Ⅱ調査区
土器棺墓 5
（南から）

2　東鬼川市Ⅱ調査区
土器棺墓 6
（南から）

3　東鬼川市Ⅱ調査区
土器棺墓 8
（北から）

図版10

1　東鬼川市Ⅱ調査区
土壙26（西から）

2　東鬼川市Ⅱ調査区
井戸１（南から）

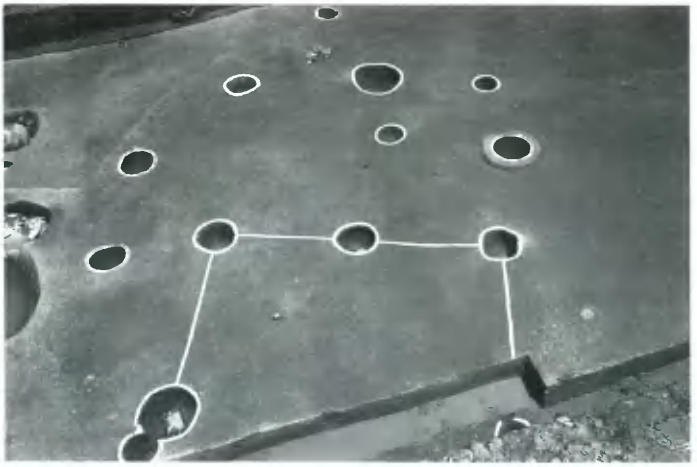
3　東鬼川市Ⅱ調査区
井戸２（北西から）

1　東鬼川市Ⅱ調査区
袋状土壙１
（南から）

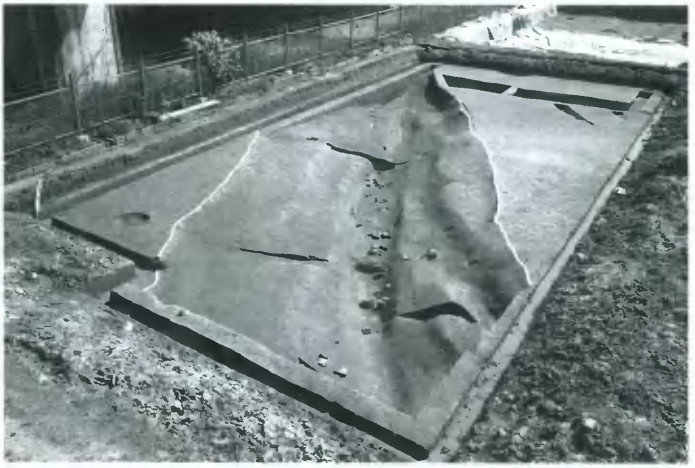
2　東鬼川市Ⅱ調査区
土壙103（東から）

3　東鬼川市Ⅱ調査区
土壙137（南から）

図版12



1　東鬼川市Ⅱ調査区
建物2（南から）



2　西鬼川市Ⅰ調査区
溝13・21
（南西から）

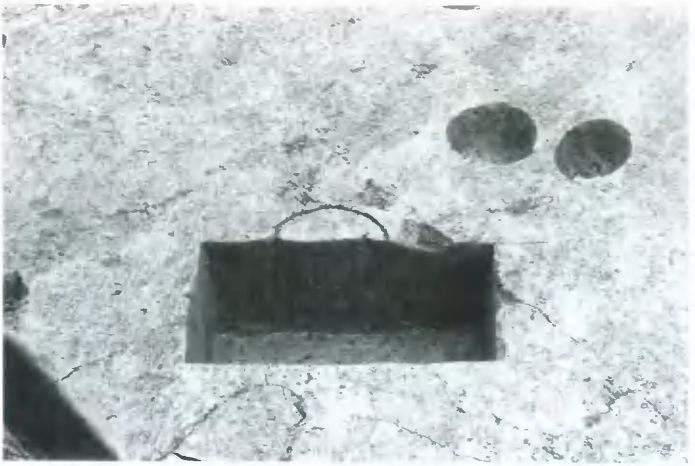
3　西鬼川市Ⅲ調査区
全景（西から）

1　西鬼川市Ⅰ調査区
土器棺墓11
（北から）

2　西鬼川市Ⅱ調査区
溝16（南から）

3　田所調査区
水田（西から）

図版14



1　田所調査区
稲かぶ断面
（北西から）

2　田所調査区
溝24（水路）
（東から）

3　下田所Ⅰ調査区
全景（南西から）

1　下田所Ⅱ調査区
全景（西から）

2　下田所Ⅱ調査区
土壙243（南から）

3　下田所Ⅱ調査区
河道1（南東から）

図版16

1　才の元Ⅰ調査区
全景（東から）

2　才の元Ⅰ調査区
杭列（南東から）

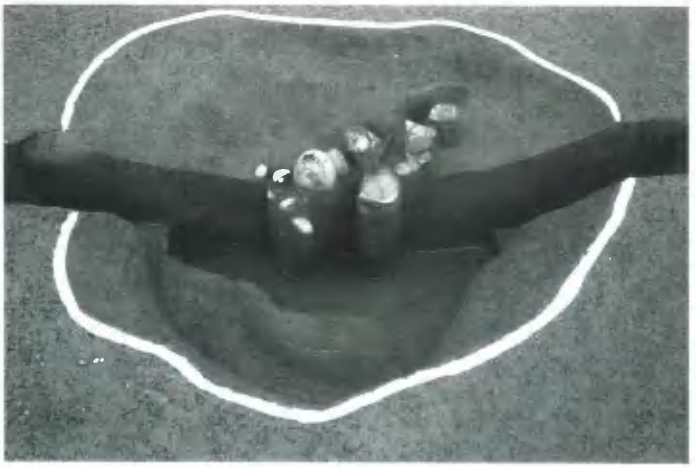
3　才の元Ⅰ調査区
杭列断面（東から）

1　才の元Ⅱ調査区
全景（東から）

2　才の元Ⅲ調査区
全景（西から）

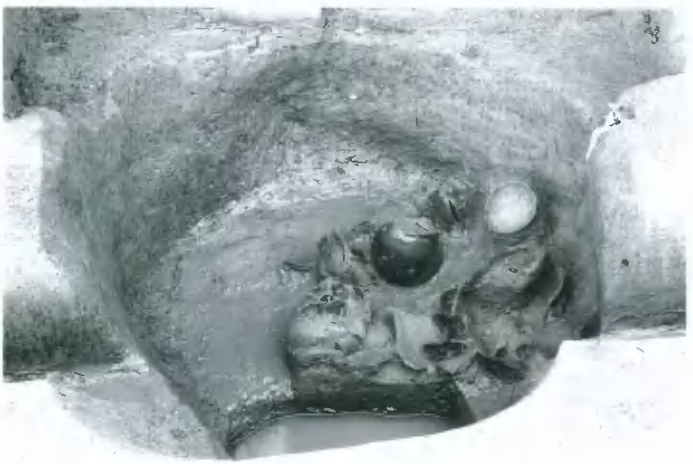
3　才の元Ⅲ調査区
土壙252（西から）

図版18



1　才の元Ⅲ調査区
井戸５上層
（南から）

2　才の元Ⅲ調査区
井戸５下層
（南から）



3　才の元Ⅲ調査区
井戸６（南から）

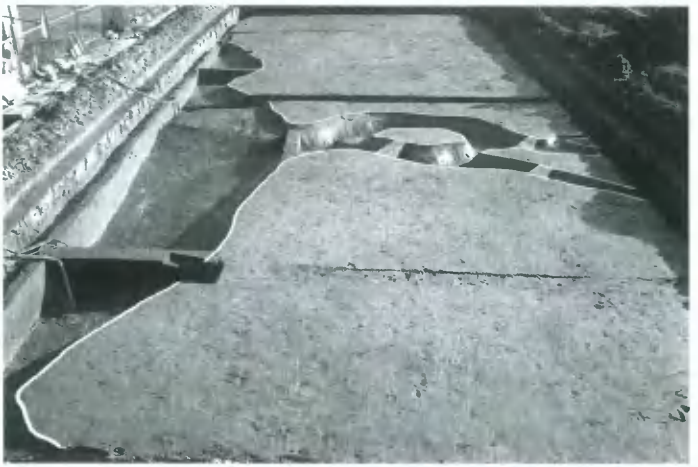
1　才の元Ⅳ調査区
井戸７（東から）

2　才の元Ⅳ調査区
井戸８（西から）

3　才の元Ⅲ調査区
溝41（西から）

図版20

1　才の元Ⅲ調査区
土壙255（南から）



2　五反田Ⅱ調査区
全景（西から）

3　五反田Ⅲ調査区
全景（東から）

亀川調査区上層出土遺物（1/4）

図版22

1　溝５出土遺物（1/4）

2　東鬼川市Ⅱ弥生前期土器（107-1/2・119-1/3）

3　竪穴住居８・９出土遺物（1/4）

161

168

169

172

1　竪穴住居５（1/4）

2　竪穴住居６出土遺物（1/4）

194

195

196

197

198

199

3　竪穴住居10出土遺物（1/4）

203

208

242

4　竪穴住居11出土遺物（1/4）

252

276

243

5　井戸２（252）・土壙28（276）（1/4）

6　土器棺墓10（1/6）

図版24

1　袋状土壙１出土遺物（1/4）

2　土壙48出土遺物（1/4）

326

331

334

337

350

351

357

353

390

391

439

464

410

369

445

土壙54・55(326)・61(331・334)・70(337)・76・77(350・351・353)・79(357)・96・97(369)・115(390・391)・123(410)・153(439)・156(445)・165(464)

図版26

土壙166(480)・168・169(484)・183(497)・188(507・510・511・512・517・518)・196(521)・226・227(550)

565

566

572

573

589

600

599

601

606

602

608

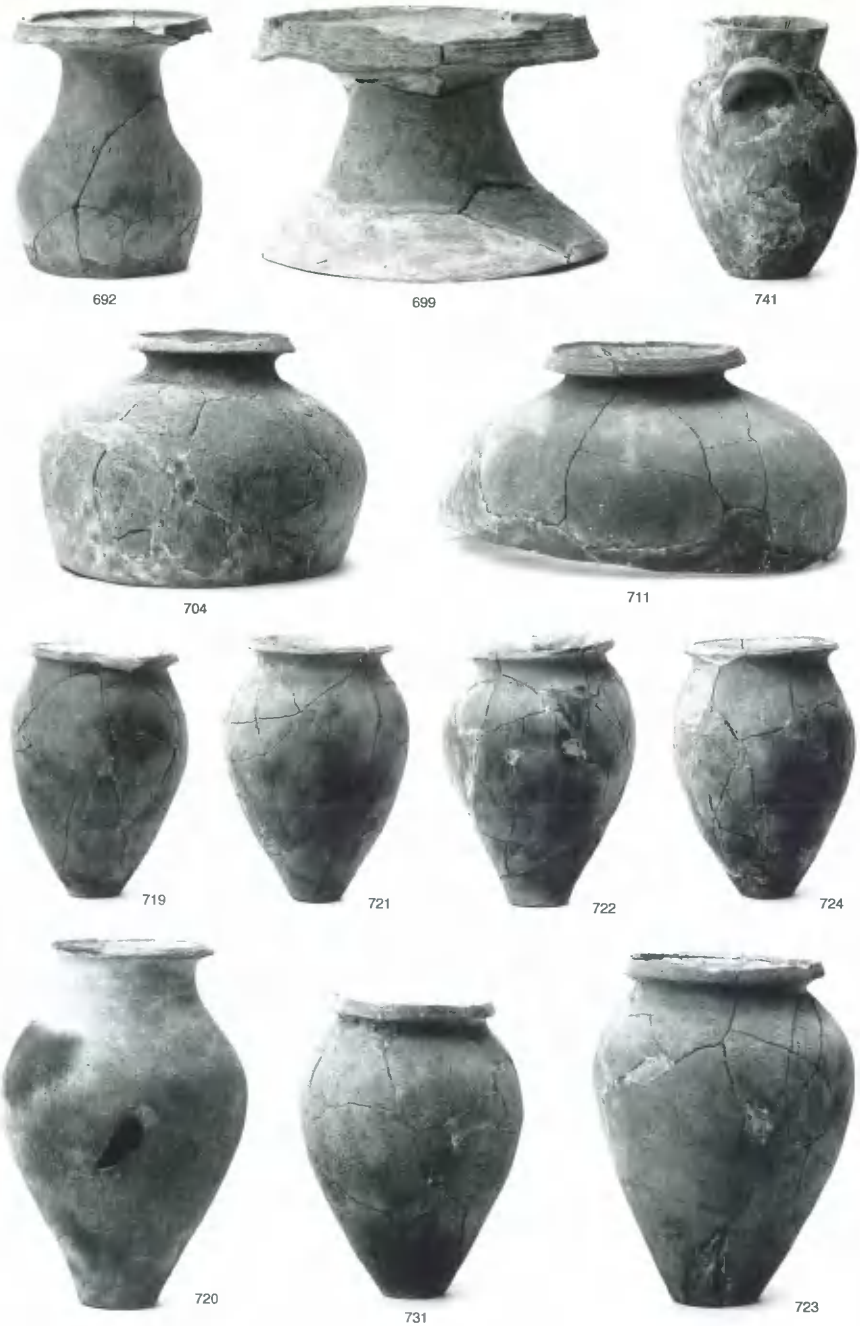
607

溝12西側出土遺物①（566・601・607・608-1/6、565-1/8、他は1/4）

図版28

1　溝12西側出土遺物②（1/4）

2　溝12中央出土遺物①（742-1/4、691・716-1/6、954-1/8）



溝12中央出土遺物②（692・704・719・722・724-1/6、他は1/4）

図版30

溝12中央出土遺物③（725-1/6、他は1/4）

溝12中央出土遺物④（781・800・803・807-1/6、他は1/4）

図版32

溝12東側出土遺物①（814・845・846・850・856-1/6、他は1/4）

1　溝12東側出土遺物②（882-1/6、956-1/8、他は1/4）

2　溝12北側出土遺物①（890・907-1/4、889・895・896-1/6）

図版34

1　溝12北側出土遺物②（920・922-1/6、他は1/4）

2　溝12南側出土遺物①（930・931-1/6、他は1/4）

933

934

936

945

946

1　溝12南側出土遺物②

953

958

957

959

960

961

2　溝12下層出土遺物①

図版36

962

963

965

966

968

969

978

980

981

985

983

1　溝12下層出土遺物②
（963・965・968・980-1/6
他は1/4）

2　溝12出土製塩土器

828

991

3　東鬼川市Ⅱ出土ミニチュア土器（1/2）

1　溝13出土ミニチュア土器

1038

1040

1041

1050

1043

1044

1045

2　溝16出土遺物

1088

1093

3　河道１
出土遺物
（1088-1/4
1093-1/3）

1109

1110

4　下田所Ⅱ
（1/4）

1115

1119

1118

1117

5　井戸５出土遺物

図版38

1　土壙243出土遺物

2　井戸６出土遺物①（1120・1121-1/6、他は1/4）

1124

1126

1125

1131

1132

1127

1135

1　井戸６出土遺物②（1131-1/6、他は1/4）

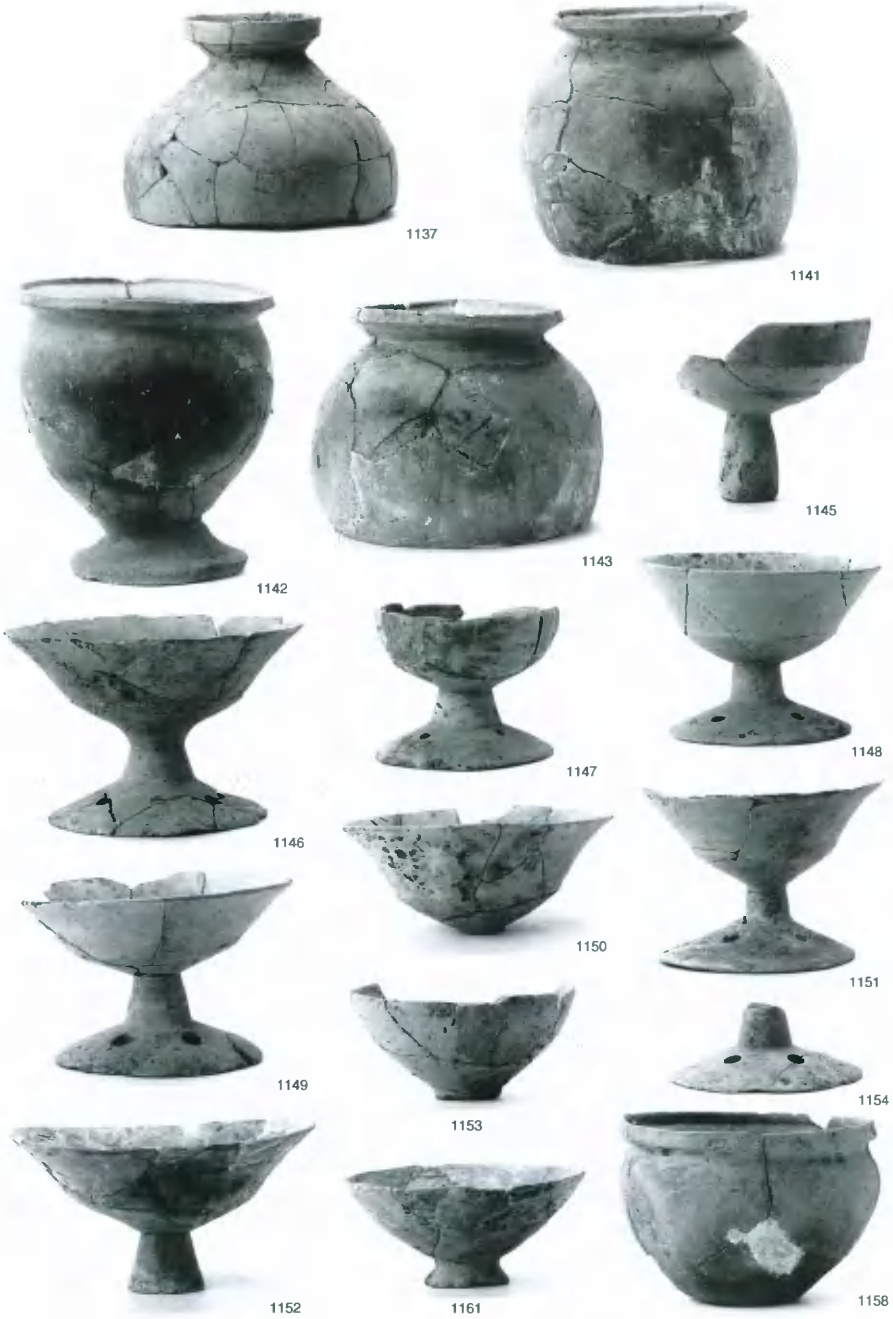
1136

2　井戸７出土遺物

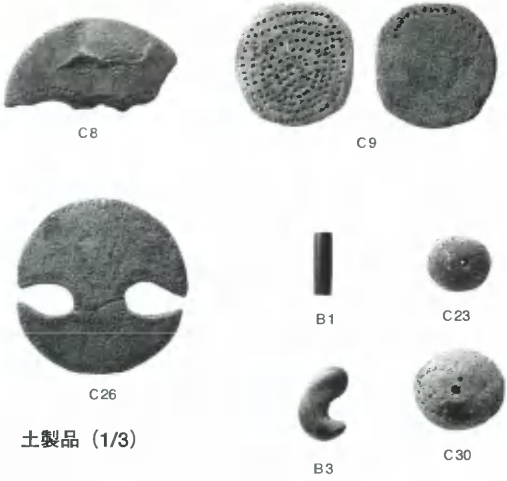
1168

1167

3　溝33出土遺物（1168-1/2、1167-1/4）



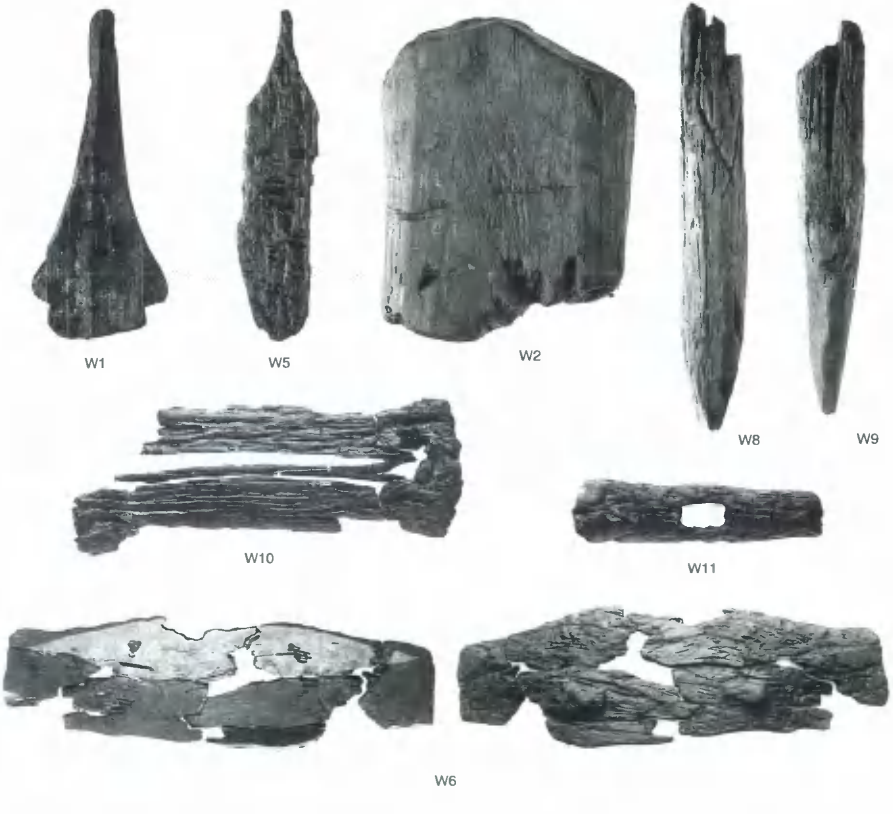
井戸８出土遺物（1142-1/6、1037-1/8、他は1/4）



1　土製品（1/3）

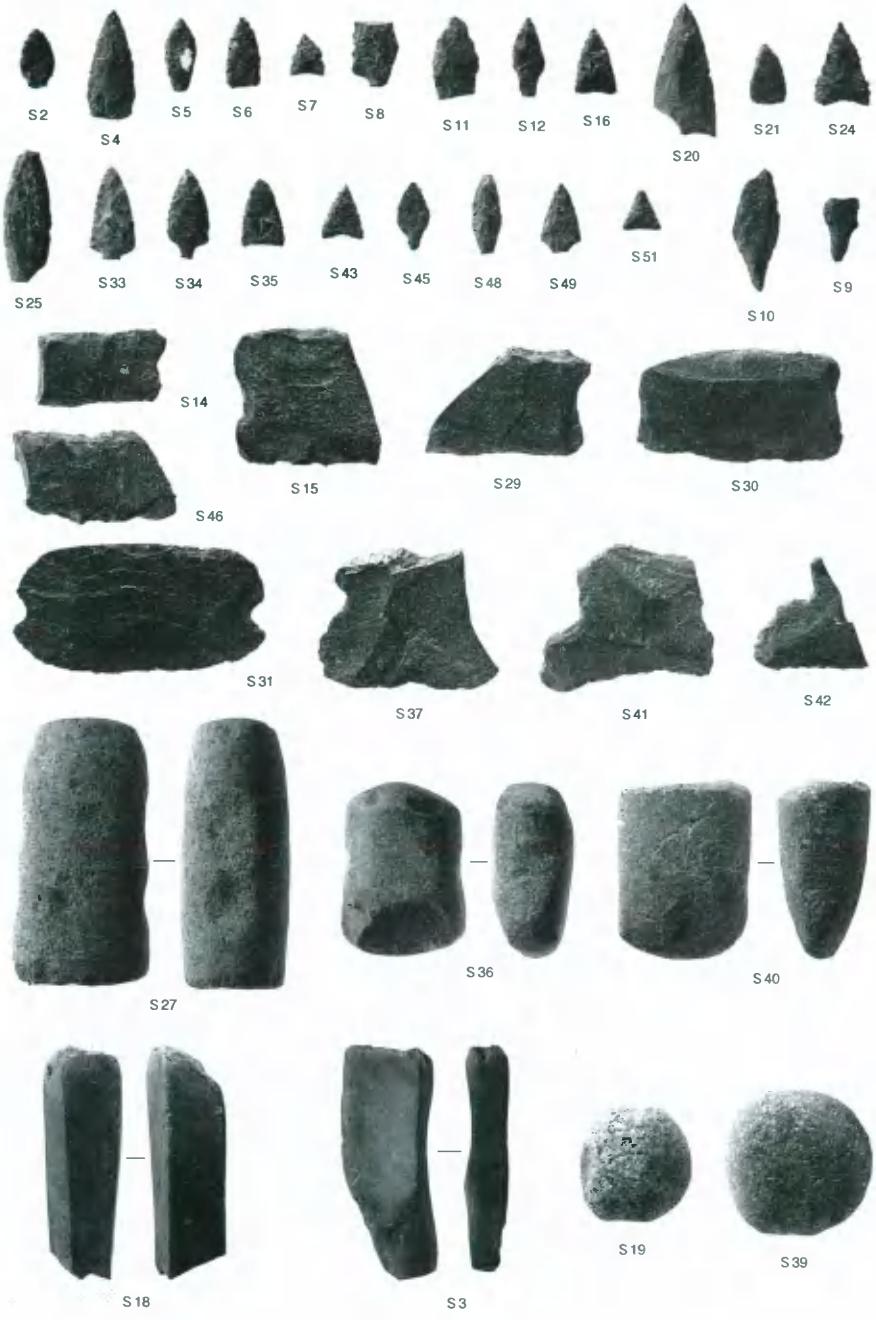
3　その他（紡錘車〈左〉，古銭〈右〉）

2　玉類（1/2）



4　木製品（W1・2・11-1/4、W5・6・8・9・10-1/8）

図版42



石器（S18・27・36・39・40-1/3、他は1/2）

報告書抄録

ふりがな	じょうとういせき
書名	上東遺跡
副書名	主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査
巻次	3
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	158
編集者名	小林利晴　米田克彦　蛯原啓介　伊藤晃　金田善敬　光永真一　江見正己
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL　086-224-2111
発行年月日	西暦2001年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
じょうとういせき 上東遺跡	くらしきし 倉敷市 じょうとう 上東	202		34° 38′ 52″	133° 49′ 51″	1996.12.3 ～ 1996.12.25	480m²	主要地方道箕島高松線改良に伴う発掘調査
						1998.4.1 ～ 1999.2.28	5,970m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上東遺跡	集落	弥生～中世	竪穴住居11軒 掘立柱建物２棟 土器棺墓11基 井戸８基 土壙多数 溝51条	弥生土器・土師器・石器・木製品・土製品（分銅形土製品）	弥生時代から中世にかけての集落遺跡 土器棺墓から歯牙出土

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158

上　東　遺　跡

主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査３

平成13年３月15日　印刷
平成13年３月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2